鳥取県教育文化財団調査報告書36

一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県東伯郡羽合町

MINAMIDANIOOYAMA

南谷大山遺跡 II

MINAMIDANI

南谷29号墳

1994

財団法人　鳥取県教育文化財団

建設省　倉吉工事事務所

序

東郷池周辺は、古くから遺跡の宝庫として知られています。東郷池の北西に位置する羽合町には、国史跡の橋津古墳群や砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡など全国に知られた遺跡があります。また泊村では、集落跡や古墳のほか銅鐸などの貴重な遺物も出土しています。さらに、東郷町では国史跡の北山古墳をはじめとする古墳群や集落跡などがあります。なかでも、伯耆国（鳥取県西部）の一宮であった倭文神社では、経筒・金銅仏などの遺物が出土し、「伯耆一宮経塚出土品」として国宝に指定されています。

当財団では、このような遺跡地帯を、昨年度にひきつづき建設省の委託を受け、「一般国道９号(羽合道路)改築工事に伴う発掘調査」として、羽合町で行いました。

その結果、砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡の空白期間を埋める時期の集落跡が丘陵地で調査されました。これらは、郷土の歴史を解き明かしていくうえでの、貴重な資料です。今回、この調査成果を報告書にまとめ刊行することができました。本報告書が教育および学術研究のため広く活用され、歴史の解明の一助になればと期待するとともに、文化財に対する理解や認識がより深まり、その成果が永く後世に伝えられれば幸いです。

最後に、建設省倉吉工事事務所ならびに交通の不便な所にもかかわらず調査に参加してくださった地元の方々をはじめ、ご協力いただいた方々、その他関係各位に対して心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成６年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団

理事長　西　尾　邑　次

序　文

建設省が管理する一般国道９号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）まで76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに東伯郡羽合町及び泊村地内において、将来の国土開発幹線道路として当面、活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である青谷・羽合道路の整備を進めています。

羽合工区は、泊村原地内でインターチェンジにより現道９号及び（主）倉吉青谷線とアクセスし、羽合町長瀬でインターチェンジによって北条道路一般部と一部アクセスしますが、途中東郷池が見渡せる位置にサービスエリアが予定されている延長６kmの県中部地方ではじめての高規格道路で、昭和61年度に国道９号のバイパス事業として事業に着手しましたが、63年度に高規格な機能を持たすように構造変更を行い、同年用地買収に着手しました。平成２年度からは、羽合高架橋下部工事に着手し、平成４年度に下部工を完了し、上部工に着手しました。今年度は、上部工を鋭意促進しています。

このルートには、全部で10か所の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い、記録保存を行うことになりました。

このうち羽合町地内では昨年度にひき続き大山所在遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査が行われました。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持っていることに御理解いただければ幸に存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成６年３月

建設省　倉吉工事事務所長

濱　谷　武　治

例　言

1．本報告書は、1993年度一般国道９号（羽合道路）改築工事に伴う南谷大山遺跡Ｃ区［大山所在遺跡（ハ）］の一部・南谷29号墳の埋蔵文化財発掘調査記録である。

2．本報告書に収載した南谷大山遺跡（一部1991年度～1992年度調査）は、周知の名称であるが、南谷29号墳は新発見のため、南谷古墳群の一連の名称をつけた。

3．本報告書に収載した遺跡の所在地は、鳥取県東伯郡羽合町大字南谷字大山谷83・89・92、字二ノ琴引69、字新林81・98 他である。

4．本報告書で示す標高は、建設省による道路センター杭№85（Ｘ：-556153.399　Ｙ：-40044.199）の92.228ｍを起点とする標高値を使用し、方位は磁北を示す。Ｘ：、Ｙ：の数値は国土座標第５系の座標値である。

5．本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の1/50000 地形図「青谷･倉吉」、調査区位置図は、羽合町1/2500地形図「都市計画計画図５」を使用した。

6．報告書の作成は、調査員の討議に基づくものである。

報告書本文については、調査員が協議のうえ分担して執筆し、執筆担当者名を目次に記載した。

遺構図の浄写は、中部埋蔵文化財調査事務所で、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行った。

遺構写真は発掘担当調査員が、遺物写真は岸本・牧本が撮影した。

本書の編集は牧本が行った。

7．遺構実測は基本的に調査員･調査補助員が行ったが、調査前および最終の地形測量については、ワールド航測コンサルタント株式会社に委託して行った。

8．鋳造鉄斧のＸ線ラジオグラフィー（Ｘ線透過撮影）を、奈良国立文化財研究所にお願いした。

9．南谷大山遺跡で検出された焼失住居および上屋構造について、奈良国立文化財研究所・浅川滋男主任研究官に現地指導をお願いし、多忙のところ玉稿をいただいた。記して感謝したい。

10. 南谷大山遺跡竪穴住居跡内他で出土した炭化物を、鳥取大学農学部農林総合科学科の古川郁夫教授･矢部浩氏に樹種鑑定をお願いし、多忙のところ玉稿をいただいた。記して感謝したい。

11. 竪穴住居内中央ピットの土壌分析・種子同定を、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

12. 貯蔵穴埋土中の花粉分析を、古環境研究所に委託した。

13. ＣＳＩ19出土の臼玉の重量測定について、県立倉吉工業高等学校にお世話になった。

14. ラジコンヘリコプターによる遺構空中写真を、大橋保夫氏に委託した。

15. 出土遺物、図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。ただし、出土遺物は将来的に羽合町教育委員会に移管する予定である。

16. 現地調査および報告書の作成に当たって、下記の方々に御指導・御協力して頂いた。

〈現地指導〉

稲田孝司、手嶋義之、山本　清（鳥取県文化財保護審議会委員）

田中義昭（島根大学法文学部教授）

浅川滋男（奈良国立文化財研究所主任研究官）

松田潔（鳥取県教育委員会文化課）

〈石材鑑定〉

赤木三郎（鳥取大学教育学部教授）

〈鉄器鑑定〉

村上隆、小林謙一（奈良国立文化財研究所）

〈指導・助言〉

赤沢秀則（鹿島町教育委員会）

真田廣之、根鈴智津子、森下哲哉（倉吉市教育委員会）

根鈴輝夫（倉吉博物館）
中野知照（日本海文化を考える会）
西尾克己、宮本正保（島根県教育委員会埋蔵文化財調査センター）
松山智弘（出雲市教育委員会）

凡　　例

1．発掘調査時における遺構番号と報告書記載の遺構番号は、基本的に一致する。

2．本報告書における遺構記号は次のように表す。また、竪穴住居跡・ピット群のピット番号は、調査時のものから変更したものがある。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＢ：堀立柱建物跡　ＳＫ：土坑・土壙　ＳＤ：溝状遺構　ＳＳ：段状遺構
ＳＸ：埋葬施設　Ｐ：柱穴・ピット

3．本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。

(1)　遺構図 ── 竪穴住居跡：1/30・1/60、堀立柱建物跡：1/60、土坑・土壙：1/30・1/40・1/60、溝状遺構：1/60・1/100、段状遺構：1/60・1/100、ピット群：1/60・1/100、床面遺物出土状況：1/4・1/30、土器溜り：1/30、埋葬施設：1/40、古墳：1/60・1/200、主体部：1/30

(2)　遺物実測図 ── 土器：1/3・1/6・1/8、土玉：1/2、鉄製品：1/2、石器：1/1・1/3・1/4、玉製品：1/1、銅銭：1/1

4．ピットの規模は（長径×短径－深さ）cmで表した。竪穴住居跡の規模は、壁溝を除いた床面の規模である。古墳墳丘の規模は、墳端（裾部）までの計測値である。

5．遺構図における表示は以下の通りである。

：焼土面、　、　：貼　床、　：焼　土、　：炭化物、　：炭・灰、
：灰色粘土、　：赤色顔料、　：砂、　：旧表、
●：土製品、　△：鉄製品、　□：石製品、　☆：玉製品、　★：炭化種子

6．本報告書における遺物記号は次のように表す。

Ｐｏ：土器・土製品　Ｓ：石製品　Ｆ：鉄製品　Ｊ：玉製品　Ｂ：銅製品

7．土器実測図のうち、弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器・陶磁器は断面黒塗りで表現した。遺物実測図中における記号は以下の通りにする。

→：ケズリの方向（砂粒の動きで判断した）、　：赤色塗彩、……：擦り範囲、── ：敲打範囲
：敲打面、　：擦り面、●Ｐｏ：床面出土土器、●Ｓ：床面出土石器、●Ｆ：床面出土鉄製品

8．遺跡名は次の略号を用いた。南谷大山遺跡＝ＭＯ。

遺物には、遺跡名、地区名、遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に銘記した。実測した遺物については、実測者の頭文字を使った実測者番号（Ｎ－１、Ｓ－１等）を２×５㎜程度のシールに記し、それを個体ごとに貼り付け、実測原図にもその番号を記した。

9．遺物観察表については以下の通りとする。

(1)　法量の欄の番号は次の通りとする。
①口径②器高③胴部最大径④底部径⑤複合口縁立ち上がり高⑥須恵器杯蓋稜径⑦須恵器杯蓋口縁高⑧須恵器杯身基部径⑨須恵器杯身立ち上がり高である。その他の計測値については、その都度計測位置を記載した。また、実測の際に復元した計測値には、数値の後に※印、残存値は同様に△印を付した。

(2)　手法の欄に記載されている成形・調整・施文の方向は、実測値で表された方向である。

(3)　備考欄に記載してあるＫＲ－１等の番号は実測者番号である。

目　次

序
序　文
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯……（牧本）　1
　第２節　調査の経過と方法……（牧本）　1
　第３節　調査体制……（牧本）　4
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境……（岸本）　5
　第２節　歴史的環境……（牧本）　6
第３章　南谷大山遺跡の調査
　第１節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅰ区の概要……（牧本）　10
　第２節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅰ区の調査結果……（牧本・山根）　11
　第３節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅱ区の概要……（牧本）　73
　第４節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅱ区の調査結果……（岸本・牧本）　73
　第５節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅲ区の概要……（牧本）　94
　第６節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅲ区の調査結果……（牧本）　94
　第７節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅳ区の概要……（牧本）　103
　第８節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅳ区の調査結果……（岸本）　103
　第９節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅴ区の概要……（牧本）　111
　第10節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅴ区の調査結果……（岸本・牧本）　111
第４章　南谷29号墳の調査
　第１節　南谷29号墳の調査結果……（岸本）　151
第５章　遺構・遺物の検討
　第１節　土器編年について……（牧本）　158
　第２節　玉製品について……（牧本）　171
　第３節　鉄製品について……（牧本）　171
　第４節　竪穴住居跡について……（岸本・牧本）　173
　第５節　南谷大山遺跡の変遷・性格と集団の動向……（牧本）　176
註・参考文献　186
南谷大山遺跡出土遺物観察表……（岸本・牧本）　188
南谷大山遺跡ＣＳＩ19出土臼玉一覧表……（牧本）　219
特論１　焼失竪穴住居の復原―ＡＳＩ01とＢＳＩ20にみる二段伏屋式構造―　……浅川滋男　223
特論２　南谷大山遺跡集落跡から出土した炭化物の樹種……古川郁夫・矢部　浩　227
特論３　南谷大山遺跡自然科学分析……パリノ・サーヴェイ株式会社　231
特論４　鳥取県、南谷大山遺跡土坑（貯蔵穴）内埋土の花粉分析……古環境研究所　244
写真図版

挿　図　目　次

挿図１　南谷大山遺跡と道路建設ルート …… 3
挿図２　羽合町の位置 …… 5
挿図３　周辺遺跡分布図 …… 7
挿図４　南谷大山遺跡Ｃ区全体図 …… 10
挿図５　南谷大山遺跡CSI01出土遺物実測図…… 11
挿図６　南谷大山遺跡CSI01遺構図…… 12
挿図７　南谷大山遺跡CSI03遺構図…… 13
挿図８　南谷大山遺跡CSI03出土遺物実測図…… 14
挿図９　南谷大山遺跡CSI04・08遺構図 …… 16・17
挿図10　南谷大山遺跡CSI04貼床除去後遺構図 …… 18・19
挿図11　南谷大山遺跡CSI04出土遺物実測図(1)…… 21
挿図12　南谷大山遺跡CSI04出土遺物実測図(2)…… 22
挿図13　南谷大山遺跡CSI04出土遺物実測図(3)…… 23
挿図14　南谷大山遺跡CSI08出土遺物実測図…… 23
挿図15　南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(1)…… 25
挿図16　南谷大山遺跡CSI05遺構図 …… 26・27
挿図17　南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(2)…… 28
挿図18　南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(3)…… 29
挿図19　南谷大山遺跡CSI06遺構図…… 30・31
挿図20　南谷大山遺跡CSI06内SK１遺構図…… 30・31
挿図21　南谷大山遺跡CSI06出土遺物実測図(1)…… 32
挿図22　南谷大山遺跡CSI06出土遺物実測図(2)…… 33
挿図23　南谷大山遺跡CSI07出土遺物実測図(1)…… 35
挿図24　南谷大山遺跡CSI07遺構図…… 36・37
挿図25　南谷大山遺跡CSI07出土遺物実測図(2)…… 38
挿図26　南谷大山遺跡CSI11遺構図…… 39
挿図27　南谷大山遺跡CSI11出土遺物実測図(1)…… 40
挿図28　南谷大山遺跡CSI11出土遺物実測図(2)…… 41
挿図29　南谷大山遺跡CSI12・15出土遺物実測図(1)　43
挿図30　南谷大山遺跡CSI12・15遺構図 …… 44・45
挿図31　南谷大山遺跡CSI12出土遺物実測図(2)…… 46
挿図32　南谷大山遺跡CSI13遺構図…… 46
挿図33　南谷大山遺跡CSI13出土遺物実測図…… 47
挿図34　南谷大山遺跡CSI14遺構図…… 48
挿図35　南谷大山遺跡CSI14土器検出状況図…… 48
挿図36　南谷大山遺跡CSI14出土遺物実測図(1)…… 49
挿図37　南谷大山遺跡CSI14出土遺物実測図(2)…… 50
挿図38　南谷大山遺跡CSI14炭化物出土状況図…… 50
挿図39　南谷大山遺跡CSI16遺構図…… 51
挿図40　南谷大山遺跡CSI16出土遺物実測図…… 52
挿図41　南谷大山遺跡CSB02遺構図 …… 53
挿図42　南谷大山遺跡CSK01遺構図 …… 54
挿図43　南谷大山遺跡CSK01出土遺物実測図 …… 54
挿図44　南谷大山遺跡CSK03遺構図 …… 54
挿図45　南谷大山遺跡CSK08遺構図 …… 55
挿図46　南谷大山遺跡CSK09遺構図 …… 55
挿図47　南谷大山遺跡CSK10遺構図 …… 56
挿図48　南谷大山遺跡CSK11遺構図 …… 56
挿図49　南谷大山遺跡CSK12遺構図 …… 57
挿図50　南谷大山遺跡CSK13遺構図 …… 58
挿図51　南谷大山遺跡CSS04遺構図 …… 60・61
挿図52　南谷大山遺跡CSS04出土遺物実測図(1) … 62
挿図53　南谷大山遺跡CSS04出土遺物実測図(2) … 63
挿図54　南谷大山遺跡CSS05遺構図 …… 64
挿図55　南谷大山遺跡CSS05出土遺物実測図 …… 64
挿図56　南谷大山遺跡CSD01・05・07・08・09遺構図66・67
挿図57　南谷大山遺跡CSD06遺構図 …… 68
挿図58　南谷大山遺跡CSD02遺構図 …… 68
挿図59　南谷大山遺跡CSX01遺構図 …… 69
挿図60　南谷大山遺跡CSX01出土遺物実測図 …… 70
挿図61　南谷大山遺跡CSX02出土遺物実測図 …… 70
挿図62　南谷大山遺跡CSX02遺構図 …… 70
挿図63　南谷大山遺跡CSX03遺構図 …… 71
挿図64　南谷大山遺跡CSX03出土遺物実測図 …… 71
挿図65　南谷大山遺跡C-I区遺構外出土遺物実測図(1)… 72
挿図66　南谷大山遺跡C-I区遺構外出土遺物実測図(2)… 72
挿図67　南谷大山遺跡CSI02遺構図…… 74・75
挿図68　南谷大山遺跡CSI02出土遺物実測図…… 76
挿図69　南谷大山遺跡CSI02南西側土器溜り
出土遺物実測図 …… 77
挿図70　南谷大山遺跡CSI02貼床除去後遺構図…… 78
挿図71　南谷大山遺跡CSI02南西側土器溜り
検出状況図 …… 78
挿図72　南谷大山遺跡CSI09遺構図…… 80
挿図73　南谷大山遺跡CSI09出土遺物実測図…… 80
挿図74　南谷大山遺跡CSI10遺構図…… 81
挿図75　南谷大山遺跡CSI10出土遺物実測図…… 82
挿図76　南谷大山遺跡CSB01出土遺物実測図 …… 82
挿図77　南谷大山遺跡CSB01遺構図 …… 83
挿図78　南谷大山遺跡CSK02遺構図 …… 83
挿図79　南谷大山遺跡CSK04遺構図 …… 84
挿図80　南谷大山遺跡CSK04出土遺物実測図 …… 84
挿図81　南谷大山遺跡CSK05遺構図 …… 84
挿図82　南谷大山遺跡CSK05出土遺物実測図 …… 84
挿図83　南谷大山遺跡CSK06遺構図 …… 85
挿図84　南谷大山遺跡CSK07遺構図 …… 86
挿図85　南谷大山遺跡CSK07出土遺物実測図 …… 86
挿図86　南谷大山遺跡CSK14遺構図 …… 87
挿図87　南谷大山遺跡CSS02遺構図 …… 88
挿図88　南谷大山遺跡CSS03出土遺物実測図(1) … 89

挿図89　南谷大山遺跡CSS03遺構図 …… 90・91
挿図90　南谷大山遺跡CSS03出土遺物実測図(2) … 92
挿図91　南谷大山遺跡C-Ⅱ区遺構外出土遺物実測図 … 93
挿図92　南谷大山遺跡CSD03・04・ピット群遺構図…… 96・97・98
挿図93　南谷大山遺跡C-Ⅲ区断ち割り土層断面図… 99・100・101
挿図94　南谷大山遺跡C-Ⅲ区遺構外出土遺物実測図… 102
挿図95　南谷大山遺跡CSS06P1内遺物検出状況図…… 103
挿図96　南谷大山遺跡CSS06遺構図 …… 104・105
挿図97　南谷大山遺跡CSS06出土遺物実測図 … 104・105
挿図98　南谷大山遺跡CSD12出土遺物実測図…… 106
挿図99　南谷大山遺跡CSD12・16遺構図…… 107
挿図100　南谷大山遺跡C-Ⅳ区遺構外出土遺物実測図(1)…… 108
挿図101　南谷大山遺跡C-Ⅳ区遺構外出土遺物実測図(2)…… 109
挿図102　南谷大山遺跡C-Ⅳ区遺構外出土遺物実測図(3)…… 110
挿図103　南谷大山遺跡CSI17遺構図…… 112・113
挿図104　南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(1) … 114
挿図105　南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(2) … 115
挿図106　南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(3) … 116
挿図107　南谷大山遺跡CSI18出土遺物実測図 …… 117
挿図108　南谷大山遺跡CSI18遺構図 …… 118
挿図109　南谷大山遺跡CSI19遺構図 …… 119
挿図110　南谷大山遺跡CSI19臼玉検出状況図 …… 120
挿図111　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(1) … 121
挿図112　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(2) … 122
挿図113　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(3) … 122
挿図114　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(4) … 123
挿図115　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(5) … 124
挿図116　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(6) … 125
挿図117　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(7) … 126
挿図118　南谷大山遺跡CSI20遺構図…… 128・129
挿図119　南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(1) … 130
挿図120　南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(2) … 131
挿図121　南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(3) … 132
挿図122　南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(4) … 133
挿図123　南谷大山遺跡CSI21遺構図 …… 134
挿図124　南谷大山遺跡CSI21出土遺物実測図(1) … 134
挿図125　南谷大山遺跡CSI21出土遺物実測図(2) … 135
挿図126　南谷大山遺跡CSI21炭化物出土状況図 … 136
挿図127　南谷大山遺跡CSK15遺構図…… 136
挿図128　南谷大山遺跡CSK16遺構図…… 137
挿図129　南谷大山遺跡CSK17遺構図…… 137
挿図130　南谷大山遺跡CSK18遺構図…… 138
挿図131　南谷大山遺跡CSK18出土遺物実測図…… 138
挿図132　南谷大山遺跡CSK19遺構図…… 138
挿図133　南谷大山遺跡CSK19出土遺物実測図…… 138
挿図134　南谷大山遺跡CSD10出土遺物実測図…… 139
挿図135　南谷大山遺跡CSD13出土遺物実測図…… 139
挿図136　南谷大山遺跡CSD10・11・13・14・15・17遺構図140・141・142
挿図137　南谷大山遺跡CSD17出土遺物実測図…… 143
挿図138　南谷大山遺跡C-Ⅴ区集石・ピット群出土遺物実測図(1)　144
挿図139　南谷大山遺跡C-Ⅴ区集石・ピット群遺構図 … 144
挿図140　南谷大山遺跡C-Ⅴ区集石・ピット群出土遺物実測図(2)　145
挿図141　南谷大山遺跡C-Ⅴ区サブトレンチ土層断面図　145
挿図142　南谷大山遺跡C－Ⅴ区遺構外出土遺物実測図(1) … 146
挿図143　南谷大山遺跡C－Ⅴ区遺構外出土遺物実測図(2) … 147
挿図144　南谷大山遺跡C－Ⅴ区遺構外出土遺物実測図(3) … 148
挿図145　南谷大山遺跡CSS01遺構図…… 149
挿図146　南谷29号墳墳丘測量図 …… 152
挿図147　南谷29号墳盛土除去後平面図 …… 152
挿図148　南谷29号墳土層断面図 …… 153・154
挿図149　南谷29号墳周溝内土器出土状況図… 153・154
挿図150　南谷29号墳主体部遺構図 …… 155・156
挿図151　南谷29号墳出土遺物実測図(1) …… 155・156
挿図152　南谷29号墳主体部墓壙実測図 …… 157
挿図153　南谷29号墳出土遺物実測図(2)…… 157
挿図154　南谷大山遺跡土器編年案(1) …… 165・166
挿図155　南谷大山遺跡土器編年案(2) …… 167・168
挿図156　南谷大山遺跡土器編年案(3) …… 169・170
挿図157　南谷大山遺跡BSI38出土有孔円盤 …… 171
挿図158　臼玉分類図 …… 171
挿図159　南谷大山遺跡遺構配置図 …… 177
挿図160　南谷大山遺跡遺構配置図（弥生時代後期） … 178
挿図161　南谷大山遺跡遺構配置図（古墳時代前期） … 180
挿図162　南谷大山遺跡遺構配置図（古墳時代中期） … 182

挿表目次

挿表１　南谷大山遺跡ＣＳＳ04ピット群一覧表 …59
挿表２　南谷大山遺跡ＣＳＳ03ピット群一覧表 …89
挿表３　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅲ区ピット群一覧表 …95
挿表４　南谷大山遺跡Ｃ区竪穴住居跡一覧表 …150
挿表５　南谷大山遺跡土器編年案対照表 ……164
挿表６　遺跡・時期別住居分布表 ……173
挿表７～37　南谷大山遺跡出土遺物観察表 ……188～218
挿表38～41　南谷大山遺跡ＣＳＩ19出土臼玉一覧表 ……219～222

図版目次

図版１　1993年度南谷大山遺跡調査前（北上空より）
調査前近景（北より）
南谷大山遺跡全景（南上空より）
1993年度調査区全景（北上空より）
図版２　Ｃ－Ⅰ区南部（西上空より）
Ｃ－Ⅰ区北部（東上空より）
ＣＳＩ01完掘状況（北より）
ＣＳＩ01完掘状況（東より）
図版３　ＣＳＩ03完掘状況（北西より）
ＣＳＩ04・08完掘状況（東より）
ＣＳＩ04貼床除去後（東より）
ＣＳＩ04床面甕（Po４）出土状況（北西より）
図版４　ＣＳＩ05完掘状況（北西より）
ＣＳＩ05床面壺（Po１）出土状況（東より）
ＣＳＩ05甕（Po７）出土状況（北東より）
ＣＳＩ06完掘状況（北西より）
図版５　ＣＳＩ06甕(Po9・Po16)出土状況(北西より)
ＣＳＩ06石材出土状況（北より）
ＣＳＩ07完掘状況（北西より）
CSI07 土器(Po9・Po10・Po11)出土状況（南より）
図版６　ＣＳＩ11完掘状況（南より）
ＣＳＩ11遺物出土状況（西より）
ＣＳＩ11床面鉈（Ｆ４）出土状況（北より）
ＣＳＩ12・15完掘状況（南より）
図版７　ＣＳＩ12床面甕（Po３）出土状況（東より）
ＣＳＩ12床面鉄器（Ｆ５）出土状況（東より）
ＣＳＩ13完掘状況（北西より）
ＣＳＩ14完掘状況（西より）
図版８　ＣＳＩ14床面遺物出土状況（北より）
ＣＳＩ14遺物出土状況（北より）
CSI14床面甕(Po2・Po3・Po8）出土状況（南東より）
ＣＳＩ16完掘状況（北西より）
図版９　CSI16床面甕(Po1)・石材出土状況（東より）
ＣＳＩ16床面鉢（Po５）出土状況（北より）
ＣＳＢ02完掘状況（北より）
ＣＳＫ01完掘状況（東より）
図版10　ＣＳＫ03完掘状況（北西より）
ＣＳＫ08完掘状況（東より）
ＣＳＫ09完掘状況（東より）
ＣＳＫ11完掘状況（北西より）
図版11　ＣＳＫ12完掘状況（北より）
ＣＳＳ04高杯（Po40）出土状況（南西より）
ＣＳＳ04 床面蓋(Po48)出土状況（北より）
ＣＳＳ05完掘状況（西より）
図版12　ＣＳＤ02完掘状況（北より）
ＣＳＸ01完掘状況（東より）
ＣＳＸ01完掘状況（東より）
ＣＳＸ01完掘状況（東より）
CSX01 小型丸底壺(Po1）出土状況（北より）
図版13　ＣＳＸ02検出状況（東より）
ＣＳＸ02完掘状況（東より）
ＣＳＸ02須恵器（Po１）出土状況（東より）
ＣＳＸ03完掘状況（東より）
図版14　Ｃ－Ⅱ区全景（北上空より）
ＣＳＩ02完掘状況（北より）
ＣＳＩ02完掘状況（西より）
ＣＳＩ02貼床除去後（西より）
図版15　ＣＳＩ02南西側土器溜り検出状況（西より）
ＣＳＩ09完掘状況（北より）
ＣＳＩ09Ｐ１内甕（Po１）出土状況（東より）
ＣＳＩ10完掘状況（東より）
図版16　ＣＳＩ10Ｐ１内甕（Po１）出土状況（南より）
ＣＳＢ01完掘状況（東より）
ＣＳＢ01Ｐ３内石材検出状況（南より）
ＣＳＫ02完掘状況（北東より）
図版17　ＣＳＫ04完掘状況（西より）
ＣＳＫ05完掘状況（北より）
ＣＳＫ06完掘状況（東より）
ＣＳＫ07完掘状況（北西より）
図版18　ＣＳＫ07土層断面（南より）
ＣＳＫ14完掘状況（西より）
ＣＳＳ02完掘状況（北東より）
ＣＳＳ03完掘状況（南より）
図版19　Ｃ－Ⅲ区全景（西上空より）

ＣＳＤ03・04完掘状況（北より）
Ｃ－Ⅳ区全景（西上空より）
ＣＳＳ06完掘状況（西より）
図版20　CSS06P1内壺(Po1・Po2）出土状況（東より）
ＣＳＤ12完掘状況（北より）
Ｃ－Ⅴ区全景（北上空より）
Ｃ－Ⅴ区北部（北西より）
図版21　Ｃ－Ⅴ区北部（東より）
ＣＳＩ17－１・２完掘状況（東より）
ＣＳＩ17－３完掘状況（東より）
ＣＳＩ17－４完掘状況（東より）
図版22　ＣＳＩ18完掘状況（西より）
ＣＳＩ19完掘状況（西より）
ＣＳＩ19東壁際土器出土状況（西より）
ＣＳＩ19石製有孔円盤(J1)出土状況（西より）
図版23　ＣＳＩ19臼玉出土状況（西より）
ＣＳＩ20完掘状況（南西より）
ＣＳＩ20遺物出土状況（東より）
ＣＳＩ20土器出土状況（南東より）
図版24　ＣＳＩ21完掘状況（東より）
ＣＳＩ21遺物出土状況（東より）
ＣＳＫ15完掘状況（北西より）
ＣＳＫ16完掘状況（北より）
図版25　ＣＳＫ17完掘状況（南より）
ＣＳＫ18遺物(Po1・Po2)出土状況(北東より)
ＣＳＫ19土層断面（南より）
ＣＳＤ10・11完掘状況（北より）
図版26　ＣＳＤ11完掘状況（北より）
ＣＳＤ17完掘状況（南西より）
ＣＳＤ17完掘状況（北より）
Ｃ－Ⅴ区集石・ピット群土器出土状況(東より)
図版27　Ｃ－Ⅵ区全景（北上空より）
ＣＳＳ01完掘状況（北東より）
南谷29号墳完掘状況（西上空より）
南谷29号墳周溝完掘状況（北より）
図版28　南谷29号墳墳丘断割盛土状況（西より）
南谷29号墳主体部石棺材検出状況（西より）
南谷29号墳主体部完掘状況（西より）
南谷29号墳北周溝内器台(Po5）出土状況（北より）
図版29　ＣＳＩ01・ＣＳＩ03・ＣＳＩ04出土遺物
図版30　ＣＳＩ04・ＣＳＩ08・ＣＳＩ05出土遺物
図版31　ＣＳＩ05出土遺物
図版32　ＣＳＩ05・ＣＳＩ06出土遺物
図版33　ＣＳＩ06・ＣＳＩ07出土遺物
図版34　ＣＳＩ07・ＣＳＩ11出土遺物
図版35　ＣＳＩ11・ＣＳＩ12出土遺物
図版36　ＣＳＩ12・ＣＳＩ13・ＣＳＩ14出土遺物
図版37　ＣＳＩ14・ＣＳＩ16出土遺物
図版38　ＣＳＩ16・ＣＳＫ01・ＣＳＳ04出土遺物
図版39　CSS04・CSS05・CSX02・C-Ⅰ区遺構外・CSI02出土遺物
図版40　CSI02・CSI09・CSI10・CSK04・CSK07出土遺物
図版41　CSS03・C-Ⅱ区遺構外・C-Ⅲ区遺構外出土遺物
図版42　C-Ⅲ区遺構外・CSS06・CSD12・C-Ⅳ区遺構外出土遺物
図版43　Ｃ－Ⅳ区遺構外・ＣＳＩ17出土遺物
図版44　ＣＳＩ17・ＣＳＩ18・ＣＳＩ19出土遺物
図版45　ＣＳＩ19出土遺物
図版46　ＣＳＩ19・ＣＳＩ20出土遺物
図版47　ＣＳＩ20出土遺物
図版48　ＣＳＩ20出土遺物
図版49　ＣＳＩ20・ＣＳＩ21出土遺物
図版50　CSI21・CSK18・CSK19・CSD10・CSD13・CSD17出土遺物
図版51　Ｃ－Ⅴ区集石・ピット群・Ｃ－Ⅴ区遺構外出土遺物
図版52　Ｃ－Ⅴ区遺構外出土遺物
図版53　C-Ⅴ区遺構外・南谷29号墳出土遺物、軽石一括

特論図版目次

特論２－１　ツブラジイ・クスノキ
特論２－２　スギ・スダジイ
特論２－３　イヌシデ・スダジイ・スダジイ
特論２－４　ツバキ・ツブラジイ
特論２－５　シラカシ・ネジキ
特論２－６　スダジイ・スダジイ・スダジイ
特論２－７　クスノキ・スダジイ
特論２－８　スダジイ・スダジイ・スダジイ
特論２－９　スダジイ・シラカシ
特論２－10　ホオノキ
特論３－１　鉱物組成の顕微鏡写真
特論３－２　植物珪酸体の顕微鏡写真
特論３－３　種子の実体顕微鏡写真
特論４　南谷大山遺跡土坑（貯蔵穴）内埋土の花粉・胞子遺体

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

羽合道路　鳥取県中部地域の交通混雑緩和を図るために、1973年より一般国道９号改築工事として、北条バイパスの建設が進められ、1990年11月に全面開通した。さらに、この工事の一環として羽合道路が1986年度に自動車専用道路として都市計画決定され、事業に着手し、その後、1988年度に高規格道路として計画変更された。この道路は、現道９号の泊村園地内のインターチェンジから、羽合町長瀬のインターチェンジを抜け、北条バイパスに結ぶものである。

試掘調査　計画地内とその周辺は、周知の遺跡が密集する地域であるため、建設に先立ち計画地内の遺跡・遺構の広がりを確認する必要性が生じた。そして、1988年～1990年度に亘って羽合町教育委員会によって、国庫補助事業として各丘陵上を中心に試掘調査が行われた。[(1)(2)] その結果、今年度調査区内においてＴ４－２で古墳周溝、Ｔ９で竪穴住居跡が検出されている。

発掘調査　試掘調査の結果を受けて、1991年～1992年にかけて中部埋蔵文化財調査事務所では、南谷大山遺跡Ａ区、Ｂ区、及びＣ区の一部［大山所在遺跡（イ）、（ロ）、（ハ）の一部］を調査した。[(3)] その結果、弥生時代後期後半～古墳時代中期後半にかけての竪穴住居跡49棟（建て替えを含むと72棟）、掘立柱建物跡３棟、土坑・土壙29基、段状遺構４基、溝状遺構８条、ピット群４カ所、及び大量の土器・石器類、弥生時代の竪穴住居内出土では県内３例目の小型仿製鏡、また、古墳時代中期後半の竪穴住居内では、西日本でも２例目の鉄鋌と考えられる鉄製品を検出することができ、この地域における集落の性格・構造・変遷および土器編年を考える上で大変貴重な資料を提供することができた。

また、同調査区内において古墳４基を調査した。古墳は、南谷古墳群に属し南谷24号墳～26号墳・28号墳と命名した。このうち、南谷24号墳では墳丘内に上下に並ぶ２基の埋葬施設が検出され、被葬者の性格・墳丘築造契機を考える上で大変貴重な資料を提供することができた。

調査計画　こうした状況のもと、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これによって当文化財団が発掘計画を作成し、それに基づき、中部埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を担当する事になった。

1993年度は、南谷大山遺跡Ｃ区［大山所在遺跡（ハ）］の残り8570m²を調査する予定であったが、調査終了時には8794m²に変更となった。

第２節　調査の経過と方法

1993年度は、まずワールド航測コンサルタント株式会社に委託して調査前の地形測量を行った。

そして、前年度にならって同様に調査区全体を、国土座標に載るように10ｍグリッドに区画し、基準杭を打った。その結果南北軸はＣ～Ｑ、東西軸は18～32となった。グリッド名（以下Ｇと略した）は、南西側の杭の名称を取って名づけた。

調査は４月５日から始め、遺構の広がり及び最終的な調査区の範囲を確認するために、Ｅ-23 Ｇ、Ｆ-21 Ｇ、Ｆ-24 Ｇ、Ｇ-20 Ｇ、Ｇ-23 Ｇ、Ｈ-20 Ｇ、Ｉ-25 Ｇ、Ｊ-25 Ｇ、Ｋ-25 Ｇ、Ｋ-26 Ｇ、Ｋ-27 Ｇ、Ｌ-24 Ｇ、Ｌ-28 Ｇ、Ｍ-25 Ｇ、Ｍ-26 Ｇ、Ｍ-27 Ｇ、Ｍ-28 Ｇ、Ｍ-29 Ｇ、Ｎ-23 Ｇ、Ｎ-24 Ｇ、Ｎ-28 Ｇ、Ｏ-23 Ｇ、Ｏ-29 Ｇ、Ｏ-30 Ｇ、Ｏ-32 Ｇ、Ｐ

-31 Gに計21本のトレンチを入れた。

その結果、M-23 Gでは竪穴住居跡、ピット、焼土面及び土師器多数を検出するに至り、遺構の広がりが谷底部にまで及ぶ事が判明した。また、I-25 G・J-25 Gで土坑を検出し、遺構の範囲がさらに南側に延びる事が判明した。このため、鳥取県教育委員会文化課を通して建設省と協議した結果、調査範囲の拡張が決定した。しかし、西側斜面に設定したトレンチでは、遺構の存在が確かめられず、この部分を調査範囲から除いた。

拡張部分の地形測量は、西側谷部については当事務所によって行った。以上で準備作業を終了し、遺構検出作業に取りかかった。

表土剝ぎは、4月12日から古墳部分を除いて重機によって行ったが、地形の起伏が激しくまた、排土場所が限られたため2台の重機を使用し、6月3日に終了した。西側尾根部(C－II区)の拡張部は、人力によって行った。さらに、西側谷部(C－V区)では、北側の調査区際でCSI20が半分検出され、残りの箇所には重機による排土が高く積まれており、この部分を検出するために11月10日から11月12日まで、再び重機による排土除去および表土剝ぎ作業を行った。

遺構検出作業によって、弥生時代後期後半から古墳時代中期後半の竪穴住居跡21棟(重複・建て替えを合せると26棟)、掘立柱建物跡2棟、土坑・土壙19基、段状遺構6カ所、溝状遺構17条、ピット群2カ所、埋葬施設3基、古墳時代前期前半の古墳1基を確認した。

特に竪穴住居跡は、比較的まとまった状態で検出された。そこで、昨年度に引き続き指導助言を仰ぎ、調査を進めることにした。竪穴住居の構造の問題については、奈良国立文化財研究所浅川滋男主任研究官に指導を仰ぎ、集落の構成の問題については、島根大学法文学部田中義昭教授の指導を仰いだ。

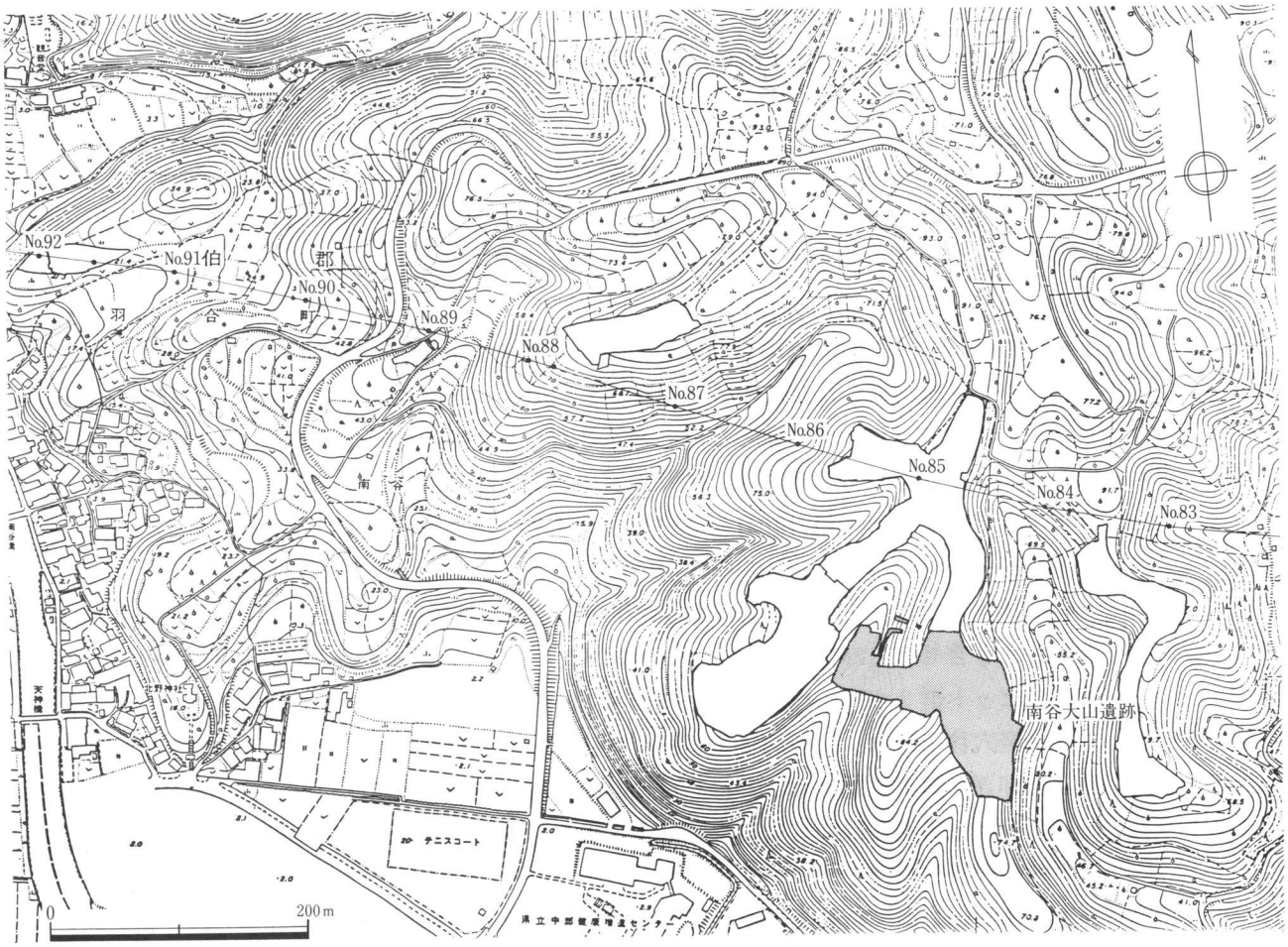
古墳については、新発見のため南谷古墳群の一連の番号をつけ、南谷29号墳と命名した。盛土がわずかに遺存しており、墳丘の断ち割りを行ったところ、大半が破壊されていたが、旧表土面を掘り込むかたちで箱式石棺が検出されている。

遺構の個別写真は、ローリングタワーからおよびラジコンヘリコプターによって行い、遺跡全体の写真は、セスナ機による空中撮影を行った。

本遺跡の1993年度調査は、最終地形実測をワールド航測コンサルタント株式会社に業者委託して、11月29日に終了した。

調査日誌抄

4月5日　南谷大山遺跡調査開始
4月13日　強風の下、南谷29号墳表土剝ぎ
4月23日　南谷29号墳北周溝内で器台Po5出土
4月26日　CSS02完掘
5月12日　CSI04検出、最高気温28℃を記録
5月13日　CSI01完掘、鳥取で29.9℃を記録
5月19日　ベルトコンベアー設置
5月26日　南谷29号墳主体部完掘状況写真
6月2日　梅雨入り、強風(最大瞬間風速32.2m)のため午前中で作業中止
6月3日　CSI05実測、重機剝ぎ終了、休憩用テント復旧
6月4日　CSI03完掘
6月11日　CSI04埋土採集、CSK04完掘
6月21日　CSB01完掘写真、CSI10検出
7月9日　CSB02完掘
7月29日　CSI05・06・07完掘写真
7月30日～8月3日　台風6号等のため作業中止(記録的冷夏)
8月9日　CSI14土器実測・個別写真、CSK10掘り下げ
8月10日　台風7号接近のため作業中止
8月23日～26日　残暑、夏の暑さ戻る、鳥取で32.5℃(26日)
9月1日　CSX02完掘
9月3日　台風13号接近のため作業中止
9月11日　ラジコンヘリコプターによる写真撮影
9月13日　CSI16完掘写真、CSD03実測終了
9月14日　鳥取県文化財保護審議会、山本清氏・稲田孝司氏・手嶋義之氏、現場を視察
9月24日　CSS06P1内壺Po1・Po2写真撮影、実測中
9月28日　奈良国立文化財研究所浅川滋男主任研究官、調査を指導
9月29日　倉吉市立明倫小学校6年生、南谷大山遺跡を見学
10月6日　CSI19で白玉出土
10月9日　南谷大山遺跡現地説明会
10月22日　ベルトコンベアー撤収
10月28日　C－V区地形測量終了
11月1日　CSI21完掘
11月2日　航空写真
11月5日　島根大学法文学部田中義昭教授、現場を指導、ラジヘリ写真
11月8日　CSI18・19、C－V区集石・ピット群実測終了
11月10日～12日　C－V区重機剝ぎ
11月15日　拡張部(CSI20・CSD17)検出
11月24日　積雪のため作業中止
11月26日　CSI20・CSD17完掘
11月29日　本年度調査終了



挿図１　南谷大山遺跡と道路建設ルート

写真１　重機表土剝ぎ作業

写真２　ラジコンヘリコプターによる撮影

写真３　整理作業風景

写真４　整理作業風景

第３節　調査体制

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもとに下記の体制で実施された。

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	西尾邑次（鳥取県知事）
副理事長兼常務理事	入江圭司
事務局長	若松良雄

財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長	土井田憲治（鳥取県教育委員会文化課長）
次　　長	山根豊己
調査指導係長	田中弘道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）
庶務係長	山根夏男（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）
主任事務職員	木下利雄
事　　務	福田妙子

○調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　中部埋蔵文化財調査事務所

所　　長	入江輝三
主任調査員	牧本哲雄
調 査 員	岸本浩忠
調査補助員	山根雅美
整 理 員	浦木伊都子

○調査協力

下記の方々に発掘作業員、整理作業員として協力していただいた。

朝倉郁雄、生田恵子、市橋貴志子、伊藤義輝、入江淑恵、岩室紀男、植原昭典、大嶋貞夫、大嶋由起枝、小椋美佳、狩野仁女、河口智津子、吉川久子、木戸孝行、倉益和美、蔵本重信、嶋崎久子、清水房子、杉原光雄、杉村秀吉、高浜新策、竹田　肇、谷本美智恵、高浜とし子、津嶋時三、角田磨智子、中田　都、中村晶宏、中村勝恵、西本てる子、　野崎悦子、浜口みち子、藤田広子、　藤田恭人、前　宮子、真壁　均、松井久雄、　松田悦雄、松岡朋子、松田澄子、松本美重、光井芳子、村口いつ子、森脇幸子、　安田成行、山崎　巌、山田暉美、山本博子、若杉道子、

（五十音順、敬称略）

写真５　発掘調査参加者一同

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

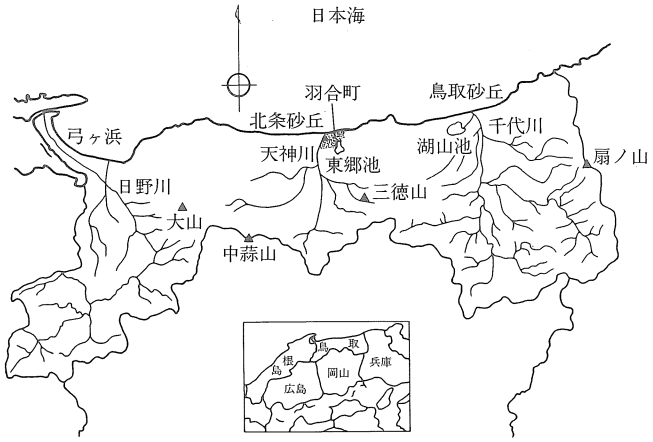
鳥取県　鳥取県は本州の西部、中国地方の北東部に位置する。北は日本海、東は兵庫県、南は標高1200ｍを越える中国山地を県境として岡山県・広島県、西は島根県と接する。鳥取県の県域は東西126㎞、南北61.85㎞、面積349.269㎢で、日本全体の約１％を占める。鳥取県は鳥取市を中心とする東部、倉吉市を中心とする中部、そして米子市・境港市などからなる西部の三地域に分けられる。各地域とも地勢は山がちで、山地が県総面積の86.3％を占める。それぞれの地域には千代川（せんだいがわ）（東部）、天神川（てんじんがわ）（中部）、日野川（西部）の県下を代表する河川が流れ、その下流域に東部の鳥取平野、中部の倉吉・北条・羽合平野、西部の米子平野が発達している。また各平野の海岸線には鳥取平野の鳥取砂丘、北条・羽合平野の北条・長瀬砂丘、米子平野の弓が浜半島などの砂丘、砂州が発達している。その中でも代表的なものは鳥取砂丘で、東西長15km、南北幅最大２㎞の規模を持つ。[(4)]

羽合町　羽合町は、鳥取県の中央部を占める東伯郡の北東に位置し、東には泊村、東郷池をはさんで東郷町、西には天神川を境に北条町、南は倉吉市と接している。北には日本海が、その波頭を光らせている。当町は約7000人の人口、面積12.4㎢の町域を有する。地形は、標高約100ｍの馬ノ山（うまのやま）より東に連なる低い丘陵、天神川の河口部に発達した長瀬砂丘、天神川から東郷池に向かって広がる羽合平野、そして東郷池とからなる。[(5)]

東郷池　東郷池は、約420haの汽水湖で、かつては日本海の内湾だった。縄文海進の後、河川の土砂の運搬などにより、北条・長瀬砂丘が発達した。その結果、湾口が塞き止められてできた潟湖である。最深部は4.6ｍで、湖底より温泉が湧き出る。

現在、東郷池には舎人川（とねりがわ）・東郷川・羽衣石川（うえしがわ）・埴見川（はなみがわ）が流れ込み、その水は橋津川（はしづ）を通って日本海へ至る。古代においては天神川も、流路の変動はあったものの同池に注いでいた。[(6)(7)] 同池には淡水魚だけでなく、橋津川を逆流して流入する海水にのって海産の魚介類が入る。

調査地域　前述の東郷池の北東にある丘陵から、東郷池に向かって南に伸びる狭い尾根上に存在するのが、南谷大山遺跡・南谷古墳群である。特に南谷大山遺跡・南谷29号墳が所在する尾根上からは、東郷池・羽合平野・日本海はもとより、遠く島根半島まで視野に入れることができる。また、最近の調査では同遺跡の谷部においても、集落が営まれていたことがわかっている。



挿図２　羽合町の位置

第２節　歴史的環境

旧石器時代　東郷池周辺に限らず鳥取県において遺構を伴う旧石器遺跡は確認されていないが、大山山麓の丘陵上でいくつかの旧石器が見つかっている。中部地区では、関金町野津三の黒曜石製ナイフ型石器[8]、倉吉市和田の石刃[9]、倉吉市上神・鋤の細石刃石核[10]、倉吉市国府の掻器[11]、倉吉市中尾遺跡の国府型のナイフ型石器[12]などである。このうち、野津三のナイフ型石器・中尾遺跡のナイフ型石器は県下では唯一のローム層中の発見であり、大変貴重なものである。

縄文時代

早創期　縄文時代早創期に盛行するとされる隆線文土器群は県内では発見されていないが、石器類は二十数カ所で確認されている。中部地区では、有茎尖頭器が大栄町穂波・東伯町槻下・関金町笹ケ平などで見つかっている。やはり大山山麓の丘陵上での発見である。早期でも丘陵・台地上に遺跡が確認されている。倉吉市取木遺跡[13]では竪穴住居跡・炉跡、押型文の深鉢などが見つかっている。東郷池周辺においても、南谷19号墳(2)[14]の旧表下より安山岩製のスクレイパーが見つかっている。また、原第２遺跡[15]（68）では落とし穴と考えられる土坑が見つかっており、縄文時代人が海岸部の丘陵上にも足跡を残していたことが窺える。

早期

前期　前期になると気候が温暖になり海進が進み、この地域では広いラグーンが形成され、この周辺で遺跡が確認されるようになる。北条町島遺跡[16]は、前期から晩期の貝塚を伴う遺跡で、土器のほかに石器、丸木舟、貝、人骨、動物骨が検出されている。丸木舟は県内でも数例知られるに過ぎず、貴重なものである。また、花粉分析の結果や貝の種類から古環境の変化の様子を復元することができるようになった。中期の遺跡は、倉吉市平ル林遺跡[9]、北条町船渡遺跡[17]、羽合町南谷ヒジリ遺跡[14]（１）などが知られるにすぎず、遺跡の密度も少ない。後期になると遺跡の数は増加し、倉吉市津田峰遺跡[18]・東伯町森藤後期第２遺跡[19]・関金町横峯遺跡[20]ではこの時期の住居跡が見つかっている。これらの住居の中央には、石組の炉が作られている。この周辺では、倉吉市天神川下流遺跡[17]、東郷町北福第３遺跡[21]（57）で磨消縄文土器などが表採されている。晚期では、倉吉市松ケ坪遺跡[22]で配石墓、土器棺墓、土壙が見つかっている。

中期

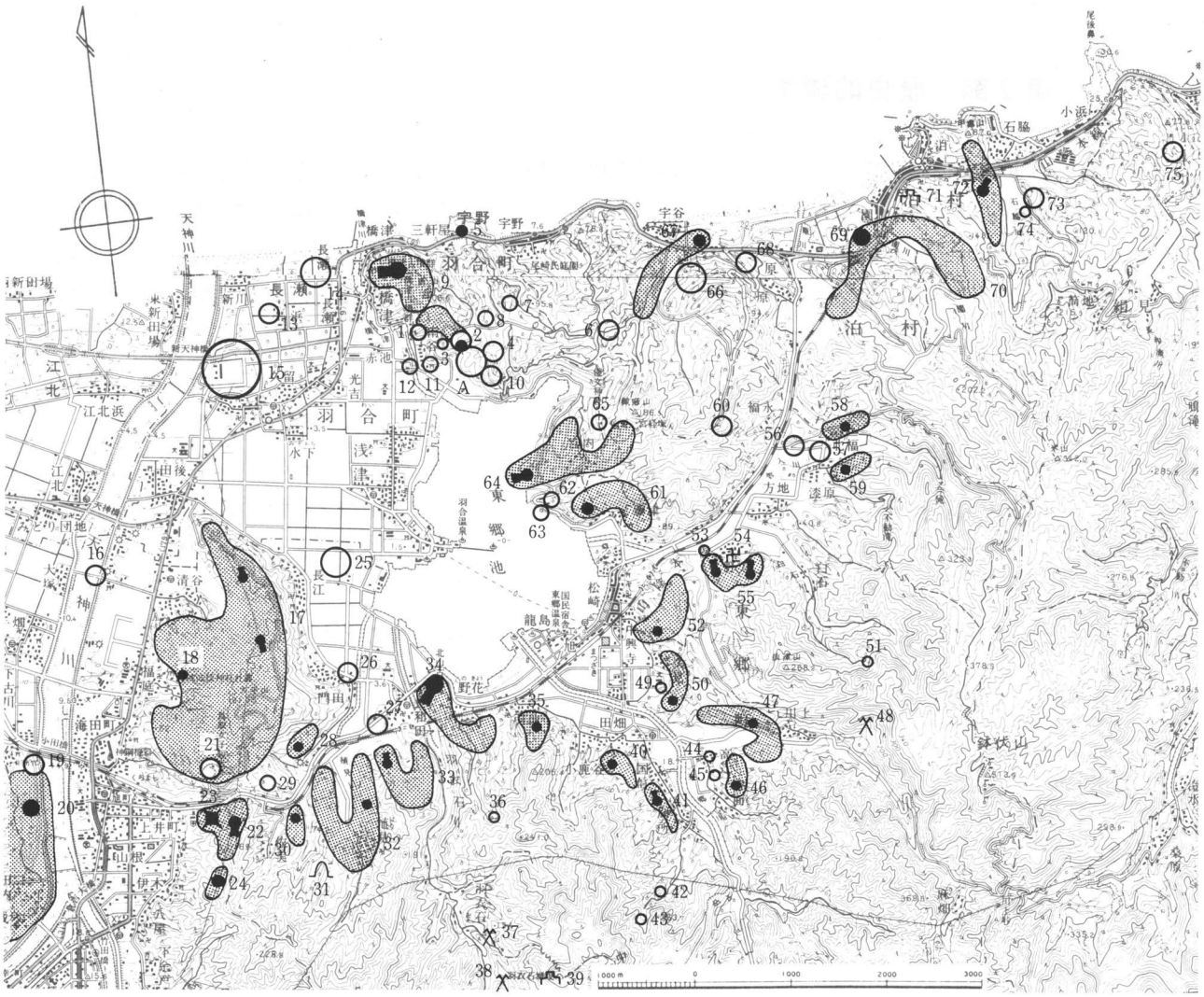
後期

晚期　なかでも、土器棺墓は県内においても岸本町林ケ原遺跡[23]とここにしか見つかっておらず、この時期の葬制を知る貴重な資料である。長瀬高浜遺跡[24]では刻目突帯文土器、北条町北尾遺跡[25]でもこの時期の土器を出土している。時期ははっきりしないが、東郷町別所第２（42）・第６遺跡（43）、福永第３遺跡（60）、野花第２遺跡（36）、白石第１遺跡（51）でも縄文土器が表採されている。泊村宮の山遺跡[26]（73）では、漁撈具として使用されたと考えられる石錘が見つかっており、縄文人が海や湖で盛んに魚を獲っていたことが想像される。

弥生時代

前期　大陸から伝播した稲作は、日本列島をかなりの速さで北上したと考えられ、鳥取県でも前期には米子市目久美遺跡[27]で水田跡が確認されている。東郷池周辺では水田跡は確認されていないが、稲作に伴う遺物が各所で見つかっており、弥生時代水田の調査が行われるのも近いものと思われる。この時期には、天神川の沖積作用と日本海からの風によって形成された砂丘上に、長瀬高浜遺跡[24]（15）が現われる。この遺跡は弥生時代前期から中世までの複合遺跡であるが、この時期の遺構には４棟の玉作工房跡のほか、土壙墓などがある。玉作工房跡は日本でも最も古いものの一つである。

中期　長瀬高浜遺跡では中期の土壙墓がわずかに見られるが、後期の遺構は全く見られず、古墳時代に入ってからが最も栄える。東郷池周辺では、この時期の遺跡は長瀬高浜の土壙墓を除いては確認されておらず、遺跡の密度が少なくなっている。かわりに、丘陵上での遺跡の密度が増すと推定される。



挿図 3　周辺遺跡分布図

A．南谷大山遺跡　1．南谷ヒジリ遺跡　2．南谷19～23号墳・南谷夫婦塚遺跡　3．南谷大ナル遺跡　4．乳母ケ谷第２遺跡　5．泙古墳　6．宇野第１遺跡　7．宇野第４遺跡　8．宇野第５遺跡　9．橋津（馬ノ山）４号墳　10．乳母ケ谷遺跡　11．南谷遺跡　12．南谷貝塚　13．和助北遺跡　14．橋津台場　15．長瀬高浜遺跡　16．天神川下流遺跡　17．大平山古墳群　18．福庭古墳　19．小田銅鐸出土地　20．向山古墳群　21．福庭遺跡　22．山根古墳群　23．藤和墳丘墓　24．伊木古墳群　25．隈ケ坪遺跡　26．門田遺跡　27．津浪遺跡　28．片平４号墳　29．佐美遺跡　30．佐美古墳群　31．埴見中ノ谷古窯跡　32．埴見古墳群　33．長和田古墳群　34．野花北山１号墳　35．引地古墳群　36．野花第２遺跡　37．羽衣石第１生産遺跡　38．羽衣石第２生産遺跡　39．羽衣石城跡　40．小鹿谷古墳群　41．別所古墳群　42．別所第２遺跡　43．別所第６遺跡　44．高辻第１遺跡　45．高辻第３遺跡　46．高辻古墳群　47．川上古墳群　48．川上生産遺跡　49．久見古瓦出土地　50．久見古墳群　51．白石第１遺跡　52．中興寺古墳群　53．野方第３遺跡　54．野方・弥陀ケ平廃寺　55．野方古墳群　56．北福第１遺跡　57．北福第３遺跡　58．北福古墳群　59．漆原古墳群　60．福永第３遺跡　61．藤津古墳群　62．大鼻遺跡　63．船隠遺跡　64．宮内狐塚古墳　65．伯耆一宮経塚　66．宇谷第１遺跡　67．宇谷古墳群　68.原第２遺跡　69．園７号墳・園西川遺跡　70．園古墳群　71．河口城跡　72．石脇２号墳（尾尻古墳）　73．宮の山遺跡　74．堀勾玉出土地　75．池ノ谷銅鐸出土地

後　期　後期においても同様の現象が見られ、焼失住居が見つかった倉吉市福庭遺跡[28]（21）、炭化米・貝殻などを包蔵する４基の貯蔵穴が見つかった大鼻遺跡[29]（62）、竪穴住居が調査された南谷ヒジリ遺跡[14]（１）・南谷大ナル遺跡[30]（３）・南谷夫婦塚遺跡[14]（２）・乳母ケ谷第２遺跡[14]（４）・南谷大山遺跡[3]（Ａ）・宇谷第１遺跡[30]（66）など、丘陵上の遺跡の密度が増加する。低地においては、和助北遺跡[31]（13）で祭祀関係の土器と思われる、赤色塗彩された脚付注口土器が見られるのみである。この地域は銅鐸の出土例が多く、倉吉市小田[17]（19）で２口（外縁付鈕Ⅱ式・扁平鈕式）、北福第１遺跡[32]（56）・長瀬高浜遺跡[24]で小銅鐸がそれぞれ１口、泊村池ノ谷[26]で２本の舌とともに１口（外縁付鈕Ⅰ式）、北条町米里で１口[33]（外縁付鈕式）、やや離れて東伯町八橋[34]で１口（扁平鈕式）が見つかっている。そのほかにも、伝伯耆国とされるもの１口[31]（外縁付鈕Ⅰ式）がある。また、弥生時代における集団墓から卓越した倉吉市阿弥大寺[35]１～３号墓、藤和墳丘墓[36]（23）などの四隅突出型弥生墳丘墓が計４基存在する。

古墳時代
前　期　主な前期古墳には、三角縁神獣鏡を含む多数の副葬品をもつ、復元全長100ｍを測る前方後円墳である橋津（馬ノ山）４号墳[21]（９）がある。橋津４号墳を含む24基からなる橋津古墳群のうち22基は、国の史跡に指定されている。さらにこの古墳群には橋津２号墳などの大型前方後円墳が築造され、東郷池周辺だけではなく広く東伯耆一帯を支配した集団の存在が想定できる。また、泊村には小規模な前方後円墳ではあるが仿製斜縁獣帯鏡をもつ石脇２号墳（尾尻古墳[21]）（72）がある。北条町には土下古墳群[37]・曲古墳群[38]など前期から後期にかけての古式群集墳がある。橋津古墳群を仰ぎ見る砂丘に立地する長瀬高浜遺跡[24]において、160数棟の竪穴住居、40棟の掘立柱建物をもつ大集落が再び現われる。この集落は前期から中期にかけて営造されているが、中期の中頃にはその規模も縮小している。集落が廃絶されると古墳が築造されるようになる。また、性格は不明であるがおびただしい数の器財型埴輪群が見つかっている[39]。他に、刀状木製品・火きり臼・彩色礫・手捏ね土器など祭祀に伴う遺物が出土している津浪遺跡[40]（27）が知られている。この時期の住居跡は、南谷大山遺跡[3]、佐美古墳群[41]（30）など、丘陵上でも確認されている。

中　期　橋津４号墳以後もこの地域では、東郷池の東岸には全長90ｍを測る前方後円墳である宮内狐塚古墳[21]（64）、南岸には山陰最大級の規模を誇る全長110ｍを測る前方後円墳である野花北山１号墳[21]（34）と大型前方後円墳が累々と築造される。このように、墳丘規模及び内容で他の古墳をはるかに凌駕する古墳が存在する東郷池周辺は、古墳時代前期から中期にかけて東伯耆の中心的な地域であると考えられる。中期後半の集落は、南谷大山遺跡のように丘陵上でも営まれている。この地域は子持勾玉の出土が多く、東郷町高辻第１遺跡[6]（44）１例、泊村堀[43]（74）で１例、倉吉市でも２例が知られている[17]。

後　期　後期になると大型の前方後円墳は見られなくなるが、中小規模の前方後円墳が各古墳群においても見られるようになる。また、従来の竪穴系の埋葬施設に代わって、横穴式石室が採用される。片平４号墳[17]（28）は基底部を箱式石棺状に組み、板石を持ち送りながら小口積みにするもので、東伯耆では倉吉市大宮古墳[43]とならび導入期の横穴式石室である。その後、この地域で比較的容易に手に入れることができる板状摂理の安山岩を使用する横穴式石室が取り入れられ、爆発的に増加する[44]。片平１・５号墳[45]、長和田20号墳[46]（33）、中興寺１号墳[47]（52）、久見17号墳[46]（50）、北福23号墳[21]（58）、宮内31号墳[21]、橋津９号墳[48]、福庭古墳[17]（18）、園古墳群[49]（70）、宇谷古墳群[26]（67）などで知られている。このうち中興寺１号墳などのように各壁が一枚石で構成されている石室や、福庭古墳に見られるような切石石室は終末の様相を示す。古墳以外では、埴見中ノ谷古窯跡[50]（31）がある。６世紀前葉の窯跡で、この地域の須恵器を生産した数少ない遺跡の一つである。

歴史時代

白鳳期～奈良時代

この地域は古代寺院跡がたくさん見つかっている。白鳳期には、大御堂廃寺[51][52]、野方・弥陀ケ平廃寺[52]（54）、大原廃寺[53]が造営される。大御堂廃寺は法起寺式の伽藍配置であったと考えられている。礎石の中央には柱を据えた穴が穿たれており、炭化した柱の一部が残っていたという。この寺院は、発掘された墨書土器より8世紀後半頃には久米寺と呼ばれていたようである。野方・弥陀ケ平廃寺からは川原寺式の瓦の他に、塔心中央に柱穴をもつ塔心礎・礎石が見つかっている。大原廃寺からは、柱穴をもつ塔心礎、川原寺式の瓦が見つかっている。また、発掘調査により塔の基壇の一部が明らかになり、法起寺式の伽藍配置であったことが確認された。久見（49）でも7世紀後半頃と8世紀後半頃の瓦が見つかっており[52]、寺院跡か官衙跡の存在が考えられる。奈良時代には現在の倉吉市国府に伯耆国衙[54]が造られ、また伯耆国分寺[55]、国分尼寺[56]も建立されるなど、東伯耆は奈良・平安時代の政治の中心地であった。この地域は律令体制下にあっては伯耆国河村郡にあたり、河村郡は笏賀、舎人、多駄、埴見、日下、河村、竹田、三朝の八郷から成る。郡衙の所在地は不明であるが、河村郷、舎人郷、多駄郷の三か所が候補地として考えられている[5][6][57]。この地域には古代律令体制の名残りとしての条里遺構が残っている。天保地続全図[58]などには整然と並んだ方格地割りがあり、当時の名残りを留めていると考えられている。

平安時代

平安時代に入り自墾地系荘園が現われ律令体制が崩壊し、次第に封建制社会が形成されるようになる。このようななか、力を得てきたのが国司・郡司・寺社であった。東郷池周辺では、伯耆一宮、東郷氏である。東郷氏は、中央の貴族や寺社に所領を寄進して、地方豪族としての地位を高めていった。伯耆一宮である倭文神社は「伯耆六社」の一つで、承和4（837）年に従五位下の神階が与えられていたが、広大な社領を経済基盤として在地領主層の信仰を集めながら伯耆一宮の地位を獲得したものと考えられている[6]。平安時代末期になると、末法思想が広まる。伯耆一宮の境内に隣接した山林で経塚（65）が発見された[57]。経塚のなかには石室があり、そのなかに金銅製経筒、金銅製観音菩薩立像、銅製千手観音立像、銅板線刻弥勒立像などが安置されていた。経筒には「(中略）康和五年癸未（中略)」銘が刻まれている。これら出土品は国宝に指定されている。

中　世

鎌倉時代

地頭の勢力は鎌倉幕府権力の伸長を背景に次第に強大になった。大阪府柳沢真次郎氏所蔵の正嘉2（1258）年銘の「伯耆国河村郡東郷荘下地中分絵図」によって地頭の荘園侵略の様子が窺われる。長瀬高浜遺跡[24]では約80基の火葬墓や土壙墓が調査され、この時期の葬制が明らかとなった。

室町時代

中世城郭も数多く知られており、南条貞宗によって築城された羽衣石城（39）、山名氏によって築城された河口城（71）などがある。応仁の乱後は各地で騒擾戦乱が絶えず、この地においても大永4(1524)年尼子経久によって羽衣石城が落城し、また馬ノ山で尼子氏と山名氏が合戦をするなど争いの跡をとどめている。 天正9(1581）年には羽柴秀吉と吉川元春が対陣した。秀吉は御冠山に、元春は馬ノ山に陣を設けたが、馬ノ山にはこの時に築かれた土塁状遺構が残っている。また、乳母ケ谷第2遺跡[14]で調査された土塁状遺構も、この対陣の際に築かれたと思われる。山間地にはこの時期と思われるタタラ跡が数カ所確認されている[50]。また、橋津川改修にともない、中世の貝塚が検出された。南谷貝塚[59]（12）は、ヤマトシジミなどの貝類のほか、漆器などの木製品が出土している。

近世近代

南谷ヒジリ遺跡では、16～17世紀と考えられる蔵骨器が検出されている。

また、文久3（1863）年には外国に対する海岸防備のために砲台が設置された。鳥取県では由良、橋津、赤碕、淀江、境などに台場が建設され、海岸防備に当たった。橋津の台場(14)建設に当たって、馬ノ山4号墳の前方部が削られたといわれている[5]。

第３章　南谷大山遺跡の調査（第３次調査）

第１節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅰ区の概要

位　置　1993年度の南谷大山遺跡の調査区は、地形的特徴からさらに細かく、標高84ｍ付近から南側に伸びる東側尾根(Ｃ－Ⅰ区)、標高83ｍ付近から南側に伸びる西側尾根(Ｃ－Ⅱ区)、Ｃ－Ⅰ区・Ｃ－Ⅱ区にはさまれた谷底部（Ｃ－Ⅲ区)、Ｃ－Ⅱ区西側の急峻な斜面部（Ｃ－Ⅳ区)、1991～92年度調査区と今年度調査区の尾根部にはさまれた谷底部（Ｃ－Ⅴ区)、今年度調査区のうち標高87ｍ付近の最も高い部分（Ｃ－Ⅵ区）に分けることができる。

Ｃ－Ⅰ区は、今年度調査区のうち、東側尾根上に遺跡が展開する地区である。この尾根の先端部には、周知の乳母ケ谷遺跡があり、この間にも遺構の存在が推定される。

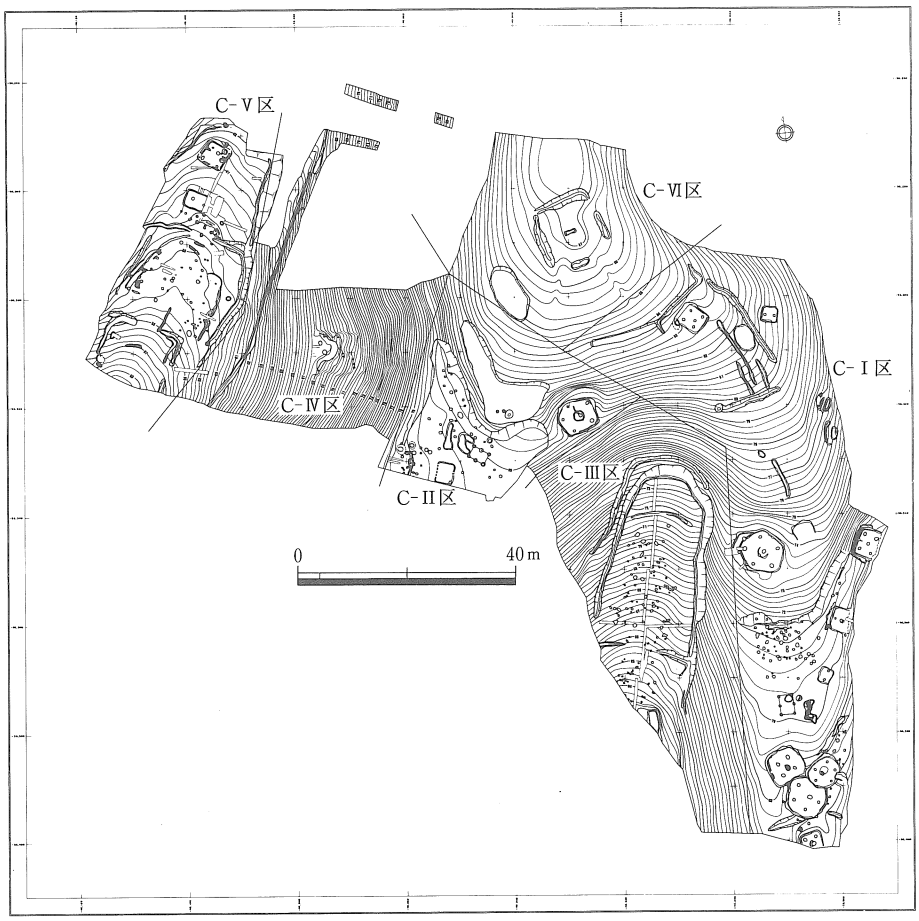
遺　構　この地区は今年度調査区のうちでは最も遺構が密集する地区で、弥生時代後期には、竪穴住居跡ＣＳＩ01・08・11・13・14・15・16、掘立柱建物跡ＣＳＢ02、貯蔵穴ＣＳＫ01が作られている。

古墳時代前期になると、竪穴住居跡ＣＳＩ03・04・05・06・07・12、段状遺構ＣＳＳ04・05が作られる。

古墳時代中期には、埋葬施設ＣＳＸ01・02・03が作られている。

さらに、時期は不明であるが、貯蔵穴と考えられるＣＳＫ08・09、不明土坑ＣＳＫ03・10・11・12・13、溝状遺構ＣＳＤ01・02・05・06・07・08・09がある。

このうち、弥生時代の集落は比較的高い位置から営まれているが、古墳時代の集落は、標高73ｍ以下のやや低い位置に展開している。



挿図４　南谷大山遺跡C区全体図

第２節　南谷大山遺跡Ｃ－Ｉ区の調査結果

１．竪穴住居跡

ＣＳＩ01（挿図５・６、図版２・29）

位　　置　Ｃ－Ｉ区北側のN23グリッドにあり、標高82.7～83.3ｍの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。南東側約10ｍにはＣＳＩ16が、すぐ北側にはＣＳＤ01が近接している。

形　　態　遺存状態は非常によく、平面は隅丸方形を呈す。規模は、北西～南東4.20ｍ、南西～北東3.90ｍを測り、床面積は17.0㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北西壁で最大1.02ｍを測る。

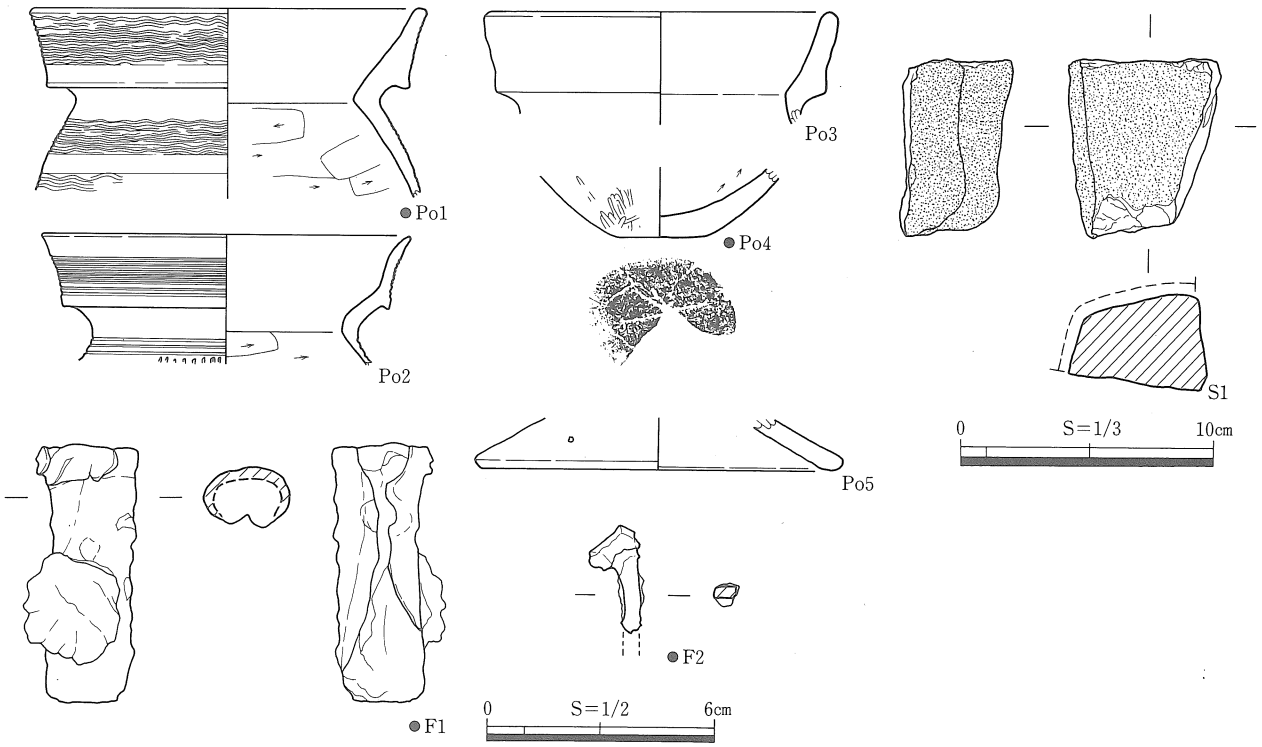
壁溝は、北東・南東壁際で検出されたが、それ以外では検出されなかった。規模は、幅10～20㎝、深さ３～６㎝を測り、断面逆台形状を呈す。

主柱穴はＰ１～Ｐ４の４個で、それぞれの規模は、Ｐ１（70×57－52）㎝、Ｐ２（92×81－32）㎝、Ｐ３（80×75－63）㎝、Ｐ４（77×67－62）㎝を測る。主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に2.2ｍ、2.6ｍ、2.6ｍ、2.4ｍである。

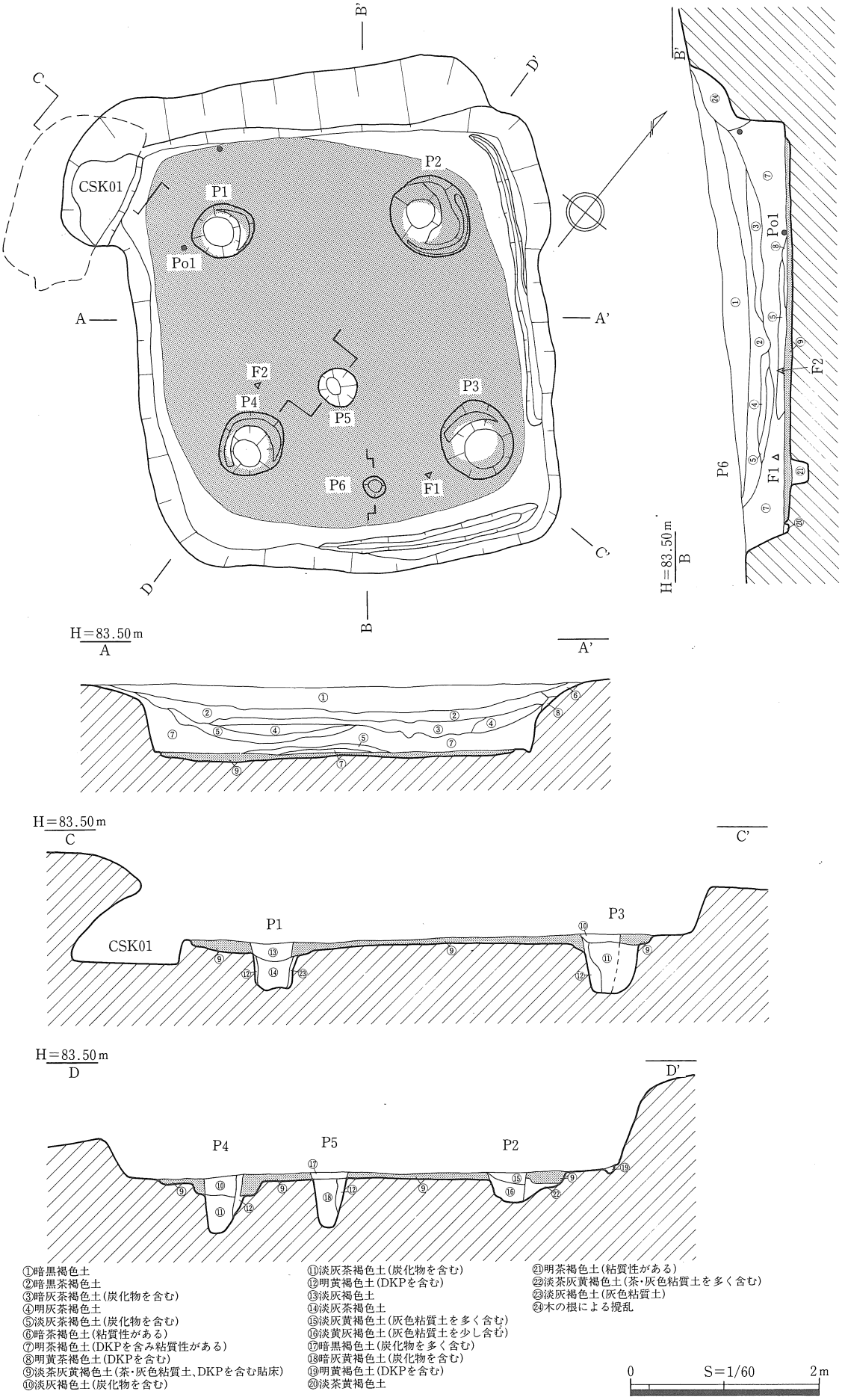
中央ピット　中央ピットは、やや南西側にずれるＰ５で、規模は、(42×40－59)㎝を測る。埋土は３層に分層でき、⑰・⑱層には炭化物が含まれており、鑑定の結果ツブラジイ・クスノキが含まれていた。また、中央ピット上には主柱穴と異なり、貼床は施されていない。

埋　　土　埋土は８層に分層できた。いずれの層も中心に向かって堆積しており、自然堆積の状況が窺われる。このうち、⑦層は、壁際で厚く堆積しており、周堤が崩れて堆積したものと考えられる。最下層の⑤層には炭化物が含まれている。

貼　　床　ほぼ全面に粘質土を含む⑨層による貼床が施されている。貼床は、主柱を立てた後に施さ



挿図５　南谷大山遺跡CSI01出土遺物実測図



挿図 6　南谷大山遺跡CSI01遺構図

れたものと考えられ、柱穴上では柱の部分で貼床が切れていた。

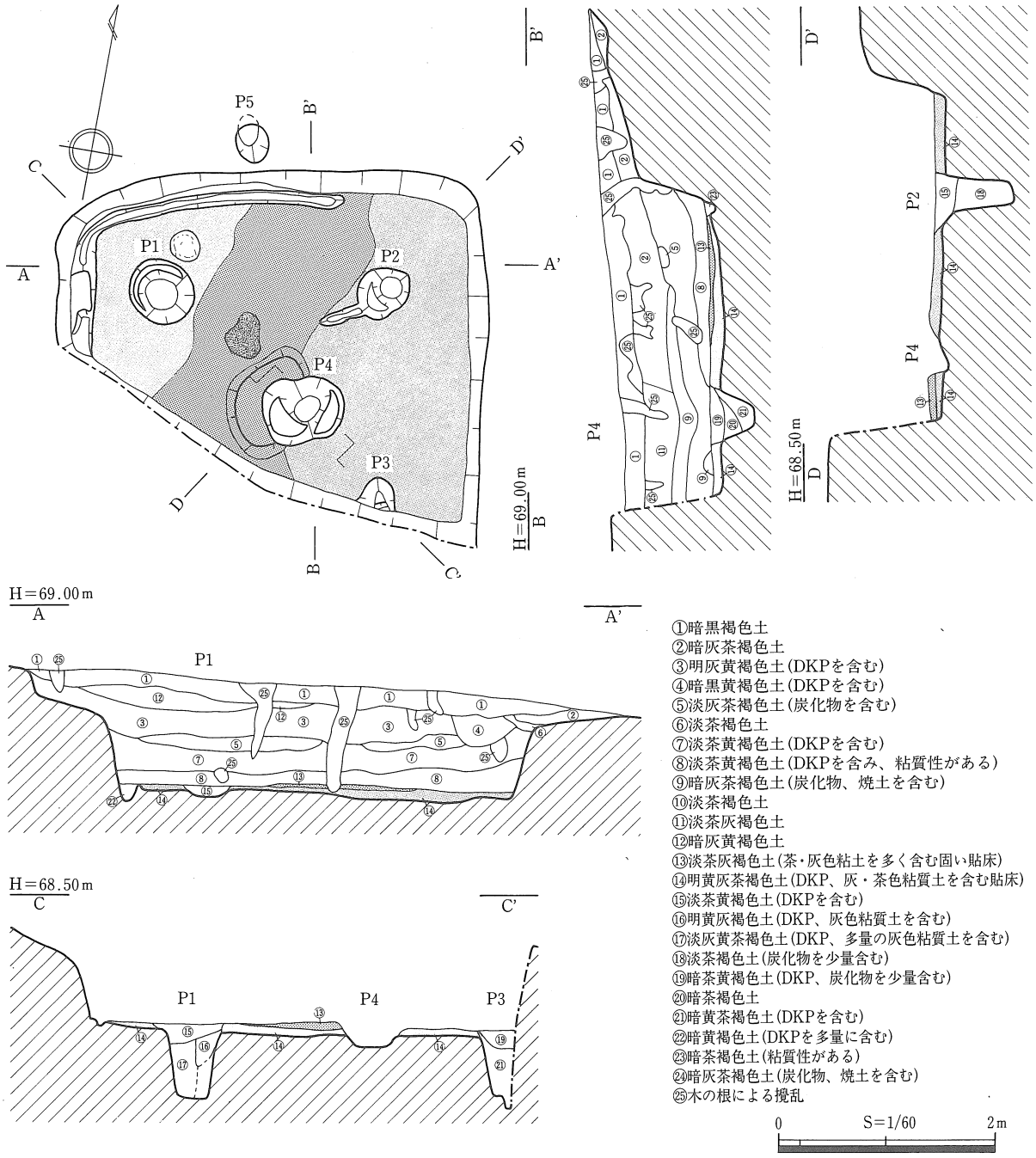
屋内貯蔵穴　西側コーナーには、後述するＣＳＫ01が袋状に掘り込まれており、形態的特徴からＣＳＩ01に伴う屋内貯蔵穴と考えられる。

遺　物　出土状況　図化できたものには、複合口縁をもつ甕Po１・Po２・Po３、平底をもつ底部Po４、蓋Po５、砥石Ｓ１、袋状鉄斧Ｆ１、不明鉄器Ｆ２がある。

このうち、床面からは、西側コーナー付近でPo１、東側コーナー付近でＦ１が出土している。また、中央ピット内からPo４が出土している。

その他は埋土中からの出土である。この他にも、図化できなかったが、埋土中から軽石が出土している。

時　期　床面出土遺物から、ＣＳＩ01は大山Ⅱ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図７　南谷大山遺跡CSI03遺構図

ＣＳＩ03（挿図７・８、図版３・29）

位　　置　Ｃ－Ｉ区の最も南側のＰ32・33グリッドにあり、標高68.0～68.4ｍの平坦面に位置する。南側は調査区外のため完掘できていない。北側約３ｍにはＣＳＩ05、北側約２ｍにはＣＳＤ02がある。

形　　態　遺存状態はよく、南側を推定すると平面は隅丸方形を呈す。規模は、東西3.50ｍ、南北2.8ｍ以上を測り、床面積は南側を推定すると約12㎡で、現存では8.5㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.66ｍを測る。

壁溝は、東側で検出されなかった。規模は、幅10～16cm、深さ９～16cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴は検出したものはＰ１～Ｐ３の３個であるが、本来は４本柱の建物であると考えられる。それぞれの規模は、Ｐ１（65×58－69）cm、Ｐ２（52×44－75）cm、Ｐ３（36×30－73）cm以上を測る。主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に2.2ｍ、2.2ｍである。

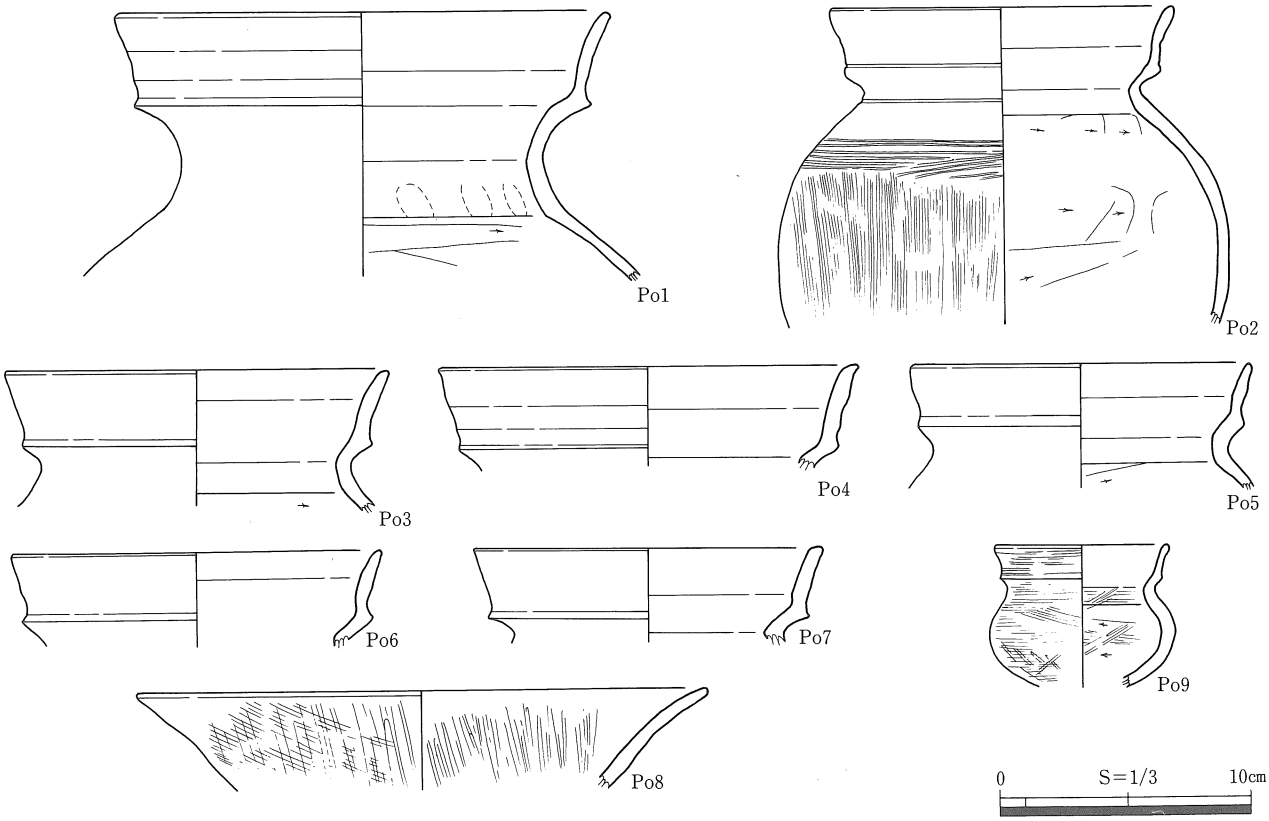
また、北側には（36×30－45）cmを測るＰ５がある。斜めに掘り込まれている事から、垂木を支えるピットと考えられる。

中央ピット　中央ピットは、住居のほぼ中央に楕円形に(110 ×70－３)cmと一段高くなる土壇の東側に掘り込まれたＰ４で、規模は(78×58－42)cmを測る。この土壇は、⑬層を盛って作られている。

焼土面　中央ピットの北側には、不整形に広がる焼土面が１カ所検出されている。

埋　　土　埋土は12層に分層できた。いずれの層も住居の中心部に向かって堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

貼　　床　床面には、全面に⑭層による貼床が施されているが、土壇を含めて住居中央南北方向には固く締まった⑬層による貼床が施されている。貼床は、主柱を立てた後に施されたものと考えられる。



挿図８　南谷大山遺跡CSI03出土遺物実測図

石　材　Ｐ１の北側で、扁平で円形を呈す石材が検出されている。使用痕等は認められず、性格は不明である。

遺　物　図化できたものには、壺Po１、甕Po２～Po７、高杯Po８、小型丸底壺Po９がある。

出土状況　いずれも埋土中からの出土であるが、Po４・Po５・Po８は埋土下層からの出土である。

時　期　埋土下層の出土遺物から、ＣＳＩ03は大山Ⅵ期、古墳時代前期後半頃のものと考えられる。

ＣＳＩ04・08（挿図９～14、図版３・29・30）

位　置　ＣＳＩ04・08は、調査区の東側尾根上のO27グリッドにあり、標高73～74.1ｍの平坦面に位置する。ＣＳＩ04の西側はＣＳＩ08を大きく切り込んで作っており、北東３ｍにはＣＳＩ13が位置している。

形　態
ＣＳＩ04　遺存状態は良く、平面は東西にやや長い五角形を呈する。規模は、東西7.98ｍ、南北7.18ｍを測り、床面積は、43.0㎡である。残存壁溝は、最も遺存状態の良い北壁で最大1.03ｍを測る。

壁溝は、幅８～17cm、深さ３～12cmを測り、断面「U」字状を呈す。東側～南側ではとぎれるものの、本来は全周していたものと考えられる。

主柱穴はＰ１～Ｐ５の５個で、それぞれの規模は、Ｐ１（51×46－75）cm、Ｐ２（72×55－71）cm、Ｐ３（83×60－94）cm、Ｐ４（62×53－60）cm、Ｐ５（84×70－62）cmを測る。

主柱穴間距離はＰ１～Ｐ２間から順に3.8ｍ、3.4ｍ、3.5ｍ、3.8ｍ、3.5ｍである。

なお、Ｐ１には、やや浅いＰ12・Ｐ13が接続しているが、規模的にはＰ１とほぼ同じで柱穴として掘り込まれたものと考えられるが、ＣＳＩ04に付随するものかは不明である。

主柱穴間にはＰ７（34×24－17）cm、Ｐ８（46×35－51）cm、Ｐ９（55×51－60）cm、Ｐ10（29×21－49）cm、Ｐ11（53×45－51）cmを測るピットがある。これらは、主柱穴に比べ深さがあまりなく、位置的・規模的に考えて補助柱穴と考えられる。このうち、Ｐ９は後述するＣＳＩ08の主柱穴とも考えられ、再考する余地がある。

中央ピット　住居中央部には、灰赤褐色粘質土によって（200×150）cmにわたり不整な「コ」字状に、２cm程度と低いながらも一段高く土壇が作られている。この部分のやや北東側に、不整楕円形の中央ピットＰ６が二段に掘り込まれている。Ｐ６は、まず上縁部を（68×50－７）cmに掘り、さらに（44×32－28）cmに掘り込んでいる。埋土は３層に分層できた。ブロック状に入り込む③層中には、炭化物を含んでいる。

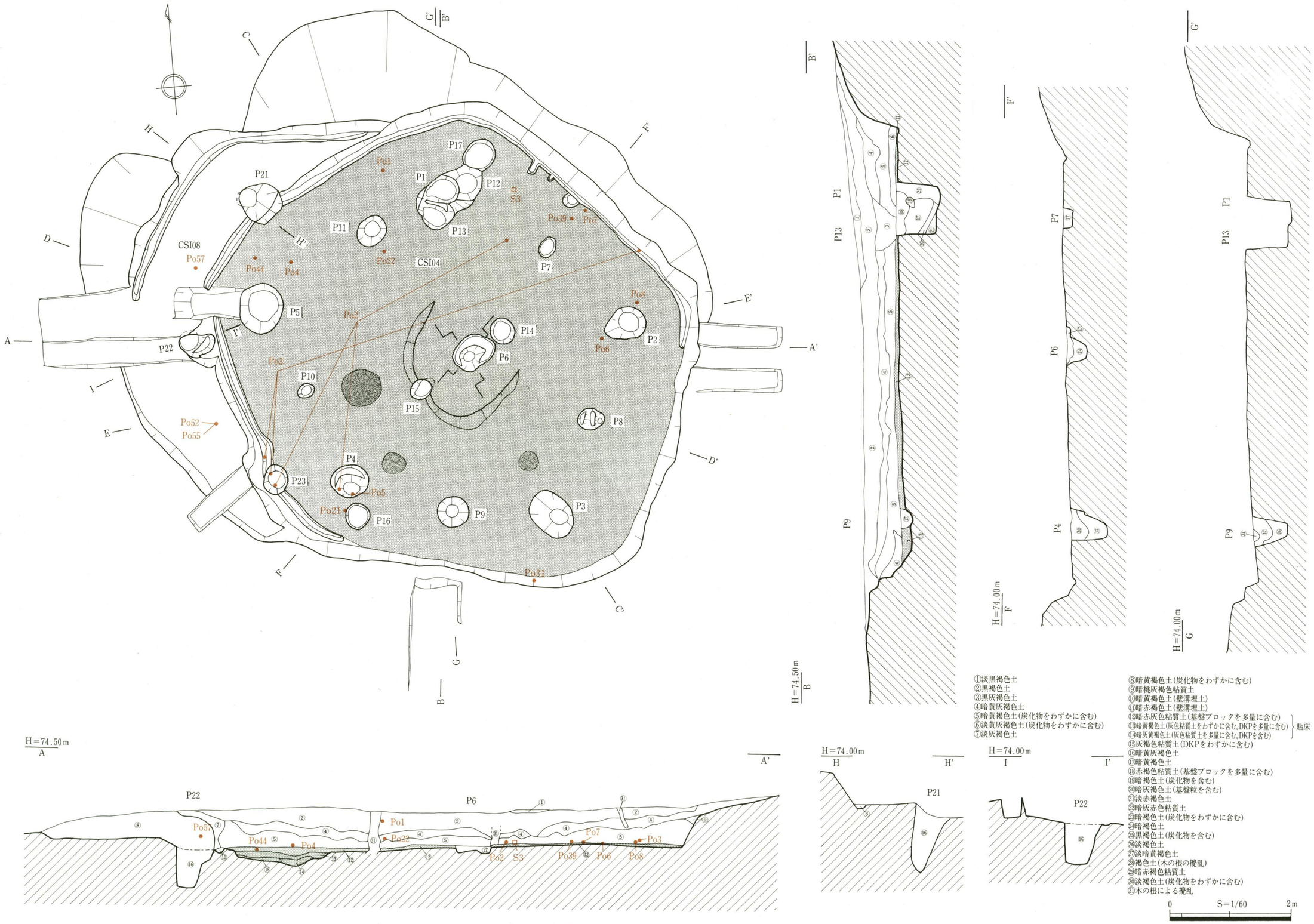
中央ピットの周辺には、土壇を切り込んで、（34×34－41）cmを測るＰ15、（44×42－36）cmを測るＰ14がある。これらは、用途不明であるが、棟持柱の可能性もある。

出入口　また、北東側壁溝に接続して長さ16～24cm、幅９～12cmの溝と、同様に、深さ５cm程度のピットが等間隔に並んでいる。この部分は、Ｐ１－Ｐ２間に当たり、補助柱穴の規模も他のものと比べて小さく、また、この部分には焼土面がないことから、これらの溝およびピットに、出入り口に立てられた階段状のものが据えられたものと考えられる。

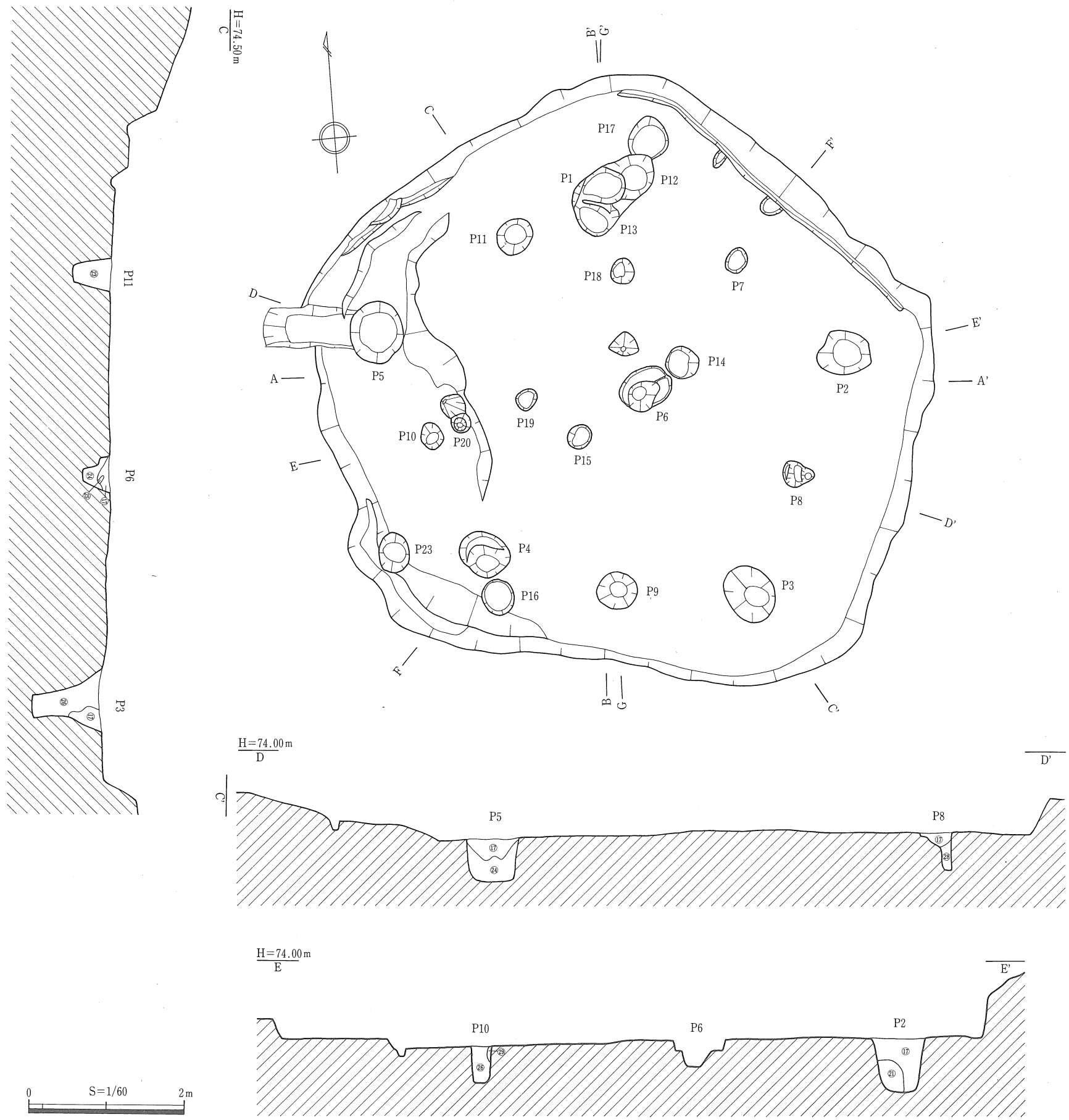
ＣＳＩ08　ＣＳＩ04によって大きく削られているために正確な規模・形態は不明であるが、遺存している壁の状態から、平面は六角形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西2.5ｍ以上（推定５ｍ）、南北5.50ｍを測り、床面積は８㎡以上、東側を推定すると約25㎡と考えられる。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.61ｍを測る。

壁溝は、南側でとぎれるが、幅９～17cm、深さ２～11cmを測り、断面「U」字状を呈す。

確実に主柱穴と考えられるものはＰ21・Ｐ22・Ｐ23の３個で、それぞれの規模は、Ｐ21(56×



挿図 9　南谷大山遺跡CSI04・08遺構図



挿図10　南谷大山遺跡CSI04貼床除去後遺構図

53－108）cm、P22（53×30－83）cm、P23（51×33－71）cmを測る。これらは、ＣＳＩ04の床面上のＰ９、P14、P12と合せて、ほぼ等間隔に六角形に並んでいることから、ＣＳＩ08の主柱穴とも考えられる。

このように考えると、主柱穴間距離はP21～P22間から順に2.6m、2.8m、3.0m、3.1m、2.2m、3.1mとなる。

焼土面　ＣＳＩ04の床面上には、南側のＰ３・Ｐ４・P10付近に３カ所、楕円に広がる焼土面が検出された。

埋　土　ＣＳＩ04の埋土は８層に分層することができた。①②④⑤層は、壁際から住居中央部に向かって流れ込んだような堆積状況を示し、住居の廃絶と共に自然堆積した状況が窺われる。このうち、⑤層中には炭化物が含まれている。

また、③層はＰ１上にあり、柱材が腐朽したものと考えられる。

さらに、西側壁溝上には、⑦層が垂直方向に伸びており、壁溝内に立てられた板状のものが腐朽したものと考えられる。また、北側では、炭化物を含む⑥層が水平方向に堆積しており、同様に、壁溝内に立てた板状のものが倒れたまま腐朽したものと考えられる。

ＣＳＩ08の埋土は、暗黄褐色土⑧層が単層で入り込んでいた。

貼　床　ＣＳＩ04の床面ほぼ全面に、厚さ５～20cmに暗赤灰褐色粘質土による貼床⑫層が施されている。西側では、この層の下に⑬～⑮層によってくぼんだ部分が補塡されている。

貼床除去後に、P18～P20・P23を検出した。それぞれの規模は、P18（32×28－46）cm、P19（27×25－12）cm、P20（26×26－24）cm、P23（51×38－71）cmを測る。用途は不明であるが、P23は、ＣＳＩ08の主柱穴と考えられる。

不　整
落ち込み　ＣＳＩ04の貼床を除去すると、住居中央部から西側で、不整形に掘り込まれた落ち込みが検出された。断面も不整形な皿状を呈す。この落ち込みは、住居プラン内に納まることから、住居を掘削する段階で掘り込まれたものと考えられる。

ＣＳＩ04の基盤層は、東・北側が堅緻なローム層であるのに対し、西・南側がＤＫＰ層になっており、住居の掘削段階で、柔らかく掘りやすいＤＫＰ層を掘り過ぎ、その部分を補うために、西側の貼床が厚くなったものと考えられる。

遺　物
出土状況　ＣＳＩ04からは、図化できたものには、壺Po１・甕Po２～Po28、底部Po29・Po30、高杯Po31～Po34、鼓形器台Po35～Po37、直口壺Po38、低脚杯Po39、小型丸底壺Po40・Po41、擂鉢Po42、土玉Po43・Po44、土錘Po45～Po50、黒曜石剝片Ｓ２、磨石Ｓ３がある。

このうち床面からは、北西壁寄りでPo１・Po４・Po22・Po44が、北東壁寄りでPo７・Po８・Po39・Ｓ３が、Ｐ２付近でPo６・Po８が、南壁際でPo31が、Ｐ４内でPo５がそれぞれ出土している。また、Po２・Po３は南西コーナー付近のものと北東壁際のものが接合している。

その他のものは、埋土中からの出土である。なお、擂鉢Po42は備前Ｖ期と思われる。

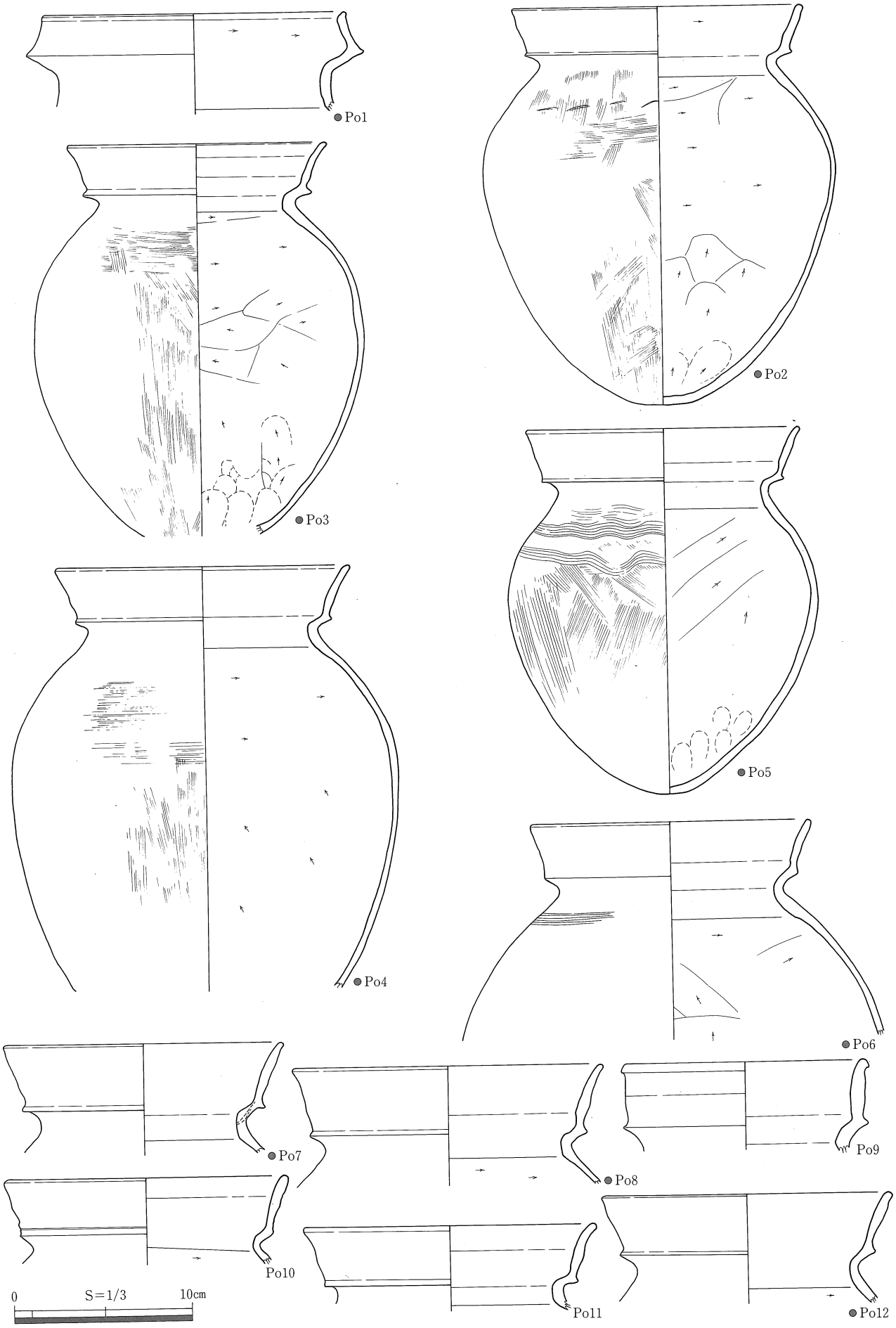
ＣＳＩ08からは、図化できたものには、甕Po51・Po52、底部Po53～Po55、土玉Po56・Po57がある。

このうち床面からはPo56が、P23の南側でPo52・Po55が、P23の北側でPo57が、P22内でPo53・Po54がそれぞれ出土している。

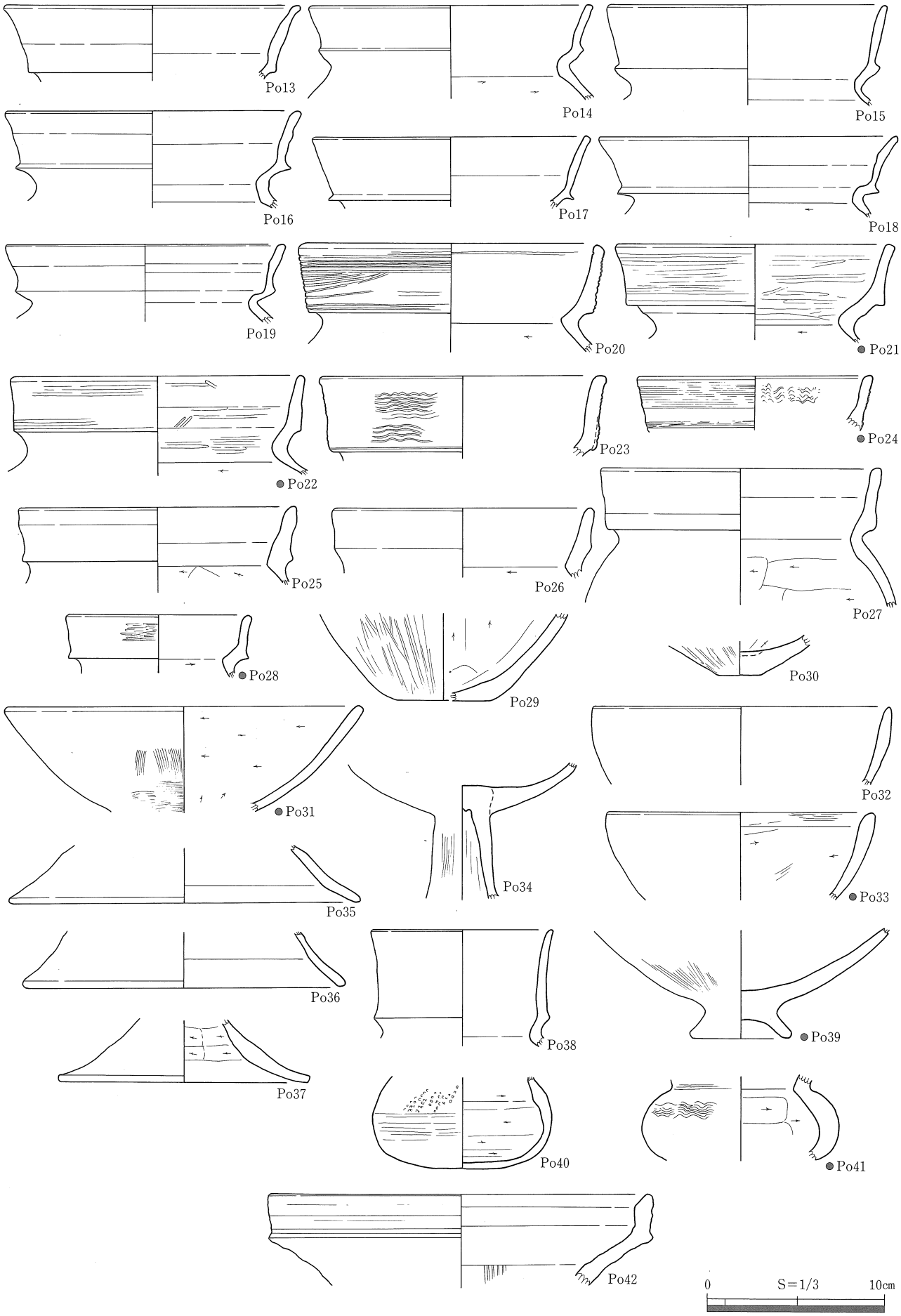
その他は、埋土下層からの出土である。

時　期　床面出土遺物のうち、Po５は若干古い様相があるが、ＣＳＩ04は大山Ｖ期、古墳時代前期前半頃のものと考えられる。

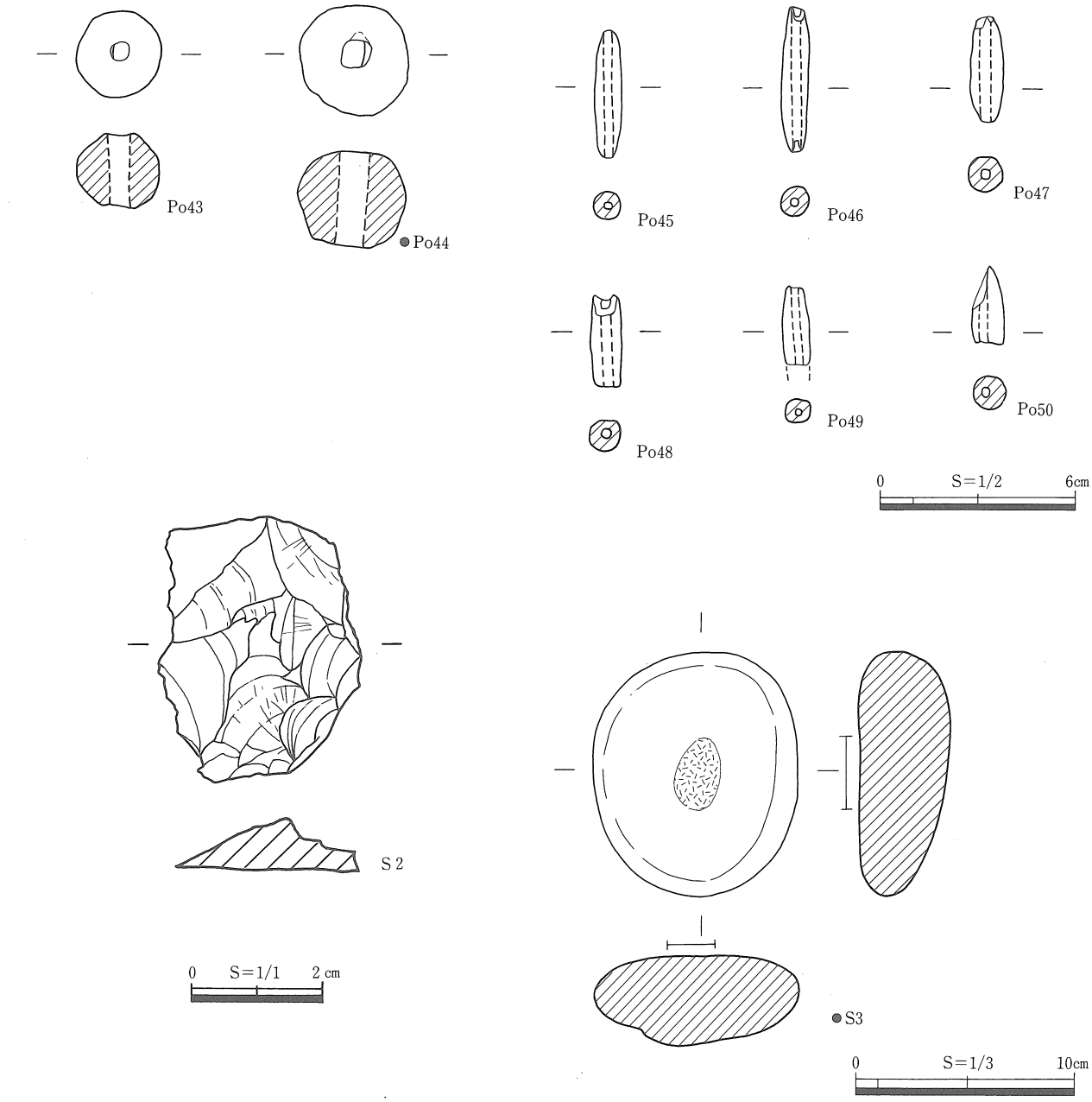
ＣＳＩ08は、床面出土の土器から大山II期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



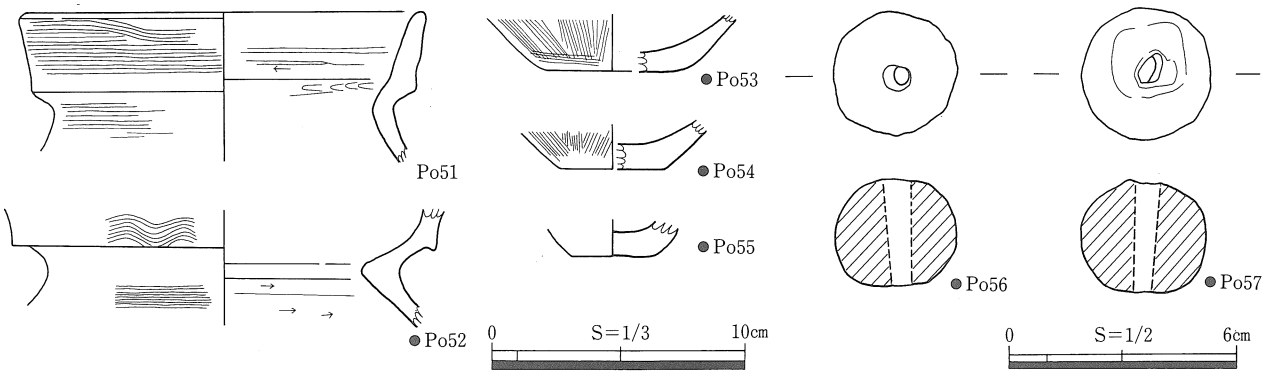
挿図11　南谷大山遺跡CS104出土遺物実測図(1)



挿図12　南谷大山遺跡CS104出土遺物実測図(2)



挿図13　南谷大山遺跡CS104出土遺物実測図(3)



挿図14　南谷大山遺跡CS108出土遺物実測図

ＣＳＩ05（挿図15～18、図版４・30～32）

位　　置　Ｃ－Ｉ区南側のＰ31・32グリッドにあり、標高68.2～69.0ｍの平坦面に位置する。北東側はＣＳＩ06によって切り取られ、西側にはＣＳＩ07が接している。この平坦面にはＣＳＩ05～ＣＳＩ07が重複しているが、土層の切り合い関係から、ＣＳＩ05→ＣＳＩ06→ＣＳＩ07の順で作られている事が判明した。

形　　態　遺存状態はよく、平面は隅丸五角形を呈す。規模は、東西6.80ｍ、南北7.20ｍを測り、床面積は北東側を推定すると41.5㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.62ｍを測る。

壁溝は、南側でとぎれるもののほぼ全周するものと考えられ、幅６～21㎝、深さ４～７㎝を測り、断面逆台形状を呈す。

主柱穴はＰ１～Ｐ５の５個で、それぞれの規模は、Ｐ１（52×48－61）㎝、Ｐ２（32×32－76）㎝、Ｐ３（48×44－54）㎝、Ｐ４（54×40－53）㎝、Ｐ５（52×48－70）㎝を測る。主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に3.4ｍ、2.9ｍ、3.0ｍ、2.7ｍ、2.9ｍである。

中央ピット　中央ピットはＰ７で、３個のピットが切りあっている。規模は（65×62－29）㎝を測る。埋土は３層に分層でき、いずれの層にも炭化物が含まれている。また、⑰層はよく締まっており、意図的に埋められた可能性がある。

この他にもＰ６～Ｐ15のピットが検出されているが、用途は不明である。

周辺ピット　また、住居周辺にはＰ16～Ｐ22のピットが掘り込まれている。これらは径30～35㎝、深さ45㎝程度としっかりしており、垂木を支えるものというよりは、庇状のものがあった可能性もある。

焼土面　中央ピットの西側に、楕円形に広がる焼土面が検出されている。

炭化物　中央ピットの南側では、狭い範囲ではあるが炭化物層が検出されている。

埋　　土　埋土は６層に分層できた。①・②層は自然堆積したものと考えられるが、③層は北西側にのみ堆積しており、自然堆積したものとは考えがたい。また、③層は炭化物・焼土粒を、④層は炭化物を多く含んでおり、明らかな炭化材は検出されていないが、ＣＳＩ05は焼失した可能性がある。

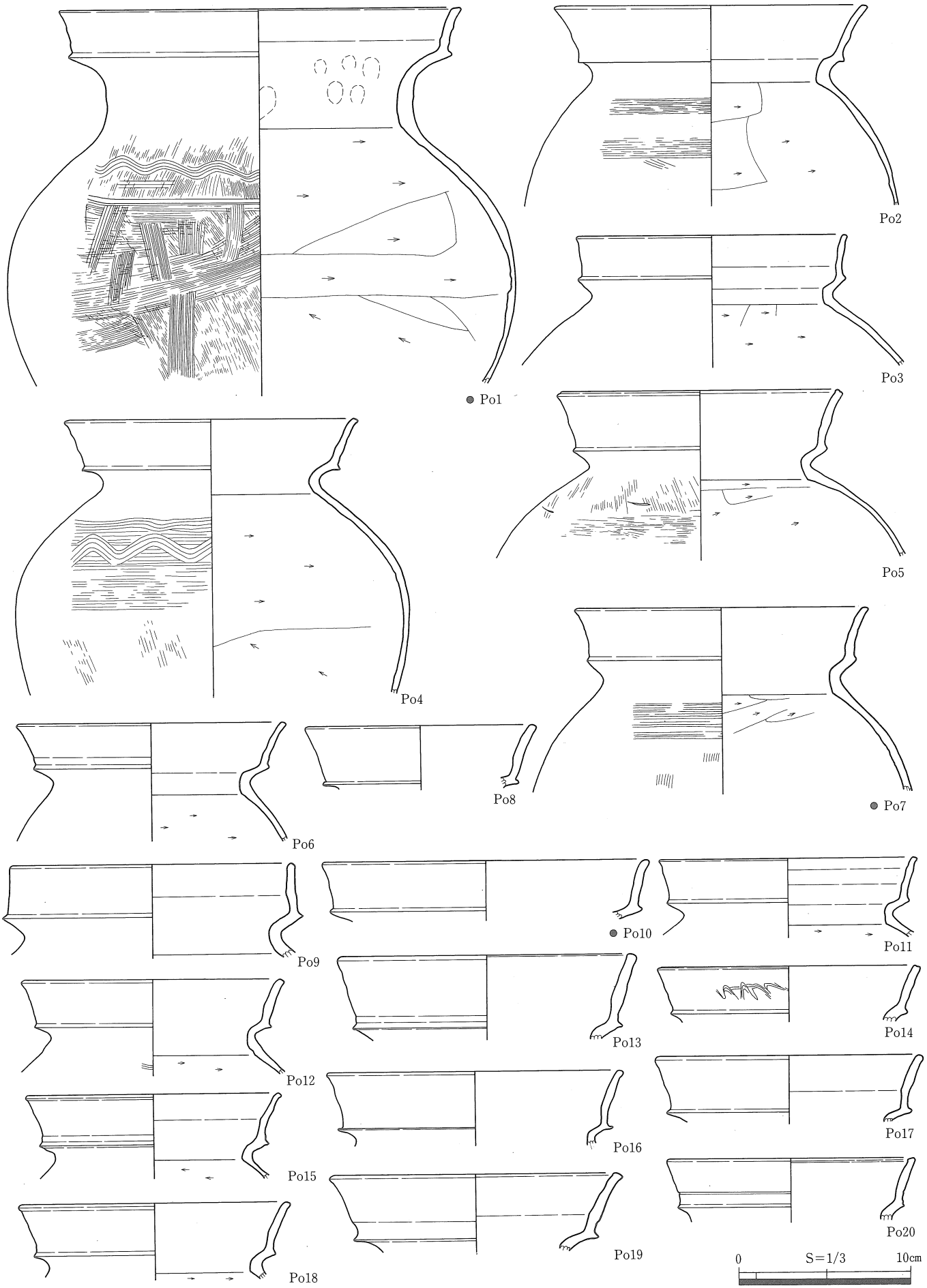
貼　　床　床面の南側半分に、粘質土を含む⑦層による貼床が施されている。貼床は、主柱を立てる前に施されたものと考えられる。

遺　　物
出土状況　図化できたものには、壺Po１、甕Po２～Po21、底部Po22～Po24、高杯Po25～Po33、鼓形器台Po34～Po38、小型丸底壺Po39～Po41、低脚杯Po42、甑形土器Po43、磨石Ｓ４、不明鉄器Ｆ３がある。

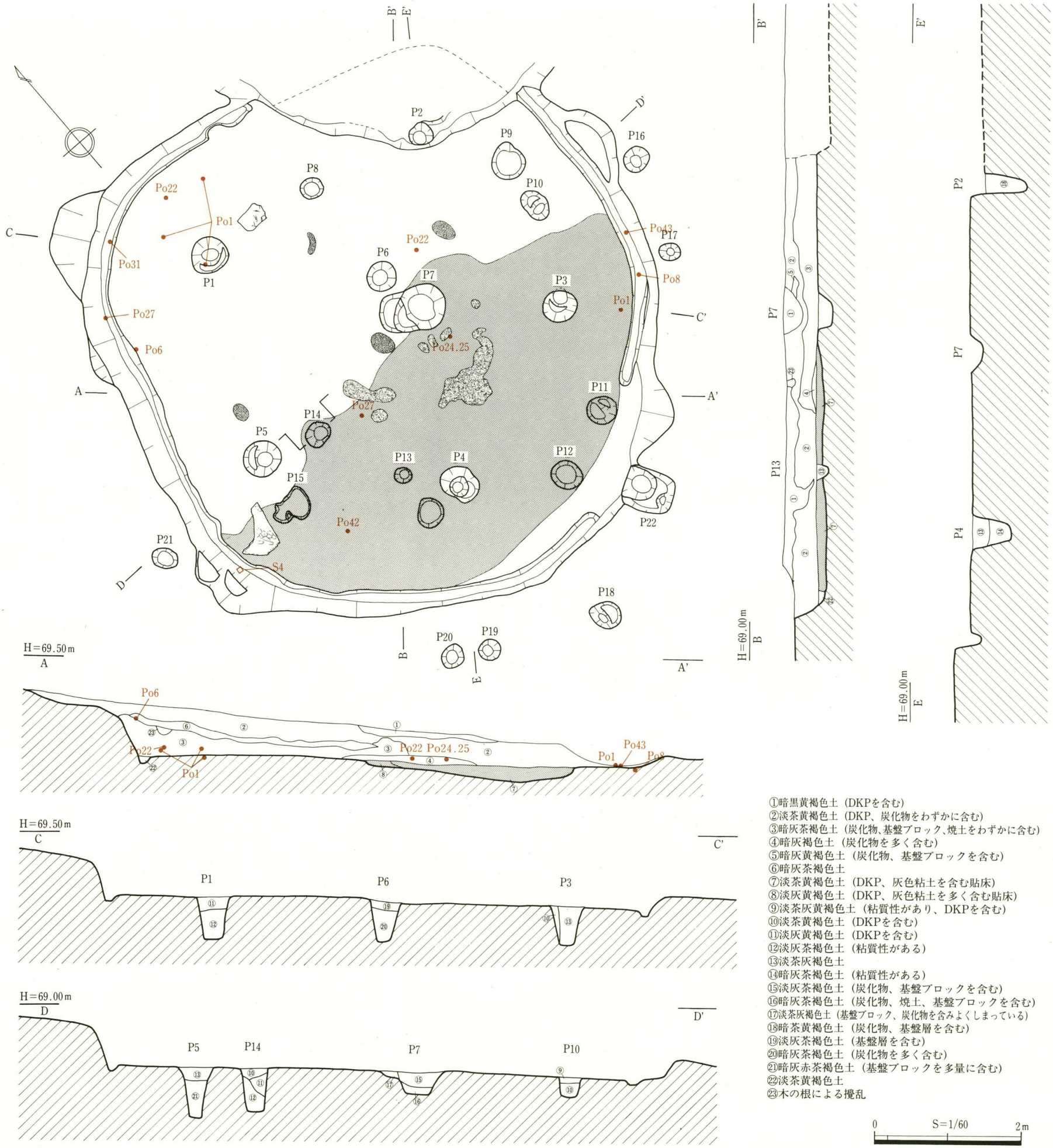
このうち床面からは、Po１が北壁際と東壁際から離れた状態で、Po22が北側壁際とＰ６付近で離れた状態で、さらに、Po27が北側壁際とＰ14付近で離れた状態で出土している。また、北側壁際ではPo31が出土している。東壁際ではPo７・Po43が、南西壁際ではPo42・Ｓ４が出土している。一方、Ｐ３内でPo10が出土している。

これら以外は、埋土中からの出土である。

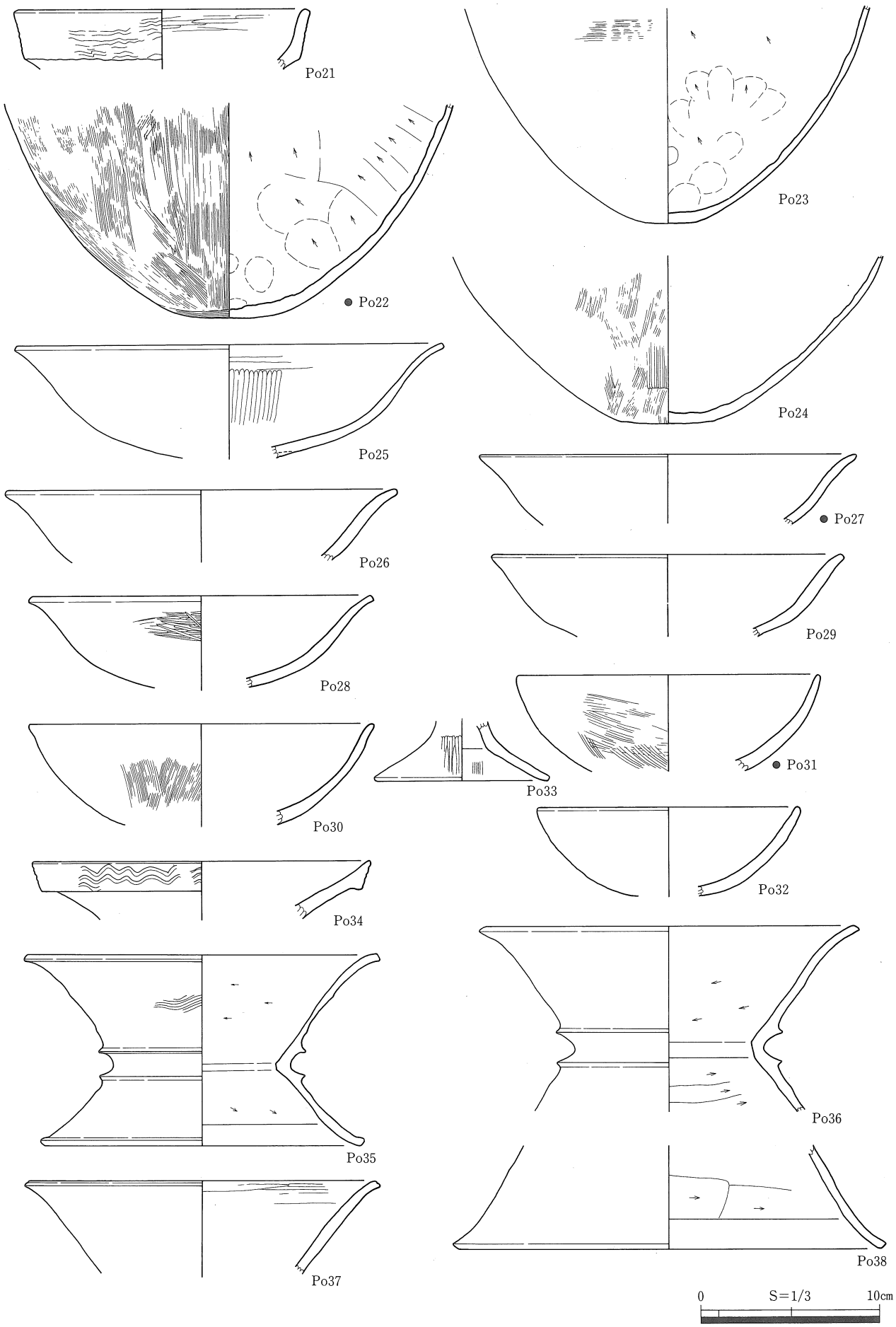
時　　期　床面出土遺物から、ＣＳＩ05は大山Ⅵ期、古墳時代前期後半頃のものと考えられる。



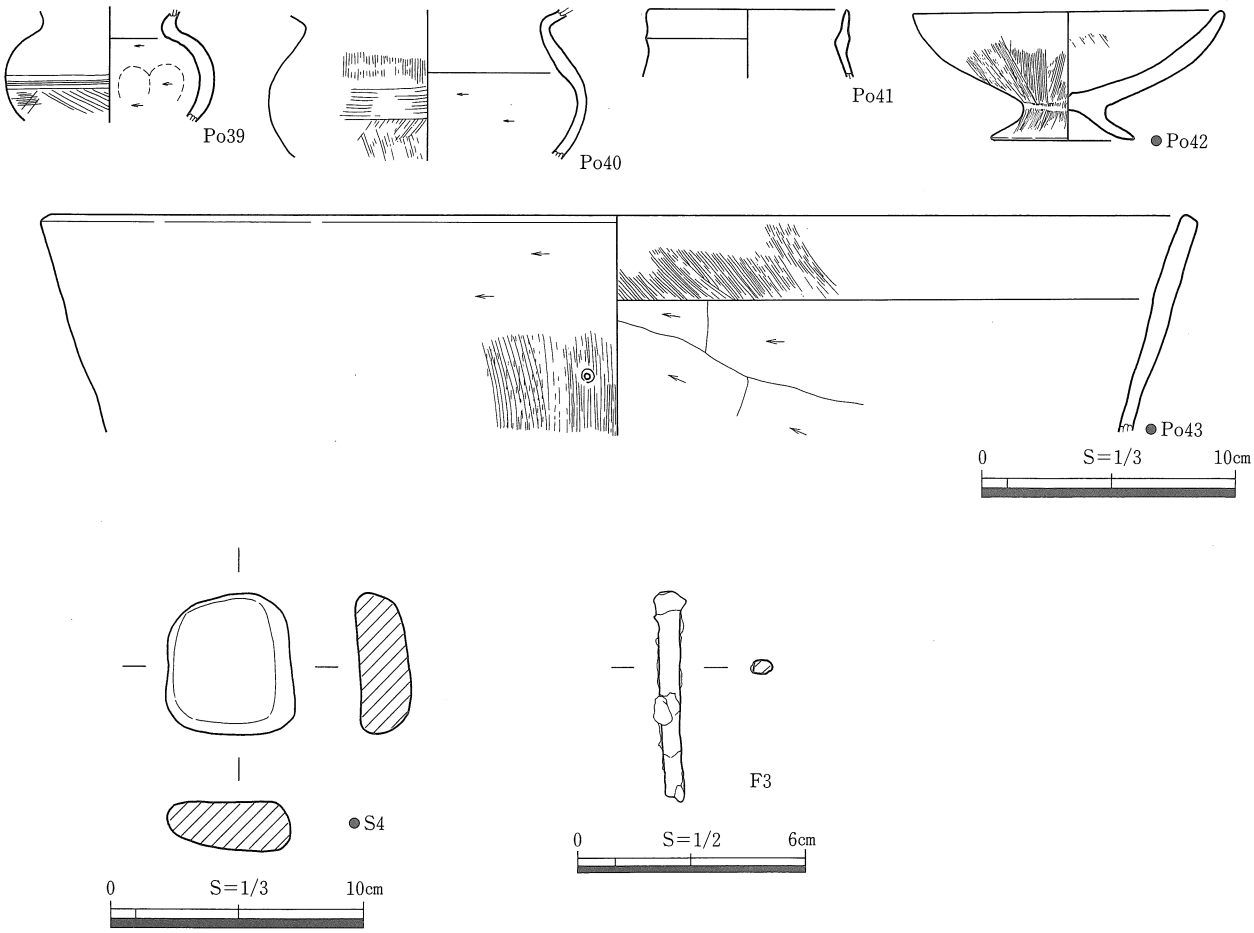
挿図15　南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(1)



挿図16　南谷大山遺跡CSI05遺構図



挿図17　南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(2)



挿図18　南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(3)

ＣＳＩ06（挿図19～22、図版４・５・32・33）

位　　置　Ｃ－Ｉ区南側のＰ31グリッドにあり、標高68.1～68.6ｍの平坦面に位置する。南西側はＣＳＩ05を削り取り、北東側、東側はそれぞれＣＳＳ05、ＣＳＫ11に接している。

形　　態　遺存状態はよく、平面は楕円形を呈す。規模は、東西4.90ｍ、南北5.80ｍを測り、床面積は24.2㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.69ｍを測る。

壁溝は、北西壁際で検出されており、幅６～20cm、深さ２～６cmを測り、断面逆台形状を呈す。

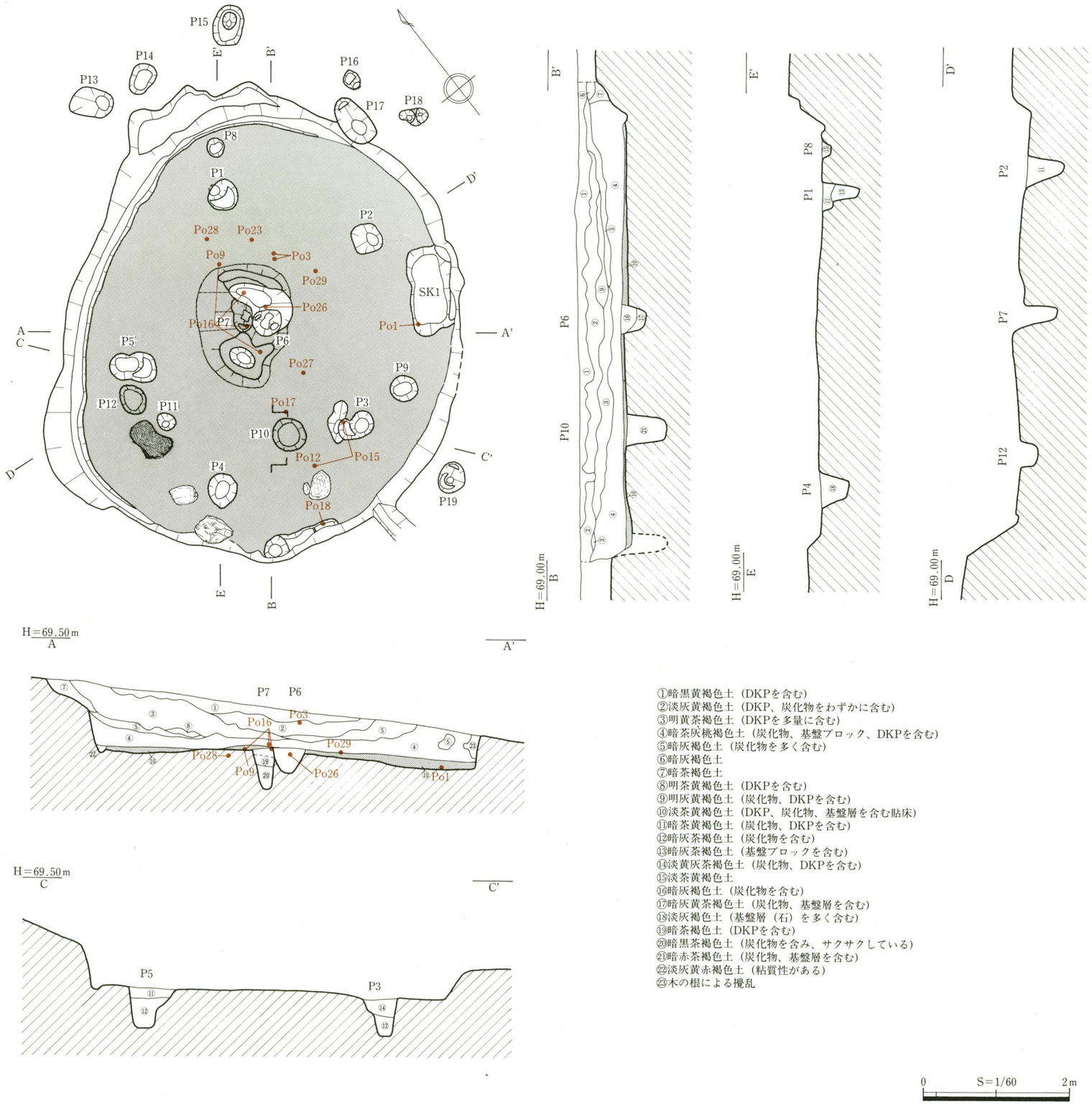
主柱穴はＰ１～Ｐ５の５個で、それぞれの規模は、Ｐ１（42×40－51）cm、Ｐ２（46×44－54）cm、Ｐ３（38×35－52）cm、Ｐ４（46×38－40）cm、Ｐ５（64×36－50）cmを測る。主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に2.3ｍ、2.6ｍ、2.2ｍ、2.2ｍ、2.7ｍである。

中央ピット　中央ピットは、床面ほぼ中央に（173×132－４）cmに一段高くなる土壇のやや東側に掘り込まれたＰ６で、規模は（43×36－20）cmである。埋土は２層に分層でき、いずれの層にも炭化物が含まれている。

その他に、Ｐ８・Ｐ９・Ｐ11が検出されている。また、貼床除去後にＰ７・Ｐ10・Ｐ12が検出されたが、用途は不明である。また、周辺にはＰ13～Ｐ19が検出されている。

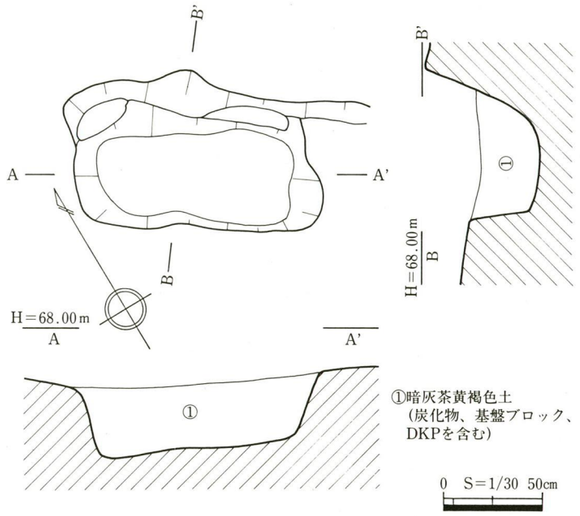
屋　　内　東側壁際には、平面隅丸長方形を呈す土坑が掘り込まれている。規模は、長径1.16ｍ×短

貯 蔵 穴　径0.53ｍ、深さ0.37ｍを測る。埋土は、炭化物・基盤ブロックを含む暗灰茶黄褐色土が単層

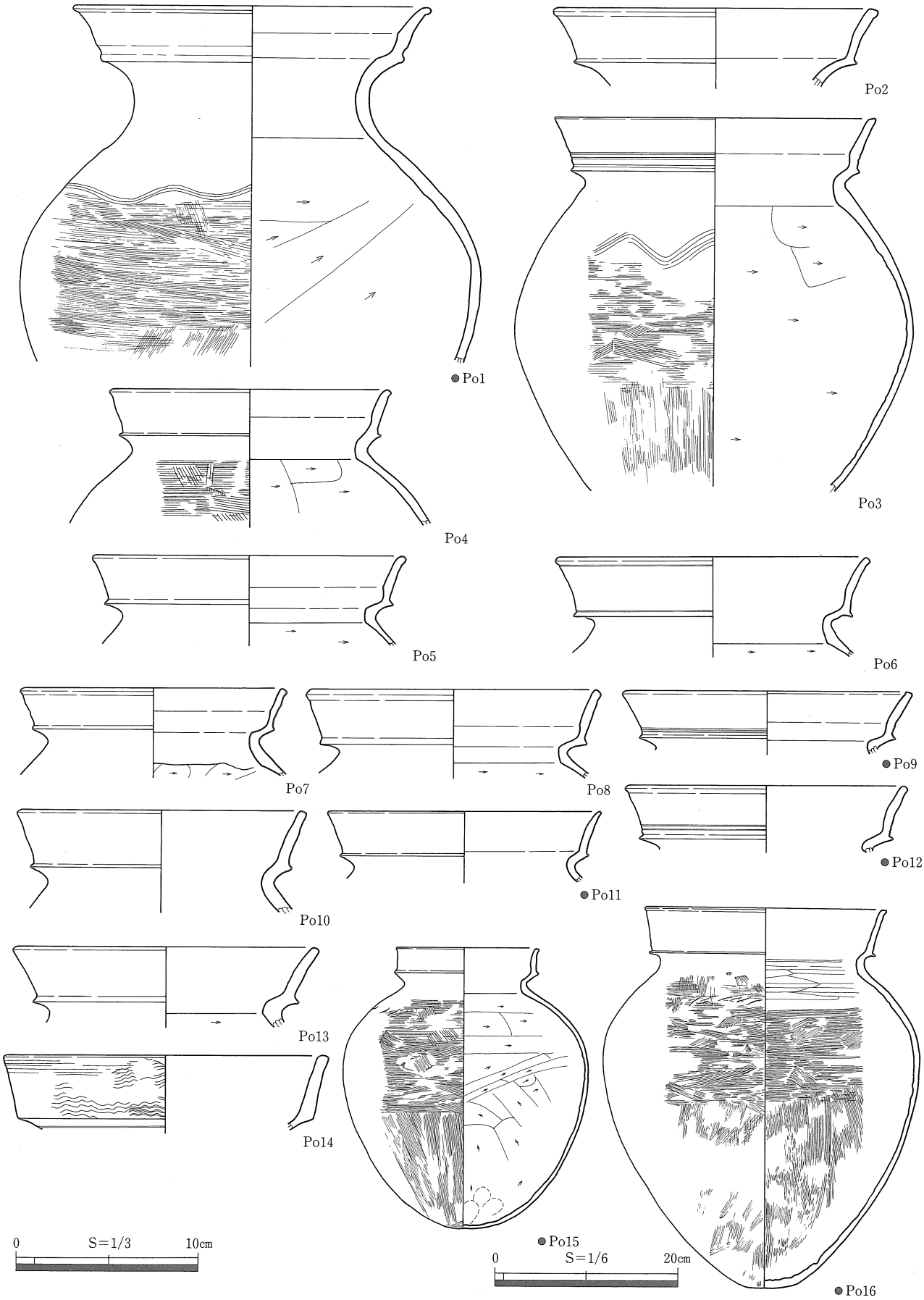


①暗黒黄褐色土（DKPを含む）
②淡灰黄褐色土（DKP、炭化物をわずかに含む）
③明黄茶褐色土（DKPを多量に含む）
④暗茶灰桃褐色土（炭化物、基盤ブロック、DKPを含む）
⑤暗灰褐色土（炭化物を多く含む）
⑥暗灰褐色土
⑦暗茶褐色土
⑧明茶黄褐色土（DKPを含む）
⑨明灰黄褐色土（炭化物、DKPを含む）
⑩淡茶黄褐色土（DKP、炭化物、基盤層を含む貼床）
⑪暗茶黄褐色土（炭化物、DKPを含む）
⑫暗灰茶褐色土（炭化物を含む）
⑬暗灰茶褐色土（基盤ブロックを含む）
⑭淡黄灰茶褐色土（炭化物、DKPを含む）
⑮淡茶黄褐色土
⑯暗灰褐色土（炭化物を含む）
⑰暗灰黄茶褐色土（炭化物、基盤層を含む）
⑱淡灰褐色土（基盤層（石）を多く含む）
⑲暗茶褐色土（DKPを含む）
⑳暗黒茶褐色土（炭化物を含み、サクサクしている）
㉑暗赤茶褐色土（炭化物、基盤層を含む）
㉒淡灰黄赤褐色土（粘質性がある）
㉓木の根による攪乱

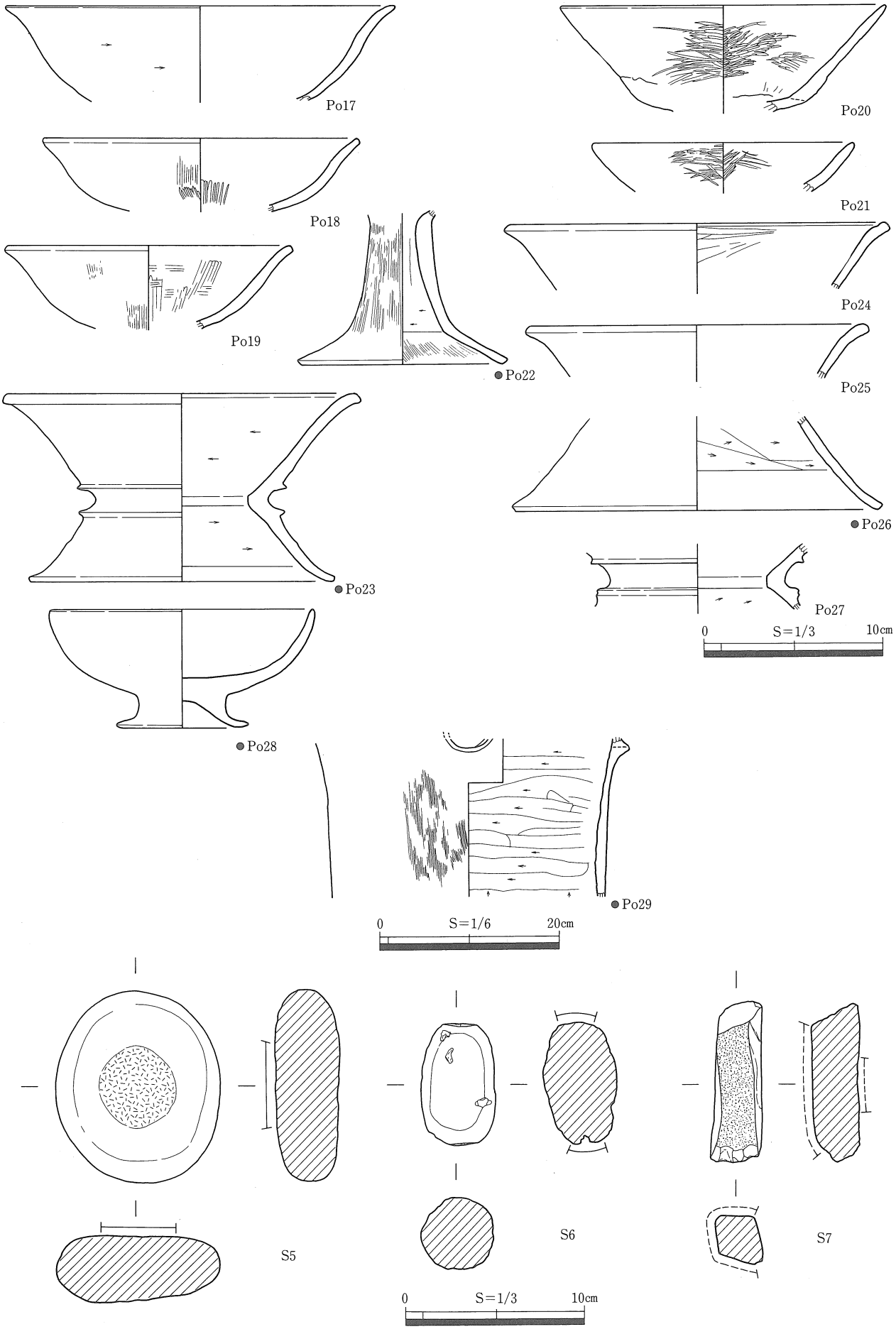
挿図19　南谷大山遺跡CSI06遺構図



挿図20　南谷大山遺跡CSI06内SK1遺構図



挿図21　南谷大山遺跡CSI06出土遺物実測図(1)



挿図22　南谷大山遺跡CS106出土遺物実測図(2)

ではいる。この土坑は、位置的・形態的に屋内貯蔵穴と考えられる。

焼土面　中央ピットの南西側には、楕円形に広がる焼土面が１カ所検出されている。

また、南側壁際で、ノミ痕が明瞭に残る大型の石材が２個検出されている。この石材の裏面にもノミ痕が施されている。ノミ痕の幅は、約４cmを測る。

埋　土　埋土は９層に分層できた。①・②層は自然堆積したものと考えられるが、厚く堆積する③層は南西側にあり、周壁が崩れ落ちたものと考えられる。また、⑤層は炭化物を含んでおり、明らかな炭化材は検出されていないが、ＣＳＩ06は焼失した可能性がある。

貼　床　床面の全面には、基盤層を含む⑩層による貼床が施されている。

遺　物　図化できたものには、壺Po１・Po２、甕Po３～Po16、高杯Po17～Po22、鼓形器台

出土状況　Po23～Po27、低脚杯Po28、甑形土器Po29、敲石Ｓ５・Ｓ６、砥石Ｓ７がある。

このうち、床面からは中央部でPo９・Po16・Po26、北壁際でPo22、中央やや北寄りでPo23・Po29、東壁際でPo１、南壁寄りでPo15が出土している。

それら以外は埋土中からの出土である。

時　期　床面出土遺物から、ＣＳＩ06は大山Ⅵ期、古墳時代前期後半頃に作られたものと考えられる。このうち、Po16は若干古い様相を残す。

ＣＳＩ07（挿図23～25、図版５・33・34）

位　置　Ｃ－Ｉ区南側のＯ31・Ｐ31グリッドにあり、標高68.5～69.3ｍの平坦面に位置する。南東側はＣＳＩ05を埋め、ＣＳＩ06に接している。

形　態　ＣＳＩ07は、少なくとも３回の建て替えがあったものと考えられ、それぞれＣＳＩ07-1～ＣＳＩ07-3とした。

CSI07-1　遺存状態は比較的よく、平面は隅丸方形を呈す。規模は、東西5.80ｍ、南北5.80ｍを測り、床面積は南東側を復元して考えると約41.5m²、現存では38.6m²である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北東壁で最大0.43ｍを測る。

壁溝は、東側・南西側でとぎれるもののほぼ全周していたものと考えられ、幅13～23cm、深さ４～９cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴はＰ１～Ｐ４の４個で、それぞれの規模は、Ｐ１（68×54－46）cm、Ｐ２（52×46－65）cm、Ｐ３（44×42－69）cm、Ｐ４（64×58－72）cmを測る。なお、Ｐ１・Ｐ４は複数の柱穴が掘り込まれているものと考えられる。主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に2.4ｍ、2.6ｍ、2.7ｍ、2.5ｍである。

中央ピット　中央ピットは、床面ほぼ中央に二段に掘り込まれるＰ５で、上縁部は長楕円形を呈し、(92×66－26）cmに掘り込まれ、さらに中央部を（44×34－49）cm掘り込む。埋土は３層に分層でき、㉑・㉒層中には炭化物が含まれている。

その他に、Ｐ６～Ｐ11・Ｐ16・Ｐ17が検出されているが、用途は不明である。

埋　土　埋土は13層に分層できた。これらはいずれも住居の中央に向かって堆積しており、自然堆積したものと考えられる。しかし、主柱穴Ｐ４の埋土および上方の埋土を見ると、⑪・⑳層と類似した層で、住居が埋まる過程の中で、Ｐ４には柱が立っていた可能性がある。

貼　床　床面の中央部には、⑭層による貼床が施されている。貼床除去後では、後述する07-2の主柱穴と考えられるＰ14、Ｐ15、その他にＰ12・Ｐ13が検出されている。

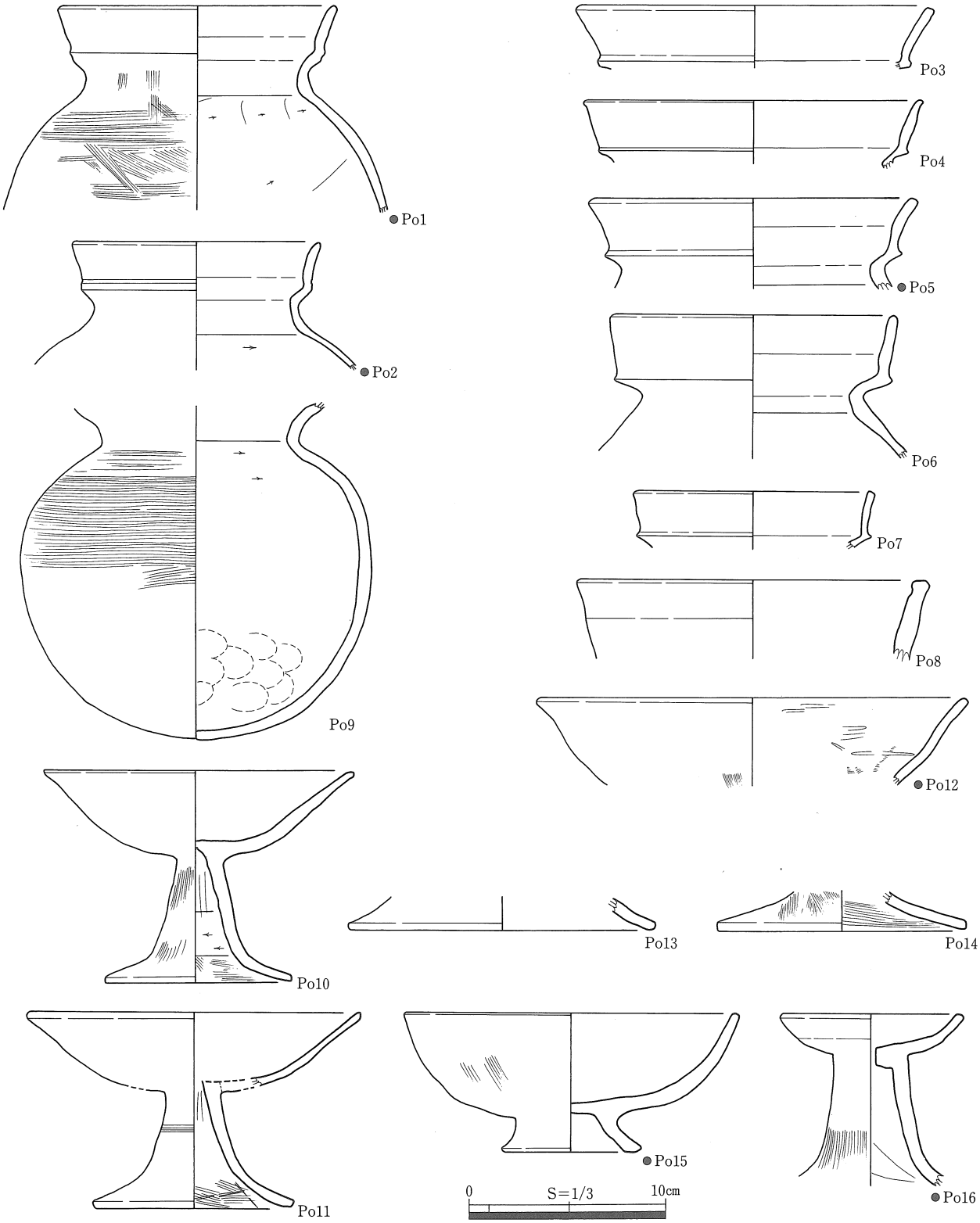
なお、ＣＳＩ07-1の床面上では、周壁から約50cm内側と約80cm内側に、壁溝と考えられる溝が検出されている。これらは、07-1に建て替えられる以前のものと考えられ、外側のもの

を07-2、内側のものを07-3として考えた。

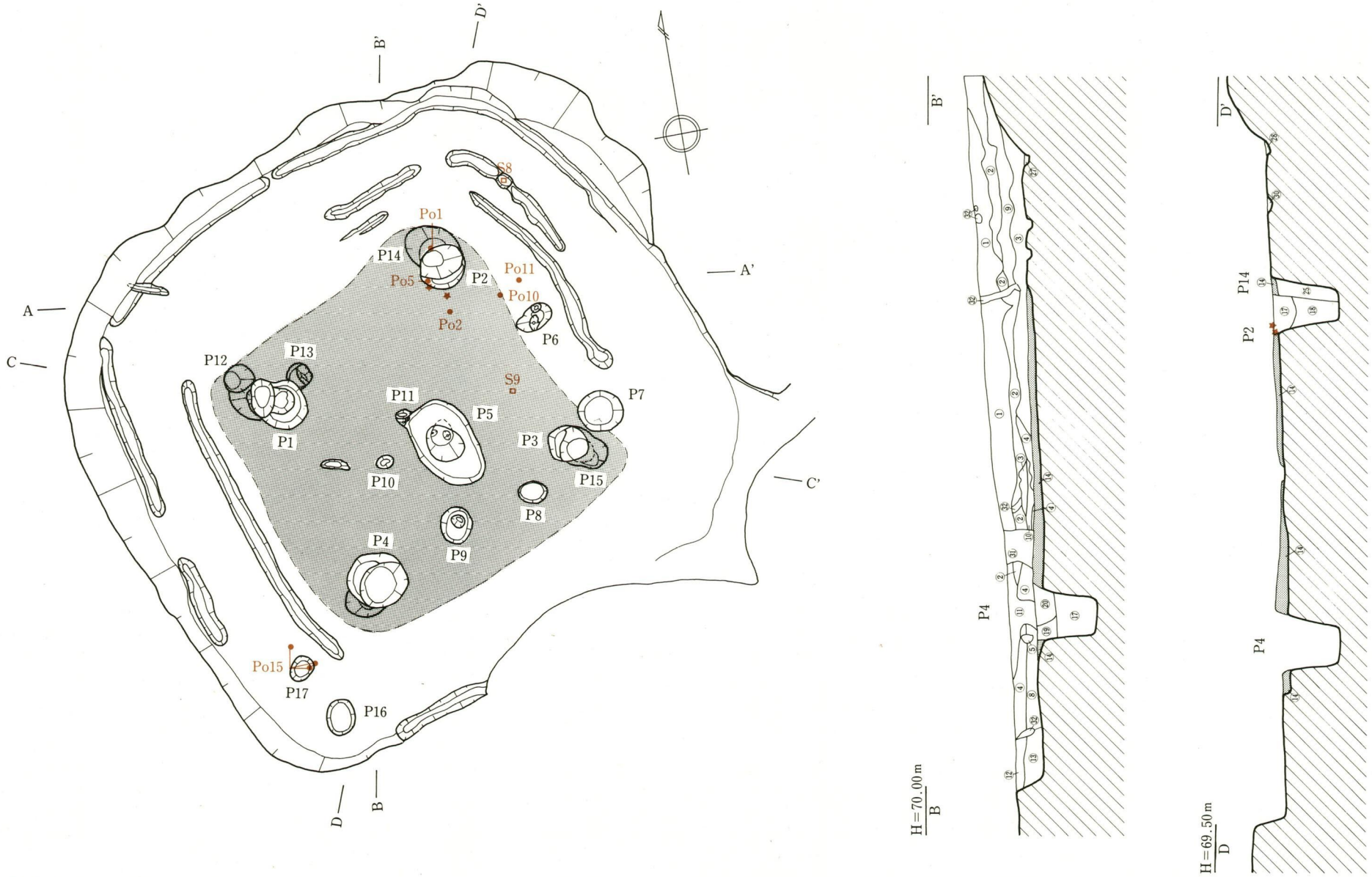
CSI07-2　ＣＳＩ07-2は、平面形は遺存している壁溝の状態から、隅丸方形と考えられる。規模は、東西約4.2ｍを測る。

壁溝は部分的にとぎれ、幅12～16cm、深さ３～９cmを測り、断面「U」字状を呈す。

主柱穴はＰ１内の浅いピット、Ｐ14、Ｐ15、Ｐ４と考えられ、いずれのピットも07-1より



挿図23　南谷大山遺跡CSI07出土遺物実測図(1)



①暗黒褐色土
②暗黒黄褐色土（DKP粒を含む）
③暗灰黄褐色土（DKP粒、炭化物を少量含む）
④淡黄灰褐色土（DKP、炭化物を少量含む）
⑤暗黒黄褐色土
⑥明黄茶褐色土（DKPを多量に含む）
⑦淡灰茶黄褐色土（DKP、炭化物を少量含む）
⑧淡茶黄褐色土（DKPを含む）
⑨暗黄灰褐色土（DKPを含む）
⑩暗灰黄褐色土（炭化物、DKPを含む）
⑪暗灰褐色土
⑫淡黄茶褐色土
⑬淡茶褐色土
⑭暗黄灰褐色土（貼床）
⑮淡灰茶褐色土（DKPを含む）
⑯淡茶灰褐色土
⑰暗灰茶褐色土（炭化物を含む）
⑱暗茶灰褐色土（炭化物を含む）
⑲淡茶黄褐色土（DKP、炭化物を含む）
⑳暗灰茶褐色土（炭化物、DKPを含む）
㉑暗灰褐色土（炭化物を含む）
㉒淡灰茶褐色土（炭化物を含む）
㉓暗黄灰褐色土（DKPを含む）
㉔明黄褐色土（DKPを多く含む）
㉕淡黄灰褐色土
㉖明黄茶褐色土（DKPを多く含む）
㉗淡灰茶褐色土（粘質性が強い）
㉘淡黄灰茶褐色土
㉙暗灰黄茶褐色土（粘質性が強い）
㉚淡黄茶褐色土
㉛攪乱
㉜木の根による攪乱

0　S=1/60　2m

挿図24　南谷大山遺跡CSI07遺構図

は若干浅い。主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ14間から順に2.3ｍ、2.7ｍ、2.7ｍ、2.3ｍを測る。

CSI07-3　ＣＳＩ07-3は、最も内側に作られたもので、遺存する壁溝から存在が推定される。壁溝は、幅11～18cm、深さ２～４cmを測り、断面「U」字状を呈す。

主柱穴等は不明である。

遺　物　図化できたものには、壺Po１・Po２、甕Po３～Po９、高杯Po10～Po14、低脚杯Po15、小

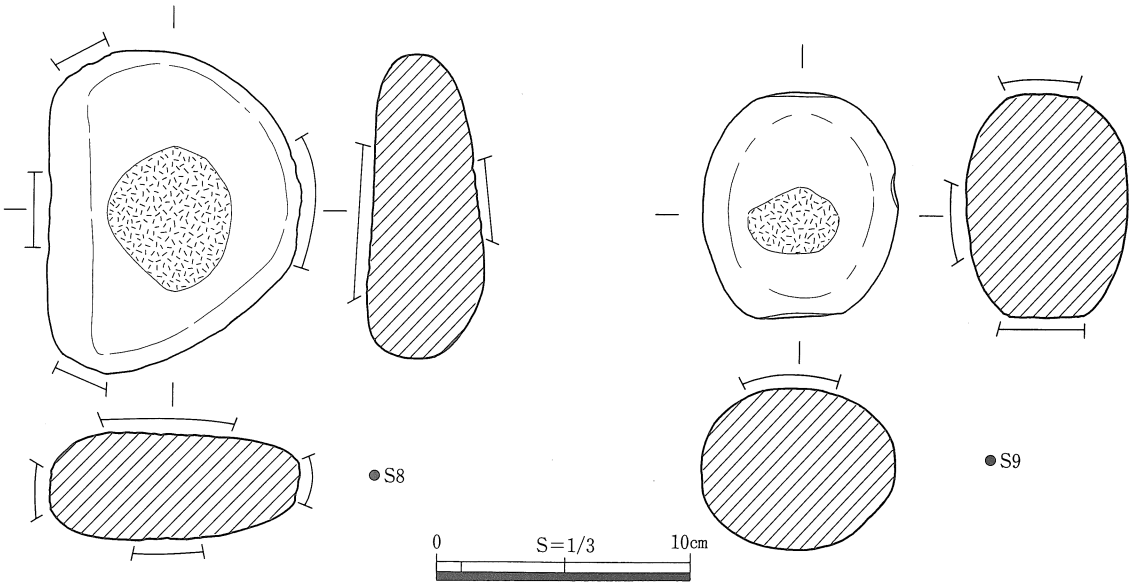
出土状況　型高杯形器台Po16、敲石Ｓ８・Ｓ９がある。

このうち床面からは、北東側でPo１・Po２・Po５・Ｓ８・Ｓ９が、南西側コーナー付近でPo15が、中央ピット内でPo16が、Ｐ３内でPo12が、それぞれ出土している。

これら以外は埋土中からの出土であるが、Po９・Po10・Po11は暗黒褐色土中でまとまって出土している。

また、土器・石器以外に床面およびＰ２中でモモ核が２個検出されている。また、北西コーナーで軽石が検出されている。

時　期　床面出土遺物から、ＣＳＩ07は大山Ⅵ期、古墳時代前期後半頃のものと考えられる。



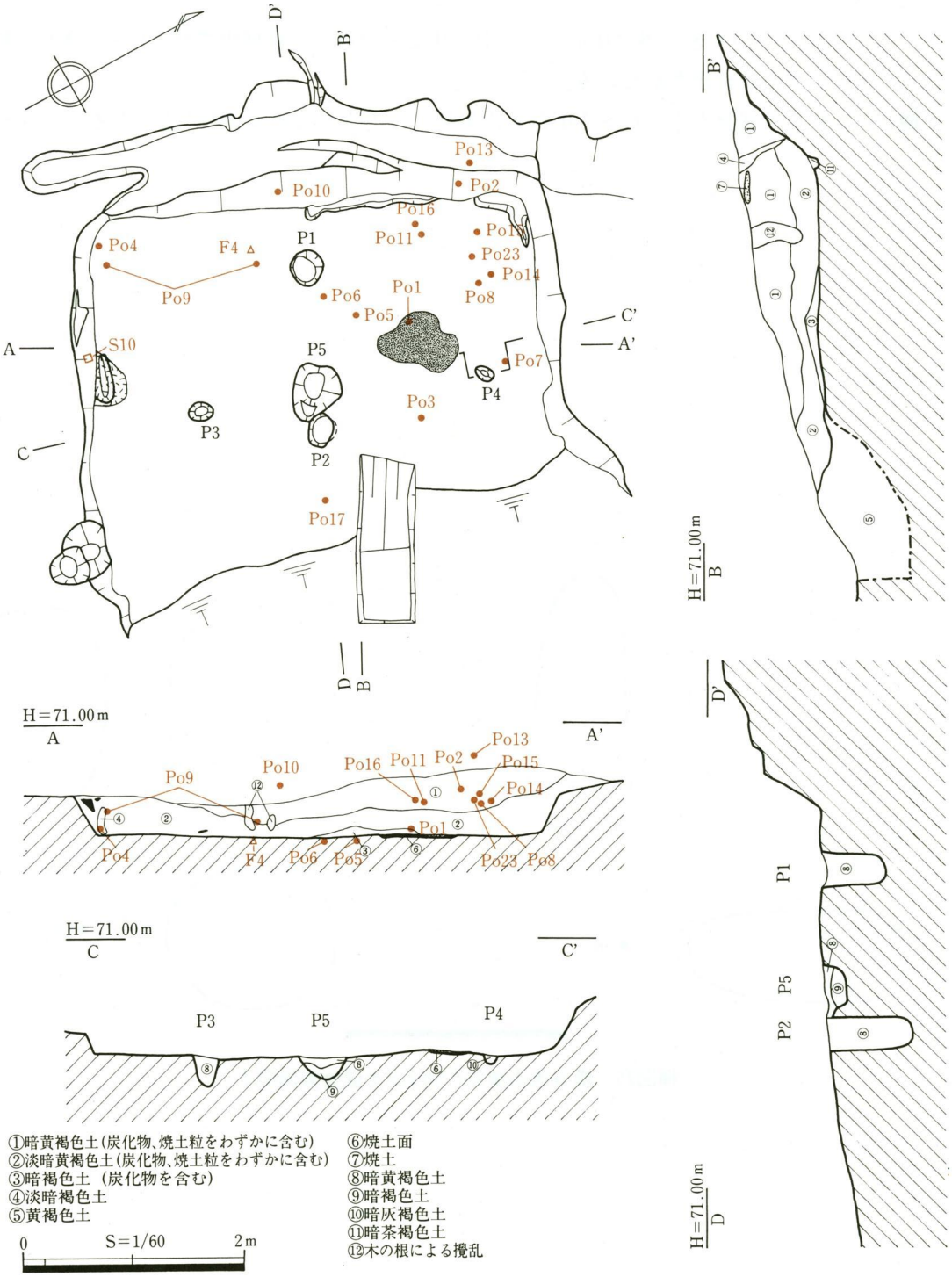
挿図25　南谷大山遺跡CSI07出土遺物実測図(2)

ＣＳＩ11（挿図26～28、図版６・34・35）

位　　置　調査区の東側尾根上のＰ27・28、Ｑ27・28グリッドにあり、標高69.7～70.8ｍの緩やかに傾斜する東斜面に位置する。このため、東壁は流失している。南側約７ｍにはＣＳＩ14、北側約10ｍにはＣＳＩ12がある。

形　　態　東側が流失しているため正確な規模は不明であるが、遺存している壁の状態から、平面は方形または長方形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西3.4ｍ以上、南北4.11ｍを測り、床面積は14㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.63ｍを測る。

壁溝は、西壁際で部分的に検出された。



挿図26　南谷大山遺跡CSI11遺構図

主柱穴と考えられるものはＰ１・Ｐ２で、それぞれの規模はＰ１（32×32－58）cm、Ｐ２（31×21－79）cmを測る。主柱穴間距離は約1.4ｍを測る。

また、床面上には、Ｐ３・Ｐ４のピットが検出された。それぞれの規模は、Ｐ３（23×17－28）cm、Ｐ４（17×12－10）cmを測る。Ｐ３・Ｐ４は中央ピットをはさんで等間隔にあり、何らかの構造柱と考えられる。

中央ピット　中央ピットはＰ５で、(26×22－24)cmを測る。埋土は２層に分層できた。そのうち、⑨層中には炭化物が含まれている。

焼土面　Ｐ４付近で、36×25cmに不整形に広がる焼土面が１カ所検出された。

埋土　埋土は５層に分層できた。このうち①・②層中からは炭化物・焼土粒が含まれており、さらに、床面直上では炭化物を含む③層が部分的に検出された。また、①層中には、焼け落ちの焼土と考えられる⑦層がブロック状に入り込んでいた。

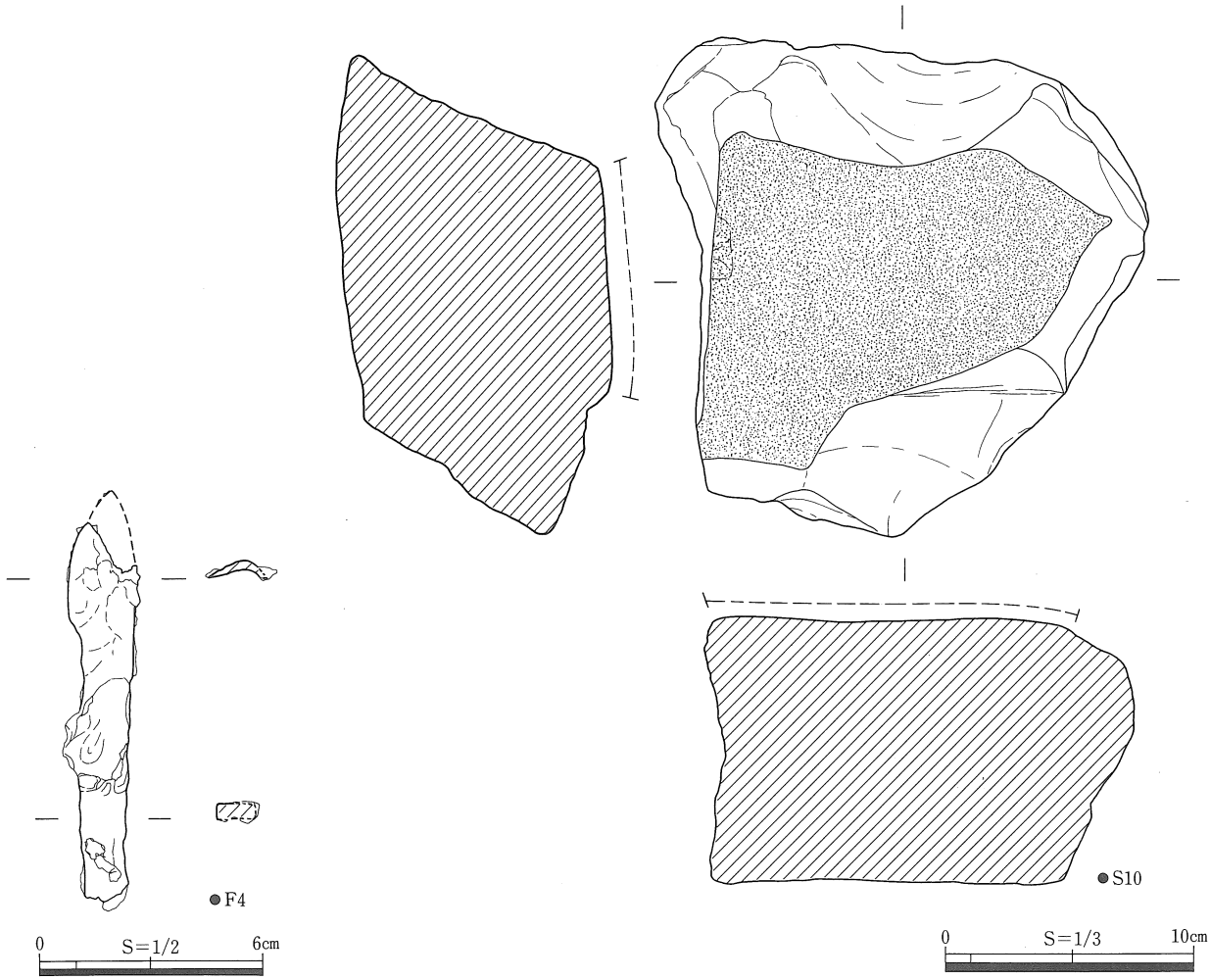
これらのことから、ＣＳＩ11は焼失した可能性がある。

貼床は見られない。

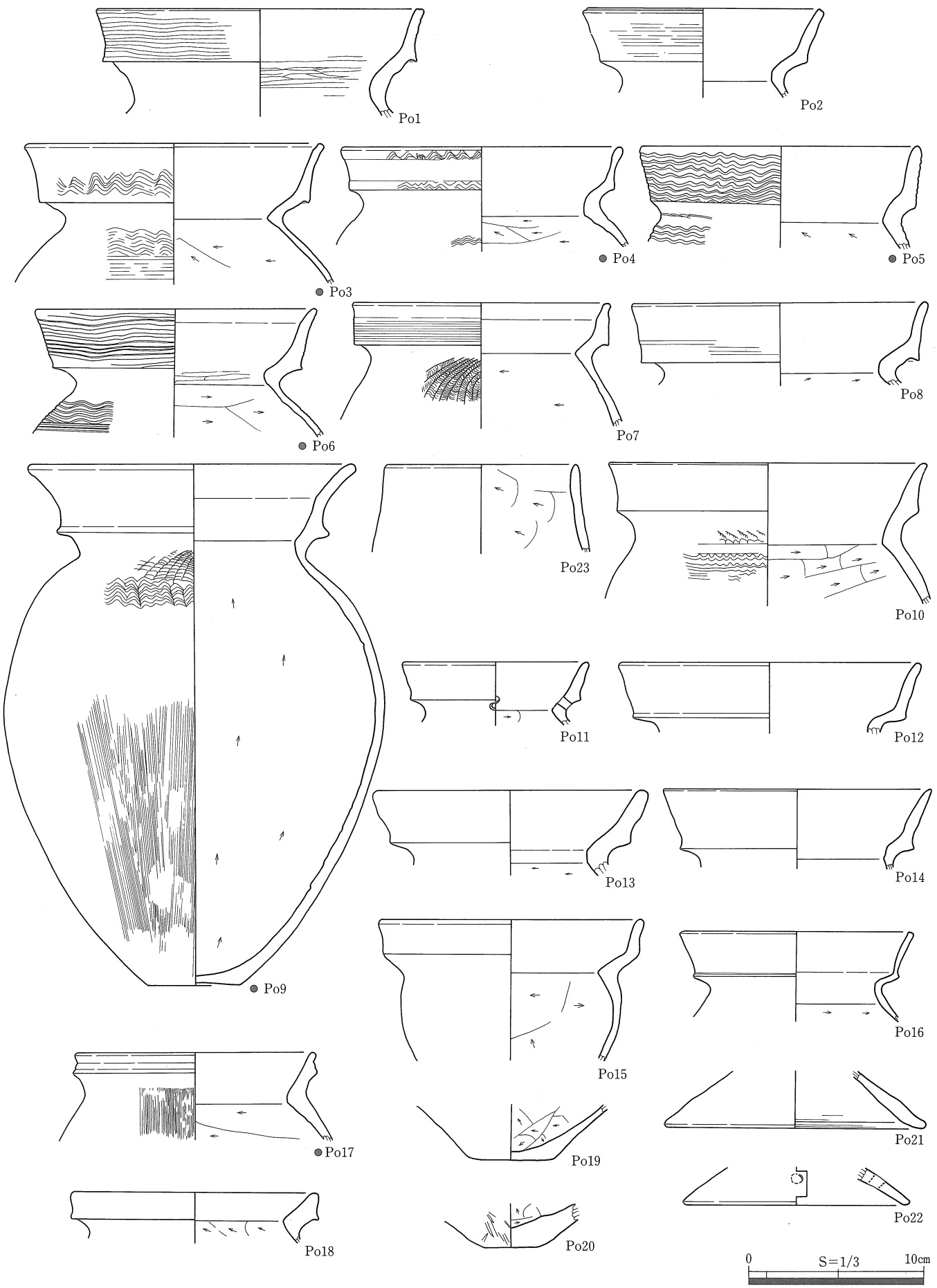
遺物出土状況　図化できたものには、壺Po１・Po２、甕Po３～Po18、底部Po19・Po20、蓋Po21、脚Po22、無頸壺Po23、砥石Ｓ10、鉈Ｆ４がある。

このうち床面からは、南西コーナーでPo4・Po9が、西側壁際でF4が、Ｐ１付近でPo5・Po6が、南側壁際でS10が、東側でPo３・Po17がそれぞれ出土している。その他は埋土中からの出土である。

時期　床面出土遺物から、ＣＳＩ11は大山Ⅲ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図27　南谷大山遺跡CSI11出土遺物実測図(1)



挿図28　南谷大山遺跡CSI11出土遺物実測図(2)

ＣＳＩ12・15（挿図29～31、図版６・７・35・36）

位　置　調査区の東側、Ｐ27・Ｑ27グリッドにあり、標高69.7～70.8ｍのかなり傾斜する斜面に位置する。このため、東側は流失している。南側約10ｍにはＣＳＩ14がある。

形　態
ＣＳＩ12　ＣＳＩ12は、東側が流失しているため正確な規模は不明であるが、遺存している壁の状態から、平面は方形または長方形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西3.7ｍ以上、南北4.9ｍを測り、床面積は18㎡以上、東側を復元すると20㎡程度である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大1.30ｍを測る。

壁溝は、壁際を全周するものと考えられ、幅９～28㎝、深さ３～14㎝を測り、断面逆台形状を呈す。西側壁溝の中央には、住居中心に向かって長さ0.7ｍ、幅10㎝、深さ４㎝を測る溝が接続している。

主柱穴はＰ１～Ｐ４と考えられる。それぞれの規模はＰ１（53×42－63）㎝、Ｐ２（57×40－86）㎝、Ｐ３（76×48－70）㎝、Ｐ４（45×45－74）㎝を測り、主柱穴間距離はＰ１～Ｐ２間から順に、2.7ｍ、2.8ｍ、2.9ｍ、2.2ｍである。

中央ピット　中央ピットはＰ８で、(52×45－60)㎝を測る。埋土は３層に分層できたが、⑪層中には炭化物が含まれていた。

焼土面　床面上には、Ｐ１～Ｐ２間、Ｐ１～Ｐ４間に、合わせて２カ所の焼土面が検出された。

炭化材　また、床面西側から北側コーナー付近で、炭化材がわずかではあるが出土している。これらは非常に遺存状態が悪かったが、樹種鑑定の結果スダジイと判明した。

ＣＳＩ15　ＣＳＩ15は、ＣＳＩ12の床面より約50㎝高い位置に作られているが、ＣＳＩ12によって大きく削り取られており、正確な規模は不明である。遺存している壁の状態から判断すると、平面は方形または長方形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西2.8ｍ以上、南北６ｍを測り、床面積は15㎡以上で、東側を復元すると36㎡程度となり、ＣＳＩ12より一回り大きい。残存壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.67ｍを測る。

壁溝は、北側でとぎれており、幅13～20㎝、深さ４㎝を測り、断面逆台形状を呈する。

主柱穴は、ＣＳＩ12の床面上で検出されたＰ５～Ｐ７と考えられるが、もうひとつは流失してしまったものと考えられる。それぞれの規模は、Ｐ５（35×27－34）㎝、Ｐ６（55×40－64）㎝、Ｐ７（60×45－35）㎝を測る。主柱穴間距離はＰ５～Ｐ６間、Ｐ７～Ｐ５間がそれぞれ3.4ｍ、3.2ｍである。

中央ピットはＰ９で、(80×59－53)㎝を測る。埋土下層の⑭層中で炭化物片が多数検出され、樹種鑑定の結果ツバキ・ツブラジイと、複数の樹種が含まれていた。

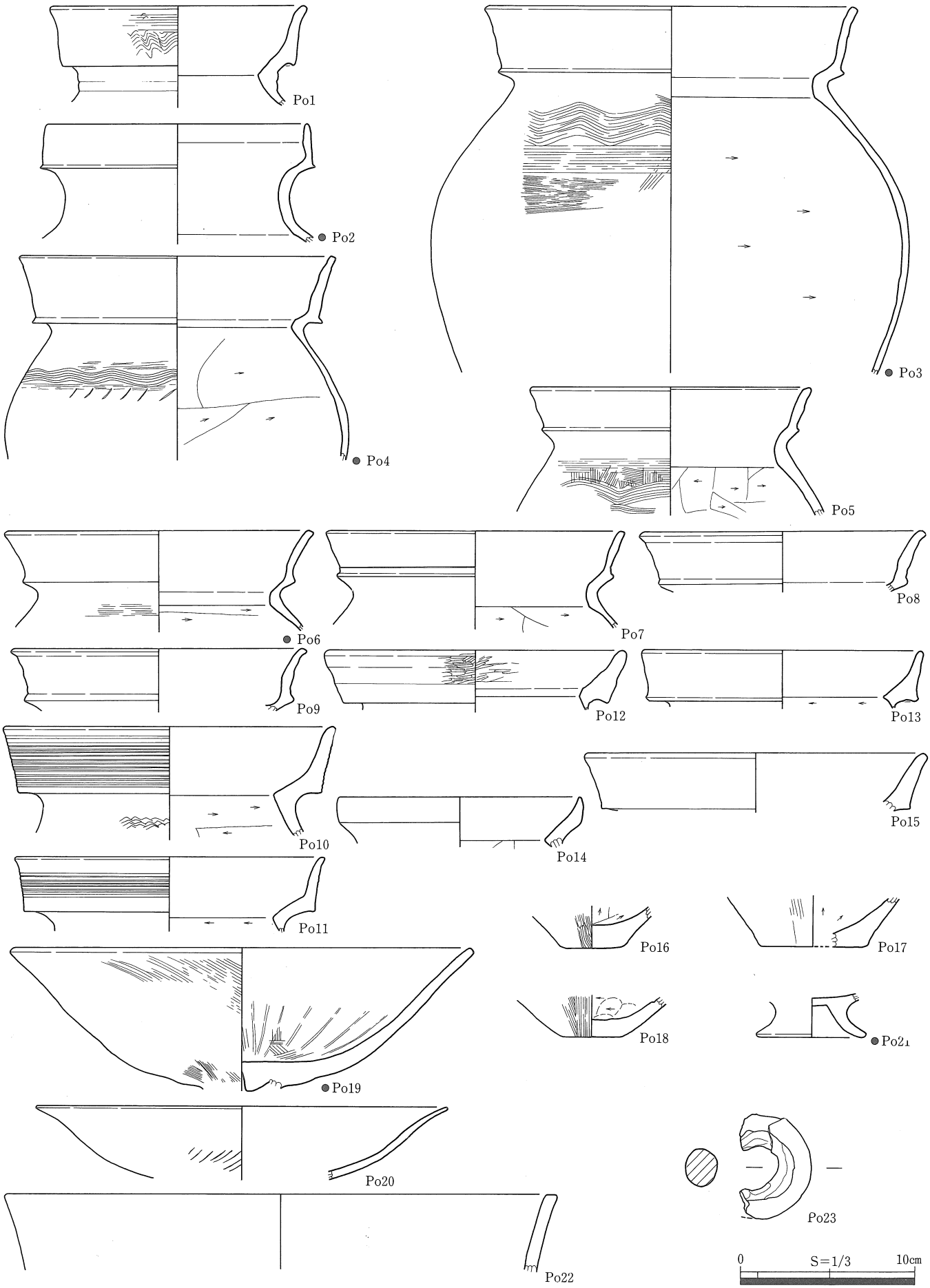
埋　土　埋土は、ＣＳＩ12は７層に、ＣＳＩ15は１層に分層できた。このうち、ＣＳＩ12の埋土の状況を見ると、中心に向かって堆積しており、自然堆積の状況が窺える。しかし、⑤層中には炭化物を含んでおり、また、⑥層は焼け落ちの際の灰層と考えられ、床面からも炭化材が検出されていることから、ＣＳＩ12は焼失したものと考えられる。

また、ＣＳＩ15の埋土である⑧層は、均質で締まっており、意図的に埋められた可能性がある。

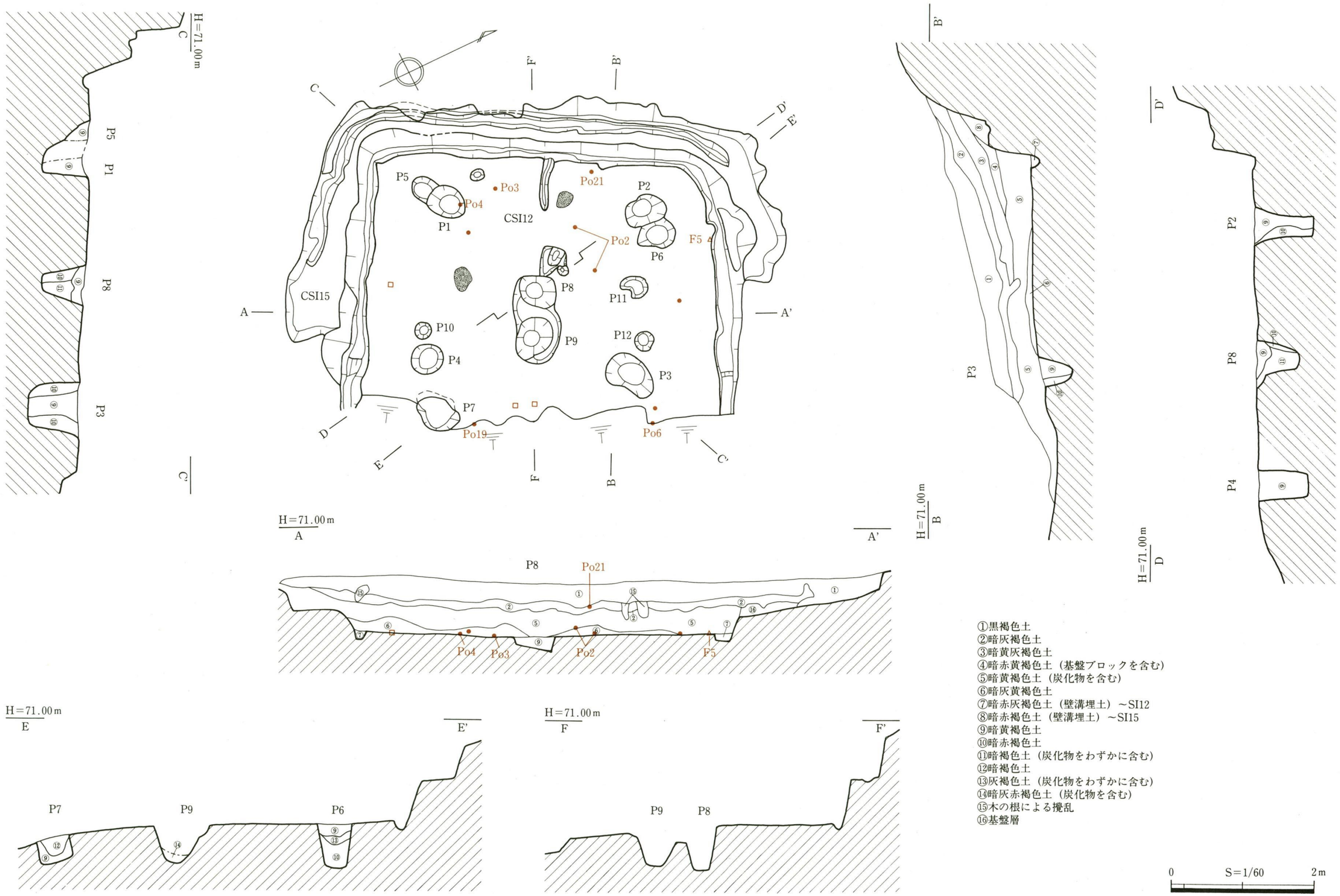
遺　物
出土状況　図化できたものには、壺Po１・Po２、甕Po３～Po15、底部Po16～Po18、高杯Po19・Po20、低脚杯Po21、甑形土器Po22・Po23、不明鉄器Ｆ５がある。

このうち床面からは、西側壁寄りでPo３・Po21が、Ｐ１上でPo４が、北側壁際でＦ５が、Ｐ２と中央ピットの間でPo２が、東側でPo６・Po19がそれぞれ出土している。

その他は埋土中からの出土である。このうち、Po１・Po10・Po12～Po15・Po16～Po18は弥



挿図29　南谷大山遺跡CSI12・15出土遺物実測図(1)

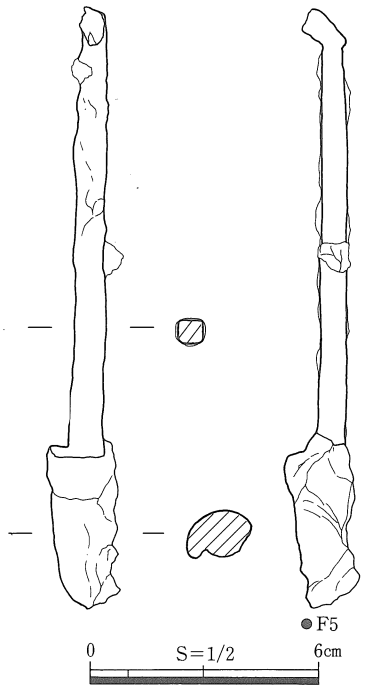


挿図30　南谷大山遺跡CSI12・15遺構図

生土器であり、切り合い関係からＣＳＩ12に先行するＣＳＩ15の土器が混入した可能性がある。

時　　期　床面出土遺物から、ＣＳＩ12は大山Ⅴ期、古墳時代前期前半頃のものと考えられる。

ＣＳＩ15からは遺物は検出されなかったが、ＣＳＩ12の埋土中から弥生土器が検出されており、大山Ⅲ期の可能性がある。



挿図31　南谷大山遺跡CSI12出土遺物実測図(2)

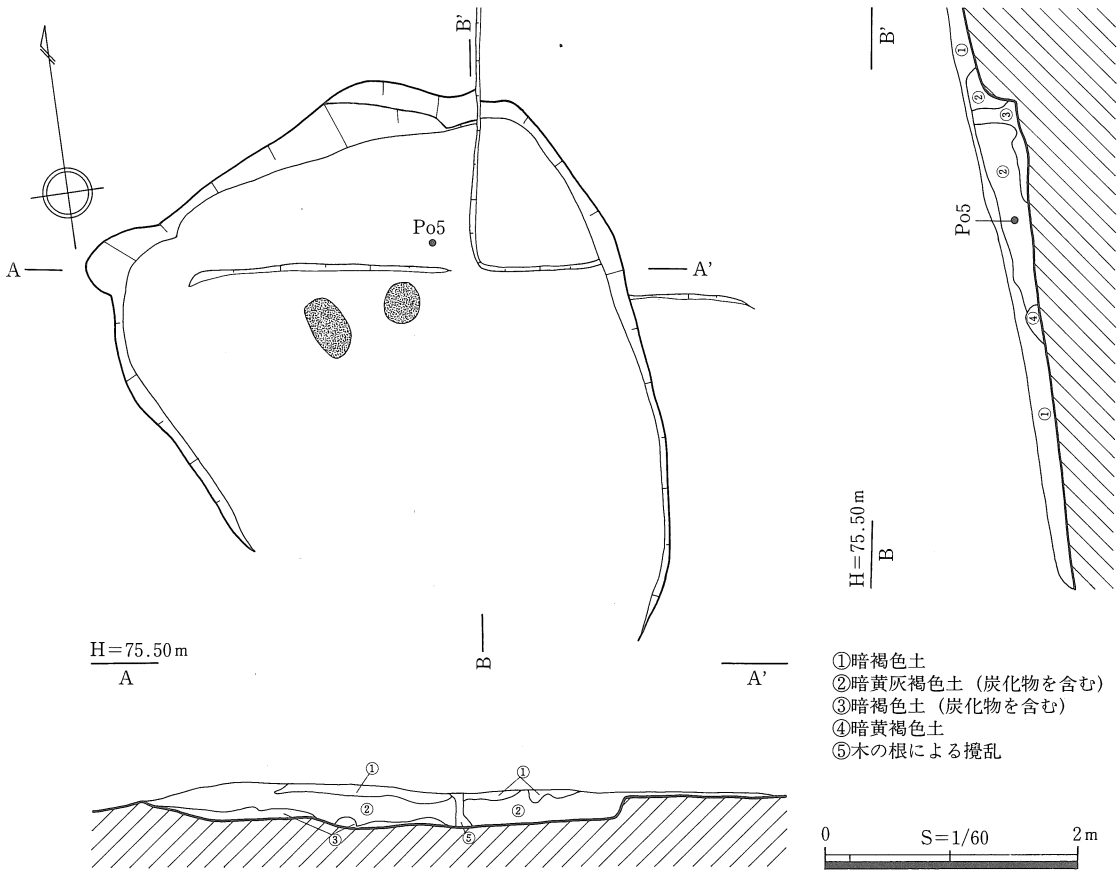
ＣＳＩ13（挿図32・33、図版７・36）

位　　置　調査区の東側尾根上のＰ27グリッドにあり、標高74.2～74.9ｍの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。南側は流失している。南西側約３ｍにはＣＳＩ04、東側約８ｍにはＣＳＩ12・15がある。

形　　態　遺存状態は悪く、南側が流失しているため正確な規模は不明であるが、遺存している壁の状態から、平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西3.7ｍ、南北2.7ｍ以上を測り、床面積は10㎡以上、南側を推定すると約13㎡と考えられる。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.62ｍを測る。

壁溝・主柱穴・中央ピットは確認されなかった。

焼 土 面　住居のほぼ中央部において、楕円に広がる焼土面を２カ所検出した。



挿図32　南谷大山遺跡CSI13遺構図

炭化材　床面上から、構造材と考えられる炭化材が出土している。樹種鑑定の結果シラカシと判明した。

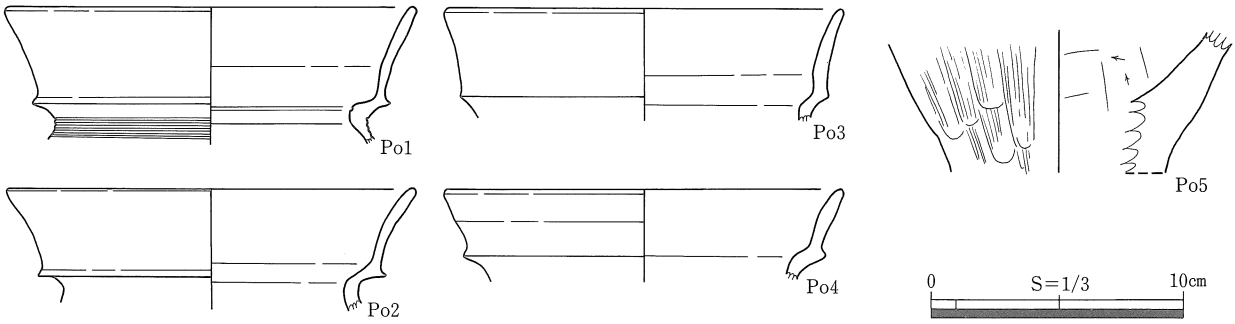
埋　土　埋土は３層に分層できたが、②・③層中には炭化物が含まれている。床面から炭化材が出土していることと考え合わせると、ＣＳＩ13は焼失した可能性がある。

貼床は見られない。

遺　物　図化できた遺物には、甕Po１～Po４、鉢Po５がある。

出土状況　いずれも埋土中からの出土である。

時　期　出土遺物から、ＣＳＩ13は大山Ⅳ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図33　南谷大山遺跡CSI13出土遺物実測図

ＣＳＩ14（挿図34～38、図版７・８・36・37）

位　置　ＣＳＩ14は、Ｃ－Ｉ区のやや南側のＰ29・30グリッドにあり、標高70.1ｍの平坦面に位置する。北側約８ｍにはＣＳＩ11がある。

形　態　遺存状態は比較的良く、平面は長方形を呈すものである。規模は、東西2.23ｍ、南北2.68ｍを測り、床面積は5.6㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.19ｍを測る。付近は、ＣＳＳ04の平坦面があり、これにともない削平を受けたものと考えられる。

主柱穴はＰ１・Ｐ２の２個で、それぞれの規模はＰ１（41×38－16）㎝、Ｐ２（43×38－35）㎝を測り、主柱穴間距離は1.9ｍで、簡単な上屋構造であったものと考えられる。

壁溝・中央ピットは、認められなかった。

焼土面　Ｐ２に接して、楕円形に広がる焼土面が検出された。

埋　土　埋土は２層に分層でき、①層中には炭化物が含まれていた。②層は、上屋構造が焼け落ちた際の炭・灰層と考えられ、床面の中央部に集中してみられた。

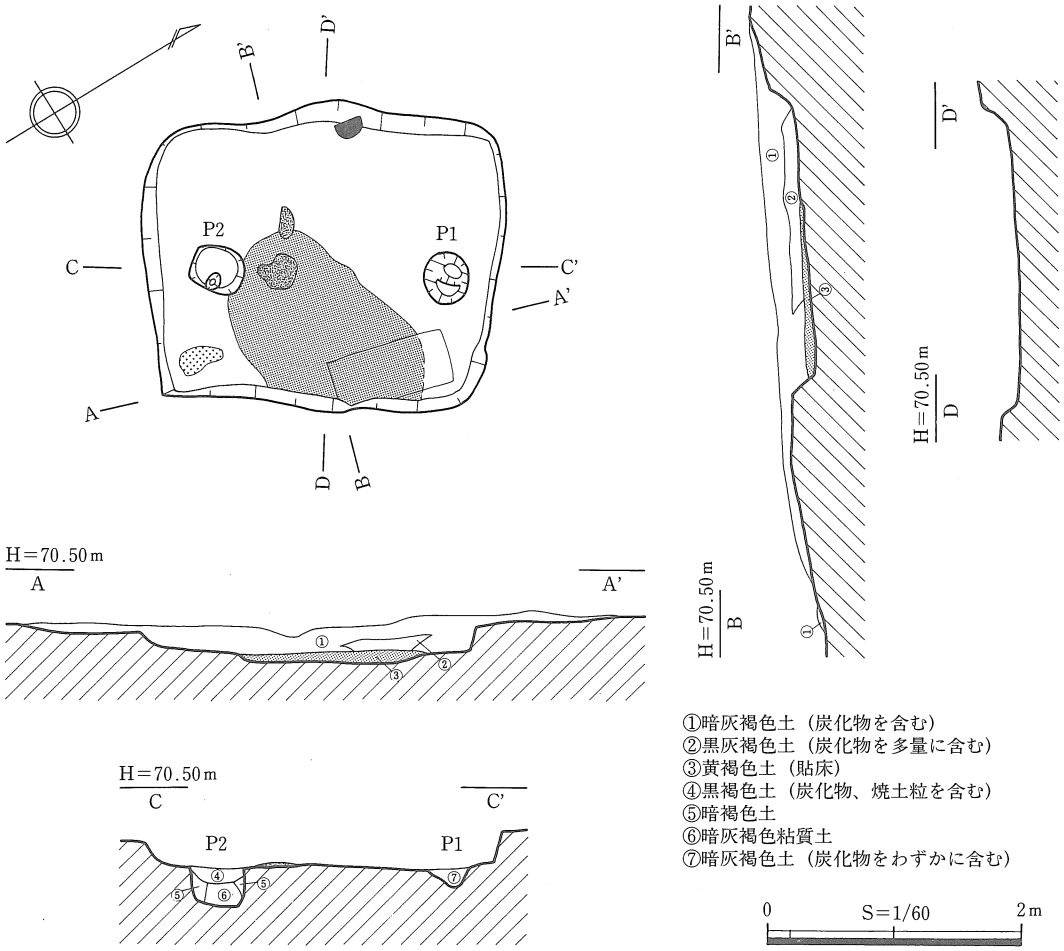
このことより、ＣＳＩ14は焼失したものと考えられる。

また、西側壁寄りで赤色顔料と思われるもの、南東コーナー付近で灰色粘土の塊が検出されている。

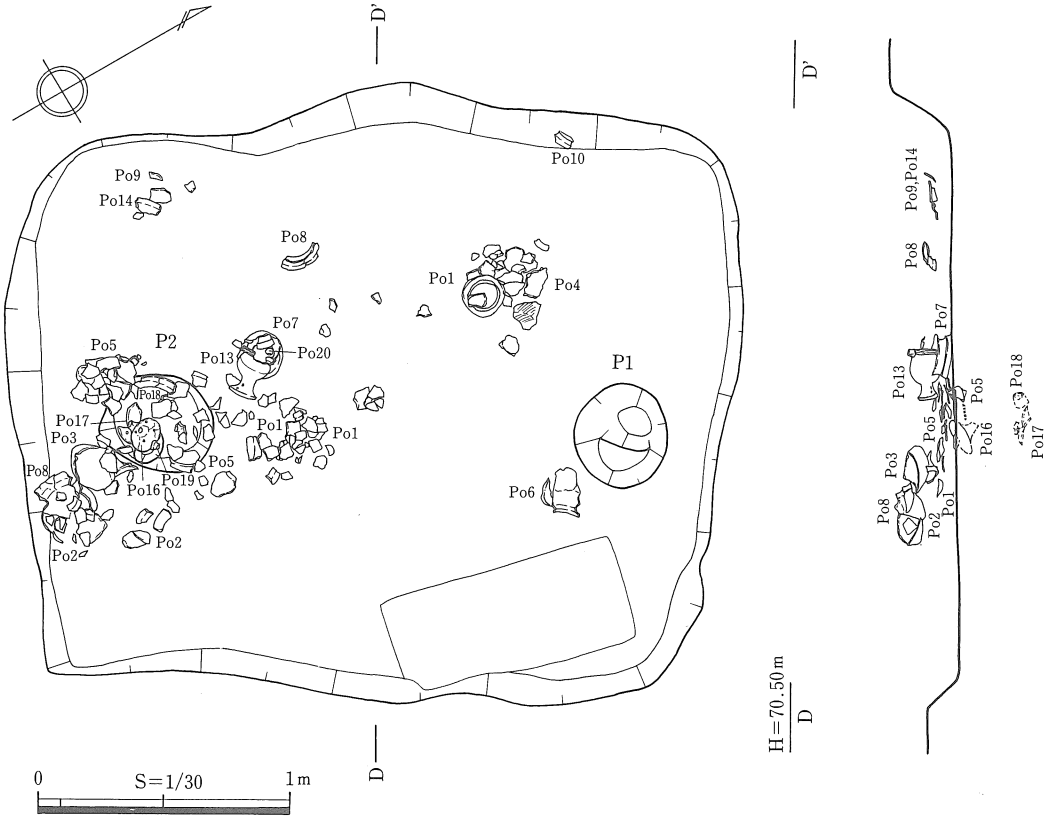
貼　床　貼床は③層で、床面の中央よりやや東側にのみ認められた。

遺　物　図化できたものには、甕Po１～Po11、底部Po12、脚付甕Po13、高杯Po14～Po18、手捏ね土器Po19、土玉Po20がある。

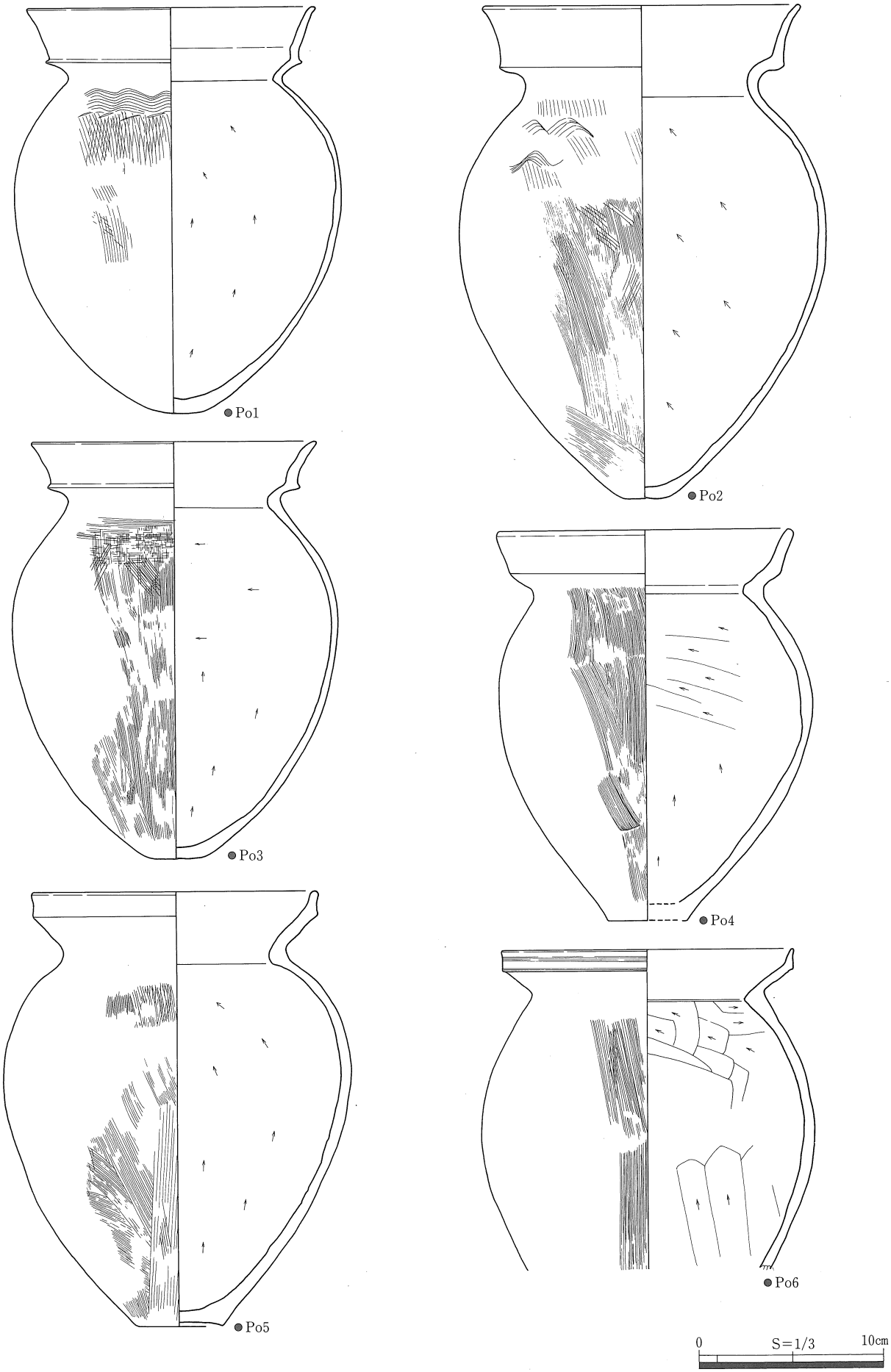
出土状況　このうち床面からは、Po１～Po３・Po５・Po７～Po９・Po12～Po14・Po16・Po19・Po20が南側に集中しており、炭・灰層下で出土している。また、Ｐ２内ではPo17・Po18が、Ｐ１付近でPo６がそれぞれ出土している。このうち、Po１はやや広い範囲に散乱している。Po10は、Ｐ２内のものと西側壁際のものが接合している。



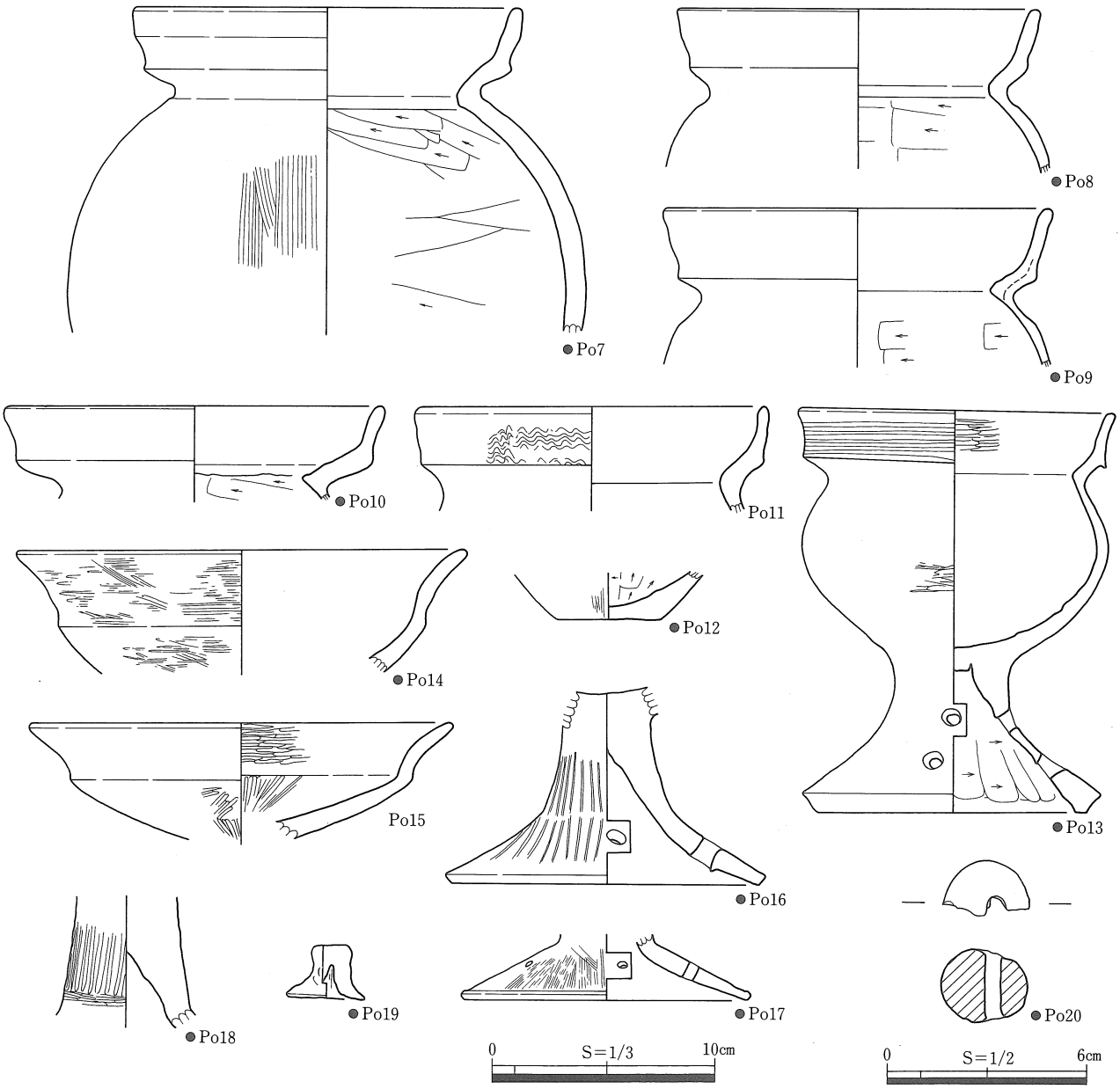
挿図34　南谷大山遺跡CSI14遺構図



挿図35　南谷大山遺跡CSI14土器検出状況図



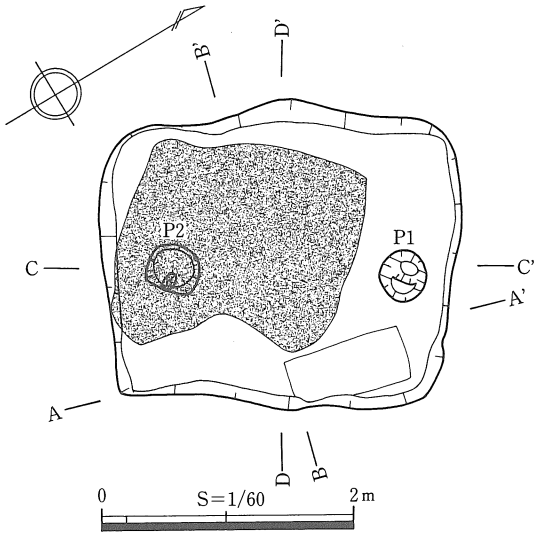
挿図36　南谷大山遺跡CSI14出土遺物実測図(1)



挿図37　南谷大山遺跡CSI14出土遺物実測図(2)

その他は埋土下層からの出土である。

時　　期　床面出土遺物のうち、Po13は脚部のつくりにやや古い様相が見られるが、その他のものについては良好な一括資料として捉えられる。ＣＳＩ14は、これらの土器から大山Ⅲ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図38　南谷大山遺跡CSI14炭化物出土状況図

ＣＳＩ16（挿図39・40、図版８・９・37・38）

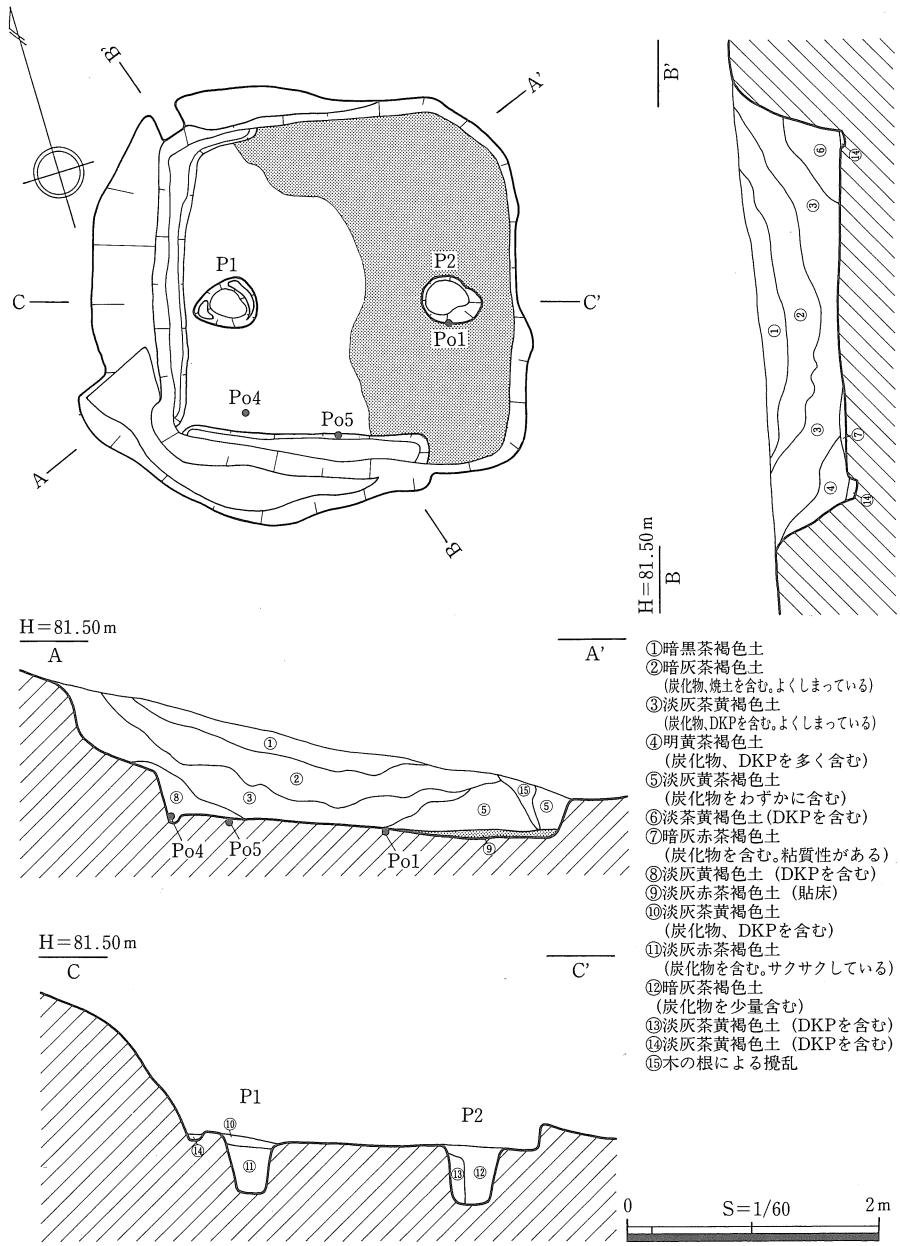
位　置　Ｃ－Ｉ区の北側のＯ23グリッドにあり、標高80.2～81.2ｍの東側に傾斜する斜面に位置する。西側約２ｍにはＣＳＤ09、北西側約10ｍにはＣＳＩ01がある。

形　態　遺存状態はよく、平面は隅丸方形を呈す。規模は、東西2.65ｍ、南北2.50ｍを測り、床面積は6.6㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.91ｍを測る。

壁溝は、北側および東側で検出されなかった。規模は、幅10～20㎝、深さ１～７㎝を測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴はＰ１・Ｐ２の２個で、それぞれの規模は、Ｐ１（52×36－48）㎝、Ｐ２（46×38－45）㎝を測る。主柱穴間距離は、1.8ｍである。

中央ピットはない。



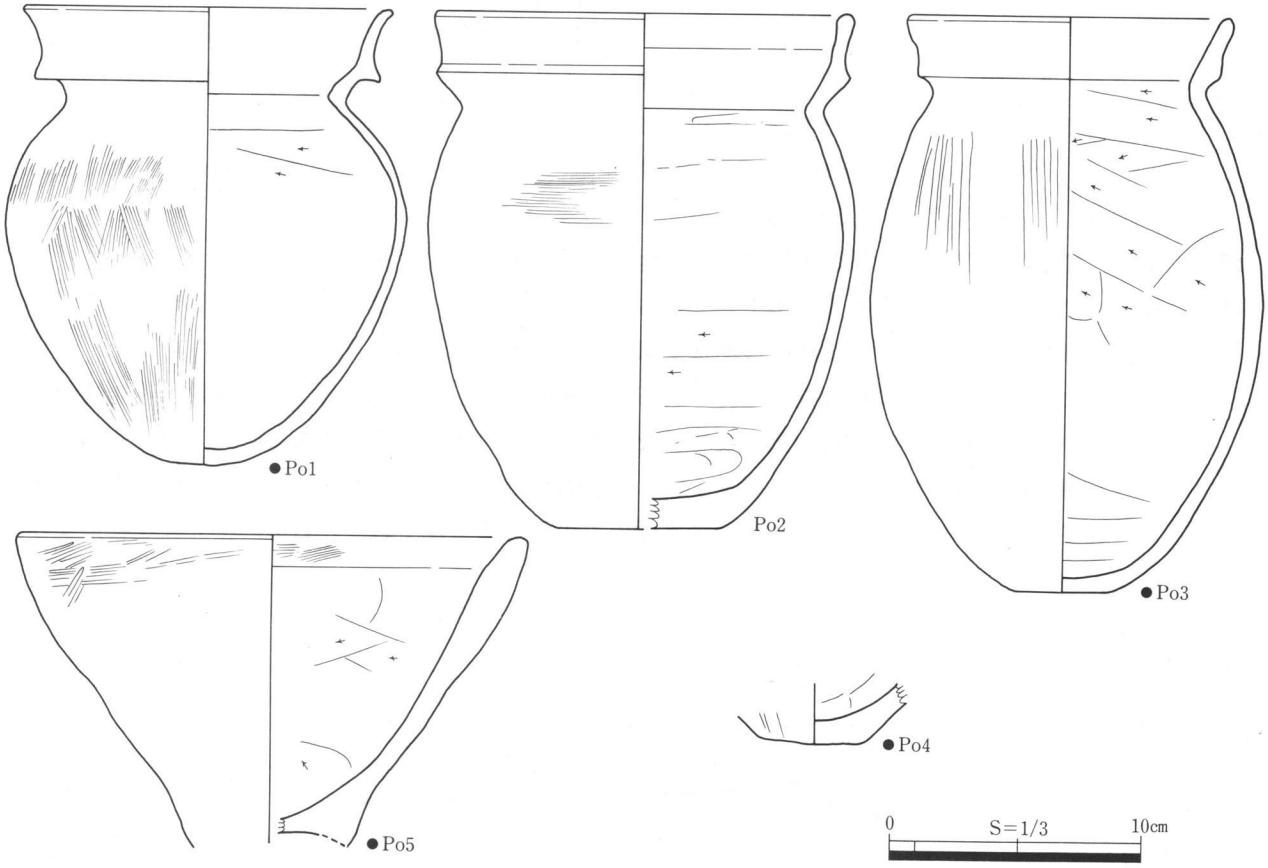
挿図39　南谷大山遺跡CSI16遺構図

埋　　土　埋土は８層に分層できた。いずれの層も住居の中心部に向かって堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

貼　　床　床面には、東側半分に粘質土を含む⑨層による貼床が施されている。

遺　　物　図化できたものには、甕Po１～Po３、底部Po４、鉢Po５がある。

出土状況　このうち床面からは、南側壁際でPo４・Po５が、東側壁寄りでPo１が出土している。



挿図40　南谷大山遺跡CSI16出土遺物実測図

また、Po３も床面上から出土している。

Po２は埋土下層からの出土である。

時　　期　床面出土遺物から、ＣＳＩ16は大山Ⅲ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

写真６　Ｃ－Ⅰ区調査風景

写真７　現地説明会風景

2．掘立柱建物跡

ＣＳＢ02（挿図41、図版９）

位　　置　Ｃ－Ｉ区の南側のＯ30・Ｐ30グリッドにあり、標高70.1ｍの平坦面に位置する。付近には、ＣＳＫ08・09が接し、東側１ｍにはＣＳＫ13がある。

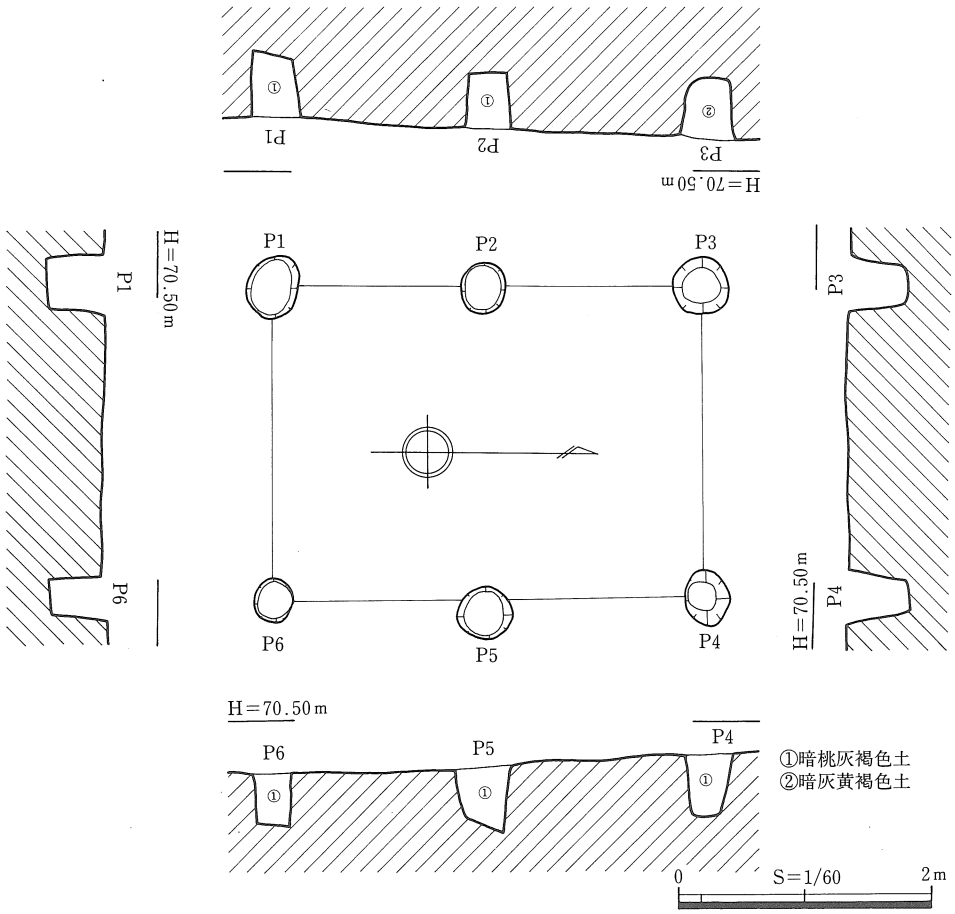
形　　態　桁行２間・3.5ｍ、梁行１間・2.5ｍを測る掘立柱建物跡である。主軸方向は、Ｎ－０°－Ｅと、北を向く。柱穴はＰ１～Ｐ６の６個で、それぞれの規模は、Ｐ１（50×40－47）㎝、Ｐ２（40×35－45）㎝、Ｐ３（45×45－51）㎝、Ｐ４（45×37－52）㎝、Ｐ５（46×40－49）㎝、Ｐ６（35×32－47）㎝である。柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に1.7ｍ、1.8ｍ、2.5ｍ、1.8ｍ、1.7ｍ、2.5ｍである。

埋　　土　埋土は、Ｐ３が②層が単層で、その他は①層が単層で入り込んでいる。

時　　期　Ｐ４内から弥生土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。しかし、土器の特徴から大山Ⅲ期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

また、Ｐ４付近に貯蔵穴と考えられるＣＳＫ09がある。ＣＳＢ02内の貯蔵穴の可能性があるが、ＣＳＫ09から遺物が出土していないため、その関係は不明である。

掘立柱建物跡は、Ｃ区ではＣ－Ｉ区のＣＳＢ02と、Ｃ－Ⅱ区のＣＳＢ01の２棟のみ検出されている。いずれも弥生時代後期後半頃のものと考えられており、Ｂ区の掘立柱建物跡より古い。



挿図41　南谷大山遺跡CSB02遺構図

3．土坑・土壙

ＣＳＫ01（挿図42・43、図版９・38）

位　置　Ｃ－Ｉ区の北側のM23・N23グリッド、ＣＳＩ01の北西側コーナーに、袋状に掘り込まれている。

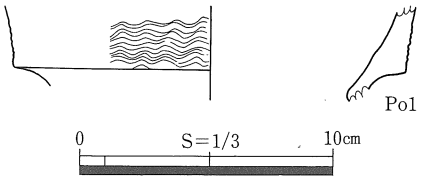
形　態　平面は、上縁不整形、底部不整な長楕円形を呈し、底部長径1.80ｍ×短径1.13ｍを測る。深さは0.86ｍを測り、断面は袋状を呈す。

埋　土　埋土は、４層に分層できた。①・②層には炭化物が含まれ、③層には基盤であるＤＫＰ層を含んでおり、壁が崩れながら堆積したものと考えられる。

遺　物　埋土中から、わずかに甕Po１が出土している。

時　期　出土遺物から、ＣＳＫ01は大山Ⅱ～Ⅲ期・弥生時代後期後半頃のものと考えられるが、ＣＳＫ01の埋土は、ＣＳＩ01の埋土と異なる②層が入り込んでおり、ＣＳＩ01が廃絶された以降も使用された可能性がある。

用　途　形態上の特徴から、ＣＳＫ01は、ＣＳＩ01内に掘り込まれた屋内貯蔵穴と考えられる。



挿図43　南谷大山遺跡CSK01出土遺物実測図

ＣＳＫ03（挿図44、図版10）

位　置　Ｃ－Ｉ区の最も南側のＰ32グリッドにあり、標高67.5～68.3ｍの平坦面に位置する。南側約１ｍにはＣＳＩ03、北側約２ｍにはＣＳＩ05がある。

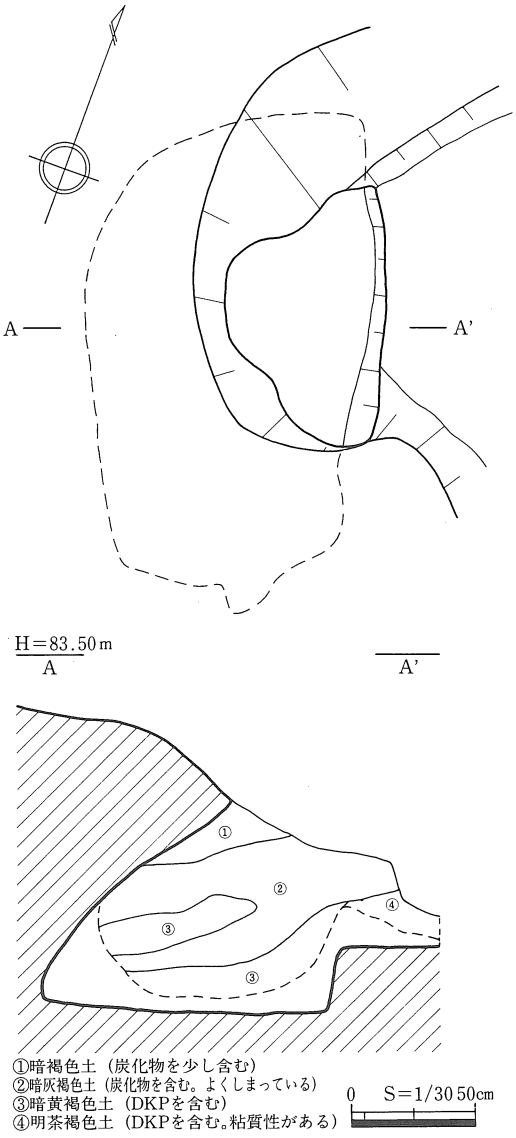
形　態　平面は、上縁不整な楕円形、底部楕円形を呈し、二段に掘り込まれる。規模は、上縁部長径0.87ｍ×短径0.69ｍを測る。深さは0.79ｍを測り、断面は台形状を呈す。

埋　土　埋土は、２層に分層できた。

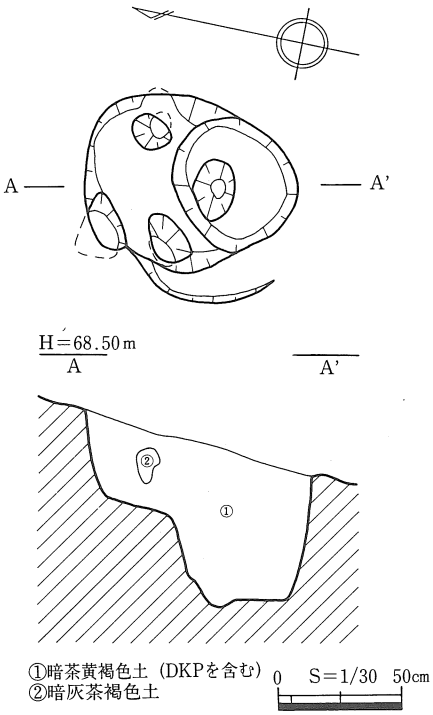
遺　物　埋土中から、土器片が出土しているが、図化できなかった。

時　期　ＣＳＫ03の時期は不明である。

用　途　ＣＳＫ03の用途は不明である。



挿図42　南谷大山遺跡CSK01遺構図



挿図44　南谷大山遺跡CSK03遺構図

ＣＳＫ08（挿図45、図版10）

位　置　Ｃ－Ｉ区の南側のＰ30グリッドにあり、標高70.2ｍの平坦面に位置する。西側約0.5 ｍにはＣＳＫ09、南東約１ｍにはＣＳＫ13がある。

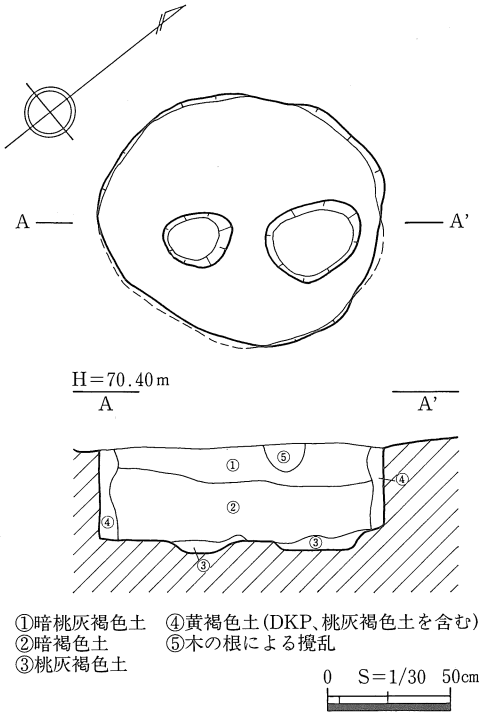
形　態　平面は、上縁部・底部とも楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.13ｍ×短径1.0ｍ、底部長径1.14ｍ×短径1.02ｍを測る。深さは0.36ｍを測り、断面は長方形を呈し、一部袋状に掘り込まれる。

底部には、深さ約３cmのピットが２個掘り込まれる。

埋　土　埋土は、４層に分層できた。②層中から石材が出土している。

時　期　遺物は全く出土していないため、ＣＳＫ08の時期は不明である。

用　途　ＣＳＫ08は、形態上の特徴から屋外貯蔵穴と考えられる。



挿図45　南谷大山遺跡CSK08遺構図

ＣＳＫ09（挿図46、図版10）

位　置　Ｃ－Ｉ区の南側のＯ30・Ｐ30グリッドにあり、標高70.2ｍの平坦面に位置する。東側約0.5ｍにはＣＳＫ08があり、ＣＳＢ02の範囲内にある。

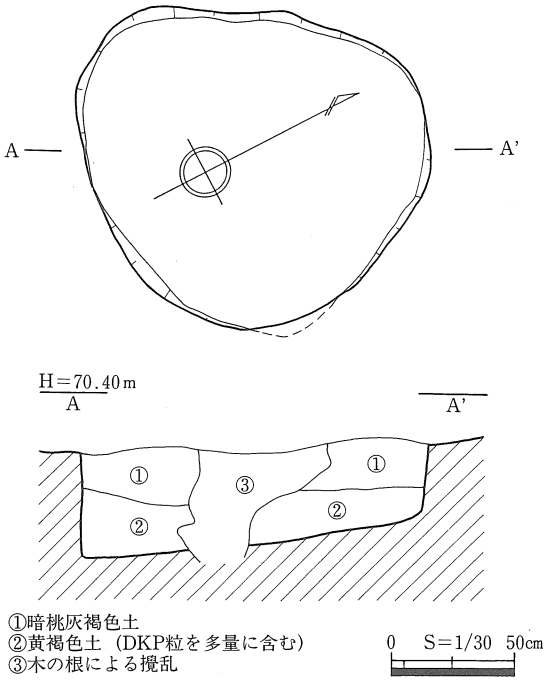
形　態　平面は、上縁部・底部とも不整な楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.38ｍ×短径1.27ｍ、底部長径1.35ｍ×短径1.22ｍを測る。深さは0.46ｍを測り、断面は長方形を呈し、一部袋状に掘り込まれる。

底部には、木の根による攪乱がある。

埋　土　埋土は、２層に分層できた。

時　期　遺物は全く出土していないため、ＣＳＫ09の時期は不明である。

用　途　ＣＳＫ09は、位置的にＣＳＢ02内にあるが、これに伴うものではなく、形態上の特徴から屋外貯蔵穴と考えられる。



挿図46　南谷大山遺跡CSK09遺構図

ＣＳＫ10（挿図47）

位　置　Ｃ－Ｉ区のやや北側のＯ25グリッドにあり、標高77.5～77.7ｍの緩やかに南に傾斜する斜面に位置する。南東側約１ｍにはＣＳＤ06がある。

形　態　平面は、上縁部・底部とも不整な楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.54ｍ×短径0.91ｍ、

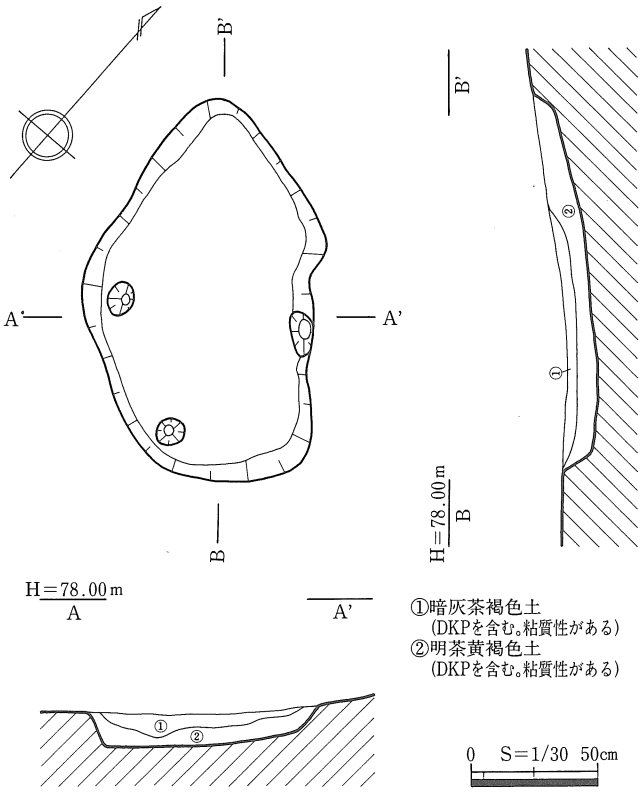
底部長径1.4m×短径0.76mを測る。深さは0.12mを測り、断面は逆台形状を呈す。

底部には、木の根による攪乱がある。

埋　土　埋土は、2層に分層できた。

時　期　遺物は全く出土していないため、CSK10の時期は不明である。

用　途　CSK10の用途は不明である。



挿図47　南谷大山遺跡CSK10遺構図

CSK11（挿図48、図版10）

位　置　C－I区の南側のP31・Q31グリッドにあり、標高67.5～68.0mの緩やかに東に傾斜する斜面に位置する。

形　態　西側は、CSI06によって削り取られ、東側は流失しているため遺存状態は悪い。

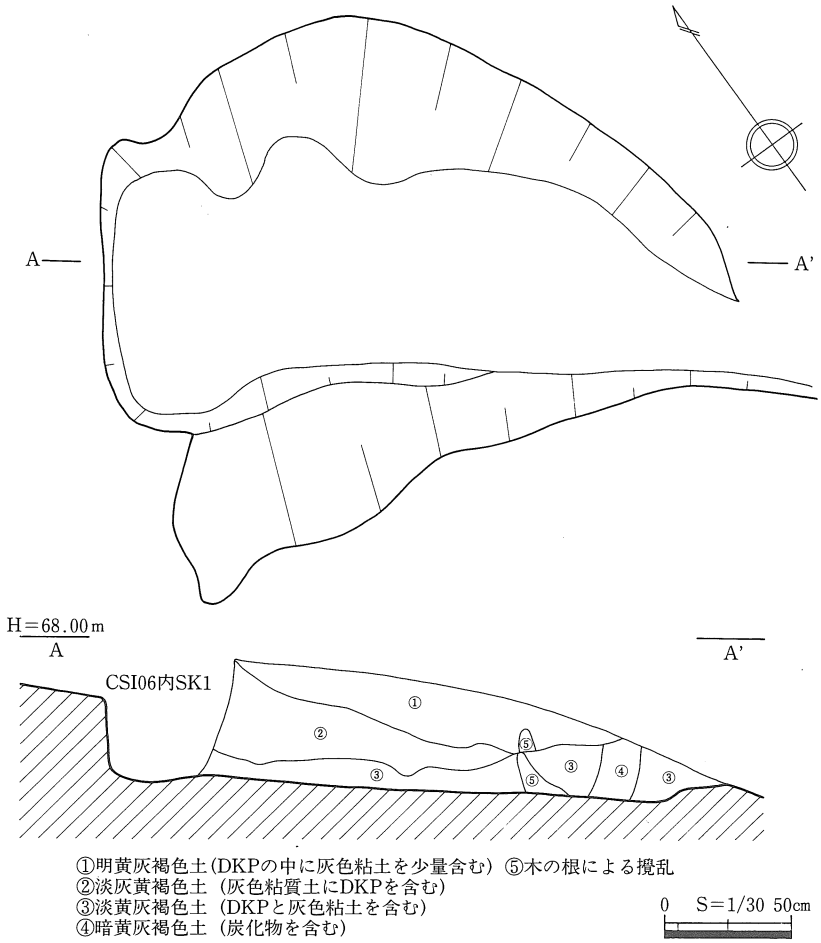
平面は、上縁部・底部とも不整な帯状を呈し、規模は、上縁部長径2.0m以上×短径2.0mを測る。

深さは最大0.44mを測り、断面は逆台形状を呈す。

埋　土　埋土は、4層に分層できた。

時　期　遺物は全く出土していないため、CSK11の時期は不明であるが、CSI06が掘り込まれる以前にあり、古墳時代前期後半以前のものと考えられる。

用　途　CSK11の用途は不明である。



挿図48　南谷大山遺跡CSK11遺構図

ＣＳＫ12（挿図49、図版11）

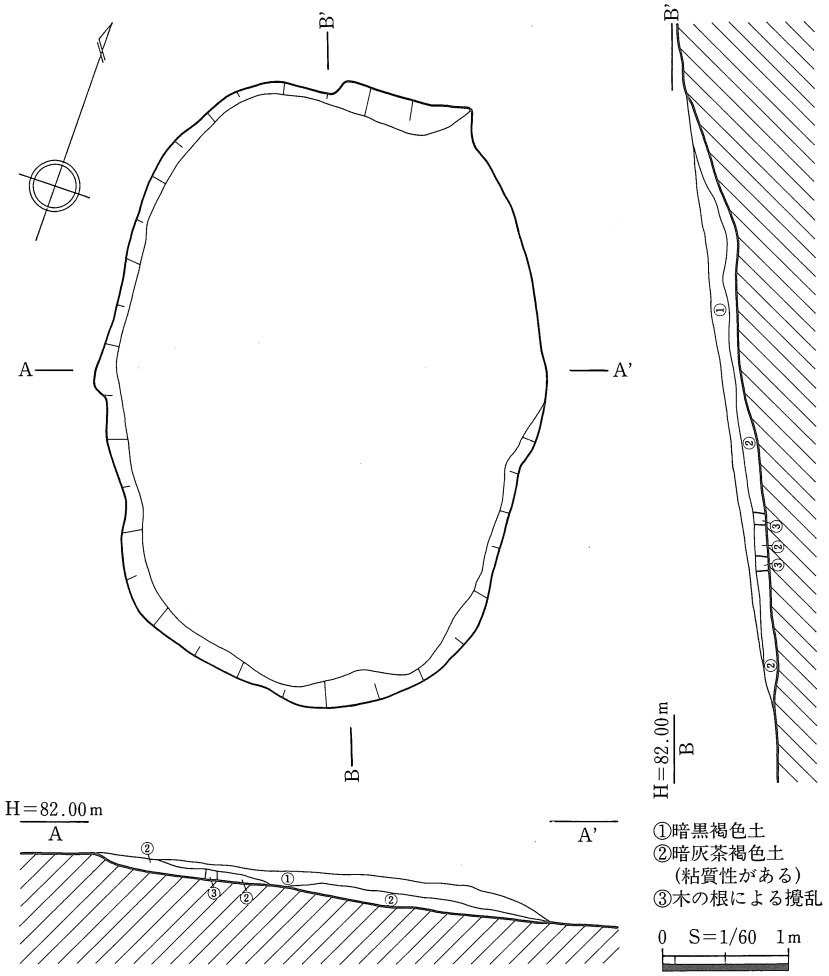
位　置　Ｃ－Ｉ区の北側のＯ23グリッドにあり、標高81.2～81.9ｍの緩やかに南に傾斜する斜面に位置する。付近には、ＣＳＤ05・07～09があり、東側約３ｍにはＣＳＩ16がある。

形　態　平面は、上縁部・底部とも楕円形を呈し、規模は、上縁部長径5.0ｍ×短径3.6ｍを測る。深さは最大0.1ｍを測り、断面は皿状を呈す。

埋　土　埋土は、２層に分層できた。

時　期　遺物は全く出土していないため、ＣＳＫ12の時期は不明である。

用　途　ＣＳＫ12の用途は不明である。



挿図49　南谷大山遺跡CSK12遺構図

ＣＳＫ13（挿図50）

位　置　Ｃ－Ｉ区の南側のＰ30グリッドにあり、標高70.2ｍの平坦面に位置する。西側約１ｍにはＣＳＫ08があり、北東側約４ｍにはＣＳＩ14がある。

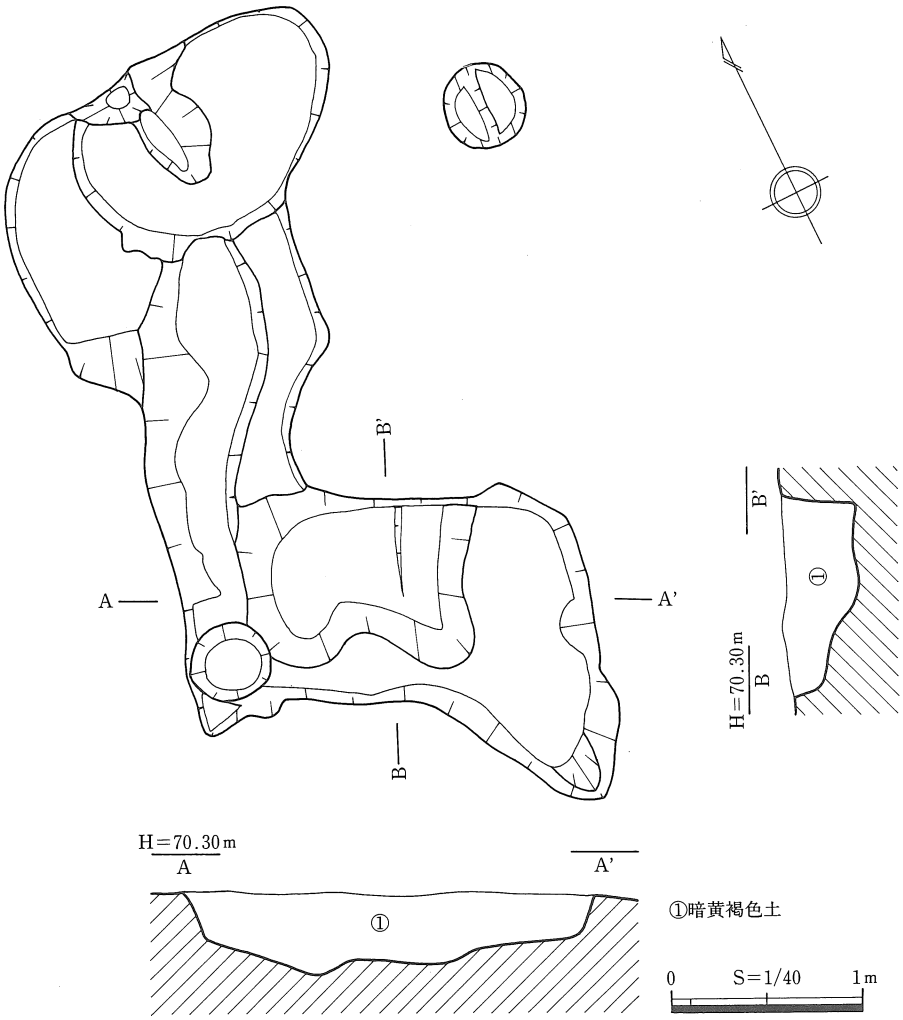
形　態　平面は、上縁部・底部とも不整形な逆「コ」字状を呈し、北側・南側が２段に掘り込まれ、一段深くなる。規模は、上縁部長軸3.55ｍ×短軸2.15ｍを測る。深さは最大0.42ｍを測り、断面は不整形な台形状を呈す。

北側・南側は、底部に木の根による攪乱を受けている。

埋　土　埋土は、暗黄褐色土が単層ではいる。

遺　　物　埋土中から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期・用途　ＣＳＫ13の時期、用途は不明である。



挿図50　南谷大山遺跡CSK13遺構図

4．段状遺構

ＣＳＳ04（挿図51～53、図版11・38・39）

位　　置　ＣＳＳ04は、Ｃ－Ｉ区のやや南側Ｏ28・Ｏ29・Ｐ28・Ｐ29グリッドに位置し、緩やかに南側に傾斜する斜面を加工して平坦面にしている。標高は約70.5～71.2ｍである。東側でＣＳＩ11、南東側でＣＳＩ14と接している。

形　　態　南側斜面を、逆「Ｌ」字状に高さ約１ｍ削り込み、平坦面を作っている。東西約16ｍ、南北約12ｍを測る。

ピット群　平坦面には64個のピットが見られるが、規則性は認められない。規模等は挿表１を参照されたい。

溝　また、ピットが集中する部分には、幅15～20cm、深さ２～９cmを測る溝が、斜面際に作られている。ピットは規則性が認められなかったが、この溝は、壁溝の可能性があり、この部分に竪穴住居または平地式の住居があった可能性も捨て切れない。

埋　　土　埋土は６層からなる。これらの土層を観察すると、当遺構の埋土は自然堆積を窺わせる。

遺　物出土状況　図化できたものには、壺Po１、甕Po２～Po31、底部Po32～Po38、高杯Po39・Po40、鼓形器台Po41～Po43、小型丸底壺Po44、小型高杯形器台Po45・Po46、低脚杯Po47、蓋Po48、土玉Po49・Po50、敲石Ｓ15がある。

このうち床面およびピット内からは、Po２がＰ２内から、Po43がＰ38内から、Po48がＰ62付近でそれぞれ出土している。

それ以外は埋土中からの出土である。

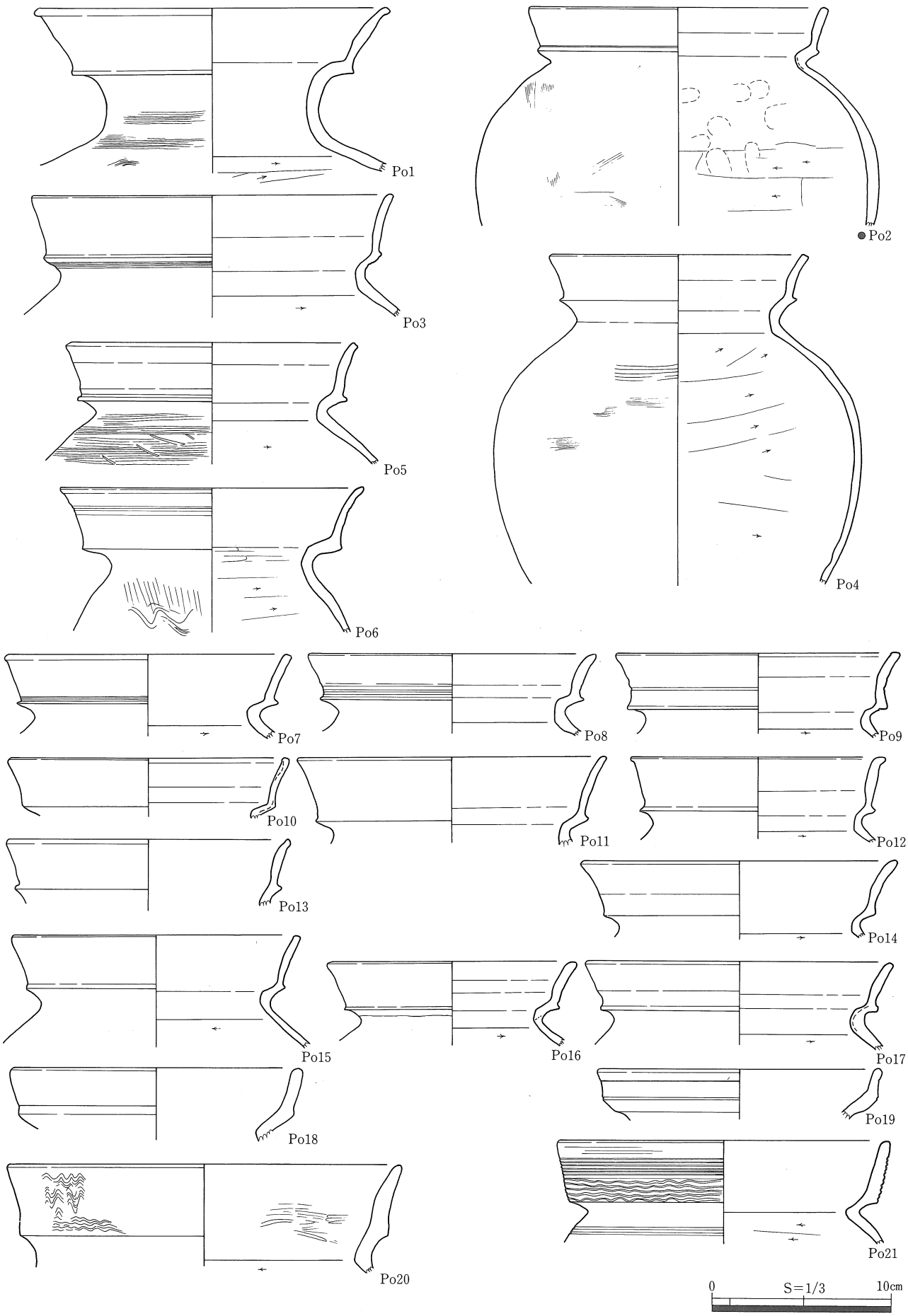
時　期　出土土器は、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての特徴をもつものばかりであるが、底面およびピット内出土の土器から、ＣＳＳ04は大山Ⅵ期、古墳時代前期後半頃のものと思われる。

用　途　用途は不明である。

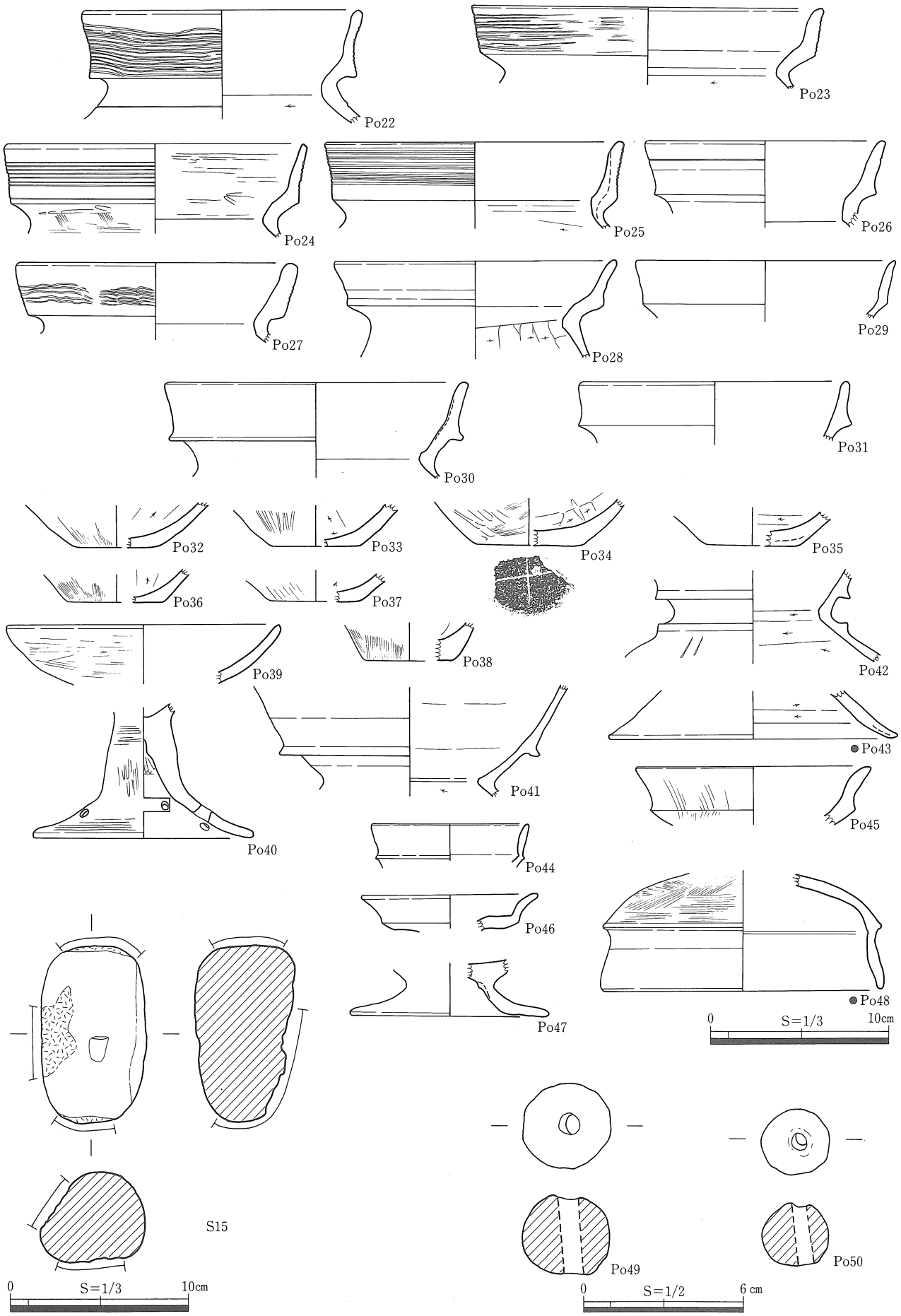
ピット番号	規模(cm)(長径×短径－深さ)	ピット番号	規模(cm)(長径×短径－深さ)	ピット番号	規模(cm)(長径×短径－深さ)	ピット番号	規模(cm)(長径×短径－深さ)
1	40×34－35.2	17	38×30－6.7	33	40×30－37.2	49	58×52－24.4
2	104×90－44.7	18	40×38－48.3	34	38×36－51.3	50	52×38－33.4
3	54×54－44.0	19	28×20－16.2	35	33×26－12.8	51	56×48－25.0
4	40×38－34.2	20	34×32－15.5	36	30×24－49.0	52	48×46－37.8
5	70×46－49.7	21	24×23－7.7	37	50×44－49.1	53	64×28－15.3
6	44×34－47.2	22	24×22－25.5	38	58×46－29.8	54	30×24－9.3
7	46×40－11.5	23	30×24－13.5	39	46×40－40.0	55	38×28－38.9
8	32×24－28.2	24	60×60－10.5	40	86×70－18.7	56	50×40－9.1
9	36×24－14.3	25	35×34－15.4	41	93×60－46.2	57	30×24－27.9
10	74×46－17.2	26	30×24－45.3	42	54×44－14.4	58	62×52－40.4
11	54×52－34.4	27	44×30－9.4	43	50×48－22.6	59	60×30－63.8
12	50×46－36.8	28	44×40－23.4	44	50×34－35.6	60	35×34－23.1
13	44×28－31.5	29	70×60－49.2	45	74×60－44.8	61	50×40－48.9
14	27×14－33.5	30	40×38－20.4	46	34×33－26.8	62	46×40－56.1
15	34×32－20.1	31	42×36－42.6	47	32×30－55.1	63	44×40－25.3
16	46×36－37.9	32	46×30－19.9	48	40×32－24.0	64	40×39－32.7

挿表１　南谷大山遺跡CSS04ピット群一覧表

挿図51　南谷大山遺跡CSS04遺構図



挿図52　南谷大山遺跡CSS04出土遺物実測図(1)



挿図53　南谷大山遺跡CSS04出土遺物実測図(2)

ＣＳＳ05（挿図54・55、図版11・39）

位　　置　ＣＳＳ05は、Ｃ－Ｉ区の南側Ｐ30・Ｐ31・Ｑ30・Ｑ31グリッドに位置し、緩やかに南東側に傾斜する斜面を加工して平坦面にしている。標高は約68.0～69.6ｍである。南側でＣＳＩ06と接している。

形　　態　南東側に傾斜する斜面を、高さ約1.3ｍ削り込み、平坦面を作っている。東西約1.5ｍ、南北約４ｍを測る。

ピット群　平坦面には２個のピットが見られる。それぞれの規模は、Ｐ１（58×55－41）㎝、Ｐ２（53×32－21）㎝を測る。

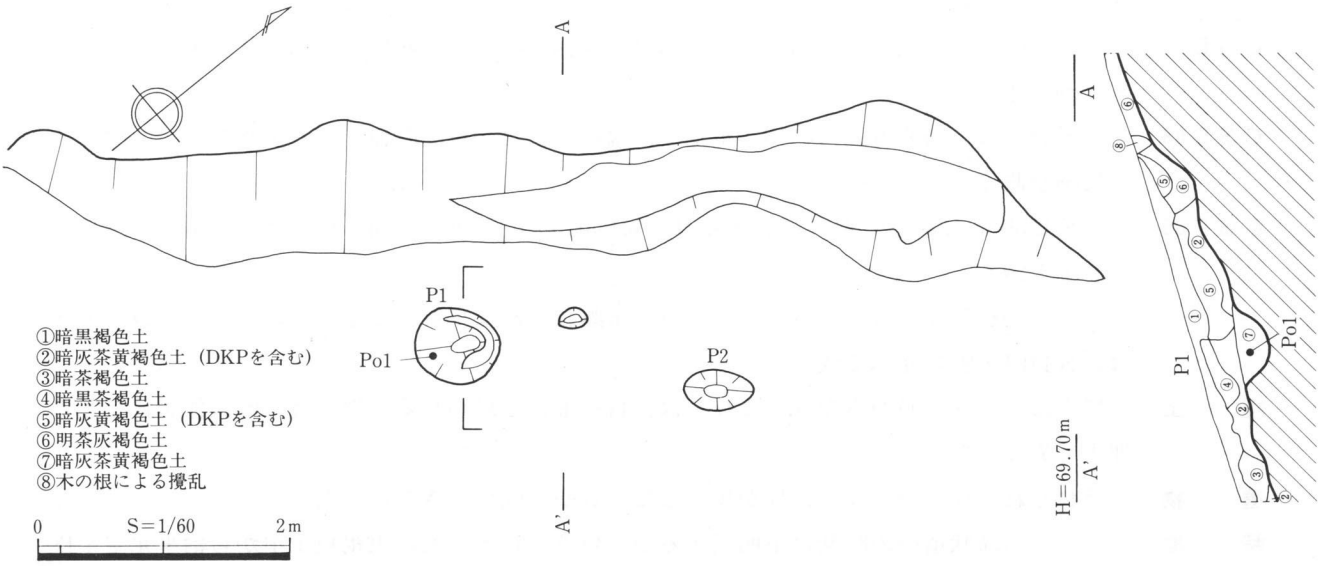
埋　　土　埋土は６層からなる。これらの土層を観察すると、当遺構の埋土は自然堆積を窺わせる。

遺　　物　図化できたものには、Ｐ１内から出土した甕Po１がある。

出土状況　この他にも、埋土中から土器が出土しているが、図化できなかった。

時　　期　Ｐ１内出土のPo１から、ＣＳＳ05は大山Ⅵ期、古墳時代前期後半頃のものと思われる。

用　　途　用途は不明である。



挿図54　南谷大山遺跡CSS05遺構図

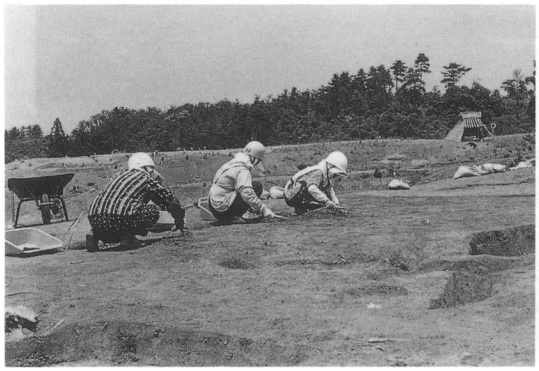
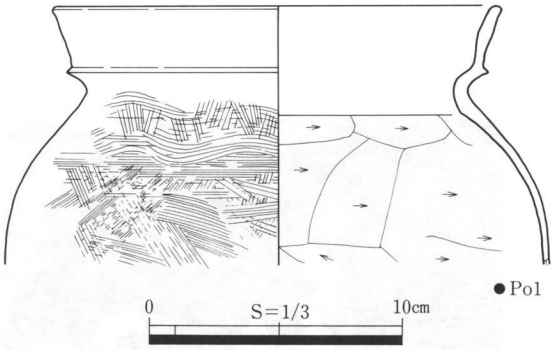


写真８　Ｃ－Ⅱ区調査風景



挿図55　南谷大山遺跡CSS05出土遺物実測図

5．溝状遺構

ＣＳＤ01・05・07・08・09（挿図56）

位　　置　ＣＳＤ01・05・07・08・09はＣ－Ｉ区の北側、Ｌ23・M23・N22・N23・O23・O24グリッドにあり、標高79.5～82.5ｍの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。ＣＳＤ01の南側約２ｍにはＣＳＩ01が、ＣＳＤ08とＣＳＤ05との間には、ＣＳＫ12がある。また、ＣＳＤ05の東側約３ｍには、ＣＳＩ16がある。

形　　態

ＣＳＤ01　ＣＳＤ01は、ほぼ東西方向に約24ｍ走り、N22グリッドで北側に折れ、約3.5ｍ延びている。また、途中で鉤状になる部分もあり、南側に約2.2ｍ延びている。長さ約27.5ｍ、幅約0.5～1.3ｍ、深さ約20cmを測り、断面は「U」字状を呈し、一部段状になる。

ＣＳＤ05　ＣＳＤ05は、東西方向に約12.3ｍ走るものが、O24グリッドでいったんとぎれるものの、北側へ折れてＣＳＤ01の屈曲部付近まで、約19.8ｍ延びる。幅約0.8～1.1ｍ、断面「U」字状を呈し、深さ８～51cmを測る。東西方向に走る溝の西端には、(170×140－87)cmを測る大型のピットが掘り込まれている。

ＣＳＤ07　ＣＳＤ07は、南北方向に約6.7ｍ走り、幅約0.4～0.65ｍ、断面「U」字状を呈し、深さ２～５cmを測る。

ＣＳＤ08　ＣＳＤ08は、南北方向に約13.6ｍ走り、幅約0.3～1.0ｍ、断面「U」字状を呈し、深さ３～11cmを測る。

ＣＳＤ09　ＣＳＤ09は、南北方向に約5.3ｍ走り、幅約0.5～0.75ｍ、断面「U」字状を呈し、深さ７～９cmを測る。

ＣＳＤ05･07･08･09は、それぞれ１～1.8ｍ離れてほぼ平行して走っており、ＣＳＤ07～09はＣＳＤ01・05に比べて浅い。

埋　　土　埋土は、１～２層からなり、これらは、自然堆積と思われる。埋土は、竪穴住居跡などの埋土と異なっている。

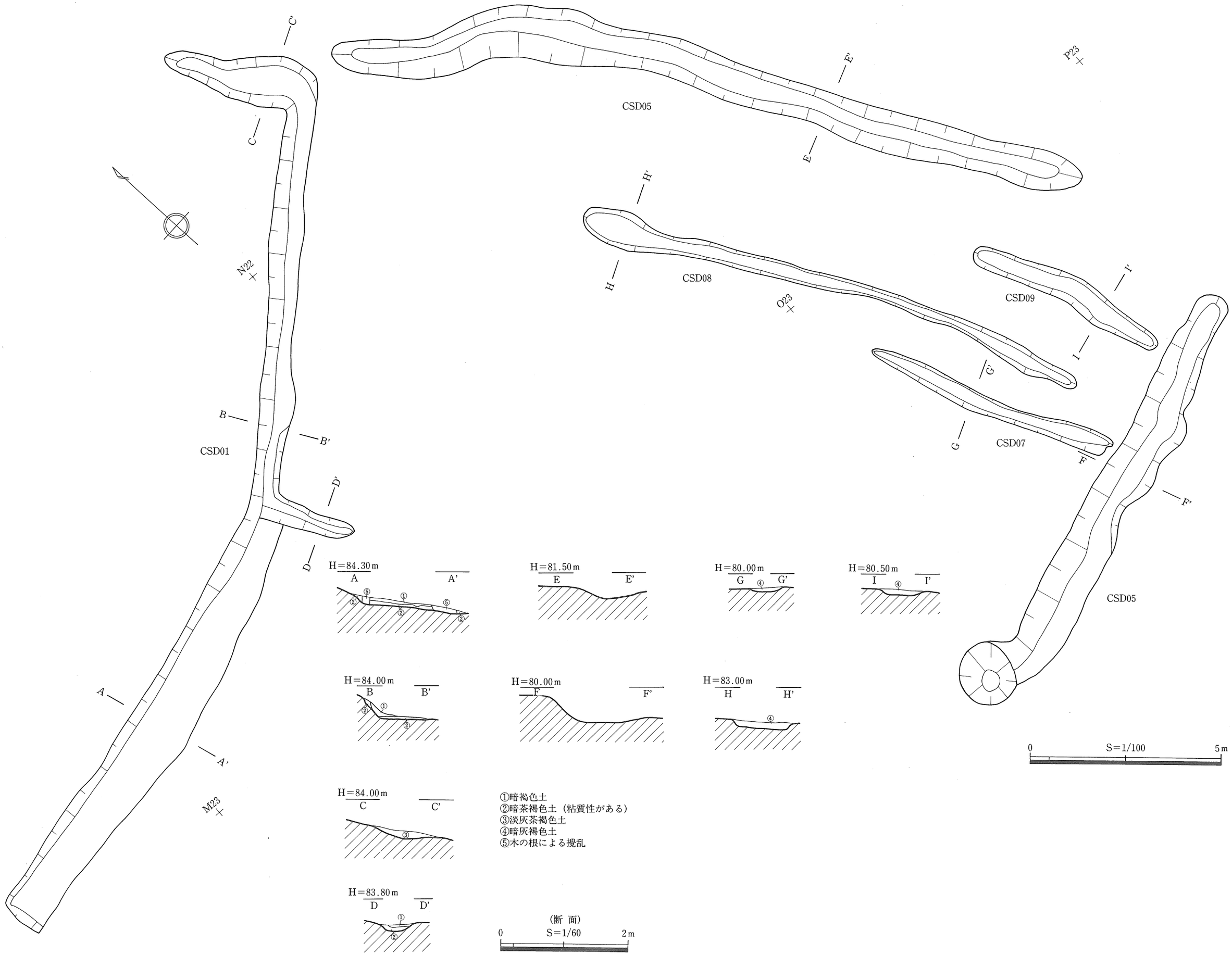
遺　　物　それぞれの埋土中より土器片が出土しているが、図化できなかった。

時　　期　これらの溝状遺構の時期は不明であるが、付近のＣＳＩ02の黒褐色土中から治平元宝１枚が出土しており、中世以降のものと考えられる。

用　　途　これらは、中世以降の耕作等に伴うものと考えられる。

写真９　CSI06調査風景

写真10　CSS04調査風景



挿図56　南谷大山遺跡CSD01・05・07・08・09遺構図

ＣＳＤ06（挿図57）

位　置　ＣＳＤ06はＣ－Ｉ区のほぼ中央部の、Ｏ26グリッドにあり、標高76.0～78.5ｍの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。北西側約２ｍにはＣＳＫ10がある。

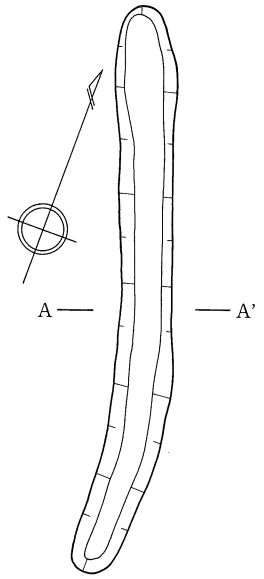
形　態　ほぼ南北方向に一直線に延びる。長さ7.6ｍ、幅約0.8ｍ、深さ３～10cmを測り、断面は「Ｕ」字状を呈する。

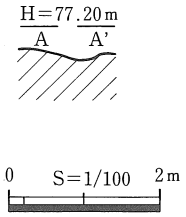
埋　土　埋土は、暗灰褐色土層からなり、これらは、自然堆積と思われる。

遺　物　埋土中より土器片が出土しているが、図化できなかった。

時　期　時期は不明であるが、ＣＳＤ01・05・07～09とほぼ同様の時期と考えられる。

用　途　用途は不明であるが、耕作等にかかわるものと考えられる。





挿図57　南谷大山遺跡 CSD06遺構図

ＣＳＤ02（挿図58、図版12）

位　置　ＣＳＤ02はＣ－Ｉ区の南側、Ｏ32・Ｐ32グリッドにあり、標高68.2～68.8ｍの平坦面に位置する。一カ所とぎれており、ほぼ東西方向に走っている。西側のものはＣＳＩ05の埋土を掘り込んで作られている。南側約２ｍにはＣＳＩ03がある。

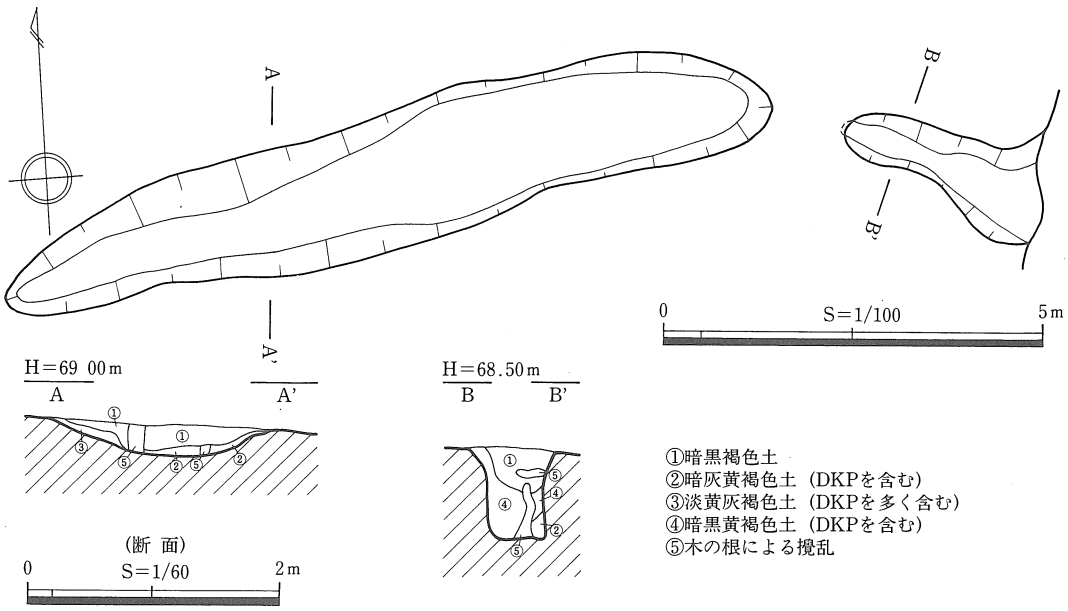
形　態　東側で一カ所とぎれるものの緩やかな弧状を呈し、西側のものは長さ4.2ｍ、幅約0.5～0.7ｍ、深さ13～22cmを測り、断面は「Ｕ」字状を呈する。東側のものは長さ1.2ｍ、幅0.3ｍ、深さ60～70cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

埋　土　埋土は、４層からなり、これらは、自然堆積と思われる。

遺　物　埋土中より土器片が出土しているが、図化できなかった。

時　期　確かな時期は不明であるが、ＣＳＩ05の埋土を切り込んで作っていることから、古墳時代前期以降のものと思われる。

用　途　用途は不明である。



挿図58　南谷大山遺跡CSD02遺構図

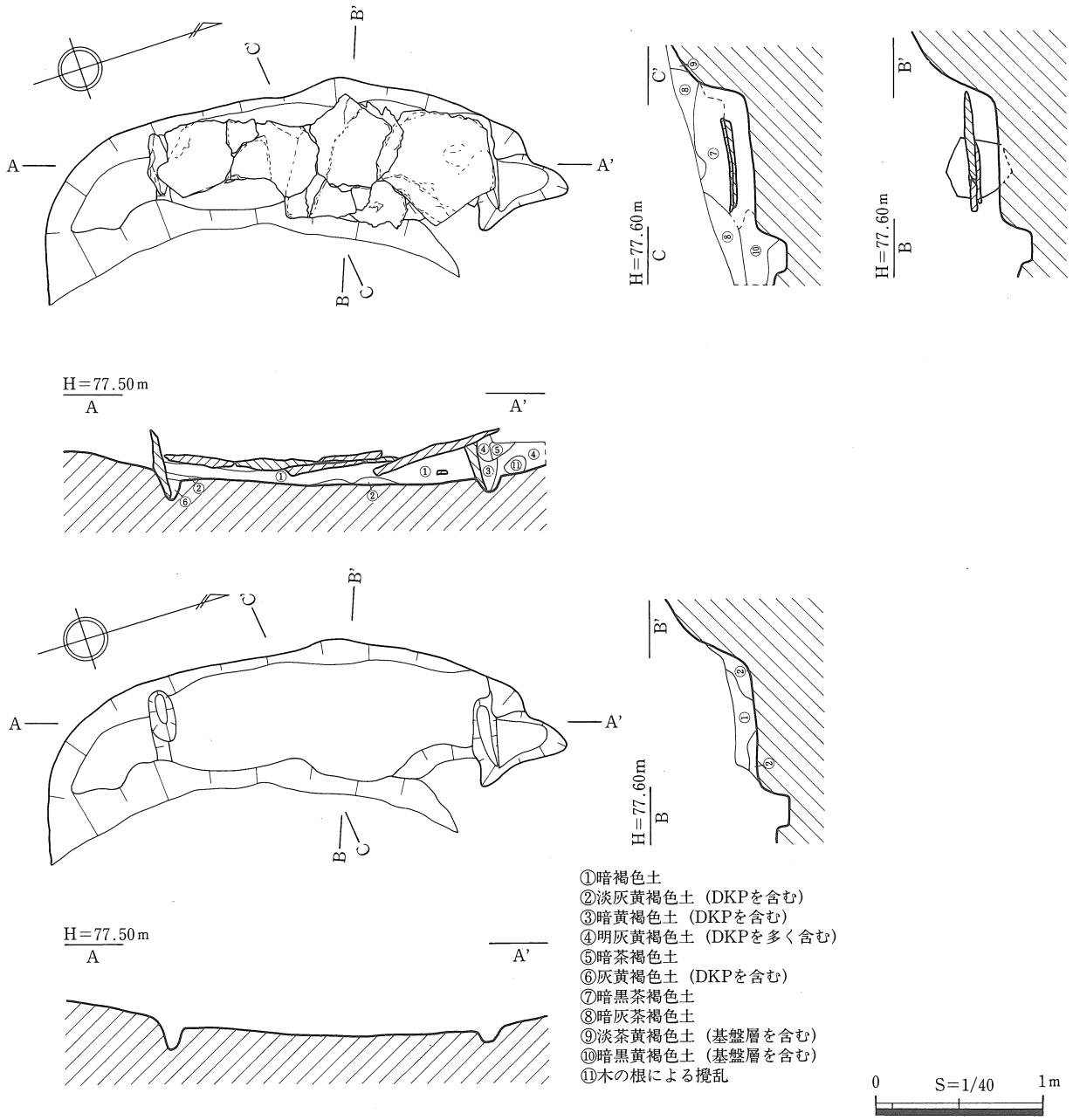
6．埋葬施設群

ＣＳＸ01（挿図59・60、図版12・39）

位　　置　Ｃ－Ｉ区の北東側のＰ24・25グリッドにあり、標高77.0～77.3ｍの東側斜面に位置する。東側にはＣＳＸ02が接し、南東側３ｍにはＣＳＸ03がある。

形　　態　南北に長い墓壙内に作られた石蓋土壙墓であるが、小口側にも板石を立てており、側板を簡略化した石棺墓と呼んでもよい。東側は、ＣＳＸ02によって削り取られている。本来は、小口石上に蓋石が乗せられるものと考えられるが、南側は小口石が外側へ倒れ込み、蓋石が落ち込んでいる。蓋石は９枚架構されている。

墓壙の規模は、長さ3.18ｍ×幅0.9ｍ以上、深さ0.4ｍを測る。内法では、長さ1.8ｍ×幅0.8ｍ以上である。

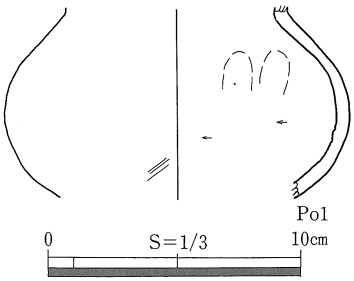


挿図59　南谷大山遺跡CSX01遺構図

小口側には、石を立てるための溝が掘り込まれ、小口石を立てた後③～⑤層で墓壙内を埋め戻している。

埋　土　埋土は、腐食土と考えられる⑦･⑧層が堆積しており、蓋石が架構された後は埋め戻されず、そのまま放置された可能性がある。また、内部には、①･②層が入り込んでいた。

遺物出土状況　南小口側の蓋石上に、小型丸底壺Po１が共献されていた。



挿図60　南谷大山遺跡CSX01出土遺物実測図

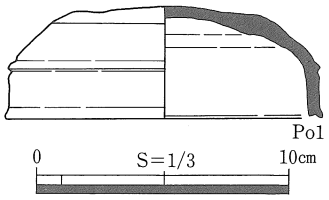
時　期　ＣＳＸ01の時期は不明であるが、ＣＳＸ02からは、ＴＫ208並行期の須恵器杯蓋が出土しており、これより若干遡るものと考えられる。

ＣＳＸ02（挿図61・62、図版13）

位　置　Ｃ－Ｉ区の北東側のＰ25グリッドにあり、標高76.5～76.9ｍの東側斜面に位置する。西側にはＣＳＸ01が接し、南東側約２ｍにはＣＳＸ03がある。

形　態　平面長楕円形を呈し、一部二段に掘り込んでいる。墓壙上面は長さ2.44ｍ×幅1.0ｍ、深さ0.2ｍに掘り込み、幅0.2～0.4ｍのテラスを設けた後に、さらに長さ2.2ｍ×幅0.6ｍ、深さ0.18ｍ掘り込んでいる土壙墓である。

底部には、粘土が敷かれていたものと考えられる。



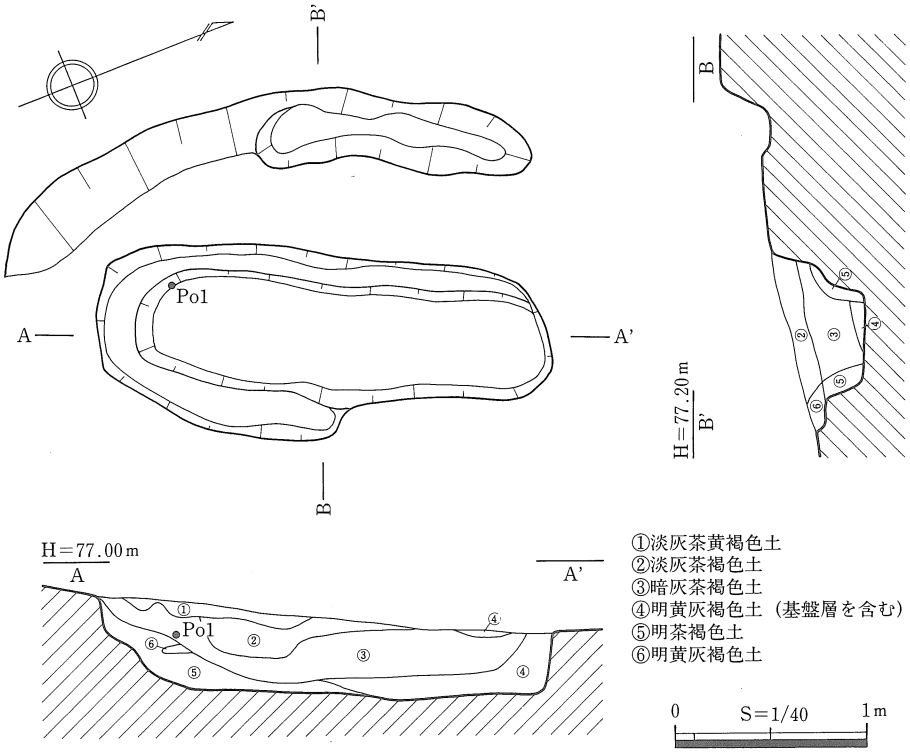
挿図61　南谷大山遺跡CSX02出土遺物実測図

後　背　後背部には、幅０.３ｍ前後を測る弧状を呈す溝

区画溝　が掘り込まれている。この溝は、土壙墓を区画するためのものと考えられる。

遺物出土状況　墓壙内南側で、やや浮いた状態で、須恵器杯蓋Po１が口縁部を下にして出土している。

時　期　Po１は陶邑編年ＴＫ208並行期・山陰須恵器編年Ｉ期[61]と考えられ、大山Ⅷ期・古墳時代中期後半のものと考えられる。



挿図62　南谷大山遺跡CSX02遺構図

ＣＳＸ03（挿図63・64、図版13）

位　　置　Ｃ－Ｉ区の北東側のＰ25グリッドにあり、標高75.8～76.3ｍの東側斜面に位置する。北側約２ｍにはＣＳＸ02がある。

形　　態　平面長楕円形を呈す土壙墓である。墓壙は長さ2.35ｍ×幅1.03ｍ、深さ0.36ｍを測る。

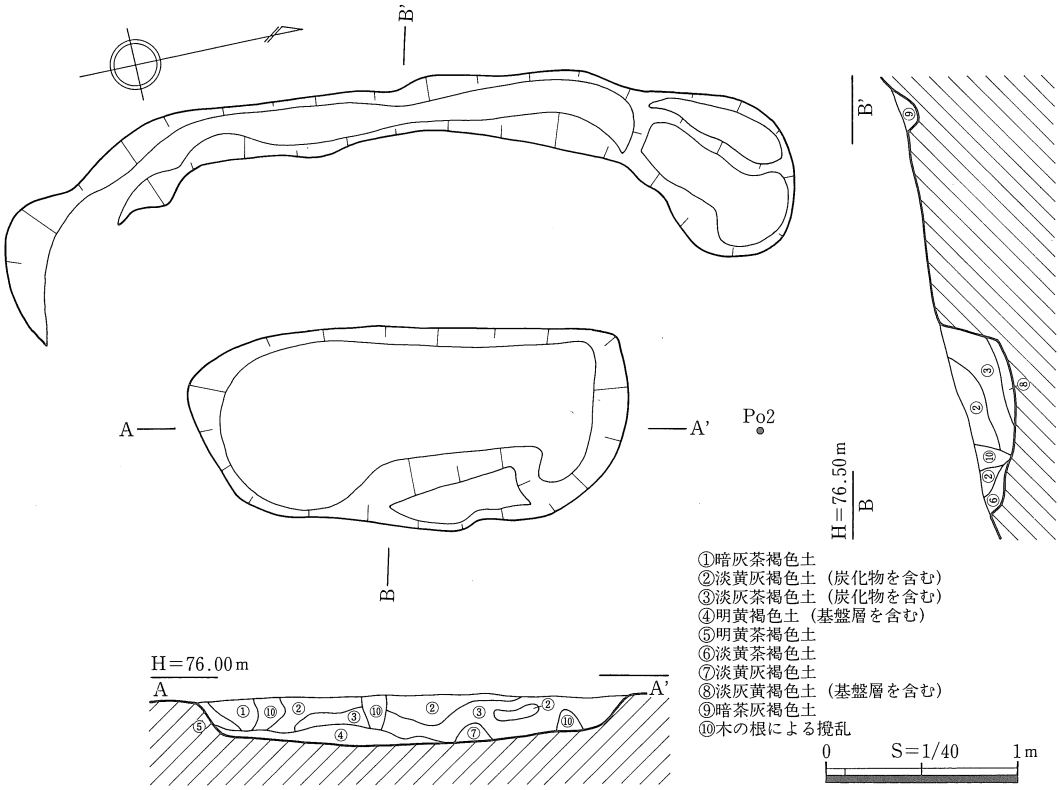
後　　背　後背部には、幅0.3～0.5ｍ前後、深さ20cm前後を測る鋤状を呈す溝が掘り込まれている。

区画溝　この溝は、土壙墓を区画するためのものと考えられる。

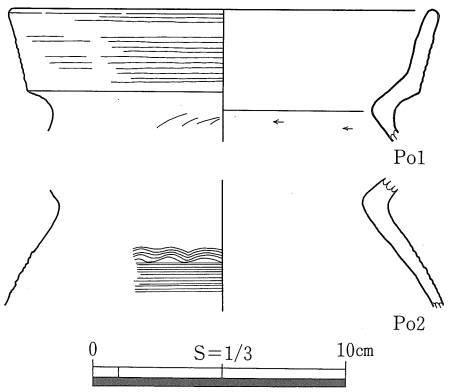
遺　　物　埋土中より甕Po１・Po２が出土しているが、これらは弥生時代後期後半の特徴をもつもの

出土状況　で、この埋葬施設に伴うものではない。

時　　期　ＣＳＸ03の時期は遺物が出土していないため不明であるが、同様の形態の埋葬施設であるＣＳＸ02から陶邑編年ＴＫ208並行期・山陰須恵器編年Ｉ期[61]と考えられる須恵器杯蓋が出土しており、ほぼ同時期の大山Ⅷ期・古墳時代中期後半のものと考えられる。



挿図63　南谷大山遺跡CSX03遺構図



挿図64　南谷大山遺跡CSX03出土遺物実測図

7．遺構外遺物について（挿図65・66、図版39）

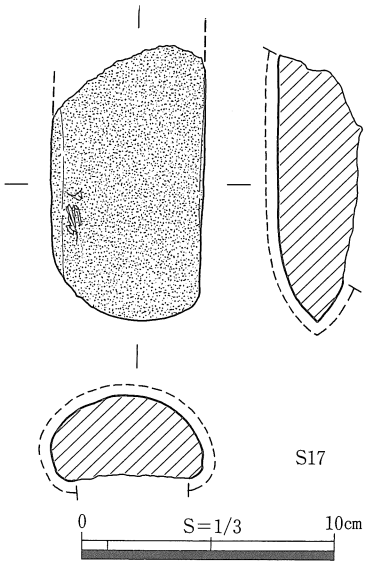
遺構外からは、図化できたものに甕Po１～Po３、高杯Po４・Po５、鼓形器台Po６・Po７、小型丸底壺Po８、太型蛤刃石斧Ｓ17がある。

このうちPo１は、Ｐ25グリッドの斜面部、Po２～Po８は、Ｏ29・Ｏ30・Ｐ30・Ｐ31グリッドの平坦部、Ｓ17は、Ｏ24グリッドから出土している。

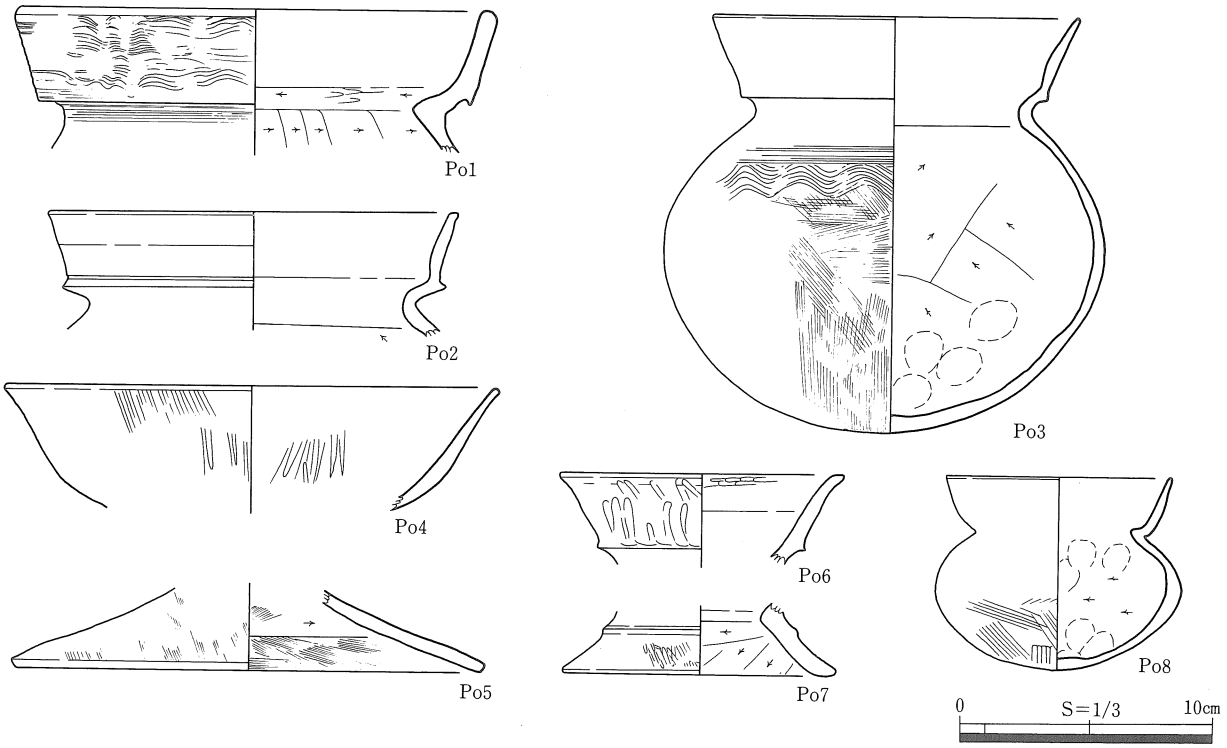
Po１は、口縁部に施文が施され、口縁部下端が下垂することから大山Ⅱ期と考えられる。Po３は、口縁部がナデのみになり、シャープな作りで胴部も丸底化することから、大山Ⅳ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

Po２は、口縁端部が平坦面をもつことから大山Ⅴ期、Po４～Po８は大山Ⅵ期頃のものと考えられる。

Ｓ17については時期は不明である。



挿図65　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅰ区遺構外出土遺物実測図(1)



挿図66　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅰ区遺構外出土遺物実測図(2)

第３節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅱ区の概要

位　　置　Ｃ－Ⅱ区は、標高79～83ｍの、今年度調査区のうちの西側尾根上に遺跡が展開する地区である。この尾根の先端部には、径約15ｍ、高さ約３ｍを測る南谷30号墳がある。

遺　　構　この地区では、弥生時代後期には、掘立柱建物跡ＣＳＢ01、貯蔵穴ＣＳＫ06・07、不明土坑ＣＳＫ04・05・14、段状遺構ＣＳＳ03およびこれに伴うピット群が作られている。

古墳時代前期になると、竪穴住居跡ＣＳＩ02・09・10が作られる。

さらに、時期は不明であるが、不明土坑ＣＳＫ02、段状遺構ＣＳＳ02がある。

第４節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅱ区の調査結果

１．竪穴住居跡

ＣＳＩ02（挿図67～71、図版14・15・39・40）

位　　置　調査区のやや北側、西側尾根の基部にあり、斜面が大きく湾曲するＫ24・25、Ｌ24・25グリッドにあり、標高79.5～80.7ｍの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。すぐ西側にはＣＳＳ03が近接する。

形　　態　遺存状態は非常に良く、平面は東西に長い扁平な五角形を呈する。規模は、東西6.50ｍ、南北5.55ｍを測り、床面積は32.0㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で1.47ｍを測る。

壁溝は、とぎれる部分があるもののほぼ全周し、幅８～13㎝、深さ３～６㎝を測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴はＰ１～Ｐ５の５個で、それぞれの規模は、Ｐ１（41×30－42）㎝、Ｐ２（63×46－84）㎝、Ｐ３（80×64－76）㎝、Ｐ４（57×52－81）㎝、Ｐ５（48×47－73）㎝を測る。主柱穴間距離はＰ１～Ｐ２間から順に3.6ｍ、3.3ｍ、3.8ｍ、2.9ｍ、2.5ｍである。

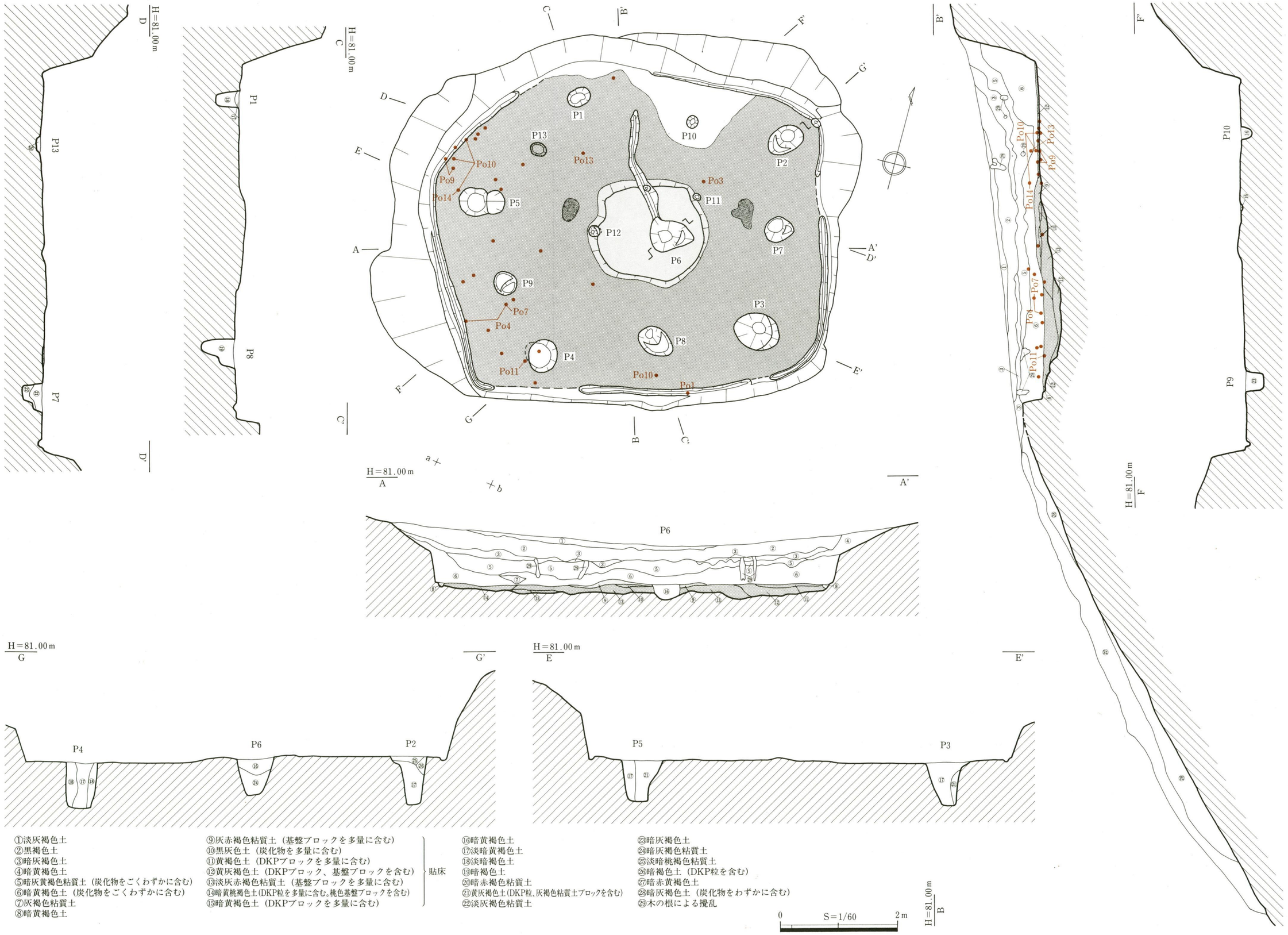
主柱穴間にはＰ７（22×20－20）㎝、Ｐ８（51×46－36）㎝、Ｐ９（64×47－59）㎝、Ｐ10（40×38－26）㎝を測るピットがある。また、貼床除去後にＰ５－Ｐ１間に（28×24－９）㎝を測るＰ13を検出した。Ｐ13は床面検出時に確認できなかったが、位置的に考えてＰ７～Ｐ10と同様の性格をもつものと考えられる。これらは、主柱穴に比べ深さがあまりなく、位置的・規模的に考えて補助柱穴と考えられる。

住居中央部には、灰赤褐色粘質土によって（210 ×182 ）㎝にわたり不整楕円形に、一段高く土壇が盛られている。なお、灰赤褐色粘質土の下には炭化物を多量に含む⑩層がはさまれている。この部分のやや東側に、不整形の中央ピットＰ６が掘り込まれている。規模は（78×54－66）㎝を測る。埋土は２層に分層でき、下層の暗灰褐色粘質土には炭化物を含んでおり、鑑定の結果、スギ・スダジイが含まれていた。中央ピットの周辺には、Ｐ11・Ｐ12があり、中央ピットを囲む何らかの施設があった可能性がある。

中央ピットに接続して北側に、中央ピットの土壇を掘り込んで長さ約２ｍ、幅10～23㎝、深さ２～11㎝を測る、断面「Ｕ」字状の溝が走っている。埋土は、暗黄褐色土１層である。この溝は、壁までは届いていない。

焼土面　床面上には、中央ピットをはさむように、東西に２カ所に焼土面が検出されている。

埋　　土　埋土は７層に分層することができた。③～⑦層は、壁際から住居中央部に向かって流れ込



①淡灰褐色土
②黒褐色土
③暗灰褐色土
④暗黄褐色土
⑤暗灰黄褐色粘質土（炭化物をごくわずかに含む）
⑥暗黄褐色土（炭化物をごくわずかに含む）
⑦灰褐色粘質土
⑧暗黄褐色土
⑨灰赤褐色粘質土（基盤ブロックを多量に含む）
⑩黒灰色土（炭化物を多量に含む）
⑪黄褐色土（DKPブロックを多量に含む）
⑫黄灰褐色土（DKPブロック、基盤ブロックを含む）
⑬淡灰赤褐色粘質土（基盤ブロックを多量に含む）
⑭暗黄桃褐色土(DKP粒を多量に含む。桃色基盤ブロックを含む)
⑮暗黄褐色土（DKPブロックを多量に含む）
} 貼床
⑯暗黄褐色土
⑰淡暗黄褐色土
⑱淡暗褐色土
⑲暗褐色土
⑳暗赤褐色粘質土
㉑黄灰褐色土(DKP粒、灰褐色粘質土ブロックを含む)
㉒淡灰褐色粘質土
㉓暗灰褐色土
㉔暗灰褐色粘質土
㉕淡暗桃褐色粘質土
㉖暗褐色土（DKP粒を含む）
㉗暗赤黄褐色土
㉘暗灰褐色土（炭化物をわずかに含む）
㉙木の根による攪乱

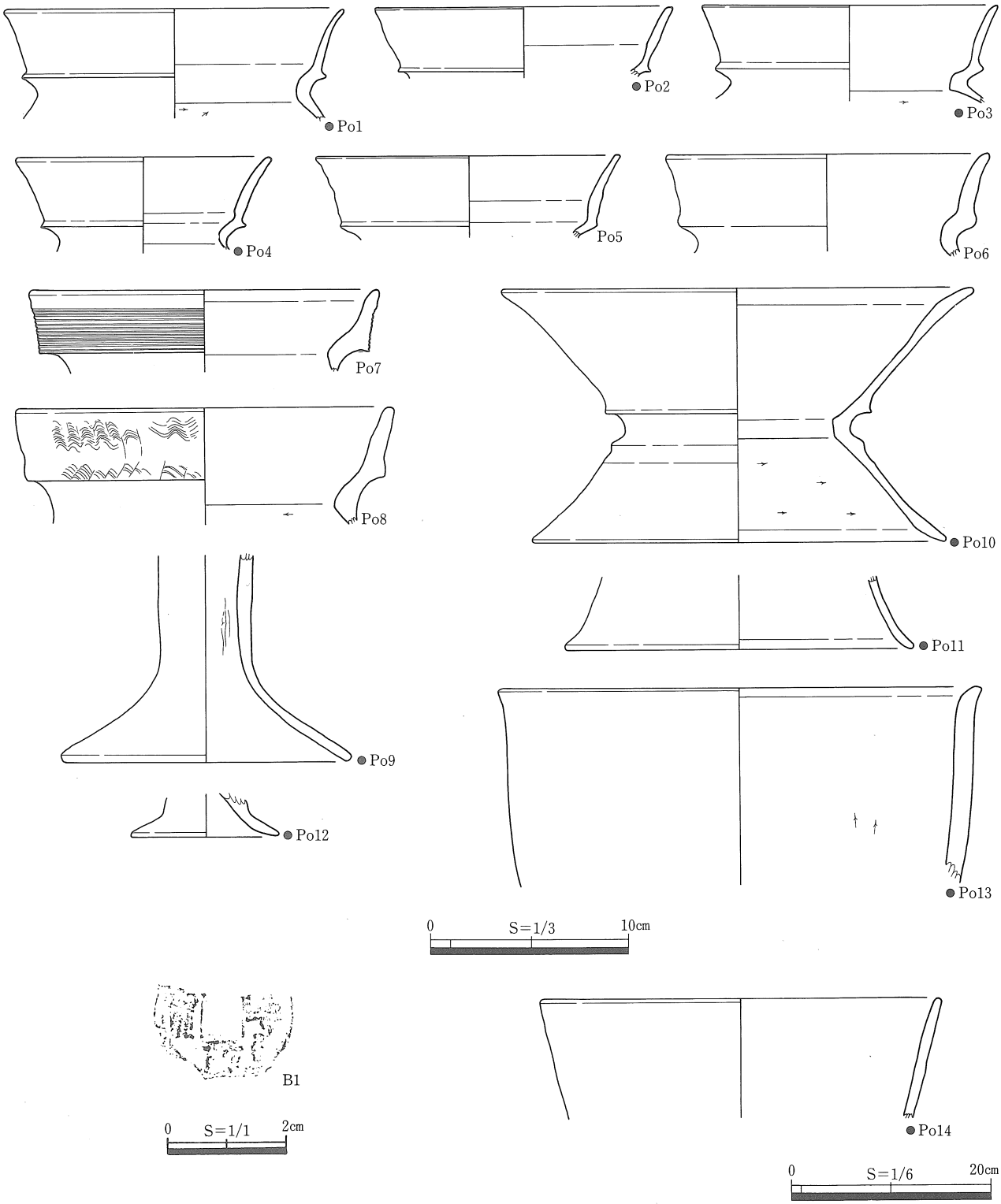
0　S=1/60　2m

挿図67　南谷大山遺跡CSI02遺構図

んだような堆積状況を示し、住居の廃絶と共に自然堆積した状況が窺われる。このうち、⑤・⑥層中には炭化物が含まれている。

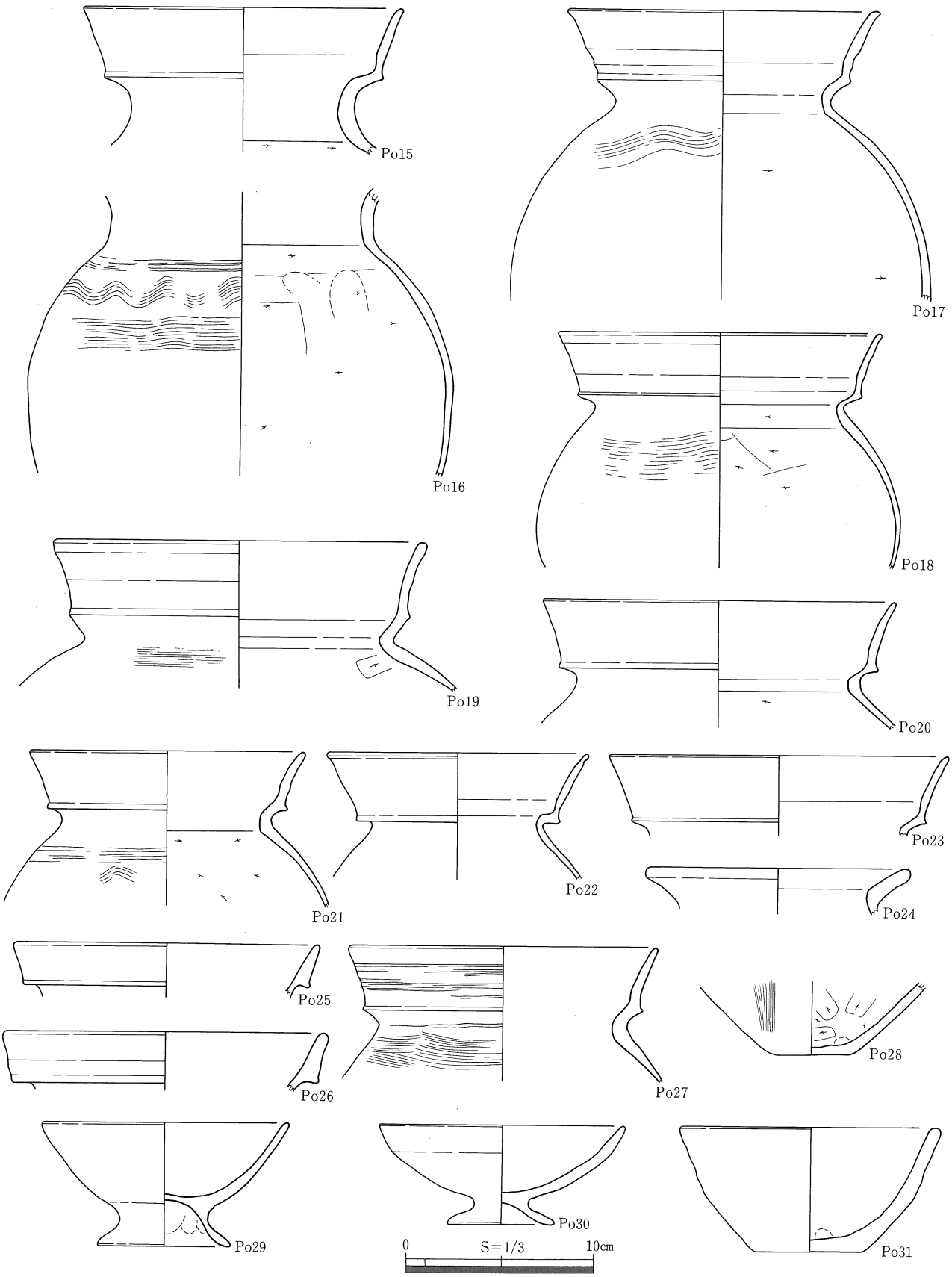
また、住居中央部の土壇の周囲には、炭化物を含んだ砂質土が薄く検出されている。

さらに、住居の南側には、暗赤褐色土が堆積している。この層の下には、旧表土と考えられる黒褐色土があり、この住居を掘削する段階に出た排土を南側斜面に捨てた結果、堆積したものと考えられる。

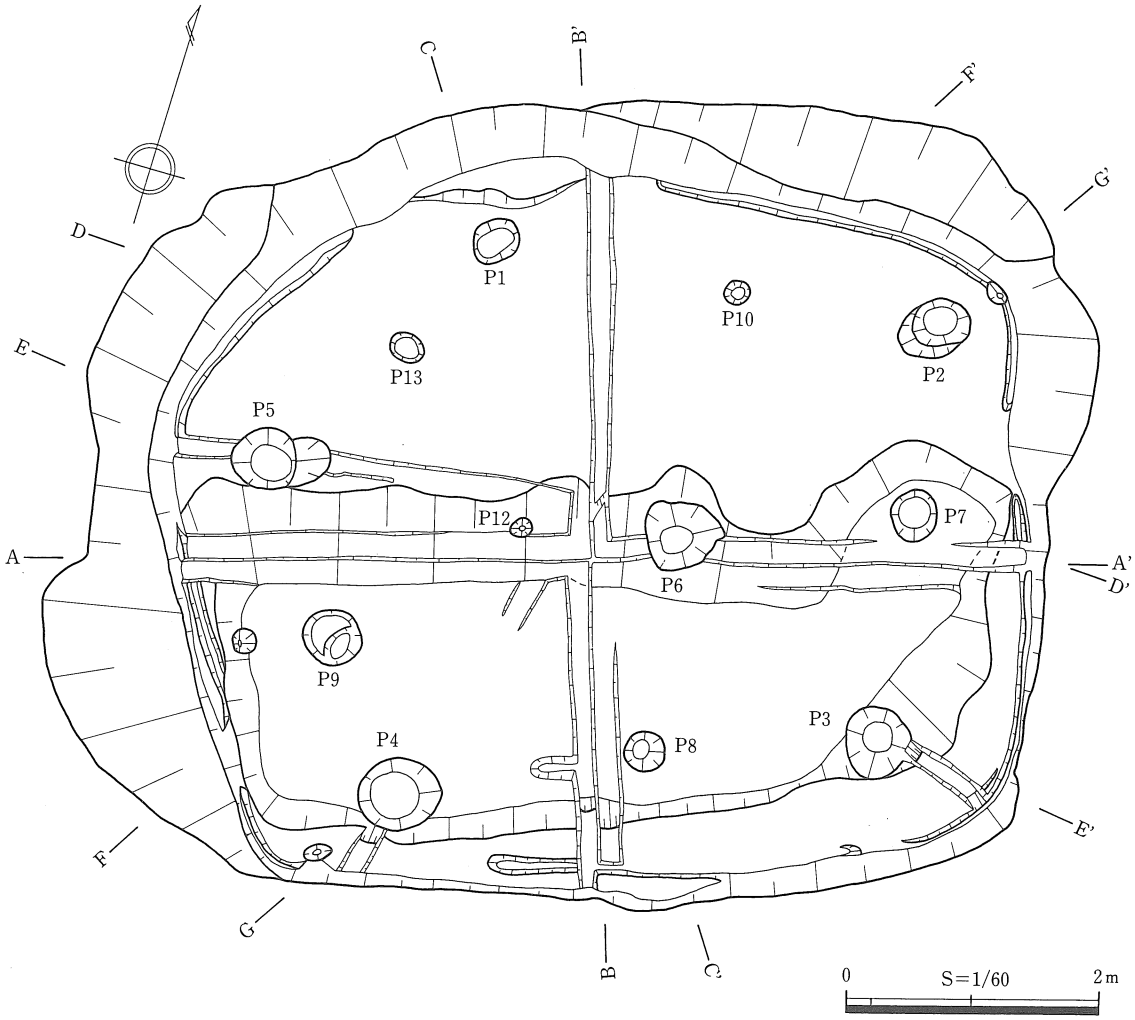


挿図68　南谷大山遺跡CS102出土遺物実測図

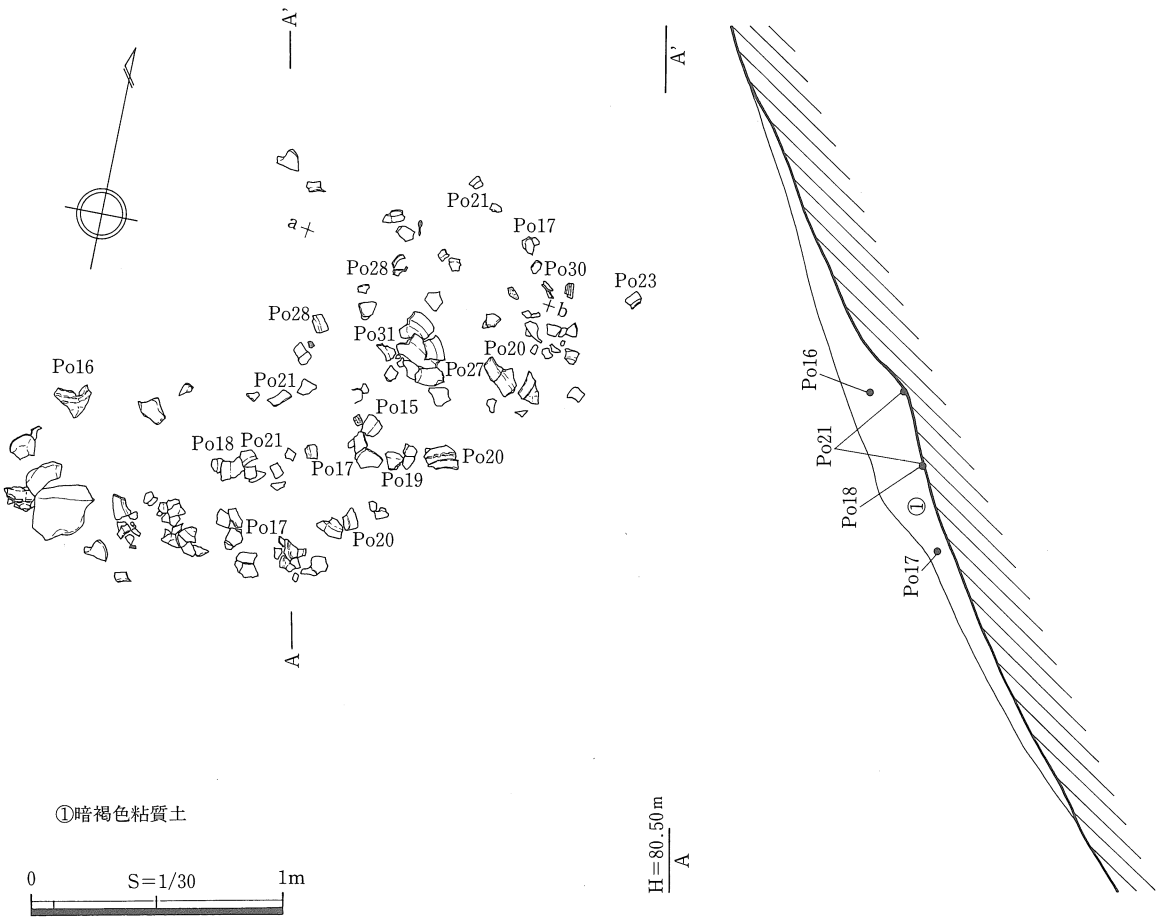
貼　床　床面のほぼ全面に、貼床が施されているが、すべて均質な土による貼床ではなく、中央部では土壇を含めて粘質土の⑨層による貼床が、それ以外はＤＫＰ層を多量に含む⑪～⑮層による貼床が施されている。厚さは均一ではなく、南側は深いところで約30cmの貼床が施され



挿図69　南谷大山遺跡CS102南西側土器溜り出土遺物実測図



挿図70　南谷大山遺跡CSI02貼床除去後遺構図



挿図71　南谷大山遺跡CSI02南西側土器溜り検出状況図

ているのに対し、北側は数cmしか施されていない。

不　整　落ち込み　また、貼床を除去すると、住居中央部より南側で、(5.9 ×2.8 −0.3)mの不整長方形に掘り込まれた落ち込みが検出された。断面も不整形な皿状を呈す。この落ち込みは、住居プラン内に納まることから、住居を掘削する段階で掘り込まれたものと考えられる。ＣＳＩ02の基盤層は、北側が堅緻なローム層であるのに対し、中央より南側がＤＫＰ層になっており、住居の掘削段階で、柔らかく掘りやすいＤＫＰ層を掘り過ぎ、その部分を補うために、南側の貼床が厚くなったものと考えられる。

なお、ＣＳＩ02の北側後方は大きくカールしているが、これは斜面に構築するために、人工的に整形して掘り込んだものと考えられる。

遺　物　出土状況　ＣＳＩ02内で図化できたものには、甕Po１～Po８、高杯Po９、鼓形器台Po10・Po11、低脚杯Po12、甑形土器Po13・Po14、治平元宝Ｂ１がある。

このうち床面からは、北西コーナー付近でPo９・Po10・Po14が、南西コーナー付近でPo４・Po11が、南側壁際でPo１・Po10が、そしてＰ１と中央ピットの間でPo13が、中央ピット付近でPo３が、Ｐ３内でPo２・Po12がそれぞれ検出されている。

その他のものはPo６・Po８・Ｂ１が埋土上層、その他は埋土下層中からの出土である。

土器溜り　ＣＳＩ02の南側の斜面では、壺Po15・Po16、甕Po17～Po27、底部Po28、低脚杯Po29・Po30、鉢Po31の土器類が炭化物と共に検出された。炭化物は、鑑定の結果スダジイ・クスノキが含まれていた。このうち、Po24は、ＣＳＩ02の貼床内出土の土器と接合していることから、これらは、ＣＳＩ02の土器とほぼ同時期と考えられ、ＣＳＩ02で使用された土器が、住居が火災になったために廃棄されたものと考えられる。

時　期　床面出土遺物から、CSI02は大山Ｖ期、古墳時代前期前半頃のものと考えられる。なお、土器溜りから出土しているものは、床面から出土しているものより若干古い様相を含むものがある。

ＣＳＩ09（挿図72・73、図版15・40）

位　置　ＣＳＩ09はＣ－Ⅱ区の最も南側のH25グリッドにあり、ＣＳＳ03がつくる標高約78.7～79.3mの平坦面の西斜面側に位置する。

北側にはＣＳＫ07が接している。この他、当住居の約0.6m北東にはＣＳＫ06が、約5.9m東にはＣＳＫ05が、約10m東にはＣＳＢ01が、約4.2m南東にはＣＳＩ10が、それぞれ位置する。

形　態　南側は調査区外に延び出し、西側は流失しているため遺存状態は悪く、平面は不整形をしている。ピットの配置等から判断すると、隅丸方形を呈していたと考えられる。規模は東西約3.8m以上、南北約2.0m以上である。床面積は12.2m²以上である。残存壁高は、最も残りの良い東壁で最大0.30mを測る。

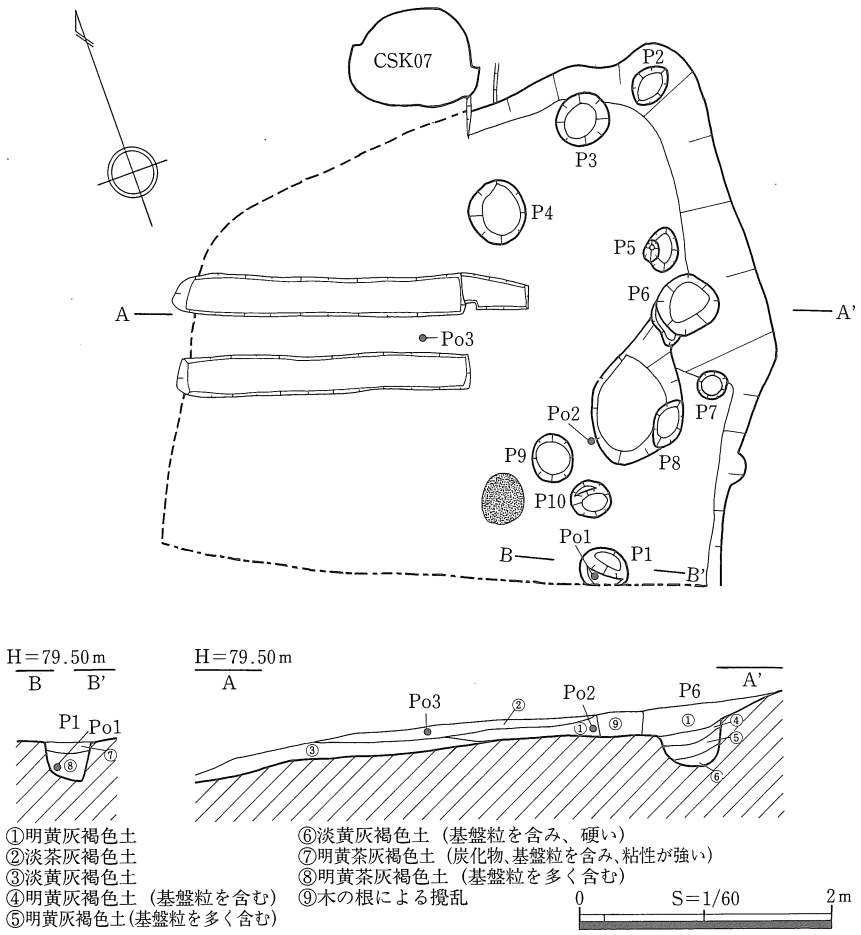
検出されたピットは、10個である。これらのうち、Ｐ１は（40×33－33）cmを測り、主柱穴のうちの一つと考えることもできる。中央ピット・壁溝は、検出されなかった。

埋　土　埋土は３層からなる。基盤層と埋土が酷似しており、その判別は困難だった。

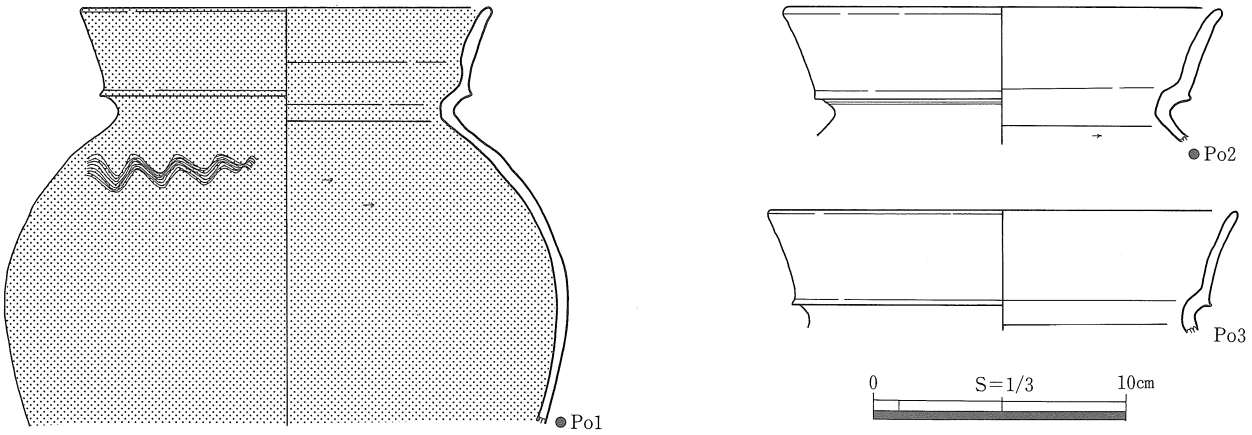
焼土面　遺構南東部、床面より13cm浮いた状態で、焼土が見られた。範囲(43×32)cm、厚さ1.6～2.0cmで、楕円形を呈する。表面は硬くしっかりしていた。この焼土は、焼け落ちの焼土と考えられる。

遺　物　出土状況　Ｐ１中より甕Po１が、床面より甕Po２が、埋土中より甕Po３がそれぞれ検出された。これらのうち甕Po１は、逆さまの状態で出土した。この他、土器片が出土したが図化できなかった。

時　期　Ｐ１中の土器Po１より、ＣＳＩ09は大山Ｖ期、古墳時代前期前半のものと考えられる。近くのＣＳＩ10も大山Ｖ期のものである。



挿図72　南谷大山遺跡CSI09遺構図



挿図73　南谷大山遺跡CSI09出土遺物実測図

ＣＳＩ10（挿図74・75、図版15・16・40）

位　　置　ＣＳＩ10はＣ－Ⅱ区の最も南側のＩ26グリッドにあり、ＣＳＳ03がつくる標高約80.1ｍの平坦面に位置する。

約5.3ｍ北西にはＣＳＫ06が、約2.3ｍ北にはＣＳＫ05が、約2.8ｍ北東にはＣＳＢ01が、約4.2ｍ北西にはＣＳＩ09が、それぞれ位置する。

形　態　遺存状態は比較的よく、平面は方形を呈する。規模は東西2.9m、南北3.6mを測る。床面積は10.6m²である。残存壁高は最も残りの良い北東壁で、0.22mである。

壁溝は見られず、検出されたピットも1個のみである。唯一のピットP1は(47×43−16)cmを測る。規模から考えて、当ピットは主柱穴とは考え難い。

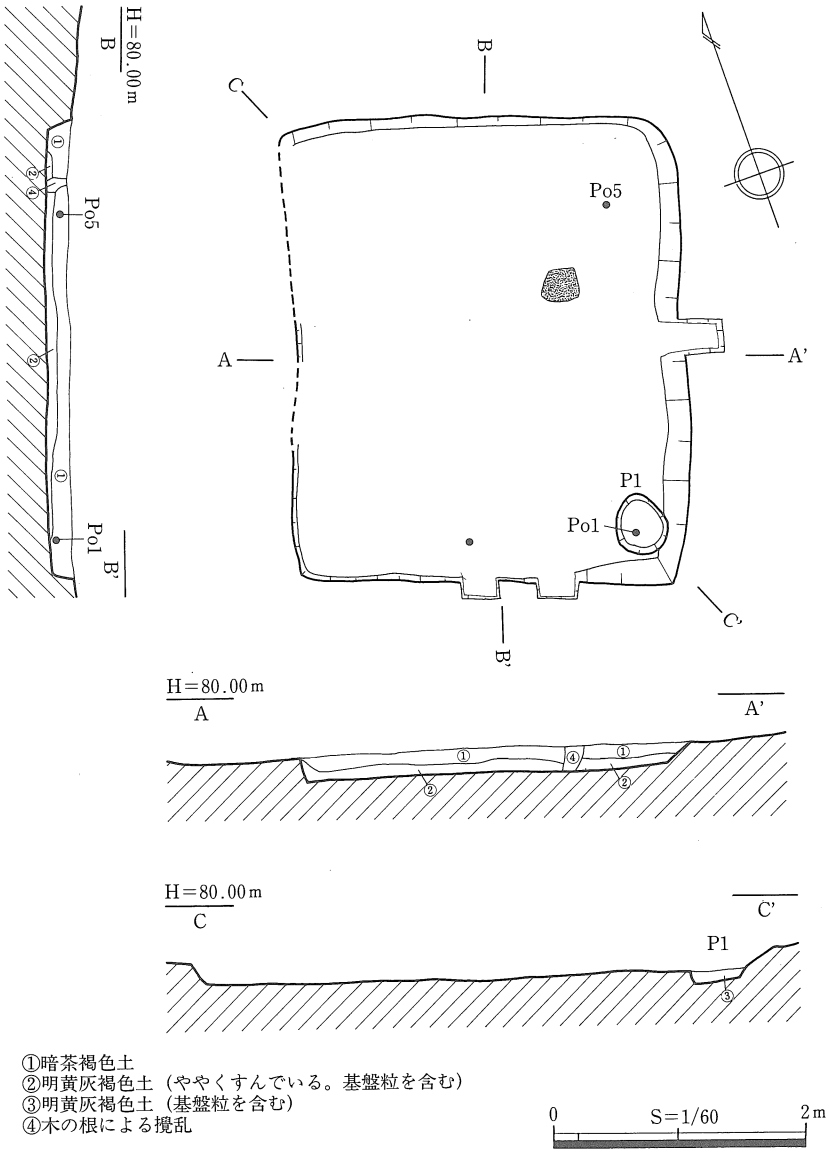
床面は、柔らかく粘性の強い明黄褐色土からなる。

埋　土　埋土は2層からなる。埋土中には、焼土粒がみられる。

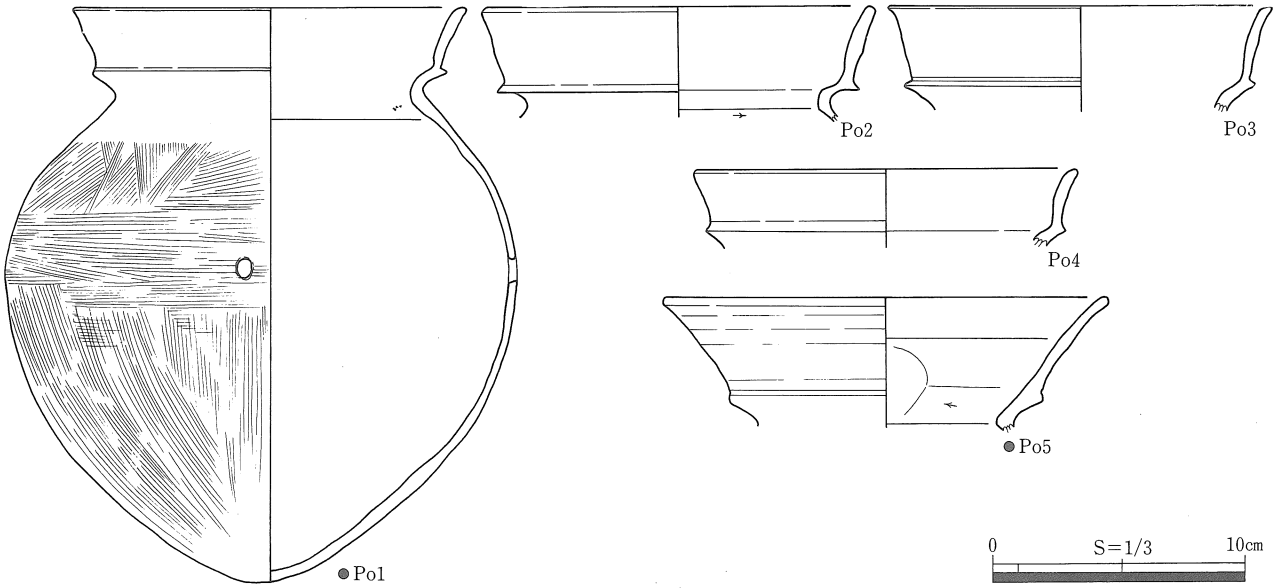
焼　土　特に北東区では、(32×30)cmの四角形の範囲内に約10cmの厚さで、焼土粒を多く含んだ埋土が堆積していた。

遺　物出土状況　P1中より甕Po1が、埋土中より甕Po2～Po4が、床面より鼓形器台Po5が検出された。これらのうち、甕Po1は潰れた状態で出土した。また、鼓形器台Po5は、北東コーナーで検出された。

時　期　P1中の土器Po1より、CSI10は大山V期、古墳時代前期前半のものと思われる。CSI09も大山V期の遺構である。



挿図74　南谷大山遺跡CSI10遺構図



挿図75　南谷大山遺跡CSI10出土遺物実測図

2．掘立柱建物跡

ＣＳＢ01（挿図76・77、図版16）

位　置　ＣＳＢ01は、Ｃ－Ⅱ区の南東側Ｊ25・Ｊ26グリッド、ＣＳＳ03がつくる標高約80.1ｍの平坦面に位置する。

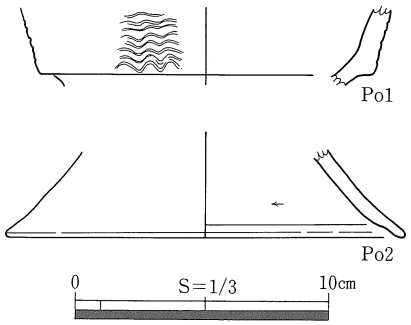
当遺構の約1.7ｍ北東にはＣＳＫ04が、約３ｍ北西にはＣＳＫ05が、約10ｍ北西にはＣＳＫ06が、約12ｍ西にはＣＳＫ07が、約12.9ｍ北東にはＣＳＩ02が、約10ｍ西にはＣＳＩ09が、約2.9ｍ南西にはＣＳＩ10がそれぞれ位置する。

形　態　梁行１間4.2ｍ、桁行２間6.2ｍを測る。主軸方向は、Ｎ－54°－Ｗである。柱穴は６個である。規模はそれぞれＰ１（54×48－63）cm、Ｐ２（60×60－81）cm、Ｐ３（60×54－67）cm、Ｐ４（72×60－72）cm、Ｐ５（60×52－34）cm、Ｐ６（46×46－48）cmである。柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に、1.6ｍ、1.6ｍ、2.1ｍ、1.6ｍ、1.5ｍ、2.1ｍである。

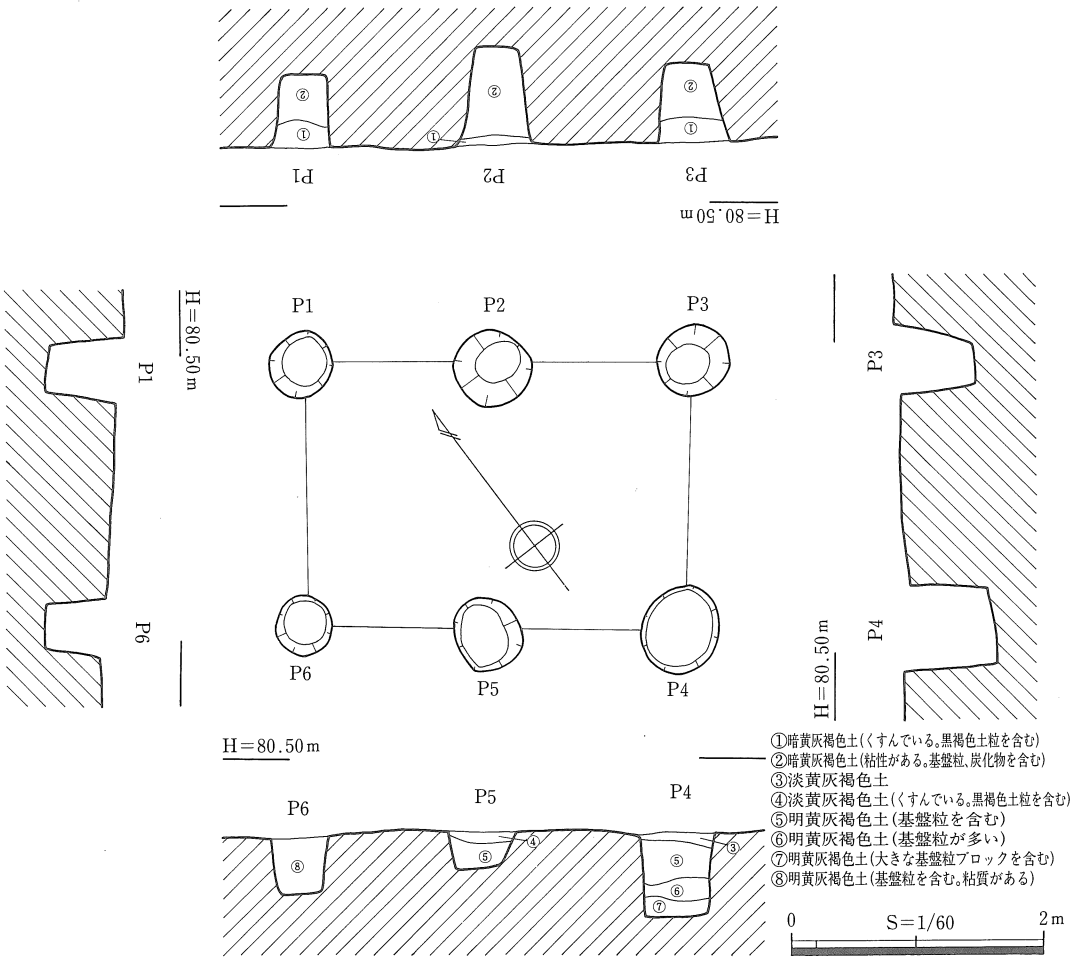
埋　土　埋土は７層からなる。基盤粒を主体とし、粘性があるものが多い。土層の状況より、柱根は抜かれたものと考えられる。

遺物出土状況　Ｐ６・Ｐ２の埋土中より、甕Po１・鼓形器台Po２がそれぞれ出土した。これ以外のすべてのピットにおいても土器片が検出されたが、図化できなかった。一方、Ｐ３の暗黄灰褐色土中には、石材がみられた。さらに、これらの石の間からは炭化物が検出された。樹種鑑定の結果、ネジキと判断された。

時　期　Ｐ６中の甕Po１より、ＣＳＢ01は弥生時代後期後半、大山Ⅲ期のものと思われる。



挿図76　南谷大山遺跡CSB01出土遺物実測図



挿図77　南谷大山遺跡CSB01遺構図

3．土坑・土壙

ＣＳＫ02（挿図78、図版16）

位　置　Ｃ－Ⅱ区の北側のＪ25グリッド、ＣＳＳ02の南側に掘り込まれている。

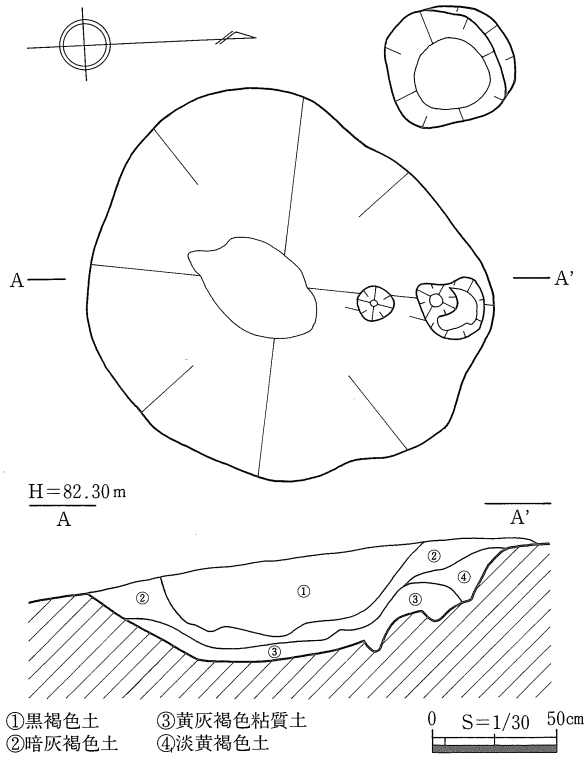
形　態　平面は、上縁不整な楕円形を呈し、上縁部長径1.65ｍ×短径1.53ｍを測る。深さは0.43ｍを測り、断面は皿状を呈す。

埋　土　埋土は、４層に分層できた。

遺　物　埋土中から、土器片が出土しているが、図化できなかった。

時　期　時期を比定できる土器が出土していないため、ＣＳＫ02の時期は不明である。

用　途　ＣＳＫ02の用途は不明である。



挿図78　南谷大山遺跡CSK02遺構図

ＣＳＫ04（挿図79・80、図版17）

位　置　ＣＳＫ04は、Ｃ－Ⅱ区のやや北側のＪ25グリッドにあり、標高約80.1～80.2ｍの南向き斜面に位置する。約1.7ｍ南西にはＳＢ01がある。

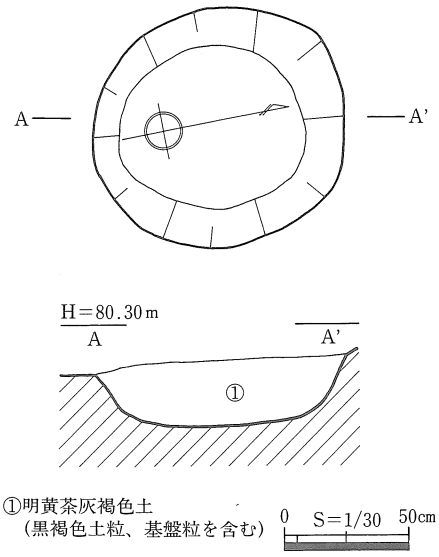
形　態　平面は円形、断面は皿状を呈する。長径1.04ｍ×短径0.94ｍ、深さ0.55ｍを測る。

埋　土　埋土は、明黄茶灰褐色土のみである。この土は土器を伴い、しっかりしている。

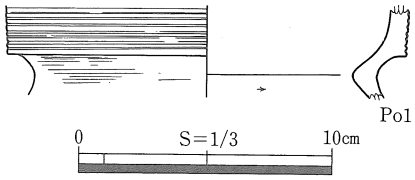
遺　物　遺物としては、埋土下層より甕Po１が出土している。

時　期　甕Po１より、ＣＳＫ04は大山Ⅱ～Ⅲ期、弥生時代後期後半のものと思われる。

用　途　用途は不明である。



挿図79　南谷大山遺跡CSK04遺構図



挿図80　南谷大山遺跡CSK04出土遺物実測図

ＣＳＫ05（挿図81・82、図版17）

位　置　ＣＳＫ05はＣ－Ⅱ区中央部のＩ25グリッドにあり、標高約79.7ｍの平坦面に位置する。約3.3ｍ東にはＣＳＢ01が、約2.6ｍ南西にはＣＳＩ10が、約5.2ｍ西にはＣＳＫ06が、それぞれ位置する。

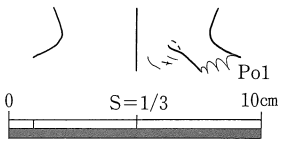
形　態　平面は不整形の長台形状を呈している。断面は逆台形を呈する。上縁部で長軸4.9ｍ×短軸0.9～1.7ｍ、深さ0.45ｍを測る。

埋　土　埋土は３層からなる。これらはいずれも粘性を有する。

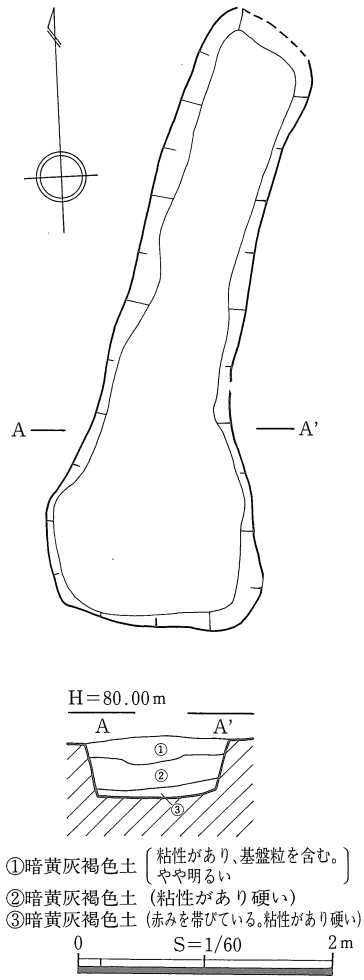
遺　物　遺物としては、暗黄灰褐色土中より出土した蓋Po１が挙げられる。

時　期　蓋Po１より、ＣＳＫ05は大山Ⅲ～Ⅳ期、弥生時代後期後半のものと考えられる。

用　途　用途は不明である。



挿図82　南谷大山遺跡CSK05出土遺物実測図



挿図81　南谷大山遺跡CSK05遺構図

ＣＳＫ06（挿図83、図版17）

位　置　ＣＳＫ06はＣ－Ⅱ区のやや西側のＩ25グリッド、標高約79.4ｍの平坦面に位置する。約1.6ｍ西にはＣＳＫ07が、約5.3ｍ東にはＣＳＫ05が、約0.6ｍ南西にはＣＳＩ09が、そして約5.3ｍ南東にはＣＳＩ10が位置する。

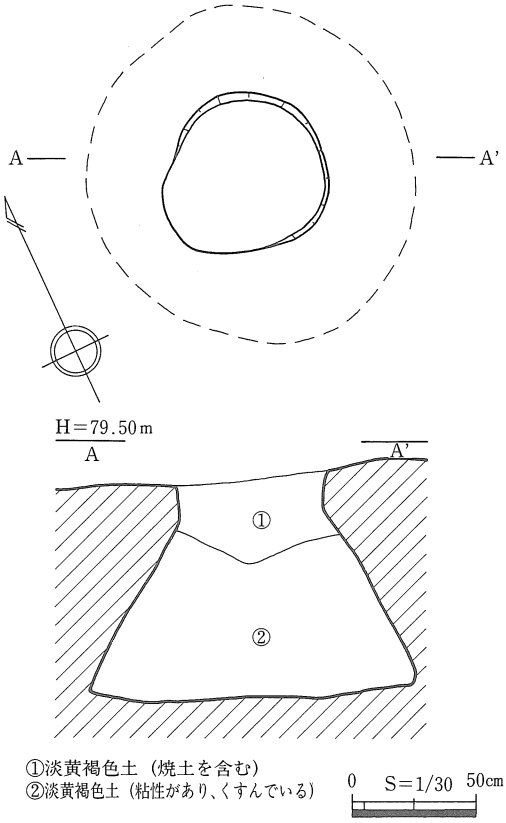
形　態　平面は円形、断面は袋状を呈する。上縁部で長径0.68ｍ×短径0.64ｍを、底部では長径1.4ｍ×短径1.3ｍを測る。深さは約0.9ｍである。

埋　土　埋土は２層からなる。

遺　物　埋土中より土器片が検出されたが、図化することは出来なかった。

時　期　ＣＳＫ06からは、時期を特定する遺物が出土していないため、時期は不明であるが、この地域の貯蔵の形態から考えると、当遺構の時期は弥生時代後期以前に限定される。

さらに、当土坑は近接するＣＳＫ07とペアで利用されていたと、考えることもできる。この場合、ＣＳＫ07が大山Ⅳ期、弥生時代後期後半のものと考えられることから、当遺構も前者と非常に近い時期のものといえよう。



挿図83　南谷大山遺跡CSK06遺構図

用　途　袋状を呈することから、ＣＳＫ06は貯蔵穴として用いられたと思われる。

ＣＳＫ07（挿図84・85、図版17・18・40）

位　置　ＣＳＫ07はＣ－Ⅱ区の西側のＨ25グリッドにあり、標高約79ｍの平坦面に位置する。当遺構は、南部でＣＳＩ09と接している。この他、約1.7ｍ東にはＣＳＫ06が、約7.4ｍ北東にはＣＳＫ05が、約6.8ｍ東にはＣＳＩ10が、それぞれ位置する。

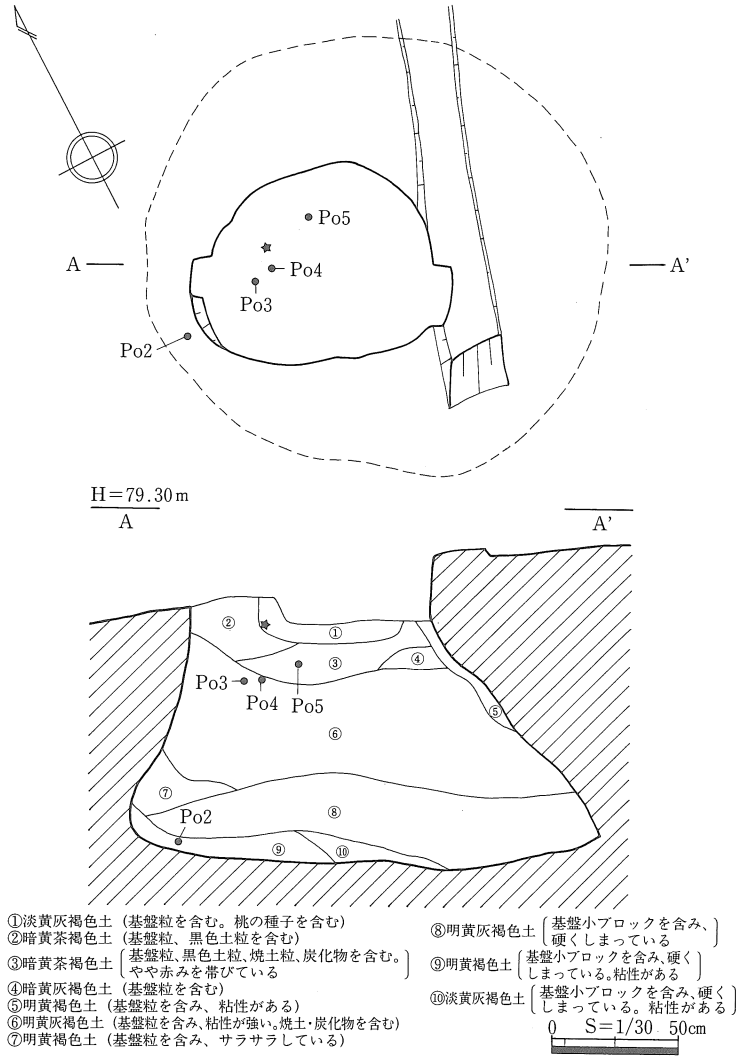
形　態　平面は上縁部不整形、底部円形を呈し、断面は袋状を呈する。上縁部で長径0.9ｍ×短径0.8ｍを、底部では長径1.9ｍ×短径1.7ｍを測る。深さは約１ｍである。

埋　土　埋土は10層からなる。いずれも基盤粒を主体とするものである。堆積の状況より、壁が崩落しながら堆積したと思われる。

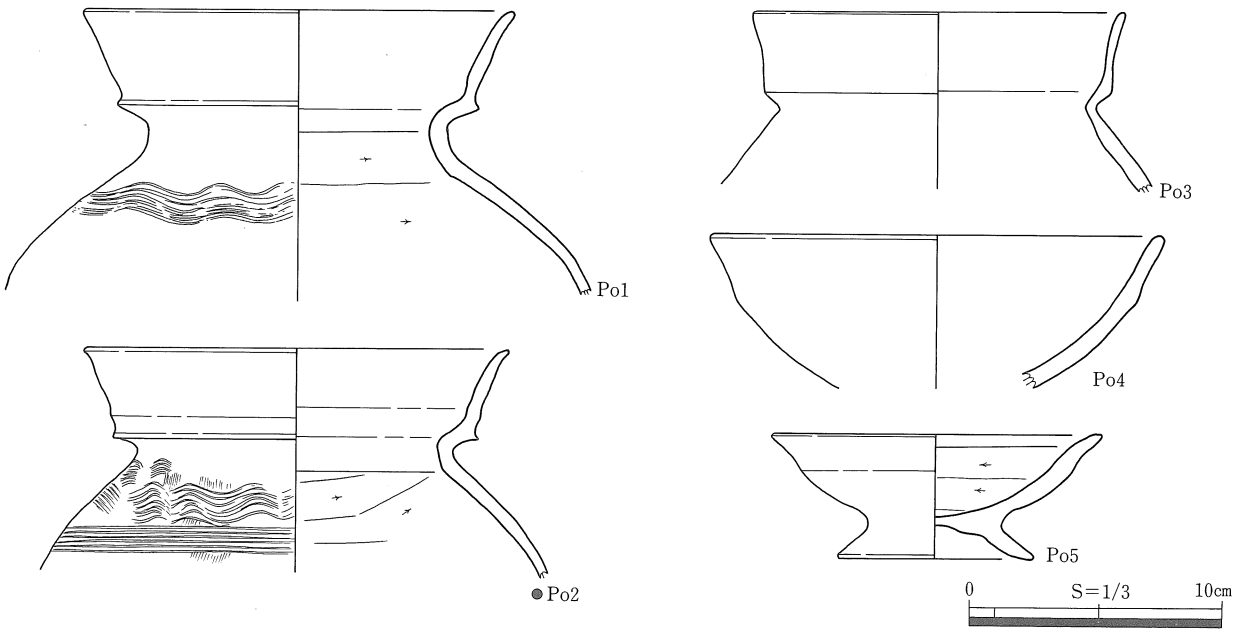
遺　物　底面より甕Po２が、埋土上層より壺Po１・甕Po３・高杯Po４・低脚杯Po５が検出された。これらのうち甕Po２・低脚杯Po５は、逆さまの状態で出土した。一方、淡黄灰褐色土中より種子が検出された。鑑定の結果、モモ核と判断された。

時　期　床面出土の土器Po２より、ＣＳＫ07は大山Ⅳ期、弥生時代後期後半頃と考えられる。前述したとおり、近接するＣＳＫ06とはペアで利用されていたと考えられる。

用　途　袋状を呈すること・多くの土器を伴うこと・モモ核が出土したこと等から、ＣＳＫ07は貯蔵穴として用いられたと判断される。



挿図84　南谷大山遺跡CSK07遺構図



挿図85　南谷大山遺跡CSK07出土遺物実測図

ＣＳＫ14（挿図86、図版18）

位　置　ＣＳＫ14は、Ｃ－Ⅱ区の中央部のＩ25・Ｊ25グリッドにあり、標高約79.8～80.1ｍの平坦面に位置する。約2.3ｍ北東にはＣＳＫ04が、約１ｍ西にはＣＳＫ05が、約2.8ｍ南西にはＣＳＩ10が、約9.5ｍ南西にはＣＳＩ09が、それぞれ位置する。一方、東ではＣＳＢ01と接している。

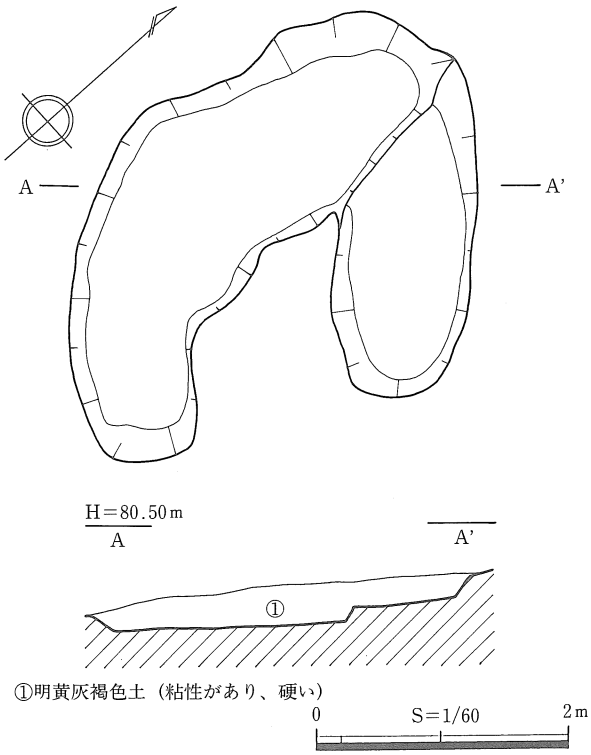
形　態　平面は不整形で、逆「コ」字状を呈し、断面は方形を呈する。上縁部で東西3.1ｍ、南北3.5ｍ、底面で東西約2.6ｍ、南北約2.8ｍを測る。幅1.0～1.35ｍ、深さは0.45ｍである。

埋　土　埋土は、明黄灰褐色土のみである。

遺　物　埋土中からわずかに弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。

時　期　確かな時期は不明であるが、弥生時代頃のものと考えられる。

用　途　用途は不明である。



挿図86　南谷大山遺跡CSK14遺構図

４．段状遺構

ＣＳＳ02（挿図87、図版18）

位　置　ＣＳＳ02は、Ｃ－Ⅱ区のＪ22・Ｊ23・Ｊ25・Ｋ24・Ｋ25グリッドにあり、標高81.6～83.4ｍの南西に傾斜する斜面に位置する。北東側約７ｍにはＣＳＳ01、南東側はＣＳＳ03に接続している。

形　態　斜面を最大0.48ｍ削り込み、平坦面を作っている。平坦面は、「Ｌ」字状を呈し、東西約5.8ｍ、南北約10.1ｍを測る。平坦面は、緩やかに傾斜している。

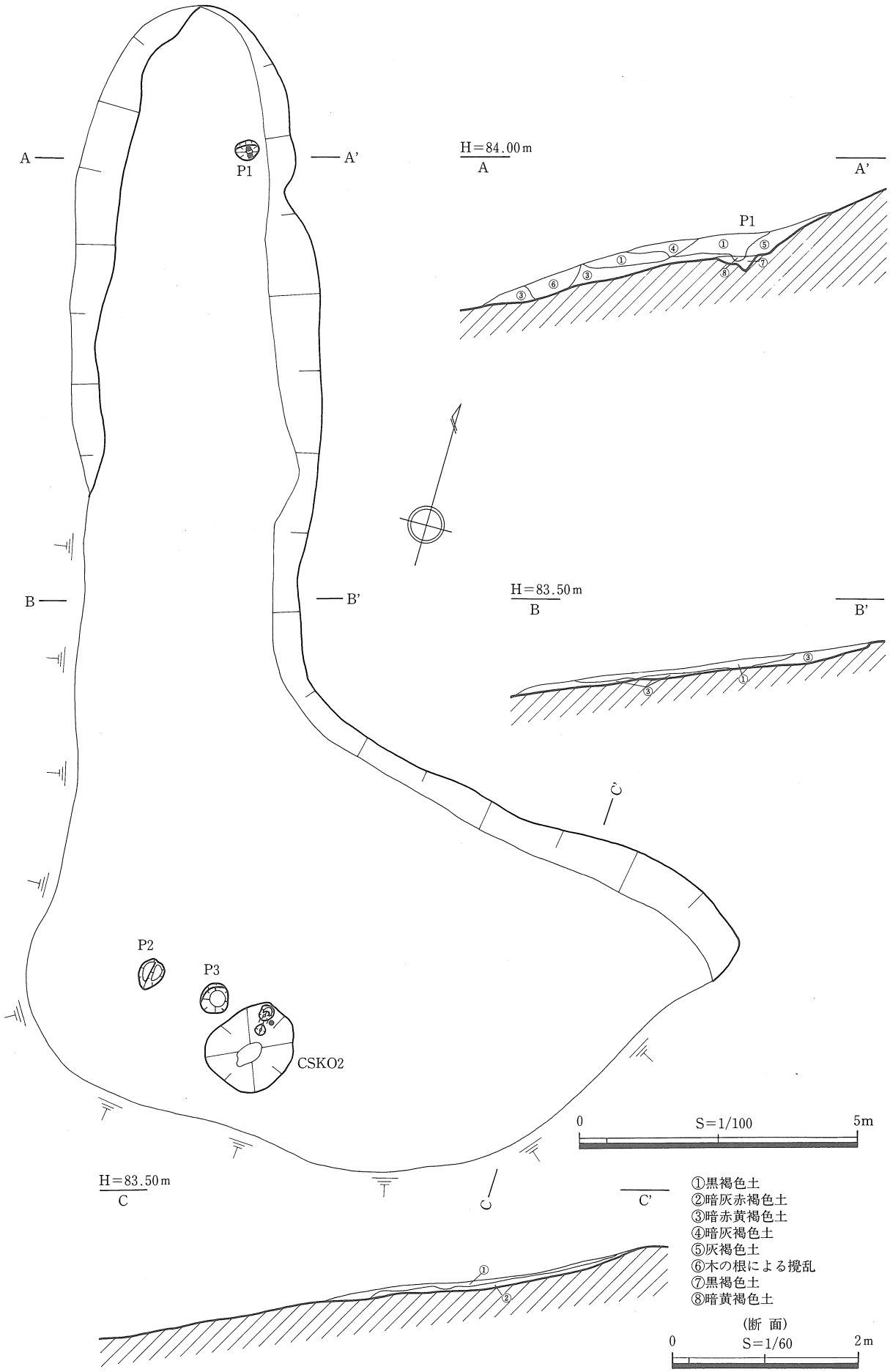
北側斜面際には（40×35－10）cmを測るＰ１が、南側平坦面には（52×39－16）cmを測るＰ２、（53×50－73）cmを測るＰ３、ＣＳＫ02が作られている。

埋　土　埋土は５層からなる。

遺　物　埋土中から土器片が出土しているが、図化できなかった。

時　期　ＣＳＳ02の時期は不明である。

用　途　用途は不明である。



挿図87　南谷大山遺跡CSSO2遺構図

ＣＳＳ03（挿図88～90、図版18・41）

位　　置　ＣＳＳ03は、南側へ延び出す狭い尾根の基部にあたり、Ｃ－Ⅱ区のＩ23・Ｉ24・Ｉ25・Ｉ26・Ｊ24・Ｊ25・Ｊ26・Ｋ25グリッドに位置する。標高は約79.25～81.75ｍである。北東側でＣＳＳ02と接する。約2.4ｍ東にはＣＳＩ02が、約17.3ｍ西にはＣＳＳ06がそれぞれ位置する。一方、平坦面の中には、ＣＳＩ09・10、ＣＳＢ01、ＣＳＫ04・05・06・07・14がある。

形　　態　南側に延びる尾根を、約3.5ｍ削り込み、平坦面を作っている。平坦面は、不整形な「Ｌ」字状を呈し、東西約13.1ｍ、南北約20.7ｍ以上を測る。南側は調査区外に延びている。

ピット群　遺構内に39のピットが見られる。埋土は主に基盤粒で、規模等は挿表２を参照されたい。

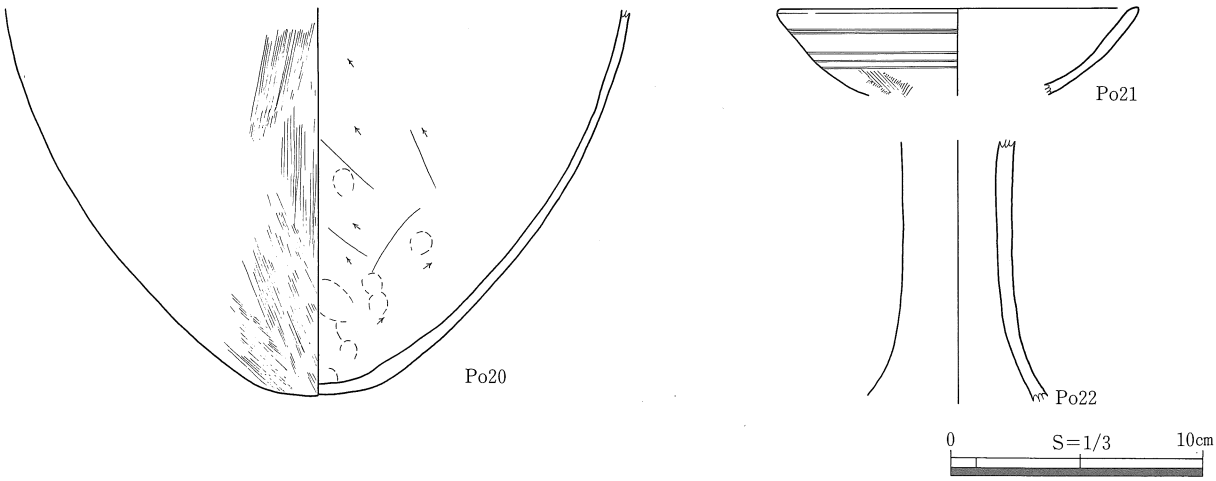
埋　　土　埋土は９層からなる。これらの土層を観察すると、当遺構の埋土は自然堆積を窺わせる。

遺　　物　図化できたものには、甕Po１～Po17・注口土器Po18・肩部Po19・底部Po20・低脚杯Po21・高杯脚部Po22がある。

出土状況　このうち床面近くでPo12が、Ｐ26内からPo１が、Ｐ28内からPo９が出土している。

それ以外は埋土中からの出土である。

これらの他には、遺構の北側と東側でモモ核が、それぞれ１つずつ検出された。特に前者は甕Po12のすぐ近く、暗黄茶褐色土中の底面付近で出土した。

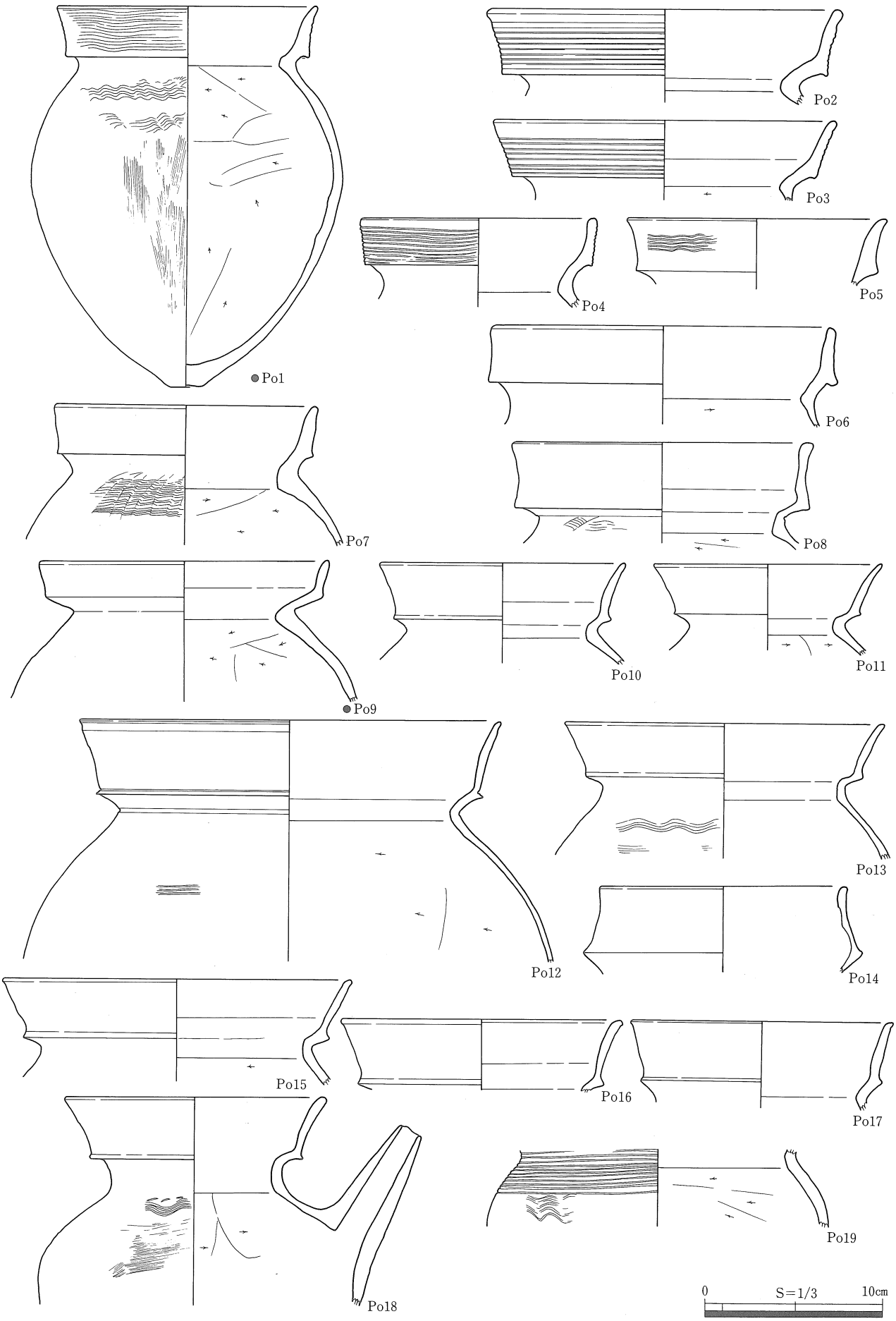


挿図88　南谷大山遺跡CSS03出土遺物実測図(1)

ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）
1	43×40－27.7	11	55×40－51.7	21	55×50－15.6	31	35×30－20.2
2	37×35－16.6	12	110×70－20.1	22	45×42－25.5	32	50×32－10.6
3	24×23－11.0	13	50×40－65.3	23	33×20－62.1	33	35×33－35.2
4	35×32－20.2	14	70×43－70.8	24	55×35－54.8	34	43×35－12.4
5	37×35－29.0	15	42×35－33.6	25	43×30－15.3	35	48×40－10.5
6	38×36－17.6	16	40×38－39.9	26	78×75－70.7	36	48×35－25.2
7	60×50－18.2	17	53×50－14.5	27	45×34－22.1	37	40×35－24.8
8	38×35－11.3	18	55×43－40.1	28	68×65－24.5	38	42×40－43.5
9	35×33－18.4	19	47×40－48.6	29	70×68－19.8	39	57×50－24.9
10	33×28－21.9	20	43×30－21.4	30	45×40－37.2		

挿表２　南谷大山遺跡CSS03ピット群一覧表

挿図89　南谷大山遺跡CSS03遺構図



挿図90　南谷大山遺跡CSS03出土遺物実測図(2)

時　　期　底面およびピット内出土の土器から、ＣＳＳ03は大山Ⅲ期、弥生時代後期後半頃のものと思われる。

用　　途　用途は不明である。

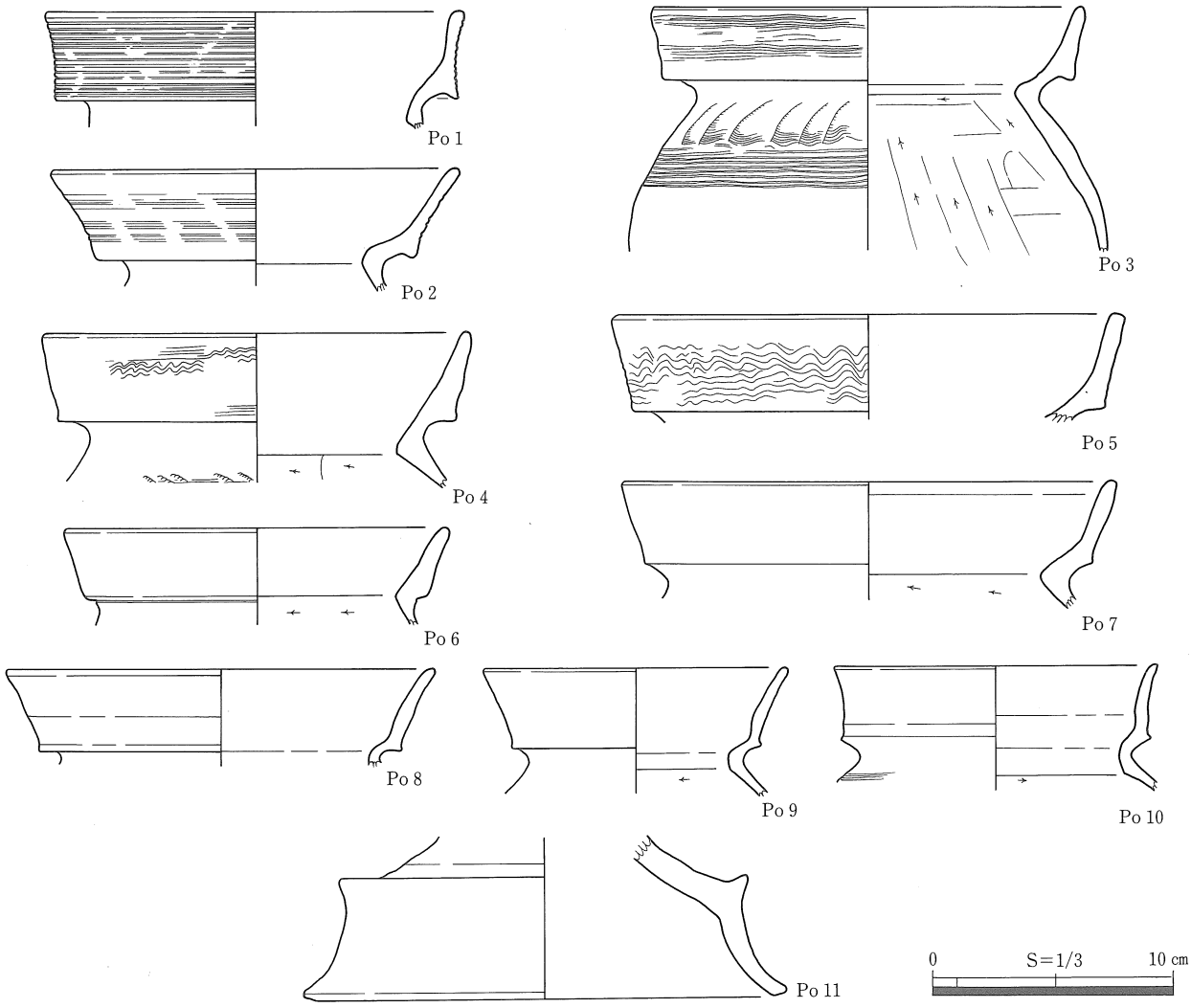
５．遺構外遺物について（挿図91、図版41）

遺構外からは、図化できたものに甕Po１～Po10、鼓形器台Po11がある。

このうちPo１はＩ26グリッド、Po２～Po４・Po８はH24・Ｊ24グリッドの平坦部、Po５はK25グリッド、Po６・Po７・Po９・Po10はＩ23・Ｉ24グリッドの斜面部、Po11はＪ26グリッドの平坦部から出土している。

Po１～Po５は、口縁部に施文が施され、口縁部下端が下垂することから大山Ⅱ期と考えられる。Po６・Po７は、口縁部がやや厚手でナデのみになることから大山Ⅲ期、Po８・Po９は口縁部ナデのみでシャープな作りになることから大山Ⅳ期、Po10は口縁端部が平坦面をもつことから大山Ⅴ期頃と考えられる。Po11は、大山Ⅲ期頃のものと考えられる。

これらの遺物は、Ｃ－Ⅱ区の遺構の時期とほぼ重なるもので、出土位置は遺構外になるものの、これらの遺構に関わるものと考えられる。



挿図91　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅱ区遺構外出土遺物実測図

第5節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅲ区の概要

位　　置　Ｃ－Ⅲ区は、標高63～76ｍの、Ｃ－Ⅰ区・Ｃ－Ⅱ区にはさまれた谷底の部分に遺跡が展開する地区である。この地区は、表土が0.75～１ｍと非常に厚く堆積しており、表土中から弥生土器・土師器が多量に検出されている。これらは、Ｃ－Ⅰ区・Ｃ－Ⅱ区から流れ込んだものと考えられる。

遺　　構　この地区では、溝状遺構ＣＳＤ03・04、ピット群が検出されている。この地区で検出された遺構は、いずれも時期が不明である。

また、この地区をさらに掘り下げたところ、遺構検出面から0.6～1.0ｍ下で旧表土が検出された。旧表土と遺構検出面との間では、遺物は検出されなかった。

第6節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅲ区の調査結果

１．溝状遺構

ＣＳＤ03・04（挿図92・93、図版19）

位　　置　ＣＳＤ03・04は、Ｃ－Ⅲ区のほぼ全域のＬ26・Ｌ27・Ｌ28・Ｌ29・M25・M26・M29・Ｎ25・Ｎ26・Ｎ27・Ｎ28・Ｎ29・Ｎ30グリッドにあり、標高約65.1～74.7ｍの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置し、谷底を囲むように二重に走る。外側のものをＣＳＤ03、内側のものをＣＳＤ04とした。

ＣＳＤ04の内側には、ピット群がある。

形　　態　ＣＳＤ03は、Ｃ－Ⅲ区の谷部を逆「Ｕ」字状に取り囲んでいる。北側は一部流失しており、段状を呈す。南側は流失している。総延長約34ｍ、幅約0.5～1.1ｍ、深さ13～40㎝を測り、断面は「Ｕ」字状を呈す。

ＣＳＤ04は、ＣＳＤ03の内側を廻るもので、同様に、谷底を囲むように逆「Ｕ」字状に廻っている。北側は一部流失しており、段状を呈す。南側は流失している。総延長約77.5ｍ、幅0.7～2.3ｍ、深さ約30㎝を測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

また、ＣＳＤ04の内側には、溝と溝を結ぶように谷に直交して走る溝が２本検出されている。北側のものは、やや弧状を呈し、長さ約12ｍ、幅0.4～0.8ｍ、深さ約５㎝を測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

南側のものは、部分的に途切れるものの、やや弧状を呈し、総延長約11ｍ、幅0.5～1.5ｍ、深さ16～54㎝を測り、断面「Ｕ」字状を呈す。西側の溝は調査区外に延び込む。

埋　　土　埋土は２層に分層でき、これらは、自然堆積と考えられる。ＣＳＤ03・04とも谷底の埋土を切り込んで作っており、谷底のピット群より新しいものである。

遺　　物　遺物は全く検出されなかった。

時期・用途　ＣＳＤ03・04とも、時期・用途は不明であるが、ＣＳＩ02埋土中から治平元宝が出土しており、中世以降の耕作等に関わるものと考えられる。また、立地的にＣ－Ⅴ区の溝状遺構と類似しており、近世まで下るものとも考えられる。

2．ピット群（挿図92、図版19）

位　　置　C－Ⅲ区の、CSD04に囲まれた部分に作られている。

形　　態　総数107個検出されている。不整形を呈するものがほとんどで、大きさ・深さはさほど大きくない。規模等は挿表3を参照されたい。

これらは全て不規則に並んでおり、柱穴等と考えられるものはなかった。

埋　　土　埋土は、黒褐色土が単層ではいる。

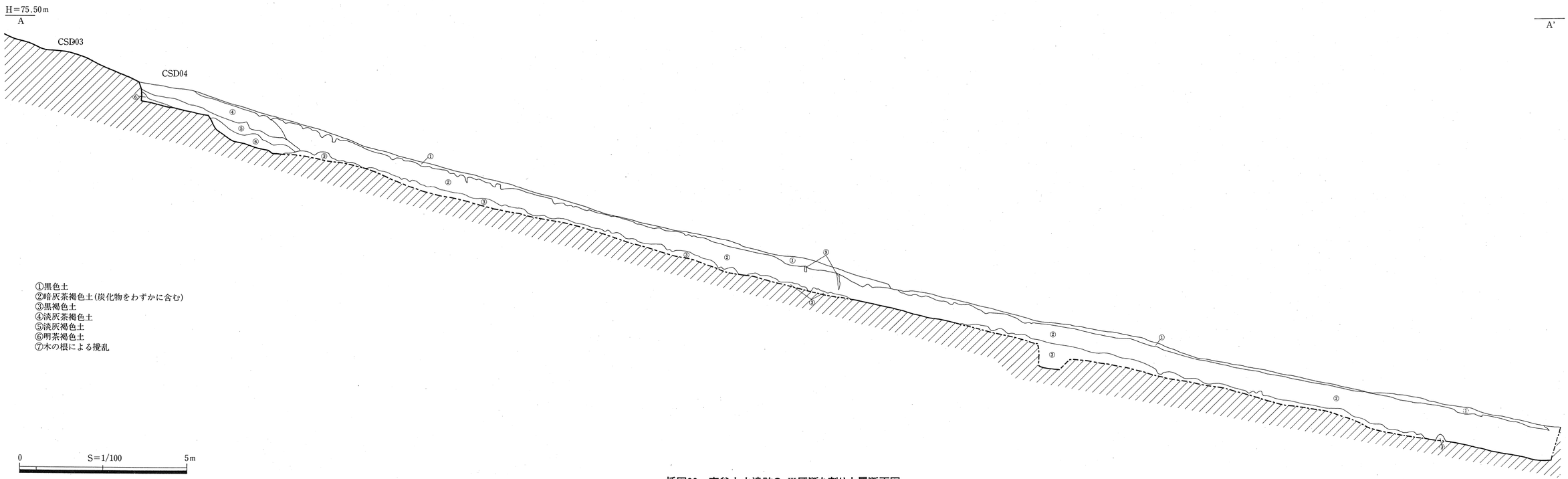
遺　　物　埋土中から土器片が出土したものもあるが、小片のため図化できなかった。

時期・用途　時期を判断する土器が出土していないため、ピット群の時期は不明であるが、CSD03・04よりは、切り合い関係から若干遡るものと考えられる。

ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）
1	58×50－25.5	28	20×20－ 9.0	55	46×35－13.0	82	26×22－20.6
2	90×60－25.9	29	40×20－11.4	56	16×15－11.0	83	23×18－19.2
3	85×55－21.8	30	33×26－14.6	57	35×33－10.1	84	43×32－21.2
4	32×25－10.2	31	40×26－13.9	58	40×33－17.1	85	38×27－11.5
5	40×30－20.0	32	18×12－11.1	59	35×30－15.6	86	60×30－26.2
6	30×23－ 6.0	33	45×30－15.2	60	30×25－21.8	87	50×17－24.4
7	55×35－16.4	34	40×35－11.5	61	35×23－27.5	88	70×22－16.0
8	85×55－28.2	35	23×22－13.8	62	34×22－16.1	89	38×28－24.6
9	45×33－19.3	36	45×43－15.2	63	46×36－22.8	90	25×23－ 6.7
10	33×25－ 9.8	37	50×40－26.0	64	55×40－14.3	91	40×25－11.9
11	35×30－20.5	38	45×30－13.1	65	90×36－ 7.7	92	25×10－11.2
12	130×35－32.7	39	50×40－13.1	66	28×25－11.9	93	28×18－11.0
13	30×25－13.7	40	45×30－19.4	67	40×30－16.0	94	35×24－10.2
14	40×35－17.5	41	40×25－17.6	68	85×70－24.0	95	35×23－17.6
15	20×20－ 8.0	42	25×20－11.3	69	30×18－16.5	96	28×25－10.1
16	45×22－18.8	43	40×20－18.3	70	45×28－17.0	97	28×25－18.0
17	45×25－17.3	44	40×27－18.4	71	50×22－16.9	98	30×15－13.0
18	60×25－18.5	45	18×15－10.3	72	72×40－28.8	99	27×17－20.5
19	40×20－11.7	46	20×20－12.5	73	30×25－12.5	100	38×17－ 9.5
20	18×16－11.8	47	55×50－14.4	74	55×30－15.3	101	27×22－13.3
21	35×28－11.6	48	35×20－16.7	75	50×40－17.8	102	23×20－ 9.5
22	40×33－11.6	49	27×23－15.4	76	50×25－14.2	103	30×25－13.3
23	35×28－31.7	50	40×36－38.4	77	68×15－24.7	104	37×30－11.6
24	75×65－20.1	51	50×30－23.5	78	60×45－25.5	105	50×46－ 8.8
25	63×55－24.8	52	45×33－ 9.8	79	90×30－22.8	106	35×25－18.1
26	23×20－11.6	53	30×23－26.7	80	28×24－23.7	107	17×15－ 8.5
27	45×25－26.7	54	70×65－30.3	81	45×30－15.0		

挿表3　南谷大山遺跡C－Ⅲ区ピット群一覧表

挿図92　南谷大山遺跡CSD03・04、ピット群遺構図



挿図93　南谷大山遺跡C-Ⅲ区断ち割り土層断面図

3．遺構外遺物について（挿図94、図版41・42）

遺構外からは、図化できたものに甕Po１～Po９、底部Po10、低脚杯Po11、土錘Po12～Po14がある。

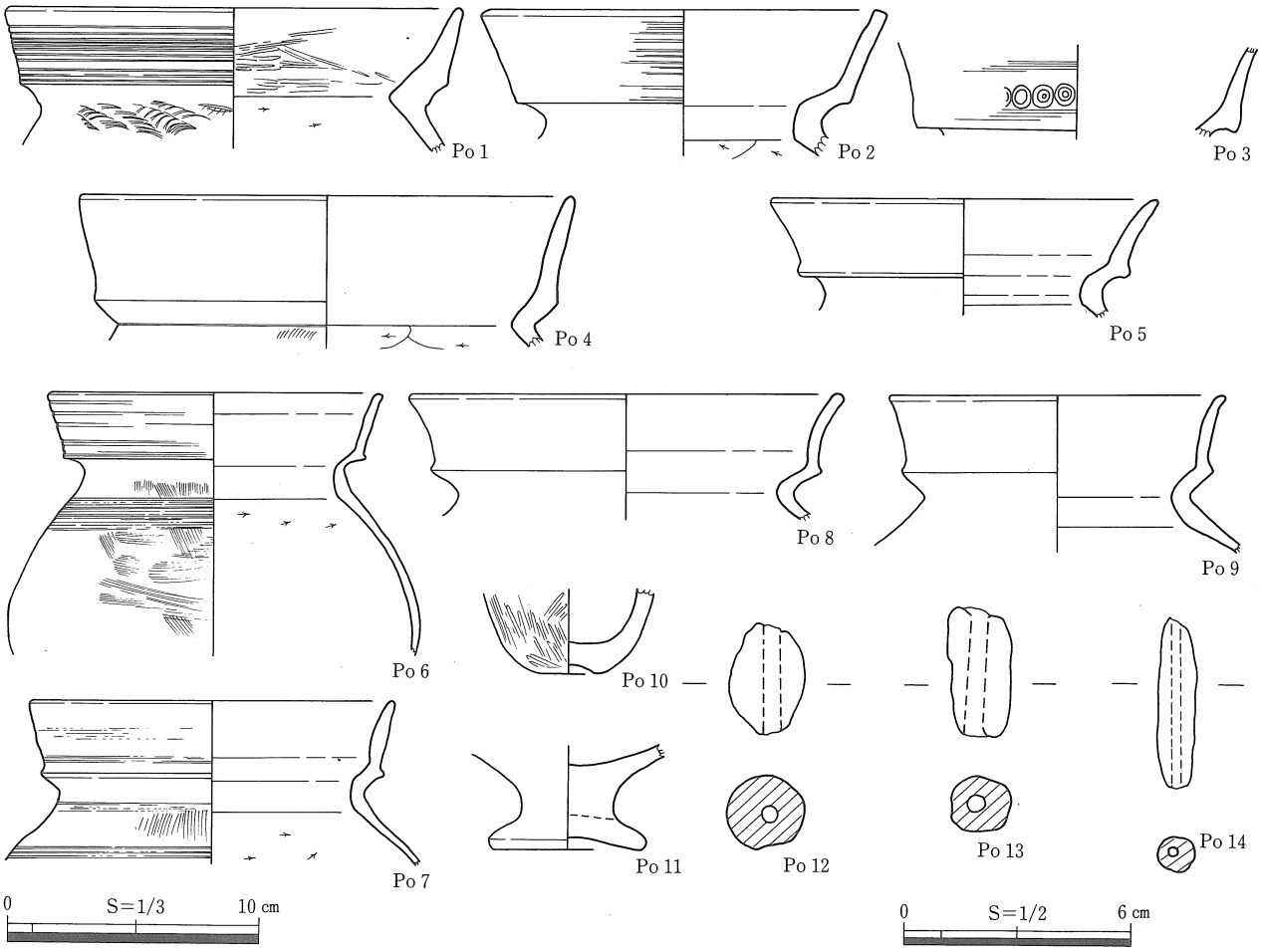
いずれも表土および黒褐色土中からの出土である。

Po１は、口縁部に施文が施され、内面にミガキが見られることから大山Ⅱ期、Po２・Po３は、口縁部に施文が施されるが頸部屈曲部が丸味をもつことから大山Ⅲ期、Po４・Po５も口縁部がやや厚手でナデのみになることから大山Ⅲ期、Po６・Po７は口縁部ナデのみでシャープな作りになり、口縁端部が平坦面をもつことから大山Ⅴ期、Po８・Po9は口縁部下端が退化傾向を示すことから大山Ⅵ期頃のものと考えられる。

Po10・Po12～Po14は時期不明、Po11は大山Ⅲ～Ⅳ期頃のものと考えられる。

このうち、Po３は、３重圏のスタンプ文が施されるものである。スタンプ文が施されるものは、南谷大山遺跡ではPo３のみである。

これらの遺物は、いずれも表土および黒褐色土中からの出土であり、Ｃ－Ⅲ区の遺構の時期を比定できるものではない。また、これらは、弥生時代後期後半～古墳時代前期後半頃にかけてと幅があり、出土位置から考えて、Ｃ－Ⅰ区・Ｃ－Ⅱ区から流れ落ちてきたものと考えられる。



挿図94　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅲ区遺構外出土遺物実測図

第７節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅳ区の概要

位　　置　Ｃ－Ⅳ区は、Ｃ－Ⅱ区の西側、標高61～78ｍの急斜面部である。この地区は、調査前の地形測量で大きくカール状にえぐられる箇所が見つかり、この部分にトレンチを設定したところ、多量の土師器片が出土したため、調査区にとり込んだ。

遺　　構　この地区では、古墳時代前期と考えられる段状遺構ＣＳＳ06、弥生時代後期～古墳時代前期にかけてと考えられる溝状遺構ＣＳＤ12、時期は不明であるがＣＳＤ12に続くように溝状遺構ＣＳＤ16が作られている。

第８節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅳ区の調査結果

１．段状遺構

ＣＳＳ06（挿図95～97、図版19・20・42）

位　　置　ＣＳＳ06は、Ｃ－Ⅳ区のほぼ中央部のＧ23・Ｇ24グリッドにあり、標高67.32～68.66ｍの、西に傾斜する急斜面となっている。斜面の上方、約17.3ｍ東にはＣＳＳ03が、約21.7ｍ南東にはＣＳＩ09が、約20ｍ南東にはＣＳＫ07が、約20.9ｍ南東にはＣＳＫ06がそれぞれ位置する。一方、斜面の下側では、約10.6ｍ西にＣＳＤ12が南北に走っている。

形　　態　斜面を不整形な三角形状に掘り込んで、平坦面を作っている。規模は、底面で東西約3.3ｍ、南北約4.4ｍを測る。高低差は約1.2ｍである。底面は緩やかに傾斜している。

埋　　土　埋土は７層からなる。これらの土層を観察すると、③・⑥層は基盤の礫を含む層で、人工的に埋められたものと考えることができる。

ピ　ッ　ト　平坦面にピットが２個検出されている。

Ｐ１は平面円形を呈し、二段に掘り込まれている。規模は（73×67－52）cmである。Ｐ２は（86×81－42）cmを測る。

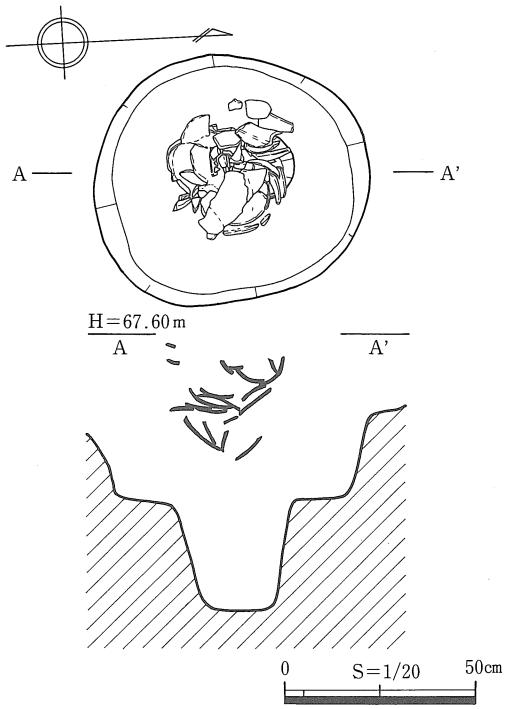
周辺ピット　遺構周辺には、計12個のピットが検出されている。これらは径30cm程度と小さく、深さも10～20cm程度である。いずれも不規則に並んでいる。

遺　　物　遺物としては、Ｐ１中より壺Po１・Po２が出
出土状況　土している。これらは、潰れた状態でしかも重なり合って、出土している。

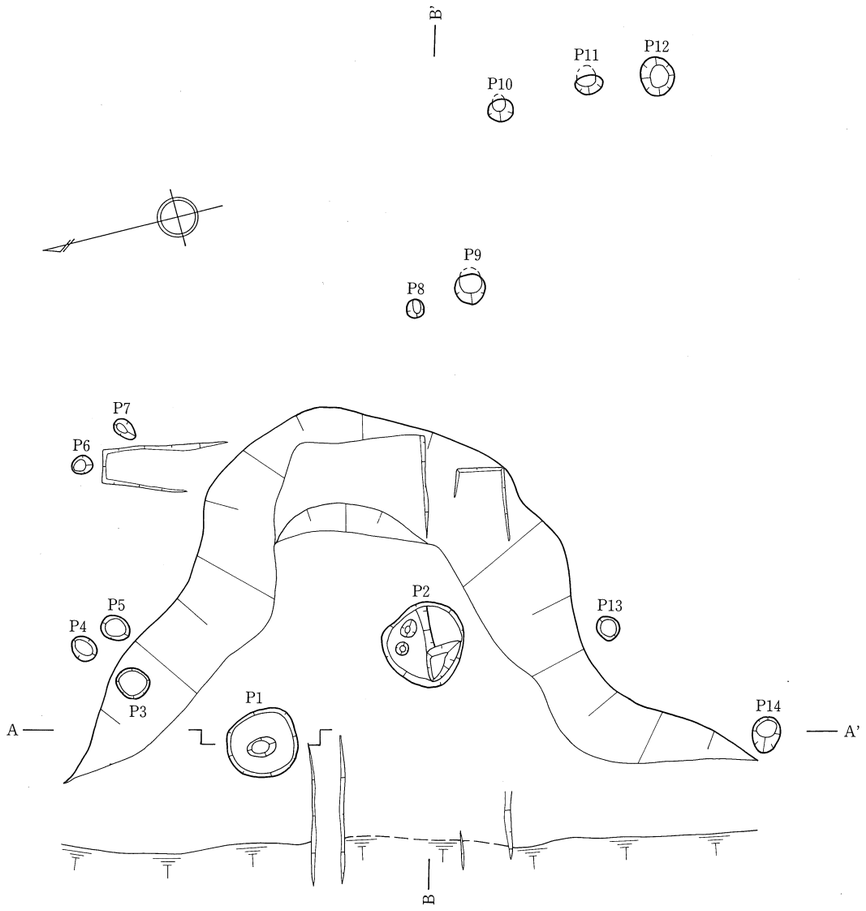
このほか、埋土中から土器片が出土しているが、図化できなかった。

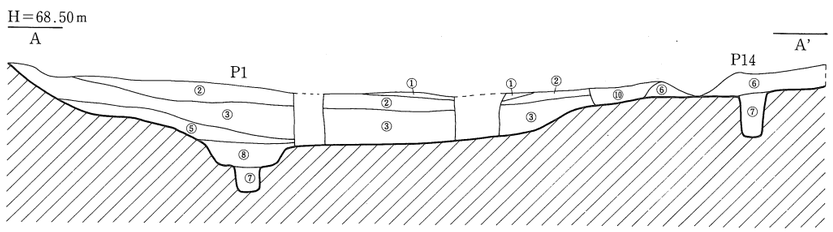
時　　期　壺Po１・Po２より、ＣＳＳ06は大山Ⅴ期、古墳時代前期前半頃のものと思われる。

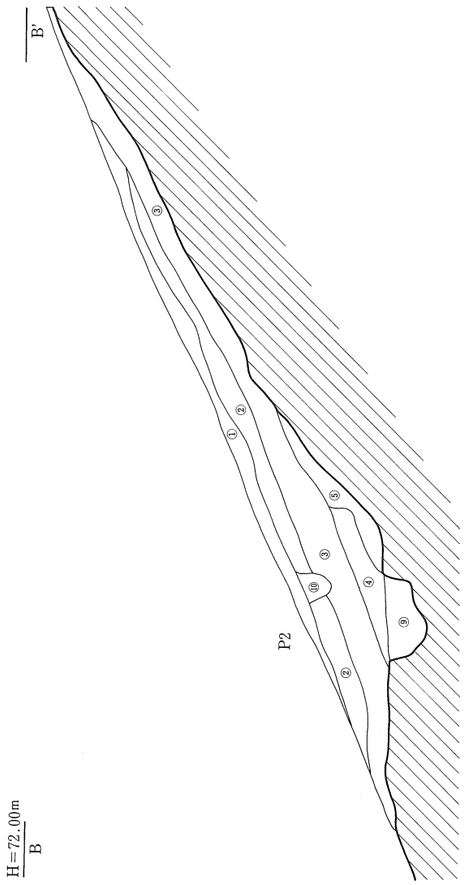
用　　途　急斜面に造られ、大型の主柱穴が掘り込まれており、祭祀的な意味合いが濃いものと考えられる。



挿図95　南谷大山遺跡CSS06P1内土器検出状況図



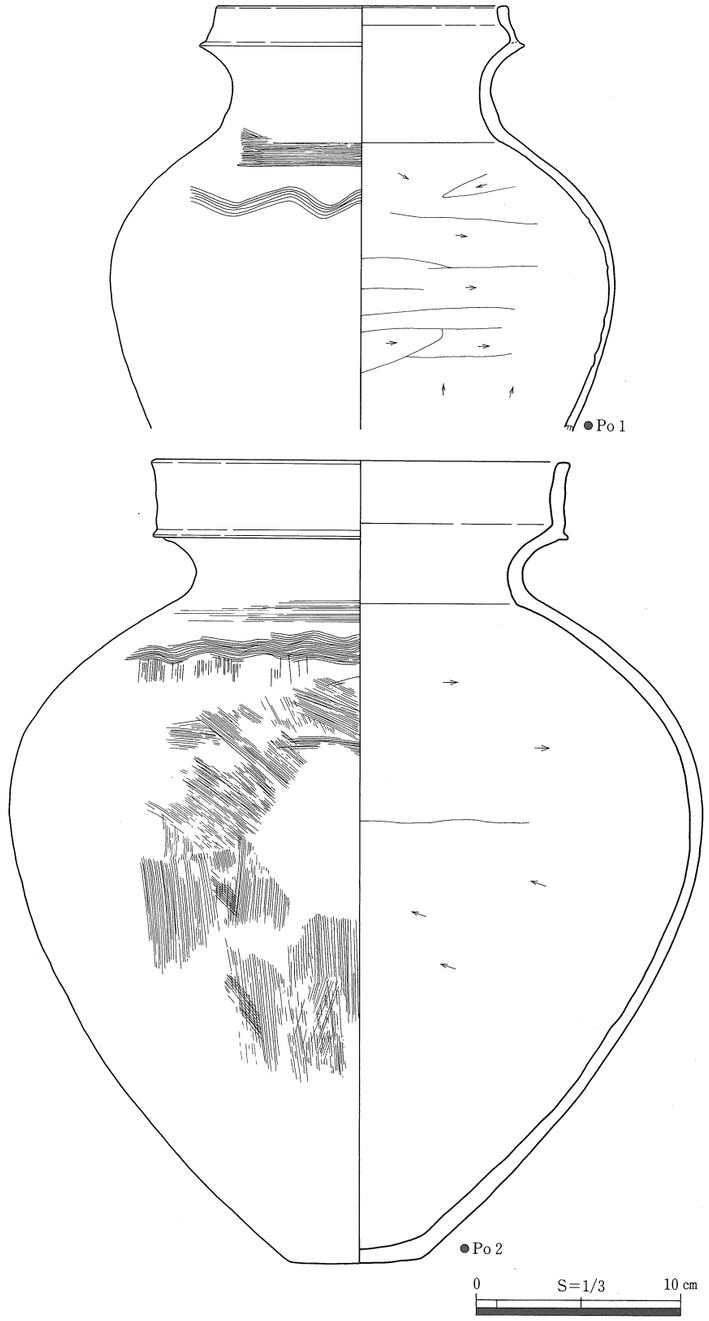




①暗黒褐色土
②暗黄褐色土（くすんでいる）
③暗赤褐色土（暗赤褐色ブロックを含む）
④淡黄褐色土
⑤暗赤褐色土（淡黄褐色土粒を含む）
⑥明黄褐色土（明黄褐色ブロックを含む）
⑦明黄褐色土
⑧明黄褐色土（暗赤褐色ロームブロックを含む）
⑨明黄褐色土（暗赤褐色土粒、明黄褐色ロームブロックを含む）
⑩木の根による攪乱

0 S=1/60 2m

挿図96　南谷大山遺跡CSS06遺構図



挿図97　南谷大山遺跡CSS06出土遺物実測図

2．溝状遺構

ＣＳＤ12・16（挿図98・99、図版20・42）

位　　置　ＣＳＤ12・16はＣ－Ⅳ区の西側、Ｇ20・Ｇ21・Ｆ21・Ｆ22・Ｆ23・Ｆ24・Ｅ24グリッドに位置する。付近は標高約60～66ｍの急斜面である。ＣＳＤ12は、ほぼ南北方向に走っている。ＣＳＤ16は、ＣＳＤ12の北東側に約0.5ｍ離れて位置する。約3.3ｍ西にはＣＳＤ13が、約8.4ｍ西にはＣＳＤ10がそれぞれ平行して走っている。約10.6ｍ東にはＣＳＳ06が位置する。ＣＳＤ12の南側は調査区外に延びだしている。

形　　態
ＣＳＤ12　ＣＳＤ12は、現状で長さ約47.5ｍ、溝の幅約0.4～1.1ｍ、深さ約30～50cmを測り、断面は「Ｖ」字状を呈する。

ＣＳＤ16　ＣＳＤ16は、斜面に立地するため、北側・西側は流失しており、原形をとどめていない。中央には段があり、北側が低くなっている。長さ約47.5cm、幅約0.4～1.1ｍ、深さ約30～50cmを測る。断面は「Ｕ」字状を呈すものと考えられる。

埋　　土　ＣＳＤ12の埋土は５層からなり、ＣＳＤ16の埋土は暗灰茶褐色土のみである。これらは、自然堆積と思われる。

遺　　物
出土状況　ＣＳＤ12では、図化できたものには、壺Po１・甕Po２～Po６がある。いずれも埋土中からの出土であり、これらのうち、壺Po１・甕Po３～Po５は南部より、甕Po２・Po６は北部より出土した。

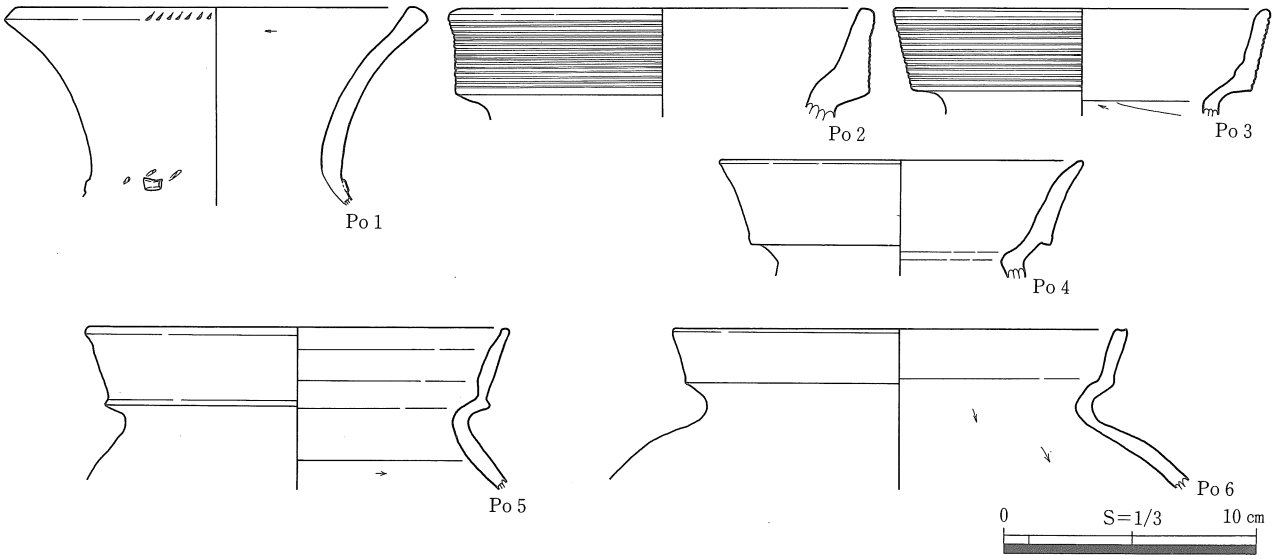
ＣＳＤ16からは遺物は検出されなかった。

時　　期　甕Po２～Po４は弥生時代後期の特徴を有するが、甕Po５は古墳時代前期の特徴をもつことから、ＣＳＤ12は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと、判断される。

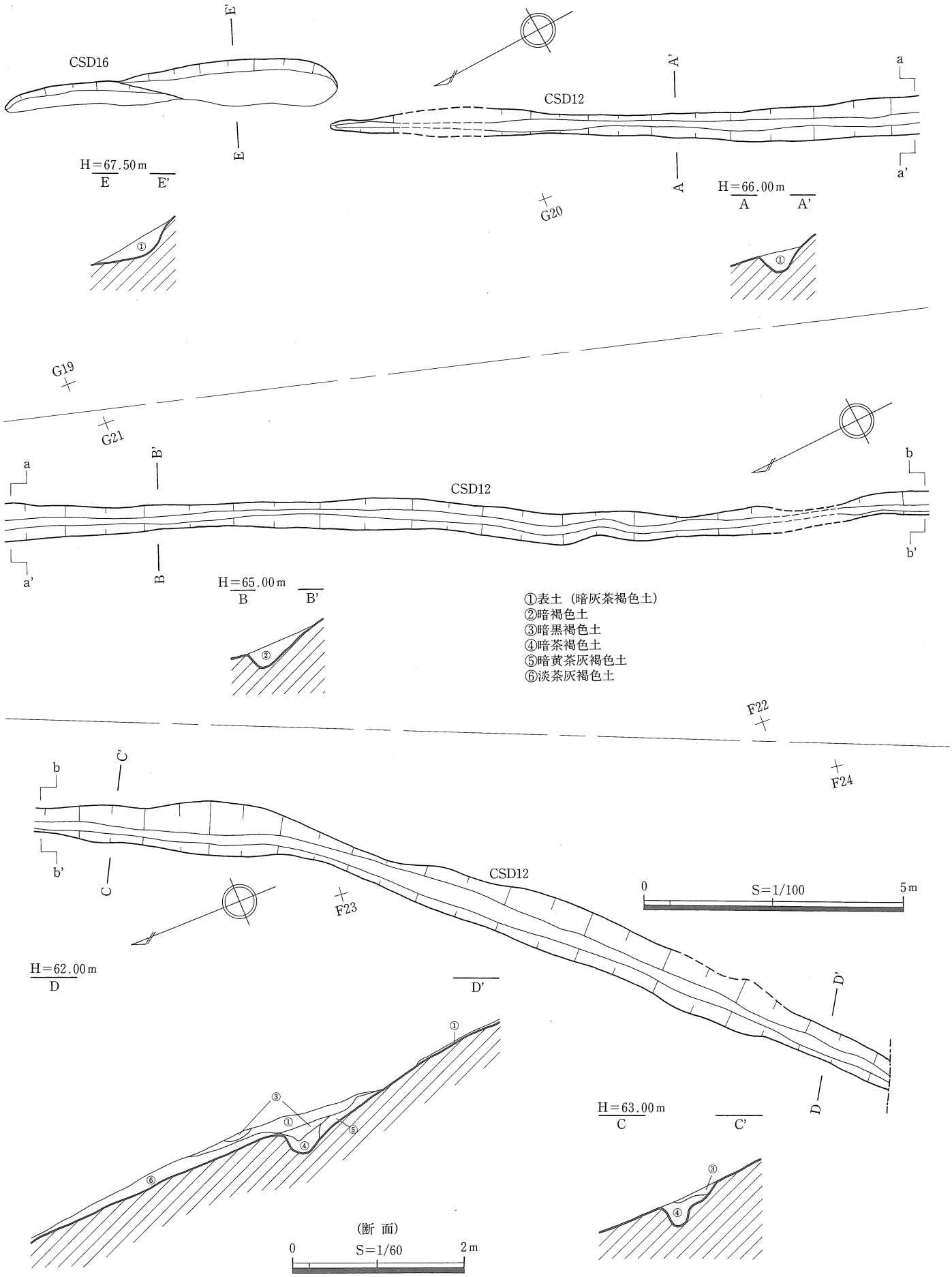
なお、Po１については、弥生時代中期中葉頃のものと考えられる。

ＣＳＤ16の時期は不明であるが、ＣＳＤ12に接続するようにあり、同様の時期が考えられる。

用　　途　ＣＳＤ12・16とも用途については、はっきりしたことは言えないが、尾根を下る道路あるいは、ＢＳＤ03のように、集落を区画するための溝と考えることもできる。



挿図98　南谷大山遺跡CSD12出土遺物実測図



挿図99　南谷大山遺跡CSD12・16遺構図

3．遺構外遺物について（挿図100～102、図版42・43）

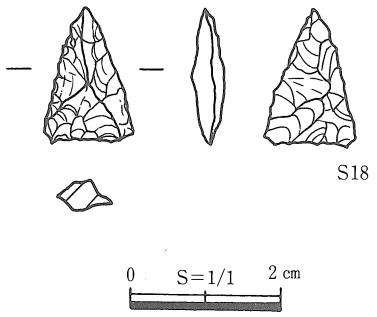
遺構外からは、図化できたものに甕Po１～Po17・Po23、底部Po18～Po20、肩部Po21・Po22、低脚杯Po24、蓋Po25・Po26、鼓形器台Po27、須恵器甕Po28、石鏃Ｓ18がある。

これらのうち、Po１～Po８・Po10～Po27・Ｓ18はH24・H25・G24・G25グリッドのＣ－Ⅳ区の斜面部の上方からまとまって出土している。また、Po９はG25グリッドから、Po24・Po28はＦ23グリッドからそれぞれ出土してる。

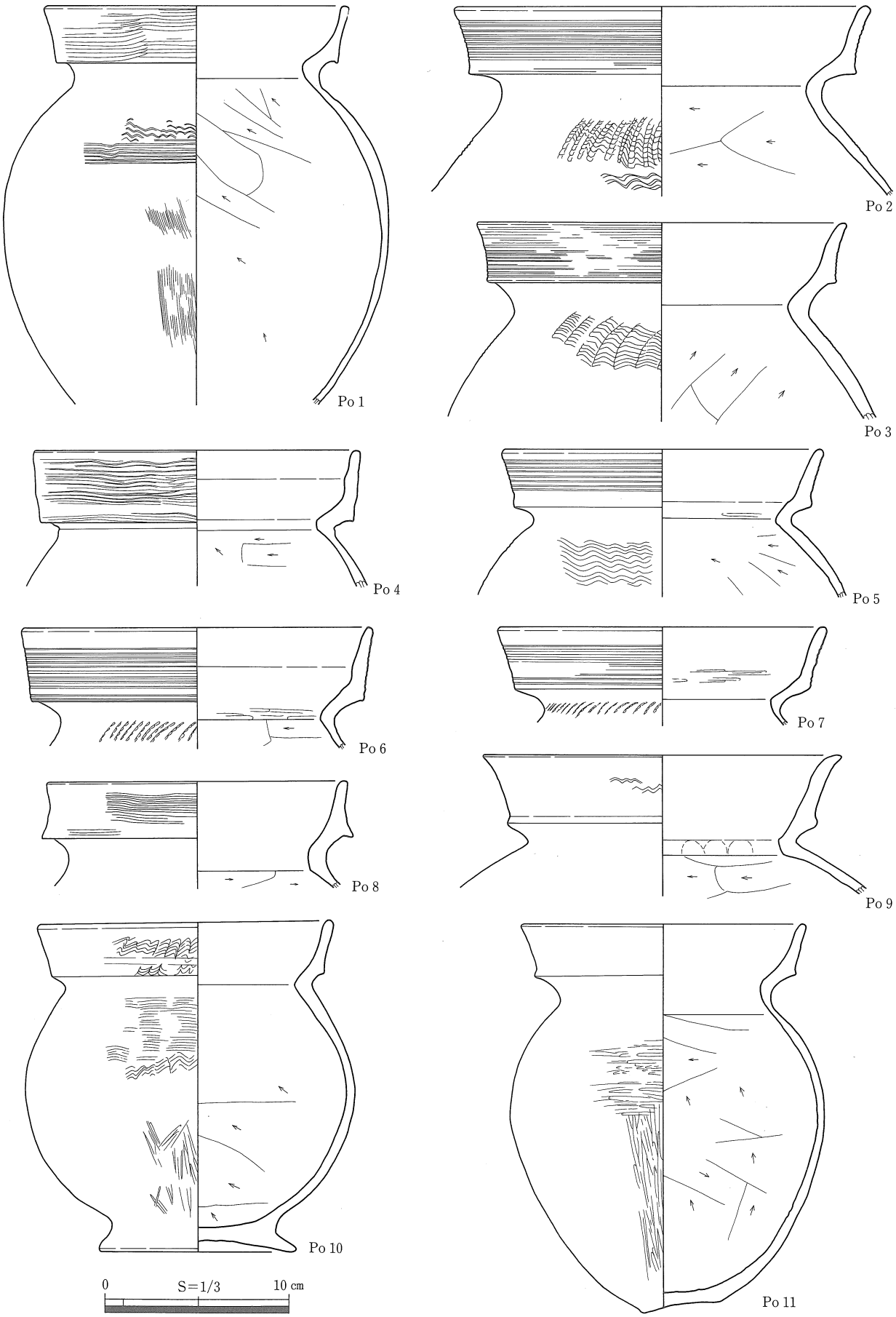
Po１～Po６・Po８は、口縁部に施文が施され、口縁部下端がわずかに下垂することから大山Ⅱ期、Po７・Po９・Po10は、口縁部に施文が施されるが、一部ナデ消されるもので、口縁部下端が水平方向にわずかに引き出されることから大山Ⅲ期、Po11～Po16も、口縁部がやや厚手でナデのみになることから大山Ⅲ期、Po24～Po27は大山Ⅲ～Ⅳ期、Po27は、筒部が高くやや古い様相をもつものの、大山Ⅱ期頃のものと考えられる。

H24・H25・G25グリッドから出土しているものは、大山Ⅱ～Ⅲ期にかけてのもので、ＣＳＳ03の時期とほぼ同時期であることから、大山Ⅳ期以降、ＣＳＳ03の平坦部分に貯蔵穴・竪穴住居などが作られており、これらが作られる時にＣＳＳ03に付属した遺物が片づけられたものと考えられる。

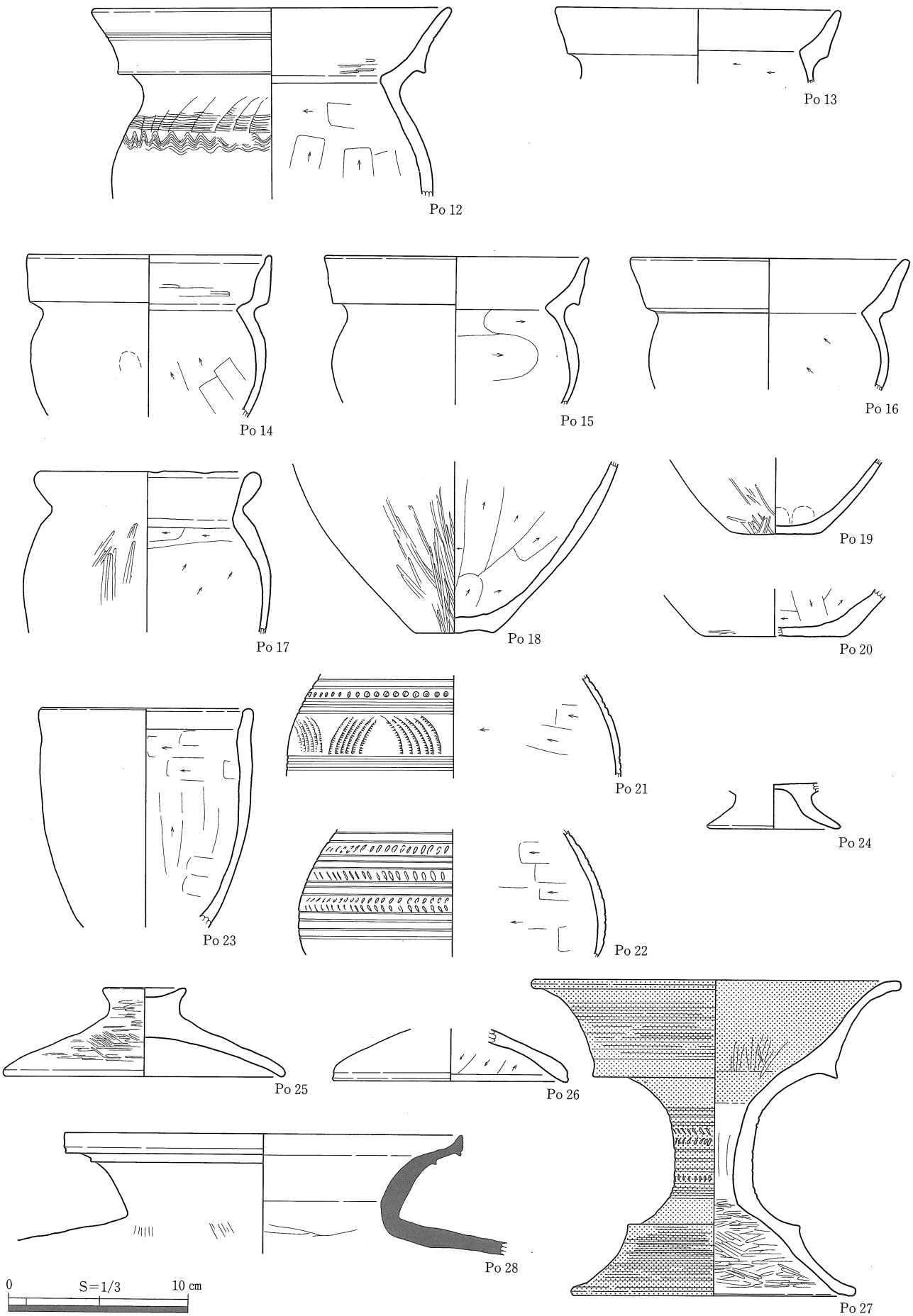
須恵器甕Po28は、Ｃ－Ⅳ区のＦ23グリッド出土のものとＣ－Ⅴ区のＤ22グリッド出土のものが接合している。



挿図100　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅳ区遺構外出土遺物実測図(1)



挿図101　南谷大山遺跡C-Ⅳ区遺構外出土遺物実測図(2)



挿図102　南谷大山遺跡C-Ⅳ区遺構外出土遺物実測図(3)

第９節　南谷大山遺跡Ｃ－Ｖ区の概要

位　　置　Ｃ－Ｖ区は、1991～92年度調査区とＣ－Ⅳ区に挟まれた、標高56～62ｍの谷底部である。この地区は、調査区を設定するためのトレンチ調査で焼土面および土師器が多数検出されたことから、急遽調査区とされた部分である。

遺　　構　この地区では、古墳時代中期の竪穴住居跡ＣＳＩ17・18・19・20・21、不明土坑ＣＳＫ18・19、時期は不明であるが溝状遺構ＣＳＤ10・11・13・14・15・17が作られている。

このうち、竪穴住居跡は、1992年度調査区の住居跡とほとんど同じ時期のものかやや遡るものであり、古墳時代中期後半期には、尾根部・斜面部・谷底部に住居が同時に作られていることがわかった。

また、ＣＳＩ19からは祭祀用と考えられる有孔円盤２個、白玉約350個が出土しており、谷底に営まれた住居の性格を考えるうえで、大変貴重な資料を提供することができた。

また、ＣＳＩ20からは、意図的に破砕されたと考えられる大型の壺を含み、多量の土器がうち捨てられた状況で検出されている。

遺構外からは、近世と考えられる陶器片が出土しており、溝状遺構・不明土坑がこの時期のものの可能性がある。

第10節　南谷大山遺跡Ｃ－Ｖ区の調査結果

１．竪穴住居跡

ＣＳＩ17（挿図103～106、図版21・43・44）

位　　置　Ｃ－Ｖ区の西側のＤ21・Ｄ22・Ｅ21グリッドにあり、標高58.8～59.6ｍの平坦面に位置する。東側にはＣＳＩ19、南東にはＣＳＩ18が接している。

形　　態　遺存状態は非常に悪く、東側はＣＳＩ19と重複しており、その範囲は不明である。ＣＳＩ17は遺存する壁溝の様子・遺存する壁の状態から、４棟が重複しながら存在していたものと推察され、ＣＳＩ17-1～17-4として考えてみた。

CSI17-1　ＣＳＩ17-1は、最も西側にあり、東側はＣＳＩ17-2によって削り取られている。西側周壁のみ検出され、壁溝・主柱穴は検出されなかった。平面は方形ないし長方形を呈すものと考えられる。規模は、東西0.5ｍ以上、南北7.80ｍを測ると考えられ、残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.28ｍを測る。

西側壁寄りに(39×39－25)cmを測るＰ１がある。位置的に、いわゆる特殊ピットと考えられる。

CSI17-2　ＣＳＩ17-2は、壁溝・主柱穴が検出されている。平面は、壁溝の遺存状態から方形または長方形を呈すものと考えられる。規模は不明である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.06ｍである。

壁溝は南側・西側壁際のみで検出され、規模は幅12～15cm、深さ２～３cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴は、Ｐ２～Ｐ５の４個で、それぞれの規模は、Ｐ２（54×52－68）cm、Ｐ３（50×45－59）cm、Ｐ４（43×40－42）cm、Ｐ５（59×50－18）cmを測る。主柱穴間距離は、Ｐ２

挿図103　南谷大山遺跡CSI17遺構図

～Ｐ３間から順に、4.4ｍ、4.3ｍ、4.2ｍ、5.3ｍで、他の住居に比べて大きな住居である。

床面は、谷の中央部（東側）に向かって緩やかに傾斜している。

また、焼土が１カ所検出されているが、これは盛り上がるように検出されており、焼け落ち焼土と思われる。

CSI17-3　ＣＳＩ17-3は、ＣＳＩ17-2の北側に重複するように検出された。平面は、壁溝の遺存状態から方形を呈すものと考えられる。規模は不明である。

壁溝は西側のみで部分的に検出されている。規模は、幅12～22cmと広く、深さ２～10cmを測る。

主柱穴はＰ６～Ｐ９の４個で、それぞれの規模は、Ｐ６（50×43－44）cm、Ｐ７（42×40－74）cm、Ｐ８（29×27－29）cm、Ｐ９（43×26－20）cmを測る。主柱穴間距離は、Ｐ６～Ｐ７間から順に、5.2ｍ、4.7ｍ、4.9ｍ、4.9ｍで、ＣＳＩ17-2同様大型のものである。

CSI17-4　ＣＳＩ17-4は、部分的に壁溝が検出された事で住居として考えた。遺存状態は非常に悪く、平面形・規模ともに不明である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で、最大0.52ｍである。

壁溝は、西側および北側に部分的に２本ずつ検出されている。幅は17～25cm、深さ４～12cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、北側コーナー付近で（59×55－63）cmを測るＰ10が検出されている。

床面やや南側には、焼土が盛り上がるように１カ所検出されており、これは、焼け落ちた焼土と考えられる。

埋　土　埋土は５層に分層できた。これらは住居の中心に向かって堆積しており、自然堆積したものと考えられる。基盤層と考えられる③④層は、谷部に二次的に堆積したものであり、この層中には弥生時代後期～古墳時代前期の土器が含まれている。

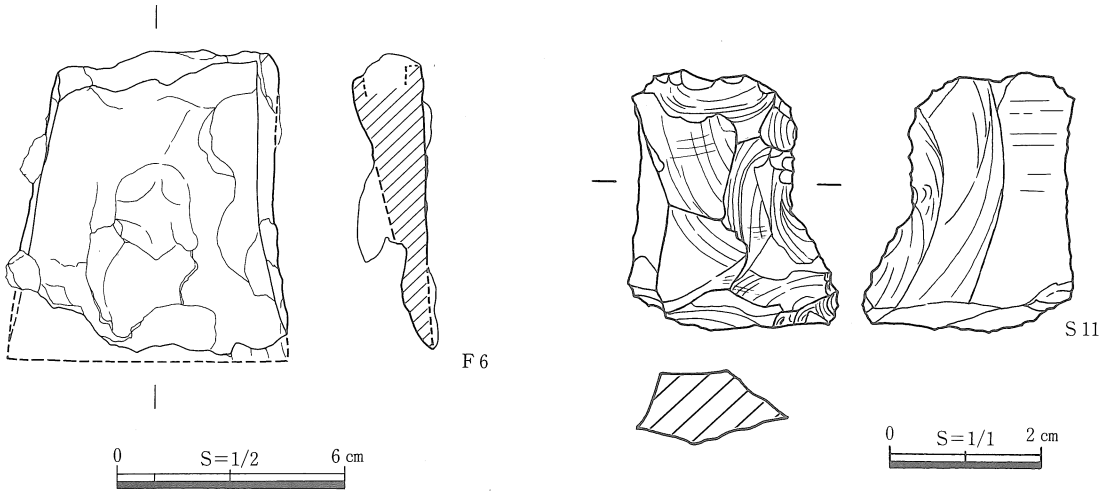
遺　物
出土状況　図化できたものには、甕Po１～Po12、口縁部Po13、高杯Po14～Po18、鼓形器台Po19・Po20、小型丸底壺Po21・Po22、低脚杯Po23、土玉Po24、黒曜石剝片Ｓ11、鋳造鉄斧Ｆ６がある。

このうちＣＳＩ17-1からは、埋土中からPo５・Po８が出土している。

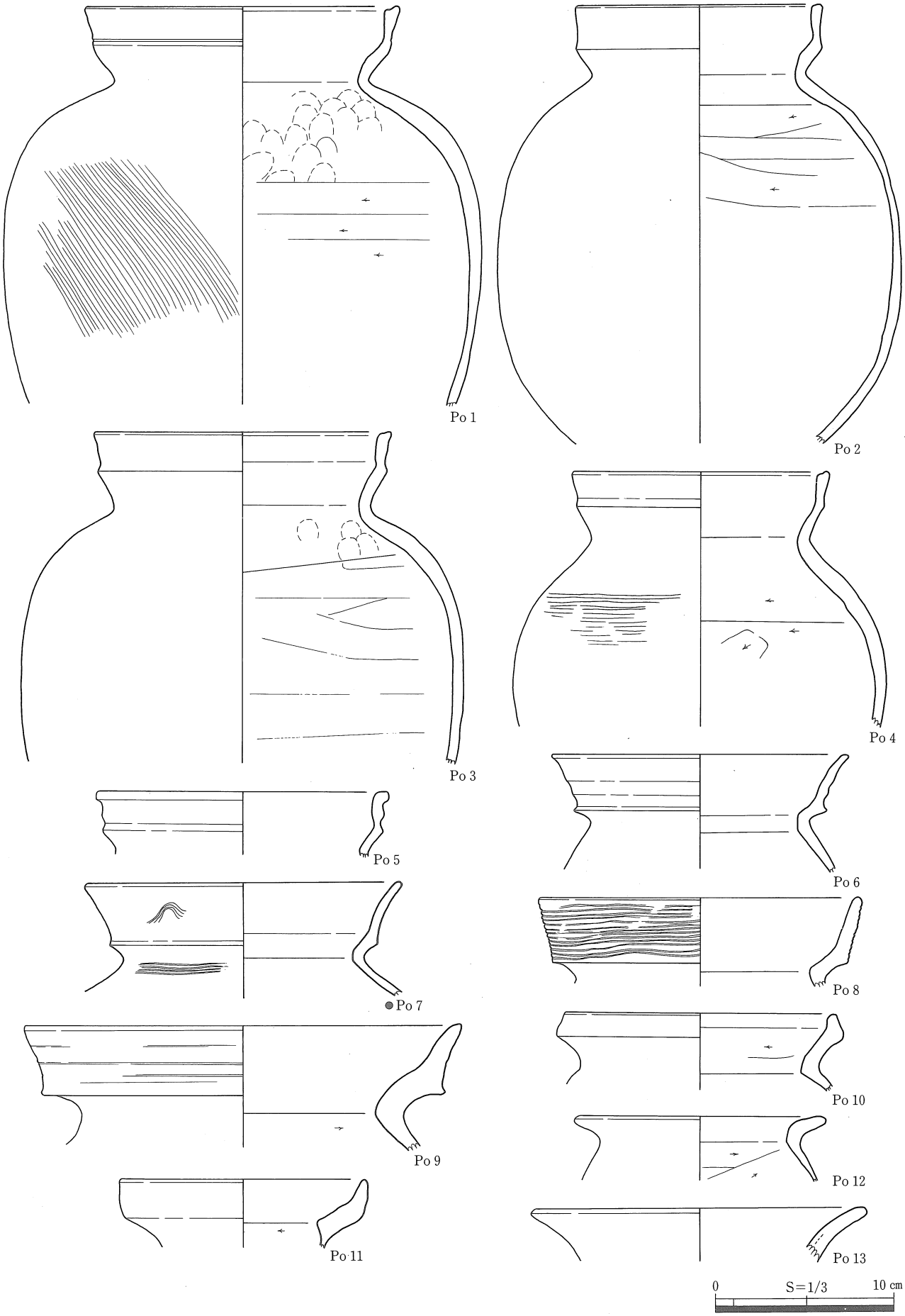
ＣＳＩ17-3からは、埋土中からPo11・Po13・Po22が出土している。

ＣＳＩ17-4からは、Po１～Po４・Po６・Po７・Po９・Po10・Po12・Po14～Po21・Po23・Po24・Ｓ11・Ｆ６が出土している。床面からはPo７・Po14・Po17・Po18が出土した。

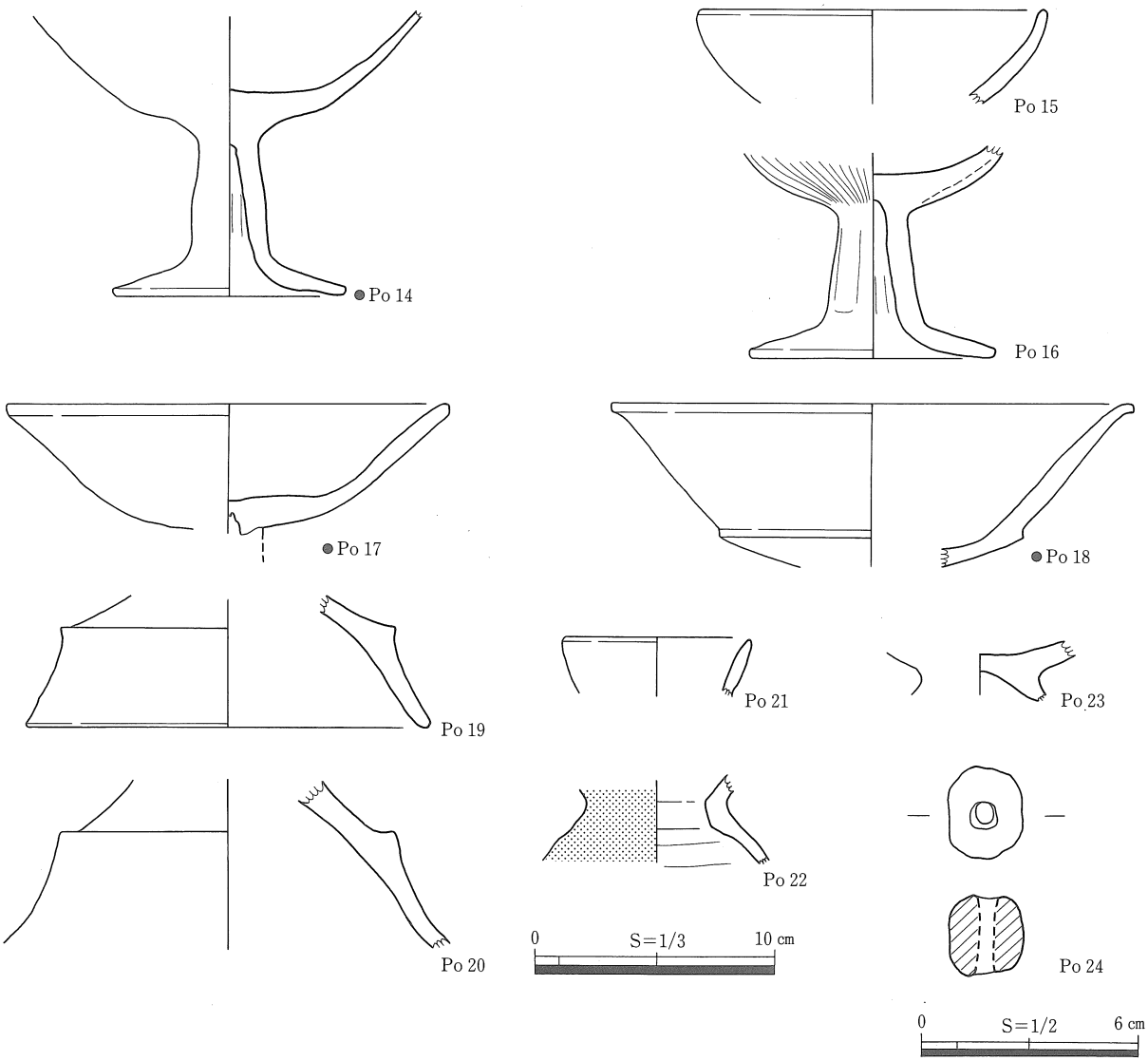
その他はいずれも埋土①層中からの出土である。



挿図104　南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(1)



挿図105　南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(2)



挿図106　南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(3)

時　　期　出土遺物から、ＣＳＩ17-1～17-4はいずれも大山Ⅷ期、古墳時代中期後半頃のものと考えられるが、ＣＳＩ17-1がこの中では若干遡るものと考えられる。

ＣＳＩ18（挿図107・108、図版22・44）

位　　置　Ｃ－Ⅴ区の東側のＥ23グリッドにあり、標高58.5～59.1ｍの平坦面に位置する。北側にはＣＳＩ19が接し、東側1.5ｍにはＣＳＤ13がある。

形　　態　遺存状態は悪く、北側はＣＳＩ19と切りあっており、また西側・南側は流失している。遺存する周壁・壁溝から、平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西2.0ｍ以上、南北3.5ｍ以上を測る。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.15ｍを測る。

壁溝は東壁際のみで検出され、規模は幅30～35cmと広く、深さ２～５cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴と思われるものはＰ１～Ｐ３の３個で、本来は４個あったものと考えられる。それぞれの規模は、Ｐ１（30×28－16）cm、Ｐ２（42×32－13）cm、Ｐ３（35×32－25）cmを測り、主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に2.8ｍ、2.9ｍである。

また、床面上には、(112 ×70－41)cmを測る土壙状のＰ５がある。埋土は炭化物を含む③層のみである。埋土中から壺Po１が出土しており、ＣＳＩ18以前に掘り込まれたピットと考えられる。

その他にも、床面上および周辺でピットが検出されているが、用途は不明である。

床面は、谷の中央部（西側）に向かって緩やかに傾斜している。

埋　土　埋土は①層のみで、よく締まっている。

焼け落ちの焼土と考えられるものが、床面から浮いた状態で検出されている。

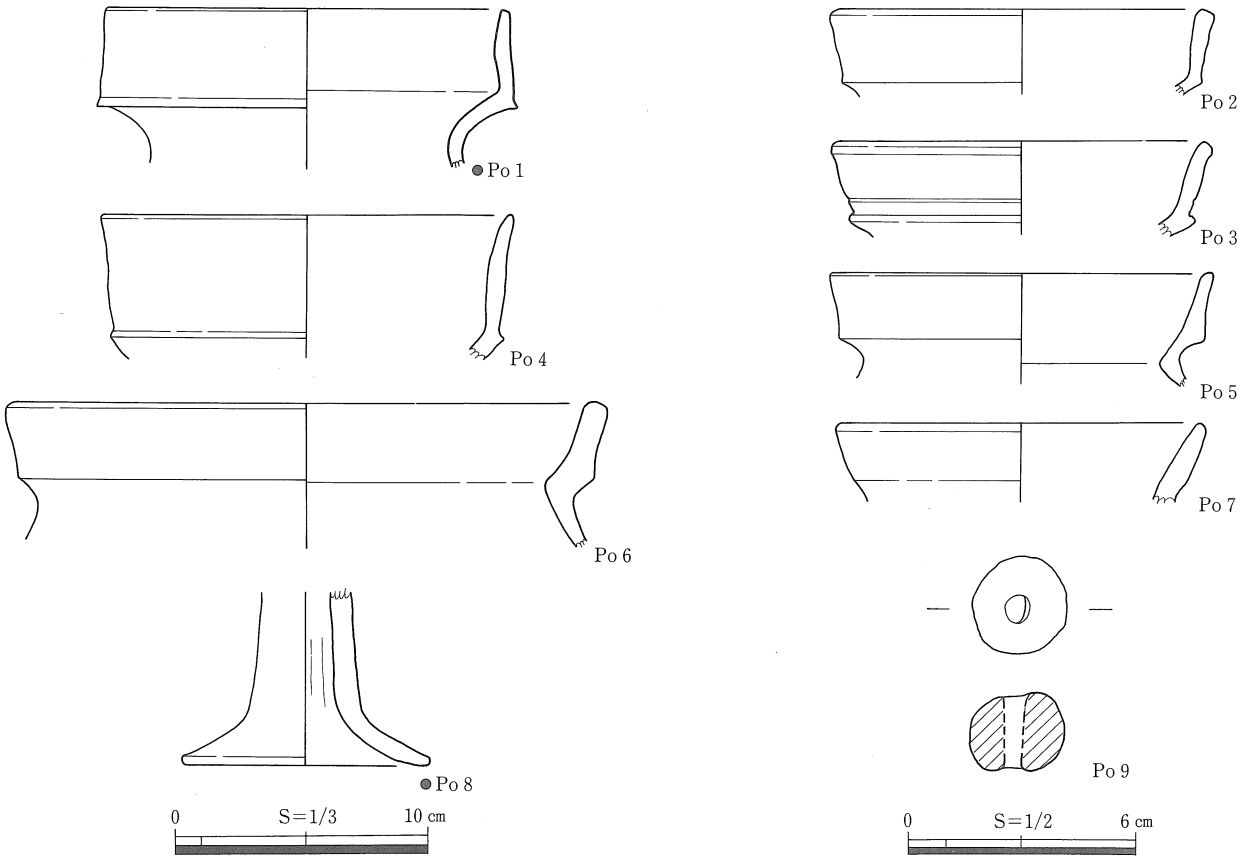
遺　物　図化できたものには、壺Po１、甕Po２～Po７、高杯Po８、土玉Po９がある。

出土状況　このうち床面からは、東壁際でPo８が出土している。Ｐ５内からPo１が出土している。

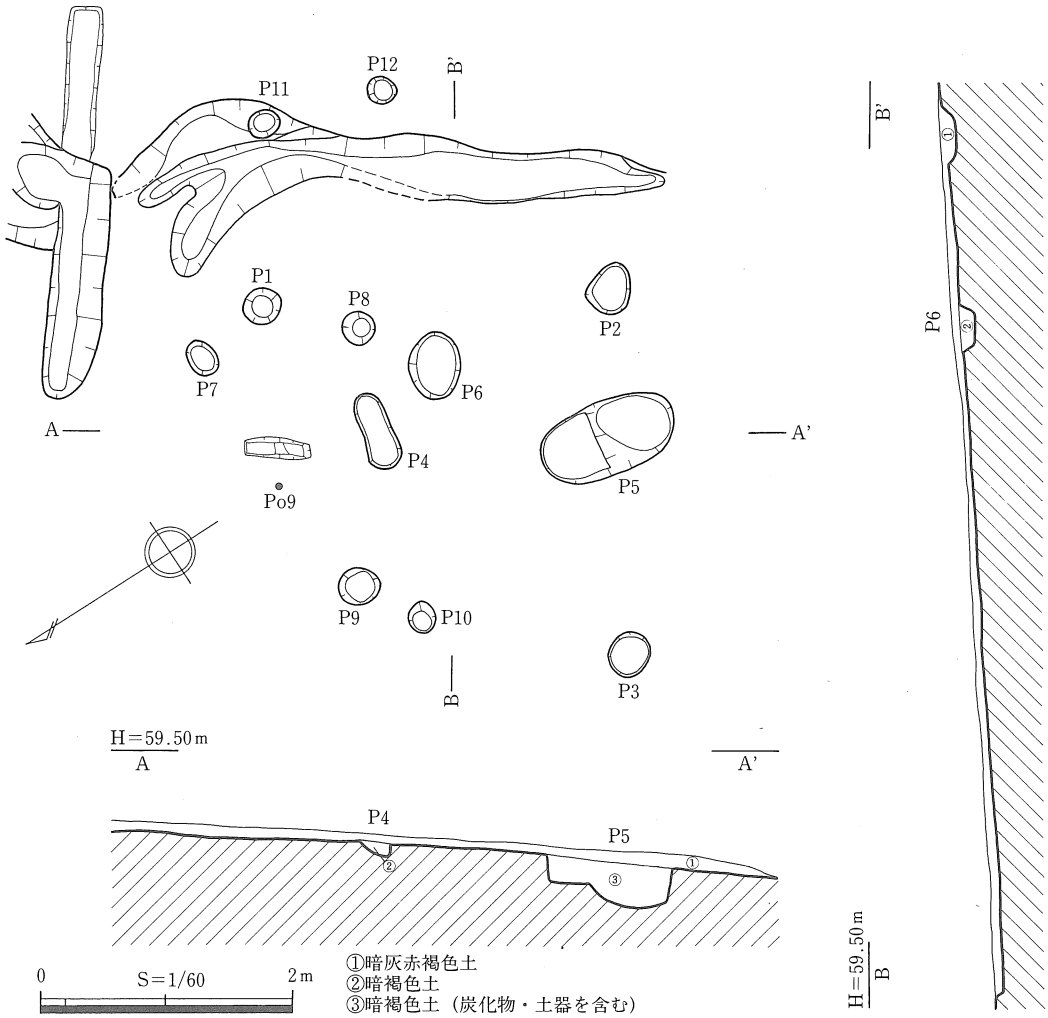
その他はいずれも埋土①層中からの出土である。

時　期　Po２・Po３・Po８から、ＣＳＩ18は大山Ⅶ期、古墳時代中期中葉頃のものと考えられるが、Po４～Po６は弥生時代後期の特徴をもつ。

また、Ｐ５は、Po１から大山Ⅳ～Ⅴ期のものと考えられ、ＣＳＩ18に伴うものではなく、古墳時代前期頃に掘り込まれたものと考えられる。



挿図107　南谷大山遺跡CSI18出土遺物実測図



挿図108　南谷大山遺跡CSI18遺構図

ＣＳＩ19（挿図109～117、図版22・23・44～46）

位　置　Ｃ－Ｖ区の東側のＥ22・Ｅ23グリッドにあり、標高59.1～59.5ｍの平坦面に位置する。西側にはＣＳＩ17、南側にはＣＳＩ18が接している。

形　態　遺存状態は悪く、西側はＣＳＩ17によって削り取られているものと考えられ、また、南側も不明瞭である。遺存する壁から平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西3.0ｍ以上、南北7.50ｍを測り、床面積は25㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.28ｍを測る。

壁溝は東壁際のみで検出され、規模は幅18～25cmと広く、深さ１～３cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。壁溝の南側は、土坑状に深くなる。

主柱穴と思われるものは検出されなかったが、床面上ではＰ１～Ｐ５のピットが検出された。それぞれの規模は、Ｐ１（16×16－12）cm、Ｐ２（23×20－24）cm、Ｐ３（33×32－18）cm、Ｐ４（25×22－10）cm、Ｐ５（75×60－20）cmを測る。

床面は、谷の中央部（西側）に向かって緩やかに傾斜している。

埋　土　埋土は２層に分層できたが、①層はよく締まっている。

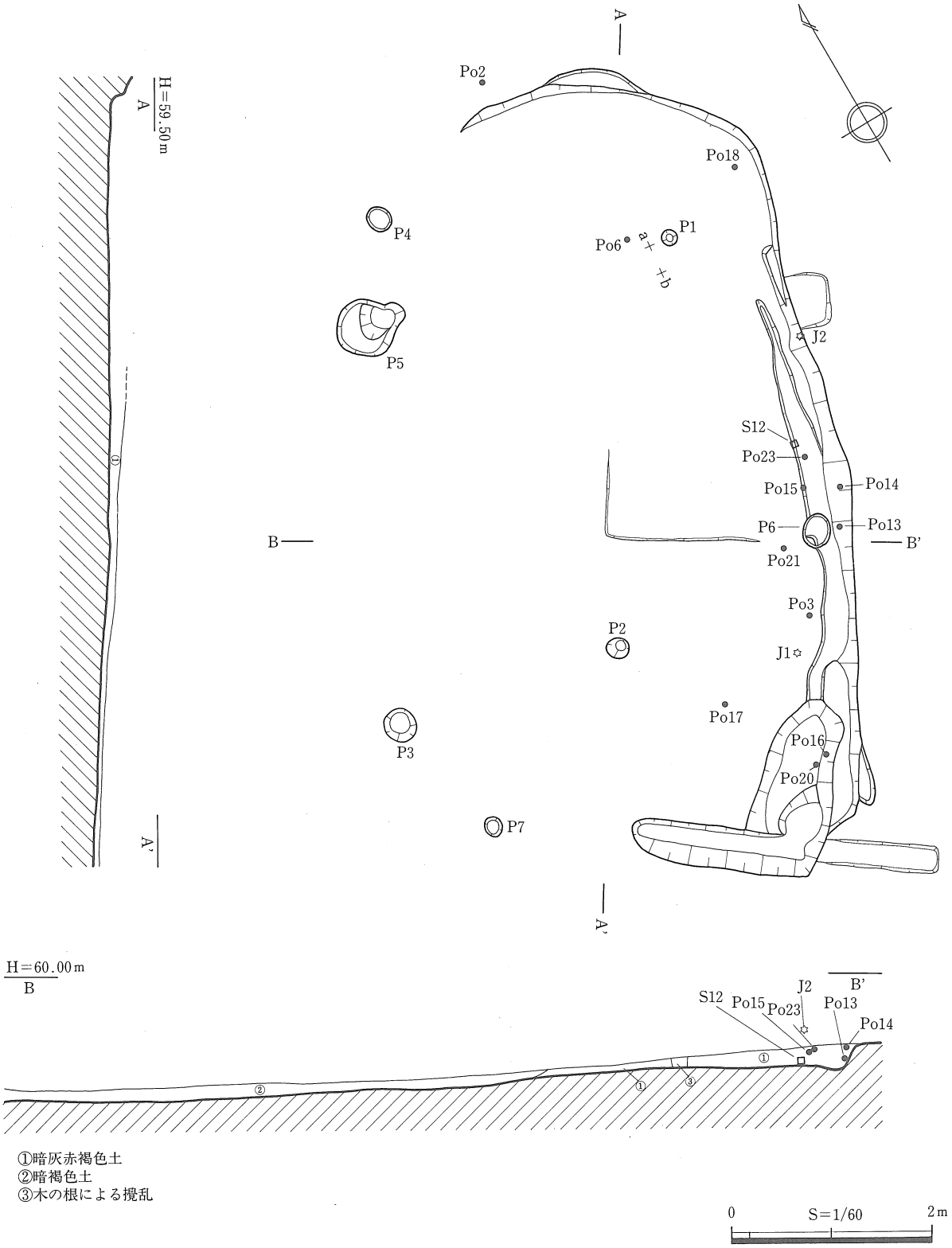
焼土面・中央ピットはない。

遺　物　図化できたものには、甕Po１～Po10、底部Po11・Po12、高杯Po13～Po18、鼓形器台Po

出土状況　19、小型丸底壺Po20・Po21、蓋Po22、台付小型鉢Po23、土玉Po24、石皿S12、有孔円盤J1・J2、臼玉J3～J353がある。

このうち床面からは、東壁際でPo3・Po6・Po9・Po13～Po15・Po17・Po18・Po20・Po21・Po23・Po24・S12が比較的まとまって出土している。

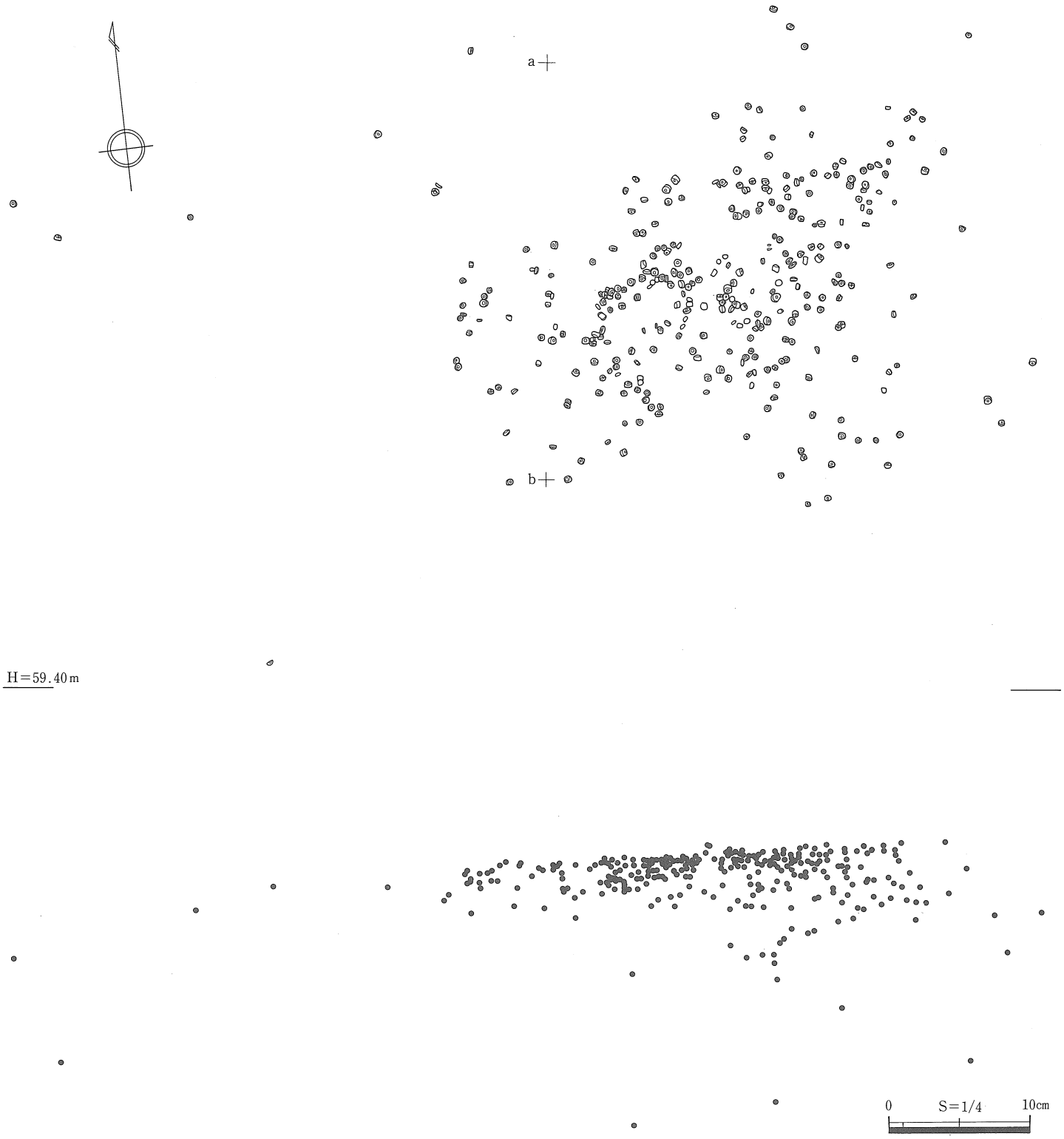
その他はいずれも埋土①層中からの出土である。



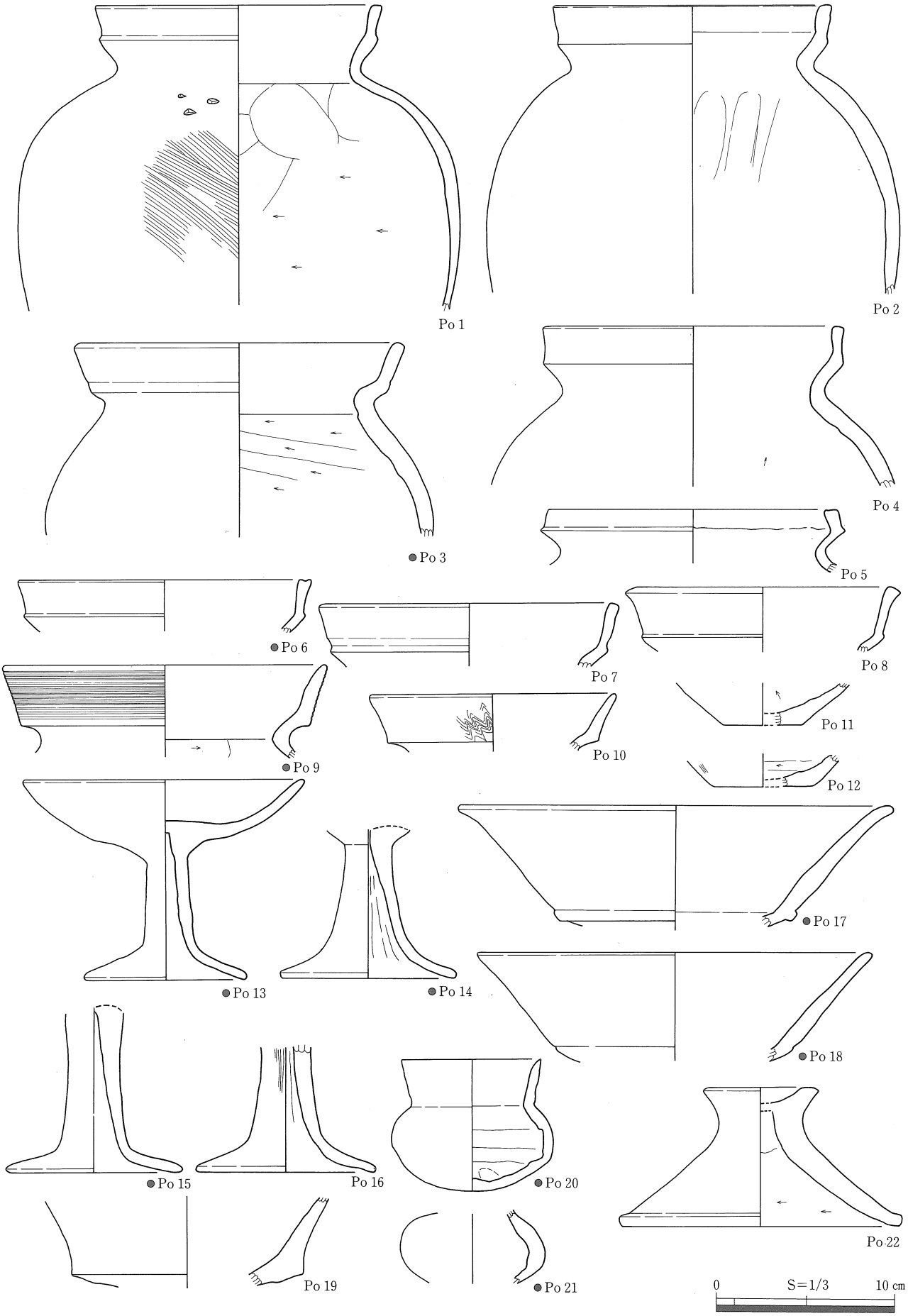
挿図109　南谷大山遺跡CSI19遺構図

また、有孔円盤はやや離れて埋土中から出土し、臼玉は、Ｐ１付近でまとまって出土している。臼玉の出土の範囲は床面上から約15cm浮いた状態のものが多くあった。出土状況を見ると、本来繋がっていたものと考えられ、住居の埋没につれて埋まっていった過程が窺われる。

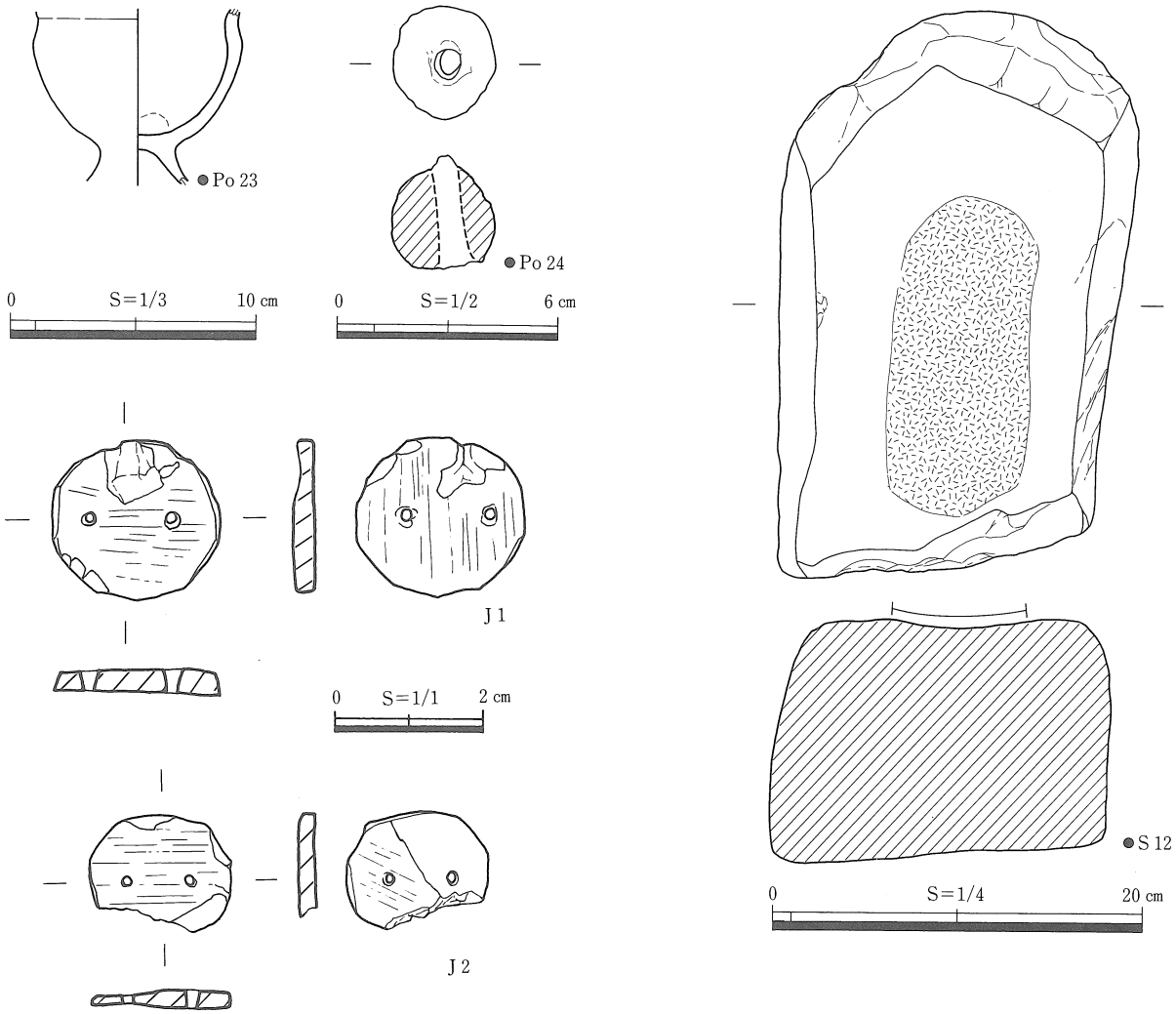
時　　期　床面出土遺物から、ＣＳＩ19は大山Ⅶ期、古墳時代中期中葉頃のものと考えられる。



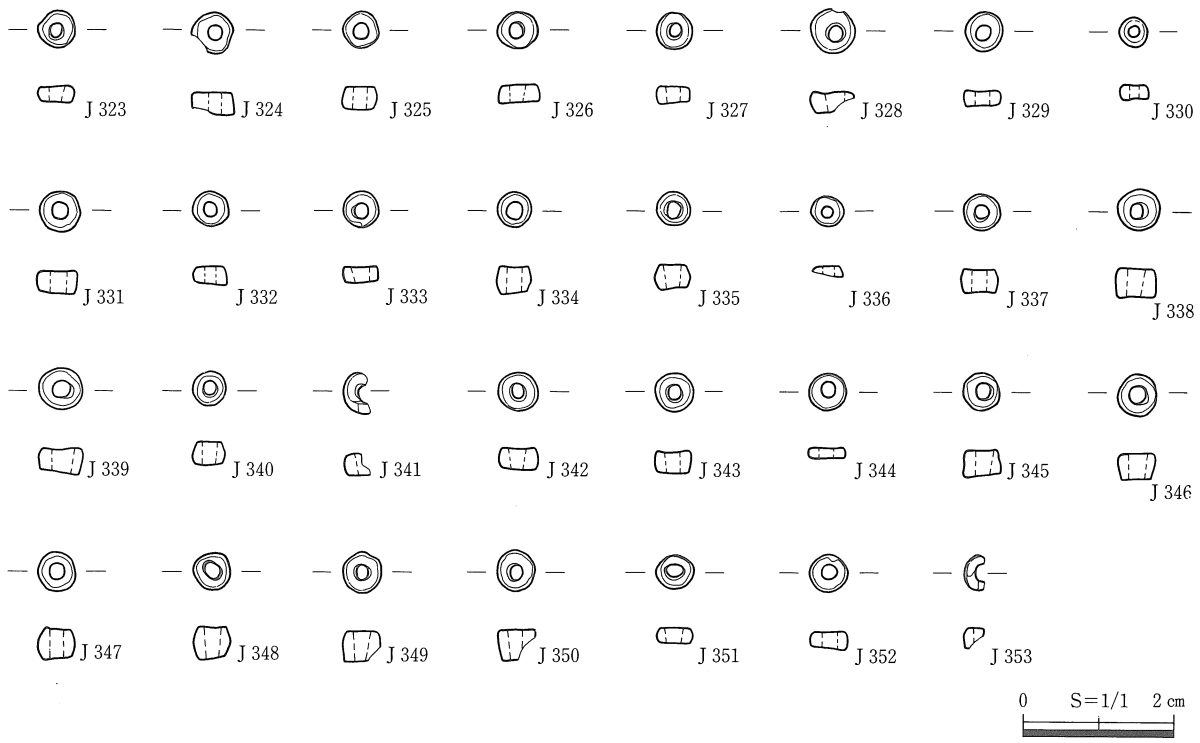
挿図110　南谷大山遺跡CSI19臼玉検出状況図



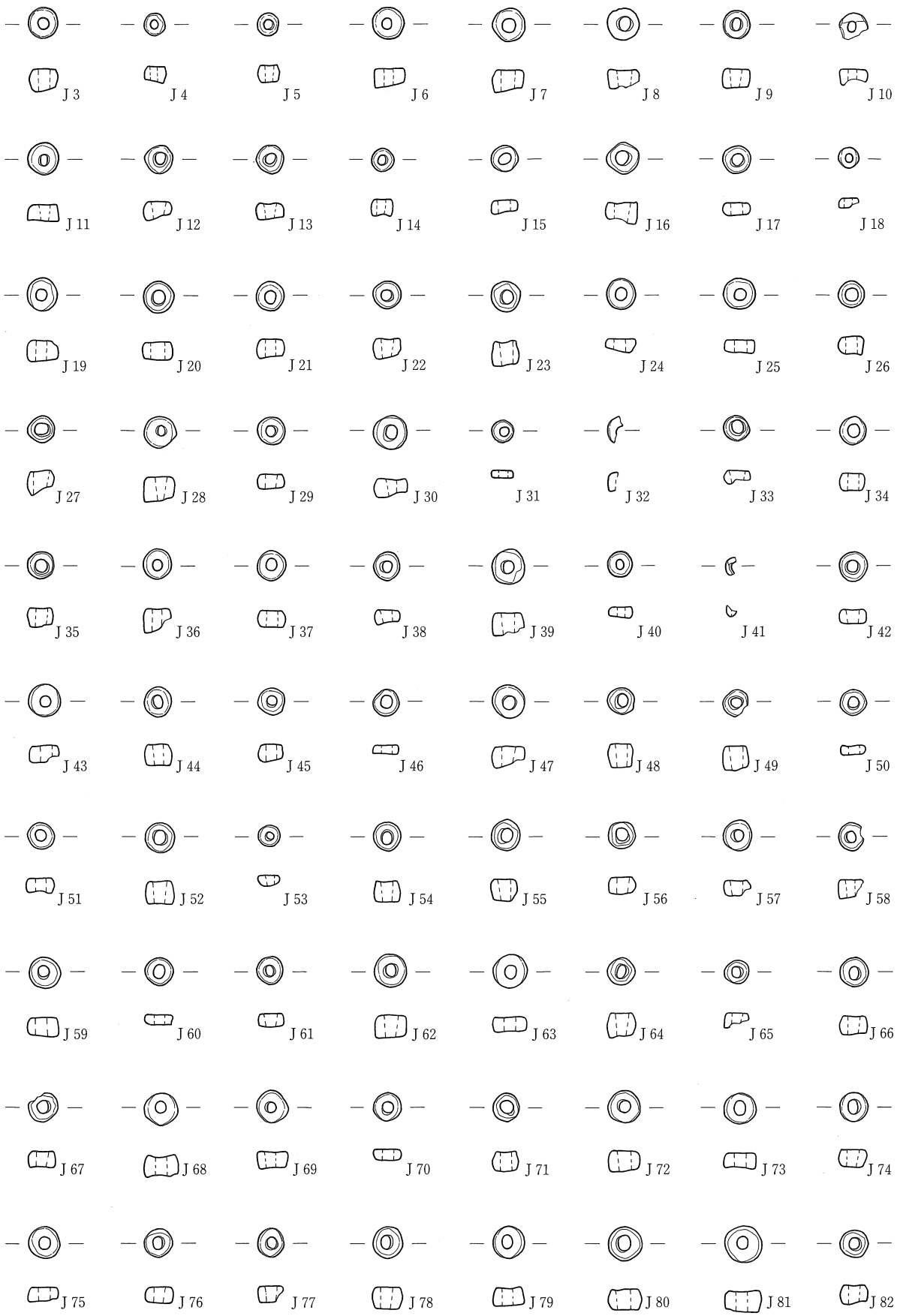
挿図111　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(1)



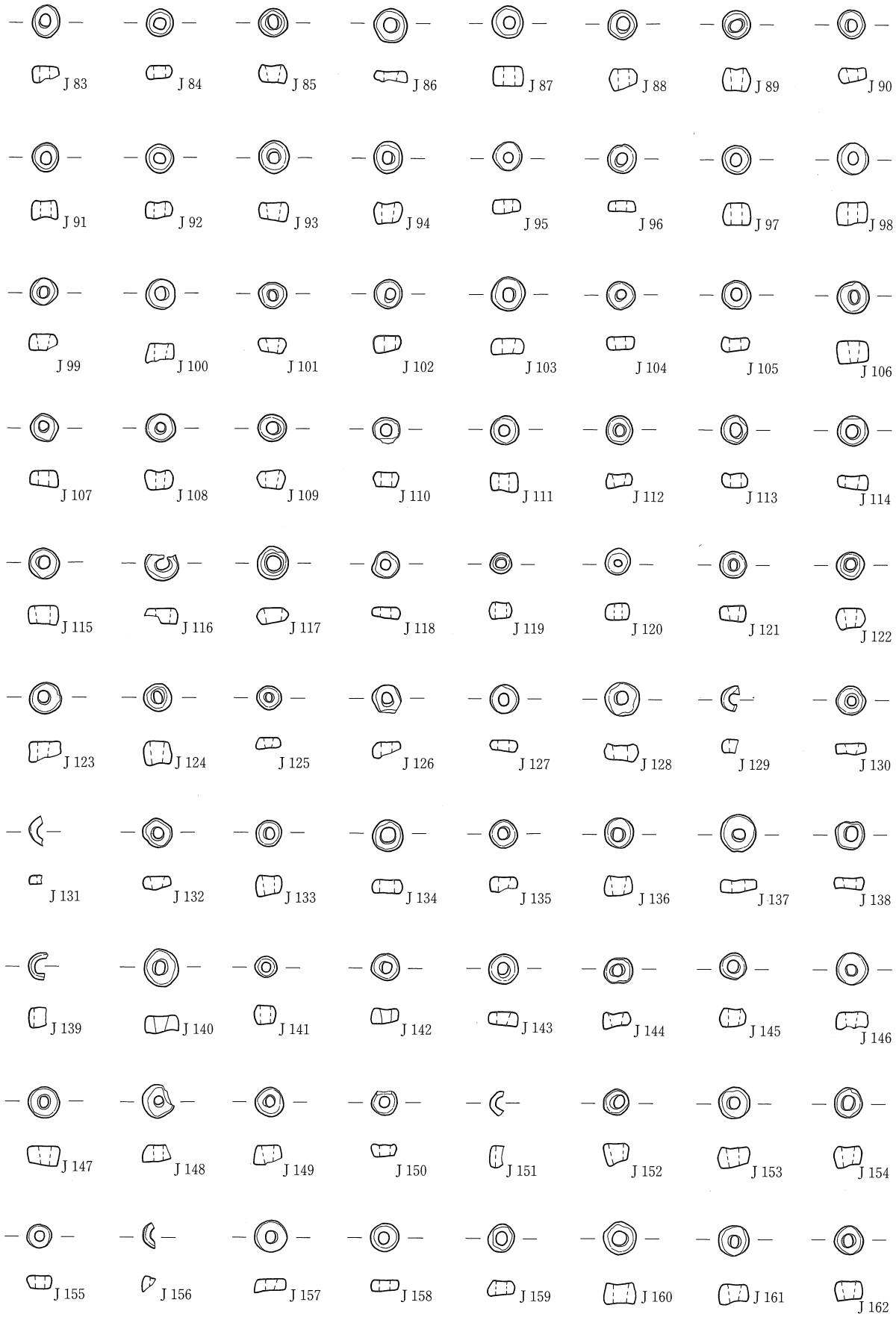
挿図112　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(2)



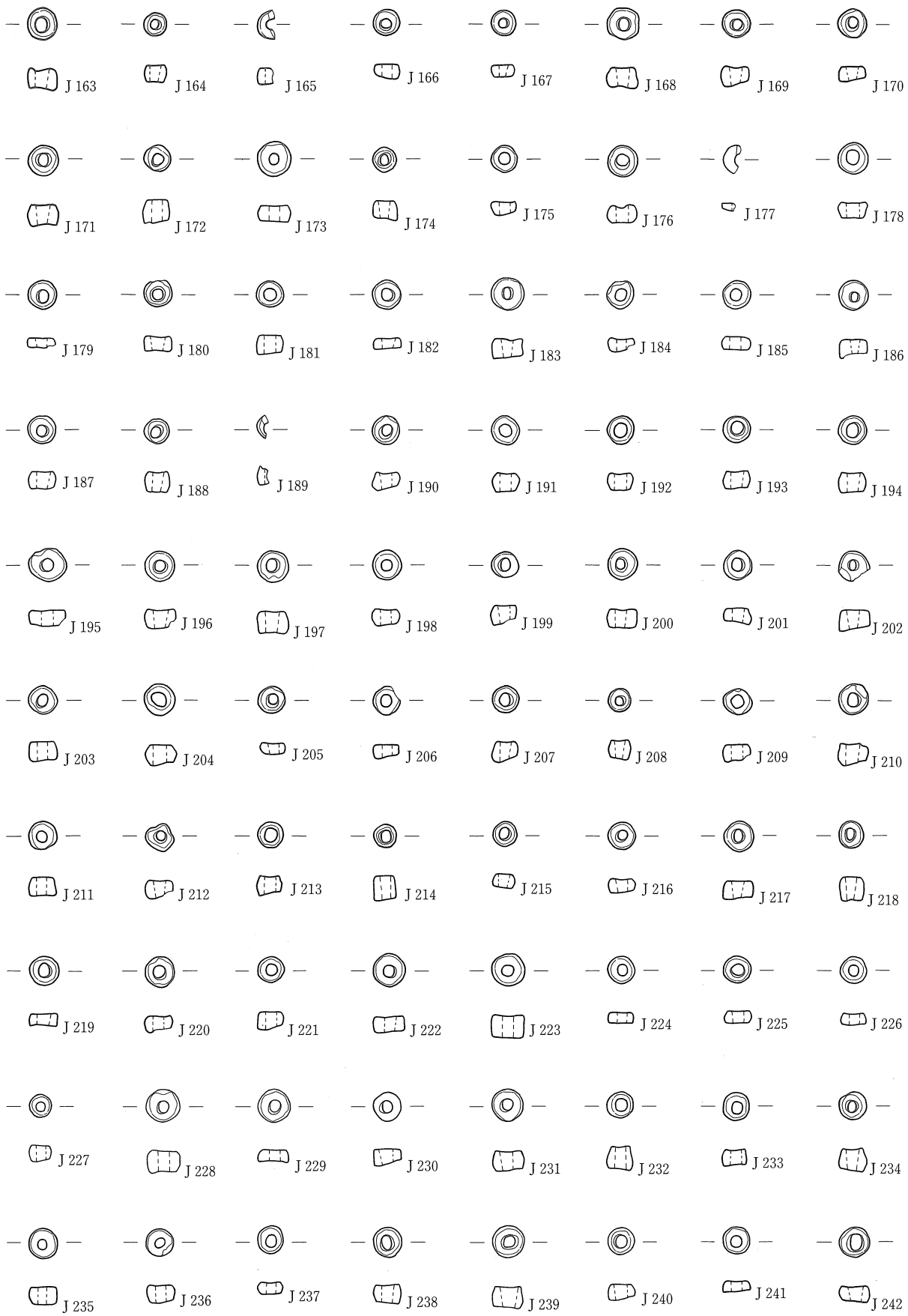
挿図113　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(3)



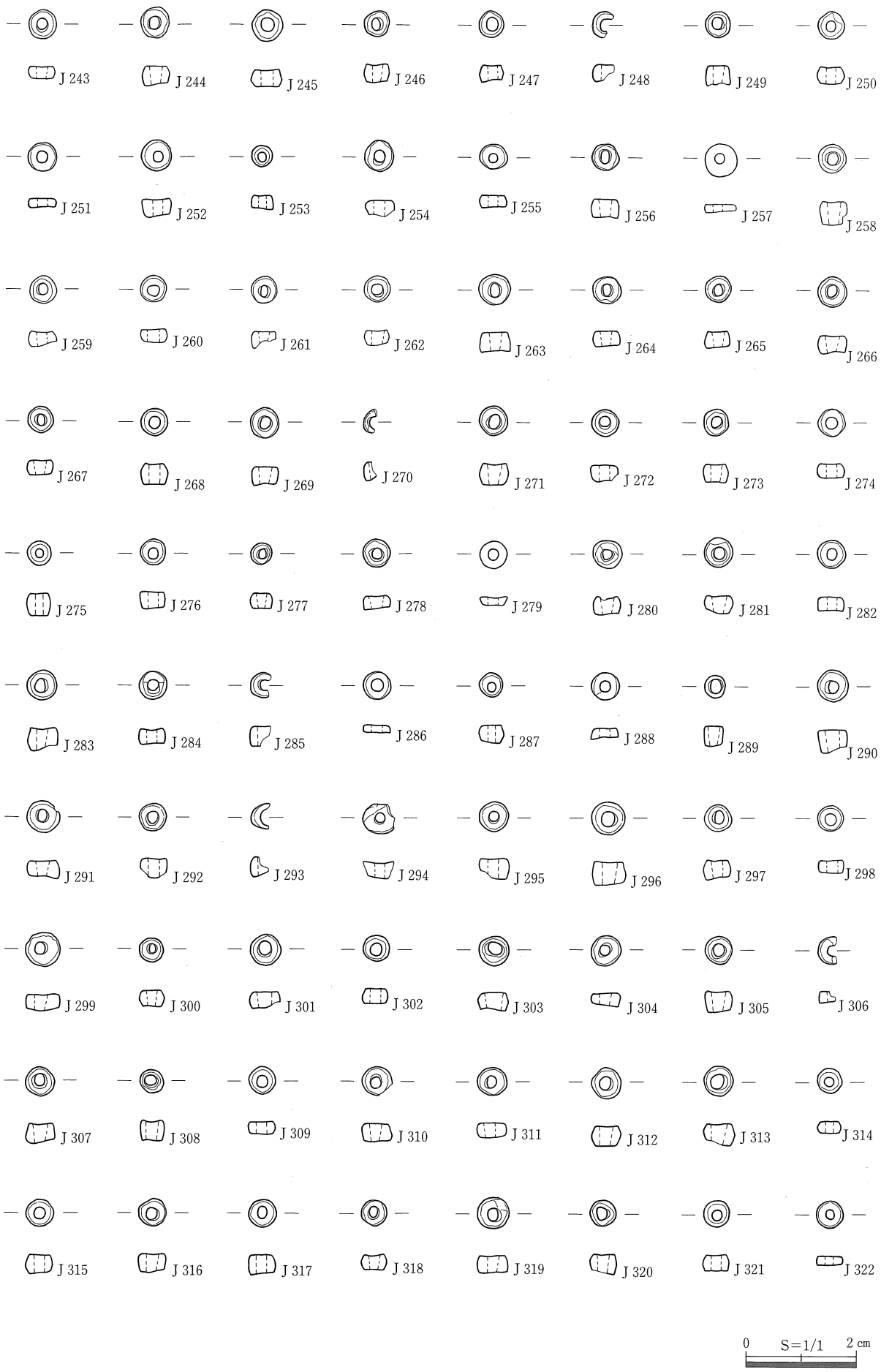
挿図114　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(4)



挿図115　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(5)



挿図116　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(6)



挿図117　南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(7)

ＣＳＩ20（挿図118～122、図版23・46～49）

位　置　Ｃ－Ｖ区の最も北側のＥ20グリッドにあり、標高60.0～60.4ｍの平坦面に位置する。南側約６ｍにはＣＳＩ21、西側約２ｍにはＣＳＤ17がある。

形　態　遺存状態は非常によく、平面は方形を呈すものと考えられる。規模は、南東～北西4.03ｍ、北東～南西3.96ｍを測り、床面積は16.8㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.64ｍを測る。

壁溝は、部分的にとぎれるもののほぼ全周し、規模は、幅９～17cm、深さ４～８cmを測り、断面逆台形状を呈す。東側壁溝内には、径10cm程度、深さ10cmの小ピットが２個あり、壁溝内に立てられた板状のものを支える杭跡と考えられる。

仕切り溝　また、東側・西側壁溝のやや北寄りに、住居中央部に向かって約80cmに延びる溝が接続している。幅・深さとも壁溝とほとんど変わらない。この溝は、住居内を仕切るためのものと考えられる。

主柱穴はＰ１～Ｐ４の４個で、それぞれの規模は、Ｐ１（25×25－32）cm、Ｐ２（32×25－14）cm、Ｐ３（47×37－16）cm、Ｐ４（37×26－15）cmを測り、他の住居と比べて小さな主柱穴である。主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に1.9ｍ、2.5ｍ、3.0ｍ、2.7ｍである。

Ｐ１～Ｐ２間に（60×53－17）cmを測るＰ５があるが、位置的に中央ピットと呼べるものではない。

特殊ピット　住居の東寄りにいわゆる特殊ピットと考えられるＰ６がある。平面は不整形、断面台形状を呈し、規模は（84×70－26）cmを測る。埋土は炭化物を含む⑨層が単層で入る。

屋内土坑　また、住居の北東コーナー付近に、平面隅丸長方形、断面台形状を呈す土坑ＳＫ１がある。規模は、（95×78－42）cmを測る。

その他に、径20cm前後、深さ５cm前後を測るＰ７～Ｐ10があるが、用途は不明である。

焼土面　住居の西側仕切り溝付近に、長楕円形に広がる焼土面が検出されている。この焼土面は非常に固く、恒常的に火が使用されていたものと考えられる。

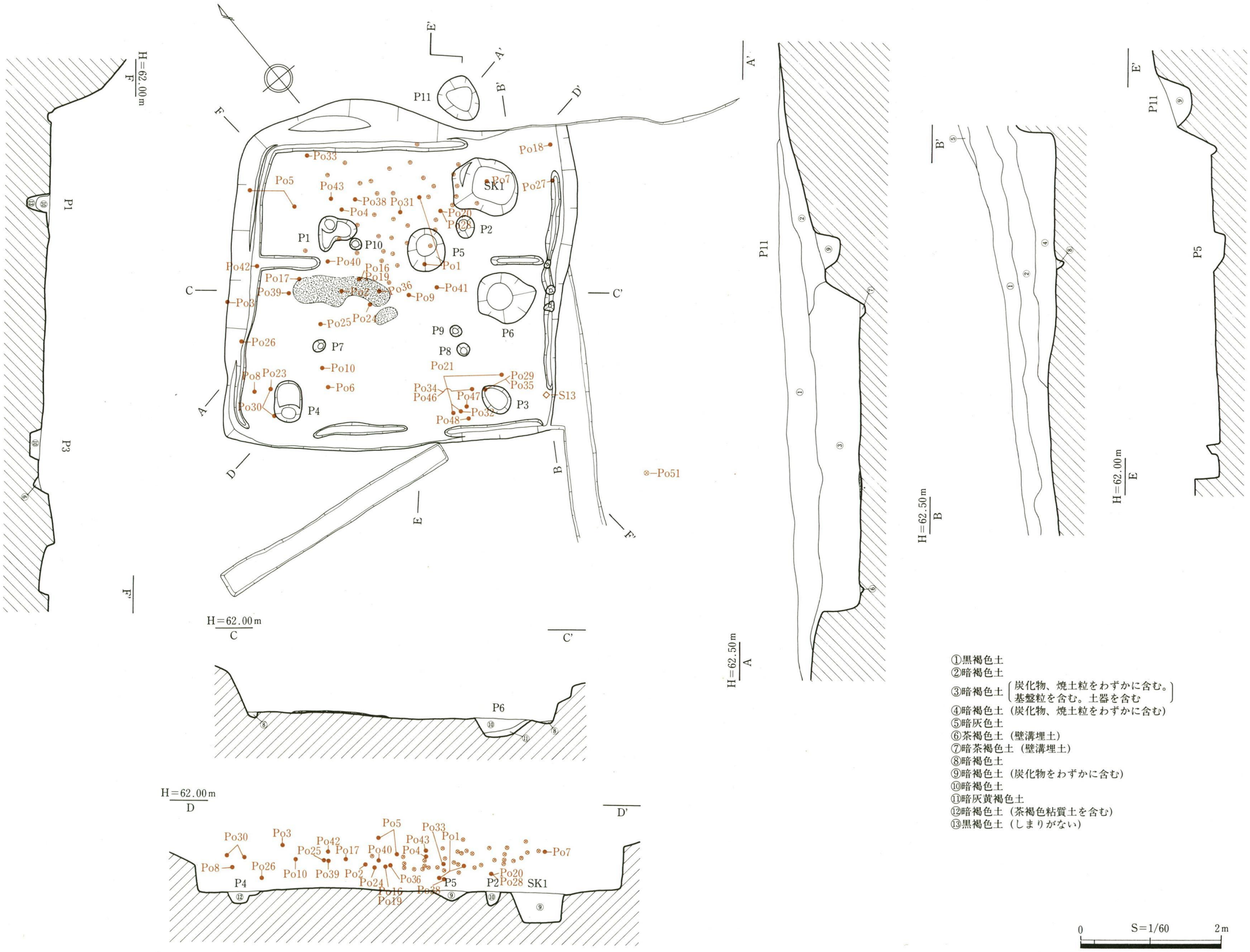
埋　土　埋土は３層に分層できた。③層中には炭化物・焼土粒がわずかに含まれている。

周辺ピット　住居北側には、（66×53－41）cmを測るＰ11がある。

遺物出土状況　図化できたものには、甕Po１～Po17、高杯Po18～Po38、直口壺Po39～Po42・Po44・Po45、小型壺Po43、椀Po46～Po48、須恵器杯蓋Po49、須恵器甕Po50、大型壺Po51、敲石Ｓ13がある。

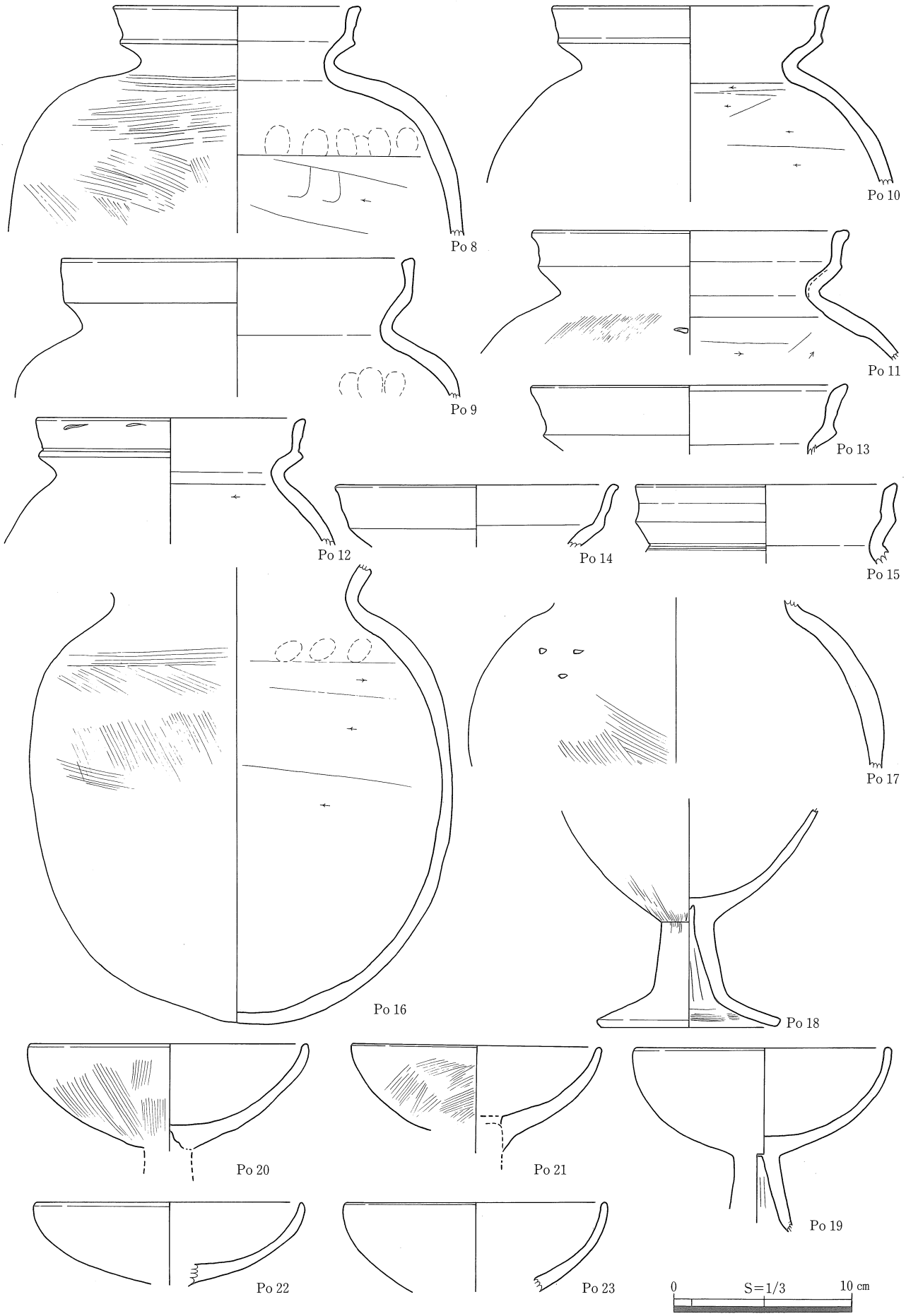
これらはいずれも埋土中からの出土であり、このうち、Po１～Po36・Po38～Po43・Po45～Po49・Po51・Ｓ13は埋土③層中からの出土である。特に大型壺Po51は広い範囲に分布しており、故意に破砕され、他の土器と一緒に一括廃棄されたものと考えられる。

時　期　床面出土遺物はないが、出土遺物からＣＳＩ20は大山Ⅷ期、古墳時代中期後半頃の特徴をもち、ＣＳＩ20はこの時期に作られ、廃絶したものと考えられる。

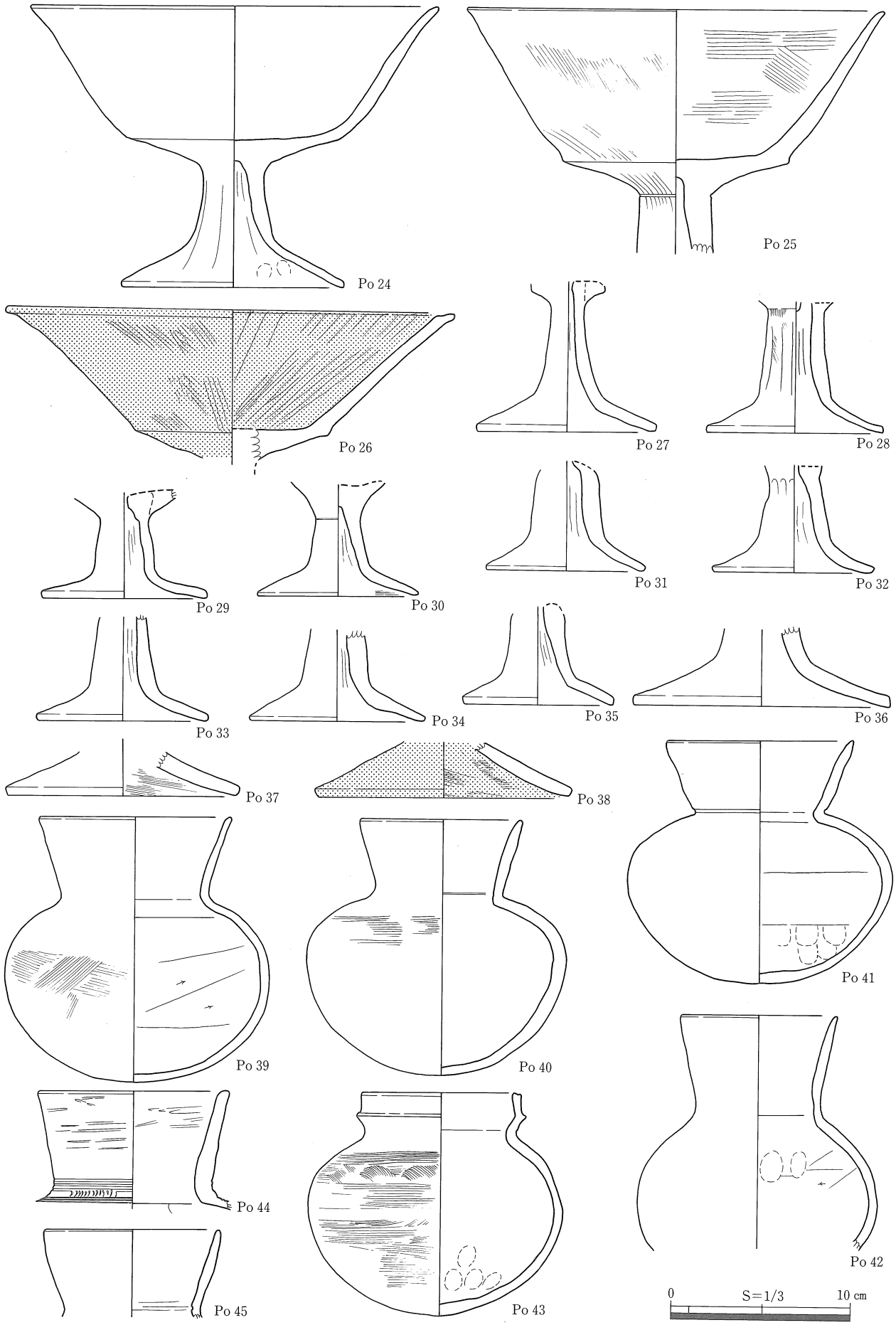


挿図118　南谷大山遺跡CSI20遺構図

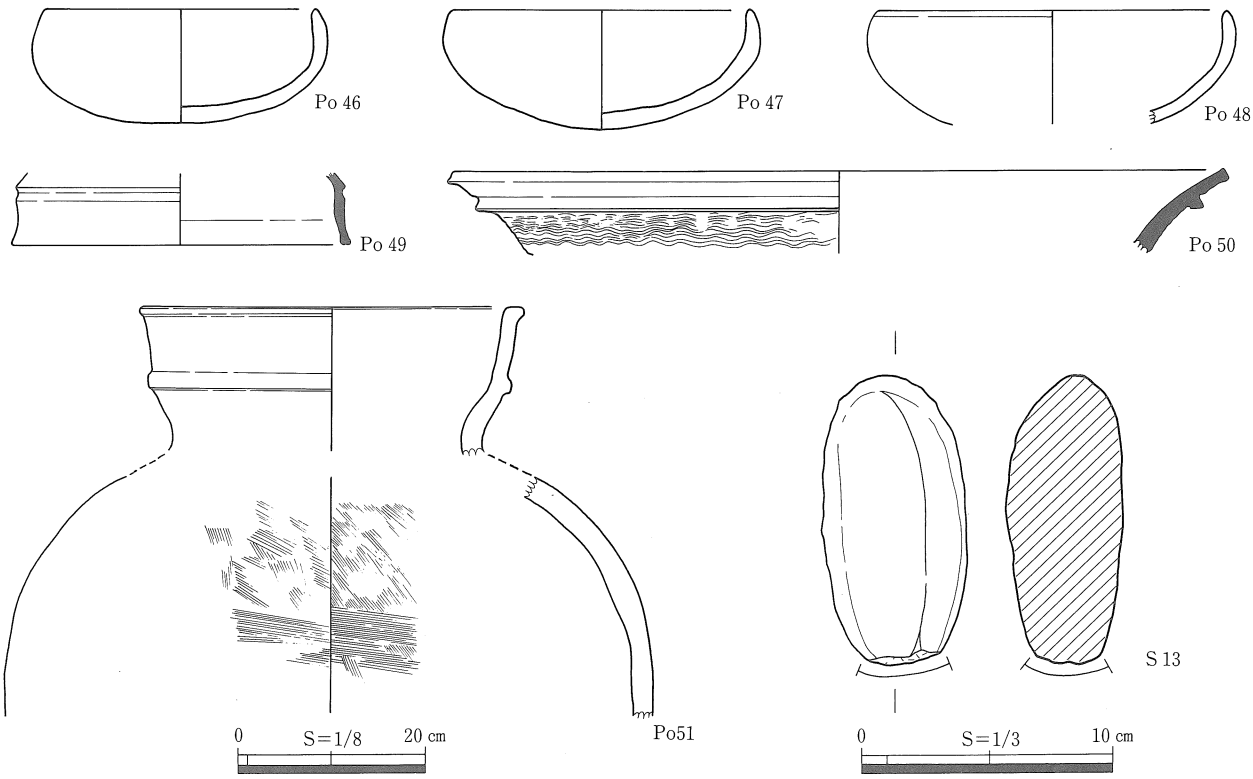
挿図119　南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(1)



挿図120　南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(2)



挿図121　南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(3)



挿図122　南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(4)

ＣＳＩ21（挿図123～126、図版24・49・50）

位　置　Ｃ－Ｖ区の北側のＤ21・Ｅ21グリッドにあり、標高60.0～60.4ｍの平坦面に位置する。北側約６ｍにはＣＳＩ20、南側約６ｍにはＣＳＩ17がある。

形　態　遺存状態は比較的よく、東壁はサブトレンチのため確認できなかったが、平面は長方形を呈すものと考えられる。規模は、東西4.2ｍ以上、南北2.90ｍを測り、床面積は11㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.43ｍを測る。

壁溝は、全周していたものと考えられ、規模は、幅７～12cm、深さ５～８cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。壁溝内には、径15cm程度、深さ４～10cmの小ピットが計12個あり、壁溝内に立てられた板状のものを支える杭跡と考えられる。

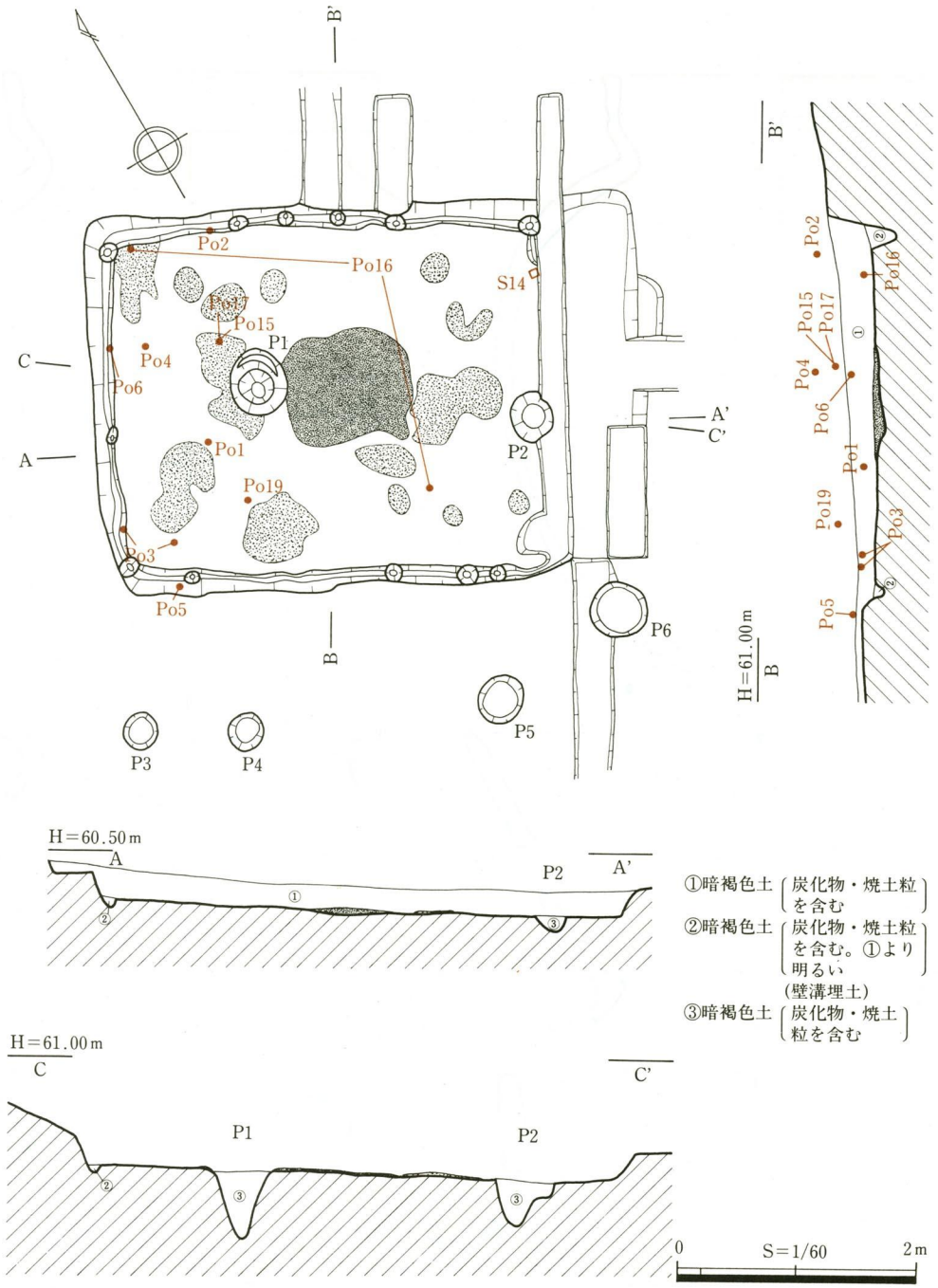
主柱穴はＰ１・Ｐ２の２個で、それぞれの規模は、Ｐ１（56×44－58）cm、Ｐ２（45×35－40）cmを測る。主柱穴間距離は、2.4ｍである。

中央ピットはない。

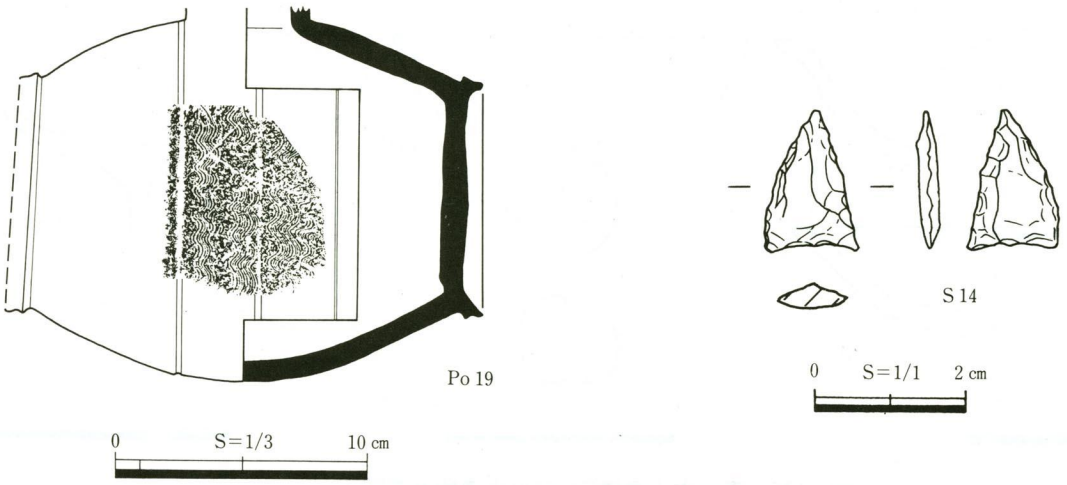
周辺ピット　また、南側の住居外にＰ３～Ｐ６のピットが並んで検出された。それぞれの規模は、Ｐ３（32×29－42）cm、Ｐ４（32×29－33）cm、Ｐ５（42×38－16）cm、Ｐ６（49×46－43）cmを測る。これらは、杭列または庇を支えるためのものと考えられる。

焼土面　住居の中央部に、西側はＰ１に接して、広い範囲に不整形に広がる焼土面が１カ所検出されている。この焼土面は非常に固く、深いところで10cm土が焼けており、恒常的に火が使用されていたものと考えられる。

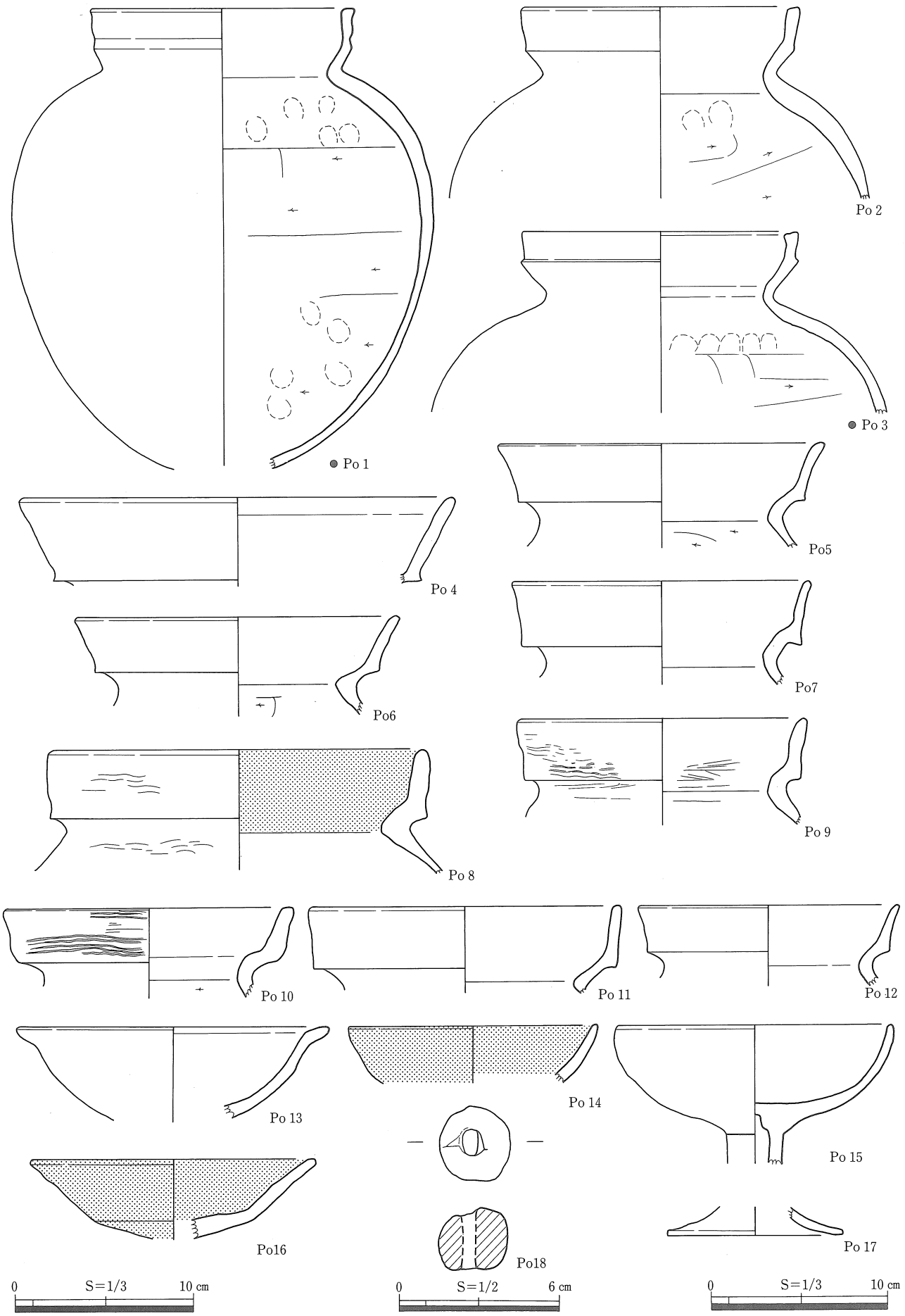
埋　土　埋土は１層で、炭化物・焼土粒を含んでいる。



挿図123　南谷大山遺跡CSI21遺構図



挿図124　南谷大山遺跡CSI21出土遺物実測図(1)

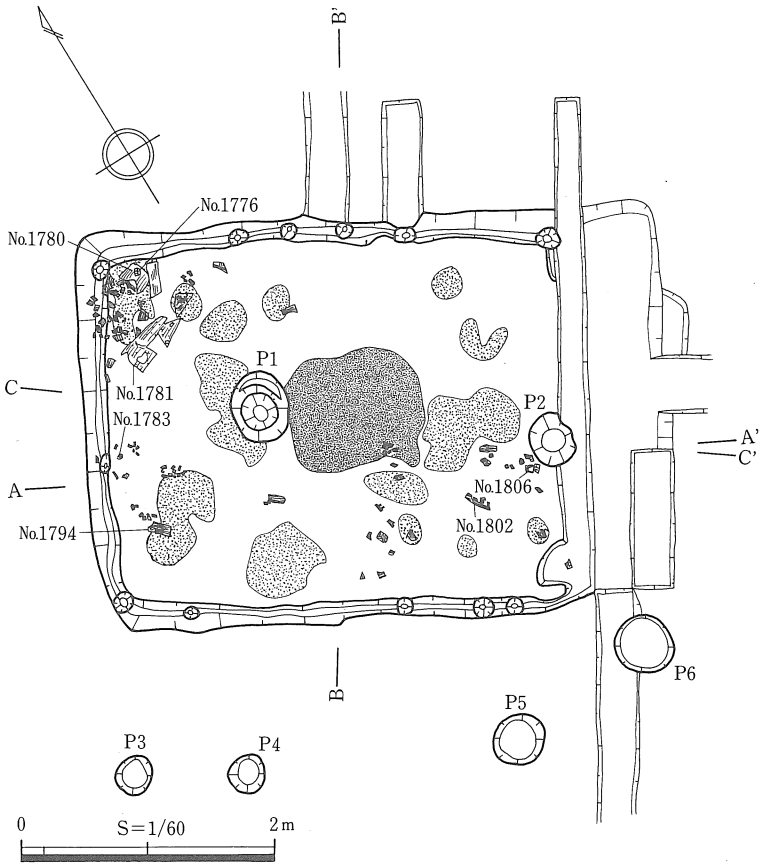


挿図125　南谷大山遺跡CSI21出土遺物実測図(2)

焼　土
炭化物　床面には、ほぼ全面にわたって柔らかい焼土が盛り上がるように検出されている。また、西側壁寄りでは、垂木・木舞と考えられる炭化材が検出されており、ＣＳＩ21は焼失したものと考えられる。検出された炭化材は、樹種鑑定を依頼したところ、垂木はスダジイ、ホオノキ、板状のものはシラカシ、木舞はスダジイと同定された。

遺　物
出土状況　図化できたものには、甕Po1～Po12、高杯Po13～Po17、土玉Po18、須恵器樽型瓶Po19がある。

このうち床面からは、西側壁寄りでPo１・Po３が出土している。



挿図126　南谷大山遺跡CSI21炭化物出土状況図

その他は埋土中からの出土である。

時　期　床面出土遺物から、ＣＳＩ21は大山Ⅷ期、古墳時代中期後半頃のものと考えられる。なお、Po４～Po12は弥生時代後期後半の特徴をもっている。また、樽型瓶Po19はTK208に並行するものと考えられる。

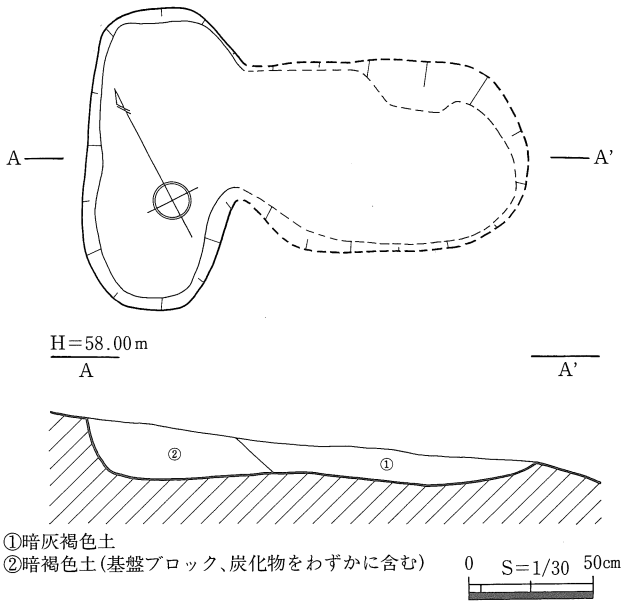
２．土坑・土壙

ＣＳＫ15（挿図127、図版24）

位　置　Ｃ－Ｖ区の南側のＥ23グリッドにあり、標高57.6～57.9ｍの緩やかに南に傾斜する斜面に位置する。付近には、ＣＳＤ10があり、南側約４ｍにはＣＳＫ16がある。

形　態　東側は攪乱を受けており、遺存状態は悪い。平面は、上縁部・底部とも長楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.22ｍ×短径0.6ｍを測る。深さは最大0.28ｍを測り、断面は逆台形状を呈す。

埋　土　埋土は、暗褐色土が単層ではいる。



挿図127　南谷大山遺跡CSK15遺構図

時　期　遺物は全く出土していないため、ＣＳＫ15の時期は不明であるが、埋土がＣ－Ｖ区の溝状遺構と類似しており、ほぼ同時期のものと考えられる。

用　途　ＣＳＫ15の用途は不明である。

ＣＳＫ16（挿図128、図版24）

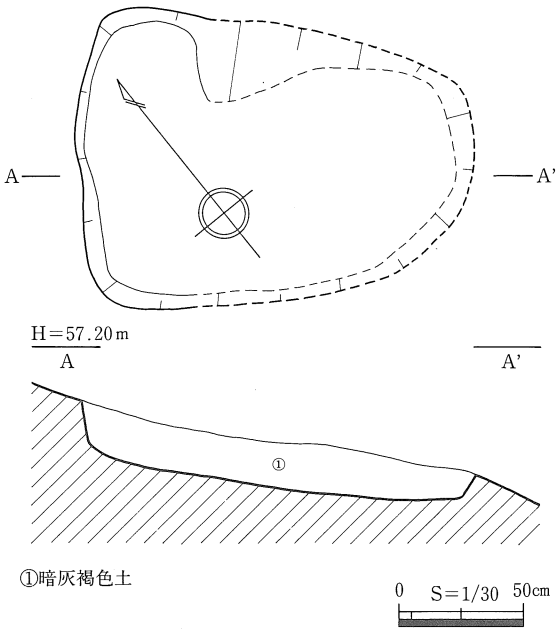
位　置　Ｃ－Ｖ区の南側のＥ24グリッドにあり、標高56.9～57.1ｍの緩やかに南に傾斜する斜面に位置する。南側約0.3ｍにはＣＳＫ17、北側約４ｍにはＣＳＫ15がある。

形　態　東側は大きく攪乱を受けており、遺存状態は悪い。平面は、上縁部・底部とも長楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.22ｍ×短径0.5ｍ以上を測る。深さは、最大0.24ｍを測り、断面は逆台形状を呈す。

埋　土　埋土は、暗灰褐色土が単層ではいる。

時　期　遺物は全く出土していないため、ＣＳＫ16の時期は不明であるが、規模がＣＳＫ15とほぼ同じで、埋土がＣ－Ｖ区の溝状遺構と類似しており、これらとほぼ同時期のものと考えられる。

用　途　ＣＳＫ16の用途は不明である。



挿図128　南谷大山遺跡CSK16遺構図

ＣＳＫ17（挿図129、図版25）

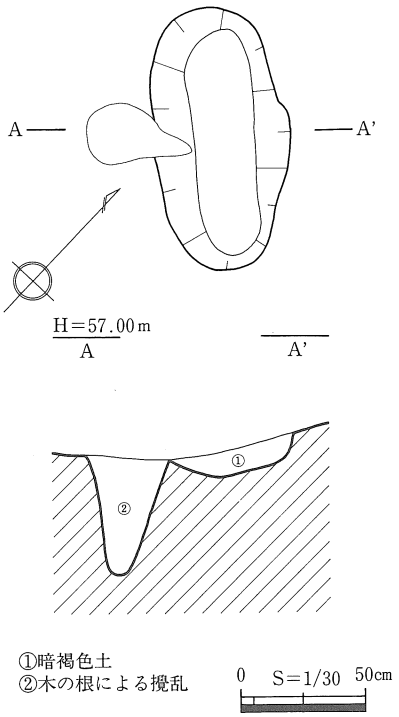
位　置　Ｃ－Ｖ区の最も南側のＥ24グリッドにあり、標高56.5～56.6ｍの緩やかに南に傾斜する斜面に位置する。北側約0.3ｍにはＣＳＫ16、北側約５ｍにはＣＳＫ15がある。

形　態　遺存状態は比較的良く、平面は、上縁部・底部とも長楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.05ｍ×短径0.5ｍを測る。深さは、最大0.12ｍを測り、断面は皿状を呈す。

埋　土　埋土は、暗褐色土が単層ではいる。

時　期　遺物は全く出土していないため、ＣＳＫ17の時期は不明であるが、埋土がＣ－Ｖ区の溝状遺構、ＣＳＫ15・16と類似しており、これらとほぼ同時期のものと考えられる。

用　途　ＣＳＫ17の用途は不明である。



挿図129　南谷大山遺跡CSK17遺構図

ＣＳＫ18（挿図130・131、図版25・50）

位　置　ＣＳＫ18は、Ｃ－Ｖ区の東側のＥ22・Ｅ23グリッドにあり、標高約59.5ｍの平坦面に位置している。約0.9ｍ北西にはＣＳＩ19が、約１ｍ南東にはＣＳＤ13が、約8.3ｍ南西にはＣＳＫ19が、それぞれ位置する。

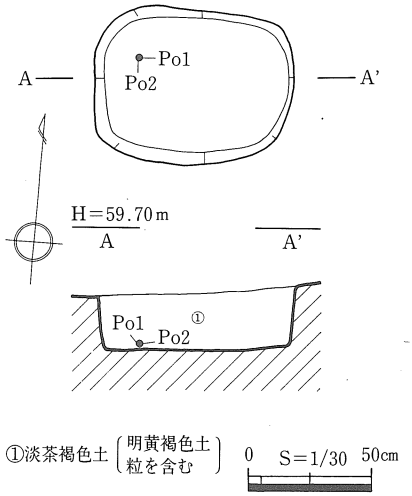
形　態　平面楕円形、断面長方形を呈する。規模は上縁部で長径0.8ｍ×短径0.62ｍ、底面で長径0.73ｍ×短径0.54ｍを測る。深さは0.25ｍである。

埋　土　埋土は、淡茶褐色土層のみである。

遺　物　底面より甕Po１・高杯杯部Po２が出土している。

時　期　甕Po１より、ＣＳＫ18は大山IX期、古墳時代中期後半頃のものと思われる。

用　途　用途は不明である。

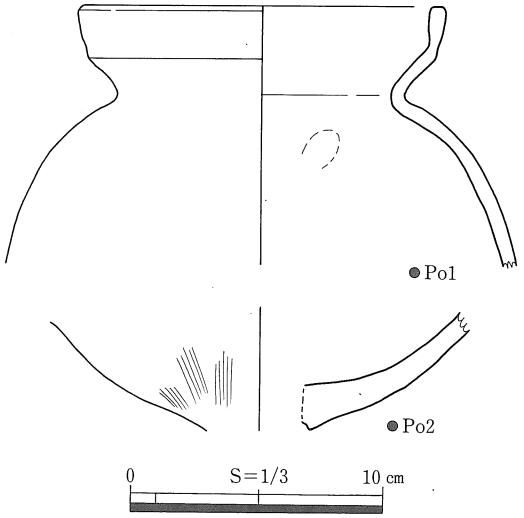


挿図130　南谷大山遺跡CSK18遺構図

ＣＳＫ19（挿図132・133、図版25・50）

位　置　ＣＳＫ19は、Ｃ－Ｖ区の東側のＥ23グリッドにあり、標高約59ｍの平坦面に位置する。約8.3ｍ北東にはＣＳＫ18が、約1.2ｍ北西にはＣＳＩ18が、約4.0ｍ西にはＣＳＤ10が、約6.2ｍ南東にはＣＳＤ12が、それぞれ位置する。一方、北東側でＣＳＤ13と接している。

形　態　平面は円形を、断面は長方形を呈する。上縁部で長径0.75ｍ×短径0.7ｍ、底面で長径0.5 ｍ×短径0.47ｍを測る。深さは0.43ｍである。



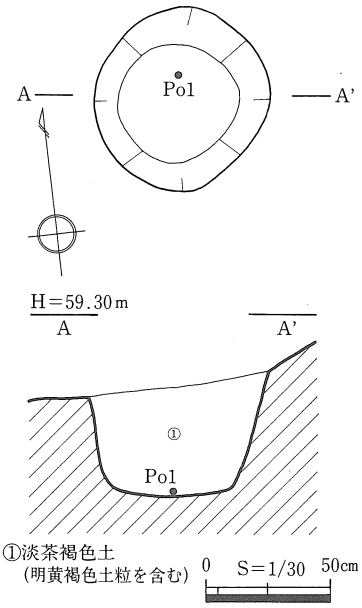
挿図131　南谷大山遺跡CSK18出土遺物実測図

埋　土　埋土は、淡茶褐色土層のみである。

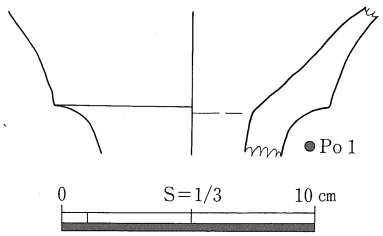
遺　物　遺物としては、底面より鼓形器台Po１が出土している。また、円錐台状を呈す石材も一緒に出土している。

時　期　鼓形器台Po１より、ＣＳＫ19は大山III～IV期、弥生時代後期後半頃のものと思われる。

用　途　用途は不明である。



挿図132　南谷大山遺跡CSK19遺構図



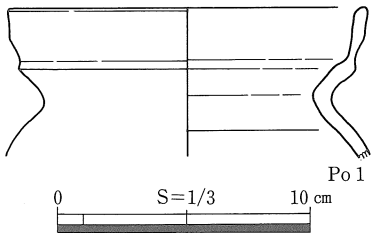
挿図133　南谷大山遺跡CSK19出土遺物実測図

3．溝状遺構

ＣＳＤ10・11（挿図134・136、図版25・26・50）

位　　置　ＣＳＤ10・11は、Ｃ－Ⅴ区の南側のＣ23・Ｄ23・Ｄ24グリッドにあり、標高約56.5～58.7ｍの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置している。

形　　態　ＣＳＤ10は、部分的にとぎれるものの、Ｃ－Ⅴ区の南側を「冂」状に走る。東側を走る溝は、調査区外へ延びている。総延長約22ｍ、幅約0.8～1.6ｍ、深さ７～46cmを測り、断面は「Ｕ」字状を呈する。



挿図134　南谷大山遺跡CSD10出土遺物実測図

ＣＳＤ11は、ＣＳＤ10の北側で接しており、南北方向に直線的に延びるもので、長さ約５ｍ、幅0.2～0.44ｍ、深さ２～６cmを測る。

埋　　土　埋土は、３層に分層でき、これらは自然堆積と考えられる。

遺　　物　ＣＳＤ10の埋土中から甕Po１が出土している。これは、大山Ⅷ期、古墳時代中期後半頃のものと考えられるが、直接この遺構に伴うものではない。ＣＳＤ11から遺物は出土していない。

時期・用途　ＣＳＤ10・11とも、時期・用途は不明であるが、遺構外から近世の磁器が出土しており、この時期の耕作等に関わる遺構と考えられる。

ＣＳＤ13（挿図135・136、図版50）

位　　置　ＣＳＤ13は、Ｃ－Ⅴ区の東側、Ｄ21・Ｅ21・Ｅ22・Ｅ23・Ｆ21・Ｆ22・Ｆ23グリッドに位置し、標高約59.50～61.25ｍの平坦面に位置する。約3.1ｍ北にはＣＳＩ21が位置する。約3.2ｍ南東ではＣＳＤ12が、当遺構にそれぞれ並行している。一方、北でＣＳＤ15と接している。

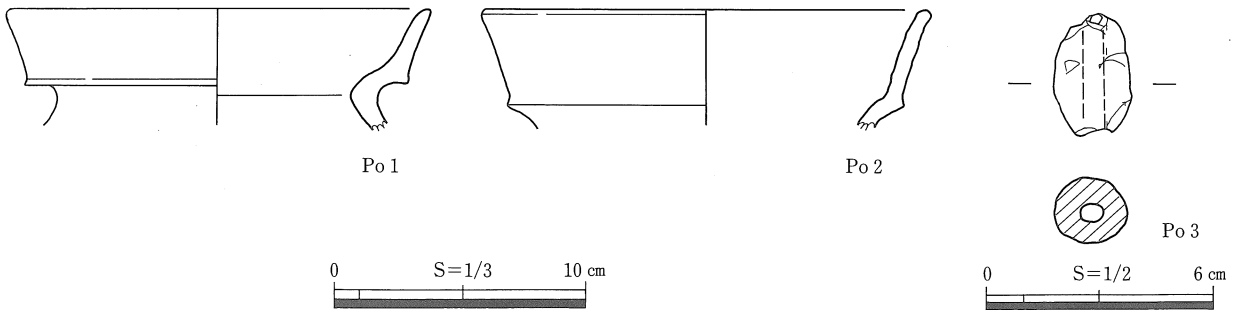
形　　態　ＣＳＤ13は、Ｃ－Ⅴ区の東側斜面際をほぼ南北方向に走り、谷部中央では中断するものの、東西方向に横断し、ＣＳＩ17・18・19の外側を囲んでいる。長さ約34.6ｍ、溝の幅約0.55～2.55ｍ、深さ約13～23cmを測る。断面は「Ｕ」字状を呈する。

埋　　土　埋土は３層に分層できた。

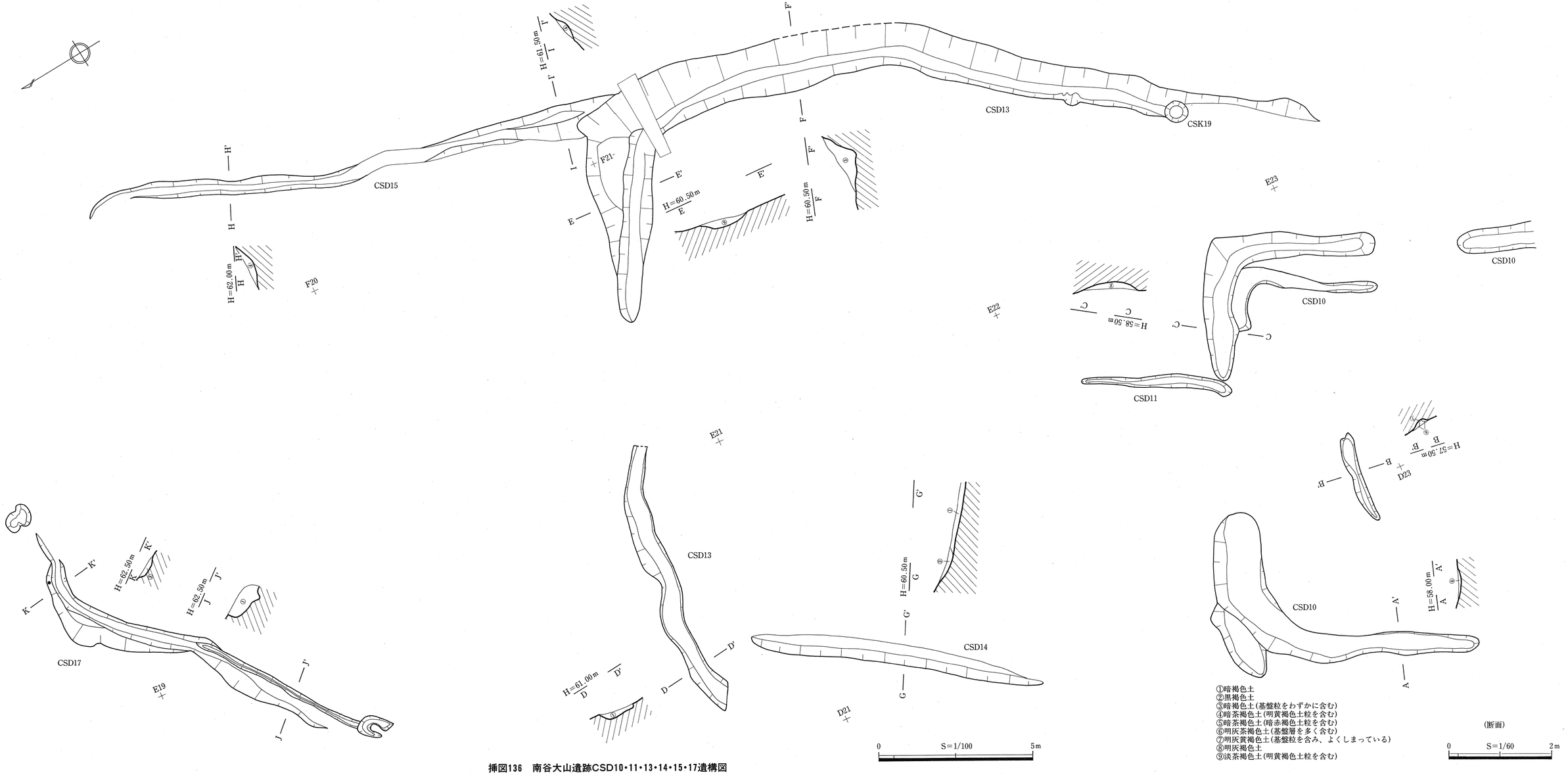
遺　　物　図化できたものは、甕Po１・Po２、土錘Po３が挙げられる。

これらのうち、土錘Po３は明黄灰褐色土中より出土した。

時期・用途　Po１・Po２は異なる時期のものであり、時期は不明であるが、ＣＳＤ10同様、近世頃の耕作等に関わる遺構と考えられる。



挿図135　南谷大山遺跡CSD13出土遺物実測図



挿図136　南谷大山遺跡CSD10・11・13・14・15・17遺構図

ＣＳＤ14（挿図136）

位　　置　ＣＳＤ14は、Ｃ－Ｖ区西側のＣ22・Ｄ21・Ｄ22グリッドにあり、標高60.1～60.6ｍに位置する。東側はＣＳＩ17の埋土を掘り込んでいる。

形　　態　ＣＳＤ14は、西側調査区際に沿って直線状に走り、長さ9.8ｍ、幅0.6ｍ、深さ10～15cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

埋　　土　埋土は、暗褐色土が単層ではいる。

遺物・時期　遺物は全く出土していないため、時期は不明であるが、ＣＳＩ17の埋土を切り込んでおり、古墳時代中期後半以降のものと判断される。

用　　途　ＣＳＤ14は、ＣＳＤ10・13同様、近世頃の耕作等に関わるものと考えられる。

ＣＳＤ15（挿図136）

位　　置　ＣＳＤ15は、Ｃ－Ｖ区の北東側のＦ20・Ｆ21・Ｆ22グリッドにあり、標高約60.50～61.75ｍの平坦面に位置している。約７ｍ北西にはＣＳＩ20が、約９ｍ西にはＣＳＩ21が位置する。南側ではＣＳＤ13と接している。

形　　態　ＣＳＤ15は、Ｃ－Ｖ区の東側斜面際をほぼ南北方向に走っている。長さ約17.7ｍ、幅約0.15～0.6ｍ、深さ約25～40cmを測り、断面は「Ｕ」字状を呈する。

埋　　土　埋土は、暗茶褐色土のみで、自然堆積と考えられる。

遺　　物　埋土中から土器片が出土しているが、図化できなかった。

時期・用途　時期・用途ともに不明であるが、ＣＳＤ10・13同様、近世の耕作等にかかわる遺構と考えられる。

ＣＳＤ17（挿図136・137、図版26・50）

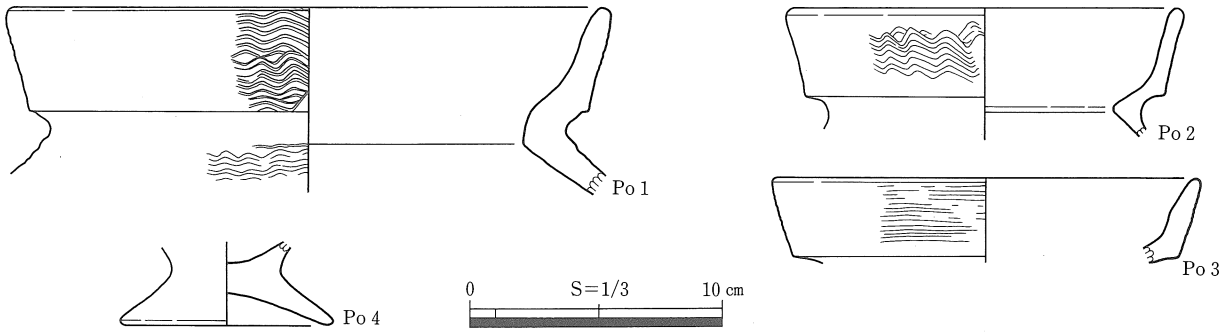
位　　置　ＣＳＤ17は、Ｃ－Ｖ区の北西側のＤ20・Ｅ19・Ｅ20グリッドにあり、標高61.5～62.5ｍに位置する。南東側約２ｍには、ＣＳＩ20がある。

形　　態　調査区際を逆「Ｌ」字状に走り、南側は一段深く掘り込まれている。長さ約13.5ｍ、幅0.14～0.9ｍ、深さ５～50cmを測る。断面「Ｕ」字状を呈す。

埋　　土　埋土は２層に分層できた。

遺　　物　出土遺物には、図化できたものには甕Ｐｏ１～Ｐｏ３、低脚杯Ｐｏ４がある。いずれも、検出中および基盤層中からの出土である。これらは、大山Ⅱ～Ⅲ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられるが、ＣＳＤ17に直接伴うものではない。

時期・用途　ＣＳＤ17は、ＣＳＤ13・15同様、近世頃の耕作等に関わるものと考えられる。



挿図137　南谷大山遺跡CSD17出土遺物実測図

4．集石・ピット群（挿図138～140、図版26・51）

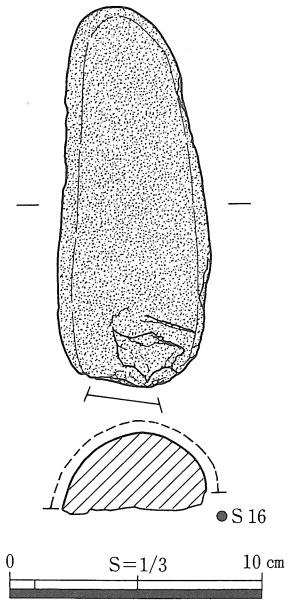
位　　置　C－V区の中央やや北寄りのE21グリッドにあり、標高59.5～59.9mに位置する。南側はCSI17に接しており、北西側約2mには、CSI21がある。

形　　態　この部分は、段状になっており、この部分にのみ、規則性はないが、大小の地山礫が密集している。また、計11個のピットが掘り込まれている。それぞれの規模は、P1（42×40－35）cm、P2（35×32－29）cm、P3（38×27－21）cm、P4（57×39－30）cm、P5（32×32－18）cm、P6（28×23－29）cm、P7（53×42－21）cm、P8（39×34－25）cm、P9（28×24－34）cm、P10（68×53－12）cm、P11（50×45－26）cmを測る。

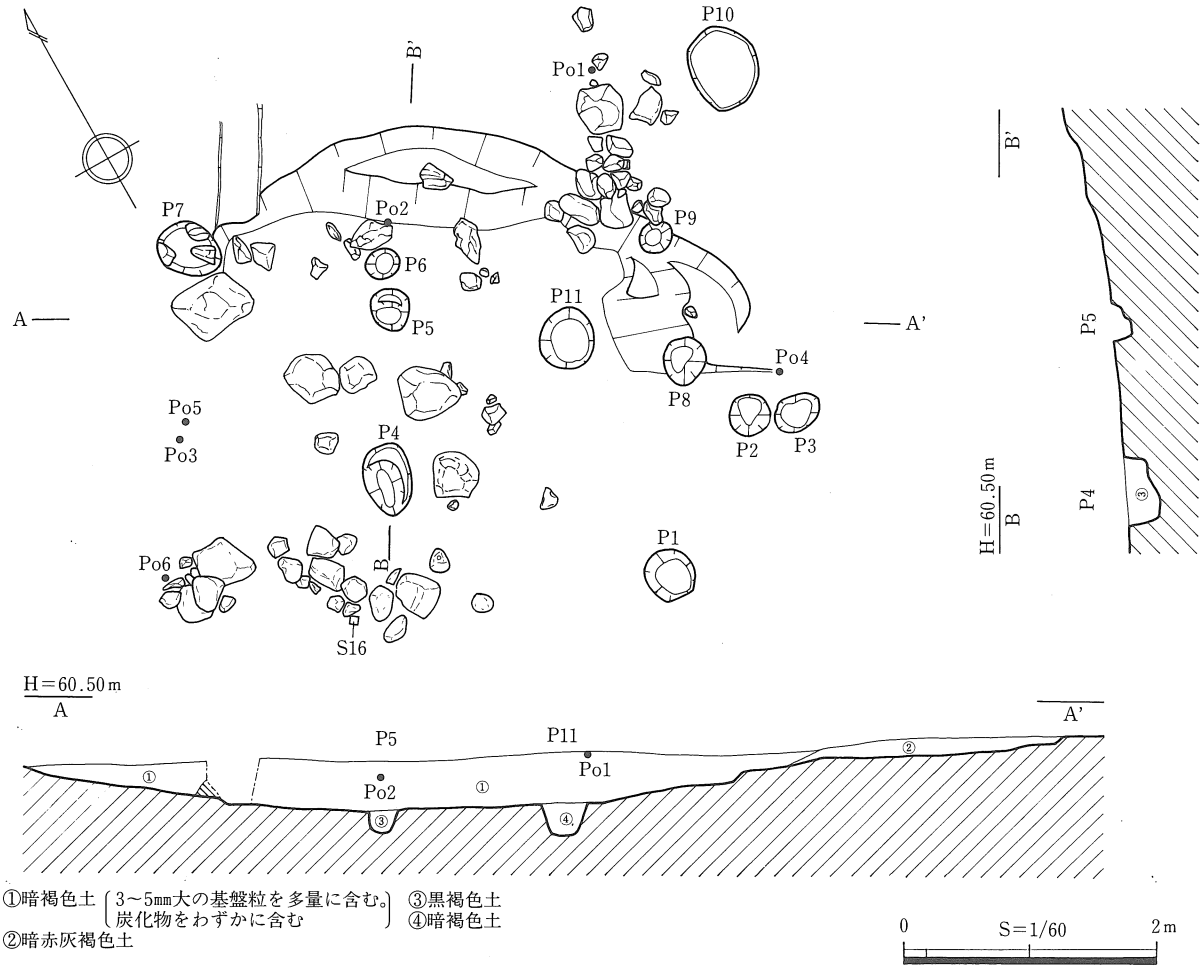
埋　　土　埋土は、2層に分層できた。ピット内の埋土は、③・④層いずれかが単層で入り込むものである。

遺　　物
出土状況　図化できたものには、壺Po1、高杯Po2・Po3、直口壺胴部Po4、小型丸底壺Po5、椀Po6、敲石S16がある。このうち、Po4・S16は底面から出土している。その他のものは、埋土下層中からの出土である。

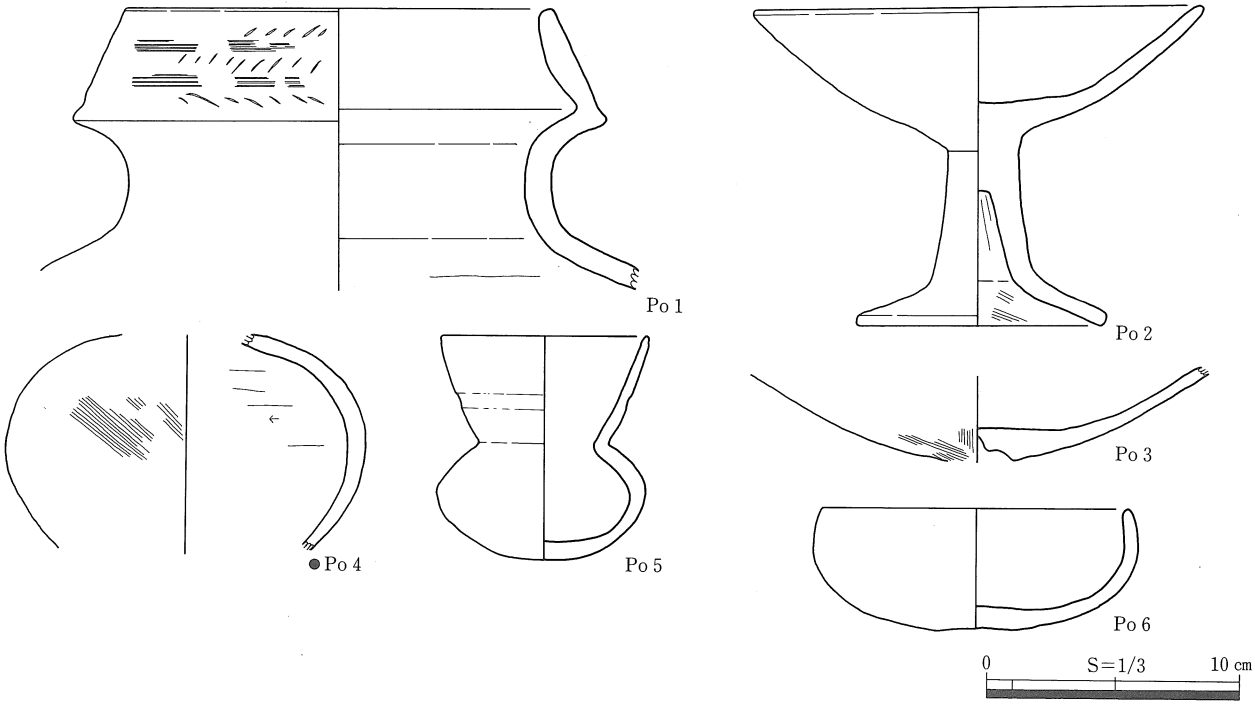
時　　期　集石・ピット群の時期は、出土している土器から、大山Ⅶ～Ⅷ期、古墳時代中期中葉～後半頃のものと考えられる。



挿図138　南谷大山遺跡C－V区集石・ピット群出土遺物実測図(1)



挿図139　南谷大山遺跡C－V区集石・ピット群遺構図



挿図140　南谷大山遺跡C－Ⅴ区集石・ピット群出土遺物実測図(2)

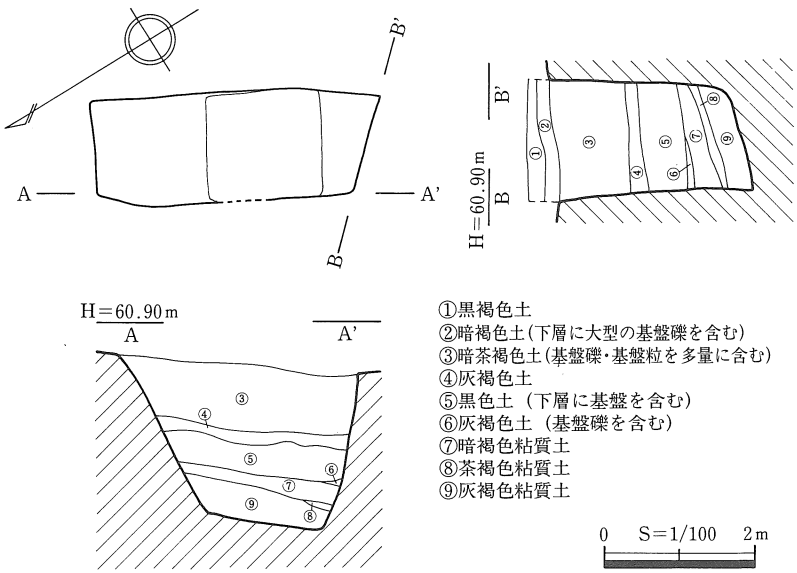
5．遺構外遺物について（挿図141～144、図版51～53）

遺構外からは、図化できたものに壺Po１、甕Po2・Po3、高杯Po4～Po7、鼓形器台Po8、甑形土器Po9、須恵器杯身Po10～Po13、須恵器無蓋高杯Po14、須恵器瑯Po15・Po16、須恵器甕Po17、伊万里焼皿Po18、青磁香炉Po19、石鏃Ｓ19・Ｓ20、水晶石核Ｓ21、磨製石斧Ｓ22・Ｓ23、砥石Ｓ24、磨石Ｓ25、敲石Ｓ26・Ｓ27、石皿Ｓ28がある。

これらのうち、Po3・Po4・Po7は、Ｄ24グリッド調査区際でまとまって検出された。

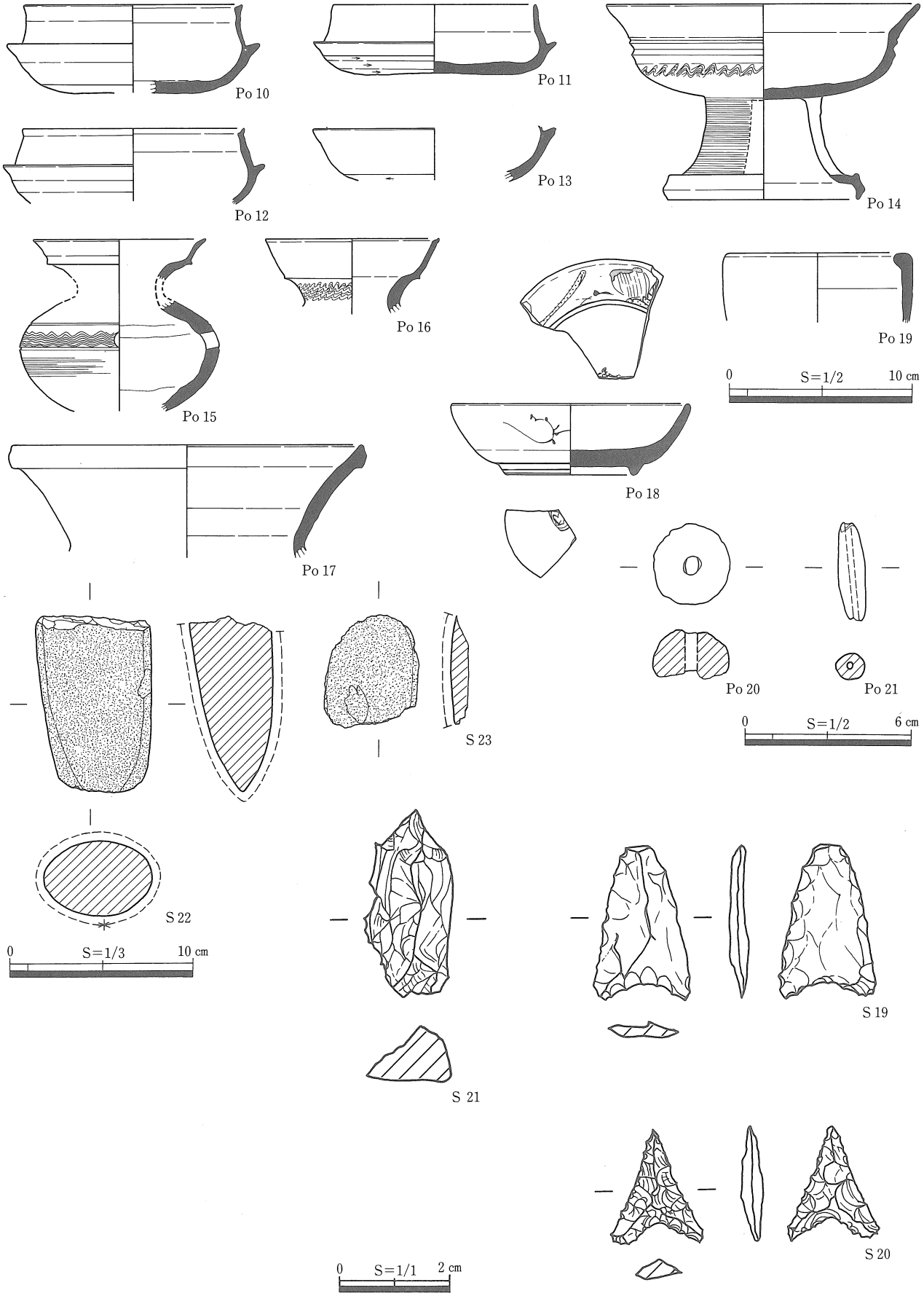
Po１～Po17は、大山Ⅷ～Ⅸ期、Po18・Po19は近世のものと考えられる。なお、須恵器類は、ＴＫ208～ＴＫ23並行期と考えられる。

なお、Ｃ－Ⅴ区のやや北側のＥ21グリッドにサブトレンチを設けて掘り下げたところ、遺構検出面より約１ｍ下で旧表土と考えられる⑤層が検出された。さらに、その下にもそれ以前の旧表土と考えられる⑨層がある。Ｃ－Ⅴ区の遺構の基盤層①・②層中には、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が含まれているが、それ以下の層には遺物は含まれていなかった。

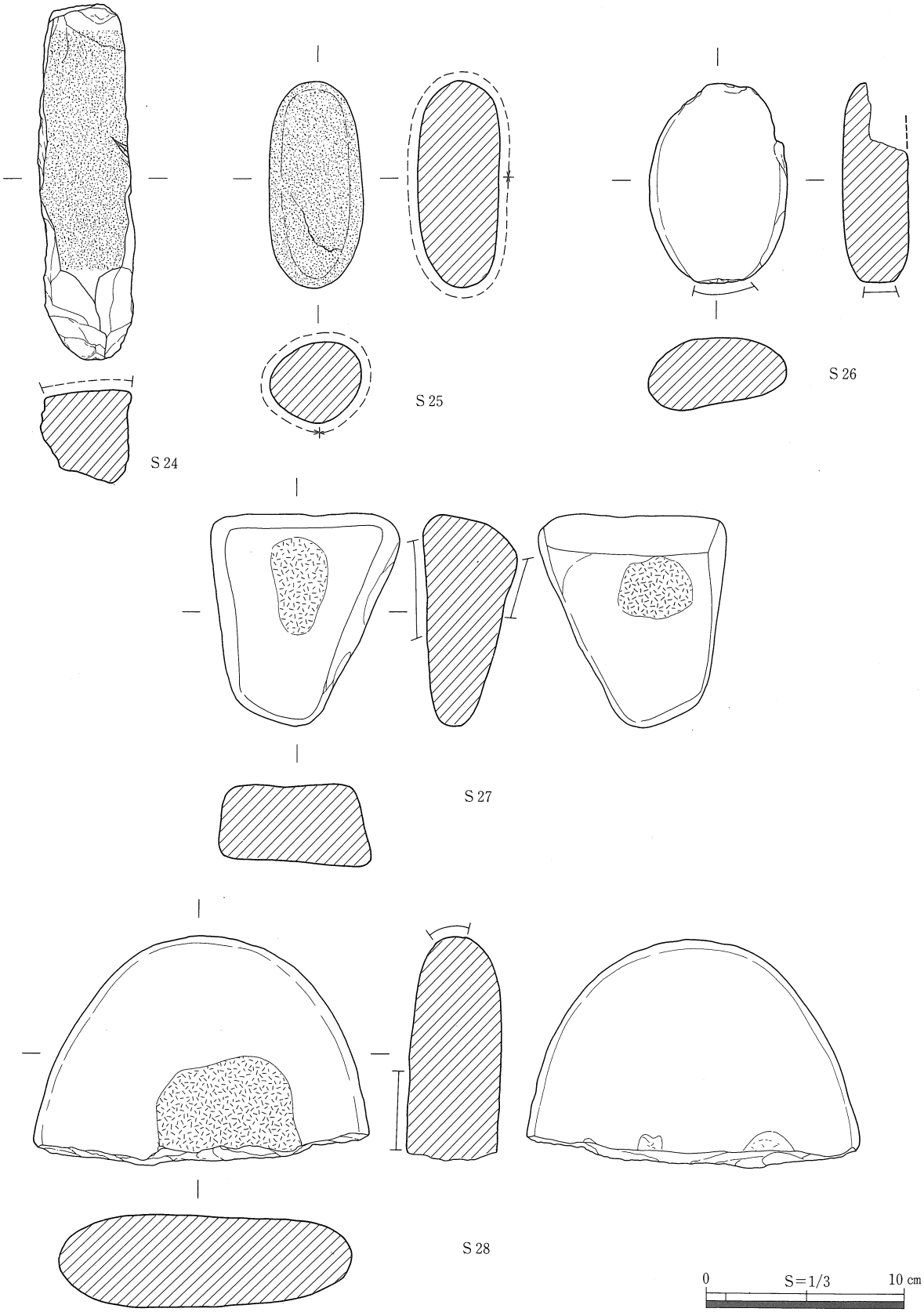


挿図141　南谷大山遺跡C－Ⅴ区サブトレンチ土層断面図

挿図142　南谷大山遺跡C－Ⅴ区遺構外出土遺物実測図(1)



挿図143　南谷大山遺跡C-Ⅴ区遺構外出土遺物実測図(2)



挿図144　南谷大山遺跡C－Ⅴ区遺構外出土遺物実測図(3)

第11節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅵ区の概要

位　　置　Ｃ－Ⅵ区は、今年度調査区の中では最も高い位置にあり、標高84～87ｍの尾根頂部地区である。

遺　　構　この地区では、古墳時代前期の方墳である南谷29号墳が検出されている。

この古墳は、南谷古墳群中では南谷27号墳に次いで２例目となる古墳時代前期の方墳で、周溝の四隅がとぎれている。主体部は旧表土面を掘り込んで作った箱式石棺で、石材の組み合わせが、東側では側板が小口石を挟んでいるのに対し、西側では小口石で側板を押える形に組まれている。

南谷古墳群では、見つかった古墳時代前期の古墳が、いずれも方形を呈す事がわかり、ほぼ同時期と考えられる橋津（馬ノ山）古墳群の前方後円形を呈す古墳との差を考えるうえで大変興味深いものである。

また、時期は不明であるが、段状遺構ＣＳＳ01がある。

第12節　南谷大山遺跡Ｃ－Ⅵ区の調査結果

１．段状遺構

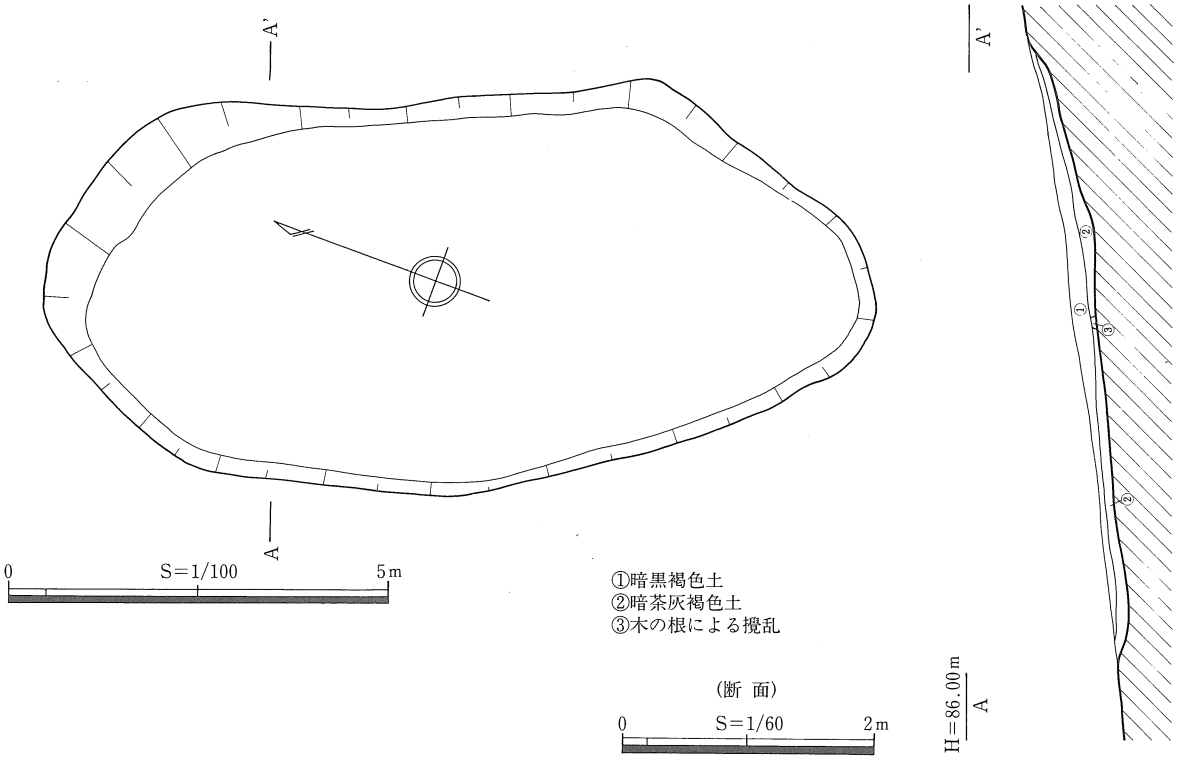
ＣＳＳ01（挿図145、図版27）

位　　置　ＣＳＳ01は、Ｃ－Ⅵ区のＪ22・Ｊ23・Ｋ22・Ｋ23グリッドにあり、標高84.8～85.3ｍの緩やかに南西に傾斜する斜面に位置する。北東側約７ｍには南谷29号墳がある。

形　　態　斜面を削り込み、平坦面を作っている。平坦面は、楕円形を呈し、東西約5.3ｍ、南北約11ｍを測る。深さは最大20cmである。埋土は、３層に分層できた。

遺　　物　埋土中から土器片が出土しているが、図化できなかった。ＣＳＳ01の時期は不明である。

用　　途　用途は不明である。



挿図145　南谷大山遺跡CSS01遺構図

遺構名	形態	規模（m）	床面積（m²）	残存壁高（m）	主柱穴（本）	棟持柱（本）	遺物	時期	備考
CSI01	隅丸方形	4.20×3.90	17.0	1.02	4	－	甕・蓋・砥石・軽石	弥生時代後期後半	中央ピット、屋内貯蔵穴
CSI02	五角形	6.50×5.55	32.0	1.47	5	－	甕・高杯・鼓形器台・低脚杯・甑	古墳時代前期前半	中央ピット・焼土面・土器溜り
CSI03	隅丸方形	3.50×2.8↑	8.5↑	0.66	4	－	壺・甕・高杯・小型丸底壺	古墳時代前期前半	中央ピット
CSI04	五角形	7.98×7.12	43.0	1.03	5	2？	甕・高杯・鼓形器台・直口壺・低脚杯・小型丸底壺・土玉・黒曜石剝片	古墳時代前期前半	中央ピット・焼土面
CSI05	隅丸五角形	7.20×6.80	41.5	0.62	5		壺・甕・直口壺・高杯・鼓形器台・小型丸底壺・低脚杯・甑・磨石・不明鉄器	古墳時代前半後期	中央ピット・焼土面、焼失か？
CSI06	楕円形	5.80×4.90	24.2	0.69	5	－	甕・大形甕・高杯・鼓形器台・低脚杯・甑・敲石・砥石	古墳時代前半後期	中央ピット・焼土面、屋内貯蔵穴、焼失か？
CSI07	隅丸方形	5.80×5.80	38.6↑	0.43	4	－	壺・甕・高杯・低脚杯・小型高杯形器台・敲石	古墳時代前期後半	中央ピット・焼土面・建て替え
CSI08	六角形	5.50×2.5↑	8↑	0.61	6？	－	甕・土玉	弥生時代後期後半	
CSI09	隅丸方形？	3.8↑×2.0↑	12↑	0.3			甕	古墳時代前期前半	焼土
CSI10	方形	3.6×2.9	10.6	0.22	－	－	甕・鼓形器台	古墳時代前期前半	
CSI11	長方形	4.11×3.4↑	14↑	0.63	2	－	壺・甕・蓋・無頸壺・砥石・鉈	弥生時代後期後半	中央ピット
CSI12	長方形	4.90×3.7↑	18↑	1.30	4	－	壺・甕・高杯・低脚杯・甑・不明鉄器	古墳時代前期前半	中央ピット・炭化材、焼失か？
CSI13	隅丸方形	3.7×2.7↑	10↑	0.62	－	－	甕・鉢	弥生時代後期後半	焼土面・炭化材焼失か？
CSI14	長方形	2.68×2.23	5.6	0.19	2	－	壺・甕・高杯・脚付甕・手捏ね土器・土玉	弥生時代後期後半	焼失
CSI15	長方形	6.00×2.8↑	15↑	0.67	4	－		弥生時代？	
CSI16	隅丸方形	2.65×2.50	6.6	0.91	2	－	甕・鉢	弥生時代後期後半	
CSI17－1	方形？	7.8×0.58↑	－	0.28	－	－	甕・高杯・鼓形器台・小型丸底壺・低脚杯・土玉・黒曜石剝片・鋳造鉄斧	古墳時代中期後半	
－2	不明	－	－	－	－	－			
－3	不明	－	－	－	－	－			
－4	不明	－	－	－	－	－			
CSI18	隅丸方形	3.5↑×2.0↑	－	0.15	－	－	壺・甕・高杯・土玉	古墳時代中期中葉	
CSI19	隅丸方形？	7.5×3.0↑	25↑	0.28	－	－	甕・高杯・鼓形器台・小型丸底壺・蓋・台付無頸壺・土玉・臼玉・有孔円盤・石皿	古墳時代中期中葉	
CSI20	方形	4.03×3.96	16.8	0.64	4	－	壺・甕・高杯・大型壺	古墳時代中期後半	特殊ピット・区画溝
CSI21	長方形	4.2↑×2.9	11↑	0.43	2	－	甕・高杯・土玉・須恵器樽型瓶－TK208	古墳時代中期後半	焼土面・炭化材

－は不明・無し　↑は数値以上

挿表4　南谷大山遺跡C区竪穴住居跡一覧表

第４章　南谷29号墳の調査

第１節　南谷29号墳の調査結果（挿図146～153、図版27・28・53）

位　　置　南谷29号墳は、Ｃ－Ⅵ区のＫ21・Ｌ21・Ｋ22・Ｌ22グリッドに位置し、南・南東へ派生する尾根の基部となっている。標高は86.32～87.70ｍで、本年度の調査区内では最も高い地区である。

1990年度の羽合町教育委員会による試掘調査での第４トレンチで、周溝の北部が確認され、存在が確認された。

墳　　丘　南谷29号墳は１辺約10ｍの方墳である。墳丘は後世の攪乱により、かなりの削平を受けている。墳丘の規模は、主軸方向で東西約10.4ｍ、南北約10.6ｍを測る。周溝底からの残存の高さは、東・西・南・北の順に、1.48ｍ・1.99ｍ・1.48ｍ・1.51ｍである。

周　　溝　周溝は北側・西側のものが比較的遺存状態がよい。東側・南側のものは後世の削平で遺存状態は悪い。全周せず、北西コーナー・南西コーナー・南東部・北東部で途切れている。規模は東側で幅約1.30ｍ、深さ26㎝、西側で幅２ｍ、深さ88㎝、南側で1.44ｍ、深さ26㎝、北側で幅2.18ｍ、深さ98㎝である。

埋土は、暗黒褐色土が主流である。周溝内には埋葬施設はみられなかった。

盛　　土　盛土は④層～⑥層の３層で、黄褐色の基盤粒を主体としている。もっとも厚い所では42㎝あった。

旧　　表　墳丘下の旧表は、遺構の南部でよく残っている。厚さは約17㎝である。墳丘下には、遺構がみられなかった。

主 体 部　主体部は、旧表土面を掘り下げるかたちで検出された、墳丘のほぼ中央に位置する箱式石棺である。規模は石棺の内法で長さ1.74ｍ、幅0.26ｍ、墓壙で東西2.14ｍ、南北0.68ｍ、深さ21㎝を測る。主軸方向はＮ－77°－Ｅに振る。

当主体部では石棺の組み方に、特殊な例が見られた。まず東部では、南側の側板が土圧で内側へ倒れこんでいた。しかし、本来は側板が小口石を挟んでいたと思われる。これに対し西部では、小口石が側板をおさえていた。蓋石は攪乱を受けており、西側・東側にのみわずかに残っていた。

床面は中央～西部が攪乱されており、遺物等は検出されなかった。頭位については、東西いずれか不明である。

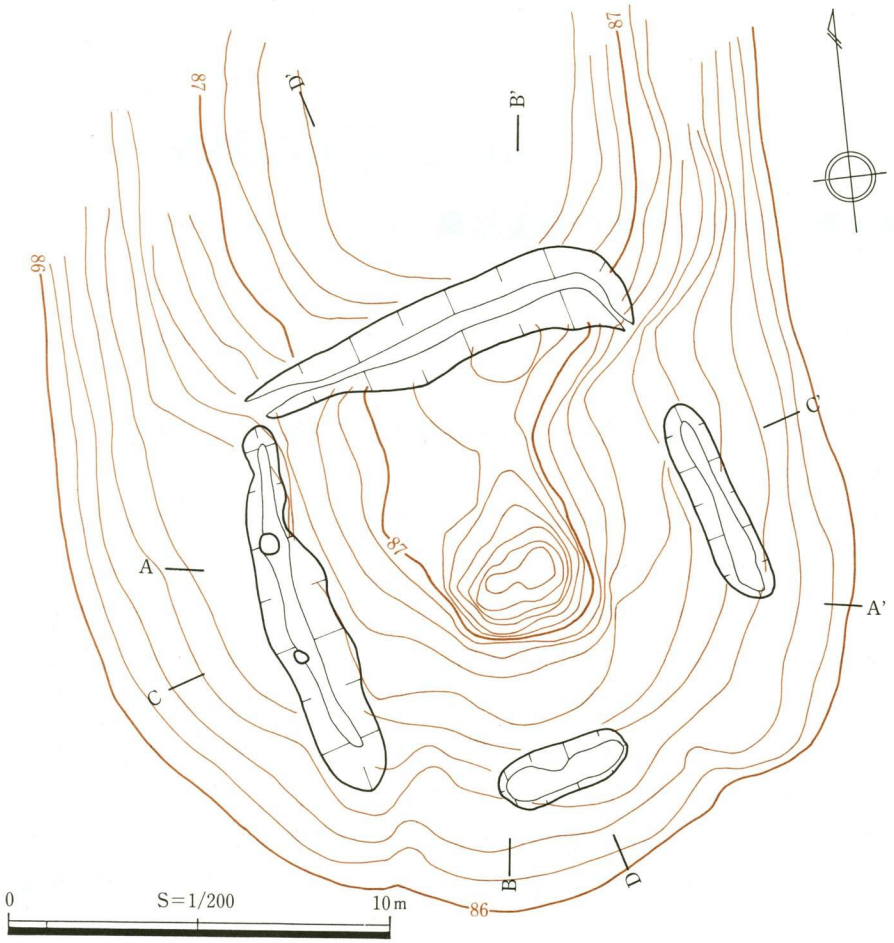
遺　　物
出土状況　図化できたものには、長頸壺Po１・甕Po２～Po３・小型丸底壺口縁Po４・小型器台Po５・土錘Po６～Po８・玉髄剝片Ｓ29がある。

これらのうち、Po１・Po２は西側周溝の淡黒褐色土中から出土している。一方、北側周溝からはPo４とPo５が出土している。また、土師器甕Po３も周溝中より出土した。

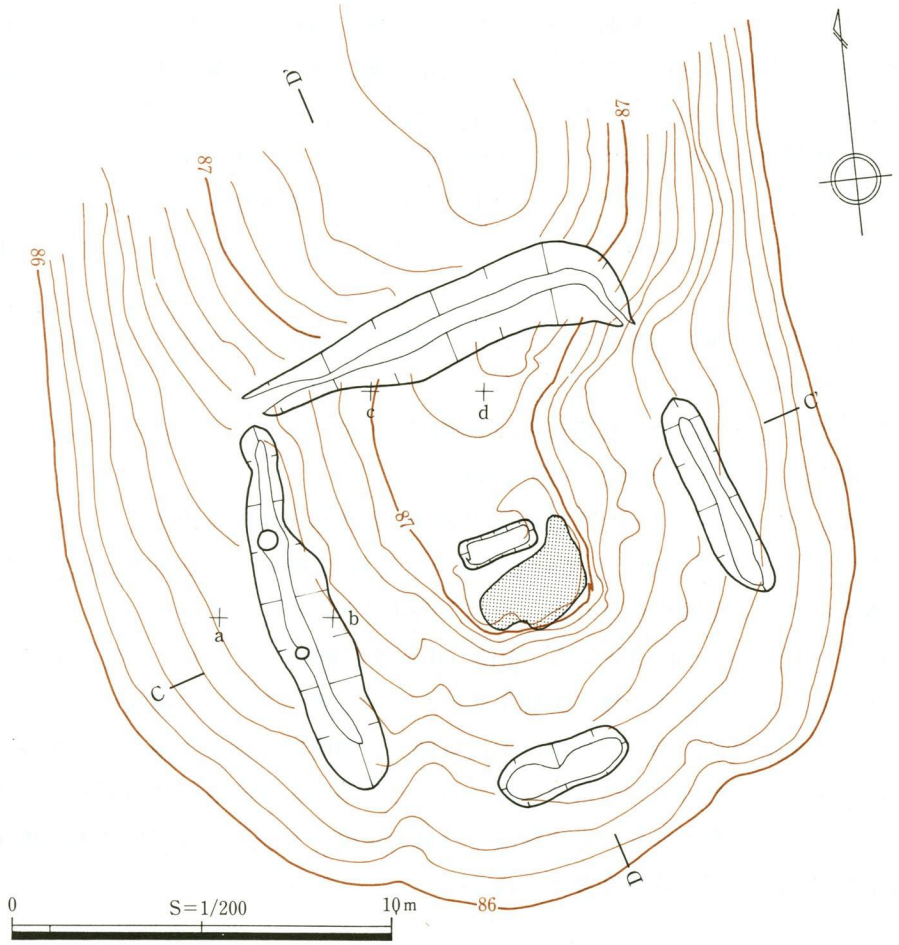
盛土中からも土器片が見つかったが、図化できなかった。

時　　期　Po１・Po３・Po４・Po５は、布留（中）並行期のものと考えられ、また、Po２は、複合口縁をもつものの布留式甕の影響を受けたものと考えられ、口縁端部が内方へ肥厚している。これらの土器から、南谷29号墳は大山Ⅵ期、古墳時代前期後半頃のものと考えられる。

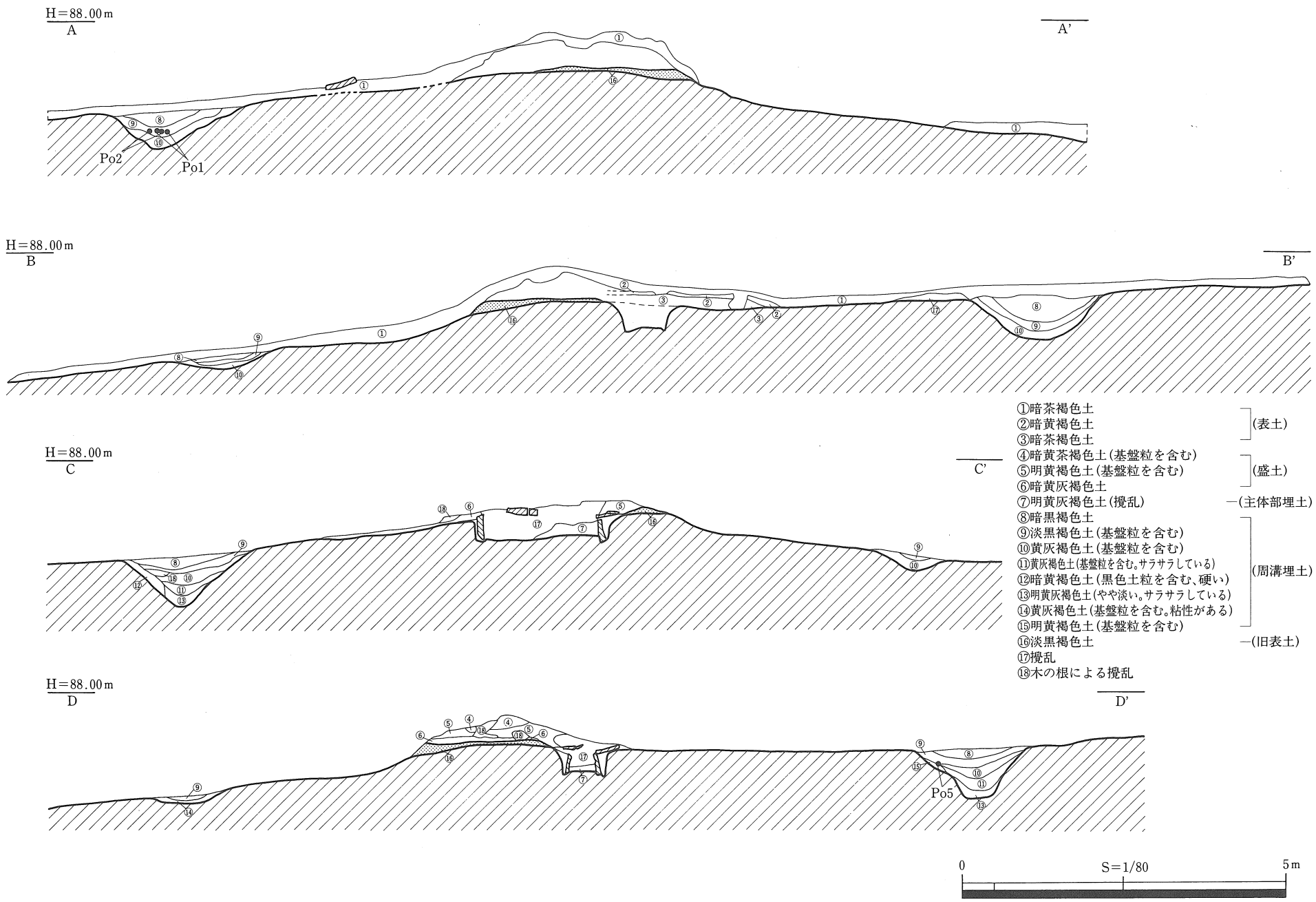
南谷古墳群内では、方墳は南谷27号墳と29号墳のみ確認されているが、いずれも古墳時代前期頃のものと考えられ、この地域では最大規模をもつ前方後円墳である橋津４号墳（馬ノ山４号墳）とほぼ同時期と考えられる。



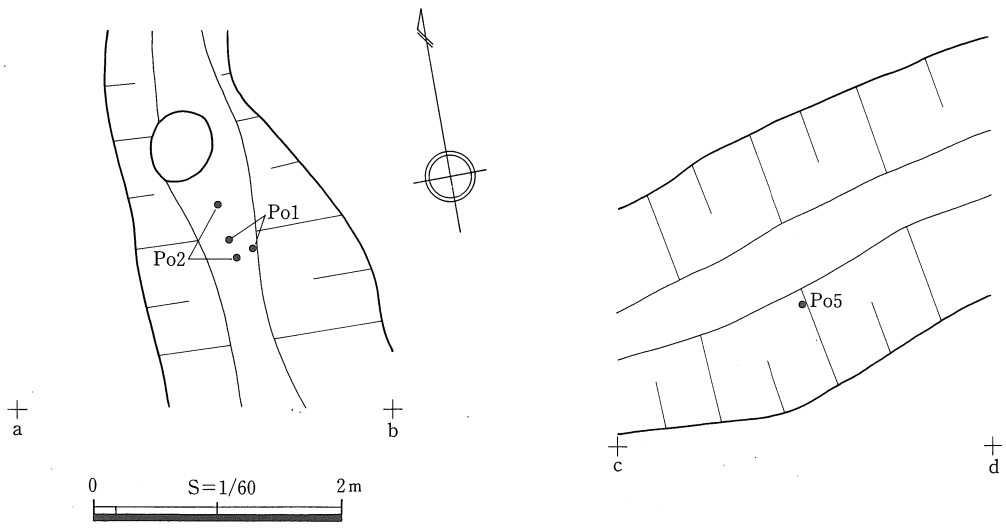
挿図146　南谷29号墳墳丘測量図



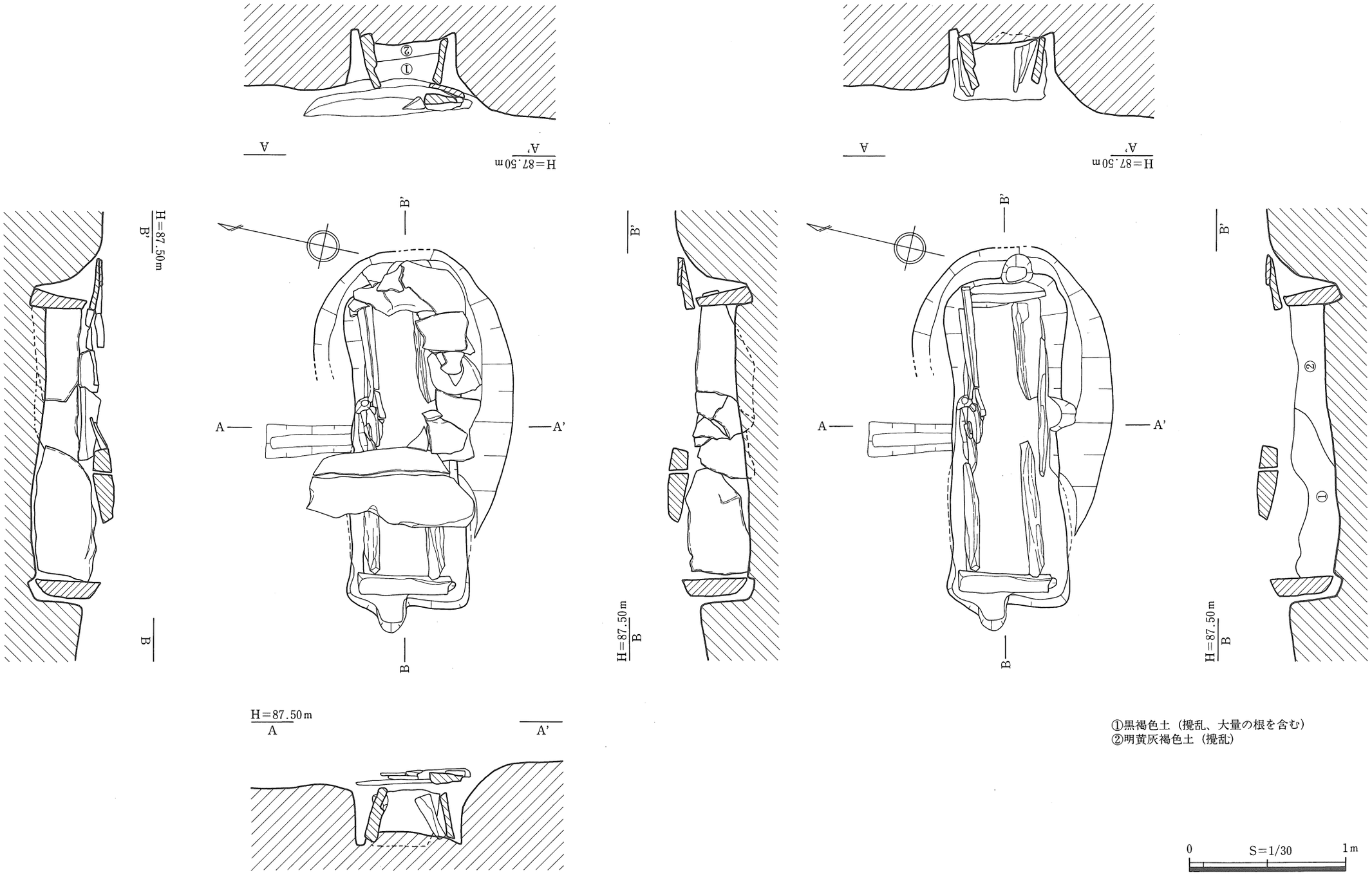
挿図147　南谷29号墳盛土除去後平面図



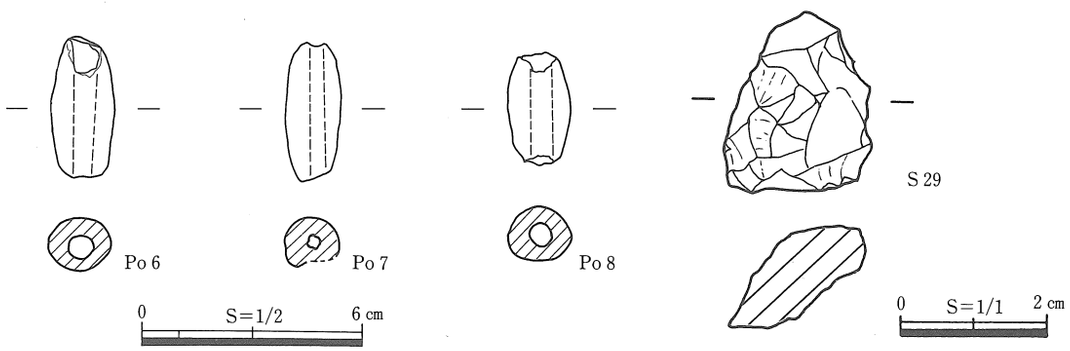
挿図148　南谷29号墳土層断面図



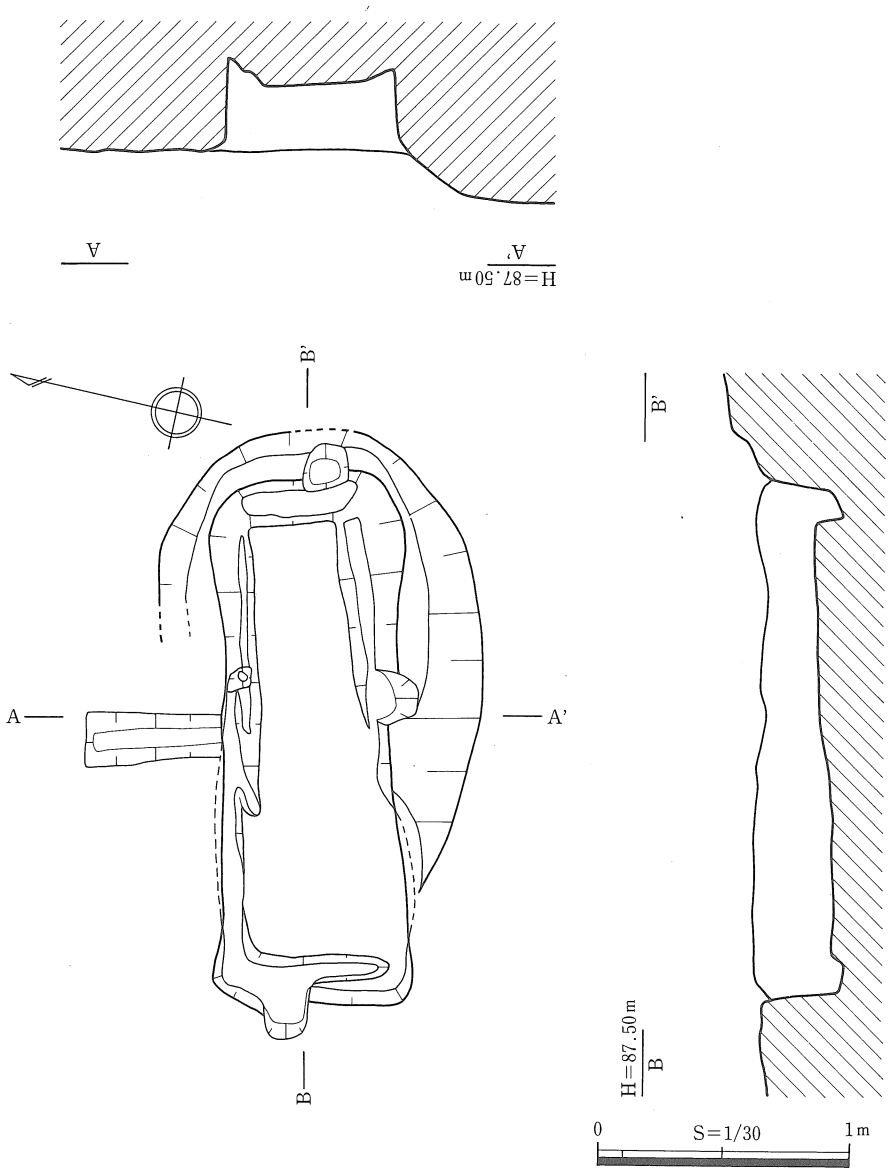
挿図149　南谷29号墳周溝内土器検出状況図



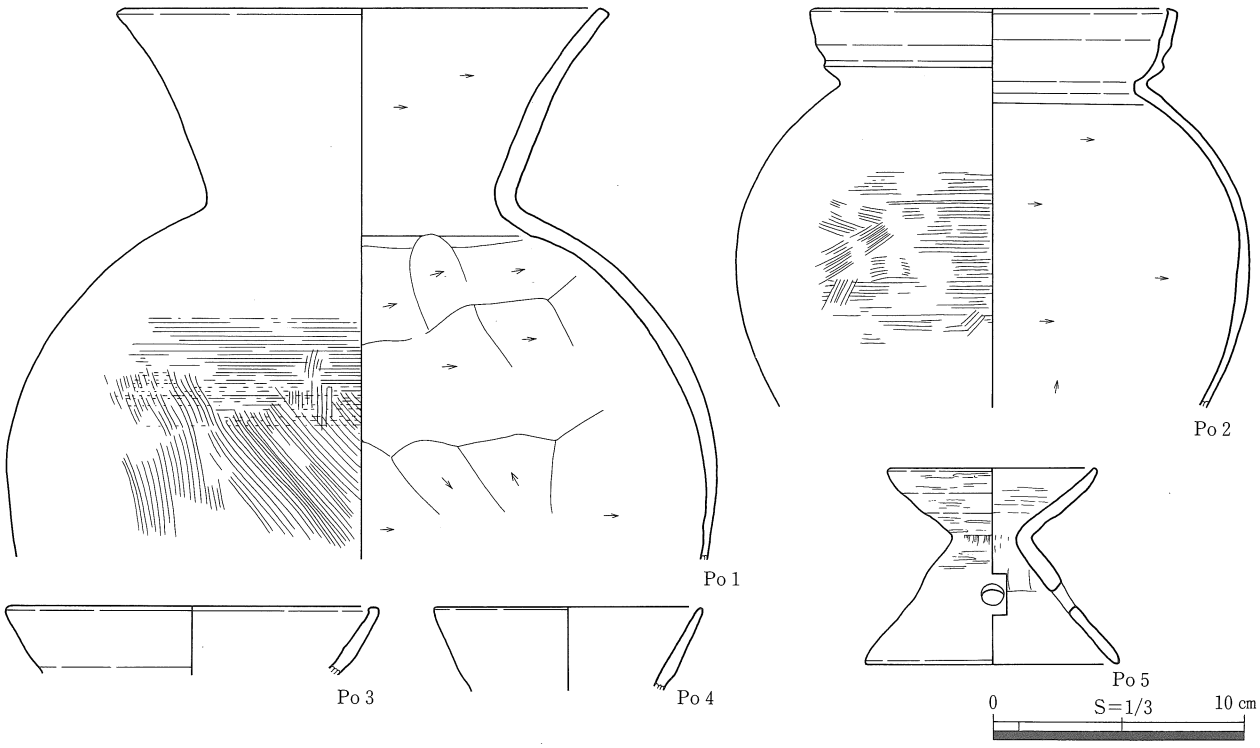
挿図150　南谷29号墳主体部遺構図



挿図151　南谷29号墳出土遺物実測図(1)



挿図152　南谷29号墳主体部墓壙実測図



挿図153　南谷29号墳出土遺物実測図(2)

第５章　遺構・遺物の検討

第１節　土器編年について

1991年度～1993年度にかけて、発掘調査が行われた南谷大山遺跡から出土している土器は、総数約8000点におよび、弥生時代後期後半期～古墳時代中期にかけてのものが大部分を占める。特に、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器及び古相の須恵器を伴う土師器については、鳥取県中部地区においてかなり良好な資料を提供することができると考える。

従来、山陰地方のこの時期の土器編年は、山本清・東森市良・前島己基・松本岩雄氏等による島根県の研究成果が基礎となってきた[62]。鳥取県内では、1960年代後半になると鳥取県西部地区において大規模な開発に伴う発掘調査が行われるようになり、米子市福市遺跡[63]・青木遺跡[64]のように、集落遺跡単位の編年が試みられるようになった。特に青木遺跡では、弥生時代中期末～奈良時代にかけての広範な一連の土器編年が発表されて以来、この時期の鳥取県内の土器編年が、青木遺跡の編年を基準とすることが一般的となっている。しかし、その土器の様相は、狭い鳥取県内においても東部・中部・西部で若干の違いが見られることが指摘されつつある。

そのため、鳥取県東部地区では鳥取市岩吉遺跡などの資料をもとに谷口恭子氏が(以下岩吉編年[65])、また、中部地区では倉吉市服部遺跡・阿弥大寺遺跡・長瀬高浜遺跡などの資料をもとに土井珠美氏が（以下土井編年[66]）、それぞれの水系単位（東部は千代川、中部は天神川、西部は日野川）毎で編年作業を試みており、現在では鳥取県東部地区・中部地区・西部地区の土器編年が確立しようとしている。

また、従来古相の須恵器を伴う土師器の編年については、あまり論じられるところがなく、中部地区では置田雅昭氏[67]、清水真一氏[68]、土井珠美氏[66]が検討を行っている程度である。

さて、羽合平野周辺での編年については、古墳時代前期～中期にかけての大集落遺跡である長瀬高浜編年が、集落についてのみしか示されておらず、集落に続く古墳出土の土器を含めての編年が行われていないこと、また、この編年では、高橋護氏[69]が指摘するようにさまざまな形式の土器が一括資料として捉えられており、形式学的に問題があるだけではなく、各時期の土器の様相がはっきりしておらず、報告書ごとで時期の捉え方が異ることなどの問題が残る。

また、須恵器出現以降は須恵器の編年が中心となっており、この時期の土師器の様相は、必ずしも明らかになっている状況とはいえないと考える。

今回南谷大山遺跡の発掘調査をまとめるに当たって、土器の様相を概観し、不十分ではあるが南谷大山遺跡の土器編年案を公にしようと思う。この編年案が、今後の鳥取県中部地区の土器編年の参考になれば幸いである。

(1)　編　　年

各遺構の土器の構成は、必ずしも良好なものとは言えないが、共伴する土器形式を組み合わせ、従来の土器編年を参考に、最も器種の多い壺形土器・甕形土器（以下形土器を省略）がもつ諸特徴の変化を画期と捉えると、南谷大山遺跡の土器は、Ⅰ期～Ⅸ期に時期区分できると考える。(以下大山Ⅰ期～大山Ⅸ期とする。)

［大山Ⅰ期］

この時期には良好な一括資料は見られないが、壺（１）は、外反する口縁部をもつもので、甕口縁部（２・３・４）は、内傾する口縁部をもち、外面には擬凹線が施される時期である。これらの土器は、確実な遺構に伴ってはいないが、南谷大山遺跡内においては最も遡るもので、ＢＳＩ10周辺、ＢＳＫ19埋土上層出土のものがこれに相当する。

阿弥大寺Ⅰ期、青木Ⅱ期、岩吉Ⅱ（古）期に並行するものと考える。

［大山Ⅱ期］

この時期はＡＳＩ04、ＢＳＩ27出土資料を指標とする。

壺・甕の複合口縁部立ち上がりは３～４cmと高く、口縁部に施文が施されるもの（５・８）と、ナデ消す（６・７）が共伴する。端部は丸く仕上げられるものが多いが、平坦面をもつものもある。口縁部下端は下垂するものが多い。胴部は、最大径を中位以上にもち倒卵形を呈し、しっかりとした平底をもつ。外面肩部には施文が施されるものがある。内面は、頸部屈曲部は鋭く、以下ケズリが施される。ケズリの方向は上半「左」が主流である。

小型の胴部をもつ（９）は、胴部外面に加飾が施される。

「く」字状口縁をもつ甕（10・11）は、端部に沈線が施されるものがこの時期のものである。

高杯は、良好な資料がないが、複合口縁状の杯部をもつ加飾された高杯（12）がこの時期のものと思われる。

鼓形器台は、Ｃ－Ⅳ区遺構外出土の（13）がこの時期と思われる。上台部・脚台部外面に沈線が施され、高い筒部をもつものである。このほかに、特殊器台と思われる（14）もこの時期と考えられる。

阿弥大寺Ⅲ期、青木Ⅲ（新）期、岩吉Ⅳ期に並行するものと考えられる。

［大山Ⅲ期］

この時期は、ＢＳＩ01、ＢＳＩ02、ＣＳＩ11、ＣＳＩ14、ＢＳＫ04出土資料を指標とする。

壺・甕は、やや肉厚で口縁部の形態もⅡ期のものに類似するが、口縁部下端は下垂するものは少なくなり、水平方向に突出するものが多くなる。（15・17～19）のように口縁部施文後ナデ消すものは大山Ⅱ期から引き続いているが、口縁部がナデのみの（16・20～22）が現れるのがこの時期で、この特徴をもつ土器が主流をなす。内面頸部屈曲部はなだらかになる。胴部のプロポーションもⅡ期のものと類似するが、肩部の張りが前段階に比べて弱くなる。底部は平底を呈すが、大山Ⅱ期に比べて不明瞭なものとなっている。内面は、大山Ⅱ期同様頸部屈曲部以下「左」方向ケズリが施されるものが主流である。

また、口縁部が厚手の作りとなる（23・24）もある。

口縁部が短く屈曲外反する甕（26）、高い脚部をもつ甕（27）などもこの時期である。小型品（28）も、この時期までは不明瞭ではあるが平底を呈すものである。

また、「く」字状の口縁部をもつ甕（29・30）は、端部は沈線がなくなり、Ⅱ期のものに比べ胴部がやや長胴化する。また、複合口縁状になり外面に凹線が施される（25）がある。

高杯は、屈曲外反する口縁部をもつ（31）、小型で直立気味の口縁部をもつ（32）がある。脚部（33）は外面ミガキが施される。

低脚杯は杯部が椀状に深い（34）がこの時期で、蓋は中凹みのつまみをもつ（35・36）、柱状のつまみをもつ（37）がこの時期に見られる。

この他の器形としては、大きく開く鉢（38）、小型鉢（39）がある。

土井編年上種第５遺跡貯蔵穴７号・住居址27号段階、青木Ⅳ期、岩吉Ⅳ期に並行するものと考えられる。

［大山Ⅳ期］

この時期は、ＢＳＫ06・ＢＳＫ07出土資料を指標とする。

壺・甕は肉薄でシャープな作りとなり、（40～43）のように口縁端部は引き出された様に薄くなる。この時期は、口縁部に文様が施されるものはなくなり、完全にナデのみになる段階である。胴部は倒卵形を呈し、尖り気味の不明瞭な平底をもつ。肩部には波状文など施文が施されるものがある。内面は、頸部屈曲部以下ケズリが施されるが、前時期に比べて若干下がる傾向にある。また、胴部内面のケズリは、「右」方向が主流となる。

この時期になって、小型品は丸底になると考えられる（45）。短く屈曲外反する口縁部をもつ甕（44）は、Ⅲ期のものに比べて胴部の張りが大きくなり、底部は丸味を帯びる。

鼓形器台は、施文が施されない（46）がこの時期のものであるが、器高はまだ高いと考えられる。

高杯に良好な資料はない。

そのほかの器種としては、緻密な胎土の脚付短頸壺（47）・無頸壺（48）などがこの時期のものと考えられる。

土井編年東高江遺跡２号貯蔵穴・擲塚遺跡第２号貯蔵穴段階、青木Ⅴ・Ⅵ期、岩吉Ⅴ期に並行するものと考えられる。

［大山Ⅴ期］

この時期は、ＢＳＳ04・ＣＳＩ02・ＣＳＩ04・ＣＳＩ05出土資料を指標とする。

壺は、口縁部が大きく外反するようになり、端部が外方へ折れるもの（49）が現れる。胴部を残す良好な資料はないが、肩がやや張る倒卵形を呈すものと考えられ、外面には、波状文などが施されるものがある。

異形のものとしてＢＳＩ30出土の壺（50）があるが、この時期のものとしてよいであろう。

甕は肉薄で、シャープな作りはⅣ期と同様であるが、口縁部下端の突出度が増し、口縁端部が平坦面をもつものが現れる段階である。器壁が薄く口縁部立ち上がりが高い（51～54）と、口縁部立ち上がりは３cm以下とやや低くなる（55・56）が共伴している。口縁部の文様はⅣ期同様施されず、ナデのみである。内面のケズリの範囲は肩部付近以下で、大山Ⅳ期のものよりさらに下がる傾向にある。ケズリの方向は、「右」が主流である。胴部は倒卵形を呈し不明瞭な平底のものと、尖り気味の平底をもつものがある。外面は肩部に平行沈線・波状文・刺突文が施されるものがあるが、横方向ハケ目が主流で、胴部下半は縦方向ハケ目である。内面底部付近には指頭圧痕が明瞭に残るものがある。

この時期から複合口縁をもつ直口壺（57）が現れる。

高杯は、この時期に胎土が浅黄橙色で、端部が外反し、やや深い皿状の杯部をもつ(58)、浅橙色の椀状を呈す杯部をもつ（59）が出土している。

鼓形器台（60・61）は筒部の縮約が進み、Ⅳ期のものに比べてさらに器高が低くなる。

低脚杯（62）は、やや深い杯部をもつもので、脚部もやや高く大きい。

さて、この時期になって、小型丸底鉢（64）、小型高杯形器台（65）など布留系の土器が現れるのが大きな特徴であるが、「く」字状口縁をもつ布留式甕は、良好な資料がない。

また、この時期に甑（63）が出現している。甑は体部が砲弾形を呈し、把手が４カ所つく。上部のものは器壁に対し平行につくが、下部のものはやや下向きに直角につく。下端部付近には、タガ状の突帯が巡る。外面縦方向ハケ目、内面上半部左方向ケズリ、下半部上方向ケズリが施される。

この時期は、甕の型式から高い口縁部をもつものと、口縁部の立ち上がりが低くなるものの２時期に分けることが可能であるが、良好な一括資料がないため同時期としてまとめた。将来的には細分できるものと思われる。

長瀬高浜編年Ⅰ期、土井編年宮ノ下遺跡４・６号住居址段階、青木Ⅶ期（古）、岩吉Ⅵ期、布留（古）段階頃に並行するものと考えられる。

［大山Ⅵ期］

この時期は、ＢＳＩ14、ＢＳＩ32、ＣＳＩ06、ＣＳＩ07、南谷29号墳出土資料を指標とする。

壺（66・67）は、複合口縁部が退化傾向を示し始め、口縁部の高さが低くなり、さらに口縁部下端の稜が鈍くなる。胴部は丸味をもつようになり、外面肩部横方向ハケ目、内面頸部以下右方向ケズリが施される。外面肩部には波状文が施されるものがある。大型品（68）は、内傾する複合口縁をもち、肩部には依然と施文が施され、丸味のある胴部に平底をもつ。

甕（69～71）は、口縁部の立ち上がりが３cm以下と低くなり、端部は平坦面をもつ。口縁部下端はⅤ期同様鋭く突出するものもあるが、鈍くなるものも現れる。胴部は丸味を帯び、完全に丸底を呈すよう

になり、Ⅴ期に比べて全体的に器壁が厚くなる。また、外面上半部横方向ハケ目もやや粗くなり、下半部縦方向ハケ目も粗い。内面は、上半部右方向削り、底部付近は指頭圧痕が残る。

また、布留系土器の影響を受けたと考えられる、端部が内方へ肥厚する複合口縁をもつ甕（72）も現れる。大型品には、大きな平底をもつもの(73)、口縁部が内傾するもの(74)がある。

「く」字状口縁をもつ布留式甕（75）は、内湾気味に立ち上がり、端部が内方へ肥厚し、胴部は球形を呈すようになる。

長頸壺（76）は、胴部の大半を欠くが、球形を呈すものと考えられる。

高杯は、端部が外反しやや深い皿状の杯部をもつ（77)、胎土が浅橙色で椀状の杯部をもつ(78）がこの時期のもので、前時期のものと形態的には大きな違いは見られない。また、小型で平坦な底部から高く屈曲する口縁部をもつ（79)、低く大きく広がる裾部をもつ（80）がある。

鼓形器台（81・82）は、器壁が厚くなり、器高が低くなる。

低脚杯は、大きく浅い皿状の杯部をもつ（85)、やや深い皿状の杯部をもつ（86)、深い椀状の杯部をもつ（87）がこの時期のものと考えられる。

小型高杯形器台（83）は、退化傾向を示し、受け部の作りが雑になる。また、この時期に逆円錐形の受け部をもつ小型器台（84）が現れる。

小型丸底壺（88）は、口径が胴部最大径を上回るもので、複合口縁をもつ（89・90）も現れる。

長瀬高浜編年Ⅱ期、土井編年宮ノ下３Ｂ・７号住居址段階、青木Ⅶ（新）期、岩吉Ⅶ期、布留（中）段階頃に並行すると考えられる。

［大山Ⅶ期］

この時期は、ＢＳＩ13－３、ＣＳＩ19出土資料を指標とする。

甕(91～93)は、口縁端部が外方へ肥厚して平坦面をもち、口縁部下端は鈍く突出する。胴部は球形を呈すものと考えられ、外面は粗い斜方向ハケ目、内面は肩部指頭圧痕が残る。また、(91）のように外面肩部には、棒状工具による逆三角形状に３カ所の刺突文が施されるものがある。

高杯（94・95）は、浅い皿状の杯部をもち、筒部が細く直線的なものである。大型のものは、有段の杯部をもつ（96）で、屈曲部には不明瞭ながらも稜がつく。

この時期までは小型丸底壺（97・98）が見られる。口縁部は短くなり、口縁部径が胴部最大径を下回るようになる。胴部の調整はハケ目となる。

その他の器形として、小型脚付鉢（99）がある。

青木Ⅷ（新）～Ⅸ（古）期、岩吉Ⅷ期に並行するものと考えられる。

［大山Ⅷ期］

この時期は、ＢＳＩ09、ＣＳＩ21出土資料を指標とする。

この時期に極めて大型の壺（100・101）が見られる。口縁部は複合口縁状を呈し、胴部は球形を呈すが平底をもつものである。内外面共に粗いハケ目調整である。

甕（102～105）は、複合口縁が顕著に退化傾向を示し、口縁部下端が下膨らみになる段階である。

この時期の甕は器壁が肉厚で、口縁部はほぼ直立し、口縁部の立ち上がりも３㎝以下と低くなる。胴部は球形を呈し、外面肩部は横方向ハケ目が残るが、斜方向ハケ目が主流となる。内面肩部・底部には指頭圧痕が明瞭に残るものが多い。

布留系の「く」字状口縁をもつ甕（106・107）は、端部が肥厚するものから丸く収められるものに変化し、胴部の調整も粗い縦～斜方向ハケ目に変わる。

直口壺（108・109）は、やや高い頸部をもち、やや扁球形の胴部をもつものである。

高杯は、椀状の杯部をもつ（110・111）が主流となるが、大型の（112・113）は平坦な底部から屈曲して外傾する杯部をもつもので、屈曲部の稜はなくなる。

椀は橙色の胎土で、端部が内湾気味に立ち上がる（114）と、同様の体部に太く短い脚部をもつ（115）の２種類がある。いずれも、やや深い体部をもつ。

また、この時期に、陶邑編年ＴＫ208並行と考えられる須恵器が共伴する。

杯蓋（116･117）は天井部が低く、このうち回転カキ目調整される（117）がある。口縁端部は鑿歯状を呈す。全体にシャープな作りである。杯身（118）は、底部が扁平で、口縁部立ち上がりが高い。端部は杯蓋同様鑿歯状を呈す。

甕（119）は、頸部に１条の凸帯が巡りその下に波状文が施される。内面の叩き痕は半スリ消しされる。

無蓋高杯（120）は、杯部が深く、口縁部外面には凸線が２条巡りその下に波状文が施される。脚部には長台形の透かしが四方に入る。

樽型瓹（121）は、口縁部を欠くが、丸みの強い樽型の胴部をもつものである。この他にも、小型瓹（122）、大型瓹（123・124）がある。

服部Ⅲ期、青木Ⅸ（新）期、岩吉Ⅷ期に並行するものと考えられる。

［大山Ⅸ期］

この時期は、ＢＳＩ13－２出土資料を指標とする。

甕（125～128）は、口縁部下端部がさらに退化傾向を示し、丸みを帯び屈曲するだけになる段階である。胴部はやや長球形を呈し、外面は粗い横～斜方向ハケメ、内面は肩部・底部に指頭圧痕が明瞭に残る。

直口壺（129）は、Ⅶ期のものに比べて口縁部の立ち上がりが低くなる。

高杯は、深い椀状の杯部をもつ（130・131）が主流で、屈曲部が鈍い有段の杯部をもつ（132・133）も共伴している。

椀（134）は、形態的には前時期のものと類似するが、Ⅷ期に比べて器高が低くなる傾向がある。

須恵器はＴＫ23～ＴＫ47並行のものが共伴している。杯蓋（135・136）は、天井部が高くなり全体的に丸みを帯びる。天井部との境には明瞭な稜をもつ。口縁端部は鑿歯状を呈す。杯身（137）も全体的に丸みを帯び、高い立ち上がりをもつ。

無蓋高杯（138）は、外反する口縁部をもつもので、脚部は短脚で、三方に透かしが施されるものである。

この時期は良好な資料がなく、資料の増加を待って細分できるものと考える。

青木Ⅹ期（古）、岩吉Ⅸ期に並行するものと考えられる。

南谷大山遺跡の土器編年を試みてきたが、このうち、弥生時代後期後半期における壺・甕についてみると、施文をスリ消す手法をもつものは、施文をスリ消さないもの、ナデのみで仕上げるものと共伴していることが指摘できる。

従来この点について指摘した土井珠美氏は[66]、阿弥大寺Ⅲ期段階と、次段階である上種第５遺跡貯蔵穴７号・住居址27号段階を、壺・甕口縁部の施文をスリ消す手法の導入で明瞭に区分できるとしている。

この手法の土器は、鳥取県東部では岩吉遺跡[65]・秋里遺跡[70]など、中部では南谷大山遺跡・観音堂遺跡[71]・上種第５遺跡[72]など、また、従来この手法は認められていなかった島根県でも鹿島町・佐太前遺跡[73]、出雲市・西谷３号墓[74]などで確認されている。これらの遺跡では、この手法の土器は、施文がスリ消されない壺・甕、肉厚でナデのみで仕上げられる壺・甕と共伴しており、型式分類は可能であるが、現段階では、この手法が明確に時期区分の要素となる状況ではないと考える。むしろ従来言われているように、器壁が極めて薄手となり、口縁部には施文が施されず、全体的にシャープな作りとなる段階を画期と考えた方が良いと思われる。

施文のスリ消しは、（Ａ）口縁部の上下２カ所に施されるもの（写真11）、（Ｂ）中央に１カ所施されるもの（写真12）、（Ｃ－１）口縁端部に１カ所施されるもの（写真13）、（Ｃ－２）口縁部下端部に１カ所施されるもの（写真14）がある。このように見ると、スリ消しの技法も装飾の一種の技法と考えられ、施文消失の過渡的様相を示しているものとも考えられる。

以上、大山Ⅰ期～Ⅸ期の土器編年を試みたが、それぞれの画期をまとめると、大山Ⅰ期は口縁部が発達しはじめ、外面に擬凹線が施される時期、大山Ⅱ期は、口縁部の装飾が最も多くなり、スリ消す技法が一部に現れる時期、大山Ⅲ期は、口縁部ナデのみのものが現れる時期、大山Ⅳ期は、口縁部の作りがよりシャープになる時期、大山Ⅴ期は、口縁部の高さが低くなり始め、端部に平坦面をもつ時期で、布留（古）段階に並行する時期、大山Ⅵ期は、口縁部が退化傾向を示しはじめ、胴部が球形になり、布留（中）段階に並行する時期、大山Ⅶ期は口縁部が退化し、器壁が厚くなる時期、大山Ⅷ期は、さらに口縁部が退化し、定型化した須恵器が出現する時期、大山Ⅸ期は、口縁部下端が屈曲するのみになり、胴部が長胴化する時期となる。

さて、従来の編年観に照らし合わせると、すべての時期が連続しているとは言えない。つまり、大山Ⅰ期と大山Ⅱ期の間、大山Ⅵ期と大山Ⅶ期との間には、空白の期間がある事が指摘できる。

前者の空白期間を埋めるものは、阿弥大寺Ⅱ期・岩吉Ⅲ期と考えられる。また、後者の空白期間を埋めるものは長瀬高浜編年Ⅲ期と考えられる。

(2)　他地域からの影響

また、大山Ⅲ期以降に他地域からの影響をもつ土器が出土しており、特に畿内・吉備との並行関係を考える上で貴重な資料がある。

大山Ⅱ期・Ⅲ期の「く」字状口縁部をもつ甕のうち、端部に施文が施されるものは、管見に触れるかぎりでは岡山県上東遺跡・東鬼川市溝２出土のもの、端部の施文がなくなるものは、上東遺跡才ノ町Ｐ－イ出土のものに類似している。備中での編年では、前者は備中Ｖ－３様式の新相、後者は備中Ｖ－４～５様式に並行するものと考えられ[75]、南谷大山遺跡の編年と対比させて、編年観に合う資料である。

また、大山Ⅲ～Ⅳ期の、短く外反する口縁部をもつＣＳＩ14出土の(25)(26)、ＢＳＫ06出土の(44)は、岡山県・奥坂遺跡No.109袋状土壙、No.140袋状土壙[76]などで出土しているものに類似している。

また、同時期に特殊器台と思われる破片が出土しており、いずれも吉備地方との交流が窺える。

大山Ⅳ期の、ＢＳＩ25出土脚付短頸壺、1992年度遺構外出土の高杯も胎土が緻密で橙褐色を呈し、この地方のものと異なっており、他地域からの影響が窺われる。

しかし、大山Ⅴ期には、小型丸底壺・小型丸底鉢・小型高杯形器台などの布留式の影響をもつ土器が出土し始め、さらに大山Ⅵ期では、布留式土器の影響が在地の土器にも及ぶようになる。

また、大山Ⅶ期の甕胴部外面の刺突文は、布留式土器によく見られるものである[77]。この種の刺突文は、長瀬高浜Ⅲ期並行と考えられる宇谷第１遺跡ＳＩ03出土[30]のものにも見られる。

これら他地域の影響をもつ土器が、搬入されたものか、プロポーションを模倣して当地で作られたものかは明らかでなく、今後胎土分析等によって解決されなければならない問題である。

(3)　土器の様相から見た時代の画期

土器編年が時代を区分する手段となるかどうか見解が分かれるところであるが、あえてここでは土器の様相から画期が探れないかどうか、簡単に触れてみたい。

鳥取県中部地区の土器編年を唱えた土井珠美氏は、「口縁部は完全に横ナデする、ハケ目が多用される、ヘラ削りが顕著で器壁が薄い、全体に器形は球形化してくる」段階を弥生土器と土師器の画期と捉

写真11　スリ消しＡ　BSS01 Po9

写真12　スリ消しＢ　CSI11 Po4

写真13　スリ消しＣ－１　CSI11 Po7

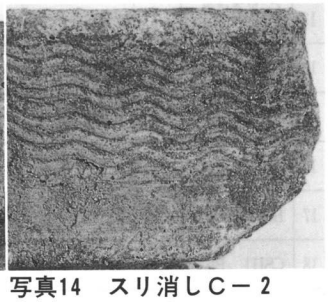


写真14　スリ消しＣ－２　CSI01 Po1

え、土井編年・東高江２号貯蔵穴の段階から古墳時代と考えている。[66]

鳥取県東部地区で、岩吉遺跡編年を唱えた谷口恭子氏は、「平行沈線の有無は大きな変革であり差異であり、この二者は区別するべきものであるが、現時点では模索中の段階であり、今後流動的な部分である」とし、鳥取県東部地区の布留（古）段階の土器の様相が明瞭ではないことと考え合せ、庄内（古）段階＝岩吉Ⅳ期までを弥生時代としている。[65]

一方、清水真一氏は、氏の従来の考えを訂正し庄内式並行＝Ⅵ－２様式までを弥生時代としながらも、口縁部に施文される土器と、施されない土器の差は大きいと考え、今後の課題としている。[78]

このように、鳥取県内では、在地の土器の変化が著しく変化する時期をもって時代を画する考えと、他地域（畿内）の土器との並行関係を探ることで、時代を画する手段としている考え方がある。後者の場合、庄内並行期をもって画するものと、布留式並行期をもって古墳時代と考えるものの両者があり、方法論としても一致した見解にはいたっていない。

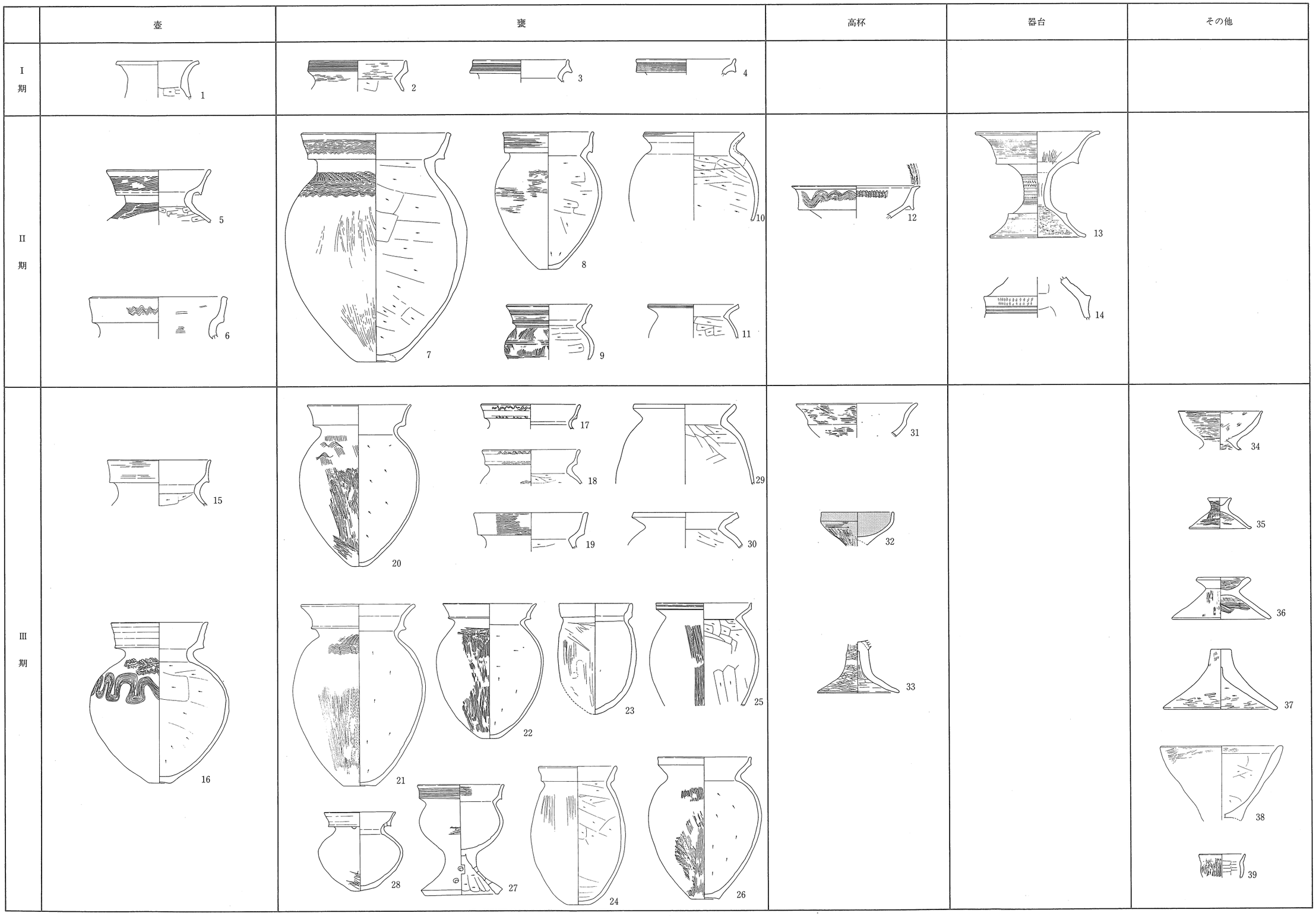
南谷大山遺跡の土器の様相を見ると、大山Ⅲ～Ⅳ期までは吉備～美作地方の影響をもつ土器が出土しているのに対し、大山Ⅴ期に入ると、布留並行期の畿内系の土器が出現するようになるという大きな変化があることに注目したい。土井氏は、布留式の影響の始まりは、宮ノ下４号・６号住居址期（大山Ⅴ期並行期）と考えているが、南谷大山遺跡を含め、この時期の布留（古）段階の資料は極めて少なく、鳥取県東部と同様、いまだはっきりとしているとは言えない状況といえ、今後流動的である。

しかし、古墳時代が前方後円墳の成立・波及をもって始まるとすれば、古墳出現の担い手となった畿内勢力の影響を持った土器が、この地域においても出現するのは当然のことであり、布留式並行期の土器が出現する大山Ⅴ期をもって古墳時代と考えたい。

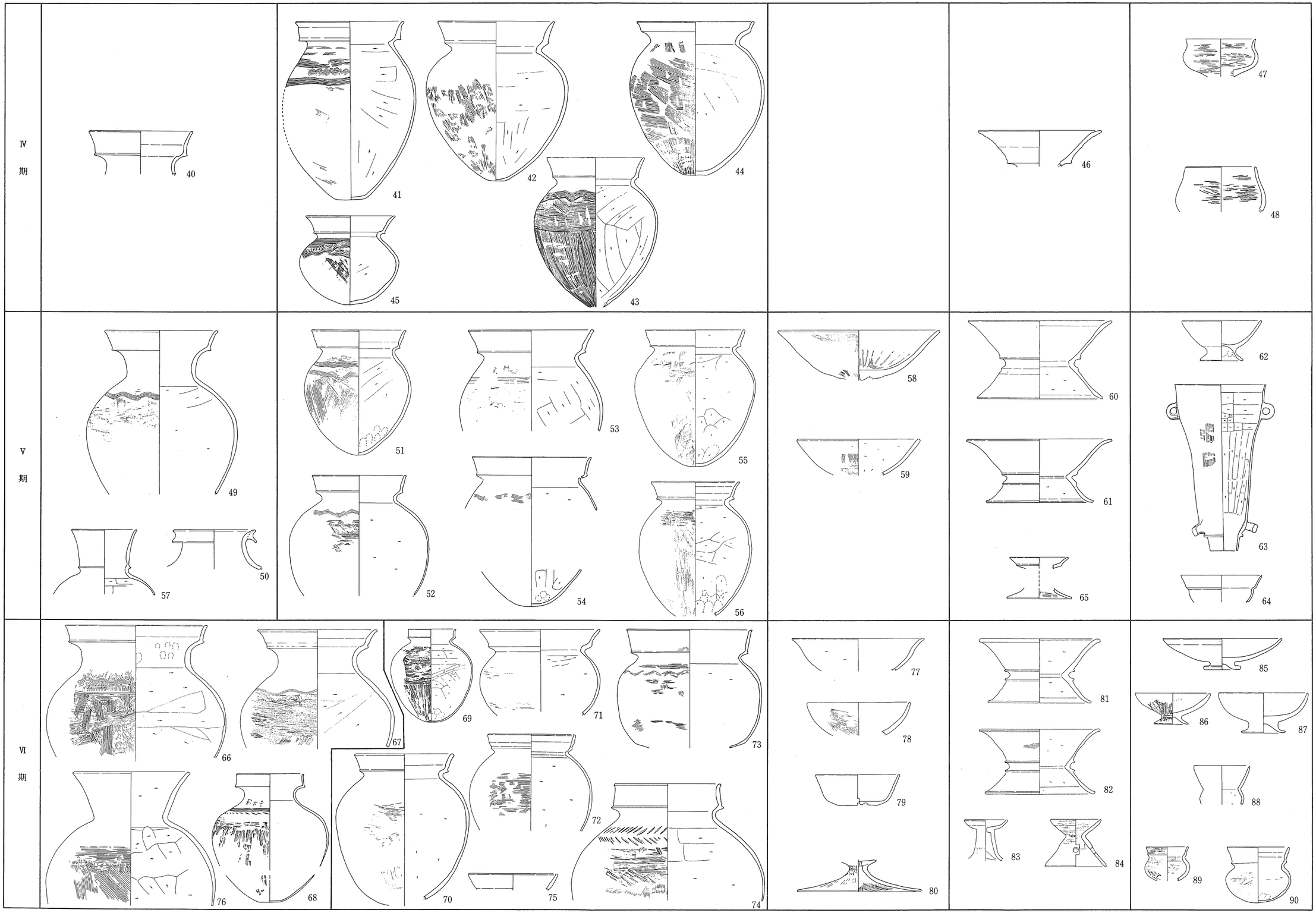
番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構
1	BSI10 Po60	19	BSI01 Po 2	37	BSK09 Po10	55	BSI04 Po 2	73	BSI32 Po 2	91	CSI19 Po 1	109	CSI20 Po39	127	BSI13 Po 1
2	BSK19 Po11	20	CSI14 Po 2	38	CSI16 Po 5	56	BSI04 Po 3	74	BSI32 Po18	92	CSI19 Po 3	110	BSI09 Po27	128	BSI13 Po 2
3	BSK19 Po15	21	CSI11 Po 9	39	BSK10 Po 1	57	BSS04 Po53	75	南谷29号墳 Po3	93	BSI13 Po43	111	南谷25号墳 Po3	129	BSI13 Po50
4	BSI10 Po59	22	CSI14 Po 3	40	BSI27 Po1	58	BSI12 Po19	76	南谷29号墳 Po1	94	CSI19 Po13	112	BSI09 Po116	130	BSI13 Po64
5	南谷24号墳 Po10	23	BSK04 Po31	41	BSK07 Po 1	59	BSI04 Po31	77	CSI06 Po17	95	BSI13 Po68	113	CSI20 Po24	131	BSI13 Po67
6	BSI27 Po 2	24	CSI16 Po 3	42	BSK07 Po 2	60	CSI02 Po10	78	CSI05 Po31	96	CSI19 Po17	114	BSI09 Po48	132	BSI44 Po11
7	BSS02 Po 9	25	CSI14 Po 6	43	BSK06 Po 2	61	BSI15 Po 3	79	BSI14 Po60	97	BSI13 Po57	115	BSI22 Po23	133	BSI13 Po63
8	南谷24号墳 Po11	26	CSI14 Po 5	44	BSK06 Po 3	62	CSI02 土溜Po29	80	BSI32 Po21	98	CSI19 Po20	116	BSI10 Po87	134	BSI30 Po38
9	南谷24号墳 Po12	27	CSI14 Po13	45	BSK06 Po 6	63	BSI20 Po31	81	CSI06 Po23	99	CSI19 Po23	117	BSI09 Po50	135	BSI28 Po 4
10	ASI04 Po 1	28	BSK04 Po32	46	BSI25 Po18	64	BSI44 Po15	82	CSI05 Po35	100	BSI16 Po1・2	118	南谷25号墳 Po1	136	BSI30 Po47
11	A区遺構外 Po40	29	BSI02 Po11	47	BSI25 Po19	65	BSI20 Po28	83	CSI07 Po16	101	B区遺構外 Po66	119	BSS01 Po18	137	BSJ13 Po104
12	B区遺構外 Po45	30	BSI01 Po27	48	BSI25 Po20	66	CSI05 Po 1	84	南谷29号墳 Po 5	102	BSI09 Po 1	120	BSI09 Po124	138	C-Ⅴ遺構外 Po14
13	C-Ⅳ遺構外 Po27	31	CSI14 Po14	49	BSS04 Po 1	67	CSI06 Po 1	85	BSI12 Po12	103	BSI10 Po 2	121	CSI21 Po19		
14	BSD03 Po44	32	BSI01 Po34	50	BSI30 Po27	68	BSI32 Po17	86	CSI05 Po42	104	CSI20 Po 1	122	BSI10 Po95		
15	BSK04 Po 2	33	BSI03 Po 7	51	CSI04 Po 5	69	CSI06 Po15	87	CSI06 Po28	105	CSI21 Po 1	123	BSI10 Po93		
16	BSK04 Po 1	34	BSK04 Po56	52	BSB03 Po1	70	BSI14 Po13	88	BSI14 Po41	106	BSI09 Po84	124	BSI10 Po94		
17	BSI02 Po 2	35	BSI02 Po18	53	BSS04 Po 9	71	BSI05 Po 3	89	CSI03 Po 9	107	BSI39 Po 2	125	BSI30 Po 1		
18	CSI11 Po 4	36	BSI03 Po 8	54	BSS04 Po 8	72	南谷29号墳 Po2	90	BSI14 Po37	108	BSI22 Po19	126	BSI13 Po12		

注）68・69・100はS＝1/12
63はS＝1/16
その他のものについてはS＝1/6

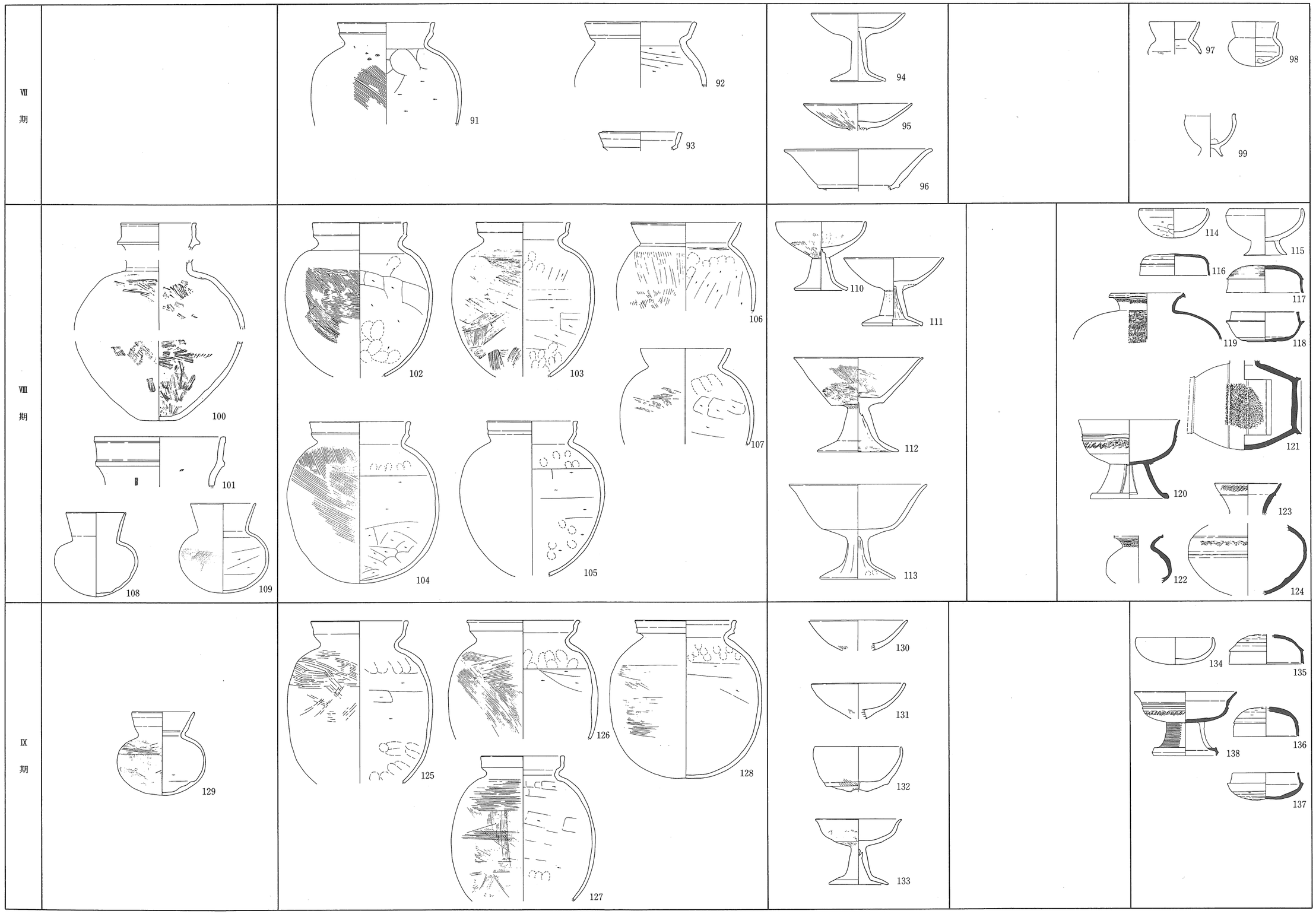
挿表５　土器編年案対照表



挿図154　南谷大山遺跡土器編年案(1)



挿図155　南谷大山遺跡土器編年案(2)



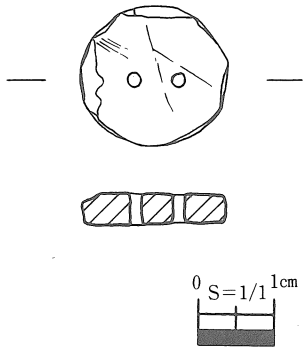
挿図156　南谷大山遺跡土器編年案(3)

第２節　玉製品について

古墳副葬品を除いて、竪穴住居跡からは、土器類の他に、勾玉・管玉・有孔円盤・臼玉などの玉製品が出土している。

(1)　勾玉・管玉

勾玉は、ＡＳＩ01・ＢＳＩ09から出土している。ＡＳＩ01のものは、流紋岩質凝灰岩製で、頭部に溝が切られる丁字頭勾玉で、長さ5.2cmと大型である。ＢＳＩ09のものは、蛇紋岩製で、扁平な作りである。ＡＳＩ01は大山Ⅱ期、ＢＳＩ09は大山Ⅷ期である。



挿図157南谷大山遺跡BS138出土有孔円盤

管玉は、ＢＳＩ14の埋土中から出土している。碧玉製で非常に小型のものである。

(2)　有孔円盤・臼玉

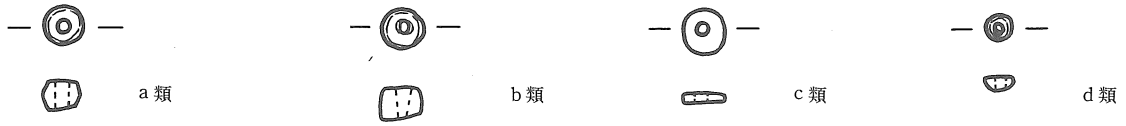
有孔円盤は、ＢＳＩ38・ＣＳＩ19から計３個出土している。いずれも蛇紋岩製で、ほぼ円形を呈し径約２cm、厚さ３～４mm大である。中央部には径２mm大の穿孔が２カ所ある。表面には、加工の際の擦痕が明瞭に残る。ＢＳＩ38・ＣＳＩ19とも、古墳時代中期後半のものである。

臼玉は、ＣＳＩ19から計351個出土している。いずれも蛇紋岩製である。平面円形または楕円形を呈し、径５mm・厚さ３mm程度のものが多い。側面には、加工の際の擦痕が残る。

断面の形態から４類に分類できる。（ａ）断面がそろばん玉形を呈すもの、（ｂ）断面が長方形を呈すもの、（ｃ）径に比べて著しく厚さが薄く、扁平で長方形を呈すもの、（ｄ）断面が五角形状を呈すものの４類に分類できる。大半が（ａ）類である。

有孔円盤・臼玉共祭祀遺物と考えられ、これらの住居跡は、集落内祭祀に関連した遺構といえる。

この他にも、ＢＳＩ14から碧玉の石核、また、遺構外からではあるが、Ｂ区では玉砥石が出土している。明らかな玉作遺構は検出されなかったが、集落内で玉製品を生産していた可能性がある。



挿図158　臼玉分類図

第３節　鉄製品について

南谷大山遺跡からは、竪穴住居跡を中心にして総数41点の鉄製品が出土している。

(1)　農 工 具

弥生時代後期の農工具には、鉄斧・鉇・刀子がある。

鉄斧は、ＣＳＩ01から出土した袋状鉄斧Ｆ１がある。袋部が密着しないｂ類[79]である。袋部には幅１cmの鉄板が巻かれており、柄が抜けない工夫がなされている。刃部幅が狭い。

鉇は、ＢＳＩ23、ＣＳＩ11から出土した２点がある。ＢＳＩ23出土のものは、刃部に反りをもち細みである。ＣＳＩ11出土のものは、先端部を欠くものの、刃部は裏面が凹んだ逆「Ｖ」字形を呈す。いずれも身部断面が矩形を呈するもので、刃と柄が機能的に分化するｂ類[79]である。

刀子は原形を残しているものはないが、いずれも茎刀子と考えられる。このうち、比較的残りの良いＢＳＫ04出土のものは、茎が扁平で短く、片関のａ類である。

古墳時代後期後半の農工具には、鎌・鍬（鋤）先がある。

鎌は、ＢＳＩ10･ＢＳＩ11･ＢＳＩ13-2･ＢＳＩ14から計５本出土している。完存品はないが、BSＩ13-2のＦ６を除いていずれも小型である。刃部の形態は直刃のものはなく、いずれも曲刃のＢ類[80]と考えられる。また、装着部が残るものは、いずれも柄が直角に装着されるものである。

鍬（鋤）先は、ＢＳＩ13-4からのみ１本出土している。刃部は「U」字状を呈し、木台挿入部は、端部を折り返すものである。一般的な「U」字刃先の木台挿入部とは形態が異なる。ＢＳＩ13-4出土のＦ５は、方形板刃先と「U」字刃先の折衷形と考えられ、また、方形板刃先は「U」字状刃先に比べて早くから出現しており[81]、「U」字状刃先へ変化する、過渡的なものと考えてもよいと思われる。

(2) 鋳造鉄斧

農工具には、鍛造品と鋳造品がある。上記のものはいずれも鍛造品であるが、ＣＳＩ17-4からは、全国でも管見に触れるかぎり30例しか出土していない[82][83]鋳造鉄斧が出土している。ＣＳＩ17-4出土のＦ６は、長さ8.2cm、幅7.5cmを測るもので、刃部に向かってわずかに撥形に開き、断面は梯形となる。側面は楔状を呈す。袋部と刃部を欠損し、全体にヒビ割れが進んでいる（Ｘ線写真図版44)。また、銹化の状況は、はがれるような状況ではなく、形態的特徴と合せて鋳造鉄斧と判断した。

鋳造鉄斧は、県内では古墳時代中期の里仁33号墳[84]から２例出土しているが、それに次いで３例目、住居跡から出土しているものでは初例である。全国的に見ても、出土地は古墳・埋葬遺構・祭祀遺構に限られており、集落遺跡での出土例としては、弥生時代後期の兵庫県・会下山遺跡[85]出土以外は知られておらず、極めて稀なものである。

鋳造鉄斧は、鍛造のものに比べて脆弱で、実用には向かないものとされるが、多くの鋳造鉄斧が、古墳・墳墓に関わる遺跡から出土している事、周溝内またはその周辺から出土している事などから、祭祀的意味合いをもつものと考えられ、「斎斧」として使用されたとも考えられている[86]。

ＣＳＩ17-4が立地する場所は、尾根に挟まれた谷底部で、周辺には、祭祀関係と考えられる蛇紋岩製の有孔円盤･臼玉351個が出土したＣＳＩ19があり、その特異な立地と考え合せて、この鋳造鉄斧も祭祀的な意味合いをもつものと考えられる。

また、鋳造鉄斧を含めた鋳造品は、朝鮮・中国から輸入されたものと考えられており、今後、化学的分析により、産地の同定を考えていかなければならない。

(3) 武　　器

武器類には、鉄鏃のみ検出されている。

原形がわかるものは、古墳時代中期後半のＢＳＩ09・ＢＳＩ14出土の鉄鏃がある。その他にも鉄鏃茎部と思われるものが出土している。

ＢＳＩ09からは、無茎鉄鏃が２本ある。いずれも無茎鏃Ｄ形式第Ⅲ形式第２型式Ａ類にあたる[87]。この型式は、ＴＫ73～ＴＫ216・208並行期に見られるもので、時期的には矛盾しない。

ＢＳＩ14出土のものは、腸抉三角形鏃Ａ形式第１型式Ｂ類にあたる。この型式は、ＴＫ23・47並行期以降に見られるものである。ＢＳＩ14は古墳時代前期後半頃のものと考えられるが、Ｆ２は、埋土中からの出土であり、この住居に伴うものとは考え難い。同じ土層中から古墳時代中期後半の土器が出土しており、ほぼこの時期のものと考えてよいだろう。

(4) 鉄　　鋌

ＢＳＩ13-3から、鉄鋌と考えられる鉄器が出土している。完存ではないが、形態は一方端が撥形に開く、扁平な長方形を呈す。現存長12.9cm、最大幅5.6cm、最小幅3.6cm、厚さは２mm、重量は42.0ｇである。木質が付着しているが、刃がつけられていないこと等、形態上の特徴から鉄鋌と判断した。

この鉄鋌は、東潮氏の分類によれば小型鉄鋌に分類できる[88]。

鉄鋌は、管見に触れるかぎりでは全国で28遺跡・1147枚が知られており[89]、長崎県・沖ノ島の祭祀遺跡

出土のものを除いて、そのほとんどが古墳・埋葬施設に副葬されたものである。県内では、倉吉市・高畔２号墳[17]から２枚出土しているにすぎない。住居跡からの出土は、千葉県・南二重堀24号住居址、東京都・氷川神社北方、岡山県・窪木薬師遺跡からそれぞれ１枚が出土しているに過ぎないという。

ＢＳＩ13-3は、古墳時代中期後半頃の竪穴住居跡で、南側壁際には、底面に砂利が敷かれた特殊ピットが作られている。土器類・鉄器類の他には製鉄鍛冶具などはなく、鍛冶遺構とは考えられない。

鉄鋌は、鉄素材と考えられており、南谷大山遺跡において、鉄器の生産が行われていた可能性があるが、ＢＳＩ13-3は鍛冶を行っていた痕跡がないため、遺跡内での鉄器生産については慎重にならなければならない。また、産地の同定など問題も多く、今後化学的分析が待たれる。

第４節　竪穴住居跡について

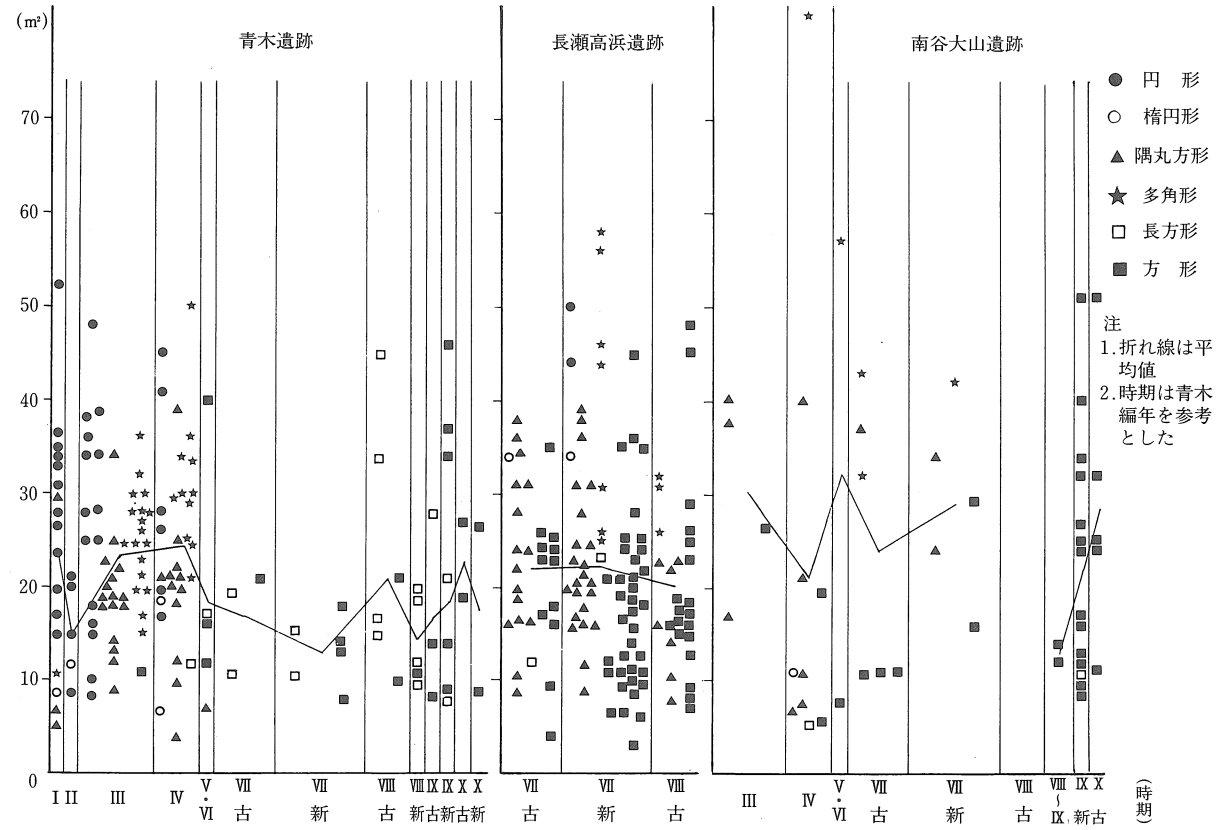
南谷大山遺跡では、建て替え・重複しているものも入れると、96棟もの竪穴住居跡が調査された。時期も一部中断はあるものの、弥生時代後期後半、大山Ⅱ期（青木Ⅲ期新並行）から古墳時代中期後半、大山Ⅺ期（青木Ⅹ期古並行）にわたる。

本稿では、これらの資料に加え米子市・青木遺跡、羽合町・長瀬高浜遺跡の竪穴住居跡も参考にして、１．平面形の変遷・２．住居の規模・３．中央ピットと特殊ピットについて考察したい。

１．平面形

遺跡・時期別住居分布表（挿表６）を参照されたい。

南谷大山遺跡では全時期を通じて方形住居の占める割合が多い。弥生時代後期の大山Ⅱ～Ⅲ期（青木Ⅲ～Ⅳ期並行）でも、方形のものが４割以上を占める（挿表６は床面が完全に検出された住居のみ載せ



挿表６　遺跡・時期別住居分布表

たため、方形住居が実際より少なくなっている)。しかし、古墳時代中期、大山Ⅷ～Ⅺ期(青木Ⅺ期新～Ⅹ期古並行）になっても、僅かではあるが隅丸方形の住居が存在する。円形・楕円形の住居が極めて少ない（楕円形のＡＳＩ02のみ）のも、一つの特徴である。

また、南谷大山遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、多角形住居が概して規模が大きい傾向にある。

同じ、天神川下流域の長瀬高浜遺跡においても、長瀬Ⅲ期（青木Ⅷ期古並行）まで隅丸方形・多角形が残る。時期が下るにつれて、非方形住居の割合は減っているものの、古墳時代中期までそれらの住居が存続するのは、この地域の特記すべき傾向である。

しかし、青木遺跡では、青木Ⅴ・Ⅵ期（大山Ⅳ期並行）より、方形住居に画一化され、それ以前の非方形プラン住居と完全に区分される。

鳥取県西部の青木遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭で非方形と方形にきれいに分かれるのに対し、天神川下流域の長瀬高浜遺跡・南谷大山遺跡では、古墳時代中期まで非方形住居が残存するという違いが見られ、地域的な特色が現れている。

２．規　　模

南谷大山遺跡では、大山Ⅲ期（青木Ⅳ期並行）のＢＳＩ21（82.8㎡以上）・大山Ⅳ期（青木Ⅴ・Ⅵ期並行）のＢＳＩ26（57.1㎡）のように、超大型の住居がある。このような超大型の住居は、首長クラスの居館または集会所と考えられ、集落内でも特別な位置を占めるものと思われる。超大型住居は、弥生時代終末期の限られた時期にのみ出現している。

また、挿表６を見ると、大山Ⅲ期・大山Ⅶ期を除けば青木遺跡の住居よりも、南谷大山遺跡のそれの方が、規模が大きいといえ、同時期の長瀬高浜遺跡と比べても若干規模が大きい。この傾向は、集落全体の規模が小さいためと思われる。しかし、弥生時代終末期の最大規模の住居を比較してみると、青木遺跡のものよりはるかに大きい住居が出現しており、集団間の格差が、南谷大山遺跡の方が大きかったものと思われる。また、長瀬高浜遺跡では、長瀬Ⅱ期には棟数も爆発的に増え、50㎡以上の住居が出現しており、ＳＢ40など特異な建物が出現することとあわせ、この時期になって、何らかの権力の集中があったものと思われる。

前項で、長瀬高浜遺跡・南谷大山遺跡双方とも、古墳時代中期まで非方形住居が残ると述べた。しかしながら、35㎡以上の大型住居に注目するとその形態が多角形から方形に変わっており、古墳時代中期後半の住居が方形を指向している事は共通していると思われる。

３．中央ピットと特殊ピット

鳥取県内で調査された弥生時代～古墳時代にかけての竪穴住居に、特徴的に見られるものに、床面中央に柱穴とは考えられないピットがある。このピットは中央ピット・特殊ピットと呼ばれるもので、特に特殊ピットという名称は、そのピットが持つ性格（祭祀的性格）を考慮して呼ばれるものである。

また、このピットは、時期が下るにつれて、弥生時代終末～古墳時代前期には、中央部にあったものが壁際中央に位置を変え、形態も円形のものから方形のものへ変化していくものと考えられている。

しかし、現在のところはっきりした用途はつかめないため、主にその位置的な特徴から、ここでは、中央ピットは中央に位置するピット、特殊ピットはおもに壁際中央に寄っており、高杯等の遺物を伴うこともあるピットと分けて呼んでおきたい。

なお、屋内貯蔵穴が掘り込まれる住居があるが、おおむね屋内貯蔵穴がコーナー付近にあり、形態も長方形で特殊ピットより大型のものが多い特徴があり、これについても分けて呼ぶことにしたい。

(1)　中央ピット

南谷大山遺跡では、大山Ⅱ期（青木Ⅲ期古並行）～大山Ⅷ期（青木Ⅺ期新並行）まで残っている。総数は24で、時期別には大山Ⅱ期（青木Ⅲ期新並行）には３、大山Ⅲ期（青木Ⅳ期並行）には６、大山Ⅳ

期（青木Ⅴ・Ⅵ期並行）には１、大山Ⅴ期（青木Ⅶ期古並行）には５、大山Ⅵ期（青木Ⅶ期新並行）には７、大山Ⅷ期～Ⅺ期（青木Ⅺ期新～Ⅹ期古並行）には２である。大山Ⅴ期には、ＢＳＩ18のように、中央ピットと特殊ピットと双方を有する遺構もある。中央ピットの形態は、おおむね、平面が楕円形・不整形を呈し、一段掘りのものが18例、二段掘りのものは６例ある。また、段状の高まりをもつものが４例ある。その他には、蓋を使用したと考えられるものが１例ある。埋土中には、炭化物が含まれるものが16例あり、なかでも、ＣＳＩ01の中央ピットからツブラジイ・クスノキ、ＣＳＩ15の中央ピットからも、ツバキ・クスノキなど複数の樹種が含まれるものがある。特にクスノキやツバキは、本遺跡の住居用構造材の樹種とは異なっていることが注目される。

中央ピットの用途については、さまざまな見解があり、いまだはっきりとはしていないのが現状である。鳥取県内の中央ピットを概観してその用途について考えてみたい。

中央ピットの形態は、平面形は円形・楕円形を呈するものが多く、方形を呈するものもある。断面は、一段掘りのもの、二段掘りのものがある。また、ピットの周囲には土壇状のものをもつものがある。さらに、中央ピットに溝が接続するものもある。

弥生時代ではさまざまな形態の中央ピットが現れており、南谷大山遺跡・長瀬高浜遺跡・青木遺跡の中央ピットの形態を見ると、時期が下るにつれて単純な形態になるようである。

また、埋土状態を見ると、大半のものが皿状の堆積をしており、柱穴とは異なる層が堆積しているものが多く、用途を考えるうえで示唆的である。特に、南谷大山遺跡の中央ピットから出土した炭化物は、明らかに火を受けたもので、ツブラジイ・クスノキ・ツバキと、複数の樹種が出土しており、中央ピット内で燃えたものか、炭が詰まっていた可能性があり、周囲は焼けてはいないが炉として機能したものと考えられる。陰田遺跡群[90]では、ほとんどの中央ピットから灰・焼土・炭化物が出土しており、炉として機能した可能性が指摘されていると同時に、防湿用等多用途に供されたものとも考えられている。

青木遺跡では、中央ピットが祭祀用のピットと考えられており、床面中央楕円→中央方形（二段）→壁際（二段）と変遷し、青木Ⅴ・Ⅵ期に竪穴方形化とあいまって壁際に固定されるものと考えており、時期ごとにその形態が異なり、位置も変化していくとされる。しかし、中央ピットをもつ97遺構を再度検討してみると、ＨＳＩ60のように鏡が出土しているものもあるが、大半のものは土器が出土するものの、これが祭祀用のものとは断定できない。位置的には上記のような変遷が窺われるが、中央ピットと壁際に移動するピットが同じ用途であるとは、必ずしも言えるとは思われない。

南谷大山遺跡・長瀬高浜遺跡など、天神川下流域では、青木遺跡のような中央ピットの位置的変化は窺われない。長瀬高浜遺跡では、長瀬Ⅰ期～Ⅲ期まで中央ピットが見られ、時期が下るにつれて中央にあるものから、主柱穴の間に位置が変わっていくようであるが、青木遺跡の特殊ピットのように壁際に位置するものはみられない特徴がある。中央のものも主柱穴間にあるものも、埋砂は黒く、主柱穴との判別は容易であることから、両者は同様の用途であった可能性がある。

また、青木遺跡ＦＳＩ14の中央ピット内では直立の炭化した柱痕が、検出されており、中央ピットが支柱穴的役割を果たしたものとも考えられている。

さらに、中央ピットに向かって溝が掘り込まれているものもあり、特に、淀江町・福岡小真石清水遺跡のＳＩ01[91]では、中央ピットから屋外に延びる暗渠状の溝が確認されており、排水機能が考えられるものがある。

以上、県内の中央ピットを概観すると、その用途は、祭祀用施設・支柱穴・炉・排水用など状況に応じて、複数の用途に供されたと考えることができる。しかし、中央にこのような施設をもたなければならなかった事は共通しており、住居の中央がもつ意味は地域を越えて共通しているといえよう。この状況は、中央ピットが本来的にはある特定の機能を持っていたものが、本来の意味をなくし、各住居でさまざまに使用されたものと考えられる。

(2) 特殊ピット

南谷大山遺跡では、総数14例である。時期的には、大山Ⅴ期・大山Ⅷ期・大山Ⅺ期にみられ、それぞれ、１例・10例・３例で、古墳時代中期に多く出現している。形態は、楕円・円形のものがほとんどで、方形や二段掘りのもの、溝で囲まれるものは皆無である。特殊ピットの約半数から、高杯・須恵器蓋杯などが検出されている。南谷大山遺跡では、中央ピットがほとんど遺物をもたないのに対し、特殊ピットは高杯などの遺物をもつものが多く、用途的には異なるものが考えられる。

特殊ピットの用途については、青木遺跡では、ＣＳＩ01より滑石製勾玉・小型丸底壺、ＣＳＩ19より手捏ね土器など、特別な遺物が出土していることから、祭祀用と考えられている。南谷大山遺跡についても同様の傾向があり、祭祀用と考えてもよいのではなかろうか。

では、鳥取県内の特殊ピットを概観してみたい。

特殊ピットの形態は、平面は円形・楕円形（不整形を含む）・方形を呈し、断面形は一段掘りになるもの・二段掘りになるものがある。また、溝によって区画されるものもある。

それぞれの時期についてみても、中央ピットが弥生時代全般～古墳時代中期まで長期間存在するのに対し、特殊ピットは弥生時代終末～古墳時代後期までとその存続期間は短くなっている。

青木遺跡では、特殊ピットが出現するのは青木Ⅴ・Ⅵ期以降であるが、数が多くなるのは青木Ⅷ～Ⅺ期で、形態も平面方形・断面一段掘りを呈するものがほとんどである。

その他の遺跡についてみても、古墳時代中期に最も多く出現しているようである。

特殊ピットには、溝で区画されるものや特殊な遺物をもつもの、蓋が使用されたものなどがあり[92]、祭祀用と考えることができる。特殊ピットは、中央ピットが多用途に供された可能性があるのに対し、ある特定な用途（祭祀用）として使用されたものと考えられる。

第５節　南谷大山遺跡の変遷・性格と集団の動向

１．南谷大山遺跡の変遷

南谷大山遺跡は、1991年～1993年にかけての調査で、70棟の竪穴住居跡（建て替え・重複を含めると96棟）、掘立柱建物跡５棟、屋外貯蔵穴と考えられる袋状土坑26基、不明土坑21基、段状遺構11基、溝状遺構25条、ピット群５カ所、古墳５基、埋葬施設３基が検出された。遺跡の総面積は27358㎡以上である。

南谷大山遺跡を出土土器からⅠ期～Ⅸ期に時期区分したが、ここで南谷大山遺跡全体を概観し、それぞれの時期における集落の変遷を考えてみたい。なお、竪穴住居の規模については、30㎡以上のものを大型、20～25㎡程度のものを中型、15㎡程度以下のものを小型として考えた。

［大山Ⅰ期］

大山Ⅰ期の土器は、Ｂ区の中央部にのみ出土しているが、確実な遺構に伴ってはいないため、集落の様相は不明である。しかし、この位置にあった遺構が、後世の遺構によって壊されたと考えると、古相の土器が出土していてもおかしくはない。

［大山Ⅱ期］

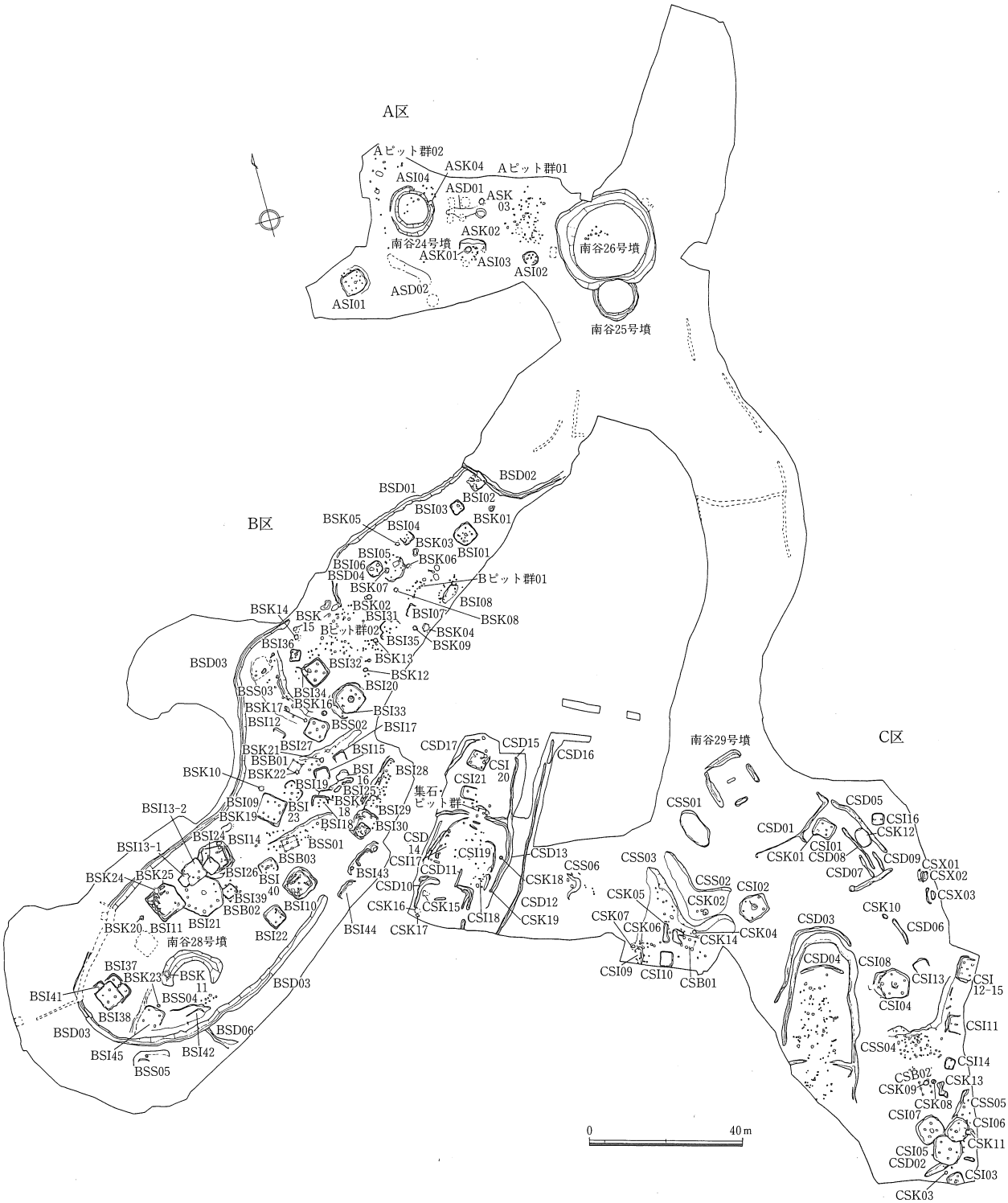
大山Ⅱ期では、Ａ区、Ｂ区、Ｃ区のそれぞれの尾根上に集落が形成される。Ａ区では標高85～90ｍ付近の高い位置に、ＡＳＩ01、ＡＳＩ03、ＡＳＩ04がある。竪穴住居は、平面形がいずれも隅丸方形と考えられ、床面積も35㎡以上と大型のものである。ＡＳＩ03・ＡＳＩ04は、屋内貯蔵穴を有するものである。

Ｂ区では中央部の標高68～78ｍのやや低い位置に、ＢＳＩ07、ＢＳＩ10-4、ＢＳＩ23、ＢＳＩ27、ＢＳＩ33を中心に、貯蔵穴と考えられる土坑４基、段状遺構２基、溝状遺構２条、ピット群１カ所で構

成される。

竪穴住居は、床面積35㎡以上の大型で隅丸方形を呈すもの２棟、25㎡程度の中型のものは隅丸方形・方形各１棟、10㎡以下と小型で方形を呈すのもの１棟である。ＢＳＩ23からは、仿製重圏文鏡の破片(破鏡されたもの？）が出土しており、この時期の住居では中心的な位置をなすものと考えられ、大型のＢＳＩ10-4・ＢＳＩ33は、ＢＳＩ23を中心にしてほぼ等間隔に並んでいる。

貯蔵穴は、ＢＳＫ22がＢＳＩ23に近接して作られているが、その他のものは、住居から離れて作られており、規則性は認められず散在する。これら、屋外貯蔵穴は共同管理されたものと理解できよう。

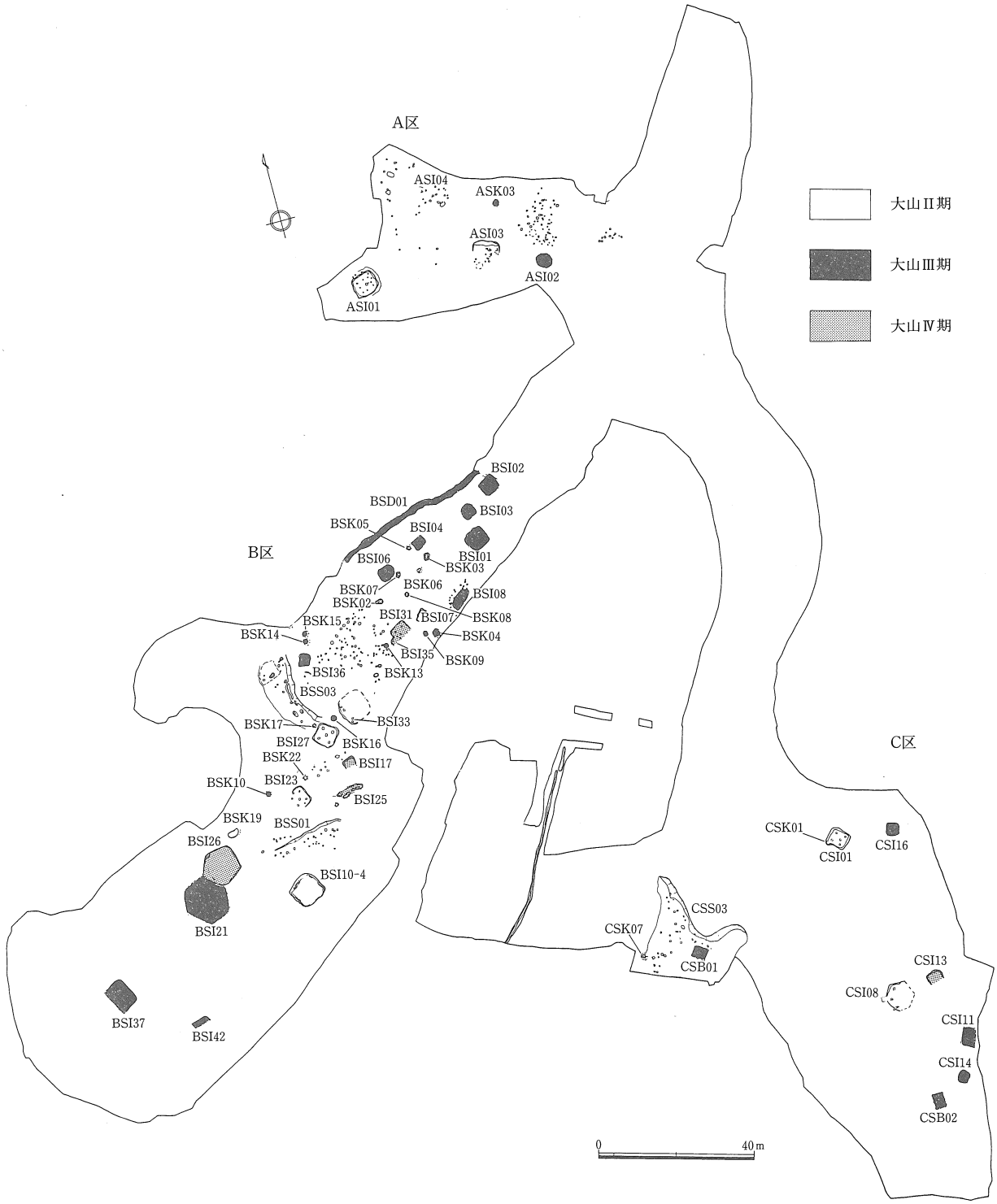


挿図159　南谷大山遺跡遺構配置図

段状遺構は性格は不明であるが、ＢＳＳ03からは、焼土面が２カ所で検出されており、簡単な住居状のものがあった可能性がある。

さてＣ－Ｉ区では、標高83ｍと高い位置に中型で隅丸方形を呈するＣＳＩ01、標高73ｍとやや低い位置に大型で六角形を呈すと考えられるＣＳＩ08が作られている。ＣＳＩ01には、屋内貯蔵穴と考えられるＣＳＫ01が掘り込まれている。

Ａ区・Ｃ－Ｉ区では、屋内貯蔵穴が出現しており、貯蔵施設の管理形態は個別管理といえるが、Ｂ区の屋外貯蔵穴は、共同管理下にあったものと考えられ、異なる様相がある。



挿図160　南谷大山遺跡遺構配置図（弥生時代後期）

［大山Ⅲ期］

Ａ区では急激に集落の規模が縮小し、ＡＳＩ02、ＡＳＫ03のみとなる。ＡＳＩ02は平面は、楕円形を呈し、床面積も11㎡と小型である。貯蔵穴は、住居から離れた位置に作られている。

Ｂ区では、９棟の竪穴住居を中心に、貯蔵穴７基、溝状遺構１基が作られている。竪穴住居は、東側のＢＳＩ01～04・06・08・36、西側のＢＳＩ21、さらに西側のＢＳＩ37・42の３グループに分けることができる。東側のグループは、中型のものは隅丸方形のもの２棟、方形のもの１棟である。小型のものは隅丸長方形、隅丸方形のもの各１棟、方形のもの２棟である。西側のグループは、大型で隅丸方形を呈すＢＳＩ37、小型で方形を呈すＢＳＩ42からなる。このうち、ＢＳＩ21は、六角形を呈し床面積が82㎡以上と、県内のこの時期のものとしては最大規模を測るもので、平面形の特殊性・卓越した床面積をもっており、集会場等特別な意味合いをもった建物と考えられる。ＢＳＩ21は、東側のグループからは約60ｍ、西側のグループから約25ｍ離れており、単独の建物と考えてよいであろう。

貯蔵穴は、住居から離れた位置に作られたものが多く、東側からＢＳＫ04・09・13・16・10とほぼ一直線状に並んでいる。ＢＳＩ36の北側には、近くにＢＳＫ14・15が作られている。このうち、ＢＳＫ04からは、大量の土器と共にヤマトシジミが出土しており、貯蔵穴として使用された後に、ゴミ捨て場として再利用されたものと考えられる。この時期の屋外貯蔵穴については、共同管理されたものといえ、前時期と異なる管理形態を示しているといえる。

また、東側グループに伴うと考えられるＢＳＤ01がある。これは、西側が流失しており全容は不明であるが、道路として使用されたものと考えられる。

Ｃ－Ⅰ区では、高い位置に小型で隅丸方形を呈するＣＳＩ16、さらに東側斜面には小型で方形を呈するＣＳＩ11・ＣＳＩ14、標高70ｍの平坦部のＣＳＢ02を中心に集落が営まれている。

Ｃ－Ⅱ区では、ＣＳＢ01が作られている。この地区では、この時期の竪穴住居は検出されていないが、調査区外（南側）に存在していると推定される。

Ｃ区の掘立柱建物跡は、住居とは離れた位置にあり、居住以外の目的で使用されたものと考えられ、この時期、Ｃ区に屋外貯蔵穴が見られない事を考慮すると、高床式の倉庫であった可能性もある。

大山Ⅲ期は、いずれの小地区の集落も住居と貯蔵施設をセットで備えており、それぞれの尾根で独立した経営状態を示しているといえ、Ｂ区の集団が優位であった事が窺われる。貯蔵施設の管理形態は、大山Ⅱ期同様、共同管理が基本となっていると思われる。

［大山Ⅳ期］

この時期になると、Ａ区では集落がなくなり、Ｂ区・Ｃ区のみに集落が営まれている。Ｂ区では、５棟の竪穴住居を中心に貯蔵穴７基が作られている。大山Ⅲ期と同様に、竪穴住居は東側のＢＳＩ31・35、中央南側のＢＳＩ17・25、西側のＢＳＩ26の３グループに分けることができる。東側のグループは、中型で方形を呈すもの１棟、小型で方形を呈すもの１棟である。しかし、ＢＳＩ31・35は切りあっており、同時に併存していない。中央南側のグループは、小型で方形を呈すもの１棟、不明１棟である。西側のものはＢＳＩ26のみで、平面隅丸五角形・床面積57㎡と大型で、大山Ⅲ期のＢＳＩ21と同様特別な建物として使用されたものと推定される。

貯蔵穴は、東側グループに密集している。このうち、ＢＳＫ05はＢＳＩ04に近接している。また、ＢＳＫ07を中心にしてＢＳＫ02・08・06は弧を描くように配置されている。ＢＳＫ03は底面が長方形を呈し、他のものと異なるが、上種第５遺跡でも同様の形態の貯蔵穴があり、貯蔵穴と判断した。

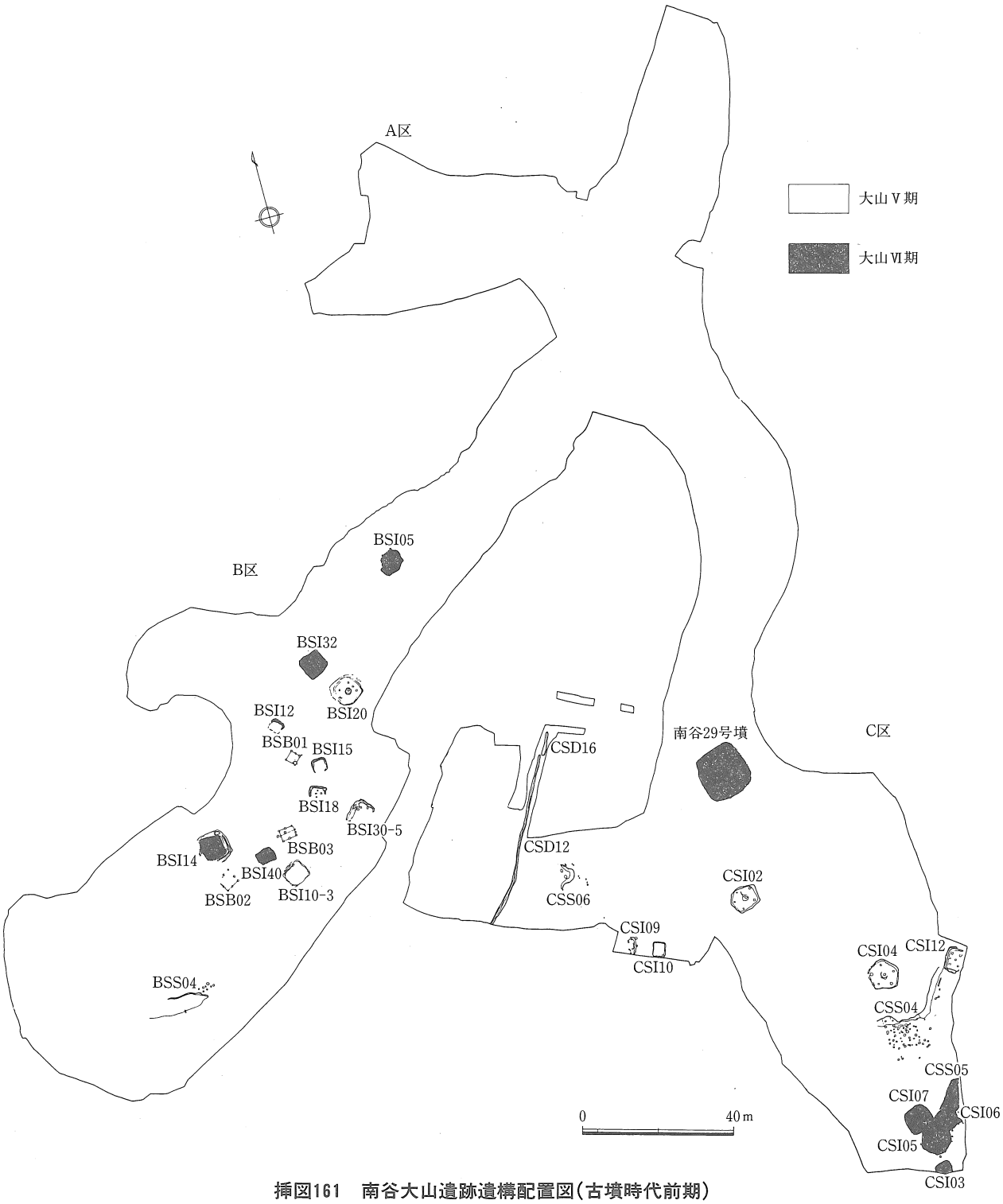
Ｃ－Ⅱ区では、ＣＳＫ07が検出されており、この時期の住居が調査区外に存在する可能性がある。

大山Ⅲ期・Ⅳ期は、超大型の多角形住居とそれより小型の住居の構成は同様であるが、Ⅲ期は、おおむね大型住居と小型住居がセットで構成されているが、Ⅳ期では、Ⅲ期に比べてやや小型の住居の構成であり、前時期に比べて集団の勢力の低下が窺われる。

また、貯蔵施設のあり方を見ると、Ⅲ期・Ⅳ期とも共同管理化の傾向が窺われるが、Ⅲ期のものは住居から離れ散在し、Ⅳ期のものは比較的住居に近接し密集している違いがある。

［大山Ⅴ期］

この時期も、Ｂ区・Ｃ区で集落が営まれている。Ｂ区では、５棟の竪穴住居ＢＳＩ10-3・15・18・20・30-5、ＢＳＢ03を中心に集落が営まれている。この地区では、標高77ｍ付近の平坦面に大型で隅丸方形を呈すＢＳＩ20と、標高72～75ｍの斜面部に小型で方形を呈すＢＳＩ15・18、標高68ｍ付近の急斜面にＢＳＩ30-5、標高70ｍ付近の平坦面にＢＳＩ10-3、ＢＳＢ03、標高66ｍ付近の斜面にＢＳＳ04がある。



挿図161　南谷大山遺跡遺構配置図（古墳時代前期）

大型のものは高い位置にあり、小型のものは大型のものからやや離れて位置している。

また、B区では、この時期になって掘立柱建物が現れる。時期がわかるものは、ＢＳＢ03のみであるが、ＢＳＢ01・02もほぼ同時期に作られたものと考えてもよいであろう。これらは、主軸がそれぞれ異なっており規則性は見られないが、ほぼ等間隔に配置されている。B区の竪穴住居跡と掘立柱建物跡は立地場所を異にしており、掘立柱建物跡が住居以外の目的で作られたものと考えられる。

Ｃ－Ⅰ区では、竪穴住居は、標高73ｍの平坦面にあり大型で五角形を呈すＣＳＩ04、東側斜面にあり中型で長方形を呈すＣＳＩ12の２棟が確認されている。

Ｃ－Ⅱ区では、３棟の竪穴住居が確認されている。大型で五角形を呈するＣＳＩ02、隅丸方形を呈すと考えられるＣＳＩ09、方形を呈し小型のＣＳＩ10が作られている。このうち、ＣＳＩ02は、斜面を大きく加工して作っており、その構築の際には大掛かりな土木工事がなされている事がわかった。

Ｃ－Ⅳ区では、急斜面にＣＳＳ06があり、祭祀的な意味合いをもったものと思われる。

大山Ⅴ期では、大型住居がB区では方形ないし隅丸方形、C区では五角形を呈す。規模的には五角形を呈すものの方がやや大きく、当遺跡内では中心集落がC区に移動していったものと考えられる。また、この時期以降屋外貯蔵穴は見られなくなり、この時期で大きく貯蔵形態が変化している。

［大山Ⅵ期］

この時期はB区・Ｃ－Ⅰ区で遺構が確認されている。いずれも前時期と比べて集落の規模は極めて小さくなっている。B区では、５棟の竪穴住居が作られる。標高79ｍ付近の平坦面に大型で隅丸方形を呈すＢＳＩ05、標高77ｍ付近の平坦面に大型で方形を呈すＢＳＩ32、斜面には小型で方形を呈すＢＳＩ12、標高69ｍ付近の平坦面に大型で隅丸方形を呈すＢＳＩ14、中型で長方形を呈すＢＳＩ40が作られている。ＢＳＩ32にはベッド状遺構、また、ＢＳＩ14内には、方形プランの屋内貯蔵穴が付設されている。

Ｃ－Ⅰ区では、標高68～69ｍの平坦面に４棟の竪穴住居が作られている。ＣＳＩ05は大型で隅丸五角形、ＣＳＩ06は中型で楕円形を呈し、方形プランの屋内貯蔵穴が付設されている。ＣＳＩ07は大型で隅丸方形を呈す。これらは重複しているが、ＣＳＩ05→ＣＳＩ06→ＣＳＩ07の順で作られており、同時に併存していない。また、小型で隅丸方形を呈すＣＳＩ03が調査区際で検出されている。また、これらの住居とは離れて、ＣＳＳ04・ピット群があり、平地式の住居があった可能性がある。

Ｃ－Ⅵ区には、一辺約11ｍの方墳の南谷29号墳があり、居住区と墓域が比較的近接している。

この時期以降、一時期集落の造営が途絶える。

［大山Ⅶ期］

一時期途絶えた集落が再び営まれるようになる。集落の範囲は、B区の標高65～71ｍの平坦面、Ｃ－Ⅴ区の谷部にまで及ぶ。B区では、小型で方形を呈すＢＳＩ13-3・13-4が作られ、Ｃ－Ⅴ区ではＣＳＩ18・19が作られている。この時期は、小型住居が主流であるが、ＣＳＩ19はこの中では大型である。ＣＳＩ19からは、祭祀用と考えられる蛇紋岩製の有孔円盤２個、臼玉351個がまとまって出土しており、谷底部の住居の性格を考えるうえで興味深い資料である。また、住居内出土例としては、県内では初めての鉄鋌と考えられる鉄製品が、ＢＳＩ13-3から出土しており、集団内で鉄製品(農耕具か)の生産にあたっていたものと推察される。

［大山Ⅷ期］

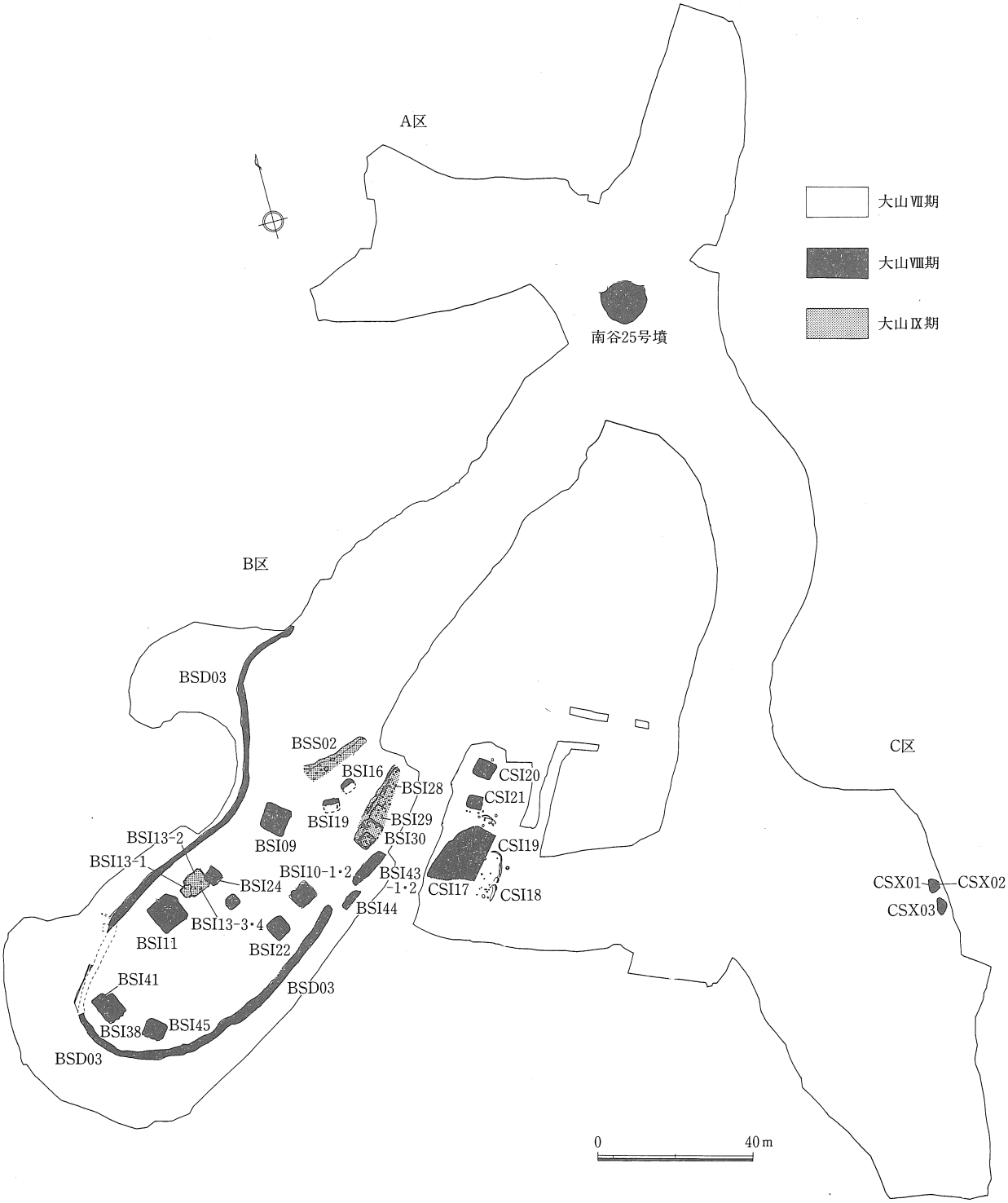
この時期は、集落の規模が大きくなり、B区の標高65～71ｍの平坦面～斜面、および、Ｃ－Ⅲ区の標高57～60ｍの谷底部に集落が営まれている。B区では、ＢＳＩ09・10-1・10-2・11・16・19・22・24・38・39・41・43-1・43-2・44・45の15棟が作られている。しかし、ＢＳＩ11は７回の建て替えがあり、これらは同時に建てられたものではなく、１時期の集落の構成は、数が示すものより若干少なくなる。これらは、方形を呈し大型のもの２棟、方形を呈し中型のもの３棟、方形を呈し小型のもの６棟、隅丸方形を呈し中型のもの２棟、隅丸方形を呈し小型のもの３棟で、方形住居が主流を示す。

なお、この時期の竪穴住居内からは、曲刃鎌・「U」字状鋤（鍬）先など比較的多くの鉄製農耕具が検出されており、南谷大山遺跡の集団が、これらを使用して農耕に従事していたことが推察される。

また、B区の丘陵斜面にはＢＳＤ03が掘り込まれており、集落を区画するものと考えられる。

Ｃ－Ⅴ区では、ＣＳＩ17-1～17-4、ＣＳＩ20、ＣＳＩ21が作られている。ＣＳＩ17は、少なくとも４回の建て替えがあり、同時には併存していない。

Ｃ－Ⅰ・Ⅱ区では集落はなくなり、古墳・埋葬施設群が作られている。Ａ区の最も高い位置には南谷25号墳、Ｃ－Ⅰ区の標高76～77ｍの東側斜面には、鋤状の溝をもつ土壙墓ＣＳＸ02・03が検出されてい



挿図162　南谷大山遺跡遺構配置図（古墳時代中期）

る。その他に小口石を立てる石蓋土壙墓であるＣＳＸ01があるが、ＣＳＸ02に削り取られていることから、若干遡るものと考えられる。

この時期特徴的な遺物は、谷底部のＣＳＩ17-4から出土した鋳造鉄斧である。鋳造鉄斧の出土は大変少なく、全国でも数十例が知られるのみであり、県内では３例目、住居内からの出土では初例である。

［大山Ⅸ期］

この時期になるとＢ区にのみ集落が営まれる。竪穴住居は、ＢＳＩ13-1・13-2・28・29・30-1・30-2・30-3の７棟である。しかし、ＢＳＩ28・29・30のように３回以上の建て替えが見られることから、大山Ⅷ期同様同時に建てられたものではなく、１時期の集落の構成は、数が示すものより少なくなる。

これらは、方形を呈し中型のもの１棟、方形を呈し小型のもの５棟、長方形を呈し中型のもの１棟で、すべて方形系である。建て替えの住居を見ると、縮小傾向を示すこともⅧ期と同様の傾向である。

大山Ⅷ期では大型の住居が作られ、１時期の集落では最も棟数が多く、集落を区画する溝も作られるなど完成された集落の形態を示す。これに対し、Ⅸ期になると中型の住居と小型住居の構成に変化している。この現象は、集団の勢力の衰えを示しているものと考えられ、この時期以降、この遺跡内では集落は営まれなくなり、小規模ながら古墳群が形成されるようになる。

古墳は南谷古墳群に属し、標高91ｍの高い位置には、ＴＫ10並行期に径約22ｍの円墳である南谷26号墳が、ＴＫ43並行期には標高89ｍの高い位置に、径約10ｍの円墳である南谷24号墳、標高68ｍのやや低い位置に径約10ｍの円墳である南谷28号墳が作られている。なお、南谷28号墳は横穴式石室が内包されていたものと推察されている。

２．南谷大山遺跡の性格

丘陵上に展開する南谷大山遺跡は、標高60～90ｍにあり、現在の水田面からの比高差は約58～88ｍである。南谷大山遺跡は、立地的には広義の高地性集落と考えてよいが、武器等の出土が少なく、また防御施設等が確認されていない事から、瀬戸内地域の高地性集落とは性格が異なるものといえる。

弥生時代の集落からは、漁撈具として使用されたと考えられる土玉が比較的多く検出されている事、また、ＢＳＫ04からは眼下の東郷池・日本海から獲ったと考えられるヤマトシジミ・カキなどが検出されている事、さらに、磨製石庖丁が出土している事から、稲作および漁撈に従事していたものと推定でき、低地の集落と基本的には共通する生活が営まれていたものと考えられる。

古墳時代中期の集落では、曲刃鎌・「Ｕ」字状鋤（鍬）先などの鉄製農耕具が検出されており、やはり農耕に従事していたものと考えられ、弥生時代の集落と基本的には変わらない生活が営まれていたものと推察される。

３．若干の考察

以上、南谷大山遺跡の変遷・性格について述べてきたが、問題となるのは弥生時代と古墳時代の画期をどこに求めるかである。

集落の変化によって時代区分が考えられている青木遺跡では、①住居の平面形がほぼ方形に統一される、②いわゆる特殊ピットが壁際に固定される、③炉跡が中央に固定化される、④ベッド状遺構が出現するというあり方から、青木Ⅴ・Ⅵ期をもって古墳時代への画期と考えている。なお、青木Ⅴ・Ⅵ期は庄内（新）並行と考えられている。

しかし、南谷大山遺跡では、青木遺跡のⅣ期で見られなくなるという多角形住居（五角形）が、大山Ⅵ期（青木Ⅶ～Ⅷ期並行）まで存続すると共に、方形住居が主流になりつつも、隅丸方形住居が依然として残り続けるという違いがある。また、中央ピットは大山Ⅷ期までは残っており、いわゆる特殊ピットと考えられるものは大山Ⅴ期にならないと現れてはいない。このように、鳥取県西部の青木遺跡の集

落の変化と、中部の南谷大山遺跡の変化とは若干異なっていることが指摘できる。

南谷大山遺跡において、集落構成の中で最も変化していることは、屋外貯蔵穴と考えられる土坑が大山Ⅳ期までで姿を消しているということである。屋外貯蔵穴の消失は、生産物の所有形態の変化であり、集団内部での生活様式の変化が見受けられる。

また、土器の様相から見ると、大山Ⅴ期に畿内系（布留式）の土器が出土しており、大きな変化が大山Ⅴ期にあった事が推察される。

このように見ると、南谷大山遺跡の集落構成での変化と、土器の様相の変化はほぼ一致しており、大きな変化が大山Ⅴ期にあり、この時期をもって古墳時代と考えたい。

さて、大山Ⅵ期と大山Ⅶ期との間には、数段階の空白がある事が土器編年で指摘できる。この間の時期には、長瀬Ⅲ期が入るものと考えられる。大山Ⅵ期並行と考えられる長瀬Ⅱ期では、長瀬高浜遺跡が最も繁栄する時期であるのに対し、南谷大山遺跡では、６棟の竪穴住居、南谷29号墳が営まれる程度であり、低地の長瀬高浜遺跡がこの地域の中心集落として発展していったものと考えられる。

天神川下流域の集落の関係を考えると、長瀬Ⅰ期並行と考えられる大山Ⅴ期では、低地には長瀬高浜遺跡が、丘陵上には南谷大山遺跡・南谷ヒジリ遺跡があり、それぞれに別々の集団が存在していたと考えられる。大山Ⅴ期の南谷大山遺跡では13棟、南谷ヒジリ遺跡では３棟の住居が営まれているのに対し、長瀬Ⅰ期の長瀬高浜遺跡では、南谷大山遺跡を上回る32棟の竪穴住居が営まれている。

このように見ると、丘陵上の集落より、長瀬の集団が明らかに優位に立っていたといえる。しかし、集落の構成を見ると、大型の竪穴住居を中心にして、小型の住居が付属するという形は共通している。また、大型の住居の規模も40㎡前後であり、それぞれの有力層の力関係は均質なものといえよう。

また、丘陵上の南谷ヒジリ遺跡（標高23ｍ）では、この時期に集落に近接して一辺約14ｍを測る方墳の南谷27号墳が築造されている。

さて、次の時期（長瀬Ⅱ期＝大山Ⅵ期）では、低地の集落と丘陵上の集落とでは、集落の内容・規模において極端な差が現れる。丘陵上の遺跡は、南谷大山遺跡では極端に集落の規模が縮小し、南谷ヒジリ遺跡においては、また、周辺の泊村・宇谷第１遺跡においても、この時期の遺構は確認されていないのである。この現象は、単に自然環境の変化などではなく、何らかの政治的・社会的影響があったものと考えられる。

これに対し、同時期（長瀬Ⅱ・Ⅲ期）の長瀬高浜遺跡では、130棟以上の竪穴住居が作られるとともに、巨大な掘立柱建物跡ＳＢ40など特異な遺構があり、この地域に巨大な権力の集中があったものと考えられる。

丘陵上の集落が極端に縮小し、低地の集落が隆盛を極めるといった現象は、果たしてどういった背景があったのであろうか。古墳時代前期前半の集団間の動向を考えると、南谷大山遺跡をはじめとする丘陵上の集団が、低地の長瀬高浜遺跡の集団に帰属・吸収されたため、長瀬高浜遺跡が、爆発的な発展を見せるようになったと考えてはどうであろうか。この点については、更に資料の増加をもって検討しなければならない問題である。

さて、長瀬高浜遺跡では、調査された範囲内では、古墳時代中期中葉～後半にかけて集落が廃絶し、古墳が築造されるようになる。

ところが、この時期に、南谷大山遺跡Ｂ区・Ｃ－Ⅴ区において、再び集落が営まれるようになる。また、ほぼ同時期には、付近に南谷25号墳、宇野３～９号墳などの古墳が築造され、集落と墓域が近接するあり方を示すようになる。集落と古墳が近接するという状況は、南谷大山遺跡・南谷ヒジリ遺跡のように古墳時代前期から見られるもので、天神川下流域ではこのような状況が一般的なものと考えられる。このように考えると、長瀬高浜遺跡では全く集落がなくなるのではなく、近辺に集落の移動があったと考える方がよいと思われる。

古墳の規模・副葬品等を見ると、径約30ｍの円墳である長瀬高浜１号墳を筆頭にし、90基からなる長瀬高浜古墳群のものの方が、丘陵上のものに比べてはるかに優位にあり、一貫して長瀬の集団の優位性を裏付けるものといえる。

しかし、なぜ再び南谷大山遺跡に集落が営まれるようになるのであろうか。長瀬高浜遺跡の性格がはっきりとしていないこと、低地での古墳時代中期後半の集落が検出されていない状況では、不明といわざるを得ない。

古墳時代前期～中期にかけての集団の動向については、集落遺跡の調査が丘陵部において見られる程度であり、不明の点が多い。しかし、この地域の古墳の変遷を考えると、ある程度の動向が推察できるものと思われる。

東郷池周辺には大型前方後円墳が累々と築造されており、古墳時代初めから中期にかけて、この地域が東伯耆の中心地であったことは、従来の研究からでも明らかである。[21] 大型前方後円墳の変遷を見ると、馬ノ山４号墳は長大な竪穴式石室内に４面の鏡と共に多量の石製腕飾類が副葬されており、その時期は、副葬品のセット関係から古墳時代前期でも後半に位置付けられている。[21] 宮内狐塚古墳・野花北山古墳は、埴輪の様相から古墳時代中期のものと考えられていることから、時期が下るにつれて橋津（馬ノ山）２号墳→橋津（馬ノ山）４号墳→宮内狐塚古墳→野花北山古墳と、東郷池北部から東側丘陵部を回って南岸に変遷していると考えられている。[93]

時期の経過と共に、古墳時代前期に隆盛を誇った長瀬高浜遺跡から、大型前方後円墳が遠ざかっているという興味深い事実があり、これらの大型前方後円墳の変遷と集落の変遷を合せて考えると、古墳時代前期から中期にかけての東郷池周辺のダイナミックな歴史像が浮かび上がってくるであろう。大胆に想像するならば、古墳時代前期に隆盛を誇った長瀬高浜の集落が、古墳時代中期後半に勢力が衰えると共に分村化の傾向が強まり、こうした状況のもと、再び丘陵上に集落が営まれるようになると考えてはどうであろうか。

従来、天神川下流域では弥生時代中期～古墳時代前期にかけて、丘陵上から低地に集団の移動があったと考えられてきたが、[21] 1990年から1993年にかけて行われた南谷大山遺跡をはじめとする丘陵部の調査と長瀬高浜遺跡の調査結果を見るかぎりでは、そのような集団の移動と考え得る資料はなく、むしろ、丘陵部・低地にはそれぞれ異なる集団が存在していたものと推察されるのである。しかし、古墳時代前期後半頃には、急速に力をもってきた低地の集団に、丘陵部の集団が吸収されていく様相が窺われるのである。

また、低地の集団の勢力の衰えから再び丘陵部に集落が営まれるようになると仮定したが、今後資料の増加を待ってさらに検討しなければならない。

以上、1991年度から1993年度にわたって行われた南谷大山遺跡をまとめるにあたって、若干の考察を行ってきたが、不十分な点は否めない。さらに資料の増大に期待すると共に、今後の課題としたい。

むすびにかえて

南谷大山遺跡の発掘調査は、1991年～1993年にかけて行われ、原始・古代の集落のほぼ全容が明らかとなった。羽合町内では、長瀬高浜遺跡以来の大規模な発掘調査であったが、関係各位のご協力により、ここに、ようやく1993年度調査の報告書をまとめることができた。本報告書は、事実記載に力点を置き、報告の責を果たすよう努めたつもりである。本報告書に収めた内容が、研究の一助となれば幸いである。最後に、調査の実施、報告書の作成にあたり、指導・協力・助言をいただいた各位に深く感謝申し上げたい。

註・参考文献

註1　羽合町教育委員会『羽合町内遺跡発掘調査報告書』1989

2　羽合町教育委員会『羽合町内遺跡詳細分布調査報告書（乳母ケ谷、大山所在遺跡群）』1991

3　鳥取県教育文化財団『南谷大山遺跡・南谷ヒジリ遺跡・南谷22・24～28号墳』1993

4　新日本海新聞社『鳥取県大百科事典』1984

5　羽合町『羽合町史』前編 1967

6　東郷町『東郷町史』1987

7　鳥取県教育研修センター『天神川流域とその周辺』1983

8　稲田孝司「旧石器集団の行動軌跡」『古代史復元1 旧石器人の生活と集団』講談社 1988

9　鳥取県埋蔵文化財センター『旧石器・縄文時代の鳥取県』1988

10　倉吉市教育委員会『高鼻2号墳（灘手2号墳）発掘調査報告書』1982

11　倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報（第3次）』1975

12　倉吉市教育委員会『中尾遺跡発掘調査報告書』1992

13　倉吉市教育委員会『立縫遺跡群　取木遺跡・一反半田遺跡発掘調査報告書』1984

14　鳥取県教育文化財団『南谷ヒジリ遺跡・南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳・乳母ケ谷第2遺跡・宇野3～9号墳』1991

15　鳥取県教育文化財団『園西川遺跡・園7号墳・原第2遺跡』1993

16　北条町教育委員会『島遺跡発掘調査報告書第1集』1983

17　名越勉「原始・古代」『倉吉市史』1973

18　倉吉市教育委員会『津田峰遺跡発掘調査報告書』1986

19　東伯町教育委員会『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』1987

20　関金町教育委員会『横峯遺跡発掘調査報告書』1986

21　山陰考古学研究所『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ』1978

22　山陰中央新報社『さんいん古代史の周辺－上－』1978

23　鳥取県教育文化財団『久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ケ原遺跡発掘調査報告書』1984

24　鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅱ～Ⅵ 1981～1983

25　北条町教育委員会『北尾遺跡発掘調査報告書』第1集 1987

26　泊村『泊村誌』1989

27　米子市教育委員会『目久美遺跡』1986

28　佐々木謙他『倉吉福庭遺跡』1970

29　鳥取県教育委員会「東郷町大鼻遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』1973

30　鳥取県教育文化財団『宇谷第1遺跡・南谷大ナル遺跡発掘調査報告書』1992

31　鳥取県埋蔵文化財センター『弥生時代の鳥取県』1985

32　名越勉・甲斐忠彦「鳥取県東郷町出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第59巻2号 1973

33　鳥取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書第1集』1960

34　倉光清六「伯耆八橋町銅鐸出土遺跡」『考古学雑誌』第23巻4号 1933

35　倉吉市教育委員会『上米積遺跡発掘調査報告Ⅱ－阿弥大寺地区－』1980

36　東森市良『四隅突出型墳丘墓』ニューサイエンス社 1989

37　北条町教育委員会『土下古墳群発掘調査報告書第1集』1983

38　北条町教育委員会『曲古墳群発掘調査報告書』1981

39　鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅳ　埴輪編　1982

40　東郷町教育委員会『津浪遺跡発掘調査報告書』1974

41　東郷町教育委員会『佐美4・13号墳発掘調査報告書』1979

42　原田雅弘「泊村出土の子持勾玉」『鳥取埋文ニュース』23　1989

43　倉吉市教育委員会『大宮古墳発掘調査概報』1979

44　近藤哲雄「東伯耆における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』第4集島根考古学会1987

45　東郷町教育委員会『片平5号墳発掘調査報告書』1977

46　鳥取県教育委員会『鳥取県装飾古墳分布調査概報』1981

47　梅原末治「因伯二国に於ける古墳の調査」『鳥取県史跡勝地調査報告』第二冊 1924

48　羽合町教育委員会『馬ノ山古墳群』1961

49　泊村教育委員会『園古墳群発掘調査報告書』1990

50　鳥取県教育委員会『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』1984

51　真田廣幸「伯耆国大御堂廃寺考」『山陰考古学の諸問題』1986

52　真田廣幸「奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の様相『考古学雑誌』66-2　1980

53　倉吉市教育委員会『史跡大原廃寺跡第2次発掘調査概報』1988
倉吉市教育委員会『史跡大原廃寺跡第3次発掘調査概報』1991

54　倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報』第3次・第5次・第6次 1975～1978

55　倉吉博物館『伯耆国分寺』1983

56　倉吉市教育委員会『伯耆国分尼寺発掘調査概報』1973

57　佐々木謙・亀井熙人「原始古代編」『鳥取県史』1鳥取県 1972

58　羽合町教育委員会の御好意により、「天正14年河村郡

南谷村田畑地続全図」を拝見させていただいた。
59　羽合町教育委員会『南谷貝塚発掘調査報告書』1991
60　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古クラブ 1966
田辺昭三『須恵器大成』　角川書店 1981
61　山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』人文科学編 1960
62　山本清「山陰の土師器」『山陰文化研究紀要』6号島根大学　1965
東森市良・前島己基・松本岩雄「弥生式土器集成」『八雲立つ風土記の丘研究紀要』Ⅰ　1978
その他にも以下のような研究成果がある。
房宗寿雄「『山陰地域』における古墳形成期の様相」『島根考古学会誌』第1号　1984
赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年私案」『松江考古』第6号　1985
花谷めぐむ「山陰古式土師器の形式学的研究」『島根考古学会誌』第4号　1987
63　米子市教育委員会『福市遺跡』1968
64　鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅲ 1976～1978
65　谷口恭子「土器」『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市教育委員会 1991
66　土井珠美「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986
67　置田雅昭「服部遺跡出土遺物の諸問題」『倉吉市服部遺跡発掘調査報告書　遺物編』倉吉市教育委員会 1974
68　清水真一「鳥取県長瀬高浜遺跡出土の初期須恵器とその時期」『古文化談叢』第15集　九州古文化研究会 1985
69　高橋護「土師器の編年中国・四国」『古墳時代の研究6土師器と須恵器』 1991
70　鳥取県教育文化財団『秋里遺跡』1990
71　倉吉市教育委員会『観音堂遺跡発掘調査報告書』1985
72　大栄町教育委員会『上種第5遺跡発掘調査報告書』1985
73　赤沢秀則氏よりご教示して頂いた。
74　松本岩雄・大谷晃二「出土遺物（1）第1主体上方の一括土器」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室 1992
75　高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社 1992
76　岡山県教育委員会『天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳』1983
77　次山淳「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号 1993
78　清水真一「因幡・伯耆地方」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社 1992
79　岡村秀典「鉄製工具」『弥生文化の研究5道具と技術Ⅰ』雄山閣 1985
80　古瀬清秀「農耕具」『古墳時代の研究8古墳Ⅱ副葬品』雄山閣 1991
81　都出比呂志「農具鉄器化の初段階」『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店 1989
82　岡崎敬「鋳造梯形鉄斧」『沖ノ島』1979
83　平井勝「鋳造鉄斧」『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県教育委員会 1982
84　鳥取県教育文化財団『里仁古墳群』1985
85　村川行弘「会下山遺跡出土の鉄器について」『たたら研究』12号 1965
86　川越哲志「弥生時代の鋳造鉄斧をめぐって」『考古学雑誌』65巻4号　1980
87　杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8 1989
88　東潮「鉄鋌の基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』 第12集　1987
89　東潮「鉄素材論」『古墳時代の研究5生産と流通Ⅱ』雄山閣 1991
90　米子市教育委員会『陰田』1984
91　淀江町教育委員会『福岡小真石清水遺跡発掘調査現地説明会資料』1993
92　鳥取県教育文化財団『湖山第1遺跡』1989
93　名越勉「東伯耆の古墳文化」『歴史手帳』7巻4号 1973

ＣＳＩ01

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Ｐｏ１	床面	甕	①15.8※ ②7.7△ ⑤3.2	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は、下垂する。 なだらかな肩部を持つ。	外面…口縁部波状文後一部ナデ消し。肩部波状文が施され、一部ナデ消される。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい橙色	Ｏ－４
Ｐｏ２	埋土下層	甕	①14.8※ ②5.2△ ⑤3.0	口縁部は肉薄で、外反して立ち上がる複合口縁。端部は引き出される。口縁部下端は鋭く下垂する。	外面…口縁部平行沈線後一部ナデ消し。頸部～肩部３条の平行沈線、その下に刺突文が施される。	密(0.5～1㎜程度の石英・砂粒を含む。)	良好	内外面ともにぶい黄橙色	Ｉ－４
Ｐｏ３	埋土上層	甕	①14.2※ ②4.2△ ⑤3.3	口縁部は肉厚で外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（2㎜程度の石英含む。）	良好	内外面とも橙色	口縁部外面スス付着 Ｓ－22
Ｐｏ４	床面	底部	②2.4△ ④3.6※	平底を呈す底部。	外面…縦方向ミガキ。 内面…上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の石英・砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面スス付着 底部ヘラ記号有 Ｏ－８
Ｐｏ５	埋土下層	蓋	②2.1△ ④14.4※	大きく「ハ」字に開く蓋体部。端部は丸い。	内外面ともナデ。	密（1～3㎜大の石英含む。）	良	内外面とも明黄褐色	Ｏ－７

ＣＳＩ02

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Ｐｏ１	床面	甕	①17.4※ ②5.7△ ⑤3.6	口縁部は薄手で、外反して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ折れ、丸い。口縁部下端は鋭く引き出される。	外面…風化著しい。ナデか。 内面…風化著しい。口縁部ナデ。頸部以下右方向ケズリ。	やや粗(0.3～1.0㎜程度の細砂、1.0～3.0㎜程度の石英粒含む。)	不良	内外面共ににぶい黄橙色	Ｉ－３
Ｐｏ２	Ｐ３内	甕	①15.2※ ②3.7△ ⑤3.4	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。 端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く引き出される。	内外面ともに、ヨコナデ。	やや密（1㎜以下の石英、輝石を含む。）	良	内外共に、黄橙色	Ｓ－15
Ｐｏ３	床面	甕	①15.0※ ②4.7△ ③3.2	口縁部は薄手で、外反して立ち上がる複合口縁。端部は引き出される。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…風化著しい。ナデか。 内面…風化著しい。口縁部ナデか。頸部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜の石英含む。）	やや不良	内外共、橙色	Ｓ－16
Ｐｏ４	床面	甕	①13.0※ ②4.8△ ⑤3.6	口縁部は薄手で、外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密（0.2～1.0㎜程度の細砂、石英含む。）	良	内面…淡黄色 外面…灰白色	外面スス付着 Ｉ－１
Ｐｏ５	埋土下層	甕	①15.4※ ②4.3△ ⑤3.7	口縁部は薄手で、外反して立ち上がる複合口縁。端部は、極くわずかに内方へ肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部工具によるヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。	密（輝石を含む。石英を多く含む。）	良好	内外面共、黒褐色	ＦＹ－２
Ｐｏ６	埋土上層	甕	①16.6※ ②5.3△ ⑤3.7	口縁部は厚手で、外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸く屈曲する。	内外面ともにヨコナデ。	密	良好	内外共、黄褐色	Ｙ－２
Ｐｏ７	埋土下層	甕	①17.8※ ②4.2△ ⑤3.2	口縁部は厚手で、わずかに外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部平行沈線後一部ナデ消し。頸部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗(0.5～2.5㎜程度の砂粒、石英含む。)	良	内面…にぶい黄橙色 外面…明黄褐色	口縁部外面スス付着 Ｉ－２
Ｐｏ８	埋土上層	甕	①19.2※ ②5.8△ ⑤3.7	口縁部は厚手で、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部貝殻腹縁による波状文、後一部ナデ消し。頸部工具によるヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜の石英を含む。）	良好	内外面共、橙色	Ｙ－３
Ｐｏ９	床面	高杯	②10.7△ ④14.4※	筒部は柱状で、裾部で大きく開く。端部は内傾する面をもつ。	外面…筒部ナデ。裾部わずかに縦方向ミガキが認められる。 内面…筒部シボリ目残る。裾部ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒を多く含む。）	良好	内外共、浅黄橙色～黒褐色	裾部外面黒斑有 Ｓ－13
Ｐｏ10	床面	鼓形器台	①24.0※ ②13.1 ④20.8※	上台部は複合口縁状を呈し、大きく外反して開き、口縁部付近で厚味を増す。端部は外反、丸い。 筒部は短い。 脚台部は、上台部に比べ低く、複合口縁状を呈し、大きく開く。端部付近で肥厚する。	外面…ヨコナデ。 内面…上台部～筒部ケズリ後ナデ。脚台部右方向ケズリ。	密（1㎜前後の石英を含む。）	良好	内外面共に黄橙色	Ｓ－17
Ｐｏ11	床面	鼓形器台	②3.7△ ④17.8※	薄手で、やや高い鼓形器台脚台部とおもわれる。端部は丸い。	内外面ともにナデ。	やや粗（小さな砂粒を含む。）	やや不良	内外面共、淡黄色	Ｎ－15
Ｐｏ12	P3内	低脚杯	②1.9△ ④7.6※	低く、ラッパ状に大きく開く低脚杯脚部。	内外面共に、ヨコナデ。	やや粗（1㎜大の砂粒を含む。）	やや不良	内外面共に、浅黄橙色	Ｎ－14
Ｐｏ13	床面	甑	①24.6※ ②10.2△	内湾気味に立つ甑か。端部は外方へ折れ平坦面をもつ。	内面…ケズリ後ナデか。 外面…風化いちじるしい。ナデか。	粗（2㎜大の砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面共に、橙色	Ｎ－16
Ｐｏ14	床面	甑	①41.4※ ②12.5△	ラッパ状を呈す甑と思われる。端部は丸い。	外面…風化著しく調整不明。 内面…風化著しい。端部付近ナデ、以下ケズリか。	やや粗（5㎜大の石英を含む。）	良好	内外面共に、橙色	Ｓ－18

挿表７　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(1)

Ｐｏ15	土器溜	壺	①17.2※ ② 7.6△ ⑤ 3.8	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は先細りし丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…風化著しい。ナデか。 内面…ヨコナデ。	やや粗(1～4㎜大の石英・長石を含む。)	良好	内外面とも浅黄橙色	Ｓ－11
Ｐｏ16	土器溜	壺（胴部）	②15.0△	やや長い頸部～球形を呈す胴部の破片。	外面…頸部ヨコナデ。 肩部二段の平行沈線の間に、波状文が施される。 内面…頸部ヨコナデ。 肩部指押え後右方向ケズリ。以下上方向ケズリ。	やや密(1～2㎜大の砂粒・雲母を多く含む。)	やや不良	内面…浅黄橙色～褐灰色 外面…浅黄橙色	Ｓ－12
Ｐｏ17	土器溜	甕	①16.4※ ②15.8△ ⑤ 3.8	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。 肩部はなだらかな倒卵形を呈す。	外面…口縁～肩部ヨコナデ。 肩部波状文。かすかにハケ目の跡か。 風化著しく不明。 内面…口縁～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	やや粗（1㎜大の砂粒を多く含む。)	やや不良	内外面共、明黄褐色	Ｎ－11
Ｐｏ18	土器溜	甕	① 8.7 ②12.8△ ⑤ 3.4	器壁は肉薄で、口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は球形を呈すか。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下（櫛描）波状文。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	密(0.5～1㎜以下の石英を含む。)	良好	内外面共ににぶい黄橙色	ＦＹ－３
Ｐｏ19	土器溜	甕	①20.0 ② 8.1△ ⑤ 4.2	口縁部は高く外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂し、丸味をもって頸部へ至る。	外面…ヨコナデ。肩部に沈線。 内面…口縁～頸部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ後ナデ。	密（1～2㎜の石英・小石を含む。)	良好	内外面共、橙色	Ｏ－３
Ｐｏ20	土器溜	甕	①19.0※ ② 6.7△ ⑤ 3.7	口縁部は肉薄で、外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…風化のため調整不明。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	やや粗(1～2㎜の石英及び雲母を含む。)	良好	内外面共、黄橙色	Ｓ－１
Ｐｏ21	土器溜	甕	①14.8※ ② 8.4△ ⑤ 3.2	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く引き出される。肩部はなだらか。	外面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下風化のため調整不明瞭。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下左方向～左上方ケズリ。	粗（1～4㎜大の石英を多く含む。)	やや不良	内面…橙色。 外面…橙色～黒褐色	Ｓ－４
Ｐｏ22	土器溜	甕	①13.8※ ② 6.7△ ⑤ 3.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ後丁寧なナデ。	やや粗（1㎜大の砂粒を含む。)	良好	内外面とも橙色	Ｎ－13
Ｐｏ23	土器溜	甕	①18.2※ ② 4.4△ ⑤ 3.7	口縁部は肉薄で外傾して立ち上がる複合口縁。端部は先細りし丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	やや粗(1～3㎜大の石英・長石を含む。)	良好	内外面とも浅黄橙色	外面スス付着 Ｓ－８
Ｐｏ24	土器溜	甕	①14.2※ ② 2.3△	外反気味の「く」字状口縁部をもつ。端部は丸い。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ。	やや粗（1㎜大の砂粒を多く含む。)	良好	外面…にぶい褐色～黒褐色 内面…にぶい橙色	外面スス付着 CSI02貼床下出土のものと接合 Ｓ－９
Ｐｏ25	土器溜	甕	①16.4※ ② 3.0△ ⑤ 2.4	口縁部はやや肉厚で、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は極くわずかに下垂する。	外面…ヨコナデ。 内面…横方向ミガキ。	やや粗（2㎜前後の石英を含む。)	良	外面…橙色～赤橙色 内面…浅い黄橙色	Ｓ－３
Ｐｏ26	土器溜	甕	①17.4※ ② 3.1△ ⑤ 2.7	口縁部は肉厚で、短く外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は極くわずかに下垂する。	内外面ともヨコナデ。	密（1㎜大の石英・黒雲母を含む。)	良好	内外面とも黄橙色	Ｓ－７
Ｐｏ27	土器溜	甕	①16.6※ ② 7.2△ ⑤ 3.5	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。肩部はなだらか。	外面…口縁部平行沈線後一部ナデ消し。 肩部平行沈線が施される。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下、風化のため調整不明。	やや粗（2㎜大の石英を含む。)	不良	内外共黄橙色	Ｓ－２
Ｐｏ28	土器溜	底部	② 3.7△ ④ 5.2	平底を呈す底部。器壁は薄い。	外面…縦方向ハケ目。 内面…胴部下半上方向ケズリ。底部指頭圧痕残る。	密（1～2㎜の石英・砂粒を含む。)	良好	内外面共ににぶい黄橙色	外面黒斑あり Ｏ－２
Ｐｏ29	土器溜	低脚杯	①13.2※ ② 6.7 ④ 7.2※	杯部は深く椀状を呈し、脚部は太く短いラッパ状を呈す。	外面…風化のため調整不明。ナデか。 内面…杯部丁寧なヨコナデ。 脚部指頭圧痕残る。	密（少量の砂粒を含む。)	やや粗	内外面共、明黄褐色	Ｙ－１
Ｐｏ30	土器溜	低脚杯	①13.2※ ② 5.45 ④ 5.8	やや深めの体部に、「ハ」字状に開くやや高めの脚がつく。	外面…ヨコナデ。 内面…風化のため調整不明。ナデか。	密	良好	内外面共ににぶい黄橙色	ＦＹ－１
Ｐｏ31	土器溜	鉢	② 6.9 ④ 5.8※	深く、内湾気味に開く体部に、平底をもつ。端部は丸い。	外面…ヨコナデ。 内面…ケズリ後ナデ。底部指頭圧痕残る。	密（1～3㎜の石英・砂粒を多く含む。)	良好	内外面共ににぶい橙色	外面黒斑有 Ｏ－１

挿表８　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(2)

CS I 03

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	埋土上層	壺	①19.6※ ②10.7△ ⑤ 3.7	外反気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸い。下端は外方へ突出し、頸部へ至る。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁から頸部、ヨコナデ。 頸部指頭圧痕残る。 頸部以下右方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面共、浅黄橙色	N－8
Po2	埋土上層	甕	①13.6※ ②13.0△ ⑤ 2.7	外反気味に立ち上がる複合口縁をもつ。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は外方へ突出し、胴部は球形を呈するものと思われる。	外面…口縁～頸部、ヨコナデ。肩部に平行沈線。胴部、細かいハケ目。 内面…口縁～頸部、ヨコナデ。肩部以下右方向ていねいなケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	内面…浅黄橙色 外面…淡黄色～橙色	外面スス付着 N－9
Po3	埋土上層	甕	①15.2※ ② 5.5△ ⑤ 3.1	外反気味に立ち上がる複合口縁をもつ。端部は丸く、口縁部下端は鈍く外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗（1㎜大の砂粒を含む。）	良	内外面共、浅黄橙色	N－6
Po4	埋土下層	甕	①16.6※ ② 4.2△ ⑤ 3.3	外反気味に立ち上がる複合口縁をもつ。端部は押えられ、外方へ折り曲げられている。口縁部下端は鈍く、外方へ突出。	内外面ともにヨコナデ。	密	良好	内外面共、淡黄色	内外面に黒斑有 外面スス付着 N－1
Po5	埋土下層	甕	①13.4※ ② 5.0△ ⑤ 2.5	外反気味に立ち上がる複合口縁を有する甕。端部は丸く、口縁部下端は鈍く、外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（わずかに砂粒を含む。）	良好	内外面共、にぶい橙色。	胴部外面スス付着 N－4
Po6	埋土上層	甕	①14.8※ ② 3.8△ ⑤ 2.7	外反気味に立ち上がる複合口縁をもつ甕。端部は丸く押さえられている。口縁部下端は鈍く外方へ突出。	内外面共にヨコナデ。	密（ごくわずかに砂粒を含む。）	良好	内面…淡黄色 外面…にぶい黄橙色	口縁部内面黒斑有 N－2
Po7	埋土上層	甕	①14.0※ ② 3.8△ ⑤ 2.8	外反気味に立ち上がる複合口縁を有する甕。端部は平坦で、口縁部下端は鋭く、外方へ突出する。	内外面共、ヨコナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面共、橙色	N－3
Po8	埋土下層	高杯	①22.8※ ② 4.0△	高杯杯部片。端部はやや外反し、丸くおさえてある。	外面…ハケ目の後、縦方向ミガキ。 内面…縦方向ミガキ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内面…灰黄褐色 外面…橙色	N－10
Po9	埋土上層	小型丸底壺	① 6.8※ ② 5.8△ ④ 1.4	やや外反気味に立ち上がる複合口縁をもつ小型丸底壺。端部は丸く、口縁下端は外方へ突出するが、丸味をもち、頸部に至る。 胴部は扁球形を呈し、最大径を中央部にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下横方向ミガキ。底部付近横方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部、ミガキ。 頸部以下、横方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面共、浅黄橙色	スス付着 N－7

CS I 04・08

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	床面	壺	①17.4※ ② 5.2△ ⑤ 2.2	口縁部は外反気味に内傾する複合口縁状を呈す。端部は内傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密(0.5～1㎜大の砂粒を含む。)	良好	内外面共浅黄橙色	S－26
Po2	床面	甕	①16.6 ②23.0 ③20.0 ④ 3.4 ⑤ 2.8	口縁部は、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は倒卵形を呈し、胴部最大径を中位よりやや上にもつ。底部はわずかに平底を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部肩部縦方向ハケ目後横方向ハケ目が施され、後貝殻腹縁による刺突文が施される。 中位以下縦～斜方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部屈曲部ヨコナデ。 以下右方向ケズリ。胴部下半上方向ケズリ。底部指頭圧痕。	密	良好	内外面共橙色	胴部外面スス付着 S－23
Po3	床面	甕	①14.8※ ②22.5△ ③ 2.9	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部はわずかに平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は倒卵形を呈し、最大径を中位にもつ。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部横方向後縦方向ハケ目。 中位以下縦方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下右方向ケズリ。 中位以下斜～上方向ケズリ。 底部付近指頭圧痕残る。	密（1㎜前後の砂粒を多く含む。）	良好	外面…橙色～浅黄橙色 内面…明黄褐色～黒褐色	外面全般スス付着 S－30
Po4	床面	甕	①16.8 ②24.4 ③22.0 ⑤ 3.2	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は内傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は、肩部があまり張らず、倒卵形を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部肩部横方向ハケ目。以下縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部右方向ケズリ。	密（1㎜前後の石英を含む。）	やや不良	外面…にぶい橙色 内面…にぶい黄橙色	内外面共スス付着 S－32
Po5	P4内	甕	①15.4 ②21.1 ③17.3 ⑤ 3.0	口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸みを帯び口縁部下端は鋭く外方へ突出する。胴部は倒卵形を呈し、底部はわずかに平底をもつ。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部櫛描き波状文。 肩部以下ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。肩部以下右斜め上方向ケズリ後ナデ。 底部指頭圧痕有。	密（2～3㎜大の砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面共にぶい橙色	胴部外面スス付着 N－50
Po6	床面	甕	①15.8 ②12.3△ ⑤ 3.2	口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は押さえられ、下端は鈍く外方へ突出する。なだらかな肩部につづく。	外面…ナデ。肩部かすかにハケ目の痕。 内面…口縁部～頸部ナデ。肩部以下ケズリ。	密(0.5㎜大の砂粒を含む。)	やや粗	内外面共橙色	N－29
Po7	床面	甕	①16.0※ ② 6.3△ ⑤ 3.8	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 以下右方向ケズリ。	やや密	良好	内外面共浅黄橙色	外面スス付着 S－25
Po8	床面	甕	①17.8※ ② 6.8△ ⑤ 3.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は軽い平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面共浅黄橙色	外面スス付着 S－24

挿表 9　南谷大山遺跡出土遺物観察表（3）

Po9	埋土上層	甕	①14.0※ ②5.0△ ⑤3.6	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は外方へ折れ、外傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密（微砂含む。）	良好	外面…褐灰色 内面…にぶい褐色	N－26
Po10	埋土上層	甕	①16.0※ ②4.8△ ⑤3.2	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出し、丸味をもって頸部へ至る。	外面…口縁部ヨコナデ。口縁部下端付近沈線が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（微砂含む。）	良好	内外面共にぶい黄橙色	N－21
Po11	埋土上層	甕	①16.6※ ②4.4△ ⑤3.3	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は外反し、丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面共浅黄橙色	N－18
Po12	P2内	甕	①16.6※ ②6.0△ ⑤3.4	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗（微砂多く含む。）	やや不良	内外面とも淡黄色	口縁部外面スス付着 N－22
Po13	埋土下層	甕	②4.2△ ④16.8※ ⑤3.8	外反気味に外傾する複合口縁を有する。端部は内側に肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は外方へ突出する。	内外面共ヨコナデ。	密	良好	内外面共橙色	口縁部内面に黒斑 N－43
Po14	埋土上層	甕	①16.2※ ②5.3△ ⑤2.6	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部はわずかに平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出し、丸味をもって頸部へいたる。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。以下右方向ケズリ。	密(0.5㎜以下の砂粒を多く含む。)	良好	内外面共灰褐色	S－27
Po15	埋土上層	甕	①16.0※ ②5.5△ ⑤3.6	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面とも風化著しい。ナデか。	密	やや不良	内外面共浅黄橙色	口縁部外面スス付着 N－19
Po16	埋土上層	甕	①16.6※ ②5.1△ ⑤3.2	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く引き出される。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面共橙色	黒斑有 N－25
Po17	埋土上層	甕	①15.4※ ②4.0△ ⑤3.2	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く引き出され下垂する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共浅黄橙色	N－20
Po18	埋土上層	甕	①17.0※ ②4.5△ ⑤3.2	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部は鋭く突出する。	外面…口縁部工具によるヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面共淡黄褐色	外面スス付着 N－17
Po19	埋土上層	甕	①16.0※ ②4.2△ ⑤2.6	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共橙色	N－24
Po20	埋土上層	甕	①16.6※ ②5.7△ ⑤4.0	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は押さえられており、口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部平行沈線後一部ナデ消し。頸部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密(0.5～1㎜大の砂粒を含む。)	良好	内面…橙色 外面…にぶい橙色	口縁部外面黒斑有 N－32
Po21	床面	甕	①15.6※ ②5.4△ ⑤3.5	口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は押さえられており、口縁部下端は下垂する。	外面…口縁、櫛描き平行沈線。頸部、ヨコナデ。 内面…口縁、ミガキ。頸部、左方向のケズリ。	密（微砂粒を多く含む。）	良好	内外面共灰黄褐色	内面スス付着 N－34
Po22	床面	甕	①16.2※ ②5.5△ ⑤3.2	口縁部はやや外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸く、口縁部下端はわずかに外方へ突出する。	外面…口縁部、櫛描き平行沈線の痕がかすかに残る。頸部、ナデ。 内面…口縁部～頸部ミガキ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良	内外面共明橙色	外面スス付着 N－31
Po23	埋土上層	甕	①16.2※ ②4.6△ ⑤4.3	口縁部はわずかに外反して立ち上がる複合口縁。端部は押さえられ、少し外方へ引き出されている。口縁部下端はやや下垂する。	外面…口縁部波状文後一部ナデ消し。 内面…口縁部工具によるナデか？下端に粘土つなぎ有。	密(0.5㎜大の砂粒を含む。)	良好	内外面共浅黄橙色	N－33
Po24	貼床内	甕	①13.4※ ②3.1△	やや外傾して立ち上がる複合口縁か。端部は平坦面をもつ。	外面…平行沈線後一部ナデ消し。 内面…上半波状文が施される。	密	良好	内外面共黄橙色	外面スス付着 N－53
Po25	埋土上層	甕	①15.6※ ②4.4△ ⑤3.2	口縁部は厚手で、外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はごくわずかに下垂する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部工具によるナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面共にぶい褐灰色	口縁部内外面黒斑有 N－27
Po26	埋土上層	甕	①14.6※ ②3.7△ ⑤2.3	口縁部は外傾気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸く、口縁部下端は鈍く屈曲。	外面…工具によるナデ。 内面…口縁ナデ。頸部左方向ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	内面…にぶい橙色 外面…にぶい赤橙色	N－30
Po27	埋土下層	甕	①15.8※ ②8.8△ ⑤3.5	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸味をもって屈曲する。肩部はあまり張らない。	外面…口縁部平行沈線後全面ナデ消し。胴部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面共橙色	N－28
Po28	床面	甕	①10.6※ ②3.4△ ⑤2.5	口縁部は短く外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲し、わずかに下垂する。	外面…口縁部横方向ミガキ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面共橙色	N－23
Po29	埋土上層	底部	②5.0△ ④15.6※	平底の底部を有する。	外面…ミガキ。 内面…上方向へのケズリ。	やや粗（2～3㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	内外面共にぶい橙色	外面スス付着 N－37
Po30	埋土上層	底部	②1.7△ ④2.4	平底の底部を有する。	外面…胴部、ミガキ。底部、ナデ。 内面…斜右上方へのケズリ。粘土つなぎ有。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面共にぶい橙色	N－38
Po31	床面	高杯	①20.4※ ②6.1△	大きく椀状を呈す高杯杯部。端部は丸い。	外面…上半縦方向ハケ目後ヨコナデ。下半部平行沈線が施される。 内面…ヨコナデ。	密（2㎜大の石英を含む。）	良好	内外面共黄橙色	S－31
Po32	埋土上層	高杯	①16.8※ ②4.5△	深い椀状を呈す高杯杯部と思われる。	外面…ミガキ。 内面…ヨコナデ。	密	良好	内面…浅黄橙色 外面…褐灰色	外面黒斑有 N－36
Po33	貼床内	高杯	①15.1※ ②5.1△	深い椀状を呈する高杯杯部と思われる。 端部は肥厚し、丸い。	外面…ヨコナデ。 内面…端部付近ミガキ。以下ケズリ後ヨコナデ。	密（1㎜大の長石含む。）	良好	内外面とも橙色	外面スス付着 Po31と同一個体か。 N－52

挿表10　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(4)

Po34	埋土上層	高杯	② 7.7△	杯上半を欠く。底部は丸味をもつ。筒部は直線的にわずかに開く。	外面…杯部、風化著しく不明。ナデか？ 筒部、かすかにハケ目の痕。風化著しい。 内面…風化著しく不明。ナデか？ 筒部、シボリ目残る。	密	やや不良	内外面共橙色	N－46
Po35	埋土上層	鼓形器台	② 5.0△ ④18.6※	大きく「ハ」字状に開く、鼓形器台脚台部。	内外面共にナデ。	密（微砂粒を含む。）	良	内外面共にぶい橙色	N－48
Po36	埋土下層	鼓形器台	② 3.2△ ④18.4※	大きく「ハ」字状に開く、鼓形器台脚台部。	外面…ヨコナデ。 内面…上半、ケズリ。 下半、ヨコナデ。	密	良好	内外面共淡黄色	N－44
Po37	埋土上層	鼓形器台	② 3.6△ ④14.2※	大きく「ハ」字状に開く、鼓形器台脚台部。 端部は内傾する面をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…上半部、左方向ケズリ。 下半部、ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む。）	良好	内外面共浅黄橙色	S－29
Po38	埋土上層	直口壺	①10.4※ ② 6.2△ ⑤ 5.0	やや外反気味に立ち上がる直口壺。口縁端部は丸く、下端は外方へ突出している。	内外面共に風化著しく不明。 ナデか？	密	不良	内外面共淡黄色	N－49
Po39	床面	底脚杯	② 6.1△ ④ 5.6※	やや深い杯部をもつ。端部を欠く。脚部は小さく低い。	外面…杯部縦方向ミガキが認められる。 脚部ヨコナデ。 内面…ナデか。風化著しい。	やや粗（微砂粒を多く含む。）	良	内外面共橙色	N－47
Po40	埋土上層	小型丸底壺	② 4.5△ ④ 9.8※	扁球形を呈す小型丸底壺胴部。	外面…肩部櫛状工具による刺突文。以下横方向ハケ目。 内面…横方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内面…橙色 外面…浅黄橙色	外面スス付着 N－40
Po41	床面	小型丸底壺	② 4.6△ ④11.2※	扁球形を呈す小型丸底壺胴部。	外面…ヨコナデ。肩部に波状文が施される。 内面…頸部ナデ。肩部以下右方向ケズリ。	やや粗（2～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面共にぶい橙色	N－39
Po42	埋土上層	擂鉢	①21.7※ ② 5.3△	直立する口縁を有する備前焼の擂鉢。	外面…回転ナデ。口縁部に2条の凹線を有する。 内面…回転ナデ。体部に縦方向の摺目。	密	良好	内面…明赤褐色 外面…橙色	N－42
Po43	埋土上層	土玉	径 2.6 穴径 0.6 重さ13.8g	ほぼ球形を呈す。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	N－51
Po44	床面	土玉	径 3.3 穴径 0.9 重さ29.4g	ほぼ球形を呈す。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	やや粗（砂粒を多く含む。）	良好	にぶい黄橙色	N－54
Po45	埋土上層	土錘	長 3.9 巾 0.9 穴径 0.25 重さ 2.4g	長紡錘形を呈し、断面は円形。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	N－55
Po46	埋土上層	土錘	長 4.5 巾 0.8 穴径 0.25 重さ 2.7g	長紡錘形を呈し、断面は円形。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	N－56
Po47	埋土上層	土錘	長 3.3 巾 1.0 穴径 0.3 重さ 2.9g	長紡錘形を呈し、断面は円形。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。風化著しい。	粗	やや不良	褐色	N－59
Po48	埋土上層	土錘	長 2.8△ 巾 1.0 穴径 0.3 重さ 1.9g	長紡錘形を呈し、断面は円形。両端部を欠く。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	やや不良	橙色	N－57
Po49	埋土上層	土錘	長 2.3△ 巾 0.8 穴径 0.2 重さ 1.3g	長紡錘形を呈し、断面は円形。端部を欠く。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	暗橙色	N－60
Po50	埋土上層	土錘	長 2.4△ 巾 1.0 穴径 0.2 重さ 1.7g	長紡錘形を呈し、断面は円形。両端を欠く。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	やや粗（砂粒を含む。）	良好	橙色	N－58
Po51	埋土下層	甕	①16.2※ ② 5.6△ ⑤ 3.2	口縁部は厚手で、外傾する複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…口縁部平行沈線が施される。 内面…口縁部横方向ミガキ。 頸部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	N－81
Po52	床面	甕	② 3.9△	複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。	外面…口縁部波条文が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	粗（2～3㎜大の長石を含む。）	良好	内外面とも淡黄色	口縁部外面スス付着 N－82
Po53	P22内	底部	② 1.8△ ④ 5.4※	平底を呈す底部。	外面…縦方向ハケ目。 内面…上方向ケズリ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良好	外面…灰黄褐色 内面…にぶい黄橙色	外面スス付着 N－85
Po54	P22内	底部	② 1.5△ ④ 4.2※	平底を呈す底部。	外面…縦方向ハケ目。 内面…上方向ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	外面…明黄褐色 内面…にぶい黄橙色	外面スス付着 N－84
Po55	床面	底部	② 1.1△ ④ 3.2※	平底を呈す底部。	外面…ナデ。 内面…ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	N－83
Po56	床面	土玉	径 3.2 穴径 0.7 重さ25.6g	ややいびつな球形。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	にぶい褐色	外面黒斑有 N－86
Po57	床面	土玉	径 3.4 穴径 0.6 重さ32.8g	ややいびつな球形。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	外面に黒斑有 N－87

挿表11　南谷大山遺跡出土遺物観察表（5）

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Ｐｏ１	床面	壺	①23.8 ②22.0△ ⑤ 2.8	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は稜をなし、外方へ突出する。頸部は長く肉厚である。肩はあまり張らず、丸い胴部へとつづく。	外面…口縁～頸部ナデ。 胴部、波状文及び２条の沈線。 不規則なハケ目。 内面…頸部、軽く指押さえ。 胴部上半ケズリ後右方向ナデ。 下半左方向ナデ。	密	良	内面…淡黄色～黒褐色 外面…淡黄色～黄灰色	Ｓ－65
Ｐｏ２	埋土上層	甕	①16.2※ ② 4.8 ⑤ 3.2	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がる複合口縁。端部は少し丸みを帯び、わずかに平坦面をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。 頸部ケズリ。	密（１㎜前後の石英・雲母を含む。）	良好	内外面共橙色	口縁部下端スス付着 Ｓ－44
Ｐｏ３	埋土上層	甕	①16.0※ ② 7.6△ ⑤ 2.5	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。肩部は大きく張る。	外面…口縁部～肩部ヨコナデ。 内面…口縁～頸部ヨコナデ。 以下右方向ヘラケズリ。	密	良好	内外面共浅黄橙色	Ｓ－55
Ｐｏ４	埋土下層	甕	①17.2※ ②16.5△ ③23.1 ⑤ 2.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は押さえられ、平坦面を有する。下端は稜をなし鋭く突出する。肩部は張らずゆるやか。	外面…口縁部ヨコナデ。 頸部ナデ。 胴部櫛描平行沈線。波状文。 内面…口縁端部先端押え。 口縁～頸部ヨコナデ。 胴部、上半右方向ケズリ。 下半左方向ケズリ。	やや粗（１～２㎜の砂粒、５㎜大の礫を含む。）	やや不良	内面…浅黄橙色 外面…にぶい黄橙色	胴部外面、スス多量に付着 Ｓ－69
Ｐｏ５	埋土下層	甕	①16.8※ ② 9.9△ ⑤ 3.2	口縁部はやや外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は内方へ肥厚し、平坦面をもち、凹む。口縁部下端は鋭く外方へ突出し、頸部へとつづく。ゆるやかな肩部をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。肩部縦方向ハケ目、後ヘラ状工具による刺突文。 内面…口縁～頸部ヨコナデ。肩部以下右方向ケズリ。	密（１～２㎜の石英を多く含む。）	良好	内外面共黄橙色	Ｓ－51
Ｐｏ６	埋土上層	甕	①15.8※ ② 6.9△ ⑤ 2.5	口縁部は大きく外反して立ち上がる複合口縁。端部は軽く押さえられ、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。肩部は張らない。	外面…ヨコナデ。口縁部下端付近に２条の沈線が施される。 内面…口縁～頸部ヨコナデ。 以下右方向のケズリ。	密	良	内外面共にぶい橙色	口縁部、肩部外面スス付着 Ｓ－59
Ｐｏ７	床面	甕	①17.4※ ②11.0△ ⑤ 3.0	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸みを帯びており、下端は外方へ突出。肩はあまり張らずゆるやか。	外面…口縁部～頸部ナデ。 肩部、櫛描平行沈線。 内面…口縁部～頸部ナデ。 肩部右方向ヘラケズリ。	やや粗	不良	内外面共明黄褐色～灰黄色	胴部外面スス少量付着 Ｓ－67
Ｐｏ８	埋土上層	甕	①13.6 ② 3.8△ ⑤ 3.2	口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く引き出される。	内外面共にヨコナデ。	密（１㎜大の石英を含む。）	良好	内外面共浅黄橙色	Ｓ－54
Ｐｏ９	埋土上層	甕	①16.8※ ② 5.3△ ⑤ 3.2	口縁部は内傾気味に直立する複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出。	外面…ヨコナデ。口縁部一部斜方向ナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部ケズリ。	密	良好	内面…黒褐色 外面…にぶい黄橙色～黒褐色	Ｓ－47
Ｐｏ10	Ｐ３内	甕	①19.2※ ② 3.5△ ⑤ 2.9	口縁部はやや外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は少し丸みを帯びている。口縁部下端は外方へ突出。頸部へとつづく。	内外面共にヨコナデ。	やや粗（１㎜大の砂粒を多く含む。）	良	内外面共淡黄色～黒褐色	口縁部外面黒斑有 Ｓ－50
Ｐｏ11	埋土上層	甕	①15.2 ② 4.5△ ⑤ 2.6	口縁部はやや外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸く口縁部下端は鋭く外方へ突出している。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。頸部以下右方向のケズリ。	密（１㎜大の石英有。）	良好	内外共浅黄橙色	Ｓ－43
Ｐｏ12	埋土下層	甕	①15.4※ ② 5.5△ ⑤ 2.7	口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は角ばっており、平坦面を有する。口縁部下端は鋭く外方へ突出している。	外面…ヨコナデ。 肩部に波状文。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部右方向のケズリ。	密	良好	内面…淡黄色 外面…淡黄色～黄灰色	口縁部外面黒斑有 Ｓ－49
Ｐｏ13	埋土下層	甕	①17.6※ ② 5.0△ ⑤ 4.0	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は内方へ肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内面…にぶい黄橙色 外面…にぶい黄橙色～黒褐色	口縁部外面黒斑有 Ｓ－53
Ｐｏ14	埋土上層	甕	①15.4※ ② 3.3△ ⑤ 2.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもち凹む。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部波状文が施される。 内面…ヨコナデ。	密（雲母、輝石を含む。）	良好	内面…橙色 外面…橙色～黒褐色	口縁部外面スス付着 Ｓ－60
Ｐｏ15	埋土上層	甕	①15.0※ ② 4.9△ ⑤ 3.0	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。先端は軽く指で押さえられ、角ばっている。口縁部下端は鋭く外方へ突出し、頸部へとつづく。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁～頸部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	やや密	良好	内面…浅黄橙色 外面…浅黄橙色～褐灰色	口縁部外面黒斑有 Ｓ－42
Ｐｏ16	埋土下層	甕	①17.4※ ② 4.3△ ⑤ 3.0	口縁部は外反気味に外傾する複合口縁。端部は少し角ばっており平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面共にヨコナデ。	密（３㎜大の石英を含む。）	良好	内外面共浅黄橙色	Ｓ－46
Ｐｏ17	埋土上層	甕	①15.8※ ② 3.9△ ⑤ 3.1	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	やや密(0.5㎜大の砂粒を多く含む。)	良好	内外面共淡黄色	口縁部外面スス付着 Ｓ－58
Ｐｏ18	埋土上層	甕	①16.0※ ② 4.3△ ⑤ 2.9	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ折れ、平坦面を持つ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（２～７㎜の石英を含む。）	良好	内面…淡黄色～黄灰色 外面…淡黄色	口縁部内面黒斑有 Ｓ－57
Ｐｏ19	埋土下層	甕	①17.2※ ② 4.6△ ⑤ 3.6	口縁部はわずかに外反しながら外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面共ヨコナデ。	密（１～２㎜大の石英を含む。）	良好	内面…浅黄色 外面…浅黄橙色～黒色	外面スス付着 Ｓ－48

挿表12　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(6)

Po20	埋土下層	甕	①14.6※ ② 3.7△ ⑤ 2.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は内方へわずかに肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部ヨコナデ。 一条の沈線が施される。 内面…ヨコナデ。	密（1㎜大の石英有。）	良好	内外面共黄橙色	外面スス付着 S－52
Po21	埋土下層	甕	①16.8※ ② 3.5△ ⑤ 2.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部みだれた波状文後、一部ナデ消し。 内面…口縁部横方向ミガキ。	密（1～2㎜大の石英を多く含む。）	良好	内外面共橙色	口縁部外面スス付着 S－61
Po22	床面	底部	②12.2△	わずかに平底の甕底部。やや肉薄。	外面…縦方向ハケ後、斜方向にハケ。 内面…胴部、斜方向ヘラケズリ。 底部、斜方向ケズリ後、ナデ。 指頭圧痕あり。	密	良	内面…浅黄色～黒褐色 外面…明黄褐色～黒褐色	外面に黒斑有 S－66
Po23	埋土下層	底部	②12.3△ ④ 3.7※	わずかに平底の甕底部。丸みを帯びている。肉薄。	外面…胴部ハケ目。 内面…胴部～底部斜方向ケズリの後指押え。	密（1～2㎜の石英を含む。）	良	内面…黄橙色～黒色 外面…暗赤褐色～黒色	内外面共にスス多量に付着 S－70
Po24	埋土下層	底部	② 9.6△ ④ 5.0	球形を呈す胴部～底部の破片。底部は不明瞭な平底を呈す。	外面…縦～斜方向のハケ目。 内面…風化のため調整不明。	密（4㎜大の礫有り。）	やや不良	内面…浅黄橙色 外面…浅黄橙色～褐色	外面スス付着 S－39
Po25	埋土下層	高杯	①24.4 ② 6.6△	やや深い皿状を呈す高杯杯部。端部付近で大きく外反する。端部は平坦面をもつ。	外面…横方向ミガキ。 内面…端部付近ヨコナデ。 以下縦方向ミガキ。	密	良	内外面共にぶい黄橙色～褐色	外面黒斑有 S－41
Po26	埋土下層	高杯	①22.4※ ② 4.2△	やや深い皿状の高杯杯部。端部は外反している。	内外面共にナデ。	密	良	内外面共にぶい黄橙色	S－71
Po27	床面	高杯	①21.4※ ② 4.0△	やや深い皿状の高杯杯部。端部は外反し、丸みを帯びている。	内外面共にナデ。	密	良	内外面共にぶい黄橙色	S－74
Po28	埋土下層	高杯	①19.6※ ② 5.2△	やや深い皿状の高杯杯部。端部は外反し、平坦面をもつ。	外面…ミガキ。 内面…ナデ。	密	良好	内面…褐灰色 外面…淡黄色～暗灰黄色	S－76
Po29	埋土下層	高杯	①20.0※ ② 4.7△	やや深い皿状の高杯杯部。端部は外反し、丸みを帯びている。	内外面共にナデ。	密	やや不良	内外面共浅黄橙色	S－75
Po30	埋土下層	高杯	①19.6※ ② 5.8△	深い椀状の高杯杯部。端部はやや外反する。	外面…杯口縁ナデ。ハケ目。杯部ナデ。 内面…ミガキか。	密（雲母をたくさん含む。）	良好	内外面共黄橙色	S－72
Po31	床面	高杯	①17.2※ ② 5.5△	深い椀状を呈す高杯杯部。端部は丸い。	外面…ヨコハケ後斜めハケ。 内面…ナデ。	やや粗（3㎜大の石英を含む。）	良好	内外面共黄橙色	外面スス付着 S－64
Po32	埋土下層	高杯	①15.0※ ② 5.7△	深い椀状を呈す高杯杯部。端部は丸い。	内外面共にナデ。	密	やや粗	内外面共黄橙色	S－63
Po33	埋土下層	高杯	② 3.4△ ④10.0※	大きく広がる裾部をもつ高杯脚部。	外面…ミガキ。 内面…ナデ。ハケ目。	密	良好	内外面共橙色	S－68
Po34	埋土下層	器台	①19.2※ ② 3.3△ ⑤ 1.7	短く立ち上がる複合口縁状の口縁部をもつ器台上台部と思われる。端部は丸く、下端部はわずかに下垂する。	外面…口縁部波状文。 内面…ナデ。	密（1～2㎜大の石英を含む。）	やや粗	内外面共黄橙色	S－62
Po35	埋土下層	鼓形器台	①20.2△ ②10.9 ④17.8	上台部は大きく外反して開く。端部は軽く押さえられ平坦面をもつ。稜は突出する。短い筒部が脚台部へつづく。脚台部も外湾気味に開く。	外面…ヨコナデ。上台部に波状文。 内面…上台部先端押え。 左方向ケズリ後ミガキ。 脚台部斜方向ケズリ。ヨコナデ。	密（4㎜大の礫有。）	良好	内面…橙色 外面…黄橙色	外面に黒斑有 S－36
Po36	埋土下層	鼓形器台	①20.8※ ②10.5△	上台部は大きく外反して開く。端部は軽くおさえられ、平坦面をもつ。稜は鋭く突出する。筒部は短い。脚台部は端部を欠くが、内湾気味に開く。	外面…ヨコナデ。 内面…上台部左方向ケズリ後、丁寧なヨコナデ。 脚台部右方向ケズリ。	密（1～3㎜大の石英を含む。）	良好	内面…浅黄色～黄灰色 外面…浅黄色	S－33 S－38
Po37	埋土下層	鼓形器台	①20.2※ ② 5.3△	大きく外反して開く鼓形器台上台部。端部はやや外方へ折れ、平坦面をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…丁寧なヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む。）	良好	内外面共橙色～褐灰色	外面黒斑有 S－35
Po38	埋土下層	鼓形器台	② 6.0△ ④23.6※	大きく「ハ」字状に開く鼓形器台脚台部。端部付近で大きく外反する。端部は平坦面をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…上半部右方向ケズリ。 下半はヨコナデ。	密（2㎜大の石英を含む。）	良好	内外面共にぶい黄橙色～黒褐色	黒斑有 S－34
Po39	埋土下層	小型丸底壺	② 4.4△	扁球形を呈する小型丸底壺。「く」字状に屈曲する頸部が、大きく張る胴部へつづく。	外面…胴部、横方向斜方向のあらいハケ目。 内面…頸部、ナデ。 胴部左方向ケズリ後指ナデ。	密（1㎜大の砂粒有り。）	良	内外面共橙色	S－79
Po40	埋土下層	小型丸底壺	② 5.8△ ③12.8	扁球形を呈する小型丸底壺胴部。	外面…肩部縦方向ハケ目。中位横方向ハケ目。以下斜～縦方向ハケ目。 内面…肩部ナデ。以下左方向ケズリ。	密	良	内外面共橙色	S－40
Po41	埋土下層	小型丸底壺	① 8.2※ ② 2.7△ ⑤ 1.2※	口縁は複合口縁状を呈し、わずかに外傾しながら立ち上がる。	内外面共にナデ。	密	良好	内外面共橙色	S－78
Po42	床面	低脚杯	①12.5 ② 5.3 ④ 5.8※	やや深い椀状の杯部をもつ低脚杯。端部は丸みを帯びている。裾部は大きく広がる。全体的に肉厚。	外面…ハケ目。 内面…杯部ハケ目か。風化のため不明。 脚部ナデ。	密	良	内外面共黄橙色	S－73
Po43	床面	甑	①26.4※ ② 8.7△	円筒形の体部をもつ甑と考えられる。端部は肉厚で、平坦面を有する。体部には焼成後、穴が開けられている。	外面…口縁部、左方向ナデ。 体部、縦方向ハケ目。 内面…口縁端部指押え。斜方向ハケ目。 体部、左方向ケズリ。	やや粗	良好	内外面共橙色	S－77

挿表13　南谷大山遺跡出土遺物観察表（7）

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	床面	壺	①19.6※ ②20.0△ ③25.6※ ⑤ 3.0	口縁部は大きく外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外反し、平坦面を持つ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は球形を呈するものか。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部波状文が施され、以下横～斜方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ。	密（1㎜大の石英・長石を含む。）	やや不良	内外面とも淡黄色	胴部外面スス付着 N－80
Po2	埋土上層	壺	①18.0※ ② 4.4 ⑤ 2.8	口縁部は大きく外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密（1㎜前後の砂粒を含む。）	良好	内外面とも黄橙色	S－93
Po3	埋土下層	甕	①17.8※ ②20.8△ ③22.0※ ⑤ 3.0	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は倒卵形を呈するものと思われ、ほぼ中位に最大径をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。下端部付近に2条の凹線。肩部波条文が施され、中位付近横方向ハケ目。以下縦方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（1㎜以下の砂粒を含む。）	やや不良	内外面とも浅黄橙色	外面スス付着 S－105
Po4	埋土上層	甕	①15.6※ ② 7.7△ ⑤ 2.4	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は球形を呈するものか。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部肩部横方向粗いハケ目後縦方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（1～2㎜大の石英・長石を含む。）	良好	外面…黄橙色 内面…灰黄色	外面スス付着 内面黒斑有 S－103
Po5	埋土上層	甕	①17.4※ ② 4.9△ ⑤ 2.7	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	良好	外面…橙色 内面…橙色～浅黄橙色	外面スス付着 S－94
Po6	埋土上層	甕	①17.4※ ② 5.4△ ⑤ 3.1	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く引き出され、わずかに下垂する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（1㎜以下の砂粒を多く含む。）	良好	内外面とも浅黄橙色	外面スス付着 S－101
Po7	埋土上層	甕	①14.0※ ② 4.9△ ⑤ 2.1	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下指押え後ケズリ。	密	やや不良	内外面とも浅黄色	口縁部外面スス付着 S－107
Po8	埋土上層	甕	①16.4※ ② 5.0△ ⑤ 2.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	外面スス付着 内面黒斑有 S－95
Po9	床面	甕	①16.0※ ② 3.5△ ⑤ 2.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は内方へ肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 口縁部下端付近に沈線。 内面…ヨコナデ。	密（1～3㎜大の石英・長石を含む。）	良好	内外面とも浅黄橙色	外面スス付着 内面黒斑有 S－96
Po10	埋土上層	甕	①16.0※ ② 5.6△ ⑤ 3.0	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…風化著しい。ナデか。	密	やや不良	内外面とも黄橙色	外面スス付着 S－106
Po11	床面	甕	①15.2※ ② 3.5△ ⑤ 2.5	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は外反し、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも黄橙色	口縁部外面スス付着 S－99
Po12	床面	甕	①15.6※ ② 3.8△ ⑤ 2.8	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部ヨコナデ。 口縁部下端付近沈線が施される。 内面…ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	S－102
Po13	埋土下層	甕	①17.0※ ② 4.5△ ⑤ 2.8	口縁部は厚手で、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも黄橙色	口縁部外面黒斑有 一部赤変 S－100
Po14	埋土下層	甕	①18.0※ ② 4.2△ ⑤ 3.6	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…口縁部平行沈線後波状文。 一部ナデ消し。 内面…ヨコナデ。	密（1㎜大の石英・長石含む。）	良好	内外面とも黄橙色	外面スス付着 S－104
Po15	床面	甕	①15.9 ②32.8 ③28.0 ⑤ 2.7	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出し、やや丸味をもって頸部へ至る。胴部は肩部が張り、やや長胴の球形を呈し、底部は丸底となる。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部細かな横方向ハケ目後刺突文が施される。 胴部下半は縦方向ハケ目後ナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部～胴部上半右方向ケズリ。 胴部下半は上方向ケズリ。 底部指頭圧痕が残る。	密	良好	内外面とも淡黄色	S－108
Po16	床面	大型甕	①25.6 ②42.9 ③35.1 ⑤ 5.0	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ突出し、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は倒卵形を呈し、底部は平底を呈す。最大径は中位以上にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部縦方向ハケ目後、横方向ハケ目後、貝殻腹縁による刺突文が施される。 中位付近横～斜方向ハケ目。 以下縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部横方向ミガキ。 肩部横方向ハケ目。 以下縦方向ハケ目。	密	良好	外面…橙色～浅黄橙色 内面…橙色	胴部外面黒斑、スス付着 S－80
Po17	埋土下層	高杯	①22.0※ ② 5.4△	やや深い皿状を呈す高杯杯部。端部は外反し丸い。	外面…ヨコナデ。 内面…ミガキ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	外面黒斑有 S－88
Po18	埋土下層	高杯	①18.0※ ② 4.2△	やや深い皿状を呈す高杯杯部。端部は外反し、平坦面をもつ。	外面…上半ヨコナデ。下半縦方向ミガキ。 内面…縦方向ミガキ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	内面黒斑有 S－89
Po19	埋土上層	高杯	①16.4※ ② 4.7△	やや深い皿状の杯部をもつ高杯。端部は外反し、平坦面をもつ。	外面…上半ヨコナデ。下半部縦方向ハケ目。 内面…ハケ目後縦方向ミガキ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	S－81
Po20	埋土上層	高杯	①18.4※ ② 6.1△	高杯杯部片。やや丸味をもった底部からゆるやかに屈曲し、外傾する口縁部をもつ。端部は丸い。	内外面とも横方向ミガキ。	密	良好	外面…浅黄橙色 内面…灰褐色	内面黒斑有 S－87

挿表14　南谷大山遺跡出土遺物観察表（8）

CS106

Po21	埋土上層	高杯	①14.8※ ② 4.8△	浅い皿状を呈す杯部をもつ高杯と思われる。端部は丸い。	内外面ともミガキ。	密（1㎜以下の砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色～黒褐色	内外面黒斑有 S－84
Po22	床面	高杯	② 8.7△ ④11.3※	高杯脚部片。筒部は直線的に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外面…筒部縦方向ハケ目。 裾部ナデ。 内面…筒部シボリ目をケズリ取る。 裾部ハケ目。	密	良好	内外面とも黄橙色	内面黒斑有 S－86
Po23	床面	鼓形器台	①20.2※ ②10.8 ④17.2※	上台部は複合口縁状を呈し、大きく外反して開き、口縁端部で外反し、平坦面をもつ。筒部は短い。脚台部は上台部に比べ低く、複合口縁状を呈し、大きく開く。端部で大きく開き平坦面をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…上台部～筒部ケズリ後ナデ。 脚台部右方向ケズリ。	密（1～5㎜大の長石を含む。）	良好	内外面とも黄橙色	S－83
Po24	埋土上層	鼓形器台	①21.8※ ② 3.8△	大きく開く鼓形器台上台部。端部で大きく外反肥厚し、平坦面をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…横方向ミガキ。	密	良好	内外面とも褐色	外面黒斑有 S－91
Po25	埋土上層	鼓形器台	①19.4※ ② 3.0△	大きく外反する鼓形器台上台部。端部は肥厚し、平坦面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも黄橙色	内外面スス付着 S－85
Po26	床面	鼓形器台	② 5.3△ ④11.0※	大きく「ハ」字状に開く、鼓形器台脚台部。端部は平坦面をもち、凹線が入る。	外面…ヨコナデ。 内面…上半右方向ケズリ。 下半ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒含む。）	良好	内外面とも灰白色～にぶい黄橙色	内面スス付着 S－82
Po27	埋土下層	鼓形器台	② 3.8△	鼓形器台の筒部破片。上台部・脚台部とも複合口縁状を呈し、筒部は短い。	外面…ナデ。 内面…上台部ナデ。脚台部右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも暗赤褐色	内外面黒斑有 S－90
Po28	床面	低脚杯	①15.0※ ② 6.7△ ④ 6.2※	杯部は椀状に大きく、端部は丸い。脚部は太く短く、裾部が大きく広がる。	外面…ヨコナデ。 内面…杯部丁寧なヨコナデ。	密（1～2㎜大の石英・長石を含む。）	良好	内外面とも淡黄色	S－92
Po29	床面	甑	②18.0△ ③25.6	円筒状の体部をもつ甑と考えられる。上半部に把手を差し込むための穴をもつ。	外面…縦方向ハケ目。 内面…左方向ケズリ。	やや粗（2～3㎜大の長石含む。）	良好	外面…浅黄橙色 内面…浅黄橙色～褐灰色	外面黒斑有 S－192

CS107

遺物番号	出土地点	器種 種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	床面	壺	①14.0※ ②10.5△ ⑤ 2.4	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がる複合口縁。端部はわずかにおさえられている。下端は鈍く突出。肩部はあまり張らない。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部縦方向ハケ目後横方向ハケ目。 以下斜方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 胴部肩部以下右方向ケズリ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面とも淡橙色	外面口縁部に黒斑 N－70
Po2	床面	甕	①12.6※ ② 6.4△ ⑤ 2.5	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がる複合口縁。端部は丸みを帯びており、口縁部下端は鈍く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁～頸部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも橙色	N－71
Po3	埋土上層	甕	①17.4※ ② 3.3△ ⑤ 2.9	口縁部外傾気味に立ち上がる複合口縁。端部はおさえられており、下端は鈍く外方へ突出。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも淡黄色	口縁部外面スス付着 N－63
Po4	埋土上層	甕	①17.2※ ② 3.2△ ⑤ 2.6	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ引き出されている。口縁部下端はわずかに突出する。	内外面ともにヨコナデ。	密	良	外面…灰黄色 内面…淡黄色	口縁部外面スス付着 N－64
Po5	床面	甕	①16.0※ ② 4.6△ ⑤ 3.0	口縁部は外反しながら外傾して立ち上がる複合口縁。端部はおさえられている。口縁部下端は鋭く外方へ突出。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒をわずかに含む。）	良好	外面…灰黄色 内面…淡黄色	N－62
Po6	埋土上層	甕	①14.4※ ② 7.2△ ⑤ 3.4	口縁部は外傾気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸みを帯びており、口縁部下端は外方へ突出。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	外面…灰黄褐色 内面…黒褐色	N－65
Po7	埋土上層	甕	①12.0※ ② 2.9△ ⑤ 2.3	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部はおさえられており、口縁部下端は鋭く突出。	内外面ともにヨコナデ。	密	良好	外面…淡黄色 内面…褐色	口縁部外面スス付着 N－61
Po8	埋土上層	甕	①17.6※ ② 4.1△	外傾して立ち上がる甕口縁部と思われる。端部は平坦面をもつ。	内外面ともにヨコナデ。	密	良好	外面…明灰褐色 内面…褐色	口縁部外面黒斑 N－66
Po9	埋土上層	甕	②17.1△	球形を呈す甕胴部。丸底を呈す。	外面…頸部ヨコナデ。 肩部～胴部横方向のハケ目。 胴部～底部風化著しく不明。ナデか。 内面…頸部ナデ。 胴部～底部右方向ケズリ後ナデ。 底部付近指頭圧痕残る。	やや粗（砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面共橙色	底部外面スス付着 N－72
Po10	埋土上層	高杯	①16.2 ②11.0 ④ 9.8	杯部は浅い皿状を呈す。端部は丸い。脚部は「ハ」字状に開き、裾部で大きく広がる。	外面…杯部、風化著しく不明。ナデか。 脚部、かすかにハケ目のあとが見られる。ケズリ後ナデ。 内面…杯部、ナデ。 筒部、シボリ目をケズリ取る。 裾部、斜方向ハケ目。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	やや不良	内外面共橙色	N－76

挿表15　南谷大山遺跡出土遺物観察表（9）

CS I 07

Po11	埋土上層	高杯	①17.0 ②10.0 ④10.0	浅い皿状の杯部を有する高杯。端部はわずかに外反している。杯部中央に孔を有する。杯部と筒部を接合するためのものと思われる。筒部は「ハ」字状に開き、裾部は大きく広がる。	外面…杯部、ナデ。 脚部、ヨコナデ。凹線あり。 内面…杯部、ナデ。 筒部、シボリ目残る。 裾部。、斜方向ハケ目。	密	やや不良	内外面共橙色	裾部内面ヘラ記号あり スス付着 N－79
Po12	P3内	高杯	①21.6※ ② 4.6△	やや深い皿状の高杯杯部。端部は平坦面をもつ。	外面…横方向ナデ。ハケ目。 内面…横方向ハケ目の後ミガキ。	密	良好	外面…浅黄橙色 内面…にぶい黄橙色	N－73
Po13	埋土上層	高杯	② 1.7△ ④15.4※	大きく広がる高杯裾部。	外面…ナデ。 内面…風化著しい。ナデか。	粗	不良	内外面とも淡黄色	N－75
Po14	埋土上層	高杯	② 2.0△ ④12.8※	大きく広がる高杯の裾部。	外面…縦方向ハケ目。 内面…横方向ハケ目。	密（わずかに砂粒を含む。）	良	内外面共淡黄色	N－74
Po15	床面	低脚杯	①17.0 ② 7.2 ④ 7.0	椀状の杯部をもつ低脚杯。脚部は短く肉厚。裾部で広がる。	外面…風化著しく不明。ナデか。 かすかに斜方向ハケ目の痕。 内面…ナデ。	密（砂粒をわずかに含む。）	やや不良	内外面共淡黄色	N－78
Po16	P5内	小型高杯形器台	① 5.2※ ② 9.0△	わずかに湾曲する底部から短く外傾する口縁部をもつ。杯部中央に焼成前に作られた孔を有する。筒部は太く中空。「ハ」字状に開き裾部へとつづく。	外面…杯部、ナデ。 脚部、縦方向ハケ目。 内面…杯部、ヨコナデ。 脚部、ケズリ。	密	良	内外面共淡黄色	N－77

CS I 09

遺物番号	出土地点	器種	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	P1内	甕	①16.9※ ②16.9△ ⑤ 3.6	口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸く、口縁部下端は鋭く外方へ突出。肩部はあまり張らない。	外面…口縁～頸部ナデ。 肩部、櫛描き波状文。 胴部、不規則なハケ目。 内面…口縁～頸部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ後ナデ。	やや粗（微砂粒を含む。）	良	内外面共黄褐色	口縁～胴部内面に黒斑 内外面共に赤色塗彩 N－142
Po2	床面	甕	①17.6※ ② 5.2△ ⑤ 3.7	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がる複合口縁。端部は丸く下端は外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	良好	内面…明黄褐色 外面…灰黄褐色	N－141
Po3	埋土下層	甕	①18.8※ ② 4.8△ ⑤ 3.8	口縁部は外傾しながら立ち上がる複合口縁。端部は丸く、口縁部下端は鋭く突出。	内外面ともにヨコナデ。	密	良	内面…橙色 外面…灰褐色	N－140

CS I 10

遺物番号	出土地点	器種	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	P1内	甕	①15.6 ②23.0 ③20.6 ⑤ 2.6	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出。肩部はわずかに張り、胴部は寸づまりの倒卵形を呈する。最大径は胴部上半。胴部に焼成後開けられた透しを有する。底部は尖り気味の小さな平底を呈する。	外面…口縁～頸部ヨコナデ。 肩部縦～斜方向ハケ目。 中位付近横方向ハケ目。 下半は縦方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ナデ。 肩部～底部ケズリ後ナデ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面共橙色	スス付着 N－147
Po2	埋土下層	甕	①15.8※ ② 4.5△ ⑤ 3.4	口縁部は外傾しながら立ち上がる複合口縁を有する。端部は平坦面をなし、下端は外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面共橙色	口縁部外面下端スス付着 N－143
Po3	埋土下層	甕	①15.4※ ② 4.2△ ⑤ 3.2	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもち、口縁部下端は外方へ突出する。	内外面共ヨコナデ。	密	良好	内外面共橙色	N－145
Po4	埋土下層	甕	①15.6※ ② 3.0△ ⑤ 2.4	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部は平坦面をもち、下端は鋭く突出する。	内外面ともにヨコナデ。	密（微砂粒を含む。）	良好	内外面共灰黄褐色	口縁部外面にスス付着 N－144
Po5	床面	鼓形器台	①17.8※ ② 5.3△	大きく開く鼓形器台上台部。端部は外反し、丸い。下端は稜をなし、鈍く外方へ突出。	外面…ヨコナデ。 内面…左方向ケズリ後ナデ。	密	良好	内外面共橙色	N－146

挿表16　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (10)

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	埋土下層	壺	①19.0※ ② 6.3△ ⑤ 3.0	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもち、凹線が入る。口縁部下端は下垂する。	外面…口縁部12条の平行沈線。 頸部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部横方向ミガキ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも暗灰色	S－114
Po2	埋土下層	壺	①14.0※ ② 5.3△ ⑤ 2.8	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外傾する平坦面をもち、凹線が入る。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…口縁部平行沈線。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	内外面とも橙色	外面スス付着 S－122
Po3	床面	甕	①17.0※ ② 8.0△ ⑤ 3.2	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は下垂する。肩部はなだらか。	外面…口縁部波状文後一部ナデ消し。 肩部上に波状文、下に平行沈線が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の石英を含む。）	やや不良	内外面とも浅黄橙色	口縁部外面スス付着 S－117
Po4	床面	甕	①16.4※ ② 6.0△ ⑤ 2.5	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。肩部はあまり張らない。	外面…口縁部波状文後一部ナデ消し。 肩部にも波状文が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の石英を含む。）	良好	外面…黄橙色 内面…橙色	口縁部外面スス付着 S－111
Po5	床面	甕	①16.5 ② 6.0△ ⑤ 3.7	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。肩部はあまり張らない。	外面…口縁部9条の波状文。 肩部波状文。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗（1㎜大の石英を多く含む。）	良好	内外面とも黄橙色	口縁部外面黒斑有 スス付着 S－109
Po6	床面	甕	①16.4※ ② 7.5△ ⑤ 3.6	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は短く突出する。肩部が張る。	外面…口縁部16条の平行沈線一部みだれる。肩部波状文後、その下に平行沈線が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部横方向ミガキ。 以下右方向ケズリ。	密（1㎜大の石英を含む。）	良好	内外面とも明黄褐色	外面スス付着 S－110
Po7	埋土下層	甕	①15.0※ ② 7.2△ ⑤ 2.5	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は外反し、丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部9条の平行沈線。一部ナデ消し。肩部貝殻腹縁による押引沈線文。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	粗（1～3㎜大の石英・長石他含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色～黒褐色	口縁部外面スス付着 胴部外面黒斑有 S－123
Po8	埋土下層	甕	①17.2※ ② 4.8△ ⑤ 3.4	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は下垂する。	外面…口縁部平行沈線後一部ナデ消し。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1㎜大の石英を含む。）	良好	外面…浅黄橙色 内面…橙色	外面スス付着 S－119
Po9	床面	甕	①19.6※ ②30.5 ③22.0 ④ 5.7※ ⑤ 4.1	口縁部は大きく外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く突出する。胴部はなだらかな肩部をもつ倒卵形を呈し、底部はしっかりとした平底をもつ。胴部最大径はほぼ中位以上にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部押引沈線文、波状文が施される。 胴部下半は縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。 肩部以下上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の石英を多く含む。）	やや不良	外面…にぶい赤褐色～浅黄橙色 内面…にぶい橙色	外面スス付着 S－130
Po10	埋土下層	甕	①18.0※ ② 8.2△ ⑤ 2.9	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 頸部～肩部貝殻腹縁による波状文が施され、一部ナデ消される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1～2㎜大の石英・長石を含む。）	良好	内外面とも浅黄橙色	S－118
Po11	埋土下層	甕	①10.8※ ② 3.7△ ⑤ 2.2	小型甕。口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。頸部に焼成前の孔があけられる。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	S－116
Po12	埋土下層	甕	①17.6※ ② 4.1△ ⑤ 3.3	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面スス付着 S－120
Po13	埋土下層	甕	①16.0※ ② 5.1△ ⑤ 3.1	口縁部は肉厚で外反して立ち上がる複合口縁。端部は鈍く屈曲する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	密（石英・長石・雲母を多く含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面スス付着 S－113
Po14	埋土下層	甕	①15.6※ ② 4.6△ ⑤ 3.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は引き出される。口縁部下端は鈍く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（雲母・石英を多く含む。）	やや不良	内外面とも灰白色	外面スス付着 S－121
Po15	埋土下層	甕	①15.4※ ② 8.3△ ⑤ 2.0	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸味をもって屈曲する。胴部は小さく球形を呈すものと思われる。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。 頸部屈曲部以下横方向ケズリ。	密（1～3㎜大の石英・長石を含む。）	良好	内外面とも赤褐色	外面スス付着 S－115
Po16	埋土上層	甕	①13.6※ ② 5.3△ ⑤ 2.5	口縁部は外傾する複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。	外面…風化しているがヨコナデと思われる。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（1～3㎜大の石英・長石含む。）	不良	内外面とも黄橙色	S－124
Po17	床面	甕	①14.0※ ② 5.0△ ⑤ 1.2	口縁部は「く」字状口縁をもち、端部は上方へ引き出され、外反気味に立つ。端部は丸い。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部2条の凹線が施される。 肩部縦方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下左方向ケズリ。	密（1～3㎜大の石英・長石を含む。）	良好	内外面とも黄橙色	口縁部外面スス付着 S－112
Po18	埋土下層	甕	①14.4※ ② 3.0 ⑤ 1.6	端部が肥厚した「く」字状口縁。下端はわずかに下垂している。	外面…ナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部左方向ケズリ。	密(0.5～1㎜の砂粒を含む。)	良	内外面とも橙色	口縁部外面にスス少量付着 S－125
Po19	埋土下層	底部	② 3.0△ ④ 4.0※	平底の底部。	外面…ナデ。 内面…不規則なケズリ。	密	良好	内面…灰白色 外面…にぶい橙色～黒褐色	外面に黒斑、内面にスス付着 S－126
Po20	埋土下層	底部	② 3.0△ ④ 3.0※	平底の底部。	外面…ミガキ。 内面…指押え。	密（1㎜大の石英を含む。）	良好	内外面共褐色	S－127
Po21	埋土下層	蓋	② 3.3△ ④15.2※	直線的に広がる蓋体部。	外面…ナデ。 内面…ケズリ後ナデ。	密	良	内外面共褐色	S－128
Po22	埋土下層	脚	② 2.2△ ④13.2※	直線的に広がる裾部をもつ脚。焼成前からつけられた円形と思われる透しを有する。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面共橙色	S－129
Po23	埋土下層	無頸壺	①11.0※ ② 5.2△	内傾気味の胴部をもつ無頸壺。端部は丸い。	外面…ナデ。 内面…端部ナデ。以下左斜上方ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	N－116

挿表17　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (11)

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	埋土上層	壺	①15.0※ ② 5.9△ ⑤ 3.6	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部平行沈線後波状文。 一部ナデ消し。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（2㎜大の石英を多く含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	S－136
Po2	床面	壺	①15.4※ ② 7.0△ ⑤ 2.6	口縁部はやや内傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ。	密	良好	内外面とも黄橙色	S－134
Po3	床面	甕	①21.8※ ②21.5△ ③28.0※ ⑤ 3.8	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は倒卵形を呈するものか。	外面…ヨコナデ。 肩部波状文が施され、その下に平行沈線が入る。最大径付近横方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ。 内外面とも風化著しい。	やや粗	不良	内外面とも浅黄橙色	S－153
Po4	床面	甕	①18.4 ②12.0△ ⑤ 3.8	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は倒卵形を呈するものか。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部以下横方向ハケ目後波状文、刺突文が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	やや不良	内外面ともにぶい橙色	外面スス付着 S－154
Po5	埋土下層	甕	①16.4※ ② 7.5△ ⑤ 2.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端はわずかに突出する。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部横方向ハケ目後縦方向ハケ目。 波状文が施される。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部横方向ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい赤褐色	外面黒斑有 S－135
Po6	床面	甕	①18.0※ ② 6.0△ ⑤ 3.1	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部横方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	やや粗	良好	内外面とも淡黄色	口縁部外面黒斑有 S－145
Po7	埋土下層	甕	①17.4※ ② 5.8△ ⑤ 2.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	S－132
Po8	埋土上層	甕	①16.8※ ② 3.6△ ⑤ 2.8	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は外反し、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密（1㎜大の石英を含む。）	良好	内外面とも黄橙色	S－142
Po9	埋土上層	甕	①17.2※ ② 3.7△ ⑤ 2.9	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ折れ、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。	内外面ともヨコナデ。	やや粗	良好	内外面とも淡黄色	口縁部黒斑有 S－137
Po10	埋土下層	甕	①19.4※ ② 6.5△ ⑤ 3.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部15条の平行沈線。 頸部～肩部波状文。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	やや粗(1～3㎜大の石英・長石含む。)	良好	内外面とも橙色	口縁部外面スス付着 S－131
Po11	埋土下層	甕	①18.0※ ② 4.4△ ⑤ 3.2	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部平行沈線。後一部ナデ消し。 頸部に刺突文有。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	粗（1～2㎜大の砂粒を多く含む。）	不良	内外面とも赤褐色	外面スス付着 S－138
Po12	埋土上層	甕	①17.6※ ② 3.6△ ⑤ 3.1	口縁部は肉厚で外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部横方向ミガキ。 頸部ヨコナデ。 内面…口縁部横方向ミガキ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	密（2㎜大の石英を含む。）	良好	内外面とも黄橙色	外面スス付着 S－140
Po13	埋土上層	甕	①16.4※ ② 3.4△ ⑤ 3.0	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は下垂する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（2㎜大の石英を含む。）	良好	内外面とも褐灰色～浅黄橙色	S－133
Po14	埋土上層	甕	①14.4※ ② 3.0△	口縁部は「く」字状口縁をもち、端部は内湾気味に上方へ引き出される。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗(1～2㎜大の石英・長石を含む。)	良好	外面…にぶい橙色 内面…橙色～にぶい橙色	外面スス付着 S－143
Po15	埋土下層	甕	①20.0※ ② 3.4△ ⑤ 3.2	口縁部は肉厚で外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	内外面ともヨコナデ。	密（1㎜大の石英を含む。）	良好	内外面とも黄橙色	外面スス付着 S－139
Po16	埋土下層	底部	② 2.5△ ④ 3.6※	平底を呈す底部。	外面…縦方向ミガキ。 内面…上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の石英・長石含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	S－146
Po17	埋土上層	底部	② 2.9△ ④ 5.8※	平底を呈す底部。	外面…縦方向ハケ目後ナデ。 内面…上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の石英・長石含む。）	良好	内外面とも赤褐色	S－147
Po18	埋土上層	底部	② 2.4△ ④ 3.2※	平底を呈す底部。	外面…縦方向ミガキ。 内面…指頭圧痕後ケズリ。	密（2㎜大の石英・長石を含む。）	良好	内外面とも浅黄橙色	外面スス付着 S－148
Po19	床面	高杯	①27.0※ ② 8.5△	やや深い皿状を呈す大型の高杯杯部。端部は平坦面をもつ。杯底部は円盤充填される。	外面…斜方向ハケ目後ナデ。 内面…上半部ナデ。 下半部ハケ目後縦方向ミガキ。 底部ミガキ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	内外面黒斑有 S－151
Po20	埋土下層	高杯	①24.0※ ② 4.3△	浅い皿状を呈す大型の高杯杯部。端部は外反し、平坦面をもつ。	外面…ヨコナデ。ヘラ描文が認められる。 内面…ヨコナデ。	緻密	良好	内外面とも浅黄橙色～赤橙色	外面に赤色塗彩痕？ S－152
Po21	床面	低脚杯	② 2.6△ ④ 6.4※	低く太い低脚杯脚部。裾部で大きく広がり端部は丸い。	内外面ともナデ。	やや粗（2～3㎜大の石英を含む。）	やや不良	内外面とも浅黄橙色	S－150
Po22	埋土下層	甑	①32.4※ ② 4.5△	甑口縁部の破片と思われる。端部は平坦面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	粗（砂粒を多く含む。）	良好	外面…にぶい橙褐色 内面…淡黄色	内面黒斑有 外面スス付着 S－141
Po23	埋土下層	把手	最大厚 1.9	断面円形、半環状を呈す甑の把手と思われる。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	S－149

挿表18　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(12)

CS I 13

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	埋土上層	甕	①16.6※ ② 5.3△ ⑤ 3.9	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部ヨコナデ。 頸部平行沈線か。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	内面黒斑有 N－149
Po2	埋土上層	甕	①16.4※ ② 4.6△ ⑤ 3.6	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－148
Po3	埋土上層	甕	①16.0※ ② 4.4△ ⑤ 3.5	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く突出する。	内外面とも風化著しい。ナデか。	密	やや不良	内外面とも淡橙色	N－151
Po4	埋土上層	甕	①16.0※ ② 3.7△ ⑤ 2.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面スス付着 N－150
Po5	埋土下層	鉢？	② 5.3△	逆「ハ」字状に開く深い体部をもつ鉢と思われる。	外面…ケズリ後縦方向ミガキ。 内面…上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	外面黒斑有 N－152

CS I 14

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	床面	甕	①15.8※ ②22.4 ③18.4 ⑤ 3.1	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は卵形を呈し、小さな平底をもつ。最大径はほぼ中位にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部波状文後櫛状工具による刺突文。 胴部上半～下半縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下右方向ケズリ。 胴部下半上方向ケズリ後ナデ。	密	良好	内外面共橙色	内外面共スス付着 S－157
Po2	床面	甕	①17.4※ ②27.3 ③20.0※ ④ 2.8 ⑤ 3.4	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。胴部は倒卵形を呈し、小さな平底をもつ。胴部最大径は中位以上にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部縦方向ハケ目後波状文。 胴部下半縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部斜方向ケズリ。	密（1㎜前後の石英を含む。）	良好	内外面共にぶい黄橙色	外面全体にスス付着 S－155
Po3	床面	甕	①15.6※ ②23.0 ③17.8 ④ 2.8 ⑤ 2.6	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く突出する。胴部は倒卵形を呈し、小さな平底をもつ。最大径は中位以上にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部横方向ハケ目後一部縦方向ハケ目。胴部中位以下縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。 胴部下半上方向ケズリ。	密	良	内外面共橙色	胴部外面スス付着 S－158
Po4	床面	甕	①16.2 ②21.6 ③16.2 ④ 4.3※ ⑤ 2.5	口縁部は肉厚で外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸く屈曲する。胴部は倒卵形を呈し、しっかりとした平底をもつ。胴部最大径は中位以上にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部縦方向のハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部～胴部上半左方向ヘラケズリ。 胴部下半上方向ケズリ。	密	良好	内外面共浅黄色	胴部内外面にスス付着 外面一部赤変 S－156
Po5	床面	甕	①15.7 ②23.9 ③19.0 ④ 4.7 ⑤ 1.3	口縁部は短く外反気味に立つ。端部は丸い。胴部は倒卵形を呈し、上げ底気味のしっかりとした底部をもつ。最大径は中位以上にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部縦～斜方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部上半左方向ケズリ。 下半上方向ケズリ。	密	良好	内外面共淡黄色	外面にスス多く付着 S－159
Po6	床面	甕	①16.0 ②22.6△ ③18.2 ⑤ 1.2	短く外反気味に立つ口縁部をもつ。端部は丸い。下端はわずかに下垂する。胴部は倒卵形を呈す。	外面…口縁部平行沈線後一部ナデ消し。 胴部縦方向細かいハケ目。 内面…口縁部ナデ。 頸部屈曲部～胴部中位横方向ケズリ。 胴部下半縦方向ケズリ。	やや粗(0.2～3.0㎜程度の砂粒・石英粒を含む。)	良好	内外面共淡黄色	胴部内外面共スス付着 IN－6
Po7	床面	甕	①17.8 ②14.9△ ③23.6※ ⑤ 2.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸みを帯び、下端は鈍く外方へ突出。胴部は丸形を呈すものか。	外面…口縁～肩部ヨコナデ。 胴部縦方向のハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗(0.3～2.0㎜程度の砂粒を含む。石英・雲母を少し含む。)	良好	内外面共淡黄色	外面スス付着 IN－5
Po8	床面	甕	①16.6 ② 7.3△ ⑤ 2.7	口縁部は肉厚で外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸く屈曲する。肩部は張る。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向のケズリ。	密（1㎜以下の細砂。1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	内外面共にぶい橙褐色	口縁部外面にスス付着 CH－11
Po9	床面	甕	①17.8 ② 7.2△ ⑤ 3.3	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く、口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向のケズリ。	密（1㎜程の石英を多く含む。）	良好	内外面共にぶい橙褐色	外面にスス付着 CH－10
Po10	床面	甕	①17.4 ② 4.2△ ⑤ 2.5	やや外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲し丸みを帯びている。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部粘土つなぎ。 頸部屈曲部以下左方向のケズリ。	密(0.5～1㎜程度の砂粒を含む。)	良好	内外面共にぶい褐色	CH－9
Po11	埋土下層	甕	①16.2 ② 4.8△ ⑤ 2.7	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…口縁部波状文一部ナデ消し。 頸部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密	良好	外面…橙色 内面…明黄橙色	口縁部外面黒斑有 Y－6

挿表19　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(13)

CS I 14

P o 12	床面	底部	② 2.1△ ④ 4.8	平底の底部。	外面…ハケ目痕。 少し粗いナデ。 内面…縦方向ケズリ。	密	良好	外面…にぶい 褐色 内面…にぶい 橙褐色	外面にスス付着 CH－13
P o 13	床面	脚付甕	①14.5 ②18.6 ④12.2 ⑤ 2.5	複合口縁を有する脚付甕。口縁部は外反気味に外傾する。端部は押さえられ口縁部下端は下垂する。肩はあまり張らず、胴部はたまねぎ型を呈する。中空の脚部は「ハ」字状に大きく開き、焼成前に穿孔された円形の透かしが2段、三方に有する。	外面…口縁部平行沈線。 胴部上半ヨコナデ。下半横方向ミガキ。脚部ヨコナデ。 内面…口縁部横方向ミガキ。 胴部ケズリ後ナデ。 脚部ケズリ。	やや密	良	内外面共淡黄色	外面面黒斑有 S－164
P o 14	床面	高杯	①20.6 ② 5.7△	やや湾曲する底部から屈曲外反する口縁部をもつ高杯杯部。端部は丸い。	外面…横方向ミガキ。 内面…ヨコナデ。	密	良好	内外面とも橙褐色	内外面ともにスス付着 CH－14
P o 15	埋土下層	高杯	①19.4 ② 5.4△	やや湾曲する底部から屈曲外反する口縁部をもつ高杯杯部。端部は丸い。	外面…口縁部ヨコナデ。 底部ミガキ。 内面…口縁部横方向ミガキ。 底部縦方向ミガキ。	密	良好	内外面共にぶい赤褐色	S－160
P o 16	床面	高杯	② 9.2△ ④14.6	筒部はやや短く「ハ」字状に開く。裾部は大きく広がり焼成前に穿孔された円形透かしが4ケ所有。	外面…縦方向ミガキ。 内面…ナデ。	密	良好	内外面共橙色	内外面共に黒斑有 S－163
P o 17	P 2 内	高杯	② 3.1△ ④13.0	裾部が大きく開く脚。焼成前に穿孔された円形透かしを2ケ所有する。	外面…縦方向ミガキ。 内面…ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒・輝石を含む。）	良好	内外面共橙褐色	CH－15
P o 18	P 2 内	高杯	② 6.0△	肉厚で、直線的に「ハ」字状に開く高杯筒部。	外面…縦方向ミガキ。 裾部付近横方向ミガキ。 内面…ケズリ後ナデ。	密	良好	外面…にぶい 橙色～ 灰褐色 内面…にぶい 橙色	S－161
P o 19	床面	手捏ね土器	② 2.5	小型で、つまみ状を呈する手捏ね土器。	外面…手捏ね成形後ナデ。爪跡残る。 内面…シボリ目残る。	密	良	内外面共橙色	S－162
P o 20	床面	土玉	径 2.6 穴径 0.6 重さ 7.6ｇ	ややいびつな球形。ほぼ中心に穿孔してある。	手捏ね後ナデ。	密（石英・輝石・雲母片を含む。）	良	暗黄灰褐色	S－165

CS I 16

遺物番号	出土地点	器種 種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	床面	甕	①14.8 ②18.5 ③16.0※ ④ 1.8 ⑤ 3.0	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部はつまみ出される。口縁部下端は下垂する。胴部は肩がやや張り、倒卵形を呈す。底部は小さな平底を呈す。胴部最大径は中位以上にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。 胴部下半はケズリ後ナデ。	やや粗（1～3㎜大の石英・長石含む。）	良好	内外面ともにぶい褐色	外面スス付着 N－185
P o 2	埋土下層	甕	①16.4※ ②20.8 ③17.0※ ④ 6.8※ ⑤ 2.5	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸味をもって突出する。胴部はやや長胴となり、大きな平底を呈す底部をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部肩部横方向ハケ目。下半部ナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の石英・長石含む。）	やや不良	内外面とも橙色	外面胴部スス付着一部赤変 N－186
P o 3	床面	甕	①13.2※ ②23.2 ③15.8※ ④ 4.0※ ⑤ 2.5	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸味をもって屈曲する。胴部は長胴で大きめの平底を呈す底部をもつ。胴部最大径はほぼ中位にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部縦方向粗いハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部～中位左方向ケズリ。 以下上方向ケズリ。	やや粗（2㎜大の長石を多く含む。）	良好	外面…赤橙色 内面…橙色	外面スス付着一部赤変 内面黒斑有 N－187
P o 4	床面	底部	② 1.7△ ④ 4.0	平底をもつ底部。	外面…ナデ。 内面…上方向ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面とも明橙色	N－188
P o 5	床面	鉢	①20.6※ ②12.6△	やや内湾気味に逆「ハ」字状に開く鉢体部。口縁部は肥厚し、丸い。底部は上げ底になると思われる。	外面…口縁部横方向ミガキ。 以下ヨコナデか。 内面…口縁部横方向ハケ目。 以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	内外面とも明橙色	外面スス付着一部赤変 内外面黒斑有 N－189

挿表20　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(14)

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Ｐｏ１	埋土下層	甕	①18.0※ ②22.6△ ③27.2※ ⑤ 2.1	口縁部は短く、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもち、凹線が巡る。口縁部下端は丸味をもって屈曲し、下膨らみとなる。胴部は球形を呈す。最大径はほぼ中位にある。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部風化著しいが、粗い斜方向ハケ目が施される。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕。 中位以下左方向ケズリ。	やや粗（砂粒を多く含む。）	やや不良	外面…赤褐色 内面…灰褐色	Ｎ－190
Ｐｏ２	埋土下層	甕	①14.0※ ②25.0△ ⑤ 2.5	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出し、下膨らみとなる。胴部は球形を呈す。	外面…風化著しい。 内面…風化著しい。口縁部～頸部ヨコナデか。 肩部以下ケズリ。	やや粗（大粒の砂粒を多く含む。）	良	内外面共淡黄橙色	Ｎ－192
Ｐｏ３	埋土上層	甕	①16.8※ ②18.9△ ⑤ 2.3	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し平坦面をもつ。口縁部下端は丸味をもって屈曲する。胴部は球形を呈す。	外面…風化著しい。口縁部ナデか。 内面…風化著しい。口縁部ナデ。肩部指頭圧痕残る。肩部以下横方向ケズリ。	やや粗（１～２㎜大の石英を多く含む。）	やや不良	内外面共淡橙色	Ｎ－193
Ｐｏ４	埋土上層	甕	①14.6※ ②14.5△ ③21.2※ ⑤ 2.0	口縁部は短く外反気味に直立する複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもち、凹線が巡る。口縁部下端は丸く屈曲する。胴部は球形を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部横方向粗いハケ目。 風化著しい。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕。 以下左方向ケズリ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面とも淡黄橙色	Ｎ－191
Ｐｏ５	埋土上層	甕	①16.6※ ② 3.8△ ⑤ 2.3	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は外方へ肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は丸味をもって突出する。	内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（１㎜大の石英を含む。）	良	内外面共にぶい橙色	Ｎ－194
Ｐｏ６	埋土上層	甕	①16.8※ ② 9.5△ ⑤ 3.2	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面共風化著しい。	やや粗（わずかに砂粒を含む。）	やや不良	外面…にぶい淡黄色 内面…にぶい橙色	Ｎ－195
Ｐｏ７	床面	甕	①18.0※ ② 6.3△ ⑤ 3.5	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部波状文。 肩部平行沈線又は波状文が施される。 内面…風化のため調整不明。	密	やや不良	内外面共にぶい橙色	Ｎ－202
Ｐｏ８	埋土下層	甕	①18.4※ ② 4.9 ⑤ 3.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部上半波状文。下半は平行沈線が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（砂粒を多く含む。）	良好	内外面共橙色	Ｎ－203
Ｐｏ９	埋土下層	甕	①24.8※ ② 6.8△ ⑤ 4.0	口縁部は厚手で、外傾して立ち上がる複合口縁。端部を欠く。口縁部下端は鈍く突出する。	外面…口縁部平行沈線が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	粗（２㎜大の石英・砂粒を多く含む。）	良	内外面共にぶい橙色	Ｎ－201
Ｐｏ10	埋土下層	甕	①15.4※ ② 4.1△	口縁部は「く」字状口縁をもち、端部は上下に肥厚する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（２～３㎜大の砂粒を含む。）	やや不良	内外面共にぶい橙色	Ｎ－197
Ｐｏ11	埋土下層	甕	①14.0※ ② 3.9△ ⑤ 2.2	口縁部は上方へ引き出される。端部は丸い。下端部は丸味をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（２㎜大の石英を含む。）	やや不良	外面…ややにぶい黄橙色 内面…橙色	Ｎ－198
Ｐｏ12	埋土上層	甕	①14.2※ ② 3.7△	口縁部はゆるやかに「く」字状を呈す。端部は丸い。なだらかな肩部をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ。	密（微砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面共橙色	口縁端部ススの付着 Ｎ－196
Ｐｏ13	埋土上層	口縁部？	①19.0※ ② 3.0△	外反して「く」字状に開く口縁部。端部は丸い。	内外面ともヨコナデ。	密（石英・雲母を含む。）	やや不良	内外面共にぶい橙色	Ｎ－200
Ｐｏ14	床面	高杯	②11.9△ ④10.0※	杯部は浅い皿状を呈す。筒部は細く直線的で、裾部で大きく広がる。	内外面ともに風化著しく不明。 ナデか。	密	不良	内外面共橙色	Ｎ－213
Ｐｏ15	埋土上層	高杯	①14.8※ ② 4.0△	椀状を呈する高杯杯部。端部は丸い。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共橙色	Ｎ－206
Ｐｏ16	埋土上層	高杯	② 8.5△	杯部は椀状になるものか。筒部は直線的に開き裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外面…杯部縦方向粗いハケ目。 脚部ナデ。 内面…杯部ナデ。 筒部シボリ目ナデ消す。 裾部ハケ目がかすかに残る。	密	良好	内外面共橙色	Ｎ－214
Ｐｏ17	床面	高杯	①18.8 ② 5.6△	やや深い皿状を呈す高杯杯部。端部は平坦面をもつ。	内外面とも風化のため不明。 ナデか。	やや粗(石英・砂粒を多く含む。)	不良	内外面共橙色	Ｎ－211
Ｐｏ18	床面	高杯	①22.0※ ② 7.0△	平坦な底部から屈曲し、大きく外反する口縁部をもつ高杯杯部。端部は外反し、平坦面をもつ。屈曲部は鈍く段がつく。	内外面ともにナデ。	密	やや不良	内外面共橙色	Ｎ－212
Ｐｏ19	埋土下層	鼓形器台	② 5.7△ ④17.0※	屈曲して「ハ」字状に開く鼓形器台脚台部。	外面…風化のため調整不明。 内面…ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい橙色	Ｎ－207
Ｐｏ20	埋土下層	鼓形器台	② 6.8△	外反気味に「ハ」字状に開く鼓形器台脚台部。	外面…平行沈線がかすかに残る。 風化著しい。 内面…ケズリ。	密	やや不良	内外面ともに淡橙色	Ｎ－209
Ｐｏ21	埋土下層	小型丸底壺	① 8.0※ ② 2.5△	内湾気味に立ち上がる小型丸底壺口縁部。	内外面ともヨコナデ。	やや粗	やや不良	内外面共赤橙色	Ｎ－205
Ｐｏ22	埋土上層	小型丸底壺？	② 2.8△	小型丸底壺と思われる肩部破片。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部右方向ケズリ。	密	良好	外面…赤褐色 内面…灰黄褐色	外面赤色塗彩 Ｎ－199
Ｐｏ23	埋土下層	低脚杯？	② 2.4△	太く低い脚部をもつ低脚杯。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共橙色	Ｎ－210
Ｐｏ24	埋土上層	土玉	径　2.0 穴径 0.7 重さ 9.8ｇ	ややいびつな球形。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデか。風化著しい。	密	良	橙色	Ｎ－215

挿表21　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(15)

CS118

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	P12内	壺	①16.2※ ② 6.3△ ⑤ 4.0	口縁部はやや内傾気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－238
Po2	埋土下層	甕	①15.4※ ② 3.5△ ⑤ 2.8	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。	内外面ともヨコナデ。	密（石英・砂粒を含む。）	良好	内外面共にぶい黄灰褐色	口縁部外面黒斑有 N－232
Po3	埋土下層	甕	①14.6※ ② 3.8△ ⑤ 2.6	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ肥厚し、外傾する平坦面をもつ。口縁部下端は突出し、丸味をもって頸部へ至る。	内外面とも風化著しい。ナデか。	密（1～2㎜大の石英を含む。）	良好	内外面ともにぶい橙色	N－235
Po4	埋土下層	甕	①16.6※ ② 5.8△ ⑤ 5.0	口縁部は高く、やや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面とも風化著しい。ナデか。	密	良好	内外面とも淡黄灰褐色	N－233
Po5	埋土下層	甕	①15.2※ ② 4.2△ ⑤ 2.6	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	内外面とも風化著しい。ナデか。	やや粗(2～3㎜大の石英・長石を含む。)	良好	内外面ともにぶい橙褐色	N－234
Po6	埋土下層	甕	①24.0※ ② 5.7△ ⑤ 2.8	口縁部は肉厚で、外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。	内外面とも風化著しい。	やや粗（微砂含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－237
Po7	埋土下層	甕	①14.8※ ② 3.2△	口縁部は内湾気味に外傾する「く」字状口縁。端部は丸い。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも灰褐色	N－236
Po8	床面一括	高杯	② 7.0△ ④10.0※	筒部は直線的に開き、裾部で大きく広がる高杯脚部。	内外面とも風化のため調整不明。内面シボリ目残る。	密	やや不良	内外面とも淡橙色	N－239
Po9	埋土下層	土玉	径 2.5 穴径 0.7 重さ11.8g	やや扁平な球形を呈す。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	灰褐色	黒斑有 N－240

CS119

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	埋土下層	甕	①16.2※ ②17.4△ ③25.0※ ⑤ 2.0	口縁部は短く、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出し、下膨らみとなる。胴部は球形を呈すものと思われる。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部斜方向粗いハケ目、後棒状工具による刺突文が逆三角形状に3ケ所有。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕残る。 肩部以下左方向ケズリ。	密（1～3㎜大の石英をわずかに含む。）	良好	外面…明褐色 内面…明黄褐色	S－178
Po2	埋土下層	甕	①15.8※ ②16.5△ ③23.4※ ⑤ 2.2	口縁部は短く、やや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端はわずかに突出し、下膨らみとなる。胴部は球形を呈す。	内外面とも風化著しい。内面肩部指頭圧痕残る。	やや粗（2～3㎜大の石英含む。）	不良	内外面とも淡黄橙色	S－223
Po3	床面	甕	①18.7※ ②11.0△ ⑤ 2.5	口縁部は厚手で、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は丸味をもって突出する。なだらかな肩部をもつ。	外面…風化著しい。調整不明。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	密（1～3㎜大の石英含む。）	良好	内外面とも淡黄色	S－179
Po4	埋土下層	甕	①17.0※ ② 9.1△ ⑤ 2.2	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く屈曲する。大きく張る肩部をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部縦方向ハケ目後横方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕残る。胴部下半左～上方向ケズリ。	密	不良	内外面とも灰白色	S－180
Po5	埋土下層	甕	①16.3※ ② 3.6△ ⑤ 1.2	口縁部は短く、内傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもち、口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	S－172
Po6	床面	甕	①16.6※ ② 3.0△ ⑤ 2.1	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、平坦面をもち、凹線が巡る。口縁部下端は鈍く丸味をもって突出する。	内外面ともヨコナデ。	やや粗（1～2㎜大の石英を多く含む。）	良好	内外面とも黄橙色	S－171
Po7	埋土下層	甕	①17.0※ ② 3.7△ ⑤ 2.5	口縁部は内湾気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。	内外面とも風化著しい。ナデか。	やや粗(1～2㎜大の石英・長石多く含む。)	やや不良	内外面とも黄橙色	S－170
Po8	埋土下層	甕	①15.6※ ② 3.7△ ⑤ 2.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ肥厚して平坦面をもち、凹線が巡る。口縁部下端はわずかに突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい橙色	S－174
Po9	床面	甕	①18.4※ ② 5.4△ ⑤ 3.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部13条の平行沈線。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	やや粗（1～3㎜大の石英含む。）	良好	内外面とも浅黄橙色～褐灰色	内面黒斑有 外面スス付着 S－190
Po10	埋土下層	甕	①14.0※ ② 3.3△ ⑤ 3.3	口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部波状文。 内面…ヨコナデ。	密	良好	内外面とも明赤褐色	口縁部赤変 S－175
Po11	埋土下層	底部	② 2.2△ ④ 4.4※	平底を呈す底部。	外面…風化著しい。 内面…ケズリ。	密	良好	外面…にぶい赤褐色 内面…にぶい黄橙色	S－176

挿表22　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (16)

CSI19

Po12	埋土下層	底部	② 1.8△ ④ 5.6※	平底を呈す底部。	外面…縦方向ハケ目。 内面…ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	S－177
Po13	床面	高杯	①15.9 ②11.5 ④ 9.2	杯部は浅い皿状を呈し、端部は丸い。筒部は細く直線的で、裾部で大きく広がる。	内外面とも風化のため調整不明。	密	やや不良	内外面とも浅橙色	S－185
Po14	床面	高杯	② 8.8△ ④10.0※	筒部は細く、直線的に「ハ」字状に開き、裾部で大きく広がる。	内外面とも風化著しい。筒部内面シボリ目残る。	密	不良	内外面とも黄橙色	S－188
Po15	床面	高杯	② 9.5△ ④10.0※	筒部は細く直線的で、裾部で大きく広がる。	内外面とも風化のため調整不明。	密	不良	内外面とも浅黄橙色	S－194
Po16	埋土下層	高杯	② 7.2△ ④10.2※	筒部は直線的に「ハ」字状に開き、裾部で大きく広がる。	外面…風化著しいが、筒部縦方向ハケ目が認められる。 内面…風化著しいが、筒部シボリ目残る。	密	良好	内外面とも赤色	S－186
Po17	床面	高杯	①24.6※ ② 6.9△	平らな底部から屈曲して大きく開く杯部をもつ高杯。端部は外反し丸い。屈曲部には不明瞭な稜がつく。	内外面とも風化のため調整不明。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	S－184
Po18	床面	高杯	①22.4※ ② 6.2△	にぶい屈曲部をもつ高杯杯部。端部は丸い。	内外面とも風化のため調整不明。	密	不良	内外面とも浅黄橙色	S－191
Po19	埋土下層	鼓形器台	② 4.9△	大きく外反する鼓形器台上台部と思われる。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	外面…灰白色 内面…浅黄色～黄灰色	S－193
Po20	床面	小型丸底壺	① 7.9 ② 7.5 ③ 9.2	口縁部はわずかに外傾する「く」字状口縁。端部は鋭くつまみあげられる。胴部は扁球形を呈す。胴部最大径が口径を上回る。	外面…ナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部ケズリ。底部指頭圧痕残る。	密	やや不良	内外面とも暗赤褐色	S－181
Po21	床面	小型丸底壺	② 4.2△ ③ 8.7	扁球形の胴部をもつ小型丸底壺。	外面…風化のため調整不明。 内面…風化著しいが、指頭圧痕残る。	密	やや不良	内外面とも明橙褐色	S－182
Po22	埋土下層	蓋	② 7.9 ④16.0※	体部は「ハ」字状に大きく開き、端部は平坦面をもつ。つまみは大きく中凹みとなる。	外面…ナデ。 内面…ケズリ後ナデ。	密	良好	外面…橙色～褐灰色 内面…明黄褐色～褐灰色	体部外面黒斑有 S－189
Po23	床面	台付小型鉢	② 7.2△ ③ 8.6	体部は卵形を呈し、屈曲して直立気味の口縁部をもつ。底部には低い脚をもつ。	外面…風化のため調整不明。 内面…ナデ。底部指頭圧痕残る。	やや粗(1～2㎜大の石英・長石を含む。)	良好	外面…灰黄褐色～にぶい橙色 内面…にぶい橙色	脚部内面赤変 S－183
Po24	床面	土玉	径 2.8～3.0 穴径 0.7～1.2	いびつな西洋なし形を呈す。中心に孔あり。	手捏ね成形。風化著しい。	粗（1～3㎜大の砂粒を多く含む。）	不良	浅黄橙色～黒褐色	黒斑有 S－187

CSI20

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	埋土下層	甕	①17.2 ②27.1 ③25.4 ⑤ 2.3	口縁部は短くやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出し、下膨らみとなる。胴部は球形を呈し、丸底となる。最大径はほぼ中位にある。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部縦～斜方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕残る。 胴部中位付近左方向ケズリ。 底部左方向ケズリ。	やや粗（砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面ともにぶい褐色	口縁部～肩部外面黒斑有 N－249
Po2	埋土下層	甕	①16.0※ ②24.7△ ③26.2 ⑤ 2.0	口縁部は短く外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。胴部はやや長い球形を呈す。最大径はほぼ中位にある。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部斜方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部及び底部付近指頭圧痕残る。 胴部中位横方向ケズリ。	やや粗（2㎜大の石英・砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい橙色	胴部下半外面スス付着 口縁部・肩部黒斑有 N－254
Po3	埋土下層	甕	①19.8※ ②18.1△ ③27.2※ ⑤ 2.4	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。胴部は球形を呈す。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部縦方向ハケ目後横方向ハケ目。 以下斜方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下左方向ケズリ。	やや粗(石英・砂粒多く含む。)	良好	内外面とも淡橙色	胴部外面黒斑有 N－267
Po4	埋土下層	甕	①13.9※ ②19.7△ ③22.8 ⑤ 1.8	口縁部は短く、ほぼ直立する複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲し、下膨らみとなる。胴部はやや長胴の球形を呈す。最大径はほぼ中位にある。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部縦方向ハケ目。 以下横方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕残る。 以下左方向ケズリ。	密	やや不良	内外面ともにぶい橙色	胴部外面スス付着 S－227
Po5	埋土下層	甕	①16.4※ ②17.9△ ③24.3※ ⑤ 2.0	口縁部は短く、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。胴部は肩が大きく張り、やや長胴の球形を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部横方向ハケ目。 以下斜方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部以下左方向ケズリ。	やや粗（石英を多く含む。）	良好	内外面とも淡黄褐色	肩部外面スス付着 N－259
Po6	埋土下層	甕	①16.8※ ②15.0△ ③21.8※ ⑤ 2.2	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は内傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。胴部は球形を呈す。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部横方向粗いハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕。 以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－266

挿表23　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(17)

Po7	埋土下層	甕	①15.4※ ②15.3△ ③22.1※ ⑤ 2.4	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出し、下膨らみとなる。胴部は球形を呈す。	外面…風化のため調整不明。 胴部下半縦方向ハケ目が認められる。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕残る。 以下左方向ケズリ。	やや粗(石英・砂粒多く含む。)	やや不良	内外面とも黄橙色	口縁部・胴部外面黒斑有 N－257
Po8	埋土下層	甕	①14.0※ ②13.0△ ⑤ 2.2	口縁部は短く、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、内傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。胴部は肩が大きく張る。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部以下横～斜方向粗いハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕残る。 以下左方向ケズリ。	やや粗（2㎜大の砂粒を含む。)	良好	内外面ともにぶい黄橙色	胴部外面黒斑有 N－260
Po9	埋土下層	甕	①20.0※ ② 8.0△ ⑤ 2.5	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は肥厚し平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕残る。	密	やや不良	内外面とも淡橙色	N－264
Po10	埋土下層	甕	①15.6※ ②10.2△ ⑤ 2.0	口縁部は短く外傾して立ち上がる複合口縁。端部は内傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。胴部は球形を呈す。	外面…風化のため調整不明。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下左方向ケズリ。	やや粗（1㎜大の砂粒を多く含む。)	良好	外面…灰白色 内面…にぶい黄褐色	N－256
Po11	埋土下層	甕	①18.0※ ② 7.0△ ⑤ 2.1	口縁部は短くやや外反して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ肥厚し、平坦面をもつ。大きく張る肩部をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部斜方向ハケ目。刺突文が認められる。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部右方向ケズリ。	やや粗（2㎜大の石英を含む。)	やや不良	外面…褐色 内面…にぶい赤褐色	N－258
Po12	埋土下層	甕	①15.2※ ② 9.3△ ⑤ 2.3	口縁部は短く外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、内傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。端部付近刺突文。 肩部ナデか。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下左方向ケズリ後ナデ。	やや粗（2㎜大の砂粒を多く含む。)	良好	内外面ともにぶい褐色	N－255
Po13	埋土下層	甕	①18.0※ ② 3.7△ ⑤ 2.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は内傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも黄橙色	N－263
Po14	埋土下層	甕	①16.0※ ② 3.6△ ⑤ 2.4	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－262
Po15	埋土下層	甕	①14.8※ ② 3.9△ ⑤ 2.1	口縁部は短く外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は内傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－261
Po16	埋土下層	甕	②26.1△ ③23.9	やや長胴の球形を呈す甕胴部。底部は丸底となる。	外面…肩部横方向粗いハケ目。 以下縦方向粗いハケ目。 内面…肩部指頭圧痕残る。 以下横方向ケズリ。	密（砂粒を含む。)	良好	内外面ともにぶい橙色	外面スス付着 N－268
Po17	埋土下層	甕	② 9.5△	球形を呈する甕胴部。	外面…斜方向粗いハケ目後、肩部に棒状工具による逆三角形状に3カ所の刺突文が施される。 内面…風化のため調整不明。	密（石英・砂粒を含む。)	良好	内外面とも淡黄橙色	N－265
Po18	埋土下層	高杯	②12.4△ ④10.4	杯部は深い椀状を呈す。筒部はやや短く直線的に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外面…風化のため調整不明。 杯底部縦方向ハケ目。 内面…風化のため調整不明。 筒部シボリ目残る。 裾部クモの巣状ハケ目。	密	やや不良	内外面とも橙色	N－279
Po19	埋土下層	高杯	①14.4※ ②10.2	深い椀状の杯部をもつ高杯。端部は丸い。脚部の一部を欠く。	外面…ヨコナデ。 内面…杯部ヨコナデ。 筒部シボリ目残る。	密	良好	内外面とも橙色	N－246
Po20	埋土下層	高杯	①11.8 ② 6.0△	浅い椀状を呈す高杯杯部。端部は丸い。	外面…縦方向ハケ目。 内面…ヨコナデ。	密	良好	内外面とも赤橙色	N－247
Po21	埋土下層	高杯	①14.2※ ② 6.0	椀状を呈す高杯杯部。端部は丸い。	外面…粗い斜方向ハケ目。 内面…ヨコナデ。	密（砂粒を含む。)	やや不良	内外面とも橙色	N－244
Po22	埋土下層	高杯	①15.4※ ② 4.8△	浅い椀状を呈す高杯杯部。端部は丸い。	内外面ともナデ。	密	良好	内外面とも橙色	N－283
Po23	埋土下層	高杯	①14.8※ ② 5.2△	深い椀状を呈す高杯杯部。端部は丸い。	内外面とも風化のため調整不明。	密（1～4㎜大の石英を含む。)	やや不良	内外面とも橙色	YM－13
Po24	埋土下層	高杯	①23.0※ ②16.0 ④12.4※	杯部は平坦な底部から内湾気味に屈曲外傾する口縁部をもつ。端部はやや外反し、丸く収める。脚部は細く直線的に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外面…風化のため調整不明。ナデか。 内面…風化著しい。脚部シボリ目残る。 裾部指頭圧痕残る。	密	良好	内外面とも橙色	N－245
Po25	埋土下層	高杯	①23.6※ ②13.7△	杯部は平坦な底部から屈曲外傾する口縁部をもつ。端部はやや外反し、丸く収める。筒部は直線的に開く。	外面…杯部粗い斜方向ハケ目。 筒部ナデ。接続部に凹線。 内面…杯部横～斜方向粗いハケ目。 筒部シボリ目ケズリとる。	密	良好	内外面とも赤橙色	N－248
Po26	埋土下層	高杯	①25.4※ ② 8.7△	やや湾曲する底部から大きく屈曲外傾する口縁部をもつ高杯杯部。端部は外反し、平坦面をもつ。屈曲部には不明瞭な段をもつ。	外面…縦方向ハケ目。 内面…暗文が放射状に入る。	密	良好	内外面とも橙色	内外面とも赤色塗彩 S－225
Po27	埋土下層	高杯	② 8.3△ ④10.0※	筒部は細く、直線的に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	内外面とも風化のため調整不明。 筒部内面シボリ目残る。	密	やや不良	内外面とも橙色	N－276
Po28	埋土下層	高杯	② 7.4△ ④10.0※	高杯脚部。筒部は直線的に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外面…筒部縦方向ハケ目後縦方向ミガキ。 裾部ナデ。 内面…筒部シボリ目残る。 裾部ナデ。	密	良好	内外面とも橙色	N－270
Po29	埋土下層	高杯	② 5.7△ ④ 8.8※	筒部は短く、内湾気味に開き、裾部で大きく広がる。	内外面とも風化剝離が著しい。 筒部内面シボリ目残る。	やや粗（2㎜大の砂粒を含む。)	不良	内外面とも淡黄色	N－280

挿表24　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (18)

Po30	埋土下層	高杯	② 6.5△ ④ 9.0※	筒部は短く、「ハ」字状に開き、裾部で大きく広がる。	内外面とも風化のため調整不明。 杯部外面わずかに縦方向ハケ目。 裾部内面ハケ目が認められる。	やや粗（2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	N－281
Po31	埋土下層	高杯	② 5.7△ ④ 9.0※	筒部は短く、直線的に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	内外面とも風化のため調整不明。 筒部内面シボリ目残る。	密（石英・砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	N－274
Po32	埋土下層	高杯	② 5.7△ ④ 9.0	筒部は短く、「ハ」字状に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。杯接合部中央に孔有。	内外面とも風化のため調整不明。 筒部内面シボリ目残る。	やや粗(石英・砂粒を多く含む。)	やや不良	内外面とも橙色	N－271
Po33	埋土下層	高杯	② 6.0△ ④ 9.6※	筒部はやや短く、「ハ」字状に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外面…ナデ。 内面…筒部シボリ目残る。 裾部ナデ。	密	良好	内外面とも橙色	N－275
Po34	埋土下層	高杯	② 5.0△ ④10.0	筒部は短く、「ハ」字状に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外面…ナデか。 内面…筒部シボリ目残る。 裾部ナデ。	密	良好	内外面とも黄橙色	N－272
Po35	埋土下層	高杯	② 5.2△ ④ 8.6※	筒部は短く、「ハ」字状に開き、裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	内外面とも風化のため調整不明。 筒部内面シボリ目残る。	やや粗（砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面とも橙色	N－273
Po36	埋土下層	高杯	② 4.5△ ④14.4	大きく広がる高杯裾部。端部は平坦面をもつ。	内外面とも風化著しい。ヨコナデか。	密	良好	内外面とも橙色	N－269
Po37	埋土上層	高杯	② 2.5 ④13.2	大きく広がる高杯裾部。端部は平坦面をもつ。	外面…ナデか。 内面…ハケ目。	密	良好	内外面とも明橙色	N－277
Po38	埋土下層	高杯	② 3.2△ ④14.4※	大きく広がる高杯裾部。端部は平坦面をもつ。	外面…ナデ。 内面…クモの巣状ハケ目。	密	良好	内外面とも橙色	内外面とも赤色塗彩痕 N－278
Po39	埋土下層	直口壺	①10.8 ②15.2 ③14.9	口縁部は高く外傾する「く」字状口縁。端部は丸い。胴部は扁球形を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部中位付近斜方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部右方向ケズリ。	密	やや不良	内外面とも橙色	N－252
Po40	埋土下層	直口壺	① 9.0 ②14.5 ③19.1	口縁部は高く外傾する「く」字状口縁。端部は丸い。胴部は肩が張る扁球形を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部肩部横方向粗いハケ目。 以下ナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部風化のため調整不明。	やや粗（砂粒を含む。）	やや不良	内外面とも橙色～にぶい橙色	胴部外面スス付着 N－251
Po41	埋土下層	直口壺	①10.6※ ②13.9 ③14.9※	口縁部は高く外傾する「く」字状口縁。端部は丸い。胴部は扁球形を呈し、最大径はほぼ中位にある。	外面…風化著しい。ナデか。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部肩および底部付近指頭圧痕残る。	密	やや不良	内外面とも橙色	N－243
Po42	埋土下層	直口壺	① 8.8※ ②18.4△	口縁部は高く外傾する「く」字状口縁。端部は丸い。胴部はやや扁球形を呈す。	外面…風化著しい。ナデか。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部肩部指頭圧痕残る。 後左方向ケズリ。	やや粗（砂粒を含む。）	やや不良	内外面とも橙色	N－284
Po43	埋土下層	小型壺	① 8.8※ ②12.8 ③14.3 ⑤ 1.4	口縁部は短くやや内傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもち、凹線が巡る。口縁部下端は鈍く突出する。胴部は扁球形を呈す。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 胴部肩部横方向ハケ目。 一部縦方向ハケ目。 中位以下横～斜方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 胴部ケズリ後ナデ。 底部指頭圧痕残る。	密	良好	内外面とも橙色	外面一部黒斑有 一部赤変 N－250
Po44	埋土上層	直口壺	①10.8※ ② 5.2△	口縁部はやや外傾する「く」字状口縁。端部は平坦面をもつ。	外面…口縁部横方向ミガキ。 屈曲部3条の凹線。 以下半截竹管文。凹線が施される。 内面…横方向ミガキ。	密	良好	内外面ともにぶい橙色	N－253
Po45	埋土下層	直口壺	① 9.8※ ② 5.0△	やや内湾気味に高く立つ「く」字状口縁をもつ直口壺。端部は丸い。	内外面とも風化のため調整不明。	密（石英・砂粒を含む。）	やや不良	内外面とも橙色	YM－14
Po46	埋土下層	椀	①10.8 ② 4.7 ③ 1.0	口縁部は内湾して立ち、体部は扁平。端部は丸い。	内外面とも風化のため調整不明。ナデか。	やや粗(石英・砂粒を含む。)	やや不良	内外面とも橙色	N－241
Po47	埋土下層	椀	①12.0※ ② 4.8	口縁部は内湾気味に立ち、体部は扁平。端部は丸い。	内外面とも風化のため調整不明。ナデか。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	N－242
Po48	埋土下層	椀	①14.2※ ② 4.6△	口縁部は内湾して立ち、体部は扁平。端部は丸い。	内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（2㎜大の砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面とも橙色	N－282
Po49	埋土下層	須恵器杯蓋	①13.6※ ② 2.9△ ⑥12.3※ ⑦ 2.3	口縁部は外反気味に下り、端部はノミ歯状を呈す。天井部と口縁部の境は鋭く稜がつく。	内外面とも回転ナデ。	緻密	良好	内外面とも灰色	CH－26
Po50	埋土上層	須恵器甕	①31.2※ ② 3.2△	口縁部は大きく外反し、端部は平坦面をもつ。口縁部付近に鋭い突帯をもつ。	外面…8条の波条文が施される。 内面…回転ナデ。	密	良好	外面…暗青灰色 内面…にぶい黄灰色	O－31
Po51	埋土下層	大型壺	①42.0※ ②41.8△ ③70.5※	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁状を呈し、端部及び口縁部下端はタガ状の突帯をもつ。端部は平坦面をもつ。胴部は大きく肩が張る。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部風化著しいが粗い斜方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部粗いハケ目。	密	良好	外面…褐色～にぶい黄橙色 内面…暗赤褐色	内面スス付着 外面黒斑有 S－224

挿表25　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (19)

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Ｐｏ１	床面	甕	①15.2※ ②26.2 ③12.1 ⑤ 2.3	口縁部は短く、ほぼ直立する複合口縁。端部は肥厚し平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く、下膨らみとなる。胴部は球形を呈す。	外面…風化著しい。ナデか。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕残る。 胴部中位左方向ケズリ。 底部付近指頭圧痕残る。	やや粗（石英・砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面共明橙色	胴部外面スス付着 一部赤変 Ｎ－226
Ｐｏ２	埋土上層	甕	①16.0※ ②11.0△ ⑤ 2.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。肩部は張り、球形を呈す。	外面…風化のため調整不明。 内面…風化著しいが肩部指頭圧痕。 以下右方向ケズリ。	やや粗（石英・砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面共橙色	Ｎ－225
Ｐｏ３	床面	甕	①15.8※ ②10.3△ ⑤ 1.7	口縁部は短く直立する複合口縁。端部は内方へ肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は下膨らみとなる。大きく張る肩部をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部から頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕残る。 以下右方向ケズリ。	やや粗（石英・砂粒を多く含む。）	良好	内外面共にぶい橙色	口縁部外面黒斑有 Ｎ－224
Ｐｏ４	埋土上層	甕	①25.0※ ② 4.9△ ⑤ 4.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	やや粗	やや不良	内外面共にぶい橙色	Ｎ－208
Ｐｏ５	基盤層中	甕	①18.6※ ② 5.9△ ⑤ 3.3	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部風化著しいが平行沈線が認められる。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	粗（石英・砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面共にぶい橙色	Ｎ－219
Ｐｏ６	基盤層中	甕	①18.6※ ② 5.0△ ⑤ 3.1	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗（石英・砂粒を多く含む。）	良	内外面共にぶい橙色	口縁部外面黒斑有 Ｎ－218
Ｐｏ７	基盤層中	甕	①17.0※ ② 5.5△ ⑤ 3.7	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（1～2㎜大の石英・砂粒を多く含む。）	良好	内外面共橙色	Ｎ－217
Ｐｏ８	埋土下層	甕	①21.8※ ② 7.0△ ⑤ 3.9	口縁部は厚手でほぼ直立する複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部波状文後一部ナデ消し。 肩部波状文が認められる。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗	やや不良	内外面共橙色	内面に赤色塗彩痕 Ｎ－221
Ｐｏ９	埋土下層	甕	①16.4※ ② 5.7△ ⑤ 3.6	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部波状文後一部ナデ消し。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部横方向ミガキ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面共黒褐色	Ｎ－222
Ｐｏ10	埋土下層	甕	①16.6※ ② 4.4△ ⑤ 3.1	口縁部は厚手で外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は丸く屈曲する。	外面…口縁部波状文後一部ナデ消し。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面下橙色	Ｎ－223
Ｐｏ11	埋土下層	甕	①17.8※ ② 4.7△ ⑤ 3.5	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…風化著しいが、口縁部平行沈線が認められる。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面共にぶい橙色	Ｎ－220
Ｐｏ12	埋土下層	甕	①15.0※ ② 4.3△ ⑤ 2.7	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	内外面とも風化のため調整不明。	密（１㎜大の石英を多く含む。）	良好	内外面共橙色	Ｎ－216
Ｐｏ13	埋土下層	高杯	①17.8※ ② 5.3△	椀状を呈す高杯杯部。端部は大きく外方へ折れる。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共橙色	Ｎ－228
Ｐｏ14	埋土下層	高杯	①14.2 ② 3.3△	椀状を呈す高杯杯部。	内外面とも風化著しい。ナデか。	密	良	内外面共にぶい橙色	赤色塗彩痕 Ｎ－227
Ｐｏ15	埋土上層	高杯	①15.6 ② 8.0△	椀状を呈す杯部をもつ高杯。端部は丸い。筒部は細い。	内外面とも風化著しい。ナデか。	密（石英・砂粒を含む。）	やや不良	外面…橙色 内面…明赤褐色	杯部外面黒斑有 ＹＭ－12
Ｐｏ16	基盤層中	高杯	①16.2※ ② 4.6△	やや丸味をもつ底部から大きく屈曲外傾する口縁部をもつ高杯杯部。屈曲部には不明瞭な段がつく。	内外面ともヨコナデ。	密（微砂粒をわずかに含む。）	やや不良	内外面共にぶい褐色	内外面に赤色塗彩痕 Ｎ－229
Ｐｏ17	埋土上層	高杯	② 1.6△ ④10.0	大きく広がる高杯裾部。	内外面とも風化著しい。	密	良	内外面共橙色	Ｎ－230
Ｐｏ18	基盤層中	土玉	径　2.7 穴径 0.8 重さ14.4ｇ	いびつな球形を呈す。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	にぶい橙色	Ｎ－231
Ｐｏ19	埋土上層	樽型鬲	②15.1△ ③18.1※ 側面径 9.4 ※	口縁部を欠損する。体部は樽を横にしたような形を呈す。体部側面は被蓋され、被蓋接合部に突帯をめぐらす。	外面…肩部に凹線を約３㎝間隔に３条巡らしその間に１条９本の波状文を２条ずつ施す。 他は回転ナデ。 内面…回転ナデ。	密	良好	内外面とも淡灰色	Ｏ－25

掘立柱建物跡

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Ｐｏ１	ＣＳＢ01 Ｐ６内	甕	② 2.6△	口縁部は外傾する複合口縁。端部を欠く。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部波状文。 内面…ヨコナデ。	密（砂粒を含む。）	良好	外面…淡褐色 内面…黒褐色	口縁部外面スス付着 内面黒斑有 Ｎ－172
Ｐｏ２	ＣＳＢ01 Ｐ２内	鼓形器台	①16.0※ ② 3.5△	外反気味に「ハ」字状に開く鼓形器台脚台部と思われる。端部は丸い。	外面…ヨコナデ。 内面…左方向ケズリ。 端部ヨコナデ。	密（１～２㎜大の砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面とも黄橙色	Ｎ－171

挿表26　南谷大山遺跡出土遺物観察表（20）

土坑・土壙

遺物番号	出土地点	器種 種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	CSK01 埋土下層	甕	② 3.4△	口縁部は肉厚で外反気味に立ち上がる複合口縁。端部を欠く。口縁部下端は屈曲する。	外面…口縁部波状文。 内面…ヨコナデ。	密（1㎜前後の石英を多く含む。）	良好	内外面とも橙色	外面スス付着 S－21
Po1	CSK04 埋土下層	甕	② 3.5△	ほぼまっすぐに立ち上がる複合口縁を有する。下端は屈曲する。	外面…櫛描き平行沈線。 内面…口縁ナデ。 頸部右方向ケズリ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良	内外面共橙色	外面スス付着 N－153
Po1	CSK05 埋土下層	蓋	② 1.9△	蓋のつまみ。	外面…ヨコナデ。 内面…右方向ケズリ。	やや粗（砂粒を含む。）	良	内外面共にぶい橙色	N－154
Po1	CSK07 埋土上層	壺	①17.4※ ②11.3△ ⑤ 3.9	外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く下端は外方に突出。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部櫛描き波状文。 肩部以下ナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 胴部右方向ケズリ。	やや粗（砂粒を多く含む。）	良好	内外面共橙色	N－169
Po2	CSK07 底面	甕	①17.0※ ② 9.1△ ⑤ 3.7	外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く下端は鋭く外方へ突出。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部櫛描き波状文。 櫛描き平行沈線。ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（微砂粒を含む。）	良好	内面…明橙色 外面…橙色	外面スス付着 N－170
Po3	CSK07 埋土上層	甕	①15.0※ ② 7.0△ ⑤ 3.3	外反気味に外傾しながら立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く下端は鈍く屈曲。	内外面共に風化著しく不明。	やや粗	不良	内外面共淡黄色	N－168
Po4	CSK07 埋土上層	高杯	①18.2※ ② 6.2△	椀状の杯部を有する高杯杯部。端部は丸い。	内外面共にナデ。	密（微砂粒を含む。）	良好	内外面共赤褐色	N－166
Po5	CSK07 埋土上層	低脚杯	①13.2 ② 5.0 ④10.0	やや浅い皿状の杯部をもつ低脚杯。端部は丸くやや外反する。短い脚部は大きく「ハ」字状に広がる。	外面…ヨコナデ。 内面…端部ヨコナデ。 杯部左方向ケズリ後ナデ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面共橙色	N－167
Po1	CSK18 底面	甕	①14.6※ ②10.5△ ⑤ 2.2	わずかに外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部はやや肥厚し押さえられている。下端は鈍く屈曲する。肩部はやや張る。	外面…口縁～頸部ナデ。 肩部風化が著しく不明。ハケ目か。 胴部ナデ。 内面…口縁～頸部ナデ。 胴部ケズリ後ナデ。指頭圧痕有。	密（1～2㎜大の石英を含む。）	良好	内面…茶褐色 外面…にぶい橙色	N－173
Po2	CSK18 底面	高杯	② 4.1△ ⑤ 2.2	椀状の杯部を有する高杯杯部。	外面…口縁ナデ。 肩部わずかにハケメの跡がみられるが風化が著しく不明。 胴部ナデ。 内面…口縁ナデ。 胴部ケズリ後ナデ。指頭圧痕有。	密（微砂粒をわずかに含む。）	良好	内面…灰褐色 外面…茶褐色	N－174
Po1	CSK19 底面	鼓形器台	② 5.7△	逆「ハ」字状に広がる鼓形器台上台部。全体的に厚手。	外面…ナデ。 内面…ケズリ後ナデ。	やや粗（砂粒を多く含む。）	良好	内外面共橙色	N－175

段状遺構

遺物番号	出土地点	器種 種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	CSS03 P26内	甕	①14.8 ②21.8 ③17.8 ④ 2.0 ⑤ 3.0	外反気味に立ち上がる複合口縁をもつ。端部は少し尖り口縁部下端は下垂する。胴部は倒卵形を呈す。底部は平底。	外面…口縁部櫛描平行沈線。 肩部波状文。 胴部縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部左方向ヘラケズリ。 胴部上方向ヘラケズリ。	やや粗	良好	内外面とも橙色	内外面共スス・黒斑有 S－166
Po2	CSS03 埋土下層	甕	①20.3※ ② 5.4△ ⑤ 3.6	外反気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部は外傾する平坦面をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部9条の平行沈線。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄褐色	外面スス付着 K－2
Po3	CSS03 埋土下層	甕	①19.6※ ② 4.6△ ⑤ 3.3	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部8条の平行沈線。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の石英含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	口縁部外面スス付着 T－1
Po4	CSS03 埋土上層	甕	①13.2※ ② 5.1△ ⑤ 2.7	ほぼ直立する複合口縁を有す。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部10条の平行沈線。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の石英含む。）	良好	内外面とも褐色	外面スス付着 O－13
Po5	CSS03 埋土下層	甕	①14.8※ ② 3.8△ ⑤ 3.0	外反しながら外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は外方へ突出する。やや肉厚。	外面…口縁端部ヨコナデ。 端部以下櫛描き波状文。ナデ消し。 頸部ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	内外面とも橙色	N－162
Po6	CSS03 埋土上層	甕	①39.6※ ② 6.7 ⑤ 3.2	外反気味に直立する複合口縁を有する。端部は外傾する平坦面をもつ。口縁部下端は下垂する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の石英含む。）	良好	内外面とも橙色	外面スス付着 T－2
Po7	CSS03 埋土下層	甕	①15.0※ ② 8.0△ ⑤ 3.9	外傾気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部はわずかに外反し丸みをもつ。口縁部下端は鋭く屈曲。肩部はあまり張らない。	外面…口縁ナデ。 胴部貝による押引き。 内面…口縁部～頸部ナデ。 胴部横方向ケズリ。	密（1～3㎜の石英を含む。）	良好	内外面とも褐灰色～橙色	S－201
Po8	CSS03 西斜面 埋土下層	甕	①17.2※ ② 5.7△ ⑤ 3.8	外反気味にほぼまっすぐ立ち上がる複合口縁を有する甕。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部風化著しい。ナデか。 頸部ヨコナデ。押し引き沈線後波状文。 内面…口縁部～頸部ナデ。 頸部左方向ケズリ。	密（微砂粒を含む。）	良好	内外面共にぶい黄橙色	外面にスス付着 N－158

挿表27　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (21)

Ｐｏ９	ＣＳＳ03 Ｐ28内	甕	①17.6 ② 8.1△ ⑤ 2.1	やや外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く口縁部下端は鈍く屈曲する。肩部はやや張る。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部風化のため不明。ヨコナデか。 肩部左方向ケズリ。	密（１～２㎜の石英を多く含む。）	良好	内外面とも黄橙色	口縁部外面ス ス付着 Ｏ－16
Ｐｏ10	ＣＳＳ03 埋土下層	甕	①14.0※ ② 5.9△ ⑤ 3.3	外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁を有す。端部は薄く、口縁部下端は鋭く、短く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	口縁部外面ス ス付着 Ｏ－12
Ｐｏ11	ＣＳＳ03 埋土下層	甕	①13.0※ ② 5.0△ ⑤ 3.0	外反気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸い。口縁部下端は鋭く短く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（１㎜以下の石英・輝石を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	口縁部外面ス ス付着 ＦＹ－６
Ｐｏ12	ＣＳＳ03 埋土下層	甕	①24.2※ ②13.7△ ⑤ 4.3	やや外反気味に外傾しながら立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く、口縁部下端は鋭く外方へ突出する。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 胴部風化著しく不明。かすかに櫛描沈線が残る。 内面…口縁部～頸部ナデ。 胴部左方向ケズリ。	密（２㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	Ｎ－165
Ｐｏ13	ＣＳＳ03 埋土下層	甕	①18.2※ ② 7.8△ ⑤ 3.1	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は平坦面をもち、口縁部下端は鈍く突出する。なだらかな肩部をもつ。	内外面とも風化著しい。肩部外面波状文が認められる。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	口縁部外面ス ス付着 Ｏ－17
Ｐｏ14	ＣＳＳ03 埋土下層	甕	①14.2※ ② 5.0△ ⑤ 3.8	外反しながら内傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもち、口縁部下端は鋭く外方に突出。	外面…ヨコナデ。 内面…剥離している。ナデか。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	Ｎ－157
Ｐｏ15	ＣＳＳ03 埋土下層	甕	①19.8※ ② 5.7△ ⑤ 3.4	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は平坦面をもち、口縁部下端は鋭く外方へ突出。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部左方向のケズリ。	密	良好	内外面とも橙色	Ｎ－156
Ｐｏ16	ＣＳＳ03 西斜面 埋土下層	甕	①16.0※ ② 4.0△ ⑤ 3.7	外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は外方へ鋭く突出。	内外面ともにヨコナデ。	密	良好	内外面とも橙色	Ｎ－161
Ｐｏ17	ＣＳＳ03 埋土下層	甕	①15.0※ ② 4.6△ ⑤ 3.4	外傾しながら立ち上がる複合口縁を有する。端部に平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く外方へ突出。	外面…ヨコナデ。 内面…ナデ。	密	良好	内外面とも淡橙色	外面にスス付着 Ｎ－155
Ｐｏ18	ＣＳＳ03 埋土下層	注口付壺	①14.9 ②12.0△ ⑤ 3.6	外反気味に外傾する複合口縁を有する。端部は丸く、下端はやや下垂する。肩部はやや張り注口部を有する。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 注口部ハケ目。 肩部波状文。ハケ状工具による刺突文。胴部横方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部右方向ケズリ。	密（１㎜前後の石英を含む。）	良好	内外面とも橙色	Ｓ－198
Ｐｏ19	ＣＳＳ03 埋土下層	胴部	② 4.3△	肩のあまり張らない胴部。	外面…肩部平行沈線。波状文が施される。 内面…頸部ヨコナデ。 胴部左方向ケズリ。	密（１㎜程度の砂粒を含む。）	良好	内面…灰黄褐色 外面…黄褐色	Ｎ－163
Ｐｏ20	ＣＳＳ03 埋土下層	底部	②15.5△ ④ 4.2	甕胴部～底部と思われる。胴部はスマートで倒卵形を呈すと思われ、不明瞭な平底を呈す。	外面…縦方向ハケ目。 内面…上方向ケズリ。 底部付近指頭圧痕残る。	密	良好	内外面共に浅黄橙色	外面スス付着 Ｓ－216
Ｐｏ21	ＣＳＳ03 埋土下層	高杯？	①14.4※ ② 3.5△	浅い椀状の高杯杯部。端部は丸い。	外面…ヨコナデ。斜方向ハケ目。 内面…ケズリ後ナデ。	密	良好	内外面とも橙色	Ｎ－164
Ｐｏ22	ＣＳＳ03 埋土下層	高杯	②10.3△	太く円筒状の筒部をもち、裾部でゆるやかに広がる。	外面…ナデか。 縦方向ミガキがかすかに残る。 内面…シボリ目ケズリ取り後ナデ。	密	良好	内外面ともに浅黄橙色	Ｓ－215
Ｐｏ１	ＣＳＳ04 埋土下層	壺	①20.2※ ② 9.0△ ⑤ 3.5	口縁部は大きく外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。大きく張る肩部をもつ。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部波状文が一部認められる。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（微砂含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	Ｎ－127
Ｐｏ２	ＣＳＳ04 Ｐ２内	甕	①12.5※ ②17.0△ ⑤ 2.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は球形を呈し、ほぼ中位に最大径をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部横方向粗いハケ目後一部縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部～中位指頭圧痕後左方向ケズリ。	密（わずかに砂粒を含む。）	良好	内外面とも淡黄色	胴部外面スス付着 Ｎ－100
Ｐｏ３	ＣＳＳ04 埋土下層	甕	①20.6※ ② 6.7△ ⑤ 3.5	口縁部は肉薄で、高く外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く引き出される。	外面…口縁部ヨコナデ。 口縁部下端～頸部平行沈線が施される。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ。	密	良好	外面…淡黄色 内面…橙色	Ｎ－92
Ｐｏ４	ＣＳＳ04 埋土下層	甕	①14.7※ ②18.9△ ③20.7※ ⑤ 2.5	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は肩がやや張り、球形状を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部平行沈線。 横方向ハケ目が施される。 胴部下半風化のため調整不明。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（３㎜大の石英含む。）	良好	内外面とも浅黄橙色	Ｋ－６
Ｐｏ５	ＣＳＳ04 埋土下層	甕	①16.0※ ② 6.8△ ⑤ 3.4	口縁部は高く外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもち、凹む。口縁部下端は鋭く引き出される。肩部が大きく張る。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部横方向ハケ目後刺突文が施される。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ後ナデ。	密	良好	内外面とも淡黄色	Ｎ－89
Ｐｏ６	ＣＳＳ04 埋土下層	甕	①17.2※ ② 8.3△ ⑤ 3.5	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は薄く丸い。口縁部下端は鋭く突出する。肩部はあまり張らない。	外面…口縁部ヨコナデ。 一部平行沈線が施される。 肩部波状文が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部横方向ミガキ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面とも黄橙色	口縁部外面ス ス付着 Ｎ－96
Ｐｏ７	ＣＳＳ04 埋土下層	甕	①16.4※ ② 4.5△ ⑤ 2.8	口縁部はやや短く外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く引きだされる。	外面…口縁部ヨコナデ。 下端部付近沈線が施される。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下ケズリ。	密（わずかに砂粒を含む。）	良好	内外面とも淡橙色	口縁部外面ス ス付着 Ｎ－93
Ｐｏ８	ＣＳＳ04 埋土上層	甕	①16.0※ ② 4.4△ ⑤ 2.6	口縁部はやや短く外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部ヨコナデ。 一部平行沈線が施される。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ。	密	良好	内外面とも淡黄色	Ｎ－91

挿表28　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(22)

Po 9	CSS04 埋土下層	甕	①16.0※ ② 4.7△ ⑤ 3.3	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は内方へ肥厚して平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く短く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－102
Po10	CSS04 埋土下層	甕	①16.0※ ② 3.3△ ⑤ 2.8	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は内方へ肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－111
Po11	CSS04 埋土上層	甕	①17.4※ ② 5.0△ ⑤ 3.6	口縁部は肉薄で高く外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く引き出される。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	外面…黄橙色 内面…にぶい橙色	N－97
Po12	CSS04 埋土上層	甕	①14.4※ ② 4.8△ ⑤ 3.1	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外方へ折れ平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（わずかに砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙色	口縁部外面スス付着 N－133
Po13	CSS04 埋土上層	甕	①16.2※ ② 3.1△ ⑤ 2.6	口縁部はやや短く、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く引き出される。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも淡黄色	N－90
Po14	CSS04 埋土下層	甕	①17.8※ ② 4.3△ ⑤ 3.1	口縁部は肉薄で外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも淡黄色	N－95
Po15	CSS04 埋土下層	甕	①16.0※ ② 6.2△ ⑤ 3.0	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。風化している。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙色	N－98
Po16	CSS04 埋土下層	甕	①14.2※ ② 4.5△ ⑤ 2.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く引き出される。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも淡黄褐色	口縁部外面スス付着 N－88
Po17	CSS04 埋土下層	甕	①17.0※ ② 4.9△ ⑤ 2.8	口縁部はやや低く外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもち凹む。口縁部下端は鋭く引き出される。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	N－94
Po18	CSS04 埋土下層	甕	①16.4※ ② 3.6△ ⑤ 2.6	口縁部は短く内湾気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。	内外面ともヨコナデ。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい橙灰色	N－110
Po19	CSS04 埋土下層	甕	①16.2※ ② 3.0△ ⑤ 1.8	口縁部は短く外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸く、口縁部下端は丸味をもって屈曲する。	内外面ともヨコナデ。	密（微砂含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－112
Po20	CSS04 埋土下層	甕	①22.2※ ② 5.9△ ⑤ 4.1	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部波状文。 内面…口縁部横方向ミガキ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（微砂含む。）	良好	内外面ともにぶい褐色	口縁部外面スス付着 頸部外面黒斑有 N－109
Po21	CSS04 埋土下層	甕	①18.8※ ② 5.9△ ⑤ 3.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部波状文後上半部平行沈線。 後一部ナデ消し。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも淡橙色	N－105
Po22	CSS04 埋土下層	甕	①16.0※ ② 6.2△ ⑤ 3.9	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部14条の平行沈線。 肩部沈線が施される。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下左方向ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面スス付着 N－107
Po23	CSS04 埋土上層	甕	①20.0※ ② 4.5△ ⑤ 2.8	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…口縁部11条の平行沈線。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい橙色	口縁部外面スス付着 N－134
Po24	CSS04 埋土下層	甕	①17.2※ ② 5.2△ ⑤ 3.4	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外傾する平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部平行沈線後一部ナデ消し。 頸部縦方向ハケ目後横方向ミガキ。 内面…口縁部横方向ミガキ。 頸部以下ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい橙色	N－103
Po25	CSS04 埋土下層	甕	①17.0※ ② 4.9△ ⑤ 3.3	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…口縁部平行沈線後一部ナデ消し。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面とも橙色	N－104
Po26	CSS04 埋土上層	甕	①13.6※ ② 4.2△ ⑤ 3.1	口縁部は肉厚で外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも赤灰色	N－139
Po27	CSS04 埋土下層	甕	①16.0※ ② 4.1△ ⑤ 3.1	口縁部は肉厚で外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部波状文後一部ナデ消し。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい橙色	外面黒斑有 N－108
Po28	CSS04 埋土下層	甕	①16.0※ ② 5.5△ ⑤ 2.6	口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸く屈曲する。肩部はあまり張らない。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	外面…灰黄色 内面…灰黄橙色	外面口縁部スス付着 内面黒斑有 N－99
Po29	CSS04 埋土下層	甕	①14.8※ ② 3.3△ ⑤ 2.4	口縁部は外傾する複合口縁。端部は引き出される。口縁部下端は鋭く屈曲する。	内外面とも風化著しい。ナデか。	密（微砂含む。）	良好	内外面とも淡橙色	N－113
Po30	CSS04 埋土下層	甕	①17.2※ ② 5.4△ ⑤ 3.3	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	外面…にぶい橙色 内面…橙色	外面スス付着 N－101
Po31	CSS04 埋土上層	甕	①15.2※ ② 3.5△ ⑤ 2.4	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	内外面ともヨコナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面スス付着 N－132
Po32	CSS04 埋土下層	底部	② 2.4△ ④ 5.0※	わずかに平底を呈す底部。	外面…縦方向ハケ目。 内面…上方向ケズリ。	密（微砂含む。）	良好	内外面とも赤褐色	外面スス付着 N－126
Po33	CSS04 埋土下層	底部	② 2.0△ ④ 5.0※	わずかに平底を呈す底部。	外面…縦方向ミガキ。 内面…上方向ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	外面…にぶい褐色 内面…灰赤色	内面スス付着 N－124

挿表29　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (23)

段状遺構

Po34	CSS04 埋土上層	底部	② 2.4△ ④ 6.2※	わずかに平底を呈す底部。	外面…ハケ目後ミガキ。 内面…ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	内外面とも灰色	外面底部ヘラ記号有 N－136
Po35	CSS04 埋土下層	底部	② 1.6△ ④ 5.4※	わずかに平底を呈す底部。	外面…縦方向ミガキ。 内面…ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の砂粒含む。）	良好	内外面とも黄橙色	N－125
Po36	CSS04 埋土下層	底部	② 1.6△ ④ 5.4※	わずかに平底を呈す底部。	外面…縦方向ハケ目。 内面…上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒含む。）	良好	内外面とも灰黄色	外面黒斑有 N－121
Po37	CSS04 埋土下層	底部	② 1.2△ ④ 5.0※	わずかに平底を呈す底部。	外面…縦方向ケズリ。 内面…上方向ケズリ。	密	良好	外面…にぶい橙色 内面…暗褐色	N－123
Po38	CSS04 埋土上層	底部	② 2.0△ ④ 5.0※	わずかに平底を呈す底部。	外面…縦方向ハケ目。 内面…ケズリ。	密（微砂含む。）	良好	外面…黒褐色 内面…にぶい橙色	外面黒斑有 N－122
Po39	CSS04 埋土下層	高杯	①15.6※ ② 3.4△	浅い椀状を呈す高杯杯部と思われる。端部は丸い。	外面…横方向ミガキ。 内面…丁寧なナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面黒斑有 N－119
Po40	CSS04 埋土下層	高杯	② 7.5△ ④14.6※	筒部は短く、直線的に開き、裾部で大きく広がる。端部は丸い。裾部に円形透かしが4方にある。	外面…筒部上半横方向ミガキ。 下半縦方向ミガキ。 裾部横方向ハケ目。 内面…筒部ケズリ。裾部ナデ。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面黒斑有 N－131
Po41	CSS04 埋土下層	鼓形器台	② 5.9△	複合口縁状を呈す鼓形器台上台部。屈曲部は鋭く引き出される。筒部は屈曲するだけとなる。	外面…ヨコナデ。 内面…ケズリ後丁寧なナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－128
Po42	CSS04 埋土上層	鼓形器台	② 4.3△	鼓形器台上台部～脚台部の破片。屈曲部は鋭く、筒部は短い。	外面…ヨコナデ。 内面…上台部丁寧なナデ。 筒部～脚台部左方向ケズリ。	密（微砂粒含む。）	良好	内外面とも淡黄色	脚台部外面ヘラ記号？ N－135
Po43	CSS04 P38内	鼓形器台	② 2.7△ ④16.4※	おおきく「ハ」字状に開く鼓形器台脚台部と思われる。端部は丸い。	外面…ヨコナデ。 内面…上半ケズリ。下半ヨコナデ。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面とも黄橙色	N－129
Po44	CSS04 埋土上層	小型丸底壺	① 9.0※ ② 2.5△ ⑤ 2.0	外傾する複合口縁をもつ小型丸底壺と思われる。端部は丸く、口縁部下端は短く鋭く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも淡黄色	N－114
Po45	CSS04 埋土下層	小型高杯形器台	①13.4※ ② 3.4△	やや湾曲する底部から屈曲外反する口縁部をもつ小型高杯形器台杯部と思われる。端部は丸い。	外面…縦方向ミガキ。 内面…ヨコナデ。	密	良好	内外面とも淡橙色	N－117
Po46	CSS04 埋土下層	小型高杯形器台	①10.0※ ② 2.0△	やや湾曲する底部から短く屈曲外反する口縁部をもつ小型高杯形器台杯部と思われる。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－118
Po47	CSS04 埋土下層	低脚杯	② 3.0△ ④11.2※	低く、大きな脚をもつ低脚杯と思われる。	内外面とも風化著しい。ナデか。	やや粗（微砂粒多く含む。）	やや不良	内外面とも淡黄色	N－130
Po48	CSS04 床面	蓋？	①16.0※ ② 6.7△	口縁部はやや内湾気味に開きながら下り、端部は丸い。天井部はやや丸味をもち、口縁部との境には明瞭な稜をもつ。杯の可能性もある。	外面…口縁部ヨコナデ。 天井部ハケ目。 内面…天井部ケズリ。 口縁部ヨコナデ。	密（わずかに砂粒を含む。）	良好	内外面とも黄橙色	天井部外面スス付着 N－120
Po49	CSS04 埋土上層	土玉	径 3.3 穴径 0.8 重さ25.8g	ややいびつな球形を呈する。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	にぶい黄橙色	N－137
Po50	CSS04 埋土下層	土玉	径 2.5 穴径 0.6 重さ 9.8g	いびつな球形を呈する。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	N－138
Po1	CSS05 床面	甕	①18.0※ ②10.4△ ⑤ 2.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は球形を呈すものか。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部肩部横方向ハケ目後波状文後縦方向ハケ目。 以下不規則なハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも明黄褐色	胴部外面スス付着 S－97
Po1	CSS06 P1内	壺	①14.6※ ②21.0△ ⑤ 2.0	口縁部は短く内傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は肩が大きく張る。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部平行沈線。波状文が施される。 胴部下半ナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	やや粗	やや不良	外面…淡橙色 内面…にぶい橙褐色～黒褐色	胴部外面スス付着 S－195
Po2	CSS06 P1内	壺	①20.8※ ②40.0 ③34.6 ④ 6.4 ⑤ 3.8	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。胴部は肩が大きく張り、倒卵形を呈す。底部はしっかりとした平底を呈す。胴部最大径は中位以上、肩部付近にある。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部平行沈線、縦方向ハケ目後波状文が施される。 最大径付近斜方向ハケ目。胴部下半縦方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ後ナデ。	密	良好	内外面とも黄橙色	胴部外面スス付着 S－197

溝状遺構

遺物番号	出土地点	器種 種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	CSD10 埋土上層	甕	①14.4※ ② 6.0△ ⑤ 2.4	口縁部は短く内湾気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…風化著しい。ナデか。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下ケズリ。	やや粗（2㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	内外面ともにぶい橙色	N－176
Po1	CSD12 埋土上層	壺	①17.0※ ② 7.5△	頸部は外反して大きく開き、端部は肥厚して外傾する平坦面をもつ。頸部に指頭圧痕文帯をもつ。	外面…ナデ。 頸部に指頭圧痕文帯をもつ。 内面…ケズリ後ナデ。	密（砂粒をわずかに含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	N－181
Po2	CSD12 埋土上層	甕	①17.0※ ② 4.4△ ⑤ 3.4	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部15条の平行沈線。 内面…ヨコナデ。	やや粗（1～2㎜大の石英・長石多く含む。）	良好	内外面とも黄橙色	内面黒斑有 N－180

挿表30　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(24)

溝状遺構

Po3	CSD12 埋土上層	甕	①15.0※ ② 4.3△ ⑤ 3.4	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部14条の平行沈線。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗(1～2㎜大の石英・長石含む。)	良好	内外面とも橙褐色	N－179
Po4	CSD12 埋土上層	甕	①12.6※ ② 4.8△ ⑤ 3.5	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は引き出される。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗(1～2㎜大の石英・雲母含む。)	良好	外面…にぶい橙色 内面…浅黄橙色	IN－7
Po5	CSD12 埋土上層	甕	①17.0※ ② 6.2△ ⑤ 3.2	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。肩部はなだらか。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～肩部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ	密（1～2㎜大の砂粒をわずかに含む。)	良好	内外面ともにぶい橙褐色	口縁部黒斑有 N－178
Po6	CSD12 埋土上層	甕	①18.2※ ② 6.2△ ⑤ 2.2	口縁部は短く外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもち凹線が入る。肩部が大きく張る。	内外面とも風化著しい。	やや粗（2㎜大の砂粒を含む。)	やや不良	内外面ともにぶい橙色	N－177
Po1	CSD13 埋土上層	甕	①17.0※ ② 4.2△ ⑤ 2.1	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…風化著しい。 内面…口縁部風化著しい。 頸部屈曲部以下ケズリ。	粗（2～3㎜大の砂粒を多く含む。)	やや不良	内外面ともにぶい橙色	N－183
Po2	CSD13 埋土上層	甕	①18.0※ ② 4.8△ ⑤ 3.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに突出する。	内外面とも風化著しい。ナデか。	密	やや不良	内外面とも灰褐色	N－182
Po3	CSD13 埋土上層	土錘	径 1.9 穴径 0.6 重さ 9.3g	長楕円形を呈す。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	にぶい橙色	N－184
Po1	CSD17 埋土上層	甕	①24.2※ ② 7.6△ ⑤ 4.3	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は極くわずかに下垂する。	外面…口縁部波状文 肩部にも波状文。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の石英を含む。)	良好	内外面とも橙褐色	口縁部外面黒斑有 S－205
Po2	CSD17 埋土上層	甕	①16.0※ ② 5.3△ ⑤ 3.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部波状文。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲以下ケズリ。	やや粗（1～3㎜大の石英含む。)	やや不良	内外面とも浅黄橙色	S－203
Po3	CSD17 埋土上層	甕	①17.2※ ② 3.5△ ⑤ 3.2	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部15条の平行沈線。 内面…口縁部ヨコナデ。	密（1㎜大の石英含む。)	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面スス付着 S－204
Po4	CSD17 埋土上層	低脚杯	② 3.4△ ④ 8.6※	低く「ハ」字状に開く低脚杯脚部。	内外面ともヨコナデ。	やや粗（1～3㎜大の石英を多く含む。)	良好	内外面とも赤橙色～浅黄橙色	S－202

C－V区集石・ピット群

遺物番号	出土地点	器種 種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	集石・ピット群 埋土下層	壺	①17.4※ ②11.2△ ⑤ 4.5	口縁部は内傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…口縁部平行沈線後刺突文が3段にわたって施される。 頸部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下ケズリ。	やや粗(1～2㎜大の石英・長石多く含む。)	良好	内外面ともにぶい黄橙色	YM－11
Po2	集石・ピット群 埋土下層	高杯	①18.1 ②12.9 ④ 9.9	杯部は浅い皿状を呈し、筒部は細く「ハ」字状に開き、裾部で大きく広がる。	内外面とも風化著しい。 内面筒部シボリ目残り、裾部斜方向ハケ目。	やや粗	良好	内外面とも明赤褐色	O－20
Po3	集石・ピット群 埋土下層	高杯	② 3.8△	浅い皿状を呈す高杯杯部。	内外面とも風化著しい。 外面底部縦方向ハケ目が認められる。	密	やや不良	内外面とも橙色	YM－9
Po4	集石・ピット群 底面	直口壺	② 8.6△ ③14.4※	直口壺胴部と思われる。胴部はやや扁球形を呈す。	外面…最大径付近斜方向ハケ目。 他はナデ。 内面…左方向ケズリ。	密（砂粒を含む。)	良好	内外面とも橙色	胴部外面スス付着 YM－8
Po5	集石・ピット群 埋土下層	小型丸底壺	① 8.4 ② 9.0 ③ 8.4	口縁部は高く外傾する「く」字状口縁。端部は丸い。胴部は扁球形を呈す。	内外面とも風化のため調整不明。	密	やや不良	内外面とも淡黄色	YM－10
Po6	集石・ピット群 埋土下層	椀	①14.2※ ② 5.0	やや深い体部に内湾気味に立つ口縁部をもつ。	内外面とも風化のため調整不明。	密（1～2㎜大の石英砂粒を含む。)	やや不良	内外面とも橙色	体部外面黒斑有 YM－7

埋葬施設

遺物番号	出土地点	器種 種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	CSX01 石蓋上	小型丸底壺	② 7.6△ ③13.8※	扁球形を呈す小型丸底壺胴部。	外面…風化著しい。 内面…肩部指頭圧痕残る。 下半以下左方向ケズリ。	密（4㎜大の石英を含む。)	不良	外面…橙色 内面…浅黄橙色	S－167
Po1	CSX02 墓壙内	須恵器杯蓋	①12.7 ② 4.6 ⑥12.5 ⑦ 2.0	口縁部はやや外反しながら端部に至る。端部はノミ歯状を呈す。口縁部と天井部の境には明瞭な稜がつく。天井部は低い。	外面…天井部約1/2回転ヘラケズリ。 以下回転ナデ。 内面…回転ナデ。	密	良好	外面…灰色～緑灰色 内面…黄灰色	天井部外面自然釉かかる K－3
Po1	CSX03 埋土中	甕	①17.2※ ② 4.9 ⑤ 3.3	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部平行沈線。 頸部刺突文。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～4㎜大の石英を含む。)	良好	内外面とも浅黄橙色～黄橙色	頸部外面スス付着 S－168
Po2	CSX03 埋土中	甕	② 4.7△	なだらかな甕肩部。	外面…波状文。 内面…頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗（3㎜前後の石英を含む。)	良好	内外面とも黄橙色	外面スス付着 S－169

挿表31　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (25)

遺物番号	出土地点	器種 種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	C－I区 遺構外	甕	①19.4※ ② 5.8△ ⑤ 3.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面を持つ。口縁部下端は下垂する。	外面…口縁部平行沈線後波状文。一部ナデ消し。 内面…口縁部上半ヨコナデ。下半横方向ミガキ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1㎜大の石英を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄褐色	外面スス付着 内面黒斑有 FY－12
Po2	C－I区 遺構外	甕	①16.4※ ② 4.8△ ⑤ 3.0	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ 頸部以下ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面スス付着 FY－11
Po3	C－I区 遺構外	甕	①14.7※ ②16.9 ③17.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。胴部は小型でやや扁球形を呈す。底部は丸底となる。	外面…口縁部ヨコナデ。肩部平行沈線が施され、その下に波状文が施される。中位以下斜～縦方向細かいハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。肩部以下右方向～斜上方向ケズリ。底部指頭圧痕残る。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	胴部外面スス付着 S－234
Po4	C－I区 遺構外	高杯	①19.8※ ② 5.0△	やや深い皿状を呈す高杯杯部。端部はやや外反し、平坦面をもつ。	外面…縦方向ミガキ。 内面…端部ヨコナデ。下半縦方向ミガキ。	密	良好	内外面ともにぶい橙色	FY－14
Po5	C－I区 遺構外	高杯？	② 3.3 ④18.6	大きく広がる高杯裾部と思われる。端部は平坦面をもつ。	外面…縦方向ハケ目。 内面…上半右方向ケズリ。下半斜方向ハケ目。	密（1㎜大の石英を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	FY－13
Po6	C－I区 遺構外	鼓形器台？	①11.4※ ② 3.6△	複合口縁状を呈す鼓形器台上台部と思われる。端部は平坦面をもち、稜は鋭い。	外面…縦方向ミガキ。 内面…端部横方向ミガキ。以下ヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	FY－9
Po7	C－I区 遺構外	鼓形器台？	② 3.0 ④11.0※	複合口縁状を呈す鼓形器台脚台部と思われる。稜は鈍く、端部は平坦面をもつ。	外面…縦方向ミガキ。 内面…ケズリ。	密	良好	内外面とも明黄褐色	YM－4
Po8	C－I区 遺構外	小型丸底壺	① 9.1 ② 7.9 ③ 9.8	口縁部は内湾して立つ「く」字状口縁。端部は丸い。胴部扁球形を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。胴部下半斜方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。肩部底部指頭圧痕残る。胴部中位左方向ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	S－199
Po1	C－II区 遺構外	甕	①17.6 ② 4.95△ ⑤ 3.75	わずかに外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸みをおびており、やや外反する。下端は下垂する。	外面…口縁部平行沈線。頸部ナデ。 内面…ヨコナデ。	密（砂粒を多く含む。）	良好	内外面ともに黄橙色	外面スス付着 K－1
Po2	C－II区 遺構外	甕	①17.4 ② 5.0△ ⑤ 3.9	わずかに外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く下端は下垂する。	外面…口縁部平行沈線。頸部ナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密（1～4㎜の石英を含む。砂粒を含む。）	良好	内外面とも明黄褐色	外面スス付着 YM－5
Po3	C－II区 遺構外	甕	①18.2 ②10.4△ ⑤ 3.1	やや外傾気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く、下端はわずかに下垂する。肩部はあまり張らない。	外面…口縁部平行沈線。ナデ消し。頸部ナデ。肩部貝殻による押し引き紋。櫛描平行沈線。ナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。胴部左方向～上方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	内外面ともにぶい橙褐色	外面スス付着 内面黒斑あり CH－20
Po4	C－II区 遺構外	甕	①18.0※ ② 6.2△ ⑤ 3.8	やや外傾気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸く、下端はわずかに外方へ突出。	外面…口縁部波状文。ナデ消し。頸部ヨコナデ。ハケ状工具による連続刺突文。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部左方向のケズリ。	密	良好	内外面とも橙色	内面に黒斑あり S－218
Po5	C－II区 遺構外	甕	①21.5※ ② 4.5△ ⑤ 4.0	外傾気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部はやや丸味を帯びている。下端は鈍く屈曲。	外面…口縁部ナデ。頸部ナデ。 内面…ナデ。	密(0.5～4㎜以下の石英を含む。)	良好	内外面とも浅黄橙色～にぶい黄橙色	FY－8
Po6	C－II区 遺構外	甕	①16.2 ② 4.1△ ⑤ 2.9	外傾して立ち上がる複合口縁。端部はやや外反して丸い。下端は鈍く屈曲。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ナデ。頸部左方向ケズリ。	密(0.5～3㎜の石英を含む。)	良好	外面…にぶい橙色～橙色 内面…橙色	外面にスス付着 FY－4
Po7	C－II区 遺構外	甕	①20.8 ② 4.9△ ⑤ 3.4	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸味をおび、下端は鈍く屈曲。	外面…ナデ。 内面…口縁部ナデ。頸部左方向のケズリ後ナデ。	密（2㎜以下の石英を含む。輝石を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	FY－7
Po8	C－II区 遺構外	甕	①18.0 ② 4.2△ ⑤ 3.5	外傾しながら立ち上がる複合口縁を有する。端部はやや外反し、丸い。下端はわずかに下垂する。	内外面ともにヨコナデ。	密	良好	内外面ともに浅黄橙色	O－11
Po9	C－II区 遺構外	甕	①12.8 ② 5.3△ ⑤ 3.3	外傾しながら立ち上がる複合口縁。端部は丸く外反している。下端は外方へ突出。	外面…ナデ。 内面…口縁部ナデ。頸部左方向ケズリ。	密（1㎜以下の石英を含む。輝石を含む。）	良好	外面…にぶい黄橙色～にぶい橙色 内面…にぶい黄橙色	外面にスス付着 FY－5
Po10	C－II区 遺構外	甕	①13.6 ② 5.3△ ⑤ 3.1	外反気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く、下端は外方へ突出する。	外面…口縁～頸部ヨコナデ。沈線か。 内面…右方向ナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	O－10
Po11	C－II区 遺構外	鼓形器台	② 6.8△ ④23.0※	鼓形器台脚台部。	内外面とも風化のため調整不明。ヨコナデか。	密（0.1～0.3㎜の石英を含む。）	良好	内外面ともに橙色	O－14
Po1	C－III区 遺構外	甕	①18.4※ ② 5.8△ ⑤ 3.2	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。	外面…口縁部11条の平行沈線。肩部貝殻腹縁による押引沈線文。 内面…口縁部横方向ミガキ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	やや粗(1～3㎜大の石英・長石を含む。)	良好	内外面とも浅黄橙色	口縁部外面スス付着 IN－16
Po2	C－III区 遺構外	甕	①16.4※ ② 6.0△ ⑤ 3.6	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は極くわずか下垂する。	外面…口縁部15条の平行沈線。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1㎜大の石英含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	口縁端部外面黒斑有 S－229

挿表32　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(26)

Po3	C－Ⅲ区 遺構外	甕	② 3.8△	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部を欠く。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部1条6本の平行沈線が上下2段に施され、その間に3重圏の同心円スタンプ文が施される。 内面…風化のため調整不明。ナデか。	密（1～3㎜大の石英を含む。）	やや不良	内外面とも浅黄橙色	S－230
Po4	C－Ⅲ区 遺構外	甕	①20.0※ ② 6.2△ ⑤ 4.3	口縁部はやや外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	S－228
Po5	C－Ⅲ区 遺構外	甕	①15.6 ② 4.8 ⑤ 3.2	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下ケズリ。	密	良好	内外面とも灰白色	IN－10
Po6	C－Ⅲ区 遺構外	甕	①13.5※ ②10.6△ ③16.6※ ⑤ 2.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。肩部はなだらかで、中位付近が膨らむ。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部縦方向細かいハケ目後平行沈線が施される。 以下横方向細かいハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも橙色	外面スス付着 IN－13
Po7	C－Ⅲ区 遺構外	甕	①14.8※ ② 6.7△ ⑤ 3.1	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。大きく張る肩部をもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部方向ハケ目後平行沈線が2段にわたって施される。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密	やや不良	内外面とも淡黄色	IN－12
Po8	C－Ⅲ区 遺構外	甕	①17.6※ ② 5.1△ ⑤ 2.9	口縁部は外反して立ち上がる複合口縁。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。	内外面とも風化のため調整不明。ナデか。	やや粗(石英・長石多く含む。)	やや不良	内外面とも淡黄橙色	IN－9
Po9	C－Ⅲ区 遺構外	甕	①13.6※ ② 6.4△ ⑤ 3.1	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は外反し、丸い。口縁部下端は鈍く突出する。大きく張る肩部をもつ。	外面…ヨコナデ 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい橙色	IN－8
Po10	C－Ⅲ区 遺構外	底部	② 3.4※ ④ 2.5△	小さく筒状を呈す底部破片。上げ底となる。	外面…縦方向ミガキ。 内面…ケズリ。	密（1㎜大の石英を含む。）	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面黒斑有 IN－14
Po11	C－Ⅲ区 遺構外	低脚杯	② 4.3※ ④ 6.4	やや高く中実となる低脚杯脚部と思われる。	外面…ヨコナデ 内面…杯部円盤充填される。ナデ。	やや粗(1～2㎜大の石英・長石含む。)	良好	外面…浅黄橙色 内面…にぶい黄橙色	裾部内面黒斑有 IN－15
Po12	C－Ⅲ区 遺構外	土錘	長 3.0 巾 2.0 穴径 0.4 重さ10.6g	いびつな紡錘形を呈す。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	S－231
Po13	C－Ⅲ区 遺構外	土錘	長 3.5 巾 1.7 穴径 0.45 重さ 8.8g	いびつな円柱状を呈す。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	S－232
Po14	C－Ⅲ区 遺構外	土錘	長 4.5 巾 1.0 穴径 0.2 重さ 3.8g	長紡錘形を呈す。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	にぶい橙色	N－285
Po1	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①11.9 ②22.2△ ③21.8※ ⑤ 3.3	やや外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。胴部は倒卵形を呈し、最大径はほぼ中位にもつ。	外面…口縁部平行沈線。 肩部波状文の下に平行沈線が施される。以下縦方向細かいハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。 胴部下半は上方向ケズリ。	密	良好	外面…橙色 内面…にぶい黄橙色	外面スス付着 S－226
Po2	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①21.0 ②10.6△ ⑤ 3.8	外反気味に立ち上がる複合口縁をもつ。端部は丸い。口縁部下端は鋭く屈曲する。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部9条の平行沈線。 肩部貝殻腹縁による刺突文。 以下波状文が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面黒斑有 S－222
Po3	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①20.4※ ②10.9△ ⑤ 3.4	外反気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く下端はわずかに下垂。肩部はあまり張らない。	外面…口縁部平行沈線。 肩部貝殻腹縁による押引き波状文。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部斜方向のケズリ。	密	良好	外面…にぶい橙色～橙色 内面…にぶい黄橙色	外面にスス付着 S－221
Po4	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①18.0 ② 7.5△ ⑤ 4.0	やや外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸味をおび、下端はわずかに下垂する。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部平行沈線。一部ナデ消し。 肩部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	内外面とも橙褐色	外面にスス付着 CH－16
Po5	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①17.8 ② 3.3△ ⑤ 3.2	外傾して立ち上がる複合口縁をもつ。端部は丸い。口縁部下端は鈍く突出する。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縁部平行沈線一部ナデ消し。 肩部波状文が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面ともに灰黄色	外面スス付着 O－24
Po6	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①19.4 ② 6.7△ ⑤ 4.2	やや外傾気味に立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸みをおび、下端はわずかに下垂する。	外面…口縁部端部ヨコナデ。平行沈線。 頸部ヨコナデ。貝殻腹縁による押引文。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部ミガキ。左方向ヘラケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	外面にスス付着 O－22
Po7	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①18.2 ② 5.3△ ⑤ 3.5	外傾して立ち上がる複合口縁をもつ。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…口縁部平行沈線一部ナデ消し。 肩部貝殻腹縁による刺突文が施される。 内面…口縁部横方向ミガキ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙色	口縁部外面スス少量付着 O－23
Po8	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①16.6※ ② 6.0△ ⑤ 3.1	外反気味にほぼまっすぐに立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く下端は下垂する。	外面…口縁部平行沈線。 頸部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（5㎜大の石英を含む。）	良好	内外面共浅黄橙色	外面にスス付着 S－211

挿表33　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (27)

Po 9	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①19.8※ ② 7.5△ ⑤ 3.8	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く外反する。下端は外方へ鈍く突出する。	外面…口縁部ヨコナデ。波状文。 頸部～肩部ヨコナデ。 内面…口縁部ナデ。 頸部指押え。 肩部左方向ケズリ。	やや粗（1～2㎜の砂粒を多く含む。）	良好	内外面ともに淡黄色	S－217
Po10	C－Ⅳ区 遺構外	台付甕	①16.4 ②13.4 ③18.2 ④11.0	外傾しながら立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く下端は鈍く屈曲する。肩はあまり張らない。胴部はほぼ球形を呈し、最大径を中央にもつ。低い大きな脚がつく。	外面…口縁部波状文。ナデ消し。 肩部平行沈線。 胴部最大径付近波状文。 下半ミガキ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 胴部斜方向ケズリ。	密	良	外面…にぶい黄褐色 内面…明褐色	S－206
Po11	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①15.8※ ②21.6 ③17.4 ④ 4.2 ⑤ 2.8	外傾しながら立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く、下端はわずかに外方へ突出する。肩部はやや張り、胴部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面…口縁部～肩部ヨコナデ。 胴部ミガキ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 胴部ケズリ後ナデ。	密	良好	外面…にぶい黄橙色～橙色 内面…にぶい橙色	内外面ともにスス付着 S－219
Po12	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①20.4※ ②10.8△ ⑤ 3.8	大きく外反して立ち上がる複合口縁をもつ。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。胴部はなだらかな肩部をもち、倒卵形を呈すと思われる。	外面…口縁部平行沈線後一部ナデ消し。 肩部平行沈線。その下に波状文が施される。 内面…口縁部上半ヨコナデ。 下半横方向ミガキ。 頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面ともに橙色	外面スス付着 O－21
Po13	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①16.2※ ② 4.2△ ⑤ 2.7	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く、下端は鈍く屈曲する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部左方向ケズリ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	S－209
Po14	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①13.8※ ② 9.3△ ③13.4※ ⑤ 2.7	ほぼ直立する複合口縁をもつ。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。胴部は小さくほぼ球形を呈すものと思われる。最大径は中位以上にある。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部指頭圧痕後ナデ。 内面…口縁部横方向ミガキ。 頸部屈曲部以下横方向ケズリ。 胴部下半は上方向ケズリ。	密	良好	内外面ともにぶい橙色	外面スス付着 O－18
Po15	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①15.0 ② 8.4 ③15.0 ⑤ 2.7	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く、口縁部下端は下垂する。肩部はあまり張らない。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 胴部右方向ケズリ。	密	良	内外面とも浅黄橙色	S－208
Po16	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①15.8 ② 7.5△ ③15.8 ⑤2.8	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。端部は丸く下端は鈍く屈曲する。肩部はあまり張らない。	外面…口縁部ヨコナデ。 頸部沈線。 胴部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 胴部斜方向ケズリ。	やや粗（1㎜前後の砂粒を含む。）	良好	外面…橙色～浅黄橙色 内面…浅黄橙色	外面にスス付着 S－207
Po17	C－Ⅳ区 遺構外	甕	①13.0※ ② 9.2△	厚手の「く」字状口縁をもつ。端部は丸く、いびつ。胴部はスマート。	外面…口縁部ヨコナデ。 胴部縦方向ミガキ。 内面…口縁端部ヨコナデ。 以下横方向ケズリ。 胴部下半は上方向ケズリ。	密	良好	内外面とも橙色～浅黄橙色	外面スス付着 S－210
Po18	C－Ⅳ区 遺構外	胴部	② 9.8△ ④ 4.4	スマートな胴部～底部破片。底部は平底を呈す。	外面…ミガキ。 内面…斜方向のヘラケズリ。	密（1～3㎜大の石英を多量に含む。）	良好	外面…赤色 内面…橙色	内外面ともにスス付着 S－214
Po19	C－Ⅳ区 遺構外	底部	② 4.4△ ④ 5.0	平底の底部。	外面…ミガキ。 内面…指頭圧痕残る。	密	良好	外面…にぶい橙色 内面…にぶい黄橙色	内外面ともにスス付着 S－213
Po20	C－Ⅳ区 遺構外	底部	② 2.8△ ④ 7.8	平底の底部。	外面…ミガキ。 内面…ケズリ。	やや粗(0.1～0.3㎜の石英を多く含む。)	良好	外面…くすんだ橙褐色 内面…くすんだ浅黄橙褐色	内外面ともにスス付着 O－15
Po21	C－Ⅳ区 遺構外	甕	② 5.8△ ③19.0	なだらかな肩部をもつ甕胴部。	外面…凹線が巡り、竹管文が施される。 下半は貝殻腹縁による刺突文が施される。 内面…左方向ケズリ。	やや粗(0.5～1㎜程度の砂粒を多く含む。)	良	内外面とも橙褐色	外面スス付着 CH－18
Po22	C－Ⅳ区 遺構外	甕	② 7.3△ ③17.4	ほぼ球形を呈すと思われる甕胴部破片。	外面…凹線が巡らされ、棒状工具による刺突文が施される。 内面…左方向ケズリ。	やや粗(0.5～1㎜程度の砂粒・石英を多く含む。)	良	内外面とも浅黄橙褐色	外面黒斑有 CH－17
Po23	C－Ⅳ区 遺構外	鉢	①12.2 ②12.5△	スマートな体部をもつ鉢。	外面…ヨコナデ。 内面…端部ヨコナデ。 体部上半左方向、下半上方向ケズリ後ナデ。	密（1㎜程度の砂粒・石英を多く含む。）	良好	内外面ともにぶい橙褐色	胴部外面にスス付着 CH－14
Po24	C－Ⅳ区 遺構外	低脚杯	② 2.7△ ④ 7.6	低く「ハ」字状に広がる脚部をもつ低脚杯。	内外面ともにナデ。	やや密(0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。)	良好	内外面共に黄橙色	S－220
Po25	C－Ⅳ区 遺構外	蓋	①16.0 ② 5.15	つまみ部は短く中凹みとなり、体部は低く、大きく「ハ」字状に開く。端部は丸い。	外面…横方向ミガキ。 内面…ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒・石英及び輝石を多く含む。）	良好	内外面ともにぶい褐色	体部外面黒斑有 CH－15
Po26	C－Ⅳ区 遺構外	蓋	② 3.0△ ④13.4	大きく「ハ」字状に広がる蓋。下端は肥厚し丸味をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…斜方向ケズリ。 下端部ナデ。	密（1～3㎜大の石英を含む。）	良好	内外面とも橙～浅黄橙色	内外面ともに黒斑あり S－212
Po27	C－Ⅳ区 遺構外	鼓形器台	①29.0※ ②18.0 ③29.0 ④16.1	上台部は外反し複合口縁状を呈し、端部は大きく外反し丸く収める。屈曲部は下垂する。筒部は細く長い。脚台部は上台部に比べて低く、小さい。端部は丸い。	外面…上台部・脚台部とも平行沈線が施される。筒部には3条の凹線が3段にわたって施され、その間に上部は羽状文、下部には刺突文が施される。 内面…上台部上半ケズリ後ヨコナデ。 下半は縦方向ミガキ。 筒部シボリ目をケズリ取る。 脚台部ケズリ後ミガキ。	やや粗（1～2㎜の砂粒・石英を多く含む。）	良好	内外面とも浅黄橙褐色～明黄橙褐色	内外面赤色塗彩痕 CH－19

挿表34　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (28)

Po28	C－Ⅳ区 遺構外	須恵器甕	①22.6※ ② 6.1△	大きく外反する口頸部をもつ。端部は上方に肥厚し、下端部は鋭く引き出される。頸部には突帯が１条つく。肩部は大きく張る。	外面…回転ナデ。 内面…口頸部回転ナデ。 肩部同心円文叩きナデ消す。 布目がつく。	密	良好	内外面とも青灰色	内外面に自然釉かかる O－28
Po1	C－Ⅴ区 遺構外	甕	①14.2 ② 4.3 ⑤ 2.5	口縁部は外傾してから立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は鈍く屈曲する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗(石英・長石含む。)	良好	内外面とも灰黄色	ＩＮ－11
Po2	C－Ⅴ区 遺構外	甕	①15.8※ ②20.7△ ③28.4※ ⑤ 3.0	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く、丸味を持つ。胴部は球形を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部横方向ハケ目。 以下斜方向粗いハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 肩部指頭圧痕後右方向ケズリ。	やや粗（２～５㎜大の砂粒含む。）	良好	外面…にぶい橙色 内面…橙色	胴部外面スス付着 N－288
Po3	C－Ⅴ区 遺構外	甕	②24.5△ ③25.0	球形を呈す甕胴部。底部は丸底を呈す。最大径はほぼ中位にある。	外面…肩部斜方向ハケ目。 風化著しい。 内面…肩部底部指頭圧痕残る。 以下左方向ケズリ。	粗（１～３㎜大の石英を多く含む。）	やや不良	外面…橙色～灰白色 内面…灰白色	底部内面スス付着 S－196
Po4	C－Ⅴ区 遺構外	高杯	①22.5 ②17.0 ④14.0※	杯部は大型で、やや湾曲する底部から屈曲部外傾する口縁部をもつ。端部はやや外反し丸い。屈曲部には不明瞭な段をもつ。筒部は短く、直線的に開き、裾部で大きく広がる。端部は丸い。	外面…ナデ。 内面…杯部横方向ミガキが認められる。 風化著しい。	密（４㎜大の石英含む。）	良好	内外面とも橙色	K－４
Po5	C－Ⅴ区 遺構外	高杯	①15.5※ ②11.3△ ④ 8.8	杯部は深い椀状を呈す。端部は丸い。筒部は細く、直線的に開き、裾部で大きく広がる。端部は丸い。	外面…杯部上半ヨコナデ。 下半は縦方向ハケ目。 筒部縦方向ハケ目。裾部ヨコナデ。 内面…杯部ヨコナデ後縦方向暗文。 筒部シボリ目残る。 裾部クモの巣状ハケ目。	密	良好	内外面とも赤褐色	外面及び裾部内面赤色塗彩 K－５
Po6	C－Ⅴ区 遺構外	高杯	①15.8※ ②11.5 ④ 9.6※	杯部は深い椀状を呈し、端部は丸い。筒部はやや太く短く、「ハ」字状に開き裾部で大きく広がる。	外面…風化著しい。 杯部下半縦方向ハケ目。 内面…風化著しい。杯部ナデか。 筒部シボリ目残る。	密	やや不良	内外面とも橙色	N－289
Po7	C－Ⅴ区 遺構外	高杯	①16.1 ②11.6 ④10.4	杯部は深い椀状を呈し端部は丸い。筒部は直線的で裾部で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外面…風化のため調整不明。 杯部下半縦方向ハケ目が認められる。 内面…風化著しい。杯部ナデか。 筒部シボリ目残る。	密	良好	内外面とも橙色	O－19
Po8	C－Ⅴ区 遺構外	鼓形器台	② 4.8△ ④13.0※	小型の鼓形器台脚台部。端部は平坦面をもつ。屈曲部は鋭い。	外面…平行沈線が施される。 内面…上方向ケズリ。	やや粗	やや不良	内外面とも浅黄橙色	S－200
Po9	C－Ⅴ区 遺構外	甑	①17.5※ ②22.0	大きくラッパ状を呈す甑。上半部端部はやや外反し丸い。外面には断面扁平な角状の把手がつく。	外面…風化著しい。 縦方向ハケ目が認められる。 内面…風化著しい。 縦方向粗いハケ目が認められる。	密	やや不良	内外面とも淡黄色	S－233
Po10	C－Ⅴ区 遺構外	須恵器杯身	①12.1 ② 4.9 ⑧12.4※ ⑨ 2.3	立ち上がり部は高くやや外反しながらほぼ直立し、端部は鋭くノミ歯状を呈す。受部はほぼ水平に引き出す。底部は平ら。	外面…底体部約1/4回転ヘラケズリ。 他は回転ナデ。 内面…底部指による不整方向ナデ。 他は回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも暗灰色	O－26
Po11	C－Ⅴ区 遺構外	須恵器杯身	①11.2※ ② 3.9 ⑧12.5※ ⑨ 2.2	立ち上がり部は高くやや内傾して立ち、端部は薄い。受部はやや上方へ引き出される。体部は浅く、底部は平ら。	外面…底体部2/3回転ヘラケズリ。 他は回転ナデ。 内面…底部指によるヨコナデ。 他は回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰色	体部外面火襷有 CH－25
Po12	C－Ⅴ区 遺構外	須恵器杯身	①12.2※ ② 4.2△ ⑧13.2※ ⑨ 2.1	立ち上がり部は高く内傾し、端部は鋭くノミ歯状を呈す。受部はやや上方へ引き出される。底体部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも青灰色	CH－27
Po13	C－Ⅴ区 遺構外	須恵器杯身	② 3.0△ ⑧12.1※	立ち上がり部を欠く、上部はやや上方へ引き出す。体部はやや浅い。	外面…底体部約1/5回転ヘラケズリ。 他は回転ナデ。 内面…回転ナデ。	緻密	やや不良	内外面とも黄灰色	CH－23
Po14	C－Ⅴ区 遺構外	高杯	①17.4※ ②10.8 ④10.7※	杯部は扁平で、湾曲する底部から外反する口縁部をもつ。屈曲部には鈍く突帯が２条つく。脚部は太く短く、「ハ」字状に開き、端部は段をもつ。長台形を呈すと思われる透かしが３方につくと思われる。	外面…杯部口縁部回転ナデ。 下半波状文が施される。 脚部回転カキ目調整。 内面…回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰色	CH－24
Po15	C－Ⅴ区 遺構外	須恵器瑤	① 9.6※ ② 9.6△ ③11.0※	口縁部は短く外反し、複合口縁状を呈す。端部は引き出され、下端部も鋭く引き出される。胴部は扁球形を呈す。胴部中央に円孔を有す。	外面…口縁部～肩部回転ナデ。 肩部２条の凹線が巡り、その間に波状文が施される。 底部付近カキ目調整。 内面…回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰色	O－32
Po16	C－Ⅴ区 遺構外	須恵器瑤？	① 9.6※ ② 4.1△	口縁部は内湾気味に立ち上がり、複合口縁状を呈し端部はノミ歯状を呈す。下端は鋭い稜がつく。頸部は短い。	外面…口縁部回転ナデ。 頸部波状文が施される。 内面…回転ナデ。	密	良好	外面…青灰色 内面…黄灰色	内面自然釉かかる O－30
Po17	C－Ⅴ区 遺構外	須恵器壺	①19.7※ ② 5.3△	端部は肥厚し、頸部は短く外反気味に開く。	内外面とも回転ナデ。	密	良好	外面…青灰色 内面…黄灰色	O－27
Po18	C－Ⅴ区 遺構外	染付皿	①13.2※ ② 4.8 ④ 7.2※	伊万里焼皿。高台がつく。	外面…施釉。 内面…施釉。 体底部見込文コンニャク印判有。 底部には簡略化された「福」が押される。	緻密	良好	内外面とも乳白色	全面に釉 CH－21
Po19	C－Ⅴ区 遺構外	青磁香炉	①10.2 ② 3.7	端部は内方へ肥厚し、玉状口縁をもつ。	外面…施釉。 内面…上半施釉。 下半は施釉されない。	密	良好	内外面とも暗青緑色	CH－22
Po20	C－Ⅴ区 遺構外	土玉	径　2.8 穴径 0.6 重さ10.4ｇ 以上	いびつな球形を呈す。半損。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。風化著しい。	やや粗（砂粒を含む。）	良好	にぶい橙色	N－287
Po21	C－Ⅴ区 遺構外	土錘	長　3.6 巾　1.0 穴径 0.2 重さ 3.4ｇ	長紡錘形を呈す。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	にぶい橙色	N－286

挿表35　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (29)

南谷29号墳

遺物番号	出土地点	器種種類	法量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	西側周溝内	長頸壺	①20.0※ ②22.0△ ③28.8※	外反気味に高く「ハ」字状に開く、頸部をもつ。端部は外傾する平坦面をもつ。胴部は球形となる。	外面…頸部～肩部ヨコナデ。 肩部以下縦方向ハケ目後肩部に横方向ハケ目。 内面…頸部ヨコナデ。 肩部指押さえ後右方向ケズリ。	密	良好	外面…浅黄橙色～黒褐色 内面…浅黄橙色	胴部外面黒斑有 S－19
Po2	西側周溝内	甕	①16.2※ ②14.8△ ⑤ 2.3	口縁部は内湾気味に立ち上がる複合口縁。端部は内方へ肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は鈍く突出する。胴部はほぼ球形を呈す。	外面…口縁部～肩部ヨコナデ。 肩部以下横～斜方向ハケ目。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。 頸部以下右方向ケズリ。	密（2㎜大の石英を含む。）	不良	内外面とも浅黄橙色	胴部外面スス付着 S－20
Po3	北側周溝内	甕	①15.0※ ② 2.8△	内湾気味に「く」字状に外傾する口縁部破片。端部は内方へ肥厚する。	内外面ともヨコナデ。	密（長石・黒雲母を多量に含む。）	良好	内外面とも橙褐色	CH－1
Po4	北側周溝内	小型丸底壺	①10.8※ ② 3.4△	「く」字状に立ち上がる口縁部の破片。端部は丸い。	内外面ともヨコナデ。	密	やや不良	内外面とも橙褐色	CH－7
Po5	北側周溝内	小型器台	① 8.2 ② 8.0 ④10.2※	上台部は内湾気味に逆円錘形を呈し、端部は丸い。脚台部は高く円錘形を呈し、端部は丸い。脚台部に三方の円形透かしあり。	外面…上台部横方向ミガキ。 脚台部上半横方向ミガキ。 下半はヨコナデ。 内面…上台部横方向ミガキ。 脚台部上半シボリ後左方向ケズリ。 下半はヨコナデ。	やや粗(0.5㎜大の砂粒を多く含む。)	良好	外面…にぶい橙褐色 内面…浅黄橙色～にぶい橙褐色	CH－6
Po6	北側周溝内	土錘	最大長 3.9 最大幅1.75 穴径 0.65 重さ 9.1g	いびつな長紡錘形を呈す。断面円形。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙褐色	CH－3
Po7	北側周溝内	土錘	最大長 3.8 最大幅 1.4 穴径 0.3 重さ 7.8g	いびつな長紡錘形を呈す。断面円形。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙褐色	CH－4
Po8	西側周溝内	土錘	最大長 3.0 最大幅 1.8 穴径 0.6 重さ 6.4g	いびつな長紡錘形を呈す。断面円形。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙褐色	CH－5

南谷大山遺跡C区出土石器観察表

遺物番号	出土地点	器種種類	残存長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	石材	形態上の特徴	備考
S1	CSI01 埋土下層	砥石	6.9	6.1	3.9	265	細粒花崗岩	主な砥面は2面あり、一面はよく使用され内湾している。両端部裏面を欠く。	O－9
S2	CSI04 埋土上層	剝片	4.1	3.2	0.8	10.6	黒曜石	黒曜石剝片。	KR－9
S3	CSI04 床面	磨石	11.4	9.5	4.1	690	石英安山岩質凝灰岩	扁平で楕円形を呈す。全面を磨く。	KR－14
S4	CSI05 床面	磨石	5.7	5.2	2.0	103	石英安山岩質凝灰岩	扁平で角のとれた四角形を呈す。全体を磨く。	KR－13
S5	CSI06 埋土下層	敲石	11.0	9.3	3.6	616	石英安山岩質凝灰岩	扁平で楕円形を呈する。片面に敲打面。	KR－17
S6	CSI06 埋土下層	敲石	6.9	4.2	4.1	128	黒雲母角閃石安山岩	俵形を呈す。両端に敲打面をもつ。全体的に風化している。	KR－16
S7	CSI06 埋土下層	砥石	9.2	2.9	2.7	110	流紋岩質凝灰岩	断面いびつな方形を呈す。細長い砥石。主な砥面は3面あり、よく使い込まれ湾曲している。	KR－15
S8	CSI07	敲石	13.2	10.2	4.3	918	角閃石安山岩	扁平で不整形。敲打面を6面もつ。	KR－18
S9	CSI07	敲石	9.2	9.5	6.5	697	角閃石安山岩	楕円形を呈し、両端に敲打・擦面をもつ。	KR－12
S10	CSI11	砥石	20.2	20.5	10.8	5.95kg	細粒花崗岩	厚く、不整形を呈す。主な砥面は1面。	KR－19
S11	CSI 17-4	剝片	3.5	2.8	1.0	11.2	黒曜石	黒曜石剝片。	KR－385
S12	CSI19 床面	石皿	31.0	19.4	13.3	13.95kg	優白質花崗岩	断面方形を呈す。中央部が凹む。擦面が3面ある。	KR－384
S13	CSI20 埋土下層	敲石	11.6	5.9	4.7	406	角閃石安山岩	長楕円形を呈す。端部一方に敲打面をもつ。風化している。	KR－381
S14	CSI21	石鏃	1.85	1.2	0.3	0.5	無斑晶質安山岩	無茎石鏃、薄手。周縁に調整を施し、やや磨滅している。	KR－387
S15	CSS04	敲石	10.1	5.95	5.1	471	角閃石含有石英安山岩質凝灰岩	長楕円形を呈し両端に敲打痕がある。	石英・角閃石の大きな結晶を含む KR－11
S16	集石・ピット群	敲石	15.4	6.2	3.0以上	612	石英安山岩質凝灰岩	長楕円形を呈す、半損。一方端に敲打面をもつ。全体が磨かれる。	KR－379
S17	C－I区 遺構外	大型蛤刃石斧	11.1以上	6.2	3.25	374	閃緑岩	断面楕円形を呈すものと思われるが、片面は剝離している。基部欠損。刃部は太く、両刃。	石英が脈状に入る KR－7
S18	C－Ⅳ区 遺構外	石鏃	1.9	1.2	0.4	0.6	黒曜石	平基無茎石鏃。中央部が膨らむ。側縁部は直線的で、細かな調整が施される。	KR－7

挿表36　南谷大山遺跡出土遺物観察表　(30)

南谷大山遺跡C区出土石器観察表

S19	C－V区遺構外	石鏃	2.8	1.7	0.3	1.6	無斑晶質安山岩	凹基無茎石鏃、薄手。先端部を欠く。側縁部は直線またはやや膨らみ、調整は雑。全体的に摩滅している。	KR－21
S20	C－V区遺構外	石鏃	2.1	1.6	0.4	0.7	黒曜石	凹基無茎石鏃、やや厚手。先端部は鋭利で、断面は中心が膨らむ。側縁部はやや湾曲し、調整は細かい。	KR－20
S21	C－V区遺構外	石核	3.4	1.6	1.0	6.0	水晶	水晶石核。	KR－386
S22	C－V区遺構外	太型蛤刃石斧	9.8以上	6.4	4.4	465	閃緑岩	基部を欠く。刃部は両刃。先端部一部欠く。	有色鉱物を多く含む KR－380
S23	C－V区遺構外	磨製石斧片	6.3	5.2	－	58	砂岩	磨製石斧の一部と思われる。表面はよく磨かれている。	KR－378
S24	C－V区遺構外	砥石	18.3	4.9	4.5	612	石英安山岩質凝灰岩	断面いびつな方形を呈し、細長い砥石。主な砥面は一面。	KR－377
S25	C－V区遺構外	磨石	10.7	4.8	4.2	314	細粒角閃石安山岩	長楕円形を呈す。全体磨かれる。	斑晶が小さく多い 5mm以上の斜長石の結晶を含む KR－375
S26	C－V区遺構外	敲石	10.3	7.1	3.4	335	灰色安山岩	扁平で楕円形を呈す。両端に敲打面をもつ。一部欠損。	斑晶が小さい S－24に類似する KR－376
S27	C－V区遺構外	石皿	10.9	9.7	4.7	668	石英安山岩質凝灰岩	扁平で角のとれたいびつな三角形を呈す。敲打面は両面にある。	小さな雲母を含む KR－383
S28	C－V区遺構外	石皿	11.7	17.2	4.6	1477	安山岩	楕円形を呈すと思われる石皿、半損。敲打面は一面。端部も敲打痕有。	シソ輝石（か）角閃石を含む KR－382
S29	南谷29号墳	石核	2.5	2.0	0.9	6.9	玉髄	石核。	珪乳石の可能性有 KR－10

南谷大山遺跡C区出土鉄器観察表

遺物番号	出土地点	器種種類	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	形態上の特徴	備考
F1	CSI01床面	袋状鉄斧	6.9	2.3	1.6	42.2	刃部の幅1.9cmと狭い。柄の挿入部は両側を折り曲げる袋部をもつ。袋部端には幅1cm前後の鉄帯が巻かれていたものと思われる。	KR－3
F2	CSI01床面	不明鉄器	2.8	0.6	0.4	1.9	断面長方形を呈し、端部が折れる。先端部欠損。	KR－5
F3	CSI05埋土下層	不明鉄器	5.6	0.6	0.4	2.8	断面長方形を呈し、棒状を呈す。端部は肥厚する。	KR－2
F4	CSI11床面	鉈	10.5	1.2	0.4	16.2	刃部先端部を欠く。刃部は反りをもち、上面中央に鎬をもつ。裏面は凹み、断面逆「V」字形を呈す。身部は長方形を呈す。	KR－4
F5	CSI12床面	不明鉄器	15.8	0.8	0.7	30.4	断面方形を呈す。先端部が折れる。茎部は木製柄に挿入される。	KR－1
F6	CSI17	鋳造鉄斧	7.9	7.2	1.5	230	刃部先端部及び袋部を欠く。刃部はゆるやかに広がる。断面は台形状を呈す。	KR－388

CSI19 出土玉製品観察表

遺物番号	出土地点	器種種類	長径(cm)	短径(cm)	最大厚(cm)	穿孔幅(mm)	重さ(g)	材質	形態上の特徴	備考
J1	CSI19	有孔円盤	2.2	2.1	0.3	1.5	2.9	蛇紋岩	扁平な円形を呈す。片側穿孔による孔が2ケ所あり、ボタン状を呈す。表面・側面に擦痕有。	KR－22
J2	CSI19	有孔円盤	1.9	－	0.3	1.0	1.2	蛇紋岩	扁平な楕円形を呈す。1/3欠損。片側穿孔による孔が2ケ所あり、ボタン状を呈す。表面・側面に擦痕有。	雲母の結晶がきれいに並ぶ 結晶片岩の可能性がある KR－23

挿表37　南谷大山遺跡出土遺物観察表 (31)

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類　型	材　質
J 3	5.5	5.0	4.0	2.0	0.17	a類	蛇紋岩
J 4	4.0	3.8	3.0	1.5	0.05	a類	蛇紋岩
J 5	4.0	4.0	3.0	1.8	0.05	a類	蛇紋岩
J 6	5.7	5.5	3.5	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 7	6.0	5.5	4.0	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 8	6.0	5.5	3.5	3.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 9	5.0	5.0	3.5	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 10	5.0	4.8	3.0	1.5	0.07	b類	蛇紋岩
J 11	5.5	5.5	3.0	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 12	5.0	5.0	3.5	2.5	0.07	a類	蛇紋岩
J 13	5.0	5.0	3.0	2.8	0.08	b類	蛇紋岩
J 14	4.0	4.0	3.0	1.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 15	4.6	4.0	2.5	2.5	0.06	b類	蛇紋岩
J 16	6.0	5.8	4.0	3.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 17	5.0	5.0	2.5	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 18	3.5	3.5	1.8	1.5	0.02	b類	蛇紋岩
J 19	6.0	5.3	3.5	2.0	0.15	b類	蛇紋岩
J 20	5.5	5.5	3.5	2.5	0.11	a類	蛇紋岩
J 21	5.5	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 22	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 23	5.5	5.0	4.5	4.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 24	5.5	5.5	2.5	2.0	0.08	b類	蛇紋岩
J 25	5.5	5.5	2.5	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 26	4.5	4.5	3.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 27	5.0	4.8	4.5	3.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 28	5.6	5.4	4.5	2.0	0.17	b類	蛇紋岩
J 29	5.0	5.0	2.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 30	6.0	6.0	3.0	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 31	4.0	4.0	1.5	1.8	0.02	c類	蛇紋岩
J 32	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 33	4.5	4.3	2.5	3.0	0.04	a類	蛇紋岩
J 34	5.0	4.8	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 35	4.5	4.5	3.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 36	5.5	5.0	4.0	2.0	0.14	b類	蛇紋岩
J 37	5.0	5.0	3.0	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 38	5.0	4.5	2.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 39	6.5	5.8	4.0	2.5	0.18	a類	蛇紋岩
J 40	4.5	4.3	2.0	1.5	0.03	c類	蛇紋岩
J 41	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 42	5.0	5.0	2.5	2.5	0.08	b類	蛇紋岩
J 43	6.0	5.5	3.0	2.0	0.15	b類	蛇紋岩
J 44	5.5	5.0	4.0	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 45	5.0	4.6	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 46	4.5	4.5	1.5	2.0	0.05	c類	蛇紋岩

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類　型	材　質
J 47	6.0	5.5	4.0	2.3	0.16	a類	蛇紋岩
J 48	4.5	4.5	4.2	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 49	4.5	4.5	4.3	2.5	0.10	b類	蛇紋岩
J 50	4.8	4.5	1.8	2.0	0.04	c類	蛇紋岩
J 51	5.0	4.8	2.8	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 52	5.2	5.2	4.0	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 53	4.0	3.8	2.0	1.5	0.03	d類	蛇紋岩
J 54	5.0	5.0	4.0	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 55	5.5	5.0	4.0	2.5	0.14	a類	蛇紋岩
J 56	4.7	4.5	3.0	2.2	0.06	a類	蛇紋岩
J 57	5.5	5.0	2.8	2.3	0.09	a類	蛇紋岩
J 58	5.0	4.5	3.5	2.0	0.08	b類	蛇紋岩
J 59	5.6	5.5	3.5	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 60	5.0	5.0	2.0	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 61	4.8	4.5	2.5	2.5	0.06	b類	蛇紋岩
J 62	6.0	5.8	4.0	2.5	0.19	b類	蛇紋岩
J 63	6.0	6.0	2.5	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 64	5.0	4.8	4.5	2.8	0.12	a類	蛇紋岩
J 65	4.0	4.0	2.5	2.3	0.05	b類	蛇紋岩
J 66	5.0	5.0	3.5	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 67	5.0	5.0	3.0	2.2	0.08	a類	蛇紋岩
J 68	6.0	5.6	4.0	2.0	0.16	a類	蛇紋岩
J 69	5.5	5.5	3.1	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 70	5.0	4.8	2.0	2.0	0.07	c類	蛇紋岩
J 71	5.0	4.8	3.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 72	5.5	5.5	3.5	2.5	0.18	b類	蛇紋岩
J 73	5.8	5.4	3.0	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 74	5.0	4.8	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 75	5.5	5.4	2.8	2.0	0.11	b類	蛇紋岩
J 76	5.0	5.0	3.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 77	5.0	4.5	3.0	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 78	5.5	5.2	4.0	2.0	0.15	a類	蛇紋岩
J 79	5.8	5.5	3.2	2.0	0.14	b類	蛇紋岩
J 80	6.0	6.0	3.5	2.5	0.17	a類	蛇紋岩
J 81	6.5	6.4	4.0	2.0	0.19	b類	蛇紋岩
J 82	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 83	6.0	5.0	3.0	2.0	0.11	b類	蛇紋岩
J 84	5.0	4.8	2.5	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 85	5.0	5.0	3.1	2.8	0.09	a類	蛇紋岩
J 86	6.0	6.0	2.0	2.5	0.10	c類	蛇紋岩
J 87	5.5	5.5	3.5	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 88	5.0	5.0	4.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 89	5.0	5.0	4.0	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 90	5.0	5.0	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩

挿表38　南谷大山遺跡ＣＳＩ19出土臼玉一覧表(1)

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類　型	材　質
J 91	5.0	4.5	3.5	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 92	5.0	5.0	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 93	6.0	5.3	3.5	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 94	5.8	5.2	3.8	2.3	0.16	a類	蛇紋岩
J 95	5.0	5.0	2.5	1.5	0.07	b類	蛇紋岩
J 96	5.0	5.0	2.0	2.0	0.06	c類	蛇紋岩
J 97	5.0	5.0	3.9	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 98	5.8	5.5	4.0	1.8	0.15	b類	蛇紋岩
J 99	5.0	4.8	3.0	2.2	0.08	a類	蛇紋岩
J 100	5.2	5.0	4.0	2.4	0.15	b類	蛇紋岩
J 101	5.0	4.6	2.9	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 102	5.0	5.0	3.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 103	6.0	6.0	2.8	2.2	0.13	a類	蛇紋岩
J 104	5.0	5.0	2.2	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 105	5.0	5.0	2.8	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 106	5.8	5.5	4.0	2.0	0.20	b類	蛇紋岩
J 107	5.0	5.0	3.0	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 108	5.2	5.0	3.5	1.5	0.11	b類	蛇紋岩
J 109	5.0	4.8	3.2	2.5	0.08	a類	蛇紋岩
J 110	4.8	4.5	2.9	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 111	5.0	5.0	3.5	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 112	5.0	4.8	2.8	2.2	0.07	a類	蛇紋岩
J 113	5.0	4.8	2.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 114	5.5	5.3	2.5	2.5	0.09	b類	蛇紋岩
J 115	5.5	5.3	3.5	2.8	0.14	a類	蛇紋岩
J 116	6.0	—	3.8	2.6	—	a類	蛇紋岩
J 117	6.0	5.5	3.0	3.5	0.09	a類	蛇紋岩
J 118	5.0	4.5	2.0	2.0	0.06	c類	蛇紋岩
J 119	4.0	3.5	3.0	2.0	0.05	a類	蛇紋岩
J 120	4.8	4.5	3.0	1.5	0.10	a類	蛇紋岩
J 121	4.8	4.6	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 122	5.0	5.0	4.0	2.1	0.09	a類	蛇紋岩
J 123	5.5	5.5	3.5	2.0	0.15	b類	蛇紋岩
J 124	5.0	5.0	4.5	2.3	0.13	a類	蛇紋岩
J 125	4.5	4.0	2.0	1.8	0.05	c類	蛇紋岩
J 126	5.0	5.0	3.0	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 127	5.0	5.0	2.0	2.0	0.07	c類	蛇紋岩
J 128	6.0	6.0	3.5	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 129	—	—	—	—	—	a類	蛇紋岩
J 130	5.2	5.0	2.0	2.3	0.07	c類	蛇紋岩
J 131	—	—	—	—	—	b類	蛇紋岩
J 132	5.0	5.0	2.5	2.4	0.07	b類	蛇紋岩
J 133	4.5	4.5	3.8	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 134	5.5	5.2	2.5	2.5	0.10	a類	蛇紋岩

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類　型	材　質
J 135	5.0	5.0	2.8	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 136	5.5	5.0	3.8	2.8	0.12	a類	蛇紋岩
J 137	6.5	6.4	2.3	2.5	0.11	c類	蛇紋岩
J 138	5.2	5.0	2.0	2.4	0.07	c類	蛇紋岩
J 139	—	—	—	—	—	a類	蛇紋岩
J 140	6.5	6.2	3.0	2.6	0.16	b類	蛇紋岩
J 141	4.0	3.8	3.2	1.8	0.05	a類	蛇紋岩
J 142	5.0	4.8	2.9	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 143	5.2	5.2	2.5	2.5	0.09	a類	蛇紋岩
J 144	5.0	4.5	3.0	2.5	0.09	a類	蛇紋岩
J 145	4.6	4.6	3.4	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 146	5.8	5.8	3.0	2.0	0.14	b類	蛇紋岩
J 147	5.7	5.5	3.5	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 148	6.0	5.5	3.0	1.5	0.15	d類	蛇紋岩
J 149	5.0	5.0	3.5	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 150	4.8	4.2	2.4	2.0	0.05	d類	蛇紋岩
J 151	—	—	—	—	—	a類	蛇紋岩
J 152	4.5	4.3	4.0	2.5	0.10	a類	蛇紋岩
J 153	5.6	5.6	3.8	2.0	0.16	a類	蛇紋岩
J 154	5.5	5.0	4.0	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 155	4.3	4.0	2.4	1.5	0.05	b類	蛇紋岩
J 156	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 157	5.8	5.8	2.4	2.0	0.10	c類	蛇紋岩
J 158	5.0	5.0	2.0	2.0	0.06	c類	蛇紋岩
J 159	5.0	4.5	2.8	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 160	6.0	5.8	3.9	2.8	0.16	a類	蛇紋岩
J 161	5.3	5.2	3.6	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 162	5.0	5.0	3.6	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 163	5.5	5.3	3.8	2.5	0.11	b類	蛇紋岩
J 164	4.0	4.0	3.0	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 165	—	—	3.0	—	—	b類	蛇紋岩
J 166	4.6	4.5	2.8	1.8	0.07	a類	蛇紋岩
J 167	4.4	4.2	2.2	1.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 168	5.8	5.8	4.8	2.4	0.14	a類	蛇紋岩
J 169	5.0	4.9	3.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 170	5.0	5.0	2.8	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 171	5.5	5.4	4.0	2.5	0.12	a類	蛇紋岩
J 172	4.8	4.8	4.2	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 173	6.0	6.0	3.0	2.0	0.15	a類	蛇紋岩
J 174	4.3	4.2	3.4	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 175	4.8	4.8	2.5	2.0	0.06	d類	蛇紋岩
J 176	5.5	5.3	3.0	2.4	0.10	a類	蛇紋岩
J 177	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 178	5.5	5.4	2.8	2.5	0.10	d類	蛇紋岩

挿表39　南谷大山遺跡ＣＳＩ19出土臼玉一覧表(2)

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類　型	材　質
J 179	5.0	5.0	2.9	2.7	0.05	c類	蛇紋岩
J 180	5.0	4.8	2.9	2.8	0.08	b類	蛇紋岩
J 181	4.8	4.6	3.4	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 182	5.0	5.0	2.0	2.5	0.05	c類	蛇紋岩
J 183	5.8	5.5	3.5	2.1	0.16	b類	蛇紋岩
J 184	5.0	4.5	2.5	1.8	0.05	a類	蛇紋岩
J 185	5.0	5.0	2.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 186	5.2	5.1	3.5	1.7	0.12	b類	蛇紋岩
J 187	5.0	5.0	3.0	2.5	0.09	a類	蛇紋岩
J 188	4.3	4.2	3.8	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 189	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 190	5.0	5.0	3.4	2.2	0.07	a類	蛇紋岩
J 191	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 192	5.0	4.5	3.0	2.2	0.08	a類	蛇紋岩
J 193	4.9	4.8	3.2	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 194	5.0	5.0	3.6	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 195	6.8	6.0	3.0	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 196	5.5	5.3	3.5	2.5	0.12	a類	蛇紋岩
J 197	5.5	5.5	4.0	2.5	0.16	b類	蛇紋岩
J 198	5.0	5.0	3.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 199	4.8	4.6	3.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 200	5.5	5.3	3.4	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 201	5.0	5.0	2.9	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 202	5.7	5.2	3.8	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 203	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 204	5.8	5.5	3.8	2.2	0.10	a類	蛇紋岩
J 205	4.7	4.5	2.0	2.0	0.05	d類	蛇紋岩
J 206	5.0	4.8	2.5	2.0	0.06	b類	蛇紋岩
J 207	4.7	4.6	4.0	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 208	4.0	3.9	3.5	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 209	5.0	4.5	3.0	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 210	5.5	5.3	4.0	2.5	0.11	a類	蛇紋岩
J 211	5.0	5.0	3.3	1.6	0.11	a類	蛇紋岩
J 212	5.0	4.8	3.5	2.0	0.09	b類	蛇紋岩
J 213	4.7	4.6	3.5	2.2	0.09	a類	蛇紋岩
J 214	4.0	4.0	4.5	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 215	4.3	4.2	2.5	2.0	0.05	a類	蛇紋岩
J 216	5.0	4.8	2.5	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 217	5.5	5.1	3.2	2.2	0.11	b類	蛇紋岩
J 218	4.7	4.5	4.3	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 219	5.2	5.0	2.2	2.2	0.08	b類	蛇紋岩
J 220	5.3	5.0	3.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 221	4.7	4.6	3.3	2.0	0.08	b類	蛇紋岩
J 222	5.8	5.7	3.0	2.0	0.13	b類	蛇紋岩

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類　型	材　質
J 223	6.0	5.6	4.0	2.0	0.19	b類	蛇紋岩
J 224	4.9	4.7	2.0	2.0	0.06	c類	蛇紋岩
J 225	5.0	4.8	2.2	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 226	4.8	4.8	2.0	2.0	0.05	a類	蛇紋岩
J 227	4.0	3.9	3.0	1.8	0.06	a類	蛇紋岩
J 228	6.0	5.8	4.2	2.0	0.19	a類	蛇紋岩
J 229	5.8	5.6	2.2	2.0	0.08	c類	蛇紋岩
J 230	5.0	5.0	3.0	2.5	0.10	b類	蛇紋岩
J 231	5.7	5.5	3.7	2.2	0.15	a類	蛇紋岩
J 232	4.8	4.6	4.2	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 233	5.0	4.8	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 234	5.0	5.0	4.0	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 235	5.2	5.0	3.0	1.5	0.11	b類	蛇紋岩
J 236	5.0	4.8	3.2	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 237	5.0	4.5	2.0	1.8	0.07	c類	蛇紋岩
J 238	5.2	5.0	3.3	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 239	5.5	5.4	4.0	3.0	0.17	a類	蛇紋岩
J 240	4.9	4.8	3.0	2.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 241	5.0	4.7	2.0	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 242	5.3	5.2	3.0	2.3	0.09	a類	蛇紋岩
J 243	5.2	5.0	2.3	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 244	5.5	5.0	3.6	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 245	5.8	5.6	3.0	2.2	0.11	a類	蛇紋岩
J 246	4.8	4.5	3.2	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 247	4.8	4.5	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 248	—	—	—	—	—	a類	蛇紋岩
J 249	4.8	4.6	3.7	2.0	0.11	b類	蛇紋岩
J 250	5.0	5.0	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 251	5.0	5.0	1.8	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 252	5.6	5.4	3.3	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 253	4.0	3.9	2.5	1.8	0.04	b類	蛇紋岩
J 254	5.7	5.3	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 255	5.0	4.5	2.3	1.8	0.08	a類	蛇紋岩
J 256	5.0	4.8	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 257	6.0	5.6	1.5	2.0	0.08	c類	蛇紋岩
J 258	5.2	5.0	4.0	2.5	0.14	a類	蛇紋岩
J 259	5.0	5.0	2.9	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 260	4.9	4.8	2.5	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 261	5.0	4.8	3.2	2.0	0.08	b類	蛇紋岩
J 262	4.9	4.8	2.9	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 263	5.8	5.5	3.6	2.4	0.16	b類	蛇紋岩
J 264	5.0	5.0	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 265	4.8	4.6	3.0	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 266	5.5	5.3	3.2	2.6	0.09	a類	蛇紋岩

挿表40　南谷大山遺跡ＣＳＩ19出土臼玉一覧表(3)

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類　型	材　質
J 267	4.9	4.8	2.8	2.2	0.08	a類	蛇紋岩
J 268	5.0	4.9	4.0	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 269	5.2	5.0	3.3	2.5	0.11	b類	蛇紋岩
J 270	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 271	5.3	5.1	4.0	2.5	0.12	a類	蛇紋岩
J 272	5.0	5.0	3.0	2.0	0.09	d類	蛇紋岩
J 273	5.0	4.5	3.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 274	5.0	5.0	2.8	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 275	4.5	4.2	4.2	1.4	0.12	a類	蛇紋岩
J 276	4.8	4.7	3.0	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 277	4.0	4.0	2.8	2.0	0.05	a類	蛇紋岩
J 278	5.0	5.0	2.5	2.8	0.06	a類	蛇紋岩
J 279	5.0	5.0	1.5	2.0	0.04	d類	蛇紋岩
J 280	5.0	5.0	3.2	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 281	5.2	5.1	3.2	2.8	0.10	a類	蛇紋岩
J 282	5.0	5.0	2.6	1.8	0.09	a類	蛇紋岩
J 283	5.3	5.2	4.0	2.0	0.15	a類	蛇紋岩
J 284	5.0	5.0	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 285	—	—	3.5	—	—	b類	蛇紋岩
J 286	5.0	5.0	1.3	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 287	4.5	4.3	3.4	1.3	0.09	a類	蛇紋岩
J 288	5.0	5.0	2.0	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 289	4.0	3.8	3.5	2.0	0.04	b類	蛇紋岩
J 290	5.8	5.7	4.0	2.6	0.19	b類	蛇紋岩
J 291	6.0	6.0	3.2	2.1	0.16	a類	蛇紋岩
J 292	5.0	4.9	3.5	2.0	0.11	d類	蛇紋岩
J 293	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 294	5.9	5.4	3.0	1.9	0.10	d類	蛇紋岩
J 295	5.7	5.5	4.0	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 296	6.0	6.0	4.4	2.5	0.21	a類	蛇紋岩
J 297	5.0	4.9	3.7	2.1	0.09	a類	蛇紋岩
J 298	4.8	4.6	2.5	2.0	0.06	b類	蛇紋岩
J 299	6.5	6.4	3.0	2.4	0.17	b類	蛇紋岩
J 300	4.5	4.4	3.0	1.8	0.08	a類	蛇紋岩
J 301	5.5	5.4	3.0	2.8	0.10	a類	蛇紋岩
J 302	4.8	4.6	2.8	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 303	5.5	5.4	3.4	3.4	0.12	a類	蛇紋岩
J 304	5.5	5.4	2.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 305	5.0	5.0	4.0	2.8	0.13	a類	蛇紋岩
J 306	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 307	5.2	5.1	3.7	2.8	0.10	a類	蛇紋岩
J 308	4.2	4.1	3.9	2.2	0.06	a類	蛇紋岩
J 309	5.0	4.8	2.2	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 310	5.5	5.0	3.2	2.0	0.10	a類	蛇紋岩

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類　型	材　質
J 311	5.5	5.0	2.8	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 312	5.5	5.2	3.8	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 313	5.5	5.4	4.0	3.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 314	4.5	4.3	2.0	1.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 315	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 316	5.0	5.0	3.4	2.2	0.11	b類	蛇紋岩
J 317	5.0	5.0	3.6	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 318	4.8	4.8	3.0	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 319	5.8	5.5	3.1	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 320	4.9	4.8	3.9	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 321	4.9	4.8	3.0	1.9	0.10	a類	蛇紋岩
J 322	5.0	5.0	1.8	1.3	0.05	c類	蛇紋岩
J 323	5.0	5.0	2.2	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 324	5.9	5.6	3.1	1.8	0.11	b類	蛇紋岩
J 325	5.0	4.8	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 326	5.3	5.0	2.3	2.0	0.08	b類	蛇紋岩
J 327	5.0	4.8	2.4	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 328	6.0	6.0	3.0	2.8	0.13	b類	蛇紋岩
J 329	5.0	5.0	2.0	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 330	4.0	4.0	2.0	1.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 331	5.5	5.4	3.0	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 332	4.9	4.8	2.5	1.5	0.08	a類	蛇紋岩
J 333	5.0	4.8	2.0	2.5	0.06	c類	蛇紋岩
J 334	4.9	4.8	3.7	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 335	4.8	4.6	3.3	2.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 336	4.3	4.0	1.5	1.5	0.02	c類	蛇紋岩
J 337	5.0	5.0	3.2	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 338	5.8	5.5	4.0	2.2	0.17	b類	蛇紋岩
J 339	6.0	5.5	3.5	3.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 340	4.5	4.4	3.0	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 341	—	—	—	—	—	b類？	蛇紋岩
J 342	5.5	5.0	3.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 343	5.0	5.0	3.0	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 344	5.0	5.0	1.5	2.0	0.04	c類	蛇紋岩
J 345	5.0	4.9	3.5	2.4	0.11	b類	蛇紋岩
J 346	5.5	5.0	3.5	2.5	0.13	b類	蛇紋岩
J 347	5.0	5.0	4.2	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 348	5.0	5.0	4.5	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 349	5.5	5.0	4.0	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 350	5.5	5.0	4.0	2.0	0.11	b類	蛇紋岩
J 351	5.0	4.5	2.0	2.2	0.06	c類	蛇紋岩
J 352	5.0	5.0	2.5	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 353	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩

挿表41　南谷大山遺跡ＣＳＩ19出土臼玉一覧表(4)